

ファイアーエムブレム 紺碧のコントレイルⅢ

右利きのサウスポー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天馬騎士2年目のシャニーが、赴任先のリキアで帰任目指して奮闘するお話

お金がない！ 仕事が無い！ 帰る場所もないとかどうなってるの?! っってなところから始まるサクセスストーリーです。

◆◆◆ オリジナル色が強いですが、興味を持ってもらえたら嬉しいです。

◆◆◆ 『妖精』——風を纏い、きずなを繋ぐ者

これは、未知の地で新たなきずなを結び、未来を切り拓く、青き軌跡の物語。

エレブ新暦1001年 4月

イリア天馬騎士団 第十八部隊を率いて二年目の『妖精』ことシャニーは、新时期突入と共にある辞令を受ける。

『本日付でリキア連絡所所属を命ずる』——渡された、左遷先への片道切符。

失意のリキアで、シャニーは様々な出会や再会、そして戦いの中できずなを繋ぎ、希望を生み出していく。

イリアに春を……その誓いを胸に、遙か南方リキアでの奮闘に大逆転はあるか。

◆◆◆ 念のため……

・原作は『ファイアーエムブレム 封印の剣』です。

・このゲームに登場する見習い天馬騎士シヤニーを主人公にしています。

- ・原作エンディングから2年後の設定となっています。
- ・カップリングはロイシヤニとクレテイト前提。
- ・作者は『聖魔の光石』以降未プレイです
- ・オリキャラが複数います。
- ・原作に無い設定があります

人物相関図(Ⅲスタート時点)

目次

あの青空の向こうに〜旅立ち〜

なんで あたしたちが?!

信じてる 信じられてる

果たすべき役割

ひとりじゃない

もう、届かない

どこにいたって

ありがとう お姉ちゃん

イリアを頼むよ

はやく行こう! リキアへ!

風薫る妖精嵐舞

なんとかなるつしよ!

連絡所と書いて、おばけ屋敷と読む?!

仕事がない! お金もない!

りゅーせんいつとーりゅー?

いきなりラスボスとかツイてないよお!

あたし、ロイ様に仕えます!

なんだか、夢みたい(1)

なんだか、夢みたい(2)

初日から半殺し?!

価値の高い商品

ここに居ていいんだ!

許すまじ、しゃべる石ころ!!

ブリッツクリーク(1)

204 190 186 182 177 168 162 152 146 134 122 110 99 89 78 66 55 46 35 27 17 1

ブリツツクリーク(2)

210

カクテルを傾けて

218

朝活でヒミツ特訓!

234

燦然のコロージョン

241

極夜のミンネリート

一番大事な仕事?

246

これこそ、あたしたちの仕事!

258

サプライズならケーキにして!

270

想いは、きっと伝わる

282

もうダメだあ、おしまいだあ!!

294

いちばん大事

307

悪夢を突き破ったのは

319

食べなきゃしょーがないよね!

330

うちのセチがたいへん失礼しました?!

342

闇に溶ける光

354

敵は身内にあり?!

361

ただ…:噛みしめる夜

366

夢の向こう側

374

蒼と碧の流儀

去りゆく背中

384

最悪の再会

393

霞む背中

404

貫いた流儀

413

譲れない一線

422

憧れの背中

434

最高の再会

448

不器用なジユビレ

459

伝えたい祈り

476

雷轟のメガロマニア

英雄の帰還

491

特命捜査

503

楽園と影

515

白と黒の刺客

528

相棒はサイコキラー？

541

地獄の真夏特訓

555

宣戦布告

565

第二の精霊

576

逆鱗のサンダーブレード

589

メガロマニアI

599

メガロマニアII

605

白夜千年を越え〜Buster the Ghost of Dr

agon〜

リスタート

616

どーしてこうなるのお?!

632

一番が、二つあったら？

638

狂気のバプテスマ

649

新たな挑戦状

660

甘い香りの暗殺者I

675

甘い香りの暗殺者II

684

閃電 再び

693

光芒のアステリア
安らかなる夜明け

720 708

あの青空の向こうにく旅立ちく
なんで あたしたちが?!

——エレブ新暦1001年 4月

今日から新年度! と、気合を入れていられたのは、早朝わずか数十分だった。

仲間と朝食から戻ってきたシャニーは、詰所の窓辺で伸びをしながら弓のように体をそらす。お腹いっぱいを包むこのポカポカは、激務のなかにある癒し。そのまま寝転がりたいたい。

「うふふ、ついに四月になったんだね!」

壁にかけてあるカレンダーをびりつと破いて4月を迎え入れた。カレンダーに見える4の文字に、ニコニコがあふれて止まらない。

「早いもんツスね。もう一年経つんスね」

ミリアが感慨深そうに返してきた。跳ねた若草色の髪をヘアバンドで整える彼女は、バラしたクロスボウを手際よく組みなおしている。パチンとよい音を立てて組みあがった具合を確かめる姿は、すっかり一人前の狙撃手だ。入団したときの、槍に振りまわされてあたふたしていた姿がウソみたい。

「ん、いろいろあったね」

いつも通りの小さなあいつちが聞こえてくる。この声はレンだ。銀髪に隠れて目元は見えないが、航路計算に机を見つめる横顔は優しい。

みんな嬉しそう。いろいろ……その言葉で片付けるには、あまりにもたくさんのが起きた一年を越えて迎えた春。夢をつなぐ道を掴んだよろこびは、十八部隊のメンバーならきつと誰もが同じに違いない。

「暖かいなあ。うくん」

もう一度窓辺に移って空を見上げる。今年はどんな一年にしてい

こうか……部隊長っぽいことを考えるには、ポカポカの陽気は気持ち良すぎる。あくびしていたら後ろから誰かに突っつかれた。

「ほらほら、リーダー。シャツとしなよ、シャツと」

これはマズい流れ。朝からルシヤナに目をつけられた。

「えー？ あたし、しやきつとしてるよ。ほらっ」

振り向いたら勝手に口が弁解をはじめた。肩を張ったり、笑ってみせたりしても、ルシヤナの三角の目は変わらない。どうにも昔から幼馴染には勝てない。紫の髪はパーマがかかっていて、まるで角が生えたように盛りあがって見えるからなおさらだ。

「——分かった？」

「はあい。気を付けま〜す」

ようやくルシヤナの目元が緩んでほっとした。しばらくは、おとなしくしておいた方がよさそう。

シャニーがそうしていたのはわずかな時間だった。春の陽気に、またクリっとした目が嬉しそうにゆるむ。出撃の準備をしながら、そのうち鼻歌をうたいだした。

「まったく、あんたはスイッチのオンオフが激しすぎるよ」

「だってさー、いっつも気を張ってたら疲れちゃうじゃーん」

背後から聞こえてくるルシヤナの呆れ声に、鼻歌まじりに答える。

やる時はやるからそれでいいと思うのに、まわりは違うらしい。いっつもスイッチオンでいられるなんてスゴイと思っていたら、後ろからまたベルトを引っ張られた。

「シャツとしてないと、新人にナメられるよ」

全くだ——ルシヤナだけでなく、航路図から顔をあげたレンの突くような視線もそう言っている。スキップするような足どりで身支度していたシャニーも、二人がかりの説教には足が止まった。

「アルマみたいな子、いるかもしれない」

「へーき、へーき！ この『妖精』シャニーの貫禄さえあればさ、イチコロだってー！」

レンの心配に軽く返し、机の角に手をかけて身をひるがえすと、その勢いで窓辺まで歩いていく。

そろそろ入団式を終えた新入団者たちが中庭を通るころ。どんな子がいるのかワクワクしかかない。

「シャニー……申し訳ないツスけど、それ、無理だと思っス」
「ん。私たち、最初おなじ年だと思っただ」

ミリアとレンは、見習い免除の特例を受けて入団しているから、シャニーからすれば一個下になる。でも、今でも年下なんて思っただとはないし、ミリア達もまるでそんな気はなさそうだ。そのくせ、ことある毎にオゴれと、都合のいいときだけ後輩になったりする。

「じよ、冗談だよ、じよーだん。やだなあ、もう。あはは」

一気に集まる視線が、何だか槍で突き刺してくるようで笑いながら取り繕う。彼らに背をむけて窓の外へもう一度視線を移しても、絶対ホンキだっただろとでも言いたげな視線が、背中のいたるところに突っ込んでくる。

(今年も同期に思われるかもってコト……?? ムウ……)

危機感を覚えて鏡の前へ小走りし、目じりを釣りあげて顔をいじってみた。

苦笑いをはじめるミリアやレンは優しかった。ツカツカやって来る、角の生えたルシャナが鏡に映りこんで戦慄が走る。

「だいたい、昨日だって見まわりの後、部隊を放りだしてどこ行っただのよ?」

両手を前に出して防御態勢を取っていたら、指さしながら三角の目でギロリとされた。

「あれはね、お姉ちゃんと一緒にいたの。右腕らしく、最後はしっかりと送り出してあげたかったんだ」

昨日は姉テイトの退団の日で、感謝を込めて一緒にイリア各地をまわった。姉の幸せそうな顔を思いだし、ニコニコしていたらルシャナの吊った眉がふいに下がった。たいてい、お説教はこうしてよく分からないまま終わる。

「あー、ズルイツス! なんで言ってくれなかったんスか!」

「それじゃあサプライズにならないじゃん。へへっ、お姉ちゃん、喜んでくれたよ」

手を突きあげてぶーぶー言うミアアに、小さくウインクして見せる。

きつとみんなも、姉の言葉を聞けば喜ぶはず。やりとりを教えてあげようとしたら、食い気味にルシヤナから冷や水を浴びせられた。

「それはよかったね。じゃあ、今日はあんた、私たちに夕飯おごつてね」

「へっ?! えー!… なんて??」

オゴリ…: 悪魔のコトバ。慌ててルシヤナから逃げようとしたが、後ろの鏡に頭をぶつけて追いつめられてしまった。

なんでいきなり…: そんな顔をしたのが間違いだっただのか、ルシヤナに生える角が増えた。ミアアたちにも副将のスイツチが入ったのが分かったらしく、そつと席を移動していく。彼女らに助けを求めようとしたら、目の前から声が飛んできて処刑台へ引き戻された。

「昨日、なんの締め切りだったか、言っでごらんよ??」

そんなことを言われても、なんのことだか分からない。天井を見上げたり、アゴに手を添えたり、いろいろ試したけれどサツパリ。首を傾げたら、ルシヤナは何かの資料をずいっと突き出してきた。

それをのぞき込んだ途端、目が飛び出しそうになって体中をビリビリと後悔が走る。

「あ…:… あー!!」

予算書を指さし、思わず叫んでしまった。嫌いな仕事をすっぽかしたというより、後からやろうと思っっているうちに記憶の彼方へ埋もれていた。

「ぐぬぬ…:… お姉ちゃんの大事な日に締め切りを合わせてくるなんて、事務の人もアクマなもんだ!」

「いや、あんた、締め切りは末日って決まってるでしょ」

ルシヤナの呆れ顔が逃げ場なく突き刺してくる。とにかく謝らないといけない。どうやって言ったら許してくれるだろう…:… やっぱり名案なんて浮かんでこない。となれば、これしかない。

「あ、あのね、ルシヤナ、ごめんね。逃げたんじゃないよ! 忘れてただけ!」

手をあわせて謝り、すがりつく。

大失敗だ。ルシヤナの顔に、ますます物言いたげな眼差しが乗っている。よく見ればミリア達まで同じような視線を向けてくるものだから、小さくなるしかない。

「まったく。私たちがやっておいたから。というわけで、今日はあるたのおゴリ」

「トホホ……………」

しつかりしると、パシッとお尻を叩かれた。まるでどちらが部隊長か分からなくなってくる。

ミリアたちは夕飯をなににしようかと早くも騒いで、まあなんと楽しそうなことか。こんなの、死刑宣告だ。彼らにおごったら、絶対に財布が死んでしまう。

(今週はスイーツ半分で乗り切らないと……)

次の給金まで、まだそれなりある。せつかく春が来たのに、財布に猛吹雪の警報が早くも出ていてぽつきり首を折った。

「まったく。そう言えば、うちの部隊には新人の配属はないの？」

コテンパンにされ、うな垂れていてもルシヤナの声が容赦なく引つ張った。彼女は窓の外を見ていて、一緒に視線を移すと新人たちが見えた。

今年は去年のような新人教育部隊は設置されず、すぐ各部隊へ配属される。配属者がいれば部隊長が迎えに行くことになっていた。

「ううん、あたしたちのどこなんか、増員希望すら聞いてもらえてないよ」

不思議に思っただけの部隊長たちに話を聞いてみたら、皆希望を聞かれたらしい。おかしいとは思いつつも、団長は傭兵契約で今も出国中。なにも確認できないまま今を迎えてしまった。

「あたし達もまだまだ半年の部隊だし、がんばろーよ！ やれることいっぱい増えるんだし」

新人が入って来なくてもやることは同じ。

雪が無くなる春からは、やれることが一気に増える。これからが十八部隊にとって本領発揮のシーズンと言える。

さっそく行こうと、軽い足どりで新しいシーズンをスタートさせようとしたのに、羽織ったマントを後ろから引っ張られて目が飛びだしかけた。

「んじゃ、一年の始まりに何かスローガンみたいなの、無いの？」

慌てて振りむくと、ルシヤナからいきなり振られて首を傾げた。たしかに、なにかカッコいいのがあればヤル気ももっと湧くかもしれない。……さっそくイイモノを思いついた。

「シャニー、よく食べて、よく寝て、よく笑うはやめてね」

あつと声をあげ、ポンと手を打ったシャニーの口に栓をするようにレンが先手をとった。

「えー？ ダメなの？」

「ヤダ。シャニーの食欲についていける自信、ない」

なんで分かったのだろうか。せつかくいいネタだったのに、レンは本気で拒否しているらしく目が強い。彼女に賛成なのか、ルシヤナの呆れた視線も痛い。

（レンってエスパーなのかな。うーん、じゃあどうしよう）

そんな視線を向けられて、仕方なく頭をひねってみる。なにも浮かんでこない……。新しい一年といっても、今まで通りがんばるだけ。そう考えてみたら、おどろくほど簡単にひらめいた。

「よしっ、じゃあせつかく春が来たんだし、笑って、前向いて、未来を切り拓こう！」 これはどう？ 完璧じゃん!」

はいつと手をあげて口にしたスローガンを自画自賛しながら、まわり視線を送って反応を確かめる。誉めて欲しいと目で訴えた効果か、ルシヤナも今回は満足げにうなずいている。

「うん、イイ感じじゃない。それで行こうよ」

（ルシヤナの許可がでた！ よかった）

とにかく一発でスローガンが決まってほっとした。承認がおりた嬉しさに任せてルシヤナの手をとる。

「てつきりあんたなら、『春だしロイ様を射止めたくい』とか言うと思っただけど」

またルシヤナが意地悪く言いだし、胸元を突っついてくる。最近、

ことある毎にこうして試すように言ってくるから焦ってしまおう。

ロイとは去年十二月に会って以来、また手紙でのやり取りが続いている。

会えるなら、いつだって会いにいきたいに決まっている。けれど、やっぱり仕事が忙しくてなかなかリキアは遠い。天馬でさえ、丸一日飛ばさないと行けない場所。一週間くらいは欲しい。

「やめてよく。ロイ様にはさ、志を果たしたらちゃんと言をするつもりなんだ」

冷静を装ったつもりだったが、ルシヤナたちの顔に浮かぶものからするに、どうやら隠せていないらしい。

「デレデレにトロけちゃってさあ」

「えへへ……。だって、ロイ様は優しいし、カッコいいもん」

「んじゃ、あんたの恋と、今晚のオゴリのために今日も頑張るかね！」

「オゴリはカンベンしてえ!!」

「却下！」

ルシヤナはそう掛け声をあげると、ミリアたちをつれて部屋を出ていった。

財布の吹雪を思い出して一度はシャニーも顔が歪んだが、外の日差しを見つければ、窓辺に肘をそえて南の空を見上げる。

心がじんわりと包まれて温まってくるのは日差しのおかげか、凛々しいあの人を思い浮かべたからかもしれない。

「ロイ様……春が来たね。あたしもがんばるよ。ロイ様も元気になっていてね」

リキアの春はどんな感じなのだろう。未知の春を、大好きな人と一緒に歩いてみたい。そんな気持ちを言葉に託して心にそっとしまおうと、彼女は仲間を追って窓辺から身を離れた。



——二週間後

日が昇る時間が最近はずいぶん早くなってきた。今までならまだ真っ暗な時間だが、黎明の空がぼんやり明るい。登城したら、なにを

しょうか。

「なくんて考えてるうちに、着いちゃうんだよね」

実家はカルラエ城から徒歩でも通えるくらいの距離。

室内稽古場に今日も一番に入ってきたシャニーは、薄明りを頼りにランプに灯を入れると、大きく伸びをしながらゆつくりと部屋の真ん中へ剣を持って歩いていく。

最初は静かにストレッチから入って軽い型の確認だったが、すぐに彼女はスイツチを入れてごうつと青焰に身を包む。

「二の颯！ 万華の流星!!」

風に乗って飛び出した彼女は地面を滑るように駆け抜け、ショートレイヤーを激しく揺らしながら案山子へ旋風のごとき剣技を浴びせる。

一撃与えて、また風の中に消えるその動きは、瞬きしてしまえばもう姿を追えないくらいにキレイ。元からの身体能力の高さにセチの力を合わせた剣は、まさに疾風迅雷で相手に攻撃する暇を与えない。

しばらく地面を蹴る音と剣が空を裂き案山子を打つ音が繰り返され、薄暗い稽古場の中に青焰の軌跡だけが光芒のように走っていた。

「ふうっ、今日もバッチリ！」

体のキレは今日も最高。今ならどんな相手でも勝てる気がする。

(セチの力もまますます扱えるようになってきたし、イイ感じ！)

つい最近まで、まるで扱えずに飲み込まれそうになっていた精霊セチの力も、この頃はこうして稽古の中でも取り入れて動けるようになってきた。

まるで自分の体が風みたいに空を滑空できるこの力は、天馬になったかのように気持ちがいい。

「その程度で使いこなせていると思われるなんて、ちよつと心外かな」遊んでいると思われたのか、ふいに頭の中に声が響く。せつかく心地よい風を浴びて朝陽を見つめていたのに。こうやっていきなり話しかけてくるから、いつもセチには驚かされる。

「び、びっくりしたあ。脅かさないですよ」

毎回ドツキりを仕掛けられているようで本当に心臓が悪い。こう

した平時ならいいが、天馬に乗っているときにこれをされると本気で焦る。

だが、当の本人からは詫びどころか呆れ声が返ってきた。

「いい加減慣れて欲しいかな。相棒なんだし？」

そんなことを言われたって、びっくりはびっくりだ。

幼い頃に彼女と無意識のうちに契約したみたいだが、その存在に気づいたのはまだ数か月前の話。最初は知らない声が頭の中からして恐怖したもの。大変だったが、今ではこうして相棒と言って力を貸してくれる頼もしい精霊だ。

彼女の言う通りもつと使いこなせるようになってとうとうと、セチと剣の稽古を続けようとしたときだ。稽古場の扉が開く音がした。

「お、今日も早いね。おはよう」

「おーす！ おはよう、ルシヤナ！」

今日も二番でルシヤナが入ってきた。やっぱり稽古は二人以上でするに限る。すぐに剣を掲げて呼び、待ちきれず飛んだり跳ねたりしてルシヤナを待つ。

「早く稽古しようよ！ 今日のあたしは一味違うよー！」

「よし来た。じゃあ『妖精』の剣を拝見しようかな」

槍を手に取り歩いてくるルシヤナを目で急かす。

今日はセチの機嫌もいいし、ルシヤナならきつと大丈夫。セチの力を借り、再び剣へ青焰を滾らせてルシヤナの槍へと突っ込む。

「そっういやさ、今年、職制表の発表遅くない？」

剣と槍を激しく打ち合いながらも、二人は慣れた感じでお喋りを始める。

ルシヤナはまるで武器同士で会話しているかのように、シャニーの剣を受けて繰り出す反撃と共に疑問を投げた。話題は新年度の始まる四月らしく、新職制の話だ。

「あたしも不思議でさ。イドウヴアさんがずっと外に出てるからかな？」

ルシヤナに問われても、シャニーも一緒に困った顔を浮かべるしかできなかった。

部隊長だから真っ先に話が来るはずなのに、未だウンともスンともない。

外征至上主義の団長イドウヴァは、職制も展開せずに今日も外国へ傭兵に出ている。せっかく村々から情報を集めても、企画を上げられなくてヤキモキするばかり。

不思議だと零しながら、風となつて脇からの一閃をルシヤナへ浴びせようと踏み込んだときだった。

「シャニーさん、おはようございます」

「え?! あっ! わわわわっ」

いきなり名前を呼ぶ声が出て、思わず急ブレーキをかけたら体が宙を滑って尻もちをつく。お尻をさすりながらルシヤナの嘲り笑いに頬を膨らせていると、誰かが近づいてきた。

総務部長のエニスだった。立ち上がってお尻に着いた土を払うと、いつもどおりに挨拶してみる。

「あ、おはようございます! どうしたんですか?」

頭を下げた視界の端に、ルシヤナが顔にわつと不安を広げているのが見えた。それ以上に、エニスがなにを持ってきたのが勝つて興味に目を向ける。

(どーしたんだろ。新人の配属希望を聞きに来たのかな)

十八部隊だけ配属希望を聞かれていなかったから、その話をしに来たのかもしれない。それなら嬉しい。新人にどうやって部隊に溶け込んでもらおうか。

でも、なんだかヘンだ。そうだ、もう配属式はとつくに終わっている。じゃあなんだろう……そう考えているとエニスは稽古場の出口へ手を向けた。

「ええ。ちよつと、団長室まで来ていただけませんか?」

「え、は、はい。分かりました」

急な呼び出しで、剣を収めると言われるままにエニスの後ろについて部屋を出る。

すれ違いざま、何だろうと目でルシヤナに聞いてみたが、首を傾げるルシヤナの顔は引きつっていた。彼女も嫌な予感がするのかもしれない。

れない。

同じ不安に違いない。ほんの一瞬、エニスが凄く怖い顔をしていたような気がしたからだ。何事もないことを祈り、黙って後をついていく。

(団長室?) 今、イドウヴァさんっていないんじゃないじゃ)

落ち着かない青い瞳が不安げに左右する。

エニスについていく道中、膨れ上がる胸のざわつきと、腹の中にくるぐる重いものが湧き上がってきてどうにも気持ち悪い。

イドウヴァは備兵に出ているから、団長室に行っただって誰もいないはずだ。どうしてわざわざそんな場所に連れて行かれるのかサツパリで、顔の筋肉が凍ったように固まって嫌な気分。

◆◆

団長室はやはり誰もいないからか、ノックもなしにエニスはドアを開けて中へと案内した。

「シャニーさん、団長から辞令を渡すように言われています」

静かで薄暗い部屋。姉が団長だったときとはまるで雰囲気の違いの中で心細くしていると、静寂を破るようにエニスが一枚の紙を持って近づいてきた。

こんな辞令の受け方は初めてだ。団長が変わると、こうもやり方が変わるのだろうか。

(なんだろう、こんなところにわざわざ呼び出して……)

いくらポジティブに考えようとしても、不安ばかりが浮かんできた。エニスが手にしている辞令へ自然に目が釘付けになる。

エニスは確かめるように紙面を見つめ、大きく息を吸うと一気に読み上げた。

——辞令、第十八部隊 本日付でリキア連絡所所属を命ずる

頭がぐわんぐわんとする。

なにか、目に見えない力に髪を後ろから引っ張られているかのよう
に重心が崩れていく気がして、シヨルダーガードがやたらと重く感じる。

何とか意識を目の前の辞令書に戻しても、視線が落ち着かずに震え

る。

(今……なんて？ リキア？ 連絡所……つて!!!)

リキア連絡所とは、リキアに常駐して本国の部隊の傭兵契約締結を補助するものだ。

そこに飛ばされる意味を、シャニーだつて知らないわけではない。頭の中で何度も再生するたびに、それまで虚ろだった目にみるみる力が籠る。

すぐにそれは焦りに支配され、静寂を突き破るような悲鳴が飛び出す。

「あ、あの！ もう一回言ってください！ リ、リキア?!」

嘘だと言ってくれ。そう言わんばかりの見開いた青の瞳が絹を裂くような声を上げる。エニスは何も言ってくれない。それどころか、彼女は視線を切ってしまった。

それが明確な答え。愕然とした目は再び色を失って、霞がかかったように呆然とうなだれる。

(そんなッ、そんなバカな?! なんで?? なんであたしたちが?!)

なぜリキアに飛ばされるのか、まるで理解できない。受け入れられない驚愕が、呼吸を浅くさせ体を震わせる。

だいたい、連絡所勤務など一人のはずだ。それがなぜ部隊ごとなのか……湧き上がる「なぜ」に、なに一つ自身を納得させられるものがない浮かばない。堪らずエニスを見上げる。

「なにかの、なにかの間違いじゃないんですか？ イドゥヴァ団長はあたしたちを！」

イドゥヴァとは約束したはずだ。十八部隊の存続を。つい二週間ほど前の話がこんなになってしまふなんて、どう考えたって受け入れられなかった。あれだけ皆で飛び回って、あれだけ多くの人に支えてもらつてこの四月を勝ち取つたはずなのに。

だが、なにも出来ることはないと言わんばかりに切られたエニスの視線が事実を答えてくる。

「リキア派遣の理由は?!」

もし、もし現実だとしても、その理由はまるで浮かんでこなかった。

十八部隊はこれからも、イリアの中で民と共に未来を切り開いていく部隊のはずだ。それなのに、リキアという国外に身を置く理由……分からない。

青髪を振り乱しながら、涙さえ飛ばして絞り出す声はもはや悲鳴。「ごめんなさい。私は理由を知らされていなくて」

思わず膝から崩れ落ちそうになる。

エニスはこちらが知りたくらいとでも言いたげだ。無念そうな顔をするエニスに、突き出していた両拳が崩れてだらんと滑り落ちていった。このまま地面の中に吸い込まれてしまいそうなほどの悲しみ、脳天から体を押し潰そうとしてくる。

(なんでだ……なんでなんだ。なんで、なんであたし達がりキアに)

そればかりがぐるぐると頭の中を駆け巡る。

答えの出ない「なぜ」が体の中を切り裂いて、今にもバラバラになってしまいそうだった。

受け入れがたい事実……。一体リキアの地で、なにをすれば良いと言うのだろうか。全くイメージが湧かない。

「じ、じゃあ、あたしたちのリキアでの任務はなんですか?!」

連絡所への移動辞令は明確な左遷と言える。そんな場所に仕事があるのかすら不安だった。

「それは辞令書を見ていただければ、お分かりになるかと」

さっと手渡された辞令書。紙がくしゃくしゃになることも気にせず、受け取った辞令を髪が揺れるほど焦って広げる。

焦燥の瞳に飛び込んできた信じられない任務内容を、シャニーは思わず口に出して読んでしまった。

「復興と国力強化のベンチマーキングと教育……?!」

辞令を握る手がどんどん震え始め、紙が縊れるだけでは済まずに、少しずつ悲鳴を上げて千切れ始めた。受け入れがたい内容を引き裂いてやろうかと、瞳が怒りと絶望に滾る。

(絶対嘘だ。教育なら期間があるはずなのに……辞令でこんなものあり得ないでしょ?!)

教育で勤務地自体を変えるなんて、聞いたこともなかった。イドウ

ヴアはこんな内容で承知するとも思っただろうか。

とはいえ、団長命令は騎士団に所属している以上は絶対だ。この前の解体の危機だって、自分の叙任騎士の身分を懸けて戦ったくらい命がけだったのに。

「待つてください。じ、じゃあ今の十八部隊の任務は誰が？」

一番心配だったのはイリアの人々だ。国内専門部隊として、イリアの人々を守り、彼らの叫びを騎士団へ、国へと届ける仕事。ずっと彼らと戦ってきた十八部隊にしかできない仕事だと自負してきた。

自分たちがリキアに発つてしまえば、いったい誰が彼らを守るというのか。せめてそれだけでも知りたい。

シャニーは涙を振り飛ばしながらエニスの手を取った。

「特定の部隊を置かずに、騎士団全体で取り組むと団長は仰っていました」

取ったばかりの手がするりと垂れ落ちていく。

僅かながらの希望さえ打ち砕かれて、血が出そうなほどに下唇を噛み締める。

途端に、ごうつと燃え上がった怒りが体中を駆け巡って体を震わせ、静寂を突き破って爆発するように突き抜けた。

「結局解体ってことじゃないですか！ 存続は嘘だったんですか!! イリアの人々を誰が守るんですか!!」

許せない……それしか心が叫ばない。

エニスに怒鳴っても仕方ないことを頭は理解している。それでも叫ばずにはおれなかった。

これでは裏切りだ。イドウヴアの裏切りはもちろん、このままりキアに発つてしまうのでは、自分たちを信じて支えてくれたイリアの人々を裏切ることになってしまう。そんなこと、許せるはずもない。

「ごめんなさい。私も今回の決定は理解できないのです。でも、団長判断ですから……どうにも」

エニスから返ってきた言葉に、やり場のない怒りをどうにもできずに視線を切った。その先には、主のいない団長席がある。

（存続はしても仕事を約束したわけじゃないって言いたいワケ……?!）

あんまりだよ!!)

今すぐにも団長のもとへ飛んでいきたいくらいだった。

拒絶に体を震わせ、刃のように切れ上がる横顔で団長席を睨み付けるシャニーに、エニスもどう声をかけてやれば分からないようだ。

「お気持ちは分かります。でも、貴女も叙任騎士ですから、分かりますよね？」

だが、エニスの立場は総務部長。決定した人事を騎士に告げることが仕事。こうしてイドウヴァが席を外しているのも、今回は反論を認めないという無言の圧だ。

(分かるワケ……分かったって言えるワケ……無いじゃない)

汗を流してくれた仲間も、すべてを託してくれたイリアの人々も……多くの人たちの顔が浮かび上がってきて、シャニーは唇を噛みながら溢れる涙を堪えようと目を細くして伏した。

(——お姉ちゃん……助けて……)

思わず姉を呼んでしまった。

三月までなら、この部屋には厳しくも優しい姉がいて守ってくれた。いなくなつて早々、部隊を守れずに震える自分が惨めだった。

「……分からないけど、受け取るしか……ないんですよ」

血でも吐きそうなくらい、重いものが腹から湧き上がってくる。もう、どうして良いか分からない。

でも、このままここで立ち止まっている訳にはいかなかった。さつき自分で叫んだのだ。イリアの人々を守るからこそ十八部隊だと。

(決まったなら、前を向くしかない。ほら、笑おうよ、シャニー！)

——笑って、前向いて、未来を切り拓こう！

この前、そう誓ったばかりだ。決まった人事の中で、自分ができることを探すしかない。

涙を袖で拭い、ショートレイヤーを揺らしながら前を向いた彼女は、その顔に爽やかな笑みを湛え、白い歯を見せながら敬礼して辞令を復唱した。

「はい、分かりました。リキアでの任務に就きます！」

リキアで勉強して来いと言うのなら、イリアのために必要だと言う

のなら、遠回りでも前に踏み出そうと決意する。

それでも、湧き上がるのは大事な人たちへの詫びの言葉ばかりだった。

（お姉ちゃん、みんな……ごめん……。みんなとの約束、果たせそうにないよ……）

雪が消える四月から、今まで以上に頑張つて彼らとイリアに軌跡を描こうと思っていたのに。

希望を砕かれ霞がかかる沈んだ瞳には、明るい春日に輝く廊下さえ、ただ白に塗り潰された虚無の世界に映る。叩きつけられた絶望は、前を向いた決意を易々乗り越えてくる。

打ちのめされた心の崩れるままに彷徨つて、シャニーはそのまま詰所には戻らなかつた。

信じてる 信じられてる

ぼうつと広がる視界。見上げると、青が溶け行く春の夜空に一番星が輝き始めている。それ以外に辺りを照らすものは何もない。

シャニーは暗闇の中でただ、呆然と空を見上げたまま身動きも取れなくなっていた。

古ぼけた石造りの階段に置物のように腰掛けて、もう立ち上がる気力も湧かない。

「もうこんな時間か……」

時計を見下ろしてぼつりと漏らし、それっきり。

空を見上げたはずの視界は、時計から外れてそのままうつむく。

いったい、今日何をしていたのかまるで記憶がない。壊れた心のまま足をただ引きずって、気づいたらこんな城の隅っこに、流れ着いた枯れ葉のように佇んでいる。

(今までの戦いは……なんだったの?)

ひたすら問いかける声に返って来るものはなにもない。

今まで、ずいぶん戦ったはずだ。それこそ、毎月のように。その辿り着いた先にあったのが、これなのか。

悔しくて、悔しくて、もう笑えてしまう。引きつった笑みを浮かべた途端、乾いた瞳が潤みだす。

(みんなに何て言えばいいんだろ……分かんないよ……)

一気に浮かび上がってくるたくさんの顔。十八部隊のみんな、村々の人たち、姉やゼロット……。みんな、信じて託してくれた。

彼らの笑顔を見たくて一生懸命に戦ってきたのに、下された辞令がすべて引き裂いた。

もう、あと数日で彼らに声をかけることさえ許されなくなる。腹の中に重く、黒く溜まっていくものが、ギリギリと締め付けてくる。

「ごめん、みんな……。あたしは、みんなの想いを裏切る……こと……に」

重い心を吐き出した途端に、腹が悲鳴をあげ、胸が震えて言葉にならない声が溢れだした。崩れた視界にはなにも抗う力は残っていない

くて、ぽろぽろと流れ落ちる涙を止められない。

裏切るなんて、絶対にできない。でも、叙任騎士である以上は逆らえない。どうすればいい……？

誰もいない打ち捨てられた場所で独り、ただ擦り切れるような声で慟哭して、やり場のない気持ちを何度も何度も石段へ振り下ろすその拳は弱々しい。

「ここにいたのか」

ふいに自分以外の声が聞こえてきてはつとする。

涙を拭うことも忘れて振り向くと、視界に眩く入ってきたランプの明かり。真つ暗な闇の中で照らし出されたのは親友の顔だった。

「アルマ……」

少しだけ、ほつとした。このまま誰にも会わずここにいたら、どうにかなってしまいそうだった。

なにも変わるわけでもないのに、なんだろう、この安堵は。

(どうして……ここが分かったんだろう)

ゆっくりと歩き出したアルマの視線をじつと追いながら、そんなことを考えていた。

周りの景色からするに、ここは西棟の外れ。事務員たちの職場から、さらに奥の城壁沿いのはず。

自分でもどうやってここまで来たか覚えていないくらい人気のない場所のはずなのに、アルマは来てくれた。皆、探しているかもしれない。また迷惑をかけている自分に下唇を噛む。

そうしている間にアルマは歩いて来て、肩が触れるほどまで寄って座った。

「誰に謝っていたんだ？」

重い沈黙を動かすようにアルマが聞いてきた。それ自体はありがたい。でも、その内容にドキツと胸が跳ねる。

独り言のつもりが聞こえてしまったと思うと、妙に恥ずかしい。いまさら取り繕ったって仕方ないとは分かっている、涙をすすって目を拭う。

「ううん！ なんでもないよ。星を眺めてただけ」

こんな姿を親友に見せたくなかった。ニコっとして見せ、一番星のいる場所をとっさに指さす。

でも、やっぱりダメだった。無理して作った笑顔なんて、あつという間に崩れていくのが自分でもはつきり分かる。すぐに視線が垂れ落ちて、口元が引きつっていく。

「それよりさ、副団長就任おめでと！ スゴイじゃん！」

もう一度元気を振り絞ってアルマのほうを振り向き、友の出世を拍手で称える。

（もうアルマは副団長か。それに比べて、あたしは……）

笑っている傍からそんな心の声が囁いてきて顔が崩れそうになる。涙を隠そうと歯を見せて無理やり口角を上げ、ぎゅっと目を閉じた。

「ま、一応礼は言っておこう」

相変わらず、感情を表に出さないアルマに少しだけほっとした。

もう少し嬉しそうにすればいいのにも思うが、傍に友を感じるだけで不思議と落ち着く。

独りでいると、どうしてもあれこれ考えてしまう。彼女が来てくれなかったら、このまま朝を迎えて凍りついていたかもしれない。

「もう、照れちゃって。あと一歩だね！」

副団長となり、一層立派になった鎧。そのショルダーガードをぽんと叩きながら、精一杯の明るい声で親友を祝う。

アルマの顔に喜びはない。それどころか、どこか苛立ちさえ滲んでいるように見える。珍しい。ポーカーフェイスを崩さないアルマの顔に感情がある。

それでも、無言には変わらない。今はなんでもいいから言っただけだった。

（アルマとも、会えなくなるんだな。アルマとの夢も……）

親友が返してくれないと、なにも後が続かない。空元気だったことを思い知らされ、長い沈黙が広がっていく。

闇夜の中でランプに照らし出される親友の横顔をじっと見つめて、シヤニーはきゅっと両唇を噛んだ。

彼女への侘びの言葉ばかりが心の中で繰り返されてくる。独りで

いたときは気にならなかった沈黙が、とても辛くなってきて思わず笑いが漏れた。

「大抵のことじゃ驚かなくなったと思ってたけど、またイドウヴァさんにやられちゃったよ。副団長なら、知ってると思うけどさ」

自身に起きたことを吐き出すように喋る口調は最初こそ絶望に笑っていたが、最後は震えて、擦り切れ千切れていった。どうしようもないところまで追いやられ、城の隅っこで佇んでいるのは、やつれ切った苦笑い。

(何でなんだ……)

それしか頭に浮かんでこない。答えの出ないループの中になると、どんな体から力が抜けてくる。このまま……もう目を瞑ってしまいたい。そう思っていたときだった。

「……すまない、シャニー」

突然の声にはっと目を開けて振り向く。真剣なアルマの眼差しがまっすぐ向けられていて、言葉に詰まった。

いつもポーカーフエイスだが、この無表情は……泣いている。

「ど、どうしたさ？　なんでアルマが謝るの？」

いきなり謝られて、どう反応して良いか分からなかった。止めてくれとまた笑って見せ、とっさに続けた。

「悪いのはあたしの素行で——」

「本当にそう思ってるか？　自分が悪いと思ってるか？」

食い気味にそう聞かれ、言葉が引っ込んでいく。気づいたら視線を逸らしていた。

本当に、自分が悪いのだろうか……考えるまでも無かった。決して、後ろ指をさされるようなことはしていない。

もう一度アルマを見上げると、彼女には珍しく強い口調で怒りだした。

「お前はいつもそうだ。周りを喜ばそうと我慢する。涙は似合わないとも思ってるのか知らんが、そうやって何も言わない。私には……

——それが辛抱ならぬ」

(どうして、あたしの気持ち分かるんだろう)

まるで隠せていない。アルマの真剣な眼差しに貫かれて呆然としていた。

親友には関係ない悲しみで、彼女の気持ちまで沈めたくないのだが、分かってくれる人がいて嬉しかった。こんな場所まで助けに来てくれたと思うと本当に救われた気がして、心が抱きしめられたように震えてくる。

もう、観念してうつむいた。

「思うわけ……ないよ。でもそれ以外に理由が分からないんだよ。アルマ、なんでなの？」

暗闇に沈んだ青の瞳がじつとアルマを見つめ答えを求める。

それをずつと、見つかるはずもない答えを求めて、今日一日彷徨った。アルマなら、イドウヴァアの腹心ならきつとなにか知っているはず。今までも何度かアルマに同じことを聞いた。そのときは、分からないと返ってきた。静かに目を閉じた彼女の答えをじつと待つ。

「私も分からないよ。あの人の考えていることは」

今回も答えは同じ。でも、開かれた目や声に滲む苛立ちとも、悲しみとも感じる彼女の心の“流れ”は、とても誤魔化そうとしているようには思えない。

(こんな仕打ち、あんまりだよ……)

飲み込めない、理由も分からない、ただ投げつけられた命令。どこにも自分を納得させるものが見つからない。

しょんぼりとうつむくシャニーの横顔に、また一つ涙が下つていく。

「すまない、シャニー。私の力では……ここまでだった」

鎧の軋む音と共に聞こえてきた親友の声に気づき、視線を向けた途端に目が飛び出しそうになった。思わず「あつ」と声にならない声が漏れる。

正面を向いて、アルマが頭を下げていたのだ。あのアルマが、気高い彼女がそんなことをするなんて信じられない。

「ねえ、なにがあったの？ どうしてこんなことに！」

やっぱり、なにかを知っている。

気づいたら頭を下げるアルマの両肩を、シヨルダーガードに痕がつきそうなほど強く握りしめて揺さぶっていた。知りたい……なにがあったのか知りたい。ただそれだけだった。

アルマはしばらく黙っていたが、意を決したように大きく息を吸いこむ。よく聞けと言わんばかりの目に、シヤニーは息を呑んだ。

「お前たちは最初、西方三島連絡所への出向だったんだ」

アルマの肩に置いていた手が、支えを失ったようにシヨルダーガードからずり落ちていく。両手を石段に突いたシヤニーの目は、驚愕に打ちひしがれて震えていた。

西方三島連絡所……それは流刑の地と呼ばれる行きつく果て。二度と帰れない場所。

——なにを意味してるか、分かるだろ？

アルマの眼差しを横目に受けて絶句する。目が、口が堪えても震えてくる。

(あたしたちに、死ぬとでも言いたいのか!)

荒くれがはびこり、昼夜問わず略奪が繰り返られる無法地帯と聞く。そんな場所に女数名がいたらどうなるか……考えるまでもない。

「……それを、アルマがリキアに変えてくれたってこと?」

「ああ……。すまない」

リキアの連絡所がどんなところかは知らない。きつと、少なくとも西方三島よりはマシなはずだ。

知らないところで絶望に叩き落され、そして、知らないうちに絶体絶命から救われていた。救ってくれたはずのアルマは、それでも侘び言葉を漏らし、らしくもなく弱い顔で今にも崩れそうになっている。

(アルマ、大丈夫かな……。かなり無理をしたんじゃない)

親友は命を救ってくれた。それは同時に、団長の決定に異を唱えて覆したということになる。今度は彼女がどんな仕打ちを受けるか、急に心配になってきた。とはいえ、今の自分が彼女にしてあげられることは限られている。

袖で涙を拭いて、シヤニーは精いっぱいに笑みを湛えてみせた。

「ありがとね、アルマ。リキアなら生きていけそう!」

流石に西方で生きていく自信はなかった。あの場所の恐ろしさはベルン動乱で嫌というほど味わったし、それを警戒してか、デイークも夜の番は回避させてくれたくらいだ。

「ロイ様もいるし、リキアは好きだったんだ。そんな顔しないで！」
12月に行ったとき、リキアの素晴らしさを味わった。同じ左遷でも、リキアと西方では天国と地獄ほどの差がある。

アルマにこんな怖い顔をして欲しくない。笑って励ますが、アルマは乾いた笑い声を漏らしだした。

「やめろよ、そんな顔。毒でしかない」

「え……」

「なぜ……私が慰められているのか、意味が分からない」

「だ、だってさ、アルマは——」

「お前、なんで私に本心を言ってくれないんだ？」

ふいにアルマの顔が厳しくなって、気づいたら睨みつけられていた。

今までも睨まれたり、キツイことを言われたりしてきたが、今向けられているのはまるで違う。はつきりとした怒りだ。悔しそうな、悲しそうな、そんな感情の流れがはつきり見える、焼けるような怒り。
(え……。どう言うこと？ 本心……?)

いきなり怒りをぶつけられて言葉を失った。今も目の前には、沸々とした怒りをポーカーフェイスの下に隠す親友の赤い瞳が、じつと答えを待って貫いてくる。

「本心だよ？ アルマが助けてくれなかったら今頃あたしたち……」

何回自分の心に聞いてみても、嘘を言った覚えも、隠しているつもりもないと返ってきた。

アルマは命の恩人とすら言える。三月のときだって、彼女がいなければイドウヴァと戦うことさえできなかった。感謝、ずっと感謝している。なのに、なぜなんだ？

「もっと怒りをぶつけてくれよ。私たちがお前の出向を決めたんだぞ」

アルマには珍しい弱った声。ようやくに、彼女の気持ちがかん

た。別に隠していたつもりはない。

(なら……はつきり言わなきゃ)

きゅつと口元を厳しくしたシャニーの眉が吊り上がる。

「あたしが怒りたいのは、イドウヴァさんだよッ！」

それまでの静寂を突き破るような怒声が、誰もいない城の最果てに響く。

ずっと、ずっと、あの人のせいで狂わされてきた。それになにもできない自分にも腹が立つが、もうあの人への怒りは我慢の限界などとうに超えている。独りなら、今すぐにでも剣を引き抜いて襲っているかもしれない。

「あたしはともかく、部隊のみんなまでこんなことされて、悔しいよ……悔しいッ、悔しいよ!!」

それまで腹の中に溜まりに溜まっていた黒く、重いもの。それを一気に吐き出した。爆発のような激情で石段を叩きつけ、慟哭は下を向き、震えた拳に涙が落ちて流れていく。

その絶叫が、不気味なほど急に止まった。

(……そうだ、なんでこんなところにいるんだ。戦わなきゃ!)

仲間だけでも、なんとかしなければならぬ。

イドウヴァは結局、去年のことを根に持っているに違いなかった。あんな土下座、ただのお遊びだったに決まっている。

見上げた顔に刻まれた据わった目が震え、東を見つめる。

もう、こうなったら……——だつと駆け出そうとした途端だった。

強い力に後ろから引つ張られて視界が飛ぶ。

「離して!!」

アルマに羽交い絞めにされていた。力に任せて振り払おうともがく。

「やめろ、シャニー! 今は待て!」

「止めないで! どうせ最後なんだ、戦ってやるんだ!」

西方に行こうとも、リキアに行こうとも、騎士としての人生は終わったようなものだ。イリアの民を守り、未来を切り拓くという誓いを掲げた騎士としては。それに仲間を巻き込みたくなかった。

「最後になどさせるか!!」

背後から浴びせられた、今まで聞いたこともない怒声。脳天から槍でも突き刺さったかのように動けなくなった。

(アルマが……怒鳴った?!)

こんなこと、今まで一度だつてない。

背後を一瞥して見開いた瞳が言葉を失う。あのポーカーフェイスに、鬼のような怒りが燃えていた。

「今行けば、お前の身分剥奪を交換条件にされるぞ。思うつぼだ!」

灼熱に盛る焰のような怒声が頭を突き抜けて、激情に任せた心がびくつと震えて振り返る。

「お前は必要とされているんだ! 絶対に短気を起こすな! 背負ったものを裏切ることになるんだぞ!!」

身分剥奪が辞令の裏に書かれた目的だったと知って、シャニーは絶句するしかなかった。

剥奪されれば剣は握れない。天馬にも乗れない。なにもしてあげられなくなる。信じてくれた者すべてを裏切る道へと、自ら飛び込もうとしていたと思いきや知らされ、前に踏み出そうとする足を止めた。

あの人たちのために、自分はある。そう断言できるし、それを誓いと掲げて天馬騎士として生きてきた。

(みんなの想いは裏切れない……絶対に!)

肩から力を抜けた。それを逃さんと言わんばかりにアルマが両肩を掴んで、体の向きをひっくり返された。

「時を見て必ず戻す。今は耐えてリキアで手柄を残せ。声が大きくなれば、こちらにも動きやすい」

お願いだ—— 懇願にも似た眼差しで見つめられて、下唇を噛む口元がきゅつと厳しくなる。

(今は……アルマを信じるしかないのか)

背負った信のために、今できることをするしかない。アルマは親友だ。彼女がここまで動いてくれて、こんなに言ってくれる気持ちが無駄にはできない。

一度うつむいた青の瞳は、再びまっすぐ前を見据えて赤い瞳に信を

託す。

「ありがとう。あたし、アルマを信じるよ」

アルマの両手をそっと握る。無理をしないで……彼女への感謝と、祈りを込めて。

アルマもじっと見つめて、手をぎゅつと握り返してくれた。お前の信を、私は背負おう——そう言ってもらえた気がする。

「ごめんね。アルマとの夢……かなえられなくなっちゃったけど」

共に夢を抱いた友。歩む道を違え、時には背を向けあっても、ずっと互いを想いながら同じ場所を見つめ続けてきた。互いが持てる精いっぱい、その手で、未来を切り拓くために。

イリアを離れなければならぬ以上、もうこれ以上軌跡を描くことはできない。それがとにかく、悔しい。

「私は諦めていない。お前は必要なんだ。必ず戻す。約束する」
(お前が必要……か。嬉しいな)

この言葉がどれだけ心を救ってくれただろう。

求めてくれる人がいる、帰れる場所がある。絶望に打ちひしがれた心を、魔法のように癒してくれる。

心が癒えた今、見つめる先をはっきりさせた今、まっすぐに前を向いて、シャニーはそっとアルマの胸から退いてすくっと立った。

「イリアを……お願い」

そっと差し出した手。二人は想いを受け取るようにしっかりと握手を交わすと、互いの瞳を見つめて静かに、深くうなずくのだった。夢の先の憧憬を、決して諦めないと誓って。

果たすべき役割

——アルマを部屋に呼びなさい！

いきなり、そう怒鳴りつけられたらしい。

目をあたふたさせ、足をバタバタ空回りさせて走ってくるから何事かと思ったが。

「ア、アルマ、いったいなにしたんだよ！ おかげでボクが怒鳴られたじゃないか！」

相変わらず余裕のない先輩だ。先輩と呼ぶ必要も、今となつては無いのだが。

「先輩、呼び捨ては止めてもらえますか？ 私は副団長ですよ？」

「ぐっ……」

それまでの威勢がウソのように、マリツサの口元がギリつとしていく。

実力も無いのに、年上と言うだけで威張り散らす典型例のような女だ。そのくせ、イドウヴァの腰巾着で擦り寄る姿はへどが出る。

「——で、副団長。イドウヴァ団長が呼んでたぞ。こおんな角生えてたから覚悟するんだね！」

(やれやれ、お守タイムの始まりか)

狼狽するマリツサにとにかく来いと引つ張られて廊下を歩くなか、アルマは目を閉じて呆れを顔に出さないようにしていた。なにを言われるかは想定内の範囲内だが、そんな烈火のごとく怒り狂う理由が分からない。

(どいつもこいつも、もう少し賢くなれよ)

団長然り、その団長の考えをなにも飲み込まず、こうしてあたふたする者も。本当に下らなく思えてくる。

だが、今からのこの一番は、何が何でも勝たなければならない。脳裏に親友が浮かんだ。いつ思い浮かべても明るく笑って自分を励ましてくれるあの顔が。

「じゃあな。お大事に！」

もう自分の仕事はここまでと、団長室の前まで来るとそそくさ退散

していくマリッサなど眼中にない。むしろ消えてくれて清々するくらいだ。ああいう、自分の意志がないヤツが一番気に障る。

「第二部隊長、アルマです」

重く閉じる扉の前で名乗ると、大槌で殴りつけるような怒声が飛んできた。

「入りなさい！」

普通の隊員であれば、これを聞いただけで腰を抜かして、もうノブに手を伸ばすことさえ震えてしまうだろう。

（おお、お怒りだな）

アルマにとつてはただのそよ風でしかなかった。

私憤をぶつけられるだけなら、黙って聞いていればいい。少なくとも、今回ぶつけられる怒りに、背負った者の想いが無いのは間違いない。ただ、このことになると妙に神経質になるのが気になるくらいだ。

「アルマ、これは一体どういうことですか？」

部屋に入るなり、イドウヴァは手招きして視線で引つ張ってくる。彼女は机上の紙を指さし、尖った目をさらに槍のように鋭くしはじめた。

アルマが資料に視線を下ろしてみると、それは騎士団全体に展開し、団外にも公式文書として案内済みとなった職制表だった。

イドウヴァは左側の枠で囲った出向者欄を、穴が開きそうなほど爪でトントン叩いている。

「理由は色々ありますが、総合して独断いたしました。申し訳ございません」

淡々と事実を説明し、いつも以上に強くイドウヴァを見据える。

これでも十分付度したつもりだ。本当なら、出向辞令自体を取り消したいくらいだった。親友は、イリアの中になければならない人物。それを、あろうことか西方三島など、どう考えても納得できなかった。

「良いから説明しなさい」

イドウヴァは感情のまま、早口に牙を突き立てている。

何をこんなに火を噴くのか、理解に苦しむ。イドウヴァにしてみれば、西方三島だろうがリキアだろうが、どちらでも良いだろうに。とにかく、イリアの外に出せたのなら、最低限の目的は果たせはずだ。となれば、団長を差し置いて独断したことくらいか。……外にいて内のことを何もしないなら、むしろ口出ししないで欲しいくらいなのだ。

(シャニー、今度は私が守ろう)

これからの説明一つで彼女の運命を決めてしまう。アルマは一度目をつぶり、親友の笑顔を思い浮かべると勇気を鼓舞して目を開く。彼女は故郷の村を助けてくれた。その恩を今、少しでも返さねばなるまい。

「一番の理由は、西方への出向に合理性がないからです。ゼロット様に説明ができません」

第一手から、ぼつさりと切り捨てた。

イリア連合からも勲章を賜るほど、功績を残している者へ発令するような辞令ではない。おまけに、連合会議で今後は注力せよと指示を受けたにもかかわらず。誰であっても分かる話と言えよう。

だが、頬杖しながらアルマを睨み上げるように話を聞いていたイドウヴァは、まっすぐ振り下ろされた反目の槍をあつさり払って見せた。

「ですから、エトルリアとの関係強化という形にしましょう」

建前さえあれば何でも良いというのは相変わらずか。

西方三島は、領土的にはエトルリア領だ。彼らは無法地帯の管理にほとほと手を焼いていると聞く。その場所を天馬騎士団が何とかできれば、エトルリアから得られる信頼は大きい——— 理屈は分からないでもない。

もつとも、主眼はそこではあるまい。仮に失敗したとしても……それはそれで都合がよいというわけだ。

切り返してきた槍はさすがに抜け目がない。それでも、アルマは一歩前に出た。

「それなら、エトルリア本国への出向と皆理解するはずですよ。実際、何

人かの騎士団長にお話を伺いましたが、皆首をかしげておられました」

エトルリアにはティトという新しいパイプがある。それに一番強い繋がりを持つ妹をなぜエトルリアに置かないのか。どの騎士団長からも逆質問を受けたくらいだ。

それは、イリア三大騎士団の一つ——聖天騎士団の筆頭司祭フェリーズも例外ではなく、全くの同意見だったアルマには返す言葉がなかった。

ぴくつとイドウヴァの眉が動く。

「それは、他の騎士団に内輪の人事を公式発表前に漏らしたということですか？」

「ええ、申し訳ありません」

「貴女、もしかしてゼロット殿まで」

「いえ。あくまで顔の利く範囲だけです」

ゼロットが再び遠征に出るから公式発表する——その意図は分かる。だから十分忖度したはずだ。外からの批判をぎりぎりまで抑え、公式発表も済ませた今、これ以上執着する必要がどこにある。

「まったく。貴女のシャニーへの執着には困ったものですよ」

イドウヴァは不機嫌そうに両手を机に突くと、じつと職制表を見下ろしはじめた。

（お前が言うな）

喉元まで出かけた言葉を飲み込んでいるとイドウヴァが続けた。

「そんな理由で出向先を変えたのですか？」

今からでも再度辞令を出すべきか——そうイドウヴァが考え始めていることが、職制表を叩く爪の位置から伝わってくる。ここまで説明して、外部の声まで拾って投げてやったというのに。

（一体、何故ここまでして彼女を）

どうしても、これが分からなかった。親友だからと肩と持つ訳ではない。いや、彼女の考えに自分も賛同し、共に歩もうと誓ったからこそその友なのだ。

イリアを創っていこうとするとき、その大きな片翼になれる人材を

わざわざイリアの外に置いて、あわよくば消えてもらおうと行きつく理由が、どう絞ったって浮かんでこない。

今が……その時か。

「団長、一つお聞かせください。何故、そこまでしてシャニーをイリアから遠ざけようとするのですか」

以前からずっと気になっていたことであり、フェリーズもいつも首を傾げながら、同じことを口にしていた。

——扱いきれない魔剣なら、是非私どもに譲ってください

あれだけの武勲と、国内での功績を持った騎士ならどこだって同じ反応だろう。天馬騎士団……いや、イドウヴァだけが全く違うのだ。

ところが、それを聞いた途端、ありあり眉間にしわが寄ったイドウヴァはアルマに落胆を吐きかけた。

「アルマ……失望しましたよ。いまさら何を言っているんですか？背後から刺されたような気分ですよ」

「申し訳ございません。しかし、良い機会だと考えています。しっかりと理解し、穂先を合わせたく」

頭を下げるなり、鼻からため息をつくような声が降りかかってまた絡みついてくる。

「……そうですね。去年後れを取った分、今年一年は勝負の年ですから。しっかりとしてくださいよ」

（お前の私情など知ったことか）

吐き捨てられた落胆に、アルマも内心は毒づいていた。

合理的な理由など全く見当たらない私情に、騎士団全体を巻き込んでいる。そうに違いないが、せっかく理由を口にしてくれるなら、今は黙って聞くことにする。今後のアイツの身の振り方にも関わる話のはずだ。

「春陽計画実現に向けて、これから大量の資金が必要となるのです。ただでさえ、我が騎士団は彼女のせいで、昨年度の計画に対して大幅な未達なのですから」

国力向上の任をあずかる十八部隊には度々、イリア内の声を実現するため資金が割り当てられたとアルマも聞いていた。

資金調達の遅れは即、計画全体の遅延ととん挫を招く。これ以上、袋の端を齧るような真似をされるわけにはいかないというわけか。それでも納得できなかった。それだけ聞けば分からないでもないが、一つだけが強烈に喉に引っかかったままとなり、不快感ばかりが残る。

団長席に手を突き、身を乗り出して核心を突く問いを浴びせた。「本当にそれだけの理由ですか？ それなら、リキアで十分ではありませんか」

絶対にこの理由が第一目的ではない。アルマはそう確信していた。この異常なまでの殺意が、どうしても理解できない。西方三島に飛ばすということは、そう言うことだ。

「彼女は我々の計画にとつていずれ障害となりますからね。ここまて言えば分かりますね？」

イドウヴァは恐れているのだろうか。風の魔人のセチの化身振るう剣が、自身へ向くことを。聖天騎士団の筆頭騎士と、シャニーが互角にやり合った情報が上がってからというもの、それは露骨だ。

（もし、彼女と槍を交えることがあるなら、それは本望だ）理想を求めあう中で対立するなら、アルマにとつては望むところだった。多くの信を背負う彼女がノーと言って剣を握るなら、そこには私情ではないイリアの想いがあるに違いない。それは是非聞いておきたかった。

イドウヴァは強面を見せているが、最後まで聞いても、アルマにとつては「くだらない」理由でしかなかった。

「イリアに春を」。これはシャニーも常々口にかけているものです。共闘できると思っています」

その強面も、アルマが口にした共闘という言葉ではつきりと歪んだ。

「彼女を味方につけることは、民を味方につけるも同意です」

止めを刺すべくアルマが浴びせた言葉に、イドウヴァは腹の底から大きく落胆を吐き出している。その顔には、辟易する気持ちがべったり滲む。

「やはり……まだ若いですね。そうはならなかった経験をしているから、こうして今回は警戒しているのです」

「……？ 経験？」

「奇しくも、彼女の娘と同じことで神経をすり減らすことになるのは、これも運命の悪戯でしょうか……」

真相は掴めないままだが、イドウヴァも何かしら根拠があつて判断したと言うのか。

それでも、そんなことはどうでもいい話。とにかく、この部屋から持ち帰るのは勝利だけだ。とはいえ、あまり戦況は芳しくない。

(……あまり、このカードは切りたくなかったが……)

まるで納得していないことは、団長席から貫くように睨み上げてくる視線ではつきり分かる。それ自体はどうでもよいが、勝たねばならないのだ。引き分けは負けも同然。

親友に詫びながら、最後のカードを切る。

「それに、リキアには英雄ロイ様がおられます。シャニーはロイ様と親交が深いですから、良いパイ役になると思います」

この前も、こうした発言が引き金になったから、アルマも賭けだった。

最初からそれを要求したくはなかったが、今はこの場を乗り切るためには止むをえまい。この関係を知ったときは驚いたものだが、イドウヴァも知らなかったらしい。目を真ん丸にしている。

ようやく分かったと見える。下手なこととはできない相手。消すなど……ありえない人間だと。

「しかしですね、それでは——」

「あの関係なら、彼女は遠くない内に騎士団を退団しますよ。消すよ、消えてくれる方が良いのでは？」

言った自分にへどが出る。人の恋愛までこんなことに利用するのは。

(消えてくれた方が良いだと……?)

本心がどこにあるのか、自分でさえ分からなくなってくる。自分の血は、結局こちら側なのか。

「なるほど……。その手がありますか」

「リキアに身を置けば、今までとは比べ物にならないくらい、接点は増えるでしょう」

しばらく腕を組みながら、イドウヴァは天井を睨んで考えを巡らせている。

答えを急かし、前のめりになって攻め込むと、そつと腕を解いた彼女は顔を近づけてきた。

「……貴女がそこまで言うなら、彼女の管理は貴女に任せます」

内心、拳を握って声を上げた。

この一言さえ聞き出せれば後はどうとでもなる。この喜びを、誰でもなく親友に伝えてやりたかった。彼女を本来いるべき場所に戻してやることはできなくとも、最悪は避けられた。

「イエス、ママ」

「ただし、有事のときは責任を取ってもらいますから、そのつもりで」
——もし妙なことをシャニーが企てるのであれば、その槍で貫け

そう伝えるように、イドウヴァはアルマの右手を握る。それに静かにアルマは頷いた。

(少々、先に進むのが早くなるだけのこと。そのときは——こちらにも肚を括るだけだ)

志を同じにする者へ、槍を向けるわけにはいかない。信を託して背中を見せる、あの青の騎士へ槍を向けるなど。その心をポーカーフェイスに隠し、静かに一礼してアルマは戦いの場から身を退いた。

「シャニー、うまくやれよ」

今も脳裏には爽やかな声で笑う親友の顔が浮かぶ。

ふっと笑って見せた。つくづく、お人よしになってしまった自分に。

ひとりじゃない

まだ隅は真つ暗な闇夜が支配する室内稽古場。

静かな空間を鋭く裂く剣の音だけが響く。時計はまだ、L字をさしていて普段なら誰もいるはずのない時間。

黙々と剣を振り続ける乙女のシルエットが小さなランプの灯に照らされ、部屋に大きな影を広げている。

(みんなに、何て言って切り出せばいいんだろう……)

剣を振りながらも、シャニーはずっと同じことを考えていた。

答えの出ない問いを自身に繰り返し、そのたび浮かびあがる仲間たちの顔に首を何度も振る。

いったい、どんな顔をするだろうか。自分だつてまだ飲み込めたわけではない。けれど、アルマとも約束した。いま短気を起こせば、イリアの人々を裏切ることになる。イリアを想うからこそ、何もできない。

もどかしくて、苦しくて、悔しくて……こんな気持ちのまま、仲間たちが納得してくれるか不安だ。

(あのと、あんなことをしなければ、こんなことには……)

去年の7月……あの団長選出戦でイドウヴァに従つておけば、今頃こんな時間から剣を振らなくても良かったかもしれない。とは言え、間違つたことをしたとは、今だつて一切思っていない。

(どうすれば良かったんだ、どうすれば良いんだ……なんでさ、なんでなのさ……ツ)

ビュンビュンと空を裂く剣の音がどんどん激しくなる。ついには彼女の怒りはゴオツと青焰を滾らせた。

「くっそおおっ!!」

湧きあがる怒りに呼応するように膨れ上がったセチの魔力に任せ、力いっぱい叩きつける。足りない。案山子を真つ二つにしたくらいでは全然足りない。それを止めるように、中の住人が呆れた声を漏らしはじめた。

「やれやれ。そんな感情で、私をまとわないうで欲しいかな？」

身を包む青焰が収まり、剣を地面に突き刺し膝を突く。荒れる呼吸に肩が跳ねて、剣に預けないと体を支えられない。

それがセチには不満らしいが、言われなくとも分かっている。今は、殺意——魔剣だ。こんな使い方は、本望ではない。

「ごめん……」

「エーギルの消耗、スゴかったね。今のは本気で『殺り』にいったのかな？」

「……」

「らしくないなあ。ま、キミのホンキも見てみたいし？ カチこむなら助太刀するよ？」

警告か、それとも、彼女なりに気にかけてくれたのか。見通すような、透き通ってサツパリした気性のセチは、奔放でイマイチ考えていることが分からない。

特に剣のことになると目を輝かせ、こうしておっかないことを平気で言う。穏やかな風の精霊と聞いていたのに。

それでも、話しかけてくれて少しだけ気が紛れた。

「ねえ。あたし、みんなになんて言えばいいと思う？」

独りで考えていると、どうしても良くないことを考えてしまう。相棒がいるのを思い出し、アドバイスを欲しくて声をかけたのだが、返ってきた言葉はあまりにもあつさりしていて困惑するばかり。

「どうも何も。事実をそのまま言うだけだと思うけどな？」

「そりゃ、そうなんだけど……」

「そんなことで雑味が出るなんて、隙だらけだね」

仲間をがっかりさせないように説明するには、どうしたらいいかを聞きたかったのに。

それからしばらく、剣を振り続けていた。

心を落ち着けて、もう一度考えてみる。……ループする世界。剣を槍に変えてみても、どうにも良い案は浮かんでこない。左遷という事実が、全てを砕いてくれる。

「あーっ、サボリ魔がいたッス！」

そのときだ。ふいにドアが開く音がしたと思ったら、すつとんきよ
うな声が飛んできた。はつとして窓の外を見れば、いつの間にか朝日
が差し込んで青空が見えている。

(みんな来ちゃった……)

振りむけば、ミリアだけではなくレンやルシヤナも一緒だ。あれだ
け長い時間があつたというに、心の準備なんか何もできないまま。

「シャニー、今度はどんなサプライズだったわけ？」

今日という今日はとちめてやるとでも言いたげに、指をほきほき
鳴らしながら寄って来るルシヤナの頭には間違いなく角が生えてい
る。おまけに一本どころではないから普段なら逃げ出すところ。

でも、槍を下したシャニーはうつむいて下唇を噛んだ。

(サプライズ……ホントだよ。酷いサプライズだよ……本当に)

シャニーの肩を抱きこんで捕まえたルシヤナだったが、反応が無
かったからか困惑が浮かぶ。ミリアと二人で首を傾げ合っていると、
背の低いレンがうつむくシャニーのもとに潜り込むようにして見上
げて視線を合わせた。

「シャニー……昨日、総務部長さんに何を言われたの？」

目の前に銀色の瞳があつて見つめてくる。もう逃げ場がなくなつ
てシャニーは顔を上げた。困惑した六つの瞳。怒り……いや、不安を
ずつしり抱えた、朝とは思えない眼差したち。

(やっぱり、そのまま言うしかないよね……)

その瞳をゆつくりと見渡しながら、唇を噛んでぎゅつと槍を握る手
に力を込めた。

どれだけ考えても、気の利いた言葉なんて思いつかない。リキアに
飛ばされた事実は否定できず、イリアを守る道を絶たれた……。

その気持ちに全ての笑顔が掻き消され、シャニーは真顔のまま口を
開いた。

「みんな、落ち着いて聞いて。あたしたち第十八部隊は……リキア連
絡所へ出向になった」

自分が落ち着いていないのに、周りに落ち着けとは、何とマヌケで
不安にさせるようなことを言ってしまったのだろう。

稽古場には重い沈黙が広がった。普段ならこの沈む空気を笑って払うところだが、今は火が消えて一風も吹けない。

その沈黙を破ったのは、やはり絶望という名の驚愕だった。

「どっ、どういうことツスカ?! しゅっこう? 何スカ、それ! リキアの連絡所をどうするんスカ?」

動転した声。ミリアが周りをきよろきよろしながら答えを求めて叫んでいる。

まず、言葉の意味が分かっているらしい。その裏にある本当の意味を、どうやって説明すればいいだろう。

慎重に言葉を選んでいきだった。

「……リキアに常駐して、リキアの中で仕事するってことだよね」

信じたくない、そんな気持ちがあるレンの声をさらに小さくするように、今にも掻き消えてしまいそう。弱々しく彼女の銀の瞳が見つめる。

いつものように笑って、冗談でした! とでも返してあげたかったが、唇を噛むしかできない。いや、それが精いっぱいだった。

「ちよ、ちよっと待って欲しいツス。この前、存続が決まったばかりじゃないツスカ!」

ミリアは何度も舌を噛みながら早口にくり出し、両手を広げはじめた。

(あたしだって、そう思ってたよ……)

もしかしたらイドウヴァの中では、あのときから既に決まっていたのかもしれない。そうだとしたら、掌の上で転がされていたことになる。

「部隊の存続だけってか、約束したのは。あのクソババめっ」

静寂の稽古場に、怒声と共にガシャン! と腹を震わせるような音が響く。ルシヤナがテーブルを殴りつけ、目を血走らせていた。その衝撃に崩されるように、ミリアがへなへたとテーブルに手を突いている。

「リキアでのお仕事、何?」

そんなミリアを支えながら、レンは話を先に進めた。でも、ルシヤ

ナの顔にはありありと困惑が浮かぶ。

「リキアに仕事なんかあるの？」

「リキアは復興が進んでるから、そこを見て勉強して来いって」

口にした任務内容に、ルシヤナの顔が一層に厳しくなるのがはつきり見えて、腹にわつと不安が膨らむ。ルシヤナだけではない。自分を見つめる六つの瞳すべてが、同じことを考えているようだ。

(あたしだってそう思うよ……)

聞かされたときは、一日どこで何をしていたか覚えていないくらいシヨックを受けた。仲間たちの反応も仕方ない。

(やっぱりみんな動揺してる)

でも今は、少なくとも皆よりこの任務の意味を理解している。リキアで何をしなければならぬか、アルマと話して自分なりに少しは前を向いたはずだ。リーダーとして、彼女たちに前を向いてもらうために引つ張らねば。

シャニーは両手を広げながらパッと笑って見せた。

「大丈夫だつて！ リキアも良いところだよ。ほら、張り切つてがんばろ！」

沈み込んだ朝の稽古場に響く爽やかな声。だけどそれは、仲間たちに笑顔を取り戻すことはなかった。

「リーダー、無理しなくていいよ」

すぐにルシヤナが止めた。大丈夫……そう言い返すより先に彼女は続けてきた。

「もう10年以上の付き合いなんだからさ。励ましてくれるのは嬉しいけど、あんたがボロボロになるのは、もう見たくないよ」

こう言われてしまうと、なにも言えなかった。どうしても笑った顔が萎んで引きつってしまふ。

「そんなの出向してまでやることじゃないじゃん。数日で終わるでしょ」

ルシヤナに何も言い返せずに、視線を逸らし黙ってしまった。こういう場面になにか気の利いたことを言えればいいが、自分だって最初に辞令を受け取ったときは同じことを考えた。

広がっていく動揺を止められなくて、ただ自身の無力と罪悪感が心の中に押し広がつて突き破ってくる。

「シ、シャニー……これってやっぱり……」

嘘と言ってくれと言わんばかりに見つめてくるミリアは、途中まで口にしてそれ以上を嚙んでいる。

違うと言つてあげたい。何とか言葉を絞ろうとした唇を噛んで、表情を悟られまいと必死に顔を逸らす。出てこない。否定したいはずなのに、なにも出てこない。

「ん、左遷だね」

おまけに、必死に避けてきたその言葉を、レンがきっぱり言い切つてしまった。

分かっていた。イリア外の連絡所への移動人事が、明確な左遷だということ。ただただ、信じたくないだけで。

ぐつと奥歯を噛みこんで、目をぎゅつと閉じてももう堪えきれない。

腹の中に溜まった黒く、絡みついて膨らむ罪悪感を吐き出すように、シャニーはテーブルに手をつけて頭を下げた。

「みんな、ごめん!! 会議で企画のアピールが足らなかったのかも知れない。あたしが、イドウヴァさんに評価してもらえなくてこんなことに!」

まさか、仲間にも被害が及ぶとは思ってもいなかった。

団長選出戦での棄権以降も、事ある毎にイドウヴァとは対立してきた。だけどそれは、イリアの人々のためと思つて戦つてきたからに他ならない。

間違っていたとは思っていない。だけど……突きつけられている現実、今までの行動の結果だ。

「シャニー、違う」

駆け寄ってきたレンに両手を取られた。頭を上げた先に見えたのは、いつもとは別人のような強い瞳。

「謝つて欲しくない。今までの私たちを否定することになる」

今までの自分たちは嘘か? そう問われ自然とここまでの軌跡が

頭を走る。

必死に戦ってきた。イリアにたくさんの軌跡を残して、人々と絆を繋ぎ、イリア連合からも評価してもらえた。否定なんか、したくない。「先頭を走ってきたシャニーを信じて、ここまで来た。盲目についてきたわけじゃない」

「そうツスよ！ これは十八部隊の問題ツス！」

やり場のない怒りを払うように、レンに続いたミリアが振り下ろした両拳で思い切り空を裂いた。それだけでは収まらないのか、傍にあつた道具入れを、足が天を向く勢いで蹴り上げている。短気な奴だが、こんなに怒りをぶちまけるのは初めて見た。

彼女は入団してすぐから慕ってくれていた。あの怒りは、きつと左遷に對してだけではない。

「全く、バカ考えないでよね。今回はミリアに賛成だよ。あんたは悪くない」

ルシヤナは肩を抱き込んで、しっかりと何度か揺すってくる。お前は悪くない——そう言ってもらえることが、どれだけ傷ついた心を癒すだろうか。

必死に堪えて前を向こうとしていたが、どうしてもダメだった。腹がびくつと引きつったかと思うと、喉が震えて声が漏れてしまう。崩れる顔を隠してうつむくと、ぽろぽろと悔しさが玉となって零れ落ちていった。

「へへっ……あたしの誕生日だったんだよ……昨日。とんだサプライズだよ……」

とんでもない辞令を、おまけにたった一枚の紙切れで。

一度は前を向いたつもりだった。でも、自分の手から全てを奪われた気がして、しばらく涙をすすり嗚咽を堪えるしかできなかった。

リキアで手柄を残せとアルマは言ったが、いったいリキアで何をすればいいのか、さっぱり見当がつかない。

「せっかくケーキ買って待ってたのに、帰ってこないから！」

ミリアの言葉に、涙に濡れていた心が少しだけ救われた気がする。仲間たちは忘れていなかった。皆に祝ってもらいながらケーキを頬

張っていられたら、どれだけ幸せだっただろう。

湧きあがるのは、申し訳ない気持ちばかり。

「ありがとう。だって……みんなにどうやって言えばいいか、分からなくてさ」

最初から、昨日のうちからこうして素直に言えば良かった。結局、よけいな心配をかけただけ。ロイやデイークのように、逆境でも仲間を鼓舞する一言を放ち、どんどん切り拓いて行ける人に憧れる。

「あんたはいつもこうだ。大して強くも無いのに、リーダーだからって勝手に独りで背負おうとしちゃってさ」

お前は違う——ルシヤナにそうはつきり言われてしまった。彼女は両手を広げながら続けた。「ハッ、人事が怖くて叙任騎士なんてやってられないでしょ」

豪胆に笑うルシヤナは、啖呵を切った勢いそのままバンバン肩を叩いてくる。

「あんたが気負うことじゃないよ。少なくとも、私はあんたのそんな顔は見たくない」

「ん、らしくない」

ルシヤナにレンが続き、ミアも何度も頷いている。

憧れの人たちみたいないな強さはない。けれど、信じてくれる仲間たちを裏切れない。彼らはもう前を向いている。自分より遥かに覚悟を決めている気がした。

（そうだ。こんな顔してちゃダメだよ。イリアに必要なことなんだ）

仲間に勇気づけられて、シヤニーははつと我に返っていた。前を向かなければ、なにも見えてこない。それを今まで学んできたはずだ。

外の世界を見ることだって、大事なはず。そう自身に言い聞かせ、シヤニーはもう一度顔を上げて笑って見せた。

「へへっ、あたしらしくなかったね。ありがと、みんな」

凍りついた場に、ようやく少しだけ明るさが戻った気がしたが、それは束の間のこと。

やはり、みんな不安な顔のまま。無理もないかもしれない。ただで

さえ左遷という現実が突き刺さり、見習い修行で赴いたルシヤナ以外は、リキアを知らないのだ。

それでも、ミリアとレンの間に入って二人の肩を抱きこんだ。一度前を向くと決めたら、もう後は進んでいくだけだ。

「心配ないって！ 少し遠回りだけど、イリアのために必要なことだしね！ ほら、笑って、笑って」

精いっぱい明るい声を出してみたが、沈んだ場に少しは新しい風を吹き込めただろうか。

そのまま壁を指さした。そこには、つい先週決めて飾ったスローガンが貼ってある。

—— 笑って、前向いて、未来を切り拓こう！

十八部隊は皆で守り、皆で行く先を決める。自分一人で決めてはいけない。一緒に前を向けば、きつとなにか見える。仲間たちに思い出させてもらった。

「今回は三月のときみたいにはいかないんスカね」

やはり皆もまだ諦めがつかないようだ。部隊の解体を阻止したように、今回も……そう言ってくれたミリアに、静かに首を振った。

「アルマに止められちゃったんだ。思うツボだから短気を起こすなつて」

あのととき、アルマが来てくれなかったらどうなっていたかと思うと震えが来た。あのまま打ち捨てられた城の端で、思考を停止したまま凍りついていたか、激情に駆られて団長の下へ刃を掲げて飛び出して、今頃天馬騎士でなくなっていた……いずれにしても、この場にはいなかったに違いない。

「あのクソババ、まだ私たちに恨みでもあんのかね。マジでムカつく！」

しゅんとするミリアを跳ね飛ばす勢いで、ルシヤナが火を噴いている。

部隊長でなければ、そうだそうだと相槌を打ちたいところ。受けた屈辱は今もくつきりと脳裏に焼き付いていた。でも、今はそんなことより大事なことがあるはず。とにかく、前を向かなければ。

「身分剥奪になったら……みんなを裏切ることになるからさ。リキアで活躍して、ぎやふんと言わせてやろうよ！」

屈したつもりなどない。

必ずここに返ってきて、背負った信との約束を必ず果たす。だから今は、できることを果たそうと決めただけだ。

まっすぐ前を見据えて、仲間たちをぐるっと見つめる。

真っ先にうなずいたのはルシヤナだった。ふうっと大きく息を吐きだして気持ちを切り替えたのかと思っただが、再び口を尖らせている。

「アルマって本気で副団長になったんでしょ？ アイツ、やっぱクソババの腰巾着なの？ 人事権もってるよね、アイツ」

アルマを疑っているのだろうか。ルシヤナの顔に浮かぶ怒りの矛先が、アルマに向いている気がした。

「アルマは……最善を尽くしてくれた。アルマが動いてくれなかったら、あたしたち、西方三島だったんだ」

西方……それを教えた途端、ルシヤナの目がぎよつとして、すぐに困惑へと変わった視線が返ってきた。

「アルマを信じるよ、あたし。時を見て戻してくれるって」

自分の立場を危険に晒してまで守ってくれた親友を裏切るわけにはいかない。彼女のためにも、なにも分からないからと踏み込まずに泣いていられない。

死にかけていた青の瞳に再び焔が宿る。

（まだ……後悔するときじゃなかったよ。やれるだけやってからすればいい）

アルマは手柄を残せと言った。未だに、リキアで何ができるのかは分からないまま。

だけど、歩きながら考えればいい。決まったのなら、前を向いて、力の限り飛んでいだけ。そう決めた。

「だからほら、前を向いて笑って、まずは一步踏み出そうよ！」

目の前のやれることを一つずつ、小さなことを一つずつ。十八部隊が積み重ねてきたことを、リキアでもやるだけ。

ぱつと手を突き上げ、一步踏み出した顔に降り注ぐ陽が眩しい。なんと爽やかな朝だろう。

「じゃあまずはケーキで誕生日をお祝いするツス！」

そう音頭を取るミリアに手を取られ、シャニーは出口へと向かう。ひとまず、みんな前を向いてくれたのだろうか。まだ朝だと言うのに、なんだか一日分の仕事が終わったかのようにほっとした。

「はー、気合入れたらお腹空いちやっただよー」

朝っぱらから頭を使ったし、セチの力も使って、もうお腹ペコペコだ。

朝からケーキとは何て贅沢と、ミリアやレンに手を引かれるまま歩いていこうとするとルシャナに呼び止められた。

「シャニー、全部あんたが背負う必要はないんだよ。一緒に頑張っていこうよ」

「うん！ みんなで見つけていこう。リキアでできること！」

今回も仲間の温もりに助けられた。仲間がいるから、何度折られても立ち上がれる。

親指を立て、白い歯映える顔に弾けたのは、透き通る春風のような爽やかさだった。

もう、届かない

(一体……ここはどこ？ ああ……迷路だわ)

どちらを見ても、清楚で絢爛豪華な造りの部屋が左右に続く廊下。あまりの広さに吸い込まれそう。

くらくらする視界に広がる煌びやかな間が、屋敷のどこにあるもので、誰の部屋かもまるで分からない。こんなおろおろした足取りで、きよろきよろして、変質者でも思われたらどうしようか。

ここはエトルリア王国のリグレ公爵家の邸宅。邸宅と言っても、もはや城同然の広大な屋敷は、まだ身を寄せて二週間のテイトにとって迷宮だった。

さつき別れた夫の妹君からしつかり教えてもらったはずなのに、最初の目印さえ見つけられない。

「ふう……。クラリーネ様はやっぱり凄いわ……」

朝からふらふらと迷子になっていたらクラリーネに捕まった。彼女は気を遣ってくれたのか、レデイのたしなみを延々教えてくれるので、それをメモするのに必死だった手はへろへろだ。

そこからようやく解放されたのだが、それはまた迷子に戻っただけ。頭も足もふらふらしてきて、一気に心細さが襲ってくる。

「どうした、テイト」

弱った心がきゅんとして振り返る。視界の先にいた男性を見つけると、ぱつと安堵が心に広がった。

声の主、クレインのもとへ歩いていくと、彼は優しく微笑んで手を取ってくれた。

「また迷子になっていたのかい？ 大分背中が疲れてるように見えたけど」

「あ……。いえ、まだ大丈夫です」

こうしてクレインに探し出してもらい、手を取って部屋まで帰る……これが日課。彼が公務で屋敷を空ける日は朝から落ち着かない。幸い、クレインの家族も良い人で、助けてくれるのでなんとかなっている。

「クラリーネ様に色々教えていただきました」

噂に聞いていたとおり……以上、か。とにかく強烈な人だった。

あれこれと面倒を見てくれるのは嬉しいのだが、会話は完全に彼女のペース。ぐいぐい引つ張られて、まるで頭に入らない。無限トークはシャニーで聞きなれていたはずだったが、彼女がそよ風に思えるほど、クラリーネのそれはガンガン来る雷撃のようで圧倒されるばかりだった。

「へえ……。……タイトって案外タフなんだな」

「？ タフ……。？」

「あつ、えつと、いや！ 何でもないさ」

珍しくクレインが慌てている。クラリーネが繰りだす怒涛の愛情表現をいつも冷静に受け止めている彼が慌てる姿は、なんだかほっこりする。

「きつとおせっかいの嵐にもみくちやにされたんじゃないかなって。クラリーネは色々と君を心配しているんだ。悪く思わないでくれ」

「悪くだなんてそんな！ 何とお礼を申し上げればよいか、感謝の言葉もありません。私のような傭兵上がりを」

3月まで軍服と鎧で固め、槍を片手に天馬であちこち駆けていた身。それがいきなり、エトルリア貴族という高貴の最高峰へぽんと入って、右も左もまるで分からない。なにが失礼なのかも手探りで、クレインがいてくれないとろくに身動きが取れない。とは言え、彼も多忙であまり甘えてもおれず、正直、不安な毎日だった。

それを見かねたのか、クラリーネが顔を合わせる度、こうして色々教えてくれるから本当にありがたいものだ。当然、毎日体力は底をつくけれど。

感謝を口にしたはずなのだが、クレインは肩を抱き寄せて小言した。

「タイト、傭兵上がりなんて言っては駄目だ。君はもう、リグレ公爵家の家族なんだ」

「ごめんなさい。同じことでクラリーネ様からもご指摘を受けたのでした」

——自分で自分の価値を落とすようなことを言ってはダメですわよ！

今もあの気の強い声が、頭の中でキンキンと響いて叱られているようだ。

いまだに、どこか夢を見ているようで、心細さに思わず手を胸元で握っていた。傭兵だったイリアの村娘が、こんな貴族の世界に身を置いているなんて。

それでも、自身を包むドレスや、目の前で優しく微笑んでくれる夫の眼差しが教えてくれる。これは、現実なのだ。

「クラリーネが君に懐いてくれて良かったよ。……もつと噛みつくかと思っただけ」

「か、噛む……?!」

「あー、えつと、たとえ話だよ。気にしないで。マイルドになった方だから」

黙っておいた。さつきも武勇伝を聞いたばかりだ。言い寄る女性が現れるたび撃退したと彼女は誇らし気に教えてくれた。「お兄様をお守りしたのです！」と語気強く言っ。一歩間違えていたら、噛まれて“いたのだろうか。

今さらながら、仲良くなれたようでよかった。もちろん、これでもマイルドだとはゾツとするけれど。

「分からない事だらけで辛いだろう。いつでも私やクラリーネを頼ってくれ」

「ありがとうございます。クレイン。みんな優しい人ばかりで安心してます」

皆、聡明で温かい人たちばかり。嫁ぐ前に覚悟していたような厳しい扱いを受けることもなく、不思議な感覚だった。3月までは彼らの前で膝を突いて、その命を聞いて戦場へ飛んでいく身だったのに。

初日はどう接して良いか分からず、ついつい天馬騎士団時代と同じようにして頭を下げたら、目を点にしてクレインの父パントに笑われたくらいだ。

(なんとかやって行けるように頑張らないと……)

まだまだ、嫁いで二週間余り。まずはなにか始めればいだろう

か。人の名前を憶えて、屋敷のつくりを覚えて……——最初はクラリーネについて行ける体力作りからか。



今日は奇跡的にも、あまり迷わずにクレインの書齋まで辿り着けた。部屋に入ると彼は机に向かっており仕事中的ようだ。たくさん書類に囲まれ、手に取った資料を見下ろしている。

「やあ、タイト。そのドレス、似合っているよ」

「あ……—ありがとう」

仕事中は声をかけないでおこうと思ったら、彼からかけてくれた。忙しそうでもどこか楽しげで、包むオーラは柔らかく温かい。

「なにか良いことでもあったの?」

「良いこと? はは、そうだな。君が傍にいてくれることかな」

「……ごめんなさい。迷子になってばかりで」

とつさに謝ったら、クレインは笑って返してきた。

「違うよ。タイトがエトルリアに来てくれたおかげで、だいぶ心に余裕が出来るようになったんだ」

心がすつと引き寄せられるよう。彼はプロポーズのときも、支えて欲しいと言っていた。うまくやれている自信はまだ無いが、彼がこう言ってくれるならそれでいい。

お茶を淹れてあげようとティーカップを準備していたときだった。

「クレイン様、お手紙が届いております」

「ああ、ありがとう。目を通すから置いておいてくれ」

執事が手紙を持ってきた。クレイン宛のようだ。彼は忙しいのかしばらく手紙へ目を向けていなかったが、ふと見下ろした彼は「おやっ」と零し、驚いたような顔で手招きし始めた。

「タイト、君宛のようだよ?」

天馬騎士団の団長だったときは、毎日届く手紙の山にうんざりしたものだ、エトルリアに嫁いだ身となってからは初めてだった。一体誰からだろうか……。

(シャニーからかしら。元気にしていると良いのだけど)

絶対に手紙を書く妹は言っていたし、こちらからは無事に着いたと便りを出したから、彼女からかもしれない。

クレインから封書を受け取り、宛名を見るより先に目につく刻印。残念ながら違うらしい。

「天馬騎士団からだわ。なにかしら」

きちんとした紙質の手紙に刻印された天馬をあしらった紋章は見慣れたものだ。

なにか手続きが必要な書類でも入っているのだろうか。クレインから紙はさみを借り、すぐに開けて中身を確認する。

「職制表……。ああ、そう言えば、この時期は営業先に展開してたわね」

なんだか違う世界の人にでもなってしまったかのように、去年まで当たり前になしていたことを忘れてしまっていた。いや、受け取る側になったことなど初めてだから仕方ないか。

あらためて、彼らを雇う側にまわったと思うと、なんだかむず痒い。

(いえ……。なぜ私宛なのかしら……)

職制表は営業先に出すもの。リグレ公爵家にむけてなら、パントかクレイン宛となるのが一般的と言える。

とは言え、元関係者ならパイプと見ているのも不思議ではない。それ以上の詮索はやめて資料に目を落とす。

(エトルリアは団長の管轄だから、今はイドウヴァさんか……)

じゃありキアは……。そうして少しずつ、頂の団長から職制表に目を下ろしていったときだった。

「あら……。……。えっ?!」

あるはずのものが無い。かつて自分で作っていたそれを、見間違えるはずなどあるわけがない。

(第十八部隊は……。? シヤニーはどこ?!)

3月から踏襲していれば、職制表の右下、団長から直接に指揮系統が走る特殊任務枠に第十八部隊はいたはずだ。手元にある職制表は、その場所がやたらとスカスカで、目当ての名前はどこにもない。

震える視線は瞬きもせず、職制表の中で左右する。

(!! う、うそ……)

ついに見つけてしまった妹の名前。それがある場所は、にわかには信じられない。もう一度名前と場所を確認する。やはり……何度も見ても同じ。

あまりのことで声は何も出てこない。ただ、手紙を持つ手が震えて、視界が一点を串刺しにするばかり。

「どうした？ テイト……テイト??」

クレインが気づいたらしい。ソファに身を預けていたはずの彼に顔を覗き込んで声をかけられたが、金縛りでも受けたように動けなかった。

「シャニー……ぐめんなさい。こんなことになるなんて……」

妹を守ってやれなくなる不安はあった。イドウヴァを信用していたのに。退団の際にもあらためて念を押して、あの人だって口にしていただ。去年の件はもう二人で話し合って、遺恨なく終わったと。それが口だけだったことを、目の前に突き付けられた事実がはつきり示してくる。

(まさか……まさか、こんな仕打ちをするなんて……)

ただただ、妹への侘びの言葉ばかりが頭の中に溢れかえり、口から零れていく。

「ちよつと見せてくれ。シャニーさんがどうしたんだ?」

心配してくれたのかクレインが肩をしつかりと包んでくれた。彼は手から滑り落ちかけている職制表を拾い上げ、じつと中を見ている。すぐにシャニーの名前を探し当てたらしく、彼の眉間に困惑が浮かぶ。

「これは……。シャニーさんは、国力向上の専門部隊を預かっていたのではなかったか?」

シャニーの名前は資料の右端から一気に組織の中心を跳び越えて、左端の外向枠へと飛ばされていた。

「ええ。あの子はイリア民の希望になった。それが……。どうして……」

多くの民の声を騎士団が進める事業へ反映した功績は、勲章だけで

はなく無数の嘆願書となって積み上がっていた。あれを見て、どうしてこんな人事を発令したのか、何も分からない。

ただ、この人事を受け取った妹がどんな気持ちになったかを考えると、心を引裂かれそうで、心の中に湧きあがる感情が何なのかさえ、分からなくなりそうだった。

悲しみ、怒り、悔しさに虚しさ……溢れる涙を拭うしかできない。きつと妹も、同じように泣いているに違いなかった。

「理由は分からない。しかし、リキアにはロイ殿がいる。力になってくれるだろう」

彼なら、友が困っているのなら、なにをするにしても手を差し伸べてくれるはず。そうクレインは慰めてくれているのだろう。

たしかに、シャニーは彼と交友があるらしい。それでも、クレインが言うようになるとは思えなかった。

(あの子は恐らく、ロイ様には頼らない)

直観が走る。クレインと違い、リキアへの異動がなにを意味しているか知っているからこそ、こんなに絶望が心を蝕む。

とは言え、おそらくリキアには彼しか味方になるような者はいない。あの地は、今まで第二部隊長としてイドウヴァが牛耳ってきた場所だ。

シャニーはロイと文通しているからいざれ彼も知るだろう。なんとか、クレインの言う通りになってくれないか、祈るばかり。

(あの子に……よくもこんな仕打ちを……)

手元に残された封筒に刻印された紋章をじつと睨む。そこに記された筆頭騎士の名前を、思わず破り捨てようとしたときだった。

「あら、なにか手紙が入っているわ」

カサカサと封筒の中から音がする。覗き込んでみると、封筒の中にさらに封筒が入っていて、中を開けると手紙が入っていた。

差出人は……封筒を裏返してみるとすぐ目に飛び込んでくる、力強い筆跡で大きく記された名前。

——天馬騎士団 筆頭天馬騎士補佐 アルマ
目を見開いて封筒の中にあつた手紙を開く。

——前団長、申し訳ありません。あいつに力を貸してやってください。私も可能な限り動きますので、どうか
たったそれだけしか記されていなかったが、それを両手で抱きしめた。

まだ騎士団の中に、妹に味方する者がいる。それが分かっただけでも救われた気持ちになった。

彼女は3月にも助けてくれたとシャニーから聞いていた。第一部隊に編入を求めてきたときは正気を疑ったが、こうして何度も妹を救おうとしてくれ、その窓口は自分だと声をかけてくれる心配りには感謝しかなかった。

「大丈夫か？　この感じだと、団長の独断のようだが」

クレインが困惑を口にする。第三者からすれば、これは異常としか映らないのだろう。いくら前団長だからと言って、部外者にこんなことを騎士団のナンバー2が秘密裏に送って来るのだから。

「妹のことは心配ですが、もう私はリグレ公爵家の者。手出しはできません……」

アルマの気持ちはありがたいが、もどかしさに身が震える。

もはやイリア騎士ではなくなった今では、どれだけ妹を心配しても、もう彼女に手は届かない。エトルリアから声を発すれば、それは内政干渉でしかなく、また別の火種となりかねない。

（一体どうすれば良いの……私に出来ること……なにがある？　シャニー……）

今ごろ妹はなにを思い、どんな顔をしているのか。そればかりが思い浮かぶ。

——お姉ちゃんの意志を継いで戦い続けるから、エトルリアから応援してよ。必ず、イリアに春を呼び寄せるから

妹はそう言ってくれた。その志を折られた彼女がどんな顔をしているか。心配で、虚しくて、悲しくて、今すぐにも傍に行つて抱きしめてあげたいのに、それが叶わない。

がつくりと首が折れるのを堪えきれずうな垂れた。溢れる涙が止まらない。

「テイト、協力できることはなんでもしよう。私にとっても義妹だ」
その気持ちをしっかりと抱きこんで、クレインが力強く励ましてくれた。考えれば、きつとやれることはたくさんあるはずだと言って。

しばらく彼の腕の中で震えるしかできなかつたが、己を律して顔を上げた。

(あの子はなにがあっても……守ってあげなければ)

一番苦しい思いをしているのは妹だ。彼女より先に前を向いて、受け止めてやらなければならぬまい。そう決意して、クレインの手を取った。

「ありがとう、クレイン。そのときはお願いします」

リグレ公爵家に、自分の家族のこと、そして故郷のことで世話をかけるのは気が引ける。

だが、クレインも、その家族も心から迎え入れてくれている。今頼れるのは彼らだけ。自身も公爵家の人間として凜と立ち、まっすぐ前を向いて貴族の義務を果たす覚悟を決めるのだった。

どこにいたって

ふんふんとシャニーの小気味よい鼻歌が厩舎から聞こえてくる。

窓から差し込んだ朝陽が顔を照らし始めると、相棒のブラッシングをしていた彼女は眩しさに空を見上げ、その目元は嬉しそうに緩む。

「今日も良い天気だねー。どこでも飛んでいけそうだね!」

相棒へ話しかけながら鼻歌をうたい、青のショートレイヤーをリズムよく左右に揺らしてニコニコとご機嫌。

天気が良いだけで気持ち明るくなるというもの。思い切り伸びしながら黄金色の光を見つめっていると、目がハキッと冴えて体の隅々まで力が漲ってくるよう。がぜん相棒の手入れにも気合が入るというもの。

しばらくブラッシングを続けていると、外で天馬の羽音が聞こえてきた。

「おっ、おっはよー!」

扉が開く音に振り向き、入ってくる親友へ大きく手を振る。やつぱり今日も二番はルシヤナだ。今日の彼女は昨日みたいに角が生えておらず、嬉しそうなトーンで返ってきた。

「もう完全復活みたいだね。やつぱり、こうじゃないと調子が狂っちゃうよ」

心配させてしまったようだ。朝日のように湧きあがる活力に、踊るように小気味よく全身を揺らして見せる。

「だって、もう決まったことだし。リキアになにがあるかも分かんないし、行ってから考えよーって」

「極端なヤツだなー……」

「えへへ、ごめんね。部隊長なのにさ」

心配して損したとでも言いたげな顔で、ルシヤナが苦笑いし始めた。

期待に応えられたようでないによりだ。悩んでどうにかなるならいくらでも悩むが、今しか出来ないことはたくさんある。そう思い出させてもらった。

ブラッシングにキリがつくのを待ってもらい、二人で詰所へと歩いていく。

詰所にはミリアやレンがいて、彼女達も机の整理に追われている。ただでさえ汚い詰所のあちこちに、バリケードのように見通せないほど積まれていて足の踏み場に困る。

「辞令って、たしか昨日付けだよな？」

「そーだよ。おかげで昨日も帰ってから大忙しでさー」

心配になったのか、ルシヤナの確認が飛んできた。

結局、出国の手続きやら資料の作成やらで、なにも出来ないまま昨日が終わってしまったから無理もない。

半身になったシャニーは横目でルシヤナに答えながら、荷物の間へするすると細い体を差しこむようにして机まで辿り着く。

念のため、机の中にしまい込んだ辞令を取り出してみるが、やっぱり昨日付けの辞令だった。色々やらないといけないことが頭を駆け巡る。荷造りをしないとにも整理できていないし、家の管理だって誰かに頼まないといけない。

「じゃあ、明日出発！……なんて言わないよね」

考えに耽っていたらルシヤナの声に突っつかれた。どうにも怪しむような口調。振り向けばミリア達もこちらを見て、どこか心配そう。

「え？ なに言ってるのさ！ 叙任騎士たるもの、辞令が出る以上は今日にでも——」

「あー……。そういう言い方するなら大丈夫そうだね」

ちよつとイタズラしてやろうと思つたのに、ルシヤナはノリが悪い。ミリアたちなんか本気でホツとしたような顔をしているし。一体どう思われているのか、複雑だ。

「ちえ。ホントはね、準備期間を数日もらったから、まだへーき」

思わず誰もがほつと胸を撫で下ろしている中、シャニーは相変わらず鼻で歌いながら机の引き出しを引っ張り出す。

「うへっ、なにそれ。ゴミ箱？」

中を覗いたルシヤナが、害虫でも見つけたような悲鳴にも似た声を

上げた。

「しつれーだな！」

「いやだつて……資料が泳いでるじゃん」

確認するようにもう一度見下ろしてルシヤナの目元が歪む。

「別にいーじやん。どこになにかあるか分かればへーきじやん？」

「ホント、片付けできないヤツだよねえ。なんでそれで分かるのか不思議だよ」

ルシヤナが毒づく前で、手際よく荷造りして見せてやる。別に片付いていないワケではない。自分が使いやすいようにしているだけ。むしろカチツとしてあると、むずむずしてやりにくい。

それなのに、「あんたさ……」そうルシヤナが呼んで続けてきた。

「自室だからつて下着一枚とかやめてよ。リキアは都会だからね」

「わつ、分かっているもん！ あたしだつてリキアは詳しいんだから！」
なんだか今日のルシヤナはやたら説教臭い。即反論したら、彼女はこれでもかと横目で見下ろして物言いたげ。いくらなんでも、そんな騎士団の評判を落とすようなことをするはずないじゃないか。郷に入っては郷に従えというヤツだ。

「出発まで時間あるしき、今日はみんなのところに、ちよつとお留守にするねつて挨拶しに行こうよ」

ある程度機の整理を終えて、パンパンと手を叩きながらシヤニーは仲間たちに呼びかけた。

本当なら明日にでもリキアへ飛んで行きたいところだけど、今までたくさんお世話になった人達に、なにも言わずに去るなんて出来るわけがない。皆とこんな形で顔を合わせるの辛い、信に対しての礼儀と言えるだろう。それが通すべき筋——流儀だ。

「今日一日で周るんすか？ 大変だ」

自分で言っておきながら、ミリアに問われ、顎に手を置いてあれこれ計算を巡らせてみた。

いくら天馬がスピードに優れていたつて、広大なイリアのあちこちを回るだけでも時間はかなり要る。ゆっくり皆と話をしている時間はきつと無い。

こうしている時間も惜しい。机へ前のめりになって手を天井に突き上げる。

「よし、レン、イリア一周旅行だよ！ できるだけ、たつくさん周ろう」

「イエス、リーダー」

再び整理に慌ただしくなる詰所。シャニーも再び荷物整理に戻りかけたが、その手はすぐに止まった。

（みんな、なんて言うだろうな。がっかりさせちゃうだろうな……）

窓辺に身を移して空を見上げる。失望する顔が思い浮かんで、崩れそうになる顔を両手できゅっと整えた。今日行けない分を明日に回すとしても、もらった準備期間はたった2、3日。

（みんなにちゃんと説明しないとね。あたしたちは大きくなってちゃんと帰って来るって）

もう、決まったことだ。くよくよしていても仕方ない。

ぐっと握る拳で自身を鼓舞すると、整理に苦戦する仲間たちのもとへと戻っていった。



青髪や空色のマントを風になびかせながら、シャニーはレンから飛んでくる指示どおりに先頭を飛んでいた。

春らしく空は高く澄んで、天馬で切る風が頬をなぞって心地よい。目の前には広大な山々と淡い空が果てしなく続き、眼下には白と緑のじゆうたんが陽に輝いて眩しい。

「イリアの空をこうして飛べるのも最後かあ」

思わずぼろっと零してしまった。まさか、当たり前にあった故郷の空と山を見れなくなる日が来るなんて夢にも思っていなかった。口にする余計に寂しくて、焼き付けるように高い空を見つめる。

（みんなを守ってあげられないなんて……天馬騎士じゃなくなるみたい）

独りで風の声を聞いていると、どくどく悲しい気持ちが湧きあがってくる。

これはイリアに必要なことだと何度自身に言い聞かせても、やつぱり今が大事だ。大切な人たちになにもしてあげられなくなると思うと心配で仕方なく、いつの間にか唇を噛み、握りしめる手綱がぎりつと音を立てた。

(守ってくれなかったら……容赦しないんだから！)

自分たちをイリアから放り出した張本人……イドウヴァの顔が思い浮かんだ。空の果てを見つめて紛らわそうとしても、激情が燃えあがってくる。

いけないとは分かっている。だけど、もう我慢の限界なんてとつくに超えていた。どうしても顔が険しくなるが、何度も首を振ってその気持ちを支う。今から会いに行く人たちに、こんな顔は見せたくなかった。

村に着いてさっそく村長の家を目指す。彼は家の前で雪かきをしていた。

「おお、今日も朝早いね。お疲れさん」

シャニーたちの姿を見つけてすぐ、笑みと共に優しい口調で労ってくれた村長だが、顔は少し驚いているように見えた。無理もないかもしれない。こんな朝一にフルスピードを飛ばして来たことなど今までなかった。

(この顔を見られるのも最後か……)

そう思うと、腹から出る声も自然に大きくなった。

「おはようございまーす！ お変わりありませんか？」

一年前は天馬騎士団と聞いただけで、売国奴に用は無いと青筋を立てて怒鳴ってきた人だ。

怒鳴られても、怒鳴られても悩みに寄り添い、夢を語り続けてようやく掴んだ信頼。こんな優しい顔をしてくれるようになったというのに、どんな反応が返ってくるかと思うと辛い。

「ああ。君たちが来てくれると元気が出るよ。いい笑顔だ」

「そう言ってもらえると嬉しいなあ。えへっ、ありがとう」

村長は目袋を綻ばせている。元気が出ると言ってくれる。それだ

けで部隊の存在価値を教えてくれた。

あれだけ厳しかった村長からももらえる言葉は、暖炉のように温かい。自分たちがしてきたことは、やっぱり間違いないかではなく、あんな辞令を受ける理由なんてないと勇気づけられ心が救われた。

(喜んでくれるなら、ずっとこうしていたいよ……)

彼らが喜ぶなら、いくらでも傍で笑ってあげていたい。そのささやかな望みさえも今は奪われている。だからこそ、許される内はしっかりと前だけ向いて、笑顔で感謝を伝えるのが使命と言える。

「この前の嘆願書、ありがとうございます」

感謝したいことは山ほどある。出向以前に、この人たちが動いてくれなかったら、十八部隊は冬の終わりと共に露と消えていた。彼らを守りたいとずっと戦ってきたつもりだが、なんだかずっと、それ以上に守られてきた気がする。

「なんの、当然のことだよ。いつも守ってもらっているのだからね」
希望を守るためなら共に戦う。そう村長は約束し、本当に動いてくれた。

皆に支えてもらって、十八部隊はここまで来た。せつかく彼らは自分たちを信じて、動いてくれたと言うのに。その顔が目の前にあると、膨れ上がってくるのは申し訳ない気持ちばかり。

(あんなに支えてもらったのに……ホントにごめんなさい)

心の中で侘びの言葉を繰り返すが、いつまでもそればかりではない。切り出すのは辛い、このために来た。時間も押している……。

ぎゅっと握った胸元のロケットで自身を律すると、一度振り向いて仲間たちに合図し、ついに踏み出す。どうやって伝えようか……もうそんなことを考えるのは止めた。

「実はね、あたしたち、リキアでお仕事することになっちゃったの」
清々しい朝を包んだ、凍り付くような時間。色も、音も、なにもかもが止まったかのよう。風の吹き抜ける声だけが時を刻んでいき、嫌でも顔が引きつって固まっていく。

こんな反応をされるのは分かっていた。彼らの信を、裏切るような

話をすれば。

「な、なんだと……」

ようやくに止まった時を突き破ったのは村長の驚愕だった。

ふらついて顔を手で覆い、そのまま卒倒しかける村長に慌てて飛び出して皆で支える。

「なんでまた?!」

「リキアは復興が進んでるから、それを見て勉強して来いって」

こう言うしかなかった。たとえ左遷であったとしても、そんなことを言えば騎士団への不信感が広がってしまう。せつかく一年かけて築き上げてきたものを、団長にぶち壊されたくない。

しばらく村長は下を向いていたが、ふいに背を向けた。

「ちよつと待っていてくれ。みんなを集めてくる」

家の中で暖を取るように言つて、彼は小走りに村の中へと消えていく。

あんな顔をさせたくなかったのに、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。村長一人でもこんな気持ちになるのに、村中の顔を見たらシヤキツとしていられるだろうか。

「へへっ……。みんな、泣いちゃダメだからね」

振り返つて、仲間たちに笑いかける。

出発する前に決めてきた。最後は笑つて別れようと。これは永遠の別れじゃない。絶対に帰つて来ると伝えるための遠い約束だから、泣くときじゃないと皆で約束してきた。皆の瞳をぐるっと見つめて確かめ合う。

「シャニーが一番泣くと思う」

見渡した最後にぶつかつたレンの視線が、小さく笑つてそう返してきた。

「そんなこと……ないし。泣いたら昼ごはんオゴリだからね」

再び背を向けて涙を噉りながら、シャニーは村長が帰つて来るのを待った。



村人たちが続々集まってくる。

朝の忙しい時間だと言うのに、知っている顔が全部あって心が震え続けている。もっと静かに村を回るつもりだった。いつの間にか囲まれて、一人ひとりと握手をしながら別れの言葉をかけあう。

「そんな……いつ帰ってきてくれるんだ？」

すぐ戻ってくるよな？ ——そんな声が顔に浮かんでいて、思わず唇を噛んで息を止める。こうでもしないと、すぐにでも崩れてしまいそうだった。

こんなにも求めてくれていなのに、なにもしてあげられない、やり場のない悔しき。いつ……その答えを一番に知りたいのは、自分たちだった。こんな辞令、引き裂けるものなら引き裂いて、飛んで行ってしまいたいくらいなのに。

「ごめんね。あたしたちにも分からないんだ。でも、絶対帰って来るから」

彼らを安心させてあげたい。その一心でも、良い言葉が浮かんでこない。そのとき、横からハキとした声が寒空に響く。

「騎士団全体で今までの十八部隊の活動を継続していくから、安心してください」

ルシヤナが力強く声を張り上げるが、村人たちの顔に広がるのは不安ばかり。

仕方ないかもしれない。その状態が長く続いた結果、村々は放置されてきた。専門部隊として十八部隊が出来るまで。

ただ責任区をあいまいにするだけでは、以前に戻るだけ……どうして分かってくれないのだろう。無意識に団長を罵る。これがイリア民の気持ちなのだ、連れて来て見せてやりたいくらいだった。

（みんな不安そうな顔してる……あたしだってみんなと離れたくないよ）

一気に周りの雰囲気沈んできて、あたりを見渡してぎゅっと胸元のロケットを握る。安心させてあげなくては……その気持ちにすうっと大きく息を吸い込む。

「あたしたち、きつと成長して帰ってくるから！ 待ってて！」

腹から大きく決意を放ち、にこつと笑って村人たちを励ました。

どれだけ言葉で言っても、きつと不安に違いない。他の部隊はこぞつて、外征至上主義の下で外国に稼ぎに出て行く。いったい誰が彼らを守ってくれるのか不安なのは同じだ。

それなのに、こんなことしか言えないのが悔しい。今はただ、目に力を込めて泣かないでいるので精いっぱい。

そこへ、村人の一人がシャニーに歩み寄り、手を取った。

「シャニーちゃん、辛いだろうけれど、いつでも笑ってね」

(どうしよう……涙……出ちやいそう)

春と言ってもまだ肌寒いイリアの早朝。冷えた手先へ伝わる温もりに全身が包まれて、震える心を直に抱き締められたかのように力が抜けていく。

ずっと、ずっとこの温もりと共にありたい……。心からそう思わせしてくれる、目を閉じて身を預けたくなるような温もりだった。

「あなたの笑顔は、それだけで私たちの希望なのよ」

そこに添えられた、混じり気のない気持ち。村人は揺れる心を抱きしめてくれた。

テイトにも認めてもらえた。そして今、守りたいと思ってきた人たちにも言ってもらえた。どんな称号よりも尊く思える、明るく、温かい言葉。あらためて、守りたいと思う以上に、守られているのだと心に響き、包んでくれる。

(そんなに言ってもらえるなんて……嬉しい……嬉しいなあ……)

今まで、数え切れないほどの痛みや苦しみに耐え、血と涙を流しながら戦ってきた。膝を突いても立ち上がって、前を向き続けてきて良かったと思える瞬間だった。

一枚、一枚、人々が託してくれる希望の羽が、飛び出す翼となって勇気をくれる。

「希望かあ。へへっ、ありがとうおばちゃん」

もっともっと、頑張ろう。そう思わせてくれる温もり。その温もりを取り上げられ、これから遠ざかっていく一方の道へ進まねばならないと思うと、声が震えてくる。

「もう守ってあげられなくなるのは……悔しいよ……」

必死に凜と立とうとしても、泣き虫な自分は腹の中でもう震えていた。目に力を入れて唇をぎゅつと噛んでも、涙を堪える息遣いと揺れる瞳は、もう隠せる自信がない。

ついに崩れた瞳からはほろほろと悔しさが溢れて口も歪み、声を殺す腹の震えが全身に広がっていく。

「シャニー……泣かないって……約束したツスよ……」

ミリアにそう言われても、止められなかった。リーダーが泣いたらダメだと、ずつと心の中で言い続けていたのに。そのまま村人の胸に顔を埋めて、震える肩を抱きしめてもらっていた。

「どこにいても繋がっているから、みんなのために、リキアでもたくさん笑ってきてね」

絶望さえ奪われたと思っていた。だけど、村人たちが口々にかけてくれた言葉は教えてくれた。どこにいたって、信じる気持ちまで奪われることはないのだと。

信を託された者として、泥だらけになろうが、血まみれになろうとも、やり切ろうとする姿を見せ続けなければと、あらためて気づかされる。

(みんなこんなに励ましてくれる。希望か……そうならなきやね！)

左遷に打ちひしがれていた心は、守るべき者たちの気持ちをしっかりと受け取って再び前を向く。

皆が希望と言ってくれるなら、帰ってこられるまで、刃に信を掲げて戦い続けるだけ。

まず、今できることは――

「ありがとう！ たつくさん、笑ってきますー！」

村人の胸からそつと身を起こし、涙を袖で拭ってぽつと笑って見せる。

笑って周りを見渡したら、スツと体に力が湧き上がってくる気がした。手先にも足先にも広がる喜びは、きつと繋がっていると信じられるから。

「無茶だけはしないでね。元気で帰ってきて。それだけで、十分よ」

もう一度、シャニーの手を取った村人も優しく微笑む。

温もりを手に、耳に、瞳に、すべてで受け取ったシャニーの瞳には、普段の青が戻っていた。

「うん、任せて！ 離れてても、あたしたちは家族。きつと成長して恩返しするからね！」

彼らの信に応えるために、この左遷を意味あるものにしなければならぬ。

どうすれば良いかはまだ分からない。けれど、前を向き続ける姿勢だけは、絶対に崩さない。その決意をはつきりと口にする。

「みんな、いっぱい頑張って希望を繋ごう！ ゴー、ゴー、ゴー！」
掲げた声と共に、拳へ決意を乗せて青空へと突き上げる。

この手が握る剣には、すべてを薙ぐ絶対的な強さはない。でも、どれだけ折れても、膝を突いても、前を向いて掲げ続けることはできる。
(この剣を希望だと言ってくれる人たちがいるなら、それが、あたしたちの使命なんだ)

シャニーは仲間たちを見つめた。その瞳は朗らかながらも、決意を宿して青く澄む。

「イエス、リーダー！」

力強い声。志を仲間たちもきつと受け取ってくれた。

希望になる——その決意へ手を振ってくれる人たちに笑顔を返し、次の村に向け蒼天へと飛び出した。

ありがとう お姉ちゃん

今日はあいにくの雨。雨粒がしとしとと静かに花をなぞる。

雨の日でも、シャニーは朝から元気全開でじっとしていられない。早くから室内稽古場に明かりを点け、今日も黙々と剣を振るう。

型を確かめるようにゆっくりとしたテンポで振られる剣に激しさはない。軌跡を描く度に髪は静かに揺れて、空を裂く風も澄んだものの。

(リキアに行ったら何しよっかなあ。うーん)

少しずつ間隔が長くなっていく。

リキアなんて全く未知の世界。旅行ならともかく、仕事で定住となると、なにかから手を付けて良いのかまるでイメージが湧かない。

剣を振りながら考えれば良い案が浮かぶかと思っただが、残念ながらさっぱり。

その内、視線は剣から外れていく。

(移動の挨拶しなきゃいけないでしょ？ 営業早くできるようなしなきゃ)

まず、仕事自体があるのかさえよく分からなかった。

ようやく憧れの営業が出来ると言っても、リキアは第二部隊の担当地域だ。イドウヴァの息のかかった部隊が契約を持って行ってしまう中で、新規に開拓できる場所は果たしてあるのだろうか。

天井と睨めっこをしても、ちっとも答えなんか出てこない。

(どこらへんを拠点にしたら動きやすいかなあ。おうちと近い方がいいよね、連絡所。でもなあ、大都市は高いもんなあ……)

そもそも、連絡所自体だって自分たちで見繕う必要があった。連絡所勤務は今までずっと一名で、部隊で利用できるような広さではないらしい。

(むう……なんでき、傭兵騎士が連絡所の立地とか資金なんかで悩まなくちやいけないのさ)

羨む心に新天地での暮らしを思い浮かばせ、今は希望だけをまず挙げていくことにする。できれば、カルラエ城と自宅位の距離感だと、

朝困らなくて済む……そこまで考えて、剣がピタリと止まる。

(あれ……ってか、もしかして、まずおうち探さないとあたしたちって

……——野宿?!)

家がどこにあるのかと考えていったとき、さっぱりイメージが湧かないことに気づいてしまった。連絡所だって騎士団は面倒を見てくれないのに、家なんかもつとあるはずがない。

みるみるうちに顔が青ざめていき、あんどりと口が開いていく。

「そんなのイヤだああああ」

すると剣が手から抜け落ちてガシヤンと音を立てた瞬間、糸が切れたように情けない声が稽古場に響く。

打ち捨てられた街の隅っこ……いや、もしかしたら、どことも分からない森の木陰かも知れない。寒くひもじい思いに打ちひしがれながら、肩を寄せ合って眠る自分たちを想像したら、急に虚しく思えてきた。

へなへな両足をぺたんんと地面につけて、頭を抱えながら喚きだす。

「どうしたの、シャニー?!」

稽古場にルシヤナが飛び込んできた。彼女はなにやら慌てた様子で走ってくる。

よく分からないが、実に良いタイミングに映った。もしかして、困っているのを聞きつけてくれたのだろうか。彼女がいれば、苦手分野はパパッとやっつけてくれるに違いない。

「おっ、ヤッホー！ おはよ、ルシヤナ」

手を振りながら、ニカッと笑ってみせる。

ところが、いつもなら笑顔で返してくれるルシヤナは、急ブレーキをかけて今にも転びそう。心配になって声をかけようと思ったのに、彼女は怪訝な視線を送ってきた。

「あれ、元気だった。変だな」

「なにより、人を病人みたいに。変ってなにさ、変って」

立ち上がり、頬を膨らませてルシヤナの肩口を指先で突つつく。相変わらずなにか言いたそうだが、とりあえず元気を伝えておけば安心してくれるかもしれない。ぴよんぴよんと飛び跳ねて見せてみた。

「あたしはいつつも元気だよ。元気、元気、うん、絶好調だよ！」
声が稽古場の中を跳ねまわる。

これだけ見せれば大丈夫かと思っただのに、ルシヤナはなぜか呆れだしている。

「朝からそこまでハイなのも凄いいけどね……」

「そうかな？ ふつーだよ、ふつー。調子が良かったらもつとスゴイんだから！」

「絶対あんただけだよ……。あんたの“ふつー”だとか“へーき”に付き合おうと、大抵ロクでも無いことになるし」

朝からどうにもルシヤナはテンションが低い。おまけに、すごい人聞きの悪いことを言っている。なにがあつたのか気にはなるが、それより言われっぱなしもシヤクだ。

「なにおう！ あたしのどこがふつーじゃないって言うのさ！」

「……。じゃ、さっきの絶叫はなに？ 外まで響いてたぞ」

そこまで言われて、シヤニーもぎよつと口を手で覆う。

いつも声が大きいと言われるし、つい騒いでもうおかげで、以前も夜勤の騎士が何事かと槍を持って急行してきた。

でも、肝心なことを思い出せない。額を突つつかれても眉がしゅんと下がるだけだ。

「えつとね。なんだっけ……」

朝食のおかずでもう頭が一杯だったなんて、怖くて言えない。天井を見上げて難しい顔を試してみる。目を逸らしてもお構いなしに刺さる視線が痛い。

「はあ。つい10分くらい前のはずでしょ？ 一度の頭の中、見てみたいよ」

「えへへ……それほどでも」

自分も気になる。頭の中を見れたら、今探しているものだって、きっとすぐ見つけられる。そう見つからないのだ。

（なにが見つからないかっただっけ……。——キタキター！ ピンと来たあ！）

中から爆発でも起きたかのように、思いきり口が「あつ！」と開い

て、ポンと打った手でそのままルシヤナを指さす。

「そうそう！ リキア行ったら家なき子になっちゃうなって！ ピンチだよー」

「ああ、そう言えばそこから始めないとなんだね」

頭を抱えて見せたのに、ルシヤナから返ってきたのは案外さっぱりした物言いだった。でも、その語尾はなんだか強くて、ちらっと見てみたら角が生えていてぎよつとする。

「え、な、なんで怒ってんの？」

「だって、放り出すだけで一切手配してくれないとか随分な扱いじゃない。これもあの団長の指示でしょ？ あーつイライラマックスだよ」

「そうだよね。夜放り出されちゃうんだよね。うわああ……」

ルシヤナの眼光がわなわなと真っ赤になつて突き刺しても、あわあわと蒼くなっているシャニーは全然違う世界を彷徨っていた。

「野宿なんかしたら、あんなことやこんなことになっちゃうよ！ ああ……薄幸の天馬騎士とかつて本が出ちやうよ」

「ならない、ならない。あんたみたいなオツカない奴を襲うのなんぞいないって」

人が本気で心配しているのに、ヒドイ言われようだ。恐ろしきで言ったらルシヤナに勝てるはずなのに。口をこれ以上ムリなくらい尖らせて怒ってみせた。

「ぶー！ どーいう意味？ あたし、おっかなくないんですけどおー？」

「夜な夜な目を光らせながら剣持って彷徨って、案山子を真つ二つにするような奴のどこが？」

「言い方!! 稽古してただけじゃん！」

ルシヤナたちはこうしていつも茶化してくる。剣に絡む話はないていセチのせい。リキアで妙なことを言わないか心配になってきた。特に……ロイに。彼には、セチのことはなにも伝えていない。

「ま、でも、皆が来るまでに、やらなきやいけないことは絞っておこうか」

話を逸らすようにルシヤナは背を向けた。

なんだか腑に落ちないが、思いがけないチャンスを逃す手はない。とにかく、ルシヤナがいてくれると百人力なのだ。

「おっけー！ やろう、やろう！ ついでに必要な経費も計算してくれると嬉しいんだけどなあ……？」

「それか……さっきの目は」

突き上げた手で賛成を示して笑って見せたたん、ルシヤナの顔が一段と物言いたげに歪む。

肩揉みだけでは足りないらしい。お茶を淹れて、隠しておいた木イチゴのタルトも投入すればイチコロに違いない。稽古場の隅にあるテーブルへとルシヤナを連れていく。

「あんたに数字は任せないから大丈夫だよ」

なんとかルシヤナを乗せようとあれこれやっていたのだが、鼻を押されピシヤリと言われてしまった。

「予算なら多少間違えても始末書で済むけど、リキアでの初期資金でしくじったら、本当に野宿だからね。全幅の信頼を置くリーダー様であつても、これだけは絶対に任せられないね」

「ははっ、信用されていないなあ……」

苦笑いしか返すものがない。数字は大嫌いだ。出来るわけないだろうと呆れ顔をされても、数字と睨めっこするくらいならこつちのほうがマシ。

「とっころでせー」

彼女の気分が変わらないうちにミーティングを始めようと資料に目を落としたら、ふいにルシヤナが顔を上げた。

「うん？」

「野宿でなんか嫌な思い出でもあるの？」

ヤバい流れ。世の中、知らない方がいいことはたくさんある。とくに、茶化して針を棒のように言う人は。

「さ、さあ〜ねえ？ マンガの読み過ぎはダメだよね！」

怪しむ目が刺さるが、気づかないふりをして計算を始めた。指が10本では足りない。どうしよう。

◆◆◆
それから一時間くらい、半分以上雑談で進行したミーティングを終えて稽古場を出た。雨はもう止んで、雲の隙間から日差しが零れ始めている。きつと外に行つてこいと言つてくれているに違いない。

詰所に戻ると、手を挙げていつも通りの元気を見せるミリアたちの顔が飛び込んできた。

普段ならこの後すぐ食堂へ行つて、朝食がてら一日の作戦内容を打ち合わせする流れ。今日はそんな時間もない。

「んじゃ、準備ができた人から、みんな好きに行つておいでよ」

村々への挨拶を終えるのに二日使つてしまったから、もう準備期間として許されているのは今日だけ。最後の一日は自由時間にして、会いたい人と過ごす時間にあてるとみんな決めていた。

とは言え、昨日も忙しくて帰つたらすぐベッドにゴロンだった。

(よおし、どこへ行こうかなあ……)

小さいころからお世話になつた、大好きな顔が真つ先に浮かぶ。

思い立つたら即行動。一步を踏み出したら、待つていたようにルシヤナが呼んだ。

「私はカルラエ城下に行くけど、シャニー、あんたはどこ行くの？」

「うーん……」

行きたい場所は山ほどあつた。下唇に指を引っかけながら考えてみる。一番は考えるまでもなく、すぐに口から出てきた。

「ユーノお姉ちゃんかな。もちろん、カルラエの街の人とか……子供のところからお世話になつた人たち……それから、それから！」

後から後から、どんどん出てくる。おまけに一人ひとりとの思い出までくつついてくるから、あつという間に口が足らなくなる。そのうち栓された。

「んじやき、エデツサの城下町で待つてるから、ユーノさんのとこ行つたあと一緒に行くようよ」

「さんせーい！ 待つてる間、お酒飲んじやダメなんだからね」

独りで行くより、やっぱり二人のほうが楽しい。昔からこうだから

二つ返事で手を挙げた。

エデッサにいるルシヤナとか、酒を飲んでる姿しかイメージできない。酔い潰れた彼女を天馬に乗せて帰った日々が蘇る。

懐かしい記憶に一度は緩んだ口元も、今から会いに行く姉の顔を思い浮かべたらきゅつと厳しくなった。



天馬を飛ばすシャニーの青髪や純白の袖口が花のように揺れる。雨がすっかり止んで、混じり気のない澄んだ空気は、遙か先までイリアの大地を鮮明に映し出してくれる。

東の空に高くなっていく太陽に照らされながらの航路。いつもなら心をワクワク躍らせてくれるのに、今日はそうもいかなかった。

(あーあ、こんな気分でエデッサを飛ばなんて思わなかったな)

エデッサ城下町の上空に着いても、いつものように心が弾まない。

ルシヤナと別れた後、そのままじつと眼下を見つめながら飛んでいたら、あつという間に貴族街まで辿り着く。

(お姉ちゃん……なんて言うだろう。もう知ってるよね、きつと)

貴族街を抜けたら、最奥にエデッサ城がある。姉に会える、それだけを楽しみに風を切って先を目指す。

イリア連合の代表でもあるエデッサ城主ゼロットは、この四月からまた傭兵で城を空けている。この街の実質の統治者はその妻、そして姉であるユーノだ。その姉に、管轄地を隣に持つ天馬騎士団の新人事が伝わっていないはずがない。まして、95代目団長だった姉に。

どんな顔をするだろうか……そう考える間もなく、天馬は正門を突破する。

「お姉ちゃんー！ おーいー！」

いつものように天馬でそのまま姉の部屋まで乗りつけ、窓越しに大きな声で呼んでみた。……返事がない。

のぞき込んでみても、中はがらんとして誰もいなかった。仕事だろうか。まだ小さい姪が泣いているのかもしれない。

(お姉ちゃんも忙しいし、仕方ないか……)

天馬を降りて探そうとしたときだ。

「降りてこい！ 完全に包囲したぞ！」

「はひ?!」

窓の奥をジロジロしているうちに集まってきたのだろうか。あつという間に四方から弓を向けられてしまった。

「ぎよええ?! な、なんでえ?!」

「動くな！ 撃ち落とすぞ！」

戦慄が走り、思わず手を挙げながら見下ろしてみても、さらにすうつと血の気が退いた。威嚇射撃でもしてやろうかという構えがずらり。いくら身ごなしに自信があっても、こんな至近距離では蜂の巣だ。

「天馬騎士団の上級天馬騎士シャニーです！ 敵襲じゃないですから！」

「また君か!! いいから降りてきなさい！」

衛兵たちは相変わらず構えを解いてくれず、仕方なく言われたとおりにしたらそのまま引つ張り下ろされた。

首元へ武器を突き付けられて、ごくりと息を呑んで両手を上げたまま固まる。

(いい加減慣れてよく。毎回これじゃ命足らないよ!)

いつもエデツサ城に来るときは、こんな感じで姉を直接呼んでいる。衛兵たちも知った顔ばかりだし、自分が何者かなんか彼らは分かっているはずなのに。

心の中で泣きながら怒るシャニーだが、隊長と思しき人からたつぷり絞られる。

「まったく、いい加減に正門から入ることを覚えなさい」

「はあ〜い……」

そのときだった。よく知る声の小走りに近づいてくる。

「まあ、シャニー。あなた、どうしたの？ そんなところで」

救われた気持ちになったが、目の前に武器があるから顔は動かせない。

駆けてきたユーノは、包囲された妹が武器を向けられて両手を上げる光景に、口元へ手を当てて驚いている。

◆◆
ようやく解放されて部屋へと案内された。首をさすりながら大きく安堵を吐き出す。へなつと目を瞑って胸へ手をやっていたら、姉の優しい笑い声が聞こえてきた。この香り……ジンジャーティーを淹れてくれているみたい。

「聞いているわよ、シャニー。リキアでお仕事することになったのね」「そうなんだ。しばらく会えないからさ、挨拶につて」

「やっぱり知っていた。姉にしばらく会えないと思うと寂しくて、自然に顔を追ってしまふ。」

焼き菓子と紅茶を持ってきて隣に座った姉は、すぐに頭を撫でてくれた。見下ろす眼差しは本当に優しく、ついつい甘えてしまふ。

「ふふつ、随分と逞しくなったわね。士官服も様になっているわ。外でも立派にやれそうね」

「えへへ……。ありがと。お姉ちゃんに褒めてもらえると、自信出るよ」

言葉は嘘ではない。でも、それよりも違和感が心に湧いた。思ったより、とりわけ驚いているようには見えない。

（お姉ちゃんは今回の人事、どう思ってるのかな……）

静かに流れる時間。この沈黙ならちつとも嫌な気分にはならないが、ふと姉の考えが気になった。姉だって団長だったなら、リキアへの派遣人事を下したことはあるはずだ。どんな気持ちで配下をリキアに出すのか、聞いてみたくなった。

「正直、まだ飲み込みきれしていないんだ」

ぽつりと絞るように零れたシャニーの声は、普段とは別人のように沈む。

姉はなにも言ってくれない。じつと見つめて、頭を撫でてくれるだけ。なぜだろう。人事が発令されたのは、ゼロットが新たな傭兵契約に向けてイリアを発った翌日だったと聞く。姉だって思うところはあるに違いない。

「やっぱり……。左遷だよ。これって」

「あら、そうかしら？　良い機会じゃない。羨ましいわ」

ところが、ユーノは全く違うことを口にした。びっくりして思わず顔を見上げる。

「羨ましい？」

「だって、イリア以外を勉強できる時間なんて、めったにももらえないわよ」

（お姉ちゃん……またあたしを励ますために、ムリ言ってるのかな……）

本当のことを教えて欲しかった。知ったところで……どうにもならないことは分かっている。みんなそうだ。自分のことを気遣って、本当のことを言ってくれない。それが辛抱ならない。

「教育なんて、建前じゃん」

元々西方三島への出向だったのに、教育もなにもない。あんなの、後付けの適当な理由に決まっている。追い出されて、仕事も、居場所もないところに放り出されたのに。

やけっぱちを口にしたら、姉は首を振った。

「それは、考え方一つよ。いきなり時間を与えられて戸惑うかもしれない。けれど、使い方はあなたたちに委ねられているのよ？」

姉から言われた言葉に、なにか頭の中にずつと引つかかってくる感じが外れて、詰まっていたものが一気に流れだしたかのような衝撃が走る。

「目指す先をあなたたちで決めて、自分たちで進んでいけるのですもの。あなた達にとって、これ以上の自由はないんじゃないかしら？」

「あ……」

出向という言葉に縛られて、あまりにも受け身になっていたことに気づく。ぽかんと開いた口から、驚きとも、歓喜とも言えない声が漏れた。

「見習い時代の転戦とは違って、一か所に根を下ろすのもいい勉強になる……そう思うわ」

もつと大きく育って——姉の声が聞こえてくるようだ。

開いたままだった口をキュツと閉じると、胸元のロケットをしつか

りと握って、もう一度頭の中を整理することにした。

(そうだよ。この時間を、あたしたちがどう上手く使うか、考えればいだけじゃん)

去年の十八部隊だってそうだった。当時の部隊長レイサはなにも指示してくれず、時間だけを与えてくれた。その中で、なにをすべきか自分で考え、それを行動に移してきた。この礎があったから、今の自分たちがあると言える。

未来をこの手で切り拓くと誓ったのなら、その礎の上に、さらに新しい礎を築くのがリキアでの仕事かもしれない。時間の使い方だつて、自分たちで決めれば良いだけではないか。

なぜ、こんなことを思いつけなかったのか不思議……いや、悔しくてたまらない。

「だってリキアでしよう？ 繁栄の先駆者がいる地なら、あなたが欲しい知識がたくさんあるはずよ」

姉にそう言われると、どうしてこんなにも心にすつと沁みるのだろう。

「そうだよね……。イリアの中だけで仕事するより、ずっと良いはずだよね」

こくこくとうなずくシャニーの両肩に手を置いて、ユーノは明るい声で若い心を鼓舞する。

「イリアの叫びをずっと聞いてきたあなたが、外の世界でイリアの誰も知らないものや声を聞いて種を蒔けば、きっと素晴らしい未来が咲く。イリアの唯一無二になるんだつて、全部吸収するつもりで、いっぱい勉強していらつしやい」

姉から金言を授かったシャニーは、そつと目を閉じて自問してみた。唯一無二となるのが、なにを意味するのかを。

(みんなの希望になるためには、必要な道だったんだ)

自然にそんな答えが心から返ってきた。

イリアのため——そう自身に言い聞かせて無理やり押し込んでいた重い気持ち。完全に受け身になって拒絶ばかりが心を渦巻いていたが、それを突き破つて大空に飛び上がったような気持ちだ。

いま心の中に流れる風は、あるべき道を知って以前より穏やかに
なった気さえする。

「分かったよ、お姉ちゃん。へへっ、やっぱりお姉ちゃんは凄いや。悩
みが吹き飛んじやった」

再び開いたシャニーの瞳は、雨上がりの空かと思うほどはつきりと
澄みわたる。輝く瞳が映える顔は濁りを全て払って、春陽の如く柔ら
かい笑みが咲いた。

「辛かったでしょう？ シャニー、私はいつでも、あなたの味方だから
ね」

それを待っていたかのようにだった。ユーノはしっかりとシャニー
を抱き寄せた。

「お姉ちゃん……」

「まとう服が立派になっても、勲章がどんなに増えても、あなたは私の
自慢の妹よ」

「うん……大好きだよ、お姉ちゃん」

大好きな匂いに包まれて、シャニーは傷ついた翼を癒すように姉の
胸へ顔を埋め、しばらく動かなかった。帰る場所がある——その幸せ
をただ、噛みしめて。独りではないと包んでもらえ、前に進んでいけ
る気がした。

（あたしも成長して、お姉ちゃんみたいに人を救える人になりたい
……）

いつかきつと、姉にも恩返しができるように、新たな目標を心に刻
む。

遠まわりかもしれない。けれど、リキアは第二の修行の地。未来を
切り拓くための大事な時間——そう心に決め、今は許される限り、温
もりの中に甘えることにした。

イリアを頼むよ

エデッサ城を天馬で飛び出したシャニーは、ユーノから授かった金言を頭の中で何度も復唱しながら城下町にあるバーへと向かう。

徒歩なら30分以上かかる道も天馬ならわずか数分。バーの前に天馬を下すと、店の横で暇そうにするルシャナの天馬が顔をのそつともたげてきた。

「おっ、お酒飲んでないね。関心、関心！」

店に顔を突っ込むと、ルシャナはお茶を手にマスターと談笑していた。手を振って中へ入り、暖炉の前を陣取る。

「あのね……私は仕事中に飲み食いはしないよ。ユルイ部隊長と違って」

「あたしだってお昼の時間までちゃんと待つし！ あっ、おやつはもちろんノーカンだから、そこんとこヨロシク！」

「なにがよろしくよ。ホントあんだ、スイーツへの執着すごいよね……」

マスターに挨拶を済ませ、凸凹な会話をしながら城下町を南下していく。

賑わう中央通りから一步入ると、あつという間に静寂が包んだ。生活臭漂う狭い裏路地は、窓伝いに通されたロープへ洗濯物が干され、凹んだトタンのゴミ箱が口を開けたまま寝転がっていて、石段もところどころ割れている。

その道は進むほどうまます荒れはじめた。建物の間から入る日差しが遠く、夕暮れと見紛うほど暗くなって、次第には廃墟のように青白い不気味な光景が広がり始めた。

「あんだって……こんなところもうろついていたの？」

イメージしていた行き先と違ったのだろうか。ルシャナはきよろきよろと辺りを不安げに見渡しながら、シャニーの腕を掴んでおっかなびつくり歩いている。

「そりやあもう！ あたしだったら顔パスだよ」

「やつぱり、あんだの『へーき』なんか信じずに槍を持ってくるん

だったよ」

なんでルシヤナがこんなにおどおどしているのか分からない。任せると、トンと自分の胸を叩いてずんずん進む。

「んー、たしかに、今日はなんか妙な『流れ』を感じるかなあ」

ふと独り言を漏らしたら、ルシヤナがうえつとあからさまに嫌そうな顔をする。

「あーでたでた。あんたの『流れ』。勘弁してよね。そういうところだけ鋭いの」

「『だけ』はよけいでしょ!」

なにか……どこからか常に見られているような暗い雰囲気、崩れた壁のところどころに描かれた意味不明の落書き。

初めて来たときは、不気味で不安が神経を掻きむしる場所だった。今ではすっかり慣れて、もはや庭の一部だ。

(へー……ルシヤナでもビビることあるんだ。おもしろー)

いつも豪胆で、彼女に叱られっぱなしだから内心クスクスしていた。いくらスラム街に来たと言っても、もう今となってはただの散歩道。ルシヤナが意外と怖がりだと分かって、今度お化け屋敷辺りを試してみようとあれこれ考えていたときだ。

視界の左端に触れた『流れ』の乱れ。一気にスイッチが入り、標的をピンと捉えて刹那振り向く。

「させるかー」

左手を剣に添え、抜刀一閃。鋭く高い音をまとって宙へ舞ったナイフが陽に映えて閃光を放つと、遙か遠くで乾いた音を立てて滑っていく。

襲ってきた盗賊を見据えてそのまま霞に構えると、両手の空いた盗賊は舌打ちを残し、元来た路地の闇へと姿を消す。

火花が爆ぜるような、あつという間の出来事だった。

「あー、びっくりしたあ」

手を胸元にあて、ふうつと息を吐きだした。まさか襲ってくる者がいるとは思っていなかった。鞘に納めてルシヤナに目を移すと、彼女は唾然としたまま突っ立っている。ツンツン突っついてみた。

「ルシヤナー、怪我不い？」

「なーにが顔パスよ、ホントに能天気と言うか、まったく……」

「えへへ、ごめんごめん」

どうやら本気で驚いたらしい。魂の抜けたような顔は見ていて面白い。クスクスやっていたらギツと睨まれ堪らず呑み込む。スラムの盗賊なんかより、ルシヤナに生える角のほうがよっぽど怖い。

「あんた、ホント剣持つと人が変わるね。なに、さっきの超反応」

「んー、流れ」が乱れたから？　ほら、蜘蛛の巣つつくと揺れるでしよ、あんな感じ」

「へえ、蜘蛛女か」

「だから言い方！」

元々直感には自信があつたが、セチと相棒になつてからさらに揺らぎに敏感になつた。

なにか壁が取り払われたように、剣の腕が一段も二段も上がった気がするのは、剣のことになると異常にうるさい戦闘狂のおかげかもしれない。その分、自身の動きと騎士剣が持つ性質との間にできたひっかかりが、以前より増した気もするけれど。

「とりあえず、あんたの言うことはやっぱり信用できないってのは分かつた」

「あのくらい全然へーきだよ、へーき！」

「それ、顔パスって言わないから」

（うー、もう少し心配してくれたって良いのに）

ルシヤナは怒つてしまったのだろうか。視線を合わせてくれないし、なにも返してくれなくなつた。

なにより、さつきから「大丈夫？」の一言だつてない。いくらあのくらいちつとも怖くなくても、声ぐらいはかけて欲しいのに。

ようやく振り向いたと思つたら、心配どころか痛い言葉が飛んでくる。

「用心棒よろしく。女郎蜘蛛のへーきに付き合つてたらこつちの命が足りないって」

「ちえ。絶対へーきなのに。……んっ？」

ぜんぜん信じてもらえなくてぶうつと頬を膨らせていたら、再び感じた「流れ」。今度はさつきのとほまるで違う強さだ。とつさにルシヤナの前に出る。

「すまねえな。しばらく顔出さねえから、皆忘れたんじゃないやねえか？」

一度は剣に手がかかったが、路地から出てきた男性の顔を見つけると手は降り、自然に笑みが浮かんだ。

「あ、ゲベル。なに？ あたしに会いたくて待ってたの？」

「ばっ、バカ言うんじゃないやねえ！ お前なんかいい思い出ねえよ」

彼はこのスラムで自警団のリーダーをしている男だ。このスラムに住んでいて、物盗り時代はよく追いかけて回してコテンパンにしてやったもの。

それがレイサの説得で、十八部隊の特殊枠に属することになったはつい半年前。あんなに最初は嫌がっていた潜入服も今はすっかり着こなして、がっちりした体格と身体に密着する黒の服が異様に似合っていて格好が良い。

「丁度良く現れてくれるなんてラッキーだよ。ゲベルに会いに来たんだよ」

「ったく、お前こそ俺に会いたかったんじゃないやねえかよ。当たり前みたいに行動パターン読みやがって」

「だって単純だし〜？」

「お前にだけは言われたくなかったわ」

「言ったわね!？」

彼とこんな会話ができる関係になるとは、1年前は夢にも思わなかった。

知った風な口を利くなら、もっと地元の状態を知ってからにしようがれ！ —— 彼を捕まえたとき、そう怒鳴られたのが懐かしい。

あの悔しさから、イリアの人々に信じてもらえる騎士になると誓って必死に頑張ってきた。それが一時でもできなくなると思うと、どうしてもトーンが重い。

「話聞いていると思うけど……ごめん、あたし、イリアを」

「それ以上言うな」

侘びの言葉を口にしたらゲベルは目線で止めた。

「お前は約束を果たした。イリアの民に信用される騎士になる……
なったじゃねえか。あの嘆願書の量……ブルっちまったぜ」

ゲベルもレイサを手伝って嘆願書を集めてくれたのは知っている。
おまけに、このスラム街で、だ。騎士を嫌っていた彼が、同じ思いを
しているであろう住人を説得してくれたおかげで今がある。

(ゲベルにこんな風に言っただけで貰えるなんて……嬉しい)

騎士を憎んで怒声ばかり浴びせてきたゲベルの言葉とは思えなく
て、なんだか夢でも見ているようだった。

周りを見渡しても、このスラムが大分警備されているのが伝わって
くる。おそらく、彼だけでなく他にも自警団員がいるに違いない。

約束は守る。彼はやはり、子供達が憧れる漢のままのようだ。

「もつと信用されるように外の世界を見に行く……そうなんだろう？」

もう泣かないと決めたはずなのに、さっそく目が潤み始めたところ
へゲベルの声が飛んできてハツとする。彼はユーノと同じことを口
にして、じつと見下ろしてくる。

(ゲベルも……信じてくれてるんだ)

さつきまでの受け身の心だったら、ゲベルからなんと言われていた
か分からない。

でも、もう心に誓った。この異動がどんな意味を持っているかは自
分たちで決めて、己の意志のままに未来へ軌跡を刻めば良いと。

全ては、新しく創りあげる唯一無二を、希望と信じてくれる人たち
のために。その中に、あれだけ嫌われていたはずのゲベルがいると思
うと、どこか心強い。

「もつちろん！ イリアの唯一無二になるチャンスだし、頑張っちゃ
うよー！」

「へっ……半年前はガキの顔してたくせに、どんどん大きくなってい
きやがる」

「ふうん？ そのガキに毎回捕まってお尻叩かれてたくせにー？」

「なっ！ てめっ、褒めてやったのに茶化しやがって！」

予想通りに反応してくれるから、ついつい弄ってしまう。でも、彼

は最初こそ反応したが、いつものように顔を真っ赤にしなかった。代わりに、その腕をずいっと突き出してきた。

「お前がいけない間、カルラエは任せろ。約束を守ったお前との、約束だ。絶対に果たす」

決意を握った腕同士で約束を交わすと、ゲベルはシャニーの肩にしつかりと手を置いて力強く声をかけた。もう、今は騎士と市民などと言う関係ではない。守る者と支える者。きつと今は、それが逆になるだけだ。

（ゲベル……ありがとう。背中を任せられる人がたくさんいて嬉しいよ）

今までずっと女だらけの世界に身を置いてきたから、より一層に強く感じるゲベルの声。

村の人々、ユーノのような家族、そして戦ってきた中で見つけた戦友。それらが皆背中を押してくれると思うと、左遷だなんて言っただちひしがれていたのが恥ずかしく思えてくる。

「だからこのくらいで折れるんじゃないぞ！俺達がしつかりしなきゃ、あいつらは生きていけないんだからな」

彼の指さす方を見れば、今日も元気な子供たちの顔があり、彼らは大きく手を振ってくれていた。会って最初は、アニキの敵と石を投げつけてきた彼らが。

ゲベルの背中には、さらに多くの戦友たちがいる。皆そうだ。守ってきた以上に、大きく守られている。

「ありがとう。安心して出発できるよ」

もう、心残りはない。これだけ進むべき道を鮮明とさせてくれ、背中を守ってもらえると信じられる声がたくさんに聞けたなら、なにも。

「じゃあ、行ってきますー！」

シャニーは大きくゲベルに手を振ると、スラムを後にして天馬で蒼穹へと戻って行った。



カルラエ城に戻ってきたシャニーは、西棟をルシヤナと噛みしめるように歩いていく。独りで歩くと軍服はとても浮く西棟だが、二人ならへっちやらだ。

食堂から漂ってくる良い香りに鼻をひくひくさせていたら、首根っこを捕まえられて引きずられていく。思わず振り向いて名残を惜しんでも、ルシヤナはお構いなしで厳しい。

「なんだかんだで最後になったね、ココ」

辿り着いたのは廊下の突きあたり。西棟の中でも食堂の次にお世話になった場所だ。それだけ傷ついて、毎度のように敗北してきたと言うことか。思えば、賊のような訓練されていないものはともかく、騎士団に入ってから一度も勝利できていない気がする。

(まさかウツデイと離れ離れになるなんてな)

シャニーたちが見つめていたのは医務室だった。ここには幼馴染で軍医のウツデイがいる。

彼の顔を見れなくなる日が来るなんて思ってもこなかったから、なんだか変な気持ち。寂しいと言うより……不安と言うか、心配と言うか。なにもできない彼にずっと夕飯を作ってきたから、自分がいなくなったらどうするのか心配だ。

「ウツデイ、やっほー」

「十八部隊の健やかな花がお出ましたよ」

それでも、そんな心配などしても仕方ない。元気な挨拶と共に自身から重い気持ちを振り払う。

ルシヤナと医務室に入ると、やはり今日も隅の研究室にいるウツデイが映った。蚊帳で仕切られるだけだった場所にはまずまず立派な個室がこしらえてあり、かなり投資してもらったみたいだ。

「ああ、それだけ元気そうなら赴任前の健康チェックも要らなそうだな」

騒がしいのが来た……そんな気持ちがありあり眼鏡の奥に浮かぶウツデイから、素っ気ない反応が返ってくる。

すぐに膨れ面を作り、部屋から出てきたウツデイにノシノシと詰め寄るが、それがますますウツデイの顔を呆れさせる。

「なによー、もう少し心配してよ。知ってるんでしょ？」

肩をパシッと叩いて心配を要求してみる。ウツデイのことだからもっと飛び出してくるかと思っていたのに、なんだか拍子抜けだ。

彼はメガネをずり上げながら、ふっと優しい笑みを浮かべている。

「心配してたさ。でも、もう吹っ切れた顔してるから、大丈夫かなって」

(そんなにあたしって分かりやすいのかなあ?)

ど真ん中を言い当てられて、思わず目が点になって口をすぼめた。そんなに違うものかと、きよろきよろと部屋を見渡してみる。

(確かに……数日前とはあたし、全然違う顔してる)

傍にあつた鏡へ顔を映してみても、自分でも驚いた。

辞令を渡されたあの日、鏡に映した顔は凍てつく剣のように真っ白だった。それが今はどうだ、自分だってびっくりするくらい目がニコニコしている。

楽しみでしかたない。リキアでどんなことが待っているのか。

「落ち込んでても、なんにもならないもん。リキアで出来ることを考えて、頑張っちゃおうってね！」

あたしはもう大丈夫！——それを親友に伝えようと、心に決めたことをそのまま口にする。

昨日までも同じように言葉にしていたが、なにか心に刺さったものが引っかかって気持ちが悪かった。その棘さえもユーノと喋ってすっかり取れたから、今はとても清々しい。

「あたしたちのスローガンは、笑って、前を向いて、未来を切り拓こうだもの！」

姉や皆が求めるものをしっかりと手に入れてこよう。スローガンを口にしたらその想いは一層に強くなった。未来を切り拓くための大事な礎。それが手に入ると思うとワクワクさえしてくる。

白い歯の零れるシャニーの太陽みたいな笑顔に、ウツデイも笑みを浮かべてうなずいている。

「その心の強さがあれば、きっと大丈夫だよ」

「心の強さかあ。ううん、皆が支えてくれるから、前を向いていられる

んだよ」

以前もウツデイに同じことを言われた。あれは去年の五月か。自分を見失って、道から外れそうになったところを彼に助けてもらった。独りではなにも出来ないと教えてもらえたから仲間は家族となり、部隊だけに留まらず、今や村々までもが家族になった。

「お前は笑っているだけで周りを明るくできる。リキアでもきつと活躍できるさ」

ポンと肩に手をやってウツデイは励ましてくれた。ロイにも言ってもらえた言葉だ。

「みんな同じこと言うなあ。うん、皆が喜ぶなら、いくらでも笑えるよ、あたし」

みんな笑えと言う。でも、意識しないことにしていた。自分で意識して笑顔を「作って」いるのは、大抵口クでもないことを考えているときだと分かったからだ。

一生懸命頑張っていれば皆が喜んでくれる。今までの経験で知っているから、これからもそうするだけ。

「ウツデイもイリア風邪の研究……必ず成功させてね」

目の前に、そうして頑張ってきた青年がいるから、一層にそう思える。

理解されずとも、認められずともコツコツと研究を重ねてきて、新聞にも載るほど大きな功績を残したウツデイが称賛されているのは、真新しい研究室を見ても分かる。

今はただ彼の成功を祈るだけ。自然に彼の両手を取っていた。

「ああ、きつともものにしておくから、お前が帰ってくるのとどっちが先か競争だぞ」

絶対帰ってこい———そう言われた気がした。

シャニーは目を細めてニコつと頷き、しつかりと指切りをする。そのときだ、どこからともなく久しぶりに聞く声が飛んでくる。

「新人時代の恩師に、声をかけずに行くつもりかい？」

天上から吹き下ろした黒い風。ぞくつとして思わず剣に手をかける。

背後を一瞥すると、短剣を持って舌打ちをするレイサの姿があった。毎度、毎度、こうして試されるのは本当に心臓に悪い。

「あー！ 良かった！ よーやく見つけたよ」

駆け寄っていき、ぶーぶーと文句を垂れる。声をかけずに行くのなんて、神出鬼没の癖によく言うものだ。

あれこれ喋ろうとすると、レイサは速攻で口に栓をした。

「皆まで言わなくて良いよ、知ってるから」

やっぱり、レイサは大人に見えた。三月の時も、そして今回も。きつと、内心はすごい怒っているに違いないのに、それをまるで表に出さない。

ずいぶん、この人にもお世話になった。次会う時は、もっと安心させてあげたい。今できるのは、誓うことだけしかないけれど。

「あたし、イリアのためにいっぱい勉強して、すっごい騎士になって帰ってくるよ。待っててね、レイサさん！」

レイサは一瞬、驚いたように目を見開いて固まったが、すぐに声を上げて笑いだした。

「思い出すねえ。ちょうど1年前……あんたが入団してきて、尖った自信で周りを振り回してさ」

「は、恥ずかしいよ。レイサさん」

忘れるはずもない。怒鳴り合ったこともあった。涙を受け止めてもらうことなどしよっちゅうだった。もちろん、共に喜び跳ねてきた……。

ふいにレイサの手が伸びる。

「1年で本当に大きくなったね、あんたは。今でも十分、イリアを代表できる騎士だよ」

びくつと瞳が震えたのが自分でも分かって、何もできず金縛りにあつたよう。

こんなにも真正面からレイサに褒められた記憶はかつて無い。おまけに、頭を撫でながら強く抱きしめられるなんて、初めての感触だ。

親しくとも、常にどこか距離を置いている感じのレイサが、こんなに近い。

「今のままじゃ、あたし満足できないから。外を知って、もつともつと、たつくさんの人を救えるようになりたいんだ。イリアに……春を呼ぶために」

イリアの人々を救いたい、姉のように、人を救える人になりたい……憧れの心は自然に夢を語り、己の進むべき道を示す。

リキア出向と言う非情なピンチはもう、もつと別の意味へと変わっていた。

「ハッ……。これが……—希望つてもん……。か」

独り言のようにそう零したレイサは、両手を強くシャニーの肩に乗せて白い歯を見せた。

「ああ、行つといで。もうあんたに教えることはなにも無いさ。胸張って、リキアで活躍しといで！」

ぱつと明るく咲いた健やかな花。

デイクにも、そしてレイサにも言ってもらえた。もう一人前なのだ。ようやく一人前になれた気がして、ポンと背中を叩かれた勢いのまま飛び出す。両手で窓を開け放ち、イリアの空に向かって手でメガホンを作りながらありつたけ叫んだ。

「みんなー！ イリアをお願いねーッ!!」

一人前になれた。今度はリキアで、三人前になってやる。

背中を守ってくれる全ての人々に伝えるように叫んだ声は、蒼穹へと吸い込まれて空じゆうに広がっていった。

はやく行こう！ リキアへ！

——4月29日 カルラエ城

時は来た。

部隊長席に静かに座っていたシャニーは、そつと目を開くと周りを見渡す。暖かい日差し of 眩しい石レンガの部屋には、空っぽの机以外にもう何も無い。

目配せすると詰所を出て、真っ白に戻った部屋を皆で見つめて外から頭を下げる。

(必ずここへ……—帰ってきます！)

リキアへの出発当日。一年間世話になった思い出の詰まった場所への想いをつぶやき、ついに背を向けた。

手はずどおり、ミリアとレンには外門へ行くよう目で指示してルシャナと団長室を目指す。出発前の報告を行うためだ。

まっすぐ前を見つめるシャニーの眼差しにはいつもの朗らかさは無い。その鋭さは、触れる風がそのまま斬れてしまいそうなほど。目指す先を貫く眼光は、さながら戦場の最前線へ赴くかのようだ。

「おや、栄転の十八部隊長じゃないか？」

出撃前のピリピリした気持ちに横やりを入れて煽る声。

思わず口元が歪む。立ち止まって振りむくと、あからさまな侮蔑の眼差しを浴びせる者の姿があった。彼女はニタニタしながら、カツカツとわざとらしく靴底で床を叩きながら近づいてくる。

(第五部隊長……イドウヴァさんの腰巾着……嫌な感じ)

この顔を忘れるはずがない。第五部隊長マリツサだ。

こんな風顔を合わせれば嫌味を言ってくるのも、恐らくイドウヴァに気に入られたいだけに決まっている。部隊長会議で企画提案するたびに、下らないことで噛みついてきた覚えしかない顔と声は、触れただけでウンザリする。

「なにが言いたいんですか？」

テイト派、イドウヴァ派問わず、騎士団のほとんどの人間とは、顔を合わせたら挨拶してそのまま雑談してしまうくらい関係は良好。

みんな大好きな人たちだが、目の前でオレンジのショートボブを揺らすこの人だけは話が別だ。さつさと傍から離れたい。その心が口調にも滲み出る。

「部隊長会議も静かになるなって思ってたね」

いちいち神経を逆撫でる言葉を思いつくのも才能か。口元がぴくつと一瞬歪んで、せり上がる怒りを奥歯で噛み砕き押し殺す。誰のせいで、毎度戦わなければならなかったと思っているのか。

第五部隊は別名『第一の予備』と言われており、イドウヴァ直属だった者が失格の烙印を押されて落ちてくる部隊。それゆえに、第一部隊への復帰を目指してイドウヴァのご機嫌とりで躍起になっている。マリツサにとつては格好の「ネタ」だったわけだ。

「ケンカ売るつもりなら止めてください。あたしたち、今から出発で忙しいので」

第五部隊は暇なのかと思えてしまう。

雑務は暇な十八部隊にさせると、いつも会議で散々仕事を振ろうとしてきたが、自分たちの方が忙しかった自負はある。なにせ企画書をまとめる日以外は、朝から晩までイリア中を飛び回って、常に誰かの顔を見つめ続けてきた。

今だって忙しいのに、能天気な嫌味を口にする姿にはもうウンザリだった。さつさと前に進みたい。

「十八部隊が忙しいって……？」

そんな気持ちへ爪を立てるような、ケタケタした笑い声。冗談は止めてくれと目元が嘲りに揺れている。まじまじ見下ろす笑い声は少しずつ大きくなる。

(なんなのさ、この人。ほんつとムカつく)

こんなに敵意を向けられる人も人生で初めてかもしれない。どれも謂れないことで、ただ腹が立つばかり。

シャニーの眉がみるみる吊り上がっていく姿を横目で一瞥したルシヤナの顔にも、焦りが浮かびだしている。

「慌てなくても大丈夫だよ。リキア連絡所なんて、赴任が一週間遅れたって誰も困らないよ」

いい気味——マリッサの目は口以上にべったりと侮蔑を浴びせてくる。言われるままではどうにも腹の虫がおさまらない。

「あたしたちは、もっとイリアをよく出来るようにリキアで勉強してくるつもりです」

そんなことを言いに来たのかと、ふつと鼻で笑ってみせた。年上の人間にこんなことをするのは初めてかもしれないが、自然にそうなっ
てしまった。

数日前の自分なら怒りを露にしたかもしれないが、今はその逆。むしろ、つるつと心から為すべきと刻んだ誓いが出てきて清々しいくらい。仕事など、自分で創ればいいだけだ。

「強がり」

感情を突き向けたら同じように見下した声が返ってきた。さも呆れたような、嘲りをたつぷり含んだ強い口調でマリッサの声が絡みついてくる。

「戻って来れると思ってるの？」

「帰ってきますよ」

「はっ、ムリムリ」

イリア外の常駐人事から戻ってきた者が未だかつていないのは調べた。現行の駐在者だって、もう何代も前の団長からずっと変わっていないらしい。聞けば騎士団の最年長でイドウヴァより年上だという。

マリッサも知っているのか、あしらうように手を振って彼女は続けてきた。

「あんなことしていれば当然の人事だよ。片道切符もお似合いですね」

両手を広げて、バカにした笑いをケタケタ吐きつけて見下ろしてくる。

「あんなことってなんですか？ 棄権のことですか？」

掻きむしられた心が、真っ赤になって滲んでくる。

去年の選挙での棄権なら、もうとつくに謝った。もちろん、今でも悪いことだったなんて欠片も思っていないが、部隊の、村々のために

頭を下げて全て片付けた話だ。今さら言われる筋合いはない。

「それだけじゃないよ。全部だよ、全部。そんなことも分からないから、こうなってんだよ」

また、泥水でも浴びせられるかのような感情に駆られる。引つ掻かれ続けた心はすでに裂けはじめ、真っ赤なマグマのように雫が飛び出し始めている。

「もう少し賢くならないといけなかったね。ま、手遅れだけどさ」

今まではきゅつと口を閉ざしていたが、いつしか血が出そうなほどに下唇を噛み、拳が震えてくる。それでもマリツサは、残念でしたとありあり顔が浴びせかけてきた。

とうとう、我慢の限界をぶち破ったマグマが、一気に心の中へ噴き出してきた。

(なにが賢いだ！ イリアの人々から引き離しておいてよくも、よくもっ)

イドウヴァに取り入ることが賢いというなら、そんなものは自分から蹴飛ばすだけだ。愛する人々まで足蹴にされている気がして、スイツチが入ってしまった。

カチンと火が点いてまなじりを裂いた次の瞬間には、鋭い金属音と共に神速の閃光が弧を描いていた。

「大きなお世話だ!!」

ごくぐりと息を呑んでマリツサが固まった。鋭い鋒は寸分の狂いもなく鼻先を捉え、戦慄に震えるだけでその牙がえぐる。

煮えたぎる鋭い銀光の奥で、千の剣で突き差すかのような眼がメラメラと青焰を燃やす。

「シャニー、ダメだッ。止めなよ！」

焦って駆けだしたルシャナが羽交い絞めにしようとしたが、跳ね除けられて地面を転がった。

「あたしたちは間違ったことをした覚えはないよ！ イリアの人々のために戦う！ これからもだ！」

鋒をマリツサの鼻先へぐつと押し付けた。周りから事務員と思しき者の悲鳴が聞こえる。それでも怒りを抑えられず、叫ばずにはおれ

なかった。

「今に見てなさいよ、絶対にあなたたちには負けないんだから！」

——絶対に返ってくる、絶対に!!

怒りの咆哮と共に突き向けた銀の意志が鋒で春陽に輝く。

しばらく息を詰まらせてその眼光を浴びていたマリツサだったが、目を閉じてふっと嘲笑が漏れた。

「ハッ、新進気鋭の十八部隊は違うね。アドバイスする時間がもったいなかったよ」

(よけいな説教だ!)

激情一色の顔がさらに切れあがるが、もうマリツサも慣れたのか後ろにいた配下に声をかけている。

「あんたはああなっっちゃダメだよ、セラ。なにか言っておやりよ」

マリツサが口にした名前に、この場に幼馴染がいるのに気づいて怒りがすつと退いた。名前を呼ばれて顔をわつと震わせ始めたセラを見つめる。

視線が合ったとたん、彼女は早足に場を抜けていこうとしている。

「セラ!!」

思わず抜刀したまま駆けだしていた。背を向ける親友の肩へ手を置いて呼び止める。セラは一度だけ横目に一瞥しただけで、すぐ視線を切ってしまった。

「ごめん……シャニー。武運を祈ってるよ」

絞り出すような、小さな声。聞きなれた威勢の良きとは別人かと思うほどの、死にそうな声だった。困惑している間に肩へ置いた手を払われて、だつと駆けだしたセラは廊下の奥へと吸い込まれていく。

大事なものを失った気がして小さくなる背に手を伸ばすが、そのまま曲がり角へと消えてしまった。

「あんまりウチの部下をイジメないでもらえるかな? 嫌がつてたじゃないか」

クスクスとした笑い。悲痛が覆う心を再び嘔きあがらせる声を背中から浴びせられて、剣を握る手が震える。

(セラ……身動き取れなくなってるんだ。よくも、あたしの親友をつ)

セラまで毒牙にかけるなんて許せなかった。

去年からずっと、彼女がその被害に遭ってきたことを知っている。あのときは疑念を零していたが、もう今ではなにも言えなくなってしまうっている。

一体どれだけのものを、自分から奪っていけば気が済むのか。じわつと周りに青焔が揺らぎだしている。いつそ、このまま……——気づいたらルシヤナにがっちりと背後から羽交い絞めにされていた。

「親友にも見放されてるじゃない。身の振り方がいい加減考えたら？」

マリツサは気が済んだのかようやくよくに歩き出した。見下ろす眼差しは清々とも言い下げ。その侮蔑に塗れた横目をじつとまなじりで弾く。

(なんでこんなこと言われなきゃいけないワケ?!)

いくら相手が年上でも、こんな言われ方をする道理なんてない。向かっていこうとするが、やっぱりルシヤナの力には勝てない。

「よけいなお世話だつて言ってるでしょ!」

代わりに真つ赤なマグマを浴びせて牙を剥くが、マリツサの視線は別のところにあつた。

「あ、団長ー」

ゾクつと背中に走る嫌悪感。下唇をぎゅつと噛んで怒りを押さえつける。マリツサが歩いていった先に体を向けると、見えてきたのはあの姿。会いたくなくとも、けじめをつけるべき相手。

「シヤニーが出発を前に挨拶したいそうですよ」

こちらを指さしながら、イドウヴァアに声をかけるマリツサのなんと嬉しそうなことか。

あんなしつぽを振るような真似がどうしたらできるのだろう。見合わせたルシヤナも顔は渋い。なんだか、騎士というより奴隷にさえ見えてきて、さつきまでの怒りがどこか哀れみに変わっていく。

「どうしたのですか、シヤニー部隊長。こんなところで抜刀して」

近寄ってきたイドウヴァアは、シヤニーの左手に握られたままの真剣を見下ろして、はつきり分かるくらいのため息をついている。また問題を起こすつもりなのか……顔がありありそう言っている。

「いえ、なんでもないです」

急いで剣を収めた。自分でもまさか抜いてしまうとは思っていない焦ってしまふ。最近ちよつと……短気になったか。自身を戒めるようにイドウヴァに一礼する。この人に顔を見せるために歩いてきたはずだったのに、なにをやっていたのだろうか。でも、団長室まで行く手間が省けたというもの。

(ホントは西方に飛ばそうとした理由を聞きたいトコだけど……)

今が聞くには絶好のチャンスかもしれない。思わず喉元までせり上がってきたが、無理やりに飲み込んだ。

自分は西方出向のことを知らないはずなのだ。それを口にした瞬間、アルマに迷惑をかけることになる。危険を冒して守ってくれた友に、これ以上負担を掛けたくない。なにより、どうせ聞いたところでまともな答えが返ってくるとは思えなかった。

「団長、赴任の前に挨拶へ伺おうと思っていたんです」

そのまま疑念はぐつと腹の奥に押し込めて、頭を上げたシャニーは普段どおりの調子で赴任前報告を始めた。

それを聞いたイドウヴァは口をへの字に曲げている。

(こいつだけには絶対に負けないぞ……ッ)

顔は平素を装っても、心の中には相変わらず真っ赤に飛沫を上げるマグマが吹き荒れていた。

短気になったかもしれない。でも、この人に対してだけはそれでもいい。ずっと、ずっと、半年間ずっと我慢してきた。

刃に訴えるなんてことはしない。だけど、絶対に、絶対にリキアで大きくなつて、必ずこの人に認めさせてやる。

(命令だからじゃない！ イリアのために、あたしたちは行くんだ！)

その想いを込めて、シャニーは再び頭を下げた。

「団長、勉強の時間を与えていただきありがとうございます」

もう一年、新人のつもりでがんばろう。そう自身に言い聞かせながら、今は敵を前に刃も拳も、そして怒りも収めて部隊長然の態度で挑む。

しばらくイドウヴァからはなにも返ってこなかった。無音の時間。

その間、前髪の影からじつと睨み続けていた。

「ええ。きつとたくさん学んで、今後のイリア発展に寄与してください」

最後までいい言葉をかけてやろうとでも言うのか、下げた頭をなぞった柔らかい声に顔が歪む。あまりにも白々しくて辛抱ならない。

「あたしたち、きつともっと大っきくなって、必ず帰ってきますから」
ばつと顔を上げたシャニーは宣戦布告を突き付けるように、鮮やかな青の瞳でキツとイドウヴァを見据えてハツキリと断言して見せた。
(絶対に、返ってくる!)

生きて、生きて生きて、そしてイリアの地を再び踏み、この地に暮らす人々を照らす希望となる。その誓いを胸に、一歩踏み込み団長の目をギツと睨んで離さない。

「その間、イリアの人々をお願いします」

青き明眸は切れあがり、刃となって団長へ迫った。

にもかかわらず、イドウヴァはハツキリ顔に困惑と失笑を浮かべている。悔しい。どうあつても、今のままではこの人には勝てない。

「あなたに言われなくとも、団長の私が全責任をもって指揮していきますから、あなたは自分の任務にだけ集中しなさい」

(その言葉に嘘があつたときは……ッ)

それでも、シャニーの瞳に宿る焔が萎むことなどなかった。一歩退いて再度頭を下げると踵を返し、ルシャナを連れてエントランスに向けて歩きだす。

背中にどんな侮蔑を浴びせられようとも、もう決心して誓いと胸に刻んだのだ。新たな礎を自らに築き、イリアに春を呼ぶための希望となる。

それを掴むための旅路。エントランスを抜けた彼女は、扉を開けて城の外へ出てまっすぐ歩いていく。様々な人々の笑顔を思い浮かべながら沸きあがった怒りを鎮め、春陽の風をまよって外門まで辿りつく。そこには、先に出発の準備を終えて待機していたミリアとレンの姿があつた。二人にいつもの戯れあう様子はない。時を知らせる

リーダーと副将が現れて、一層に顔が引き締まる。

「カルラエの城に、敬礼！」

シャニーが先鋒となり、一年世話になったカルラエ城を全員で見上げ、凜々しい声が響く。

こんなにも……大きくて白い城だったか……。次見られるのは、いつになるか分からない。そう思うと、今でもこれは夢ではないかと頭が揺さぶられる。

「みんな、しっかりと焼き付けよう。あたしたちが帰る場所を」

その気持ちを払って自身に言い聞かせるように、シャニーは皆に声をかけた。必ずここへ帰ってくるから、互いに頷きあいながら。

（イリアのみんな、必ず帰ってくるから。イリアの希望になれるように、あたしががんばって行ってくるよ）

この場に見送りに来てくれる人は誰もいない。だけど、心の中にはいつもある。どんな時でも、どんなところにおいても、繋がっているのだと言ってくれた民の声。自らの足で行く先を決め、自らの手で軌跡を刻んで、全てを手に入れて帰ってこいという姉の激励が。

彼ら全てが手を振ってくれている気がして、城を見上げる顔は自然に笑顔が浮かんだ。

「みんな、もういいかな？ いいよね」

風の吹き抜ける音だけが聞こえてくる。どのくらいこうしていたか分からない。なのに、自分も、仲間もまるで動かず、シャニーは見渡しながら別れの時を告げる。

「早く行こうッス。動けなくなっちゃいそうッス……」

皆も同じ気持ちのようだ。ミリアの震える声に仲間がうなずくと、シャニーは笑顔をそっと隠して再び凜と号令をかける。

「第十八部隊、これよりリキアへ向けて作戦を開始する！」

もう戻らない時。リーダーの号令に、全員が天馬にまたがり城へ背を向けた。

目指すは遙か南方の地、リキア。全くの未知が広がる世界へたった四人で飛び出す不安が、手綱を握る手にじわっと汗を滲ませる。それでも、時を知らせるように吹き込んできた暖かい春風に背中を押され

て、シャニーは拳を突き上げた。

「それじゃ……、いっくよー！」

一気に飛び出し、白い羽が舞う。高空へと翔けあがった天馬は、あつという間に蒼穹の彼方へと吸い込まれてカルラエの地から姿を消した。

(リキアでの仕事……どんなだろう、ワクワクするよ！)

あの空の向こうに、きつと新しい世界が広がり、そこに必ず大事なものがある。そんな予感に心が天馬を超えていきそう。

夢を抱き、希望を映す青き明眸は、繋がれた鎖から解き放たれて大きく羽ばたいた。

風薫る妖精嵐舞

なんとかなるつしよ！

イリアの高い山々を天馬のトップスピードで跳び越えた昨日は、地獄の寒さで危うく死ぬかと思った。

山越えをする前に一晩宿で休む計画だったけれど、どうしてももう振り向きたくなかった。一気に国境を越えてしまったおかげで、計画は全部アウト。近くに良い宿を見つけられず、結局野宿する羽目に。

こうなると分かっていたから事前に取り決めたのに、あときは握る手綱を止められなかった。誰もなにも言わなかったから、きつと同じ気持ちだったに違いない。

皆で震えて肩を寄せ合いながらの野宿。あまり幸先の良いスタートではなかったが、一晩明ければ全部リセットだ。

髪を風に流していると、自然と笑顔になれる。頬を撫でるように抜けていく、優しく暖かい風が教えてくれるからだ。

もうすぐ、リキアに着く。眼下に広がる緑も、鮮やかさがどんどん元気に増して心を弾ませてくれる。いつの間にか、鼻歌をうたっていた。

「リーダー。サカ、リキア境界点を通過」

レンの声に後ろへ合図を出しながら、その場に天馬を止める。

青々した緑が眼下で風にそよぐ。視界を上げれば遙かむこうまで山々が連なり、ゆっくり雲が流れていく。この穏やかな気候は間違いない——リキアだ。

「おー！ すっごーい。ついに来たね！ 夢の地リキアー！」

思わずトーンが高くなる。これからなにが始まるのかと思うと、いても立ってもいられない。

「なんだか宝探しの海賊みたいなのりだね」

「シャニーが船長の船に乗ったら、すぐ沈みそうで怖いッス」

鼻歌をうたっていたらルシヤナの呆れ声が聞こえ、ミリアまで茶化してくる。いつもなら反撃するところだが、宝探し——言い得て妙かもしれない。

「見つけるよ、宝物をさ。このリキアで、絶対に」

朗らかながらも、決意を語るシャニーの青い瞳は緑の大地をはつきり見つめて強い。一度は面食らったような顔をしたルシヤナだったが、すぐに笑いだした。

「ははっ、意外に真面目だったわ」

「あたしはいつも真面目だし！」

言い返しても鼻で笑われた。ぶうつと口を尖らせて見せて反論しようとしたら、ルシヤナは続けてきた。

「そうだね。それが私たちの仕事だね」

「そゆことー」

新しいものを掴むためにリキアへ来た。いつまでも入口の前で眺めていても仕方ない。

「よっし、一度降りてみようよ」

「イエス、リーダーー！」

早く大地を踏みしめて確かとしたい。

合図を出し終りもしないうちに、空色のマントをなびかせながらシャニーは天馬を降下させ始めた。

緑は深く、大きな街はまだ先のようにも不安はない。12月にも一度リキアに来ているからだろうか、不思議な自信が湧いてくる。

「いや、シャニーはリキアを知ってるんスよね。頼りになる背中ッス！」

後ろから聞こえてくるミリアの安堵は明るく、楽しげに弾ける。見習い修行さえしていない彼女やレンにとっては、国外に出ること自体が初めてのはずだ。ただでさえ心細いに違いない。

そうでなくとも、すでに国境を越えて、騎士団の保護から外れた未知の世界にいる。ここからは、本当にリーダーとして引っ張って行かないといけない。その意味では心配もあるが、どこへ行くのも自由と

思えば悪くない。

(何だか……傭兵団にでもなったみたいだなあ)

無意識にディークを思い出していた。

いつも彼はどんな気持ちで仲間を、自分を引っ張ってくれていたのか……。彼の背中に不安を感じたことはなかった。きつとそう言うこと。自身に言い聞かせ、仲間を背にリキアの地を踏みしめる。

(まさか……こんな形でまたリキアに来るなんてなあ……)

小高い丘に自分の足で立ってみて、あらためて実感する。この地が、リキアなのだ。

柔らかい草のにおい、温かい空気。穏やかな風がそよぎ、新緑は遙か先まで続く。むこうを見下ろせば畑仕事をする人が見え、地平線まで舗装も無いあぜ道のような一本道が続いている。

穏やかで、心を落ち着かせてくれる地。本当は、ロイとデートで来たかった場所だ。それがまさか……。

考えに耽っていると、後ろからぽつりと漏れる声が聞こえてきてハツとする。

「雪がない……」

人生で初めての光景を前に、レンが銀色の瞳を真ん丸にして呆然としていた。

シャニーも見習い修行で初めてリキアを訪れたときを思い出した。まるで、絵本で見た天国が広がっているよう……あのときはそう思った。そして、今もだ。

「ひゃー、温かいツスねえ。ちよつと失礼して……」

しばらくはしゃいでいたミリアがふいに手を取ってきたと思ったら、木陰に連れていかれる。

「ちよ、ちよつと?!」

「シャニー、動かないで欲しいツス!」

イリア仕様の服装では暑かったらしい。シャニーたちを目隠しにしていきなり服を脱ぎだした。仲間たちが驚いているうちに、せつせと着替える手際の良さはどこか手馴れている。こんなところで堂々とよくできるものだ。

(でも……やっぱりこの服、暑いな。いいなあ……ミリア)

見透かされたようにミリアに目で合図され、シャニーもガマンできなくなった。昨日から、もうなんでもアリになってきた気がする。結局、全員着替えることに。

「いやー、噂には聞いてたけどいい気候ツスねえ」

草のじゆうたんに寝そべったミリアから気持ちよさそうな声が漏れている。

「へっへーん、スゴイでしょ！ ごはんもおいしいんだよー！」

腰に手を当てながら、やたらと得意げに話すシャニーはまるで観光ガイドかなにかのようだ。

おまけに彼女の口から出てきたのは食べることに食べようかとニコニコする彼女の脇腹を、後ろから歩いてきたルシャナが突っついた。

「なんであんたがお国自慢みたいなことしてんのよ」

舌をペロツと出してシャニーは笑ってみせた。

まるで遠足に来たかのような空気だが、左遷されて連絡所に向かう途中なんて考えるよりよっぽどいい。リキアは第二の故郷と言っている。みんなにもきつと、リキアを好きになつて欲しい。

「えへへ。さ、はやく行く。オスティアまで、まだまだ時間かかるよ」
ほつとするのは目的地に着いてから。早く着任しないと、辞令自体は4月のうちからとつと出ていっているのだから遊んでいる暇などない。

なのに、声をかけても、寝転がるミリアたちの名残惜しそうな眼差しが訴えてきた。

「そー！ 遊んでるんじゃない！」

それが、ルシャナの眼光を浴びた途端に彼女たちは飛び上がった。なんんだか、複雑。

「じゃあシャニー、連絡所まで案内してよ」

部隊長のように仕切るルシャナからさらっと振られ、毛が逆立つようにビリビリきた。まさか、一番に飛びあがるハメになるとは。

「えええ?! あ、あたし知らないよお?!」

行きつけの店に連れていくかのように自然な話の振りだったが、目

的地までの航路なんて頭になくて悲鳴をあげた。

むしろ、事前に調査がいると口にしていたから、そのままルシヤナたちが調べてくれていると思っただけくらいなのに。それでも周りは許してくれなくて、それどころか点になった視線を一斉に向けられ、みるみる血の気が退いていく。

「えっ、あんた、リキアは詳しいから任せろって。この前も来たんでしょ？」

遊びに来ているんだから知っていて当然——ルシヤナはそんな感じ。冗談ではない。簡単にリキアと言ってくれるが、いくらなんでも無茶振りだ。

シヤニーはブンブンと首が吹っ飛びそうな勢いで何度も横に振る。「リキアだったって広ついじゃん！ あたし知ってるのフェレくらいだよ」

顔をくしゃくしゃにしながら、手をばたばた広げて無理と叫ぶ。

12月のときは、もともとはオステイアやバトンも回る予定だった。でも、ロイの厚意でまるまる一か月をフェレで過ごしたから、それ以外の場所なんて地理どころかイメージすらない。ベルン動乱で一度降り立った地といっても、あのときは必死でただ草原が広がる場所としか記憶になかった。

やられた……ルシヤナの顔がありありそう伝えてくる。

「あんたの任せろは相変わらず信用ならないわー」

ルシヤナの厳しいため息が突き刺さって、シヤニーは口をへの字に曲げた。

お互いの確認不足なのだからあんまりな言い方だし、本当は言い返したいところ。

それでも、ぐっと飲み込む。たしかに、雑談の中で任せろと言った記憶はある。それはウマいリキア飯のことだなんて、今言ったら八つ裂きにされそうだ。

「さっそく迷子ツスね」

「ん、前途多難」

まだスタートさえしていないのに始まった立往生。なのに、頭の後

ろで手を組んで、他人事のようなミリアの口調はどこか楽しげ。

「どーすんのさ、リーダー」

無理と言って一度は返したはずが、一周して戻ってきた。またルシヤナから厳しく投げつけられ、げつと口元が歪む。おまけに、今度は皆の注目が一齐に集まり、突き刺さる視線によろけて後ろに退いた。

「あたしのせいなのお?!」

他に誰がいる——はつきりと3人の目がそう伝えてきて、ぽつきりと首を折った。なんと酷い部下を持ったことだろうか。

泣く泣く差し出された爆弾を受け取ると、仲間たちの笑い声があたりに響いた。

(トホホ……これもリーダーの宿命ってヤツ?)

デイークのように背中中で引つ張って行こうと意気込んでから、まだ10分も経っていないうちにこれだ。

部隊長は辛い仕事だと自身を慰めながら、いつまでも笑っている部下たちに咳ばらいを浴びせて仕切り直直す。迷子たちを導いてやるのも、部隊長ならしかたあるまい。

こんなところでいつまでもぶらぶらしていたら、今日もまた野宿コース。もうそれはイヤだ。

「ま、いいや。よーし、じゃあ、あたしについてこーい!」

底抜けの元気が蒼穹に響く。

分からないのに、いつまでもここで考えていたってお腹が空くだけだ。手を挙げて音頭を取り、天馬へと戻る。

「ま、いつか」はシャニーの危険なフレーズなんだよなあ……」

後ろからひそひそ聞こえてくる。いや、隠そうとも思っていないに決まっている。ここは部隊長としてガツンと見せてやろうと振り返ったら、ルシヤナから先制パンチが飛んできた。

「で、場所分かってんの?」

「知るワケないじゃん? どっち見たって山だらけなんだし」

あつさり返して再び歩き出そうとしたが、後ろの気配が動かない。

仲間たちの顔は引きつっていた。おいでと手招きしてみたが、彼女

たちの顔は固まるばかり。

「大丈夫だって！　へーき、へーき！」

道が分からないくらい、なんだと言うのだろう。

なにかを警戒するように、ルシヤナたちは相変わらずついてこない。そのまま天馬のもとまで戻り、彼にかけた鞆の中から地図を取り出して大きく振って見せた。

「地図はあるんだし、あたしたち、天馬騎士なんだよ。このくらいよゆうだって！」

地図さえ読めれば、どこにだって飛んでいける。山でも川だろうと関係なく、遠くまで見通して高速に飛んでいけるのが天馬騎士だ。こんなもの、ピンチでもなんでもない。

「さすが、見習い時代を転戦、転戦で飛び回っていただけはあるツスねえ。やっぱり頼りになるツス！」

「能天気なんだか頼りになるのやら……」

ルシヤナの呆れ声など聞こえない。褒めてくれるミリアの言葉を何度も再生しながら鼻歌をうたう。

（オスティアはここでしょう？　だからー、出発地点は……つと。えーと……）

急に嫌な予感が走った。

鼻歌が尻すぼみになつて、そして……止まった。

「と、言うわけでレン、ここがどのあたりか計算できないかなあ？」

彼女の話に乗りかけていたルシヤナたちの肩がぐくくと崩れる。

結局、現在地点が分からなければ地図があろうがどうにもならない。

やっぱりダメじゃん——仲間たちの物言いたげな視線が突き刺る。これは許してもらえそうにない。

「さっそく、よゆう」じゃないツス」

「シヤニー、無茶振り」

頬をぶくつと膨らせて文句を零すレンの横では、ミリアがまた他人事のように笑いだしている。相変わらずジト目のルシヤナを筆頭にまた3人から視線を浴びせられ、苦し紛れに頭をかいて舌を出してみ

る。

「へへっ、じよーだんだよ、じよーだん」

分かれればラツキー程度で聞いたつもりだったのだが、仲間たちは違
うらしい。ますます顔に不安が広がった気がする。

別にまだ全然平気だ。彼らの注目を惹くように駆けだして、遠くを
きよろきよろしてみる。上空から見た感じ、むこうには畑が広がって
いて、小さな集落があつたはずだ。

仲間の不安を断ち切るように、シャニーの明るい声が草原を駆け
る。

「人に聞きながら行けばへーきだよ。さっそく聞きに行こう！」

むこうに煙が昇るのが見え、畑を耕す人が傍にいる。分からなけれ
ば聞く。旅のキホンだ。この未知を切り拓いていくのも、楽しい旅の
一部。

「……あいつの『へーき』だとか、『よー』はマジで信用できない
ね」

「ん、危険」

相変わらずひそひそやっている。ちよつとは信用すればいいのに。
やっぱり、デイークはスゴイ隊長だったのだと今さら思い知った。
信用できないとか、危険だなんて彼を思ったことなど一度もない。

「聞こえてるぞ！ 大丈夫だつて！」

とにかく、彼女たちをまずは安心させてやらないと、この調子で突
かれ続けたらさすがに穴が空く。

畑作業をする男性を見つけ、「すいませーん」と駆けながら声をかけ
る。

「ここって、リキアのどのあたりなんですか？」

「おや、どこかの騎士さんかい？」

おかしなことを聞く……男性の顔はそう言っている。こんな山の
中まで来たなら分かるだろうと思われても仕方ないか。道に沿って
徒歩で来たなら、そうかもしれない。

「あたし、イリアの天馬騎士なんだ。リキアのことよく分からなくて」
「ほく、天馬騎士なんて珍しい。若いのにこんなところまで大変だな」

内心、えつと驚いた。

リキアは第二部隊の営業先だったはず。天馬騎士がリキアにいても不思議ではないのに。稼ぎにならない田舎には、足を伸ばしていないということだろうか。……新規開拓先として覚えておこう。

男性は気さくに地図を指さして現在地を教えてくれた。

「わく、助かったよ、おじさん。ありがとう！」

現在地さえ分かればこちらのものだ。不安が吹き飛んだとたん――お腹が……すいた。

「あ？っ……」

時が止まる。のどかな田舎には、腹の音を遮ってくれるようなものはなにもない。

昨日ありつけるはずだった宿での夕飯は抜き。朝だつて当然食べていない。レーションだけでもつわけがない。

「あ、あはは……お腹ペコペコで」

「なんだ、腹空かせてるのか。迷子に空腹は堪えるだろう、ちよつと待っていなさい」

そう言つて男性は、畑の端に置いていた包みを持ってきて渡してくれた。

「ええ?! いいの? これ、おじさんのお弁当じゃ」

「俺は家に帰れば食うものはある。君たちはリキアに働きに来たんだろ? それ食つて、俺たちの生活をよくしてくれよ」

「ありがとう! うん、がんばります!」

不安だった心に、また一つリキアでの目的ができた気がする。

よそ者にこんなに優しくしてくれるなんて、リキアの人は何んと温かいのだろう。連絡所での仕事がどんなものかは分からないが、きつと男性の言うようにリキアに尽くそうと思った。

さつそく仲間たちのもとへ戻り、整えないままの爆ぜる息に任せて南を指さす。

「この南に伸びてる太い道が、オスティアへの街道なんだつて!」

その先には、舗装されていないものそれなりに太い道があり、緑の広がる世界の中でくつきりと白土色の軌跡を描いて誘ってくる。

仲間たちの顔に安堵が浮かんでいる。これなら少しくらい休憩しても大丈夫だ。きつと彼らもお腹を空かせているはず。

「はい、これ。お腹ぺこぺこって言ったらもらえたんだ！ ラツキーだよね！」

袋の中身を手に取って皆に見せてみた。入っていたのはおにぎりだ。珍しい、米なんて食べたことはほとんどない。堪らずヨダレがジュワつと出てきた。

みんなも米に驚いているのかと思ったが、このぎよつとした視線はどうにも違うらしい。

「あんた……物乞いしてきたの？」

ルシヤナはいきなりおにぎりを取りあげ、取り返そうとした手を叩かれてしまった。低い声とともに飛んでくる怖い視線に、ビクツと固まりかけて首を振る。

「違っつてば！ くれたの！ 好意だよ、善意だよ！」

とんだ誤解だ。ルシヤナは「ふーん」と返すだけで、結局みんなで村人へお礼に行った。

村人からあらためて道を聞き、やはり街道を南へ進めば良いと確認できた。

「じゃあ、このまま道に沿ってまーっすぐ行けばいいんスね」

ミリアが額に手で庇を作って、地平線のむこうを覗きこんでいる。

一緒に見つめてみる。どこまでも続く蒼穹と山々。道が分からな
いときは不安もあつたけれど、今は明るい色合いが希望を湧きあがら
せてくれる。

「うん。途中で西に分岐しないと、フェレに行っちゃうけどね」

仲間に地図を使って説明しながら航路を練っていく。

フェレ——自分で口にして、ロイの顔が浮かんで唇を噛んだ。もう
こんなにも彼に近いところまで来たというのに、今はそれが逆に辛く
て堪らない。

「おっ、ロイ様がどんな人か見えるんスね！ 顔出しに行くんスよね
？」

ミリアがノリノリに声を弾ませだした。その声が、重くのしかかっ

てくるように感じる。

みんなにもロイを紹介したい。強くて、優しく、素晴らしい人を知ってもらいたい。けれど、今は無理だ。

(あいたいな……。でも……)

誰か一人に逢えるなら、百回とも間違はなく選ぶ相手。一番に今の気持ちを聞いてもらいたい、心から信頼できる憧れの人。

顔を出せば、彼もきつと喜んでくれるに違いない。だからこそ、怖くて行けなかった。こんな姿を見せたら、きつとがっかりさせてしまうに違いない。

「……今はオスティアに急ごう！ お仕事、お仕事！」

今の状態をいったい手紙になんと書けば良いのだろうか。その気持ちを持ち払い、心の中で何度もロイに詫びながら天馬のほうへ歩きだす。

仲間たちがまたついてこない。振り返ったら、ミアアが困惑した顔を浮かべ、彼女のお尻をルシヤナがなにやら引つ叩いている。

「はやく行こーよ！ お腹すいてきちやっただよ！」

「燃費の悪いやつ……」

先に天馬に乗って空に出たところで、ようやくルシヤナから反応が返ってきた。

もう一度、空から南を見つめてみる。あの青空の向こうに、彼がいる。

(はやくロイ様と会えるように、しっかり仕事しなくちゃ)

リキアに来た意味をあらためて噛みしめ、仕事の中心となるであろうオスティアにある連絡所を目指す。離れ行くロイに手を伸ばす気持ちと、目の前に広がる新しい仕事への希望と不安に揺れながら。

連絡所と書いて、おばけ屋敷と読む?!

一時はどうなることかと思つた空の旅。一度出発してしまえばびつくりするくらいスムーズだった。

あれだけ信用できないとか散々言つてくれた仲間たちもすつかり静まり、コンパスと地図を交互に見ながらシャニーはひたすら先へと進む。山の緑だらけだった景色はあつという間に拓け、見えてきたのは人の営みを感じさせる風車にサイロ。奥には小麦畑の黄金がじゅうたんのように広がる。

そのはるか先に、色とりどりの屋根や巨大な白き外壁が見えたときには、さすがに胸をなで下ろした。城壁の外へと天馬を下し、立派な外門をくぐつて小走りに足を踏み入れる。

「ついに来たぞー! 花の都オステイア!」

迷子から脱し、たどり着いた喜びにトーンが上がる。

うんと大きく身を反らして両手を広げ、シャニーは全身へオステイアを浴びせた。

大移動で途中いろいろあつたが、とくに問題なくスタートラインに立てたわけだ。このオステイアで、これからなにが起こるだろう。

(ここから始まるんだ。いよいよだつ、がんばろう!)

首からかかるロケットをぎゅつと握りしめ、皆を思い出しながら自身を鼓舞して最初の一步を踏み出した。

質実剛健な造りの外門を抜けると、もう人がごつた返している。周りには商人も多いが、街の中へと進むにつれ、一般市民がどんどん増えてくる。どの顔も笑顔がはじけ、まるでベルン動乱なんて戦争そのものが無かつたかのよう。

復興の最先端、光の地……そう呼ばれる所以を目の当たりにして、あたりをきよろきよろ見渡す。

「人口三百万。リキア同盟主リリーナ女侯が治める地……」

突然にミリアが街を説明しだした。これがレンならいつものことだし、ふんふんと聞いているのだが、ふだんそれを半分聞き流しているようなミリアが言うから振りむいてしまった。レンたちもぽかん

としている。

「すつごーい、ミリア勉強してきたの？」

人口やら街の歴史やら……ツアーガイドのように説明するミリアに拍手してみたが、途中から首を傾げた。やたら耳にスムーズに入ってくると思ったら、自分が掴んできた情報と同じ気がしてきたのだ。やっぱり、ミリアが事前に情報収集するなんて珍しい。手元を見たら、彼女はなにか本を見ながら喋っていた。

「つて、この雑誌に書いてあるツス」

照れながら彼女が見せつけてきた本に苦笑い。そんなことだろうとは思ったが、グルメ雑誌だった。街の紹介の冒頭を口にしていただけ。開かれたページは店の紹介か、料理がドンと飛び出している。

「あ！ あたしもそれ持ってきたよ、どっかで聞いた文脈だと思っただよねー」

「おつ、さっすがシャニー。話が分かるツスねえ！」

雑誌を指さしながら一緒にグルメ探し。やっぱりこういう大きな街に来たら、気になるのはグルメと決まっている。

「部隊長が引き締めるどころか煽ってどうするの」

せつかく着いたのだから、ちよつとくらい許してくれたって良いのに。ルシャナは相変わらず厳しい。

「シャニー、事務所、探そ」

マントを引つ張つぱられ、振りむいた先でレンがぶくつと頬を膨らせていた。ミリアと一緒にペロツと舌を出して反省しておく。

しつかりしろとルシャナにお尻を叩かれて、反射的に体が反ったシャニーは体を街の中央へと向けた。

「オツケーー！ じゃあ行こう。住所からすると……こつちかな？」

緊張がほぐれた一同はずんずんと中央通路を歩いていく。

天馬騎士団の連絡所がこの街にあるはず。前任者から早く引継ぎをしないといけない。先頭を歩き、あたりを見渡しては地図を丸で囲んでいく……ルシャナにバレた。

「あんた、さつきから店のチェックばかりしてるでしょ！」

「あはっ、そう怒らないでつて！ お昼ごはんのために必要な情報だ

し！」

オステイアはリキアで最大の都市だ。商業や交易も盛んで、ここが港町バトンに無いものは、リキアのどこに行っても無いと言われるほどの要衝。もちろん、食だって西のエトルリアから東のベルン、北のサカヤイリアと文化が融合して食の宝箱と言われるくらい。

「それでね！ スーツもおいしいらしい——」

「いい加減にしようか？ 部・隊・長？」

「あ……ハイ」

いきなりルシヤナに角が生えて戦慄が走る。しかたなく前を向いて空を見上げたら、青に映える白いものが入ってきて思わず吸い込まれてしまった。急に立ち止まったからか、後ろから三人が次々激突して転びかける。

（あれが……お姉ちゃんが言ってた白の巨城……）

見上げる先には立派な城。復興の象徴——新オステイア城がそびえていた。

圧倒的な存在感。これがあれば、市民が安心できるのもうなずける。陽に映える白の巨城は街を見下ろすようで、イリアにあるどの城よりも、高い空から頼もしく包んでくれる。姉が圧倒されて帰ってきた理由がやつと分かった。

その大きさに、思わずぼかんとしてなにも言葉が出てこない。人は本当に感動したら、ただ見つめるしかできないのかもしれない。

（あんな城をイリアにも……うん！ がんばるぞッ）

ただ圧倒されて羨ましがってはられない。イリアの国力向上を任されている身なのだ。あれほどの城が建つくらいの国にできれば、きつと人々も安心できる。

自分が抱いた気持ち、彼らには日常として欲しい。リキアでの見聞をぜんぶ吸収し、必ず姉の志を継いでみせる。ぐつと手を握ったシヤニーは、あらためて決意を心に燃やし一步を踏み出した。

……はずなのだが、そう長く続かなかった。

「ああ、洗濯される気分ってこんなだったのかー」

先頭でもみくちやにされるシヤニーから漏れ出すのは、上級天馬騎

士とは思えない情けない声。

街の中央に近づくにつれて増える人通り。行きかう人の間に挟まれてペしゃんこにされそうだ。天馬を連れて、鎧も装備しているからとにかく被弾する。右の肩にぶつかってよろけたと思ったら、今度は左の肩が跳ね飛ばされる。後ろからルシヤナの笑い声が聞こえてきた。

「どんな気分よ。でもホント……すごい人だね」

こんなごった返す街はイリアにはない。なにもかもが違う。これが復興の最先端なのだ。洗礼を浴びるようだ。

でも、そんな荒波も一步横道に入れば嘘のように静まり返った。



連絡所の住所を追って喧騒から抜けると、別の町みたいな光景が広がっていた。

ここはオステイアでも旧市街と呼ばれる地区で、エデツサやカルラエとたいして変わらない、落ち着いた街並みが続いている。違うのは家々の色や、雪がないことくらい。こんなところに連絡所などあるのだろうか？

「ねーねー、シャニー。本当に合ってるんスカ??」

「ぐえつ?! ちよつとミリア、引っ張らないでよお!」

マントを引っ張られて転びそうになった。ミリアの声は不安そうに励ましてやりたいところだが、毎度みんなして引っ張るから堪らない。

「だって、このマント便利ッス」

「ん。呼ぶときも、暴走を止めるときにも、とりあえず引っ張ればいいし」

「手綱じゃないんだからさ……」

ミリアもレンも、まるで悪気なく言ってくれる。

たしかに、不安ではある。こんな路地にある連絡所なんて想像がつかない。あまりにも閑静で生活臭にあふれた下町だ。

「うーん、間違いないハズなんだけどなあ……」

シャニーは答えてみたものの、自信が湧かず声は尻すぼみ。足どり鈍く、立ち止まってきよろきよろする頻度は明らかに増えた。

(こんなところまで来て迷子とか、カンベンしてよお〜……)

不安に眉をひそめたシャニーは、小走りして近くにいた住民に声をかけてみた。

「こんにちはー。ここらへんにイリア天馬騎士団の事務所ってありますか?」

「騎士団の事務所?? こんな旧市街で探してるのか? 騎士団ならオスティア城だろ?」

「あはは……そりゃ、そうですよね〜」

別れて首を傾げた。ご説ごもつとも言える。自分だって、住所を知らなかったら旧市街など訪れたりはしない。

(近隣の人が知らないって……どういうコト??)

結局、今までと同じようにするだけ。街灯に刻んである番地を確認しては、困惑しながら歩く。

その足どりに少しずつ力が込もりだす。手元の地番にどんどん近づいてくる……ついに止まって郵便ポストに顔を近づける。手元にメモした住所と郵便ポストに記されたそのの間を視線が行ったり来たり。そのうち、諦めたようにシャニーは顔を上げた。

「着いた……ここだよ。住所の場所。うん……間違いない」

騎士団の連絡所と聞いていたから期待していたのに、目の前にあるのは周りと同じ。どう見ても民家だ。ホントにココ?? —— 仲間の視線が突き刺さるが、自分だって聞きたかった。

眉をハの字にしながら、シャニーはドアをノックした。

「ごめんくださーい! イリア天馬騎士団の連絡所と聞いて伺いました!」

爽やかな声は、この住宅街にはあまりに元気すぎたようだ。

何事かと、遠くを歩く住人が振りむいた。この反応一つとっても、ふだん騎士なんか来ないと教えてくれる。おし寄せる沈黙、膨らむ不安。きよろきよろ、ジリジリ落ち着かずには繰り返す。

やっとドアが開いて姿勢を正すが、今度はそちらに面食らって全員

が一步退いてしまう。

「……なんだ、お前たち」

出てきた女性の風貌に、シャニーは思わず息を呑んだ。

やっぱり、来るところを間違えたのだろうか。まるで整えていない伸び放題の黒髪、ジャージにサンダル……とても騎士団の人には見えない。

でも、黒髪の間から光る、突くような視線だけは刀のように鋭い。ギツと見つめられ後ろに退きかけたが、背後にいたミリアにぶつかって跳ね出されてしまう。

(うわぁ！ 近っ……怖っ！)

心臓がバクバクする。早くこの緊張から解放されたくて声を張りあげた。

「あたしたち、リキア連絡所所属を命じられた第十八部隊です」

今でも、ここが連絡所で、目の前のおぼけのような人が天馬騎士とは思えない。疑心を隠しつつシャニーが敬礼して見せ、仲間もそれを追う。

鼻から息を抜きながら面倒くさそうに敬礼を返してくるあたり、いちおう間違いではなさそうだ。……イメージとはぜんぜん違うが。

「部隊長のシャニーです。よろしくお願いします」

かばんから名刺を取りだして黒髪の女性に渡す。彼女は名刺とシャニーを交互に見ながら「ふうん」と、なにか言ったのか、単なるため息なのか分からないような声を漏らしている。

その視線は相変わらず恐ろしい。じろじろ舐めるように……というより、刀で撫でられるようで、触れただけで斬られそうだった。

「連絡所ねえ……」

しばらくして、名刺を懐から取り出したケースにしまった女性は、鼻で笑うようにそう返してきた。

——これがそうだと思うか？

まるでそんな声が聞こえてくるよう。そんなもの、こっちが言いたかった。

「まあいいさ、入りなよ。そんなところに突っ立ってたら邪魔だよ」

手招きして女性は民家へと戻っていった。

シャニーたちは互いに顔を見合わせて先頭を譲りあっていたが、彼女以外の心は決まっていたようだ。ブレーキをかけるシャニーの腰を、三人がかりで中へと押し込んでいく。

あらためて、ひどい部下を持ったものだ。背後の連中に恨めしい視線を送りながら、おっかなびっくり先頭を歩く。視界に入ってきたのは、予想どおりどこにでもある民家の土間。

「ほら、んな鎧なんか外してしまいな。こんなところ誰も来やしないよ」リビングと思しき場所まで入ってくると壁を指さされた。鎧かけがあるにはあるが、あれこれ積まれて埃だらけ。

気楽に行こうぜ……そんな風に言われている気がして、シャニーはレイサを思い出していた。どこか似た空気をこの黒髪の女性は放っている。年はもつと上で、どちらかと言うと婆さんに近い……50代だろうか。

(やっぱり……このままじゃ仕事はなさそうだ)

鎧を外してあたりを見渡すと、一気に静寂が耳を突いてくるようになる。むこうには事務机があり、そこも物置になっていて仕事をしている形跡はない。

「おっ。ねえねえ！ あれ見てよ！」

いきなり頭の中から声がした。今までずっと頭の中で、オステイアを物見遊山するように眺めていたセチが妙に興奮している。

彼女が視線を引っ張る先にあったのは一本の剣だ。サカでよく見かける片刃で反りの入った剣……いわゆる太刀が立ててある。

「剣だね。……太刀かな？」

「そうそう！ いやあ、この時代にもあったんだ。良かった、良かった」

何事かと思つて期待したのが間違いだった。セチはいつもこう。剣のことになると目が輝く。実体を持たない彼女は体から跳ね出ると、剣のところまで飛んで行ってじっくり見つめている。

他の人にセチは見えないらしいし、笑って流せばよかったのだが、つつい話に合わせてしまった。

「太刀に興味があるの？」

「興味って言うか、私の得物だよ。キミも太刀使いなら、みっちり教えてあげられるんだけどなあ？」

彼女は目元をニヤツとしたかと思うと、物言いたげにずっと寄り添ってくる。

「なっ、なにさ、その目」

「キミ、どーせ剣も使うんだし、太刀使いにならない？」

「なりませんっ！ あたしは天馬騎士なの！」

「ふうん？ 天馬騎士ならなおさら興味持つて欲しいところだよ」

セチは諦めてくれない。反応するまで顔の横にくっついていたりもりだらうか。観念しておいたほうが良さそうだ。

「ならって、どういうこと？」

「剣の扱いに長ければ、もっといい仕事だつてとれるようになるじゃない。マフィアをぶっ潰すとか、伝説の竜をぶった切るとか！」

「……それ、セチが戦いたいだけでしょ？」

穏やかな風の精霊と聞いていたが、穏やかなのは口調だけで爛々とした目は相当の戦闘狂だ。ナイナイと手で払い、しばらく部屋の中や机を物色していると、女性がお茶を運んできた。

「ようこそ、片道切符の連絡所へ。私はユキ」

初っ端から単刀直入な言葉を浴びせられ、のどが絞まって名乗りかけた言葉が引っ込んだ。分かってはいたって、この静寂の中でこれだけはつきり言われたら、頭が現実に揺さぶられる。

ユキと名乗った女性は、反応を楽しむようにマジマジ眺めてふっと笑って見せてきた。

イリア人の名前らしくない。そう言えば容姿も……。ベルン動乱で各地をまわったときに覚えた名前や容姿の特徴を思い出してピンと来た。

「なんかサカの名前みたい」

「よく分かったね。私の父がサカ出身でね」

イリアとリキアの間にある遊牧民の国サカ。どおりで顔つきがイリア人と違うと思った。

とっかかりを見つけ、シャニーの声に明るさが少し戻る。

「どおりで。剣士さんですか？」

さつき見つけた太刀を指さす。サカの血が入っているならあの刀も、この風貌も納得だ。

だが、それを言ったとたん。黒髪がずいと乗り出してきて、髪の間から光る眼が斬りかかってきた。

「近づ、うわあっ?! くくく——ッ」

「あんた、自分が剣士って言われたらどんな気分だ？」

あまりの威圧感に思わず引こうとして椅子ごとひっくり返る。仲間から憐みの眼差しを受けるが、今も見下ろしてくるユキを見上げるしかできなかった。驚いたのは眼光の鋭さだけではない。

「あたしが剣使いって分かるの?!」

自己紹介などなにもしていないのに。瞬時に見抜いたというのか、この人は。

「あつたり前だ。立ち姿見りや分かるでしょ、同じ道歩いてりや」

どうやら彼女も本当に天馬騎士で、それに矜持を持っているらしい。自分以外にも天馬の剣術騎士がいたなんて。その驚きよりも、帯剣もしていないのに、立ち振る舞いだけで見抜かれたのが衝撃だった。

「ハッ。その年で部隊長とは、ずいぶん面白いヤツが来たと思ったけど、剣使いとはまた面白いもんだ」

ふいにユキに笑みが浮かんで機嫌よく喋りだした。さつきのおぼけのような雰囲気とはまるで別人。

「それにしても、部隊ごと飛ばされてくるとは、よっぽどのことしたのか?」

頭を擦りながら座りなおしたら、さつきより明るいトーンが飛んできた。同じ道を歩む者と、少し親近感でも持ったのだろうか。

でも、その声は明らかに嘲り笑っていて、なんだかバカにされた気がして口調が強くなってしまふ。

「あたしたちはなにもしてない! リキアでたくさん勉強するために来たんだ!」

少々言いすぎた……そう思ったのは一瞬だった。ユキはふつと鼻で笑って返してきた。

「ああそう。無駄だと思うけどね」

思わずムツとしてしまう。気にすることなく、ユキは飄々とした態度でお茶を楽しんでいる。あの剣に対する態度からして、不真面目な人とは思えない。それがこんなになるほどに、この仕事はひどいか……。

(やる前から決めつけないでよ)

そんな不安はすぐに跳ね飛ばした。自分たちがこの地に降り立つた理由を考えたら、そんなことで膝を突けない。ユキの言動にこちらのやる気まで削がれそうだが、決して受け身になるつもりはない。

「無駄かどうか決めるのは、あたしたちだよ。切り拓くのは、自分たちの手だって信じてる」

黒髪の奥に光る、今にも斬りかかってきそうな黒き瞳とかち合った。それでも鏢迫り合いを挑んではつきり言い切った。

これまでだってそうしてきたし、皆と約束して出てきた以上、なにがあっても譲れない。

ユキはしばらく目をじっと見つめてきたが、ふつと笑って視線を逸らした。できるもんなら、やってみな——そう言われた気がする。

「みんな、さっそく明日から営業に出よう」

とにかく一歩踏み出したい。ここにいてもなにも始まらないのは、部屋の様子ではつきり分かった。

「ドキドキッス！」

ミリアたちも号令を待っていたかのようだ。うなずいて士気を高め合う。このユキと言う人に、十八部隊の力を見せつけてやりたい。決意を燃やし、さっそく動き出す。

「顧客リストとかあるんですか？」

そう聞きながらルシヤナが事務机へ歩いていく。彼女と二人で壁から離してみると、何年も動かしていないのか、天板が触れていた部分の色が変わっている。おまけに、引き出し側が壁についている時点で、ただの物置だと主張しているようなもの。

なにも入っていないのだろうが、いちおう中を調べてみる。きつと、どこかにあるはずだ。主要な契約者候補の情報を綴ったリストが。

「無駄だから止めとけって」

そんな気持ちに水を差すかのような声を浴びせられる。

無駄だとか、無理だとか、そんな言葉は大っ嫌いだ。限界なんか、あつという間に超えた。

「やってみなくちゃ分からないじゃないですか！」

どうしてそんなに後ろ向きなのか分からなかった。マリツサに仕事はないと嘲笑を浴びせられてリキアに来たが、だからと言ってなにもしないでいるなど心が許さないし、誓いにだって反する。

「まあ聞けって」

渾身の怒りを浴びせても、ユキはまるで表情を変えず続けてきた。

「ここは連絡所だ。私たちの仕事は連絡だけで、契約自体は本国の部隊が持つっていつちまうよ」

ここにある顧客リストを使って足を運んだところで、本国の部隊の手柄をせつせと作ってやるようなものらしい。

(手柄を残せて言われてるのに……)

アルマの言葉が何度も頭を駆け巡る。イリアに帰るには、彼女の助けが必要だ。

「ようやく理解したか？」

考えに耽って黙っていたら、ユキはふつと鼻で笑ってきた。

「うん、理解したよ。ふふっ」

笑い返したら、ユキの目がぴくりと動いたのが見えた。諦めるとでも思ったか。リストが使えないなら、することは一つだ。

「自分で探してくればいいんだよね。それなら、自分で契約したって文句ないでしょ？」

今までのピンチに比べたら、こんなものはそよ風にすらならなかった。自分たちの手でどうにだって身動きが取れる話ではないか。

「似てるな……」

また嘲笑われるかと思ったが、ユキはそう漏らして、またじろじろ

顔をのぞき込んでくる。どうにも、この眼光に迫られると怖い。いつ辻斬りを喰らうか分からないような鋭い眼だ。

「な、なに？ 似てるって、なにが？」

「……別に。はっ、飛ばされてくる奴は気概が違うってか」

「飛ばされてきたつもりはないよ！」

「ここまで面白い奴も久しぶりだ。女王様気質のイドウヴァが煙たがるのも頷けるわ」

ユキは腹から大きく笑い出した。だいぶ笑って清々したのか、彼女は髪をかき上げると挑発的な目で投げ出すような言い方してきた。「なら好きにすると良いよ。仕事を探すくらいなら、その年だったら男を探したほうが良いと思うけどね。売れるときに売るのが基本だよ」

「言われなくとも！ みんな、やってやろうよ！」

手を振って笑いながら部屋の奥へと消えていく後姿に目もくれず、シャニーは仲間へ号令をかけ、皆で拳を突き上げて気合を入れた。



一方、シャニーの爽やかな声が、奥の部屋で佇むユキの背中を揺らしていた。

(あの顔……。いや、まさかね)

他人の空似か……。？ 瞳、顔、声……。全てがあの人に似ている。向こうで部下たちに囲まれる青髪の乙女を一瞥し、ユキは懐から取り出した古ぼけた写真をじつと見降ろした。

「もしそうだとしたら、ここにいる意味もあったかもな。なあ、そう思うだろ？」

仕事がない！ お金もない！

青空にはほつかりと雲が浮かんで、暇そうに流れていく。

こんなにも良い天気なのに、どうにも雲行きは芳しくない。

晴れの日なら向日葵のように咲くシャニーの元気な笑顔が、今日は土砂降りを浴びているかのようにしよんぼり静まり返っている。

「なかなか上手くないツスねえ」

城から出てきたミリアは、頭の後ろで手を組みながら開口一番ぼやく。その横には、シユンとするシャニーの横顔がある。いつもなら軽やかに揺れる青髪も、今日は大人しい。

天馬騎士団のネームバリューがあればスムーズだと思ったのは甘かった。こうもあつさり追い払われるとは。

とは言え、まだ始まったばかり。絡む重い気持ちを払ってシャニーは天を仰ぐ。

「これで三連敗かあ……くっそう」

悔しさを短く吐きだして、手元の紙にまた一本赤い線を入れていく。

これはリキアの有力候補者のリストだ。イリア出発の前に、旧テイト派の第三部隊長や、イドウヴァ派の第四部隊長たちに頼み込んで作ってもらったもの。

連絡所にあった顧客リストにない新規を開拓しようと朝から動きまわっているが、どこも話すら聞いてもらえない。苦戦は承知していたとはいえ、仲間の不安げな眼差しを背に受けると焦りも募るといふもの。手を顎に添えて唇を噛む。

（予想はしてたけど……やっぱりイドウヴァさんの影響力が大きすぎる……）

副団長時代のイドウヴァが営業先としていたのがリキア。それを引き継いだ第二部隊が、今も大手の貴族は軒並み押さえている。

今日まわった三件の小規模貴族の口からさえも、彼女の名前が出て一蹴された。さすがに騎士歴十六年の年季は伊達ではないというところか。

だからといって、負けたくはない。

(絶対に、見返してやるんだから！)

弱りかけた目にぐっと力をこめて前を向く。負けたら、任せてくれた皆を裏切ることになってしまふ。勝つまで負けない。それがモットーだ。

「落ち込んでてもしよーがないよ。ほら、次行こー、次！」

別に自分たちが悪くて追い払われたわけではない。やるしかないのだから、できる限り精いっぱい注を注がなければ。部隊に広がる不安をリキアの風と共に吹き払うと、歩調を早めて天馬に飛び乗った。

なんとか一つでも仕事を取れば、そこをツテに道は拓けるはず。

まだ、手元のリストは黒々としている。その誰かと縁があることを祈りながら、シャニーは青空へ舞う。



「そこをなんとかお願いしますー！」

オステイアから東にあるラウス領主の下で、シャニーは必死に青髪を揺らしていた。

この中堅貴族の屋敷でも、先刻の営業先とおなじ展開が待っていた。いちおう部屋を通されたものの、仕事の話を振った瞬間、油に火を入れるように目を三角にされてしまふ。

簡単に引き下がれずに何度も頭を下げるが、手を荒々しく振って邪魔だと言わんばかり。

「ダメだダメだ！一括して第二部隊と契約している。分ける必要などなからう！」

白髪交じりをオールバックで固めた気難しそうな顔。眉間にしわが寄ってますます険しい剣幕になったと思ったら、神経質そうなカリカリ声で一蹴されてしまった。

「フンッ、むせ返る死の臭いの中でうごめくハイエナめ。さっさと帰れ！」

ぐざりと、正面から槍で貫き振じりまわすような言葉。頭も心も、爪を立てて握り締められた桃みたいに崩れそうになった。

(ハイエナ……。なんてひどいことを言う人なの……。?)

その気持ちを押し殺して諦める。槍で刺すような視線を、城内から出るまで浴びせられて中庭へと出た。

目の前に広がるのは穏やかな青空なのに、漏れ出したのはため息。張り詰めていた肩が一気にだらつとして、シオルダーガードの重さに持っていかれそうだった。

「ちえー、一括であたしたちと契約してくれればいいのにさ。あそこまで言わなかったっていいじゃん！」

指を弾きながら、リストにまた赤線を入れていく。振りかえって恨めしく城を見上げ、口をぶうつと尖らせる。

「そりゃ、昔からの信頼には勝てないよね……」

あの年齢の貴族であれば、イドウヴァと長年の付きあいがあってもおかしくはない。ルシヤナに言われずとも、それは分かっていた。信の強さがどれほどかは、誰よりも心得ているつもりだ。その信に支えられてイリアで生きてきて、そして今、リキアに立っているのだから。とは言うものの、それだけでは片づけられない、どこか引つかかるものがあつた。

(あの “流れ” ……。なにか、あたしたちが来るのを知ってたみたい。な反応じゃん)

あの初老の貴族は、こちらが名乗る前からすでに顔を怒らせていた。それこそ、部屋に入ってくるときからだ。そして、十八部隊と名乗ったとたん、それ以上を遮った。

あの貴族だけではない。彼は神経質そうで顕著だったが、今日会った四人の貴族はみな、どうにも妙に “流れ” を感じさせるものがあつた。直接貴族の正面に座って、その顔や声を全身に受けた直感は、嫌な予感ばかりを囁いてくる。

(ちよつと……。攻め方を変えよう)

腕組みして考えてみた。第二部隊に無くて、自分たちにあるもの……。思ったよりすぐ出てきた。

パチンと指を弾いたシャニーは、仲間ニツと白い歯を見せると目で合図して空へと飛び出す。その視線は鎖に引きずられるように、い

つの間にか後ろを向いていた。

(それにしても……あんな言い方しなくなつていいのに)

ラウス城を見下ろす。頭の中で再生すればするほど、リキアに溶けこんでがんばろう……その想いが少しだけ砕けて胸に突き刺さる。

それでも、今は無理やり前を向いた。

(ううん、分かつてたんだ。やっぱり、そう思われてるんだよね……)



「なにかお困りごとはありませんか？ 私どもは、空中戦だけでなく、地上戦でもお力になれます」

信頼はもちろん、経験でも勝てないなら一か八かだ。天馬騎士団では珍しい、地上戦への対応をアピールしてみる。

今回のターゲットは若い当主。イドウヴァとの繋がりが浅ければ、攻めこむチャンスがきつとある。

その判断は正解みたいだ。ツーブロックを短く整えた20代前半と思しき彼は、それまでの貴族と違って話を聞いてくれた。おまけに、腕を組みながら真剣に聞いて、ときおり頷いている。

「へえ、どっちもできるなら合理的だな。検討してみるよ」

作戦は成功と言えるだろう。当主に納得の表情が浮かんでいる。

後ろで見守っていた仲間から零れた歓喜が背中を押す。初めての好感触で心の中にわつと感激が広がって、気づいたら立ち上がって当主の手を取っていた。

「ありがとうございます！ よろしくお願いします！」

なんとか良い答えを聞けますように——そう祈る手でしっかりと握手を交わす。

部屋を出て彼と別れると、静かな廊下で思わず始まるガッツポーズ。

営業なんて初めてというのもあり、ここまで連敗続きだとやり方がおかしいのかと不安で堪らなかった。その気持ちがバンザイと共に吹き飛んで、スキップしたくなる軽い足どりで帰路につく。

「ああ、ちよつと君！」

ところが、階段を下りて外に続く扉が視界に入ってきたときだった。当主が二階の手すりから顔を出したかと思うと階段を駆け下りてきた。

もう答えを出してくれたのかと思ったが、先ほどの自信に満ちたものとは別人のような苦い顔で察してしまった。

「申し訳ない。さっきの話は、無かったことにしてくれ」

結論だけ口にしてさっと背を向ける。

察していても、いざ聞かされると信じられず、うまく表情を作れない。そんな気持ちを振り払い、駆けだして後を追う。まるで逃げるように階段を上っていく彼を追い越して正面に立った。

「待ってください！ どうしてですか?！」

掴みかけたチャンスだ。なんとか翻意してもらおうと縋って見つめたが、彼は勘弁してくれと言わんばかり。すぐ視線を逸らしてしまった。

それでも、手を掴んで逃がすまいとしていたら、彼の横顔には申し訳なさそうな苦笑いが浮かびだした。

「私は合理的だと思ったんだがね……」

私に言うなどでも言いたげな切り出しだ。どうやら彼自身は契約する気でいたようにとれる。なのに、なぜだ……。彼は一気に吐き出すように答えた。

「地上部隊は、昔からの付き合いがあるから変えるつもりはないと、父に叱られてしまっただけ」

そこまで言い切ると、シャニーの手を振り払って部屋の中へと入ってしまった。

思わず伸ばした手が、力なく垂れていく。

(やっぱり、どこもそう簡単に契約先を変えてくれないか……)

門前払いより、なんだかダメージが大きい。さっきはルンルンと下った階段が、今はとても長く急に思える。

ため息交じりに扉を開けると、もう青空は待っていていなかった。結局、今日は全滅。重い足どりで天馬にまたがり、ゆっくりと空へと戻っていく。

「みんなー、そんな顔しちやダメだよ。明日またがんばろうよ！もう少しだったじゃん！」

後ろからついてくる仲間へ振りむいて、シャニーは元気な声で帰路を照らす。少しだけ前を向いた仲間には、疲れた笑顔だった。

再び前を向き、帰路に燃える夕日を見つめて沈みそうな心へ気合を入れなおす。きつと明日は、いい知らせを掴んでみせる。

その手にあるリストは、半分近く真っ赤に斬られていた。



—— 一週間後

相変わらず、リキアの空は明るい。春の日差しが街を包んで、楽しい声があちこちから聞こえてくる。

ところが、十八部隊が座るテラス席のまわりは様子が変わった。ここだけ曇天を越えて、ついに土砂降りに見舞われていた。テーブルへ広げた昼食に手もつけず、誰の顔にも疲労と不安が滲む。

「……ここまで苦戦するとは思ってなかったわ」

それまでリーダーの背中に黙ってついてきたルシャナがぼつりと漏らし、空を見上げるシャニーへ視線を移す。

シャニーは背もたれに身を任せて、両手をだらんとしながら虚ろな焦点を空に向けていた。

「あはは……一件くらいはいけると思ったんだけどな」

背を起こしたシャニーは、テーブルに置いたリストを見下ろす。何度見ても、すべての名前に赤線が引かれていて、苦笑いが知らないうちに浮かんできた。

ここまでとは誰が予想できただろう。へなへたと背もたれで干物になるしかない。

どこか一件取れさえすれば、そこを足がかりに……その算段が見事に碎かれて、この先どこへ行けば良いのか途方に暮れる。

「いきなり大ピンチッスね……」

予定がない——こんなことは十八部隊が発足して以来、初めてだ。

今回は冗談抜きにピンチだと察したか、さすがのミリアも顔に不安が差している。

両手で顔を覆って、真つ暗な中でシャニーはあれこれ考えを巡らしてみた。営業経験のない中、なんとか知恵を絞ってやってきた。もう、良い案は浮かんでこない。

「自分たちの給金くらいは稼がないとって思ってたけど……困ったなあ」

リキア連絡所での仕事は本国との連絡だけ。それゆえ、本来なら営業する必要はない。

とは言え、外国に来ている以上は、やはり祖国に資金を送りたいし、最低限の資金が無いと本題の勉強にも支障が出る。

このままでは給金分どころか、目の前に広がっている昼飯代すら賄えない。

「私たち、ここでは信用ゼロ」

いつもの小さい声がますますしょんぼりとして、レンが潰れるように肩を落とす。

第二部隊がいるから結構……皆同じことを言った。イリアでいかに、信用に支えられてきたか思い知らされる。ここでは信用を築こうにも、ツテも無ければ最初の一步さえ踏み出せないでいる。

「ルシヤナってリキアに見習い修行で来てたよね？　なんかツテないの？」

どれだけ考えを巡らせても、なにも浮かんでこない。顔を覆っていた手を退け、シャニーは藁をもすがる気持ちでルシヤナを見上げた。

彼女は見習い時代に修行先としてリキアを選んでいたはず。戦闘に出ず、輸送関係を受け持っていたなら、配送先で良いネタがあるかもしれない。

でも、ルシヤナの顔は渋い。

「あるっちゃあるけど、郵便とか配達とか、小銭にしかならないと思うよ」

とても叙任騎士が受け持つような仕事はなかった。彼女が口にした仕事は、どれもアルバイトのような話で稼ぎにならない。経費を考

えると下手したら赤字だ。

他には無いかと目で訴えてみるが、ルシヤナは上目に口を曲げた。「他に私がリキアで教えられることって言ったら、酒しかないよ」

酒の話ならウンザリするほど聞いてきた。もうそっちはお腹いっぱいだ。

ぽつきり首を折った視界に広がってきたのは、今も手がつけられないままの昼食。それをじっと見つめていたら、なんだか体が震えだして悔しさが溢れてきた。

今になって、ユキの言葉が頭を揺さぶってくる……なにも言い返せない。両唇をぎゅゅと噛んで声を押し殺す。

「あと新規って言ったら……バトンの海賊にでも顔出す？」

そんな彼女をよそに、しばらく空を見上げて唸っていたルシヤナから飛びだした名前は、ミリアやレンでさえ仰天させるに十分だった。

「ふ、ふくしよー……あそこなら確かに、なにかしら仕事はあるかもしれないっすけどお……」

「ね。海賊に雇われるなんて……」

「ハッ。ジョーダンよ、ジョーダン……」

なにやら、二人がぎよつとした視線をルシヤナに送っているのにシヤニーは気づいた。

でも、耳にガラスでもはまっているように声が遠い。なんとかしなといけない。そればかりが頭の中をぐるぐる巡る。

「このままじゃ、みんなが作ってくれた小麦を無駄に食べるだけになっっちゃう……」

跳ね退けられない敗北感を前に、ぽつりと漏らしたシヤニーの脳裏に浮かぶのは、故郷の人たちの顔。自分たちの給金は、彼らの苦労から払われている。なにも生み出さないままにそれを食べていては、彼らに申し訳なかった。

「シヤニー、もしかしてホンキなんスか?」

突然目の前に手が入ってきて、はっと肩を跳ね上げる。どうやら考え込んでしまっていたようだ。戻ってきた視界に映ったのは、手を振るミリアの心配そうな顔。

(どうしよう……でも、やっぱり……。……。ああ！ 落ち着けッ、あたし！)

顔は向けたものの、頭の中は答えの出ないループに嵌っていた。どこかで稼がないといけない。でも、行き先がない……。どうすれば……。

そのループを抜け出すためのたった一つの出口。それはずっと前から知っているけれど、そこに手を伸ばしたくはない。

救いを求める声と、それを拒む心。頭の中をぐちゃぐちゃに引っ掻き回されて、堪らず頭を抱えて髪をくしゃくしゃと握る。

なにか、ミリアの声が聞こえてくる……。彼らのことを考えたら、もう意地など張っていられないか。

「うん……。背に腹は代えられないしね……」

そう、生返事を返してふたたび思案に暮れる。

そのとたんだった。なにかが大きく動く気配がした次の瞬間、椅子の跳ね飛ぶ音があたりに響く。

「えっ?! ちよつ——」

ふいに視界が宙に浮いたと思ったら、凄まじい力で体を引っ張り上げられた。

はっと意識が戻ってきた視界に映ったのは、牙をむき出しにして目を裂いた、鬼のようなルシヤナの顔。よく見たら胸倉を掴みあげられ、顔を引き寄せられていた。

逃げようとしてもバタバタと空回りするばかり。足が宙へ浮くほどの怪力で、戦慄に顔が引きつる。

「あんた！ 見損なつたぞー！」

ありつたけの怒声を正面からぶつけられ、頭の中がどこかへ吹き飛んでしまいそう。

わなわな握られた拳は今にも顔へ振り下ろされそうで、思わず両手が防御に走る。

なにが起こったのか追いつかないままアワアワしていると、ルシヤナがさらにギリギリ掴み上げ、目を血走らせるものだから堪らず振り払った。

「ちよつと、なんなのさ！ あたし、なにか言った?!」

驚愕で喉が詰まりながらも、拳が炸裂する前にそれだけ叫んだ。なんとか距離は取ったものの、今も解かれない拳はいつでも噛みついてきそう。

「なんか言ったかだつて?! 一発入れないと目が醒めないみたいだな！」

それを聞いたルシヤナの顔に青筋が立って、シヤニーは思わず後ろに退いた。まわりの顔も知らない連中も、喧嘩と勘違いしたのか囁し立ててきて事態は悪化するばかり。

こんな彼女を怒らせたのは初めてで、声もかけられずに後ずさりするしかできなかつた。ルシヤナがなにを言っているのか、さっぱり分からない。

「シヤニー、海賊になるつて言った」

「へっ?? いっ?!」

助かった。レンが助け船を出してくれた。とは言え、彼女が口にした話も、それはそれでまるで頭が追いつけず、目が点になった。

なにか、とんでもない疑いをかけられているみたい。ブンブン首を振って引きつる喉で叫ぶ。

「や、止めてよ！ イリアのみんなに顔向けできないような仕事はしないよ！」

どうやら、ミリアへの生返事があらぬ方向へ行つたに違いない。

海賊に堕ちるくらいなら、皿洗いのバイトでもしているほうがマシ。ルシヤナに駆け寄って握られた拳を捕まえながら目で訴えた。

「……ごめん、副将の私を取り乱すとは」

ルシヤナはぼつが悪そうに一度目を逸らすも、両手を合わせ頭を下げた。誤解だったと分かってもらえたようだ。

「ううん、あたしこそごめん。みんなが真剣に話してたのに、聞いてなくてさ。でも、海賊なんてあたしの流儀的に絶対ナシだよ」

「それでこそ私らのリーダーだよ」

お互い謝りながら抱擁し、場は収まった。一触即発のテラスに平和が戻る。

とは言え、それは再びループに嵌るだけ。仲間たちの焦燥とした気持ち、今この一件でもひしひし感じ取ってしまった。

もう答えは、少しずつ傾きつつあった。

(この手だけは使いたくなかったけど……このままじゃ、みんなかわいそうだよね)

自分は部隊長だ。部下の運命を背負っている身。自分一人のエゴで、これ以上彼らに辛い思いをさせられない。でも………
その気持ちをバツサリ振り払った。海賊に堕ちるしかないところまで来ているなら、この選択のほうが良いに決まっている。

シャニーはようやく瞳に力を取り戻し、前を向いて仲間たちを見つめた。

「契約してくれそうな人、実は心当たりあるんだよね！」

ミリアやレンは目を真ん丸にした後、希望に満ちた笑顔を広げ始める。

それを確かめ、シャニーは席を立つてごった返す中央通路へと向かう。今は、仲間の不安を払うのが一番だ。顔だけ振りかえって指示する。

「と言うわけでき、今日は一旦連絡所に戻って準備しよ」

外門まで歩き、天馬を預けた厩舎へ戻る。

ミリアたちが彼らの天馬のもとへ行き、一人になるとルシヤナに肩を引き寄せられ、耳打ちするように彼女は声をかけてきた。

「シャニー……あんだ、いいの？」

「ルシヤナ……」

「あんたが一度、その選択を外したの知ってるよ。理由だって、分かっているつもり」

さすが幼馴染だ。さっきの鬼のような顔はもう見たくないが、やっぱり頼りになる。分かってくれるだけで、もう十分だ。エゴだとか、プライドだとか、そんなことより、今は大事なものがある。

「良いも悪いも……しよーがないじゃん！ こうなったらやるしかないっしょー！」

「ここまで来たら、肚を括るだけだ。元気に拳を突き上げ、二カつと

笑ってそう伝える。

目指すものは、もつと、もつと先にある。こんなところで、いつまでも勝手な想いに縛られて動けないままでは、支えてくれた人たちを裏切ることになる。——やるしかない。

「シヤニー、あんまり無理しないでよ。ピンチは皆でなんとかしよう」
ポンと肩に置かれた親友の手が妙に温かく感じて、静かに目を閉じる。独りではない、そう言ってもらえるだけで十分だった。感謝を笑顔に乗せて肩を抱き返す。

「無理なんかしてないって！ みんないるし、もう絶望なんて、し慣れたよ」

「それが無理してるって言いたいんだけど……そうだね。みんなががんばろう。ひとりで抱えないですよ」

二人でまっすぐ前を向く。遙か先には、白きオステイアの巨城がそびえている。

「あたしは決めたんだ。このリキアでもつと成長してやるって」

西方に行ったら、今ごろどうなっていたか分からない。リキアだろうとも、支えてくれ、考え方を覚えてくれる人たちがいなかったら、もう音を上げて腐っていた。

イリアに残してきた人々との約束が背を押してくれ、こうして肩を抱き寄せてくれる仲間がいるなら、どこまでもやれる。

「イリアの皆や、アルマや、お姉ちゃん……みんなの想いが無かったら、あたしはとつと死んでた。だから、今できることで恩返しするんだ」

リキアでなにをすべきかを考えたら、仕事が無いことくらいでへこたれてなどいられない。これもきつと、成長に必要なこと。そう自身に言い聞かせて、ひたすらに前を向く。

「ふふつ、そうか。だよね、それでこそリーダーだよ」

あの偉大な平和の象徴をイリアにも……。そのために、辛くともこの道を行こう。互いの決意を抱き寄せるように、二人はしばらくオステイアの空に映える巨城を見上げていた。

りゅーせんいつとーりゅー？

事務所のドアを押し飛ばす。蝶番がバカになっているのだろうか。力を込めたわけでもないのに、勢いよく跳ね返ってきて顔にぶつかるところ。今度は抵抗できないように壁に押しつけてやった。

「もう少し静かにできないのか。聞こえてんのかい？ シヤニー」
奥から小言が聞こえてくる。謝らないといけないのは分かっている、今はとても頭が働かなかった。

マントを椅子へかけ、外した鎧を武具かけに放る。ガシャン!!——
稽古場から出てきたユキが眉間へしわを寄せているのが見えるが、そのまま外へ出た。

裏庭から空を見上げる。旧市街には静かな時間が流れていて、ひび割れた心を癒してくれる。

ふうつと大きく息を吐き出してみたら、少しだけ気が紛れた。そのままそつと目を閉じて波打つ気持ちを整える。そうしていると、背後でドアの開く音と一緒に、サンダルが地面を擦る音がした。

「だから言ったろ、無駄だって。諦めな」

今一番聞きたくない言葉だ。忠告を聞かなかったことに、嫌味でも言いに来たというのか。

「あたしは絶対に諦めません！」

ただでさえ心はもうカサカサなのに。帰ってきて早々、一番嫌いな言葉を浴びせられてついつい加減も考えず怒鳴ってしまう。

それでも、ユキは目を閉じて小さくため息をつくだけだった。

「……………ごめんなさい」

周りの民家から訝しがる視線を浴びてしまった。萎んで、呆れるユキへ小さく絞る。

でも、なにを言われようとも諦められるわけなどない。自分ひとりなら違うかもしれないが、背負ってきたものがある。

(お願い、今はひとりにして…………)

目を伏していると、ぽんと何かを投げつけられた。丸められた……
どうやら紙っぽい感じだが、それにしても硬い音で転がってきた

た。

「そんなの寄越してくるくらいだ。得意先になに言ってるか、分かったもんじゃないさ」

一体どんな力で丸めたのだろうか。

石みたいに固い紙を破らないよう静かに解いて中を見れば、真つ先に目に入ってきたのは、天馬騎士団の紋章で間違いない。その下に記されている内容へ目を落としてみてすぐ、目が飛び出しそうになった。どんどん手が震え、煮え立つ腹が口から吹き出しそうだった。

——リキア連絡所で直接契約は行わない事。営業は第二部隊が取締る。

こんなもの、こちらの行動を読んでの通達にほかならない。ユキはハツと鼻で笑っている。

「あのイドウヴァならやりそうな話だ。よっぽど嫌われてんだね。なにしたらか知らんが」

(……)まで……する……?!)

ギツと奥歯で怒りを噛み殺しながらも、震える瞳を抑えられなかった。

ユキの言うとおりで。そうだとしたら、貴族たちから浴びせられた言葉もすべて辻褃が合う。

落胆と、憤怒と、そして安堵と。

自分たちのやり方が悪いから、あれだけ拒絶されたわけではないと思うと、少しだけほっとする自分がいてシャニーは自身を笑った。

(何を安心してんだか。べつに、状況が変わるわけでもないのにさ。……変わらない……か)

自虐してみてもふと気づく。そう、やることは変わらない。

「それでも……諦めないよ」
それを口にする、ユキの目がギロツとした。まだやるのか——そう言いたいのか。

(当たり前だよ。絶対に、絶対に屈するわけにはいかないんだ)

どんなに惨めで泥だらけになろうとも、信じてくれた人たちに戦う姿勢を見せ続けるのが、誓いを立てた叙任騎士の仕事ではないか。

きつと……デイークも同じことを言うに違いない。何度あの人に叱られたらう。仕事を舐めるな——と。

「イリアに春を、そうみんなと約束して出てきたんだ！　たくさん学んでイリアに帰るんだから!!」

時が止まっているかのような静寂。春の風だけが吹き抜けて、二人の髪をなぞっていく。

いったい、ユキはどうしたというのだろうか。じつとこちらを見つめたまま、微動だにしなくなってしまった。眼光は相変わらず鋭いが、睨み付けるような威圧感はなく、なにかショックを受けて固まっているように見える。

「まさかあんた、90代団長の娘か？」

「え？」

ふいにそう聞かれ、意表を突かれて言葉に詰まってしまった。

頬に手を添えてシャニーは視線を逸らす。

(……そう言えば、お母さんって団長だったっけ。でも、何代目かなんて聞いたこともないなあ)

上目に考えを絞っても答えなんか出てこないし、ユキから注がれる視線は痛いほどで、答えないと斬られそうだ。

「うん。お母さんは団長だったみたいだけど」

「はっ……直感を感じるもんだね」

なにかマズいことでも言ったか、ユキは目を閉じてしまった。

しばらく沈黙が包む。なんだか、達人が居合い抜きの前に神経を研ぎ澄ましているようにも見える。

思わず後ろに引くと、ユキは目を開けた。まるで太刀を下ろすように、その目から鋭さが消えた彼女は無言で歩いてきて、目の前でまじまじ顔を覗き込みだしたではないか。ぎよつとなつて後ずさりするが、同じだけ距離を詰められるだけ。しまいには壁に頭がぶつかった。

「……そうか。ありがとな」

まるで犬がにおいを嗅ぐように、頭のとっぺんからつま先までじっくり見ていたユキが静かに零した。

「え？ なにを？」

「別にあんたに言っても仕方ないことだよ。悪いね。でも、言わずにはおれなくてね」

なにを言われているのか、サッパリ分からない。困惑したのは言われたことだけではない。未だにユキの視線が解放してくれない。それどころか、また妙なことを言い出した。

「それでまたイドウヴァはこんな人事を……」

なぜ、あの人はこんなことを……それはずっと気になっていた。ユキはそれを知っているのか。

でも、聞けなかった。彼女の目から確かに刃のごとき鋭さは消えた。にもかかわらず、代わりに火を噴きそうなくらい目じりを吊り上げ、握った拳が震えていたのだ。救いは、こちらを見ていないことだけ。

(なんだろう。急に目つきが変わったな。どうしたんだろ)

一度は視線を逸らしたが、気になって流し目に見て驚いた。見間違いだったのか、今はどこか静かだ。

まわりを支配する緊張感から解放されると、気になっていたことが口から飛び出してきた。

「あの、お母さんのこと、知ってるんですか？」

「あんだ、なにも知らないのか？」

「うん。小さいころに事故で死んじゃったから」

「……そうか」

物心ついたときには既に事故で亡くなっていた。断片的に姉たちから教えられたシルエットも、家にいるときの“母”としての姿だけ。騎士として、団長として戦っていた姿は聞いたことがない。

(知りたい……)

でも、ユキは背を向けた。

「……進むべき道を示してやらないのも可哀相か」

彼女は家の中へ消え、すぐ戻ってきた手には一枚の写真があった。

「あっ!？」

手渡された写真を覗き込んだシャニーは声を上げずにはおれず、口

を抑えながら目を真ん丸に見開く。

「私は、第90代団長時代の第一部隊副将。ずいぶん重宝してもらったよ」

写真を見下ろして懐かしむユキの言葉を聞き終わりもしないうちに、思わず駆け出していた。

家の中へ戻り、姿見に自身を映して写真の中で笑う青髪の女性と見比べる。やっぱり……そっくりだった。服こそ時代を反映してか若干違うが、士官服に身を包む女性が自分の母親なのだと思感に心が飛び上がる。

後を追ってきたユキの姿が鏡に映る。その顔は雪解けの小川のように穏やかだった。

「はは、生まれ変わって目の前に現れたのかと思ったよ。あんたの母さんも、いつも言ってたよ。イリアに春をつてね」

「お母さんが?！」

まさか、母と同じ道を志し、同じ夢を抱いていたとは。まるで曇り空が一気に晴れたような気分だった。

感動に心が震えてそれ以上なにも言えない。背中をさすってくれたユキは、立てかけてある刀のほうへ歩き出す。

「たくさん学ぶんだって? だったら止めないさ。やれるだけやってみな」

彼女は刀を手に取ると、すっと鞘から引き抜いて見せた。細く、美しく輝く見事な刀身にシャニーの顔が映っている。

自分の顔だとは分かっている。けれど、こんな崩れた顔をしていたら母に申し訳なく思えてきた。母は、志半ばで倒れた。でも、自分は生きている。できるのに、しないのは、最大の裏切りだ。

「もっちろん! やれることは、なんだってやるんだ!!」

拳をぎゅっと握って誓いを叫ぶ。今の気持ちに、一片の曇りもない。

じっと見つめていたユキは、なにかを決意するようにひとつ頷くと、はつきりとした口調で問うてきた。

「なら、さっそく学んでみるか? 颯閃りゅうせん一刀流を」

ずいっと突き出された剣。目の前にあるのは、完全な太刀に違いない。騎士剣を刀風の斬撃特化へ改造したことはあっても、本物の刀など扱った経験はない。颯閃一刀流……聞いたこともない剣だ。

——やる気があるなら付き合うぞ。

ユキの目はそう貫いてくる。剣の道を行く達人が、敵意に塗れていたときは違う、研いだ鋒のように鋭い視線で問うてくる。

やる気なら負けない。とは言うものの、困惑ばかりが心に広がった。

剣士ではないから、断ろうとも考えた。刀なんて扱ったことはないし、折ってしまえそうだ。

「颯閃一刀流だってえ?!」

その気持ちを吹き飛ばすくらいの素っ頓狂な声が、頭の中をブンブン跳ねまわった。

落ち着かない様子でセチはバンバン揺さぶってくる。どうせまた、剣の話になったから興奮しているに違いない。語り出したら一巻の終わりだ。堪らずユキに聞くことにした。

「颯閃一刀流って? サカの剣?」

「ルーツは東方剣術のようだね」

やっぱりそうだ。サカは大陸でも独特の文化を形成しており、他の地方とはまるで違う。

その東方文化の象徴とも言えるのが、太刀と呼ばれる刀剣の技術だ。サカ出身の剣使いは剣士と呼ばれ、その太刀さばきは騎士剣とは一線を画す印象があった。

「でもね……」

やはり、無理だ……そう傾きかけたところにユキはそう言って続けた。「……初代団長が編みだした剣だ」

それを聞いた瞬間、雷が脳天に落ちたような衝撃が突き抜けた。

(初代団長の剣?!)

以前、ユーノから言われたことを思い出していた。自分には初代団長も扱っていたセチの力がある。そこに、同じく彼女が使っていた剣が合わさったなら……。そうだ、セチに聞けば、なにか分かるかし

れない。今も彼女は、頭の中でバタバタ引つ張ってくる。

「ねえねえ、セチは知ってる？ 初代団長とタツグ組んでたんでしょ？」

「よく聞いてくれたってもんだ！ 颯閃一刀流は私の剣だよ！ これは運命ってやつさ！ ああ懐かしいなあ。思い出せばあは——」

運命……たしかに、なにかそう思わせるものもある。一步踏み出してみたい気持ちで、無意識に歓喜をあげていた。

「嬉しいー！」

なのに、それはすぐに萎んでいく。

「でも、あたしには師匠から教えてもらった型があるし」

剣士でもないのに、本当に受け入れて大丈夫なのだろうか。自身の型はもう出来上がっているのに、いきなり知らない剣を取り込んで崩れないか心配だ。

そうして踏み出せずにいたら、ユキがふつと笑いだしていた。

「剣使いなら分かるはずだ。教えはあくまで教えだと」

とんと胸を叩かれた。

取捨選択して自分の剣として鍛えなければ意味がない……それは、散々思い知らされてきた。デイークがなぜ、剣技を教えてくださいなかつたのか、今なら分かるつもりだ。

「そうそう！ 私もつきつきりで見えてあげるから大丈夫さ！」

セチもやたら乗り気で目を輝かせている。信用していいか不安になるほどのやる気に押され、思わず写真を見下ろした。

（お母さんが認めた剣……同じ天馬騎士の剣なんてめったにないぞ）

中で笑う母をじつと見つめる。またとないチャンスだと言ってくれた気がしてやまない。

デイークの剣はデイークのものであって、天馬騎士の自分では扱いきれない部分も多かった。それを、この颯閃一刀流で補えるかもしれない。

パチンと気持ちのいい音がした。顔を上げると、刀身を鞘に納めたユキがずいっと突き出した。

「——あとは、あんたが決を下すだけだ」

もう、迷う理由などなかった。やってみてから、考えればいい。やる前からあれこれ考えて先に進まないのは、やはり性に合わない。

「うん、決めたよ。教えてください。颯閃一刀流」

イリアを守る剣に、また一步近づける。どんな剣か楽しみになってきた。

覚悟を決めてリキアに来たなら、帰るまでに一つでも多く学ばないでどうする。そう決意を燃やしていると、ユキがふっと初めて笑顔を見せた。

「そう来なくちゃ、おもしろくないってもんだ」

それまでの凍りついた死神のような目が、別人のように息を吹き返して笑っている。まるで止まっていた時が動き出したみたいに明るくなった彼女は、優しい眼差しで手を取った。

「こいつはあんたにやる。あんたの剣と切れ味は遜色ないはずだ。そいつでみっちり稽古しな」

写真を渡すと、彼女は代わりに太刀を掌に乗せ、両手でそつと握らせた。

しっかりと自分で握り、鞘から引き抜いてみた。見事な片刃剣……鋒は鋭く、鎬地には美しく花の舞う様子が彫り込まれていて美術品と言っていいくらい。

（ありがとうお母さん。きつと、これがリキアで学ぶ一つ目なんだね。がんばるよ）

心の中で、会ったこともない母に感謝するばかり。良い導きを与えてもらった。左遷先でこんな出会いが待っていたとは、運命を感じずにはおれない。

心に新たな誓いを宿し、鞘に納めるとユキにさつそく稽古をつけてもらうことにした。



寝苦しい……。

（もうムリ……って、い、息できない……?!）

スイーツにペシャンコにされる幸せな夢のはずが、もう辛抱できな

くなつてシャニーは目を醒ました。

体が金縛りを受けたように動かない。よく見れば、まるで人をベッドかなにかと勘違いしているかののように、仲間たちが自分の上で寝ているではないか。体をよじつてなんとか隙間を確保しようとしたら、それに合わせてミリアが寝返りを打ってきた。

(うがーッ。こいつら、あたしを殺す気い?!)

もがもがと暴れて、命からがら脱出する。いくら連絡所が狭くて寝る場所がないにしても、こう毎日、雑魚寝の下敷きにされては堪らない。

時計を見たらまだ3時。かと言って、一度目が覚めてしまったら、もう二度寝する気になれない。

(昨日教わったことをおさらいしておくかな)

太刀を手に取り、抜き足差し足で仲間から距離をとると、つま先で跳ねて部屋を抜ける。

こんな狭い民家なのに、稽古場をこしらえてあるのは驚いた。そのおかげで、事務所兼リビング以外はなにもないけれど。

誰もいない真つ暗な稽古場に立ち、そつと刀を引き抜く。鋒が月光を映し、シャニーの顔を浮かびあがらせた。

(ロイ様……なんて言うかな。どんな顔……するかな)

ひとつひとつ、昨日の教えを確かめながら静かに剣を振っていると、頭に浮かんだのはロイの顔だった。

今日は、陽が昇ったらフェレに向けて出発するつもりだ。

彼に断られたら、もう行く先がない。でも、そのことよりも、こんな無様な姿を見せたら彼がどんな顔で悲しむか、それを想うと辛くて胸が張り裂けそう。

鋭かった音が少しずつ間隔を空けだして、鋭さがなくなっていく。

「他所事を考えながら稽古とは、感心しないな」

そのとき、ふいに聞こえた声にぎよつと肩が跳ねあがって、もう少しで刀を落とすところだった。

こんな鋭い刃を落としたらケガでは済まない。あたふたする手先で刀を抑えて声のした背後を振りむいたら、それ以上の仰天が待つて

いた。

月光に浮かぶのは長い黒髪。それが闇に浮かんで漂っていた。

(で、出たああああ?!)

悲鳴をあげて刀を放りだし、尻餅をついたシャニーは出力全開で後ずさりして頭から壁へ突っ込んだ。ごっつんと鈍い音と共に柵が飛びあがり、静寂が戻った場を情けない声が包む。後頭部を抑えながら、シャニーはうずくまっている。

「あんた……近所の迷惑を考えな」

覚えのある声が聞こえてきて、シャニーは顔をしかめながら見上げてみる。むこうの壁際にゆらゆらする黒髪。再び戦慄が走りかけるが、よく見たら知った輪郭が月光に浮かんでいる。とたんに力が抜けて、あごが地面とくっついた。

「び、びっくりしたあ。脅かさないですよ」

まるで犬かなにかのように、へにやつと地面にへたれ込むシャニーを見下ろしてユキは額に手をやった。

「脅かすもなにも、あんたが気づかず剣を振り始めただけだろ？」

どうやら先に稽古場に入って瞑想していたらしい。すつと立ちあがったユキは、落ちていた刀を拾いあげて歩いてくる。彼女は目の前でしゃがみ込むと刀を握らせ、キツパリ言い切った。

「考えても仕方ないことは考えるな。相手の剣は、あんたではどうも変えられない」

目が点になる。頭の中で考えていたただけなのに。彼女の視線を追ってみたら、自分が手にする刀に行きついた。全てを見透かされている——そう感じずにはおれない視線。

「どうして分かったの？」

「分かりきったことを。すぐに気持ちが悪くなる性格も善し悪しだね」

ハツと鼻で笑われてしまい、グサつときた。デイークに口酸っぱく言われていたことだ。武器を握ったら、感情を相手に観られるな……と。

「剣は己を映す鏡……剣の声に雑音が混ざればすぐ分かる。あれだけ

の雑念で振っていたら、稽古どころか型を崩しちまうよ」

バシツと肩を叩かれて、稽古場の中央へと引き戻された。

なんだか、新鮮だ。騎士団に入ってから、こうして年上からしっかりと指導を受けた記憶がない。新人部隊でもずっと引つ張る側だったし、レイサは放任主義だったし。彼女とタイプは違うが、きつと頼れるに違いない。

「あれこれ、考えすぎるな」

「仲間のことを考えちゃうと、どうしても……ね」

鋒が下を向く。頭に浮かんだたくさんの顔を見つめ、唇を噛んだ。

支えてくれる人たちに、戦い続ける姿を見せなければならぬ。とは言え、そのために、これ以上仲間を苦しめたいと思わせたくない。憧れのあの人だって……支えたい彼を悲しませたくはないのに……。

そこまで考えていたら、背後から両手を取られて型を作らされた。

「あれもこれも抱え込みたいのは分かる。だったら、自分の実力を知るべきだ」

ふるつと瞳が揺れた。実力不足……はつきりそう言われてしまった。

だけど、なにも言い返せない。悔しいが、目の前で月光に映える刀が教えてくれる。彼女が言うことは正しいのだと。

この剣は道なかば。去年は敗北しか知らず、今年に入っても業火の魔人ソルバインに情けをかけられた。一度さえ、勝利を知らない剣。一つもろくにできないのに、イリアに仲間恋人もなんて……おこがましいのか。

(考えても仕方ないことは考えるな……か。たしかに、そうだね)

シャニーは自らにそう言い聞かせて、ユキの稽古に青髪を揺らし、汗を飛ばす。

相手の剣はどうにも変えられなくとも、自分の剣はこれからいくらでも変えられる。そう思ったら一層に稽古へ熱が入り、不思議と心は穏やかになっていく。

(ロイ様と会えるんだ。その後は……——当たって砕けろだ)

春風駘蕩を取り戻した剣が月光に軌跡を描く。空を裂く澄んだ音

が、颯のごとく室内を駆けていた。

いきなりラスボスとかツイてないよお！

のんびりとした雰囲気任せるように、青空へぼっかり浮かんだ雲がゆったり流れていく。人々の行き来する姿も、オステイアの都会人たちに比べたらどこか優しささえ覚えた。

シャニーたちは東進して、ロイが治める地——フェレへと降り立っていた。

街道につながる西側の入口から町へと入った彼らは、オステイアとまるで違う雰囲気にしぼし茫然としていた。

「ここがフェレなんスかあ……」

ひとり言のようにつぶやくミリアには困惑が浮かんでいる。なにか期待と違ったような顔だ。

無理もないかもしれない。ぐるっと見渡しても、人の往来はまばらだし、まわりにそびえる建物の密度はオステイアと比べるまでもない。空と草原がどこからでも覗いている。

「なんか、田舎」

ハッキリとレンは言い切った。

雪がないだけで、どこか故郷のカルラエ城下町に似ている。穏やかな景色と静かな時が、心を癒してくれるホームタウンと言えるだろう。

そんな雰囲気の中で、シャニーはぼうっとあたりを眺めていた。

懐かしい景色に切ない思い出を見つけ、今度は独りふらふら歩きだす。視界に映るのは、12月に自分がいた場所。

(こんな形で……また来ることになるなんてな)

あれから4ヶ月が経ったというのか。あのときの楽しかった思い出が、昨日のように頭の中を駆け抜ける。気づけば、待ち合わせ場所だったガス灯の下まで歩いていた。

忘れもしない。この場所に立って、ロイは世界の真ん前に映っていた。今日もあのとときみたいに、ここに立っていてくれたなら……。思わず手を伸ばして見上げる空のむこうには、ロイがいるフェレの城が見える。

「シャニー、なにやってんの?」

ふいに呼ぶ声。一瞬ロイなのかと心が跳ねたのに。

視界にいきなり顔が入り込んできて胸から溢れそうになったものの、直後に映った現実には、そのまま破裂するかと思った。

感傷の鏡を突き破るように、身を屈めてのぞき込んできたのはルシャナだったのだ。

「うげっ?!」

「……なにさ、その反応?」

「あ、う、ううん?! よしっ、じゃあっ、いざフェレ城へゴーゴー!」
拳を突きあげたシャニーは、天馬のもとへと小走りに先頭を切る。

天馬から街を見下ろせば、ますます田舎らしいのどかな様子が視界いっぱいに入ってきた。不思議そうに見渡す仲間の先頭を飛んで、懐かしさにシャニーの顔が少しだけ緩む。

それにしても、やっぱり町は狭い。城はすぐ大きくなってきて、弾む気持ちと胃が捻りあげられるような緊張がぶつかり合い、胸に突き刺さる。

シャニーの目つきは、みるみる部隊長のそれへと変わっていった。



城壁沿いまで辿り着き、目の前にそびえたつ城をシャニーは皆と見上げてみる。

あのとときと、なにも変わっていないはずにもかかわらず、妙な緊張に口が渴いて仕方ない。初めての者たちも見上げたまま固まっている。

「よしっ……行くぞ! 当たって砕けるだ!」

そんな張り詰めた空気を払うべく、一つごとくりと息を呑んだシャニーは爽やかな声で号令をかけた。

「イエス、リーダー!」

仲間の声に押されて一步目を踏み出すが、不安でいっぱいだった。なんの آپも取っていないのに、本当に大丈夫だろうか。チャンスは一度キリ。ロイが留守にしていたらアウトだ。

(考えても仕方ないよ。できることをやろう！)

それでも、前を向いて歩くしかない。ユキの言葉を思い出さずに進む。

ついに見えてきた外門には衛兵が立っている。ここからでは、ロイがいるかどうかは分からない。緑の広がる世界で、純白に身を包む格好はとても目立つ。衛兵が気づいて敬礼してきた。

「こんにちは！ 我々はイリア天馬騎士団 第十八部隊です！ ロイ様にお取次ぎをお願いします！」

門前払いだけは勘弁してくれと祈りながら、精いっぱい明るい声で名乗ってみた。

とくに怪しむそぶりもせず、衛兵は踵を返して城へと入っていく。天馬騎士団——やはりこのネームバリューは大きい。とりあえず第一関門は突破して、ふうつとお腹から息が漏れる。

敢えて、アポは取らなかった。取ることで、ロイとの間に誰かを挟めば門前払いにされかねない。本国から陰湿な通知が来ているとすれば尚更に。

場内へと通され中庭で待っていると、しばらくして屋敷の門が開いた。

思わず目が震える。憧れの、赤髪の男性が出てくる……と思ったのも束の間、どうやら違うらしい。

「……なんじゃ？ お前たちは」

出てきたのは、頭のとっぺんがつるつるな髭の男性。スチールブルーの長髪を横に流す顔は老成していて、この家に長く仕えていることをそれだけで醸し出す。立派な口ひげに手をやりながら向けてくる怪訝そうな目は、じろじろと細やかに動き、警戒心に満ちた雰囲気です。近寄りづらい。

厳しそうな官吏の登場に誰も背筋が伸び、とりわけ先頭にいるシャニーは全身の毛が逆立ちそうだった。

(やばっ、説教じーさんー)

よりにもよってと神に嘆く。

この男性は、ベルン動乱ではロイの軍で輸送隊を率いていた、フェ

レ侯爵家の中でもエライ人。槍や剣を漁っていたら、毎度のように扱
いが荒いと小言をもらったもの。ロイとお喋りしていたところを、引
き剥がされたことだって数え切れない。

とにかく、顔を合わせたらすぐ説教する人で、言わばロイを守る魔
王だ。

それでも、相手も2年弱経って忘れているのか、こちらの顔を見て
も特に反応はない。ひよつとして、ラスボスと言えども寄る年波に勝
てずボケてしまったのだろうか。

「アポは取ってきたのか？」

懐からスケジュール帳を取り出した彼は、ひとつ指先を擦りぺらぺ
らと手慣れた様子でめくっていく。しばらくしてその手が止まるや、
また額にしわが寄った。

（うわー……やっぱり）

こうなるだろうとは思っていた。こうなったら、奥の手を使うしか
ない。

「え、ロイ様はアポなしで来てイイって」

すつとぼけて口にしてみる。

12月に来たとき、ロイが言ってくれたのだ。今度からは、そうし
ていいと。

あのとときは真に受けなかったし、仮に甘えるとしても、遊びのとき
をロイが想定したのは優に想像できる。

「バカモノ！ そんなこと、あるはずなからう!!」

誰に聞いても通用するわけがないと思うだろう。まして、目の前の
手強い官吏がそれを聞いて、どうぞどうぞ……など言ってくれるはず
もないか。見習い時代と同じフレーズを浴びせられた。

「ぶ、無礼極まりない奴め！ 出合え出合え！ こやつらを捕えるの
じゃあつ!!」

マリナスの顔は唐辛子のように真っ赤になってしまった。まわりの
衛兵に怒鳴りつけ、摘まみ出そうとする。

（ああ……もうダメ。ロイ様……助けて）

こうなってしまうたら、もう抵抗もできない。後ろ手に拘束され、

なされるまま力任せに外へ押し出されていく。分かっていたとは言え、いざその場面が訪れてしまうと心が砕けていくのが分かる。もう……行き場がない。

「待て、マリナス！」

城から飛び出してきた青年が、肩を怒らせる官吏の背中へ待ったをかけた。

ドキンと心臓が跳ねあがる。この声は間違いない……衛兵に抱え込まれて引きずられていたシャニーは、首がもげそうになるくらい、ありったけの力で城のほうを振りむいた——みるみるうちに見開かれ、潤んでくる瞳。だらんと開いた口からは、悲鳴のような感激が零れて止まらない。

「その人を帰してはダメだ。僕のお客さんだ」

全力で駆けてきた青年はマリナスにそう指示すると、衛兵に声をかけてシャニーたちを開放する。

「は、はあ……」

「すまない。マリナス。いつでも好きなきに来て欲しいと、彼女とは約束していたんだ。覚えてないかな？ 去年の12月なんだけど」

「ふむ……？ 異国の旅人とは聞いておりましたが、まさか傭兵とは思いませんでしたわい」

マリナスは困惑をありあり浮かべ、さつきまでの烈火のごとき勢いがしおしおしている。

彼に一声かけた赤髪の青年は、シャニーの両手を取り活き活きした目で声をかけた。

「よく来たね、シャニー。会いたかったよ」

取った手を大事そうに握り、赤髪の青年は嬉しそうにシャニーを見下ろす。

この人こそが、フェレ家の若き当主。ベルン動乱を鎮めた英雄と讃えられるロイだ。

見上げる先にある青い瞳に見つめられて、シャニーの顔は自然に緩む。

(またカツコよくなったなあ……)

手に伝わってくる優しい感触に身を任せ、しばらくロイを見上げていた。また少し、彼は背が高くなったように感じる。

「あたしもだよー!」

目の前にロイがいて、嬉しそうに笑みを浮かべ歓迎してくれている。フェレに来て再会できたのだとようやく実感が湧き、つい、はしゃいでしまった。

ロイの目元はますます優しくなって包んでくれるようで、周りの疑念に満ちた視線から守られている気さえする。

(もつともつと、声を聞きたい!)

何から話そうか……巡らせたたん、はつと現実に引き戻された。

「……でも、今日は遊びに来たんじゃないんだ」

目を伏すと、ロイは手を取ったまま歩きだした。

「慣れないリキアは疲れただろう、部屋で話をしよう」

うなずくと、ロイはみんなにも目配せして城の中に入れてくれた。後ろをちらつと見てみると、仲間たちもマリナスの視線に引っ張られながらついてくる。

「ひゃー、手紙で分かったとはいえ、ラブラブっすね」

もう緊張感がなくなったのか、ミリアの茶化す声が聞こえてくる。隣にロイがいるのに、なんてデリカシーのないヤツなのか。ギロつと後ろ目で牽制を浴びてみたが、ルシヤナがミリアを突っついている。

「ありゃあ、手出したら殺されるね」

「ん、人の恋路を邪魔しちゃダメ」

彼女だけでなく、レンまで話に乗っている。ミリアは自身を指さして困惑した顔をしているし、まるで自覚がなさそう。恥ずかしくて堪らず、ロイの顔を見れなくなってしまった。とにかく、今は連中と距離を空けたい。道は分らずとも歩調を早めた。

あたし、ロイ様に仕えます！

通された部屋で、シャニーはリキアに流れついた経緯をロイに話していく。自ら過去を抉ると、心が崩れて胃がキリリと捻りあげられるよう。やつとのことで現在まで這い上がり、ふうつと大きく息を吐きだして目を伏した。

「……そうか、そんなことがあったのか」

ひと通りロイに説明し終わると、彼はそう言っただけで椅子に身をあずけた。ぐつと口を堅くしながら腕を組んで、なにか難しいことを考えているみたいだ。ロイのこんな顔は、あまり見たことがない。

予想通りになってしまった。彼を煩わせたくないし、がっかりさせたくないはずなのに。何も変えられなかった虚無感がずっしり心にのしかかってくる。

「うん……でもね、あたしたち決めたんだ。リキアでいっぱい勉強して帰ろうって」

ロイに話を聞いてもらえただけでも、なんだか少しだけ心が軽くなった気がする。

一度は伏した目が再びロイと繋がって、元気が出てきた……はずだったのに、長続きしなかった。糸が切れたように、いつの間にか俯いていた。

「とは言ってもさ、このままじゃ、みんなが作った小麦を食べるだけになっちゃうから、仕事を探して……」

絞り出した声は細くて、自分ではないみたい。今はこれ以上の力が出なかった。それでも、ロイはしっかり聞いてくれたようで、静かにうなずいて腕を解いた。

「他の貴族には皆断られて、ここに来た感じかな？」

「え?! ロイ様、なんでそれを……?」

ぱつと顔をもたげて、ロイの目をじつと見つめる。驚きで気持ちがいまぐれで整理できない。後ろからも驚嘆が聞こえ、ちらつと見たら一様の表情を浮かべていた。

ロイは立ちあがると机へむかい、引き出しから一枚の紙を取りだし

て戻ってきた。

「こんな書面がきてね。きっと皆にも届いてる」

天馬騎士団の紋章が入った公式文書。そこにはユキが見せてくれた資料と同様の内容が、もっともらしい理由と共に記されているではないか。

(どうして……ッ。どうして?! なんでもここまで!!)

みるみる心の中に煮え立った怒りが燃えあがり、体中が震えてウズウズする。ここが稽古場なら、どれだけ剣を振りまわしていたか分からない。

でも、今はそんなことより大事な話がある。ここに来た理由は、それにほかならない。

「お願い、ロイ様。なんでもいいの！ あたしたちに仕事をもらえない？ なんだったってするから！」

資料をテーブルの端に滑らせてシャニーは立ちあがり、一度ロイの目をじっと見つめると頭を下げた。

(いきなり来て、騎士団の内輪揉めに巻き込んで。あたし……なに勝手言ってるんだらう)

シャニーは自身の無力を罵るばかりだった。

騎士団からの通知に従って他の貴族が反応したなら、ロイに酷いお願いをしているのは間違いない。

——死臭の中でうごめくハイエナめ！

あのとぎ浴びせられたラウス領主の言葉が胸を突く。

もし契約できたとしても、下手をすればロイが諸侯から悪い目で見られてしまうかも知れないではないか。諸侯の団結よりハイエナを優先した、と。

それが分かかっていて、好きに来てよいと言ってくれた彼の優しさを利用し、なおすがろうとしている自己嫌悪が腹のあちこちを突き破ってくる。

(お母さん……あたし達を守って……)

ロイにすがる気持ちで頭を下げたままじっと祈り、顔をぎゅつと潰す。

長く、長く感じる時間の中でそつと両肩に感じる温もり。ロイが手を添えていた。

「やめなよ。シャニーにそんなことをされると、僕は悲しい」

そつと肩を支えられて抱き起された。目の前にロイの優しい顔が映り、ふつと笑いかけてくる。視界いっぱいには映る顔は凜々しくて、一度は立ち上がったもののシャニーは崩れてその場に座り込んでしまった。

（ズルいよ、こんなの。あたしだって……今すぐにも飛び込んで……泣きたいよ）

今は領主と傭兵の関係。後ろには仲間だっている。

砕けた心をロイに預けられたら、どれだけ癒されるだろう。それが今は叶わない。なのに、ロイはいつもと変わらない様子で接してくる。あんなに逢いたかった人がこんなに近いのに。触れたくても、触れられないのに。

シャニーの背をさすり、伝う涙をハンカチで拭きながら、ロイはマリナスを呼びつけた。

「マリナス、フェレに飛行部隊はいないよね？」

呼び出されて早々問われたマリナスは、すぐ眉間にしわを寄せた。

「い、いけませんぞ、ロイ様！　そう簡単に契約しては」

似たようなやりとりをいつもしているのだろうか。そう言っただけで口を止めるまで早かった。

シャニーにはマリナスが魔王に映った。またしても、引き裂かれてしまうのだろうか。今度はお喋りどころか、リキアの居場所さえも。

それでも、ロイも慣れているのか、とくに表情を変えることなく返している。

「でも、飛行隊なら警備だけじゃなくて、色々やつてもらえると思うんだ。この金額なら破格だと思うけど？」

ロイはシャニーが持ち込んだ契約書をテーブルから取って、マリナスにまわしている。

モノクルを取りだしたマリナスは穴が開くほどに上から下まで読むと、今度は計算器を取りだしてパチパチ弾きはじめた。

「むむむ……し、しかしですな……」

きつと彼も、契約内容自体には大きな問題はないと判断したに違いない。それでも、なんとかブレーキをかけようとしているのが、漏れだす言葉からうかがえる。

(もう少し、なにか……あとひと押できるものがあれば……)

唇をきゅつと噛んだシャニーが形勢逆転の一手を絞り、マリナスも再び計算器に指を落とそうとしたときだった。

「偵察、奇襲に郵便宅配！ 剣槍弓に魔法と揃えてますツス！ 地上戦も得意な部隊長のオマケ付きツス！ 安いと思えますツス！」

後ろから大音量が響いてきた。まるで録音してあったかのように、噛むこともなくツルツル飛びだしたミリアの営業文句を、誰もがあ然と聞いていた。

(ちよつとつ、オマケってどーゆーことよ！)

攻めの一手を繰り出してくれたのはいいけれど、おまけと言われては複雑だ。ミリアの足へ拳をぶつけておく。なにより、相手はマリナスだ。どんな反応が返ってくるか……もう賭けに近い。

怒りだすかと思ったが、マリナスは計算器を懐にしまつて唸りだしている。

「シャニー、座って話そうよ」

マリナスが二の句を継ぐより先に、ロイはそう声をかけた。ソファにシャニーが腰掛けると、彼も席に着いてすぐ身を乗りだした。

「逆に、こちらから提案しても良いかな？」

「お仕事もらえるの?!」

ロイと額がくつつきそうなくらい身を乗りだす。

しばらくシャニーをじつと見つめたあと、ロイはそれまでの笑顔を解いた。

「君たちが必要だ。良ければ、部隊ごと買い取りたい」

ロイははつきりとした声で口にしたが、聞き間違えたようにしか思えなかった。周りを見渡してみても、誰もが彼の提案へ目を点にしている。

(え………どういう………こと?)

目の前にロイがいて、彼の言葉を一番間近で受けたシャニーも、あまりにも予想外の提案に表情が抜け落ちていた。

言われていることを頭は理解している。けれど、心が追いついてこない。しばらく沈黙する春陽の間。

「ロ、ロイ様！ なにをおっしゃって——」

その沈黙をまつ先に引き裂いたのはマリナスだった。当然のように反対から入る彼をロイは遮った。

「動乱での武勲、そして最近のイリアでの働き。こんな優秀な部隊なら、常にそばへ置いておきたい」

心の中に押し込めてきた重い気持ち、まるでしゃぼん玉が破れるようにパチンと弾けて晴れ渡る。ロイは傍にいて欲しいと言って、自分たちの仕事を褒めてくれた。救われた気持ちは、今にも風に乗って空に舞いあがりそう。

「ただ、騎士団の意向があるし、なにより……シャニー、君たちの気持ちを聞きたい」

意識を引き戻すようにロイはそう続けてきた。まつすぐ見つめながら、あらためて聞かれると瞳が揺れた。

（ロイ様と、ずっと一緒にいられるってこと……？）

それができたら、どんなに幸せだろう。こんな提案、飲まないわけがない。……それが、自分一人のことで、なにも背負うものがない見習い時代であったならば。

気づけばロイから視線を外し、背後にいる仲間たちへ目で問うていた。やはり、彼らは誰もが渋い顔をしている。その理由は痛いほど分かる。自分の胸を引裂くこの気持ちと、きつと同じ。

「ごめんなさい」

なぜなんだ……心がそう叫んでくる。こんなに良い提案をしてくれたのに、きつとロイをがっかりさせてしまうに違いない。侘びの言葉、口にしたが、彼の目を見られなかった。

「あたしたち、イリアの人々に約束したから。きつと帰ってきて、イリアに春を呼ぶんだって」

ロイに直接仕える身となれば、イリアへできるのはせいぜい仕送り

くらいになってしまふ。本当はロイと一緒にいたい。それでも、ぎゅつと唇を噛んでその気持ちを抑え込む。背負った者たちを裏切ることはできなかった。

「やっぱりそうか」

まるで答えを読んでいたようだった。もつと落胆すると思っただけ、それどころかロイの声はむしろ明るくなった気がする。

「なら、一年契約ならどうだい？」

（ありがとう……ロイ様）

また譲歩してくれた。彼の気持ちに、どうやって感謝すればいいのだろう。ぎゅつと握った首元のロケットを見下ろして考える。一年……その間はながあっても、イリアに帰れなくなる。このリキア駐在の任務が、その間に終了したとしても。

（ロイ様の厚意はうれしい。多分一年くらいは帰れないし……。でも……）

心は揺れ、視線が振り子のように左右をさまよった。

一年も、毎日彼の傍にいられる。おまけに、遊びではなく、彼を守る騎士として。これ以上ない条件と言える……。

ぎゅつと両唇を噛みこみ、瞬きが早くなる。飛び込みたい心と拒絶する使命感の間で震えて、顔をくしゃくしゃにした彼女はぼつと顔をあげた。

「できれば……一か月ごとの更新にしてもらえないかな？　ダメ？」

雇ってもらおう側の分際で、どこまで譲歩させているのだろう。これ以上は決裂してしまうかもしれない。

「ははっ、シャニーは思っていたとおりの人だったよ。おかげで、大契約をする決心がついた」

にもかかわらず、そう言っただけでロイは笑っていて、もやもやと漂う不安が払われるよう。

大契約……それがどんなものかは分からないが、マリナスが目をはちくりさせている。彼がなにか言うより先に、ロイの凜々しい声が部屋に響いた。

「マリナス、契約書を用意してくれ。条件は僕が自筆で書く」

雇ってもらえる——その気持ちを抑えられず、安堵が体を溶かしていく。ぎゅつとロケットを掴んでいた両腕はダラツと垂れて、糸が切れたように天を仰いだ。

じんと目を瞑り、安堵を浮かべる口元からは言葉にならない気持ちが零れた。

「ロイ様……ありがとう」

今はただ、それしか出てこない。もう何度、彼に救われているだろう。自然に頬を伝う涙を、ロイはそつとハンカチで拭ってくれた。

「礼は要らないよ。君たちを戦力として評価した。そう言うことだろうか？」

ロイは万年筆をとり、マリナスから手渡された契約書へさらさらと契約条件を記していく。とても……一つしか年の違わない17の青年とは思えない凛々しい姿を、シャニーは涙をすつと啜りながらじつと見つめていた。

「っ、これ……」

無言ですつと差し込まれた契約書の中に目を落とした瞬間、シャニーの瞳は泉にしづくが落ちたように揺れて、感動を漏らす口元を手で覆った。

（書き間違え……じゃないよね？）

信じられず、震える瞳がおそるおそるロイを見上げる。こんな好条件、あるわけがない。自分の感覚がおかしくないことは、横からのぞき込んだマリナスが目を白黒させるのを見たって明らかだ。

「二年契約で一か月ごとに更新……お互いの条件どおりだろ？」

それでもロイは確認するようにうなずいている。

彼の言うとおり、条件は合致している。これだけでも、ロイは十分すぎるほどに譲歩してくれた。

でも、シャニーが声を震わせていたのは、その下に記載されていた契約形態だった。

——完全支配権移転型契約

契約期間におけるすべての権限を、契約者へ移転する契約。

天馬騎士団に所属しながら、あたかも契約者が直接叙任を与えたよ

うな形をとるもの。

命令できる範囲に制限がなくなる半面、身分保障から責任負担の一切を契約者が受け持つ、実質の買取と言えるだろう。

(ロイ様、あたしたちを守ろうとしてくれたの……？　こんな、ムチャな契約………ありがとう………ありがとう………)

何度も、何度もうなずくその顔は、喜びが溢れだして感涙に咽ぶ。

「マリナス、この書簡をイリア天馬騎士団へ明後日までに頼む。それと、彼女たちに部屋を準備してあげてくれ」

「ははっ……。明後日までですな。……あ、明後日ですと?!　は、早馬の準備じゃあっ!!」

ロイは直筆で署名し、封書にしてマリナスへ渡している。

電撃戦のごとく、あつという間に決まってしまった契約。これは大変なことになった——顔がそう言って突っ張るマリナスは、あたふたしながら部屋を飛び出していった。

いよいよ、始まった……その実感がシャニーに少しずつ湧いてくる。

あとは、天馬騎士団がどんな反応を見せるか次第ということになる。期間限定とはいえ実質の買取だから、最初から売買契約を持ちかけられる可能性だってある。

「さあ、今日から君は僕の仲間だ。よろしく頼むよ」

さっと席を立って、ロイは今も涙をすするシャニーへさつと手を差しだした。

傭兵契約か、売買契約かはまだ分からない。だけど契約の瞬間、シャニーたちはロイから叙任を受けた騎士となったのだ。

(本当にこれで……いいの……?)

震えながら、静かに手を伸ばす。救いを求めながら、それでも迷う手。ぐつと伸ばしたロイの腕が、しっかりと握って引きあげた。

ようやく……手の届く場所に来た。それを教えてくれる手の温もりを感じて、シャニーの瞳にも枯れた泉へ水が戻るように光が満ちていく。

彼がいいと言ってくれるなら、もう迷うことなんてない。

「はいっ！ よろしくお願いします！ ロイ様！」

涙を拭って仲間と共に背筋を伸ばして敬礼して見せた。また救われた。今度は……全部を。

(ロイ様の下で働けるなんて、夢のようだよ！)

誰もいないなら、この翼が踊る胸の中を全部叫んで羽ばたかせたい。憧れの人と、これから毎日一緒だなんて。

こんなにキアでのスタートは想像していなかった。昨日までの悔しきや不安が全部吹き飛んでじんわりする。むしろ、みんな断つてくれて良かったときさえ思えてきた。

破顔の太陽を見つめたロイは大きくうなずく。彼は握った手をさらに強く引き寄せた。

「じゃあ、早速ひとつお願いしようかな」

ロイからの最初の指示。なんでも来いと意気込んでいると、彼は歩み寄って背後にまわり、肩に手をまわしてそっと囁きかけた。突然耳をくすぐったロイの声に、ひやっと目が跳ねる。

「呼び方、元に戻してよ。いつまでよそよそしくするつもりだい？」

「え……」

「12月のとき、約束したはずだろ？ せつかく再会できたのに、またそうやって線を引くのか？」

「で、でも、ロイ様は契約主だし、あたしは傭兵だし」

そう言ったら、ロイの顔が曇った。あのときは遊びで訪れたからだと思っていたが、彼はきつとそうではなかったらしい。

「今回は仕事かもしれない。けど、これから一年一緒なら、最初に言っておかないといけないと思ってるね」

(えっ?! いいのー)

目を真ん丸にしていると、ロイはしっかりとうなずいて見せてきた。あのとき言われたことを思い出す。

——君には、なんでも話せる相手であって欲しい

もう、今は天馬騎士団の傭兵ではない。自分を縛る鎖は、ロイが解いてくれた。

(なら……ロイが喜ぶなら、あたし、なんでもするよ)

今できる一番簡単な恩返し。肩に置かれた手にそつと自身の手を重ねると、ロイを見上げて名前を呼ぶ。

「ありがとう、ロイ」

「ああ、こちらこそ。おかえり、シャニー」

ロイはふつと嬉しそうになると、シャニーの手を取って部屋から出ていった。

なんだか、夢みたい (1)

朝と同じ場所を歩いているとは思えない。来たときには、あんなに喉が締め付けられる思いだったのに。

ロイと契約を結んだシャニーは、彼に手を取られて城のエントランスを歩いていた。目線も手も繋がって、部屋を出てから途切れることなく喋っている。

「シャニー、君は前のときの部屋でいいよね?」

会話の中でふいに聞かれ、シャニーはきよんとした。

「前のとき……って、え?!」

飛び出た驚きに栓するように、はつと手で口を覆う。彼は12月に使っていた部屋を残してくれていたと言うのか。

なんだか、後ろの視線が痛い。振りむいたら、物言いたげな6つの目が今にもなにか口走りそうに思わず前を向く。そう言えば、フェレに行っただとは伝えたが、毎日を城で過ごしていたとは仲間に言っていなかった気もする。

「もちろんだよ!」 と言うか、ひとりに一部屋貸してくれるの?!

ようやく平和に眠れる。毎晩のように雑魚寝の下敷だったシャニーはホッとしたが、それ以上にうれしさが込み上げてきた。彼は、帰る場所を残しておいてくれた。また来る——そう言った自分を信じてくれていたと思うと、感謝以上の気持ちが湧いてくる。

「そのつもりだけど。だって、4人じゃ狭いだろう? 空いてるのだから使えばいいよ」

ロイはさらっと返してきた。やはりこの人はタダモノではない。傭兵相手に、こんなにしてくれる貴族は聞いたことがない。下手すれば、警備をかねて野宿を指示される契約先もあると聞く。

(この人を、支えてあげたい)

12月のときと同じ気持ちを抱きながら、離れに向かう廊下をロイと歩く。静かで穏やかな景色の城。大好きな雰囲気、戻ってきたのだと実感させてくれる。

「ありがとう、ロイ。ホンット、動乱からお世話になりっぱなしだね」

見習い修行のときも、ずいぶん目をかけてもらった。デイークという、作戦の中心にいた人物の傍にいたからだろうか。でも。

動乱が終わってからも、何度彼に助けてもらったろう。仮面の魔術師と戦ったときもだし、12月のときだって、彼に想いを聞いてもらえなかったら心は死んでいたに違いない。そして……今回だ。

感謝を口にしてロイを見上げるシャニーの顔は自然に緩み、握る手が強くなる。

「僕だってシャニーに助けられてきたし、お互い様だろ？ 手紙、すごく励みにしてきたよ」

ロイが手紙のことを嬉しそうに話す姿は、長かったトンネルに光がさすように胸を温かくしてくれる。ずっと文通してきて良かったと思えた。

「へへっ、良かった、良かった！ これからバリバリ働いてお返しするからね、ロイ！」

ロイはここまで導いてくれた一人だ。

なにをしてあげたら、彼は喜ぶだろうか。ロイの横顔を見上げてそんなことばかり考えていたら、ふいに腕が伸びてきて彼に体を抱き寄せられた。

(へっ……?! い、いきなりすぎだよ！)

もう頭は真っ白。

頭を冷やそうにも彼のいい匂いが広がって、麻酔でも嗅いだように脳がぼわんとする。もう、いつそののまま。

……でも、様子がおかしい。目だけで彼を見上げると視線はこちらにはなく、それを追って前を向いたら目の前は壁。

苦笑いしながら曲がり角を抜けていく。手紙では励ますしかできなかったが、これからはこの手で彼を支えられる。今みたいなことだって……。

嬉々とした気持ちに飛び上がりそうになるのを抑えながら歩いていたら、既視感のある景色が広がり始めた。

「呼び捨てにしているツス、相当深いツスね……」

もう我慢できなくなったら、後ろではミリアが興奮気味の声をあげ

てカサカサしている。こんな距離だ、当然ロイにも聞こえているだろう。顔から火を噴きそう。

「ミリア、後で」

「あ、はい。せつかくのトコロすいません」

助かった。レンが黙らせてくれた。

居場所がない不安から解放されたと思ったのに、今度は仲間が心配だ。最初からこんな感じだと、ロイに妙なことをしかねない。

しばらく背後に牽制を送りつつ進めた足が自然に止まった。糸で繋がっているようにロイも止まっている。

「わっ、ホントだ！ ホントにそのまんま残してくれてたんだ」

新しい世界へ飛び込むようにドアを開け、視界が広がるやシャニーは歓喜の声をあげた。

カーテンも、ベッド脇の小物も。机の位置はもちろん、並べた本や忘れて置いて帰ったヘアピンまで。まるで12月と繋がっているかのように、何もかもがそのまままで止まっていた。立ち去れずじつと部屋を眺めていた記憶が蘇る。

(懐かしいなあ……ホントに戻ってきたんだなあ……)

意外にも綺麗に使っていたのだと自分でも感心しながら、ベッド脇にあった毛糸玉を手取る。

12月は降り積る無力感や恐怖心に、胸が塞がる想いで淀んでいた。

でも、あのときがあるから、今こうしてフェレに立っていると思うと不思議としか言えない。無駄なことなど……何も無いのかもしれない。

「シャニー。荷物の整理が済んだら、あとで僕の部屋に来てくれ。場所、分かるだろう？」

感傷に浸っていると、後ろからロイの声がコツコツ頭を突いた。

きよとんとなりながら振りむいてロイの顔を見ていたら、彼の後ろからジツと見ている仲間の視線が刺さった。誰もが物言いたげだ。思わず持っていた毛糸玉をぽろりと落としてしまう。

「し、知らないよう！ 遊びに来た時も、あたしエントランスまでしか

……」

仲間の誤解に気づき、シャニーはブンブン顔を横に振る。

ただの居候に、本館をうろつく機会なんか無かった。精々、ロイとの待ち合わせでエントランスまで足を運んだ程度だ。

相変わらず怪訝な眼差しを送ってくる仲間から逃げてロイへ視線を戻すと、彼は時計に目を落としている。

「じゃあ18時に迎えにくる。少し二人で話をしよう」

ふっと笑みを浮かべたロイは、手を振ってその場を後にした。

ふいに訪れた静寂が、夢のような時間に新たな秒針を刻み、シャニーはふうつと一息吐く。

新しい生活への喜びと、戻ってきた懐かしさを噛みしめながら、さっそく部屋の中で荷物を広げて整理を始めた、その矢先。

バタバタと、鎖が切れたように足音が突っ込んできた。

「よっ、憎いッスね！ ロイクなんて呼び捨て、羨ましいなあ！」

ミリアが手を取ってさっそく茶化してきた。もう辛抱できないと言わんばかりの彼女に、部屋の真ん中まで引つ張られていく。なんだか、処刑台にしょつ引かれる気分。アツと言う間に、三人に囲まれる。「ん。ラブラブ。二人つきりでお話だって」

レンが分かっているくせに大げさに言うから恥ずかしい。

ロイが呼んだのはきつと仕事の話に違いはない。契約は済ませたけれど、仕事内容はまるで詰められておらず、明日からの任務を決めなといといけないはずだ。

「へへへ……。ラブラブなんて違うよ。友達だよ」

「そんな緩んだ顔して、信じるワケないでしょ？」

(傭兵……じゃね……)

ルシヤナは両手を広げて笑っているが、シャニーにとっては半分本気だった。

お互いにそんなの言い合ったことはないし、何より相手は世界の英雄だ。その壁さえ無ければ……そう思っていたら、勢い良く背中をバシッと叩かれて視界が揺れる。

「隅に置けないヤツだね！ 押しかけ女房やってたの？ 意外と肉食

じゃん！」

ルシヤナの豪胆な笑い声がガンガン揺さぶってきて、みるみる頭に血が上ってくるのが分かる。今にもこめかみから血が噴き出しそう。

「なっ、そ、そんなんじゃないし！ だいたい——」

「ねえねえ、どこまでいったのさ？ 最後まで？」

否定しようとするルシヤナはさらに大きな声で被せ、とんでもないことを聞いてくるのではないか。なんだか、かなりマズい方向に進んでいる気がするが、三人に進退どちらも塞がれて身動きが取れない。

「白状しなよ？ ほらっ。」

「~~~~~ツ」

ルシヤナのニヤニヤが近づいてきて思わず後ずさる。そのうち頭が壁にぶつかって、完全に追い詰められてしまった。

(ルシヤナはこいつらを止める役でしょ?!)

普段なら暴走するミリアの首根っこを捕まえて叱ってくれるはずのルシヤナが、彼らの先頭に立って好奇心の塊をぶつけてくる。ミリアは普段通りだし、レンまで先を求めてじつと見つめてきて、頭はもう沸騰寸前だ。

「バ、バカなこと言わないでよッ！」

すきま風が抜けるように敵陣を抜け出したシャニーは、収納の棚板を引つ張り出し、仲間をそれで押し出していく。

「ほらっ、遊びに来たんじゃないんだぞ！ 荷物整理してきなよ！」

どうにか仲間を追い出したシャニーは、目を三角にして廊下を指さすと、バンツと響くらしい強く扉を閉めた。

「つたくもう。ロクでもないことばっかに興味もつんだから」

ぶつぶつ独り言を漏らしながら整理に戻ろうとしたときだった。なにやら、廊下から仲間たちの声が聞こえてくる。扉ごしに聞き耳を立ててみた。

「シャニー、嬉しそうだった」

「ああ、これで良かったんだよ。十八部隊にとっても、あいつにとっても」

レンとルシヤナのやりとりに、ふいに心が揺れた。心配してくれた

のに、言いすぎたかもしれない。
いや……あの目はホンキだった。しばらく、ルシヤナと一緒に酒場
に行かない方が良さそうだ。

なんだか、夢みたい (2)

時間どおりにロイは迎えに来た。

部屋から顔だけ出して見送る仲間たちを手で払って追い返すと、シャニーはロイと並んで廊下を歩いていく。

これだけでも貴重な時間に思えてくるから不思議だ。今でもフェレに立っているのが信じられない。

「ロイ、雇ってくれて本当にありがとね。ここがダメだったら正直……野宿のそこだった」

一か八かの大勝負だった。

ロイが留守でも、マリナスに追い返されても、どれか一つ歯車が狂っていたら終わりだったのは疑いようもない。

衛兵に摘まみ上げられ、わっと視界を包んだ絶望。それを颯爽と駆けつけて救ってくれたあの眼差しを思い出したら、自然に彼を見上げていた。

「いや、頼ってきてくれて嬉しいよ。本当は去年から打診したかったんだけど、シャニーはリストにいなかったしね」

それを聞いたとたん、シャニーの目は点になった。

(あ……。あれホンキだったんだ……)

手紙に書いたことがあった。傭兵として雇ってくれさえすれば、ロイのもとへ行けると。結果的にそれが実現したわけだが、あのときは冗談のつもりだったとは言えるはずもない。

ずっと彼がそれを本気で考えてくれていたと思うと嬉しく、それ以上でキリキリと恥ずかしくなってきた。

——あたしってば天才じゃん！

手紙を書き終え、そんなふう口走つたのを思い出す。もつと早くから一緒になれたかもしれないと思うと、真面目にやらなかった自分をポカポカ殴りたい。

なにより申し訳なかった。彼は自分よりずっと、真剣に考えてくれていたのに。

「君のような人が側にいてくれると、僕も助かるよ。天馬隊は軍にい

なかつたし」

包むようなロイの優しい口調に撫でられるよう。

シャニーはテレの笑みを浮かべたが、遅れて湧いた違和感にきよとんとした。

ロイのところらにだつて、イドウヴァは再三営業に来ていたはずだ。それなのに、ずっと空席にしていたことになる。

(もしかしてあたしのために……?)

そこまで考えてやめた。そんなはず、あるわけない。

気づいたらもう知らない区画まで来てしまつており、あたりをきよろきよろ見渡す。離れとはまるで違う立派な造りは、きつとロイたちの居住区に入ったのだろう。無意識に背筋が伸びる。

「今覚えなくていいよ。明日あらためて案内するし、帰りも部屋まで連れてくから」

ロイは不安だったのを気づいてくれたのだろうか。すぐに声をかけてきた。

「良かったー。ありがと。迷子になりそうだったんだもん」

ほつと胸を撫で下ろす。探検は大好きだが、初めての城を夜うろつく勇氣は流石にない。ただでさえ、ロイ以外に顔見知り……一人いた。とは言え、あの説教好きにフラフラしているのを見られたら、それこそただでは済まないだろう。

しばらく彼の後ろについて歩き、案内された先でシャニーは思わず手を結ぶ。

「わあ……。ここがロイのお部屋かあ」

どちらを見ても、広くて、綺麗で、とにかくスゴイ。それしか頭から出てこない。

高い天井は開放感があり、シャンデリアが白を基調とした部屋を夜でも明るく照らしている。テラスに繋がる大きな窓から、きつと陽が燦々とするのだろう。ぜひとも昼にも来てみたいものだ。

室内に置かれた調度品は実用的なものばかり。書棚と机に革張りのソファくらいで、ベッドも天蓋があるわけでもない。

世界の英雄だし、戦利品や勲章、献上品で煌びやかだと思つていた

ので意外ではある。それでも、そのシンプルさが部屋の高潔さを引き立てているとも言えた。

城と言ったら武骨なカルラ工城しか知らない彼女は、手を結び、目にきらきら星を浮かべて感嘆を漏らす。

その姿を、ロイは面白そうに見ている。

「好きにくつろぐと良いよ。今ぐらい身軽になったらどうだい？」

コンコンと鎧を指で叩かれて、シャニーは現実へとはっと戻ってきた。振りむいたら、もうロイは歩いて行ってしまった後。彼は侍女にお茶の用意を指示していた。

(こんなことして大丈夫かな。あたし、傭兵なのに)

くつろげと言われても、言葉どおりに受け取るわけにはいかない。

ロイは良くても、マリナスの態度を見れば分かる。あれが普通だ。主のプライベートルームに今日契約したばかりの傭兵がいるのを見られたら、なにを言われてもおかしくない。

「ロイ、でもさ、あたしたち傭兵だから。ロイを守るためにいるわけだし」

マズいことを言ったかもしれない。一瞬、ほんの一瞬だったが、ロイの表情が曇った気がする。気のせいだろうか……。

ロイはまっすぐ歩いてくる。やはり気に障ったか……とか考えているうちに彼は背後にまわり、なにをしているかと顔だけ振りむいたら、パチンと金具を外す音がした。

「今は任務外時間だろ？ だからこの時間に呼んだんだよ。聞きたいことがあったしね」

彼は鎧を外していたのだ。目を白黒させてシャニーは自分から武装を解き始めた。

「だいぶ使い込んでるね、その時計」

ロイから声をかけられて時計を見下ろした。戦場で受けた傷でガラス面にも筋が入るそれをロイは指さしている。

「うん。見習いのおきからの付き合いだしね。聞きたいことってなに？」

「まあまあ。座ってゆっくり教えてくれ」

ロイはソファに案内してくれ、彼も隣に座った。

鎧がなくなると妙に落ち着かない。傭兵が契約主の部屋で仕事もせずお茶会とか、良くないに決まっている。

幸い、ロイはすぐ話しかけてくれた。

「シャニーだし、単刀直入に聞くよ。イリアで何があつたんだ？」

(ズバっと来たな……)

早く質問して欲しいと思っていたのに、思わず言葉に詰まってしまった。

瞠目して両唇を噛む彼女に、ロイは顔を近づける。

「さっきの言葉は冗談じゃない。シャニーのような優秀な人を解任して、あんな書面まで出して追い詰めようとする理由が分からない」

じつと見つめられて、目頭が熱くなってくる。

イリアから放り出されて、味方になってくれる人などいないと思っていた。じつと正面から見つめてくるロイの目が、本気で心配してくれているのははっきり感じる。

(ロイにだけでも……分かってもらいたい)

この人なら、きつと分かってくれるに違いない。なぜかそう確信できる安心感。

慣れないリキアでの、先の見えない苦労。思い出した不安を溶かす温もりを間近に感じたら、ふいに胸から想いが溢れだしてきた。急に声が震え、視界が海に沈んでいく。

もう、堪えられない。どれだけ睨っても、ぼろぼろ零れ落ちて止められない。

「全部教えてくれ。君の支えになりたい」

涙を前髪に隠しても、そつとロイが背に手を添えた。温かくて、余計に溢れ出してくる。ロイの前では泣かないと誓ってこのフェレの地に降り立ったはずなのに。こんな情けない顔を見せたくない。たまらず手で覆う。

そのままロイに抱き寄せられた。12月のときと同じように。大好きな匂いに包まれ、何も考えられない。どれだけ頭が拒絶しても、もう心が飛びついていて。ロイの胸の中で、涙に途切れ途切れになり

ながら今までを必死に絞りだす。

「信じて……。あたし、間違ったことしたのかな……」

全てを吐き出して、力なくもたげられた顔は真っ赤に濡れそぼっていた。今も頬を伝う紅涙を指先で拭いながら、ロイはシャニーの乱れた髪を静かに手で梳く。

「全部信じるさ。今まで疑ったことないだろ？」

信じる……。その短いフレーズに、シャニーは吸い込まれるようにロイを見つめてハツとする。いつもの彼の目と違う。

「それに、シャニーは間違つてなんかいないよ。あまりに理不尽で……憤りを感じる」

間違っていない——その言葉にどれだけ刻まれた心が癒されたか。

ロイが自分たちのために怒ってくれている。申し訳なく思いながらも嬉しかった。彼の言葉を伝えたら、仲間もきつと救われるに違いない。またしてもロイの温かさに救われた。

……。そこまで考えて、シャニーはロイの胸の中にいるのを思い出す。それでも、12月みたいに距離を取ろうとは思えなくて、そのまま顔を押し付けた。

（ありがとう、ロイ。あなたにさえ信じてもらえたなら、もう十分だよ……）

鎖が解けたように、じんと心が軽くなっていく。

しばらく胸の中でシャニーは啾々と咽び泣いていた。

小さくなっていく声を受け止めるように、ロイは彼女が顔を上げるまでずっと頭や背を撫で続けていた。

ようやく、涙が止まった。静かに上げた顔には、別の感情が燃えている。

「あたしへの処罰は甘んじて受けるにしても、……。仲間にまでこんな仕打ちは許せない！」

燃えていたのは怒り。切先を突き立て、火花を散らすように爆ぜた怒り。それがごおっと青い目に広がって、あつという間に刀にも似た鋭さで切れ上がる。

唇を噛んで震える目に映ったのは、思い出したくないあの顔。ぎり

ぎりと拳が音を上げていく。

その手がふつと力を失う。包むように重ねられたロイの手。

「どんな思惑があるのか、騎士団の事情は分からない」

そつと添えられた手はいつしか、しっかりとシャニーの手を握っていた。

「振り向いてくれない人を憎むより、『好き』と言ってくれる人たちに目を向けようよ。君にしかできないあの笑顔を、皆は求めている」

「好きって言うてくれる人……」

「君のまわりには、たくさんいるじゃないか。君の仲間も、村の人たちも。僕だって」

真つ直ぐに澄んだ眼差しから掛けられた言葉に、砕けた心が解けていく。静かに目を瞑ったシャニーは、何度も彼が掛けてくれた言葉を心の中で繰り返した。

（ロイに背中を押ししてもらえたら、ホント勇氣出るよ。あたしたちは

——間違っていない！）

世界を救い、今も復興の最先端で輝き続ける英雄。彼に言ってもらえたら、何にも代えがたい自信が湧いてくる。

他の誰に認められずとも、世界中が敵になっても。ロイにさえ分かってもらえたなら、前を向いて飛んで行ける。折れそうになっていた誓いを言葉にして自身へ刻む。

「ありがと。あたし、約束して出てきたんだ。イリアの希望になるって。だから、そのつもり！」

「うん。その笑顔こそシャニーだよ。そういうことなら、僕も協力するよ」

そう言つてロイはうなずいてくれた。雇つてくれただけでも十分すぎるほどありがたい。それに、こんなにも手を差し伸べてくれる。

随分と心配をかけてしまった。吸い寄せられそうで、彼をどうしたら喜ばせられるだろう。それしか浮かんでこない。

「えへへっ、ごめんね。心配してくれたんだよね」

今できる精いっぱい之恩返しはこれくらいしかない。涙を拭き、真つ直ぐ彼の顔を見上げて笑つて見せる。

「心配するさ。友達じゃないか」

ロイはシャニーの両手を取り、正面を向かせると真剣な顔で言った。

「心が折れるのは分かる。けど、そういうときの一番の敵は、自分自身だと思う」

思わずゴクリとなった。思い当たる節はいくらかもある。独りでは解けなかった悩みを、いつもまわりに助けられて乗り越えてきた。

「君に立ち上がる気力があるなら、僕はいくらでも支えるから」
ふるつと視界が震えた。

ロイが、憧れの人が支えるとayingてくれたのだ。それだけで、何度でも立ち上がれる気がしてくる。

不思議な感覚だ。たしかに、動乱から仲良くしてきた。それでも、ロイは世界の英雄で、雲の上の存在だろうに。

(あたしみたいな傭兵に、こんな優しい言葉をかけてくれるなんてな……)

ロイには甘えっぱなしだった。本当なら、守らないといけない立場。でも、独りでは傷を癒せない人間だと自分でも分かっている。

今は精いっぱい甘えて、その分恩返ししようと思った。

「ありがとう！ あたしも、いつでもロイのコト、支えるって約束するよ！」

この人のためなら、なんだって出来る。それこそ、空だって飛べる気がした。この剣も、この笑顔も、全てを捧げるつもりだ。

そう言うのを待っていたかのようにだった。ロイは両肩を持つと顔をのぞき込んでくる。

「言ったな？ じゃあ、指切りしよう」

「お安い御用だよ！」

すつと差し出された指に手を伸ばす。躊躇う理由なんて何もなかった。

また一つ、ロイと約束した。一つ目は、生きること。二つ目は、支えること。

別に約束するまでもないかもしれない。けれど、指切り自体がきつ

と大事に違いない。二人が今、隣にいと互いの温もりが教えてくれる。

(ようやく傍で支えられるんだ。あたしの憧れの人……)

12月から願っていたこと。誓いを果たすまでは叶わないと思っていた。それが今、目の前にある。夢でも見ているようだ。

持てるありつたけを捧げよう……そう誓って指切りをそつと解こうとしたときだ。ロイがすっかり指に力を込めたまま放してくれない。

「シャニー、もう一個約束だ」

こつちの約束は有無を言わせないつもりらしい。指を結んだまま、うなずく間もなくロイは続けた。

「『自分みたいな傭兵』って言わないでくれ。僕にとつて君は傭兵でも、主従関係でもない。世界でたった一人の、大事な親友シャニーなんだ。君も僕のこととはロイだと思って欲しい。契約者とか、貴族だとか、そんな目で見ないで欲しいんだ」

ドキンと胸が跳ねた。まるで心を見透かすような言葉が、無意識に身構えてしまう心へ手を伸ばしてくる。

それが出来るのならば、それが許されるのならば……。

「——約束だ、指切った！」

答えを返す間もなく、ロイは指を離してしまった。思わず彼の手を追うが、席を立った彼はらしくもなくポケットに手を突っ込んで部屋を出て行くこうとしている。慌てて鎧を手に取り後を追う。



自室へと戻ってきた。

ロイと手を振って別れたシャニーは、彼の胸の温もりを思い出し、切なくなつてベッドに身を移す。

夜景を眺めながら、今も指先に残る感触を確かめるように摩りながら呟いた。

「ロイの好きって……やっぱ、そういう意味なのかな？」

彼の言葉を思い出し、シャニーはそつと自身の胸に手を置く。耳に

刻まれたように思い出される声。

——僕にとって君は世界でたった一人の大事な親友シャニーなんだ

そう言ってくれるのは嬉しい。あの人にそんな風に思ってもらえるなんて、窓から飛び出しても飛んでいけそうなくらい心が軽い。

それが許されるなら……胸に置いた手はいつしかロケットを握りしめていた。一つ目の約束として、彼が繋いでくれた友情の証を。

(そう言ってくれるなら……、身を預けられるなら……)

阻むものをロイは取り払ってくれようとしている。このまま、その手を取りたい。

そう願った瞬間、何か違和感が刺してシャニーは両手を見下ろした。

「あたし……どうして？」

震えが止まらない。こんなに胸を絞り上げられて震えているのに、それがなぜか分からないのだ。

テラス窓からぼうっと夜景を見つめ、それが何かを探して答えの出ない昏い空を彷徨う。

ふいに、ロケットを握っていた手がずるりと垂れる。

決断できないまま、いつしか疲れ果てた身を壁に預けて眠ってしまったのだ。

初日から半殺し?!

翌朝、飛び起きたシャニーは目をぱちくりさせていた。なにせ、シャワーも浴びないまま寝落ちてしまったから、何の準備もできていない。

寝ぼけ眼に足が空回りしながら浴場へ駆けこみ、ドタバタしていたら陽が昇ってきてしまった。

何とか身支度を終え、朝からへとへとになった身を廊下の窓にあずけて手を突いた。

初日からやらかすところ。ふうつと安堵を吐き出していると、あくびや伸びをしながら仲間たちが部屋からふらふら出てくるのが見える。

なんだか、ユルイ空気。気を取り直してロイのもとへ向かう。

「と言うわけだ。二人とも、よろしく頼むよ」

「ハッ！」

任務開始時間より早めにロイと合流し、場内のレクチャーを受けて最後に訪れたのがフェレの騎士団だった。

呼びつけた二人の騎士に、ロイが紹介してくれている。自身より年上の騎士に指示するロイの横顔が、凛々しくてつい見ってしまう。

フェレの騎士たちは興味津々らしい。正面に立つ赤と緑の騎士の後ろからのぞき込むように、彼らはちらちらしている。

「二人とも本当に頼りになるから、色々聞いてみると良いよ」

戻ってきたロイは、そう言いながら親指を立ててきた。きっと、がんばれと言ってくれたに違いない。

「ありがとう、ロイ！」

朝からあれもこれもしてもらってしまった。同じように指を立て、ロイに感謝を伝えた途端だ。

（——ッ。……やば……）

ザクつと飛んできた視線に思わず背筋が凍りつく。おそるおそる振りむいたら、さっきの騎士二人がこつちを凄まじい形相で睨んでい

た。

「ああ、僕がこう呼ぶように言っているんだ。彼女は僕の親友でもあるから気にしないでくれ」

ロイが間に入ったら、すぐ槍のような目つきが元に戻る。

やはり、皆がいるときは友達とはとても呼べない。バクバクする胸に手を置きながら思い知った。

あれこそが普通の反応にほかならない。仕える立場、あまつさえ、よそ者の傭兵が呼び捨てにしたらどうなるかなんて。

それでも、ロイとは約束しているし、去り際に彼は肩へポンと触れていった。気にするなどでも言いたいのだろうか。

（気にするよお……。さっそく殺されるかと思っただじゃん……。とくに、あの緑髪の人……）

じつと緑の騎士の様子をうかがう。あの人の目つきは鋭く、とても強そうだ。

じろじろ見ていたら視線がかち合った。ぎよつと槍が脳天から突き刺さったかのように動けなくなる。仲間まで自分を盾に後ろに退くから、血の気が退いて悪い汗がドバドバ出てきた。

「私は第二騎兵隊長ランスという者。貴女のごことは、先の動乱から知っている。よろしく頼む」

意外にも穏やかだった。詫言の発射準備をしていたら、スツと静かに手が差し出される。

氷のように透き通って落ち着いた声。ジャギーの入った若緑髪の後ろから見下ろす目は、見透かすような厳しさの中にもどこか優しさがある。

何より仕草や佇まいが凜としていて隙がない。騎士とは、きつところのような人を言うのだろう。一目で、敵わない人だとシャニーは悟った。

それでも、怒っていないと分かると、握手するシャニーの顔にはいつもの笑顔が戻ってきた。無言のままにランスはその顔をじつと見降ろしている。

「いちいちそろそろしくね、ランスさん！」

もつとガミガミ系かと思つたが、とても紳士的でカツコイイ人だつた。自然に声のトーンも上がる。

「君には期待している。イリア騎士団の経験や戦闘術を、ロイ様や我々に教えて欲しい」

「え？ あたしたちの？」

いきなりで驚いた。自分たちは傭兵だ。ロイにずっと仕えてきた人が、昨日から入ってきた、いわば新人にそんなことを求めるとは。

「イリアの天馬騎士団……勇猛にして、たおやかな天空の花。その価値観や戦技は、きつとロイ様や騎士団にも大きな財産になる。私はそう確信している」

「もつちろんだよ！ あたしもリキアを勉強しに来たんだ。いろいろ聞かせて欲しいな」

もつと警戒されるかと思つていた。ロイの言つていたとおり、ランスはとても頼りになりそうな人に映つた。そればかりか、こんな風に必要だと言つてもらえたら、朝から心も弾む。

つつい、手を挙げて応えたら、ランスはふつと口元に静かな笑みをつくつた。

「そうか、なら私の書物を貸そう。全24巻読めば、いろいろ勉強となるろう」

ランスは厚意でそう言つてくれたのは分かる。けれど、全身の皮がわつと引きつったような感覚に陥つた。

(げっ、べ、勉強つてそつちか……！)

村の学問所で使つていた教科書だつて、一冊も読了したことはない。座学は大の苦手……それが24冊もあるとなると、頭上から雪の塊でも降つてきたような衝撃を受けてぐわんぐわんする。ランスに「必要だろうか？」と目で聞かれてもなにも言えない。

「あ、あはは……嬉しいナー。今度お邪魔しよつかな」

覚悟を決めて挑むしかないか。手を差し伸べてくれる人がいるなら、その手を掴まないわけにはいかない。

それでも声のトーンを上げられず、ランスにも伝わったらしくふつと笑っている。

もう少し、彼を知りたい。なにから聞こうか考えていたときだった。後ろから投槍が飛んできたかのような、豪胆な声が入ってきた。

「そんなことより君！ 手合わせ願おうか！ 天馬に乗れ！」

今まで聞いたこともないような、腹に響く男性の力強い声。ランスとは対極にいそうな声質を追っていくと、馬上から飛んでくる覇気に串刺しにされた。

(あつ……ヤバ！予感しかないんだけど……)

馬に乗っているのは紅蓮の騎士。赤髪は重力に逆らう炎のようで、整えてあると言うより、伸びるに任せたものを適当に切り揃えた感じだ。

彼と目が合ってしまったと、ずいっと意気揚々に槍を向けられた。すつとぼけて自分を指さしてみるもの、後ろで隠れていたミリアたちが背中を押してくるものだから目が飛び出しかける。

「さあさあ、何をしている！ 傭兵だからと遠慮する必要はないぞ。勝つのは俺だがな！」

「えっ?! なんでまた?」

「君の実力はロイ様からうかがった。ロイ様をお守りできるほどか見せてもらおう！」

馬上の騎士は穂先で天馬を指し、うずうずして仕方ない様子。その目は自信に満ちており、どう考えても血の気が多そうな人なのは間違いない。

今にも突っ込んできそうで全身がビリビリくる。逃げ出したくても、後ろから仲間たちが押してくるではないか。

「シャニーのハイテンションの上をいく人がいるとは……」

「世界は広いッスね……」

ルシヤナやミリアの、背後からの啞然とした声は完全に他人事だ。やっぱり、ヒドい部下を持ってしまった。

「え！ いやっ、ちょっと?! 私闘は良くないよ！」

「槍同士交えるのが、お互いを一番理解できるに決まっているだろう！」

その闘志を向けられたシャニーはじたばたするばかり。もう赤の鎧に身を包んだ騎士は槍を構えていて、馬までも突撃の瞬間を待ちわびるように鼻息荒い。

「俺は第一騎兵隊長アレン！ 行くぞ!!」

「人の話を聞いてよおお！」

鎖が引きちぎれたように、ついに飛び出して土煙が噴きあがる。脱兎のごとくフル回転に逃げ出したシャニーは、天馬へ滑り込むと旋風を起こして一気に空へ飛びあがった。

「天馬騎士……おまけに希少な上級天馬騎士と戦える機会はめったに無いからな!!」

(こ、殺される……?!)

興奮を隠さず燃えあがる闘志を眼下に、シャニーは朝から冷や汗が止まらなかった。

価値の高い商品

一方、イリア本国の天馬騎士団には、朝日と共に早馬が到着していた。

リキアからの手紙は、そこを管轄する副団長アルマへと届けられた。表に記された紋章は、一気に彼女の眼差しを厳しくさせる。予想はしていたものの、想定よりずいぶん早い。

「これは……?!」

封を切つて中に入っていた契約書へ目を落とした彼女は、瞠目して思わず声をあげた。

ロイが契約を結ぶことは想定していたが、まさかこんな条件を出してくるとは。これは重大事——彼女は即、団長室へむかう。

「団長、失礼します」

ノックの返事も待たず入る。団長席から何事かと怪訝な視線を送ってくるイドウヴァのもとへ、カツカツと高くブーツで床を叩きながら突き進む。

「このような書簡が届きました」

書簡一つになにを慌てているのか……そんな風にもイドウヴァは思っていたのだろうか。渡した書簡の表面を見るや、目の色を変えた。

「フェレの紋章?! ロイ様ですか!」

ガサガサと荒く中の契約書を引っ張り出すと、振り子のように左右へカチカチと視線を落としていく。

その様子を、アルマは渋い顔で見下ろしていた。ロイが示してきた契約に、この女がなにを言いだすか不安だった。良くない流れにならないことを祈るばかり。

「直接十八部隊と契約しないよう、お願いしておいたのに……」

直筆で書かれた契約内容をじっと見下ろして、イドウヴァはため息にも似た独り言をこぼしている。アルマは眉をひそめた。

(ロイ様相手に、そんなものは無理だろう)

他の諸侯ならともなく、相手は英雄ロイだ。いくら今までの実績が

あろうとも、理不尽な内容にうなずくはずがない。まして標的がシャニーであれば、なおさらと言えるだろう。

「完全支配権移転型契約とは……やってくれますね」

もう契約は締結されている。すなわち、シャニーの生殺与奪の権を握っているのはロイということになる。

イドウヴァの顔に、苦虫を噛み潰したような悔しさが滲んでいる。

「しかも、責任負担条項を見てください」

アルマは附則を記した部分を指さして注目を促す。彼女にとって、ここが一番の懸念点だった。契約期間中は、全責任をロイが負う形になる。その負い方が問題なのだ。

——当部隊が起こした問題については、部隊の買取にて対応し、貴騎士団へ損害の無きよう対処する

それを見たイドウヴァの顔には案の定、不敵な笑みが浮かびだす。

「これは重畳……。ロイ様がこんな好条件の契約を締結してくださいとは。いざとなれば仕掛けて良いとは、お分かりですね」

こちらは実質責任ゼロ。うますぎる話というわけだ。

その気になれば、ボロが出るように仕向けるくらい、この女なら平然とするだろう。シャニーが我慢できない性格なのは、去年の11月ではつきりしている。

いくらもやりようはあるのだから、彼女がほくそ笑むのは当然といえる。

「それにしても、ロイ様もよほどお気に入りと見えますね」

「ええ。去年の12月も逢引していたと聞きます」

「あれだけ足繁くフェレに通ったのに、崩せなかったのも領けますよ」

——天馬隊はシャニーに任せることにしている。リストになぜいないんだ？

幾度となく営業に赴いても、ロイはそう言って交渉の席にもつかなかったらしい。その都度、当時の団長テイトの方針のせいだと、イドウヴァはヤケ酒しながらくだを巻いていた。

「しかし……流石に英雄ロイですね。なかなか手強い」

一方で、彼女は歯ぎしりが始まっていた。

イドウヴァは机上の宝玉を手にとって転がし始める。これをするのは、かなりイラついているときだ。

「ええ。完全支配権移転ではこの一年、我々から直接指示はできません」

アルマの心は、それを鼻で笑っていた。

たかが一騎士団の団長が、英雄相手にケンカを売って勝てるはずがないではないか。

大方イドウヴァにとっては、シャニーをイリアの外に摘みだした時点で、計画は半分成功だったのだろう。その後は腐るなり、野垂れ死ぬなり好きにせよというところか。

(ロイ様は、シャニーを守ったというわけか)

その大事な部分がとん挫したことになる。お得意の身分剥奪も、ロイが支配権を得ている間は天馬騎士団には権限がない。

まるでチェスだ。単騎ならどうにでもできるはずの暴れ馬なのに、うまく駒が利いていて手が出せない。彼女がいら立つのも無理はないだろう。

「我々にとつては好都合です」

にもかかわらず、イドウヴァは手元で転がす玉を見下ろしながら、擦れるような笑い声をあげだした。

「この一年は、シャニーがイリアの地を踏むことはないと確定したのですからね。皮肉なものですよ。彼女は救いを求めて、自ら鳥かごに入ったようなもの」

「そうですね。イリア攻撃など許可しないでしよう」

「小金を食い潰してあれこれ邪魔する人間がいなければ、計画は一気に進みます。ふふ……これはいい」

ロイがイリアに攻めこむ理由はないし、彼女に単騎で出撃を許すとも思えない。お互いに最善となったのかもしれない。……そう言つて終わればよかったのだが、簡単な状況ではなかった。

(あとは……これをどうするかだ)

一番の山場。アルマはごくりと息を呑む。契約開始における最初の選択だ。—— 売買契約か、傭兵契約か。

厄介ごとになる前に、さっさと売払ってしまおう——イドウヴァなら、そう言い出しかねない。フェリーズが同じ提案をしたときも、彼女は売買を持ちかけようとしていた。

「支配権移転型で進めてよいですか？ 恐れながら、売却は反対ですが」

シャニーの監視は以前から任されている。とはいえ、契約の最終決定者は団長に変わりない。彼女が首を縦に振らない限り、反対しても無駄だ。

（それでも、何が何でも通さなければ……）

シャニーと約束した。機を見て必ずイリアに戻すと。今後のイリアに、絶対必要な人間。今は守ってやらなければならぬ。

覚悟を決めて目に力を込めていると、イドウヴァは愚問と言いたげに、神経を逆なでるような笑い声を漏らし始めた。

「移転型一択でしょう。ようやく金の卵を産むようになったのですからね。せっかく手に入る金なら、一ゴールドでも多く獲得すべきでしょう」

さすが騎士歴十六年の大ベテランだ。そういうところは、本当に抜け目がない。ハイエナ呼ばわりされるイリア騎士の闇を、ぎゅっと集めたような人だ。

「あの子が企画したエンジェルヘイローの建設費くらい、自分で賄ってもらいましょう」

イドウヴァはそう言って不敵に口角を吊りあげた。よく言うものだ。あの鉄路は必要だから承認したくせに。

彼女はさらさらとサインを入れ、契約書をアルマに返しながら方針を指示した。

「状況が変われば、一年後に売買に切り替えることだって出来るのですし。わざわざ最初から、奉仕するような選択を採る必要はありませんよ。ふふ、絞れるだけ絞ってやりましょうかね」

契約書を受けとり、アルマは部屋を出た。背後から聞こえてきたのは、野望に塗れた快哉だった。

ここに居ていいんだ！

もうウンザリだ。どうしてあの人は、まだピンピンしているのだろうか。ぐったり見下ろすと、今も槍を突き上げて降りてこいと叫ぶ赤の騎士が映り、シャニーの口元がげつと歪む。

「アレンさくん、もういい加減にしてよお、疲れた！」

もう昨日から数えて何十回目だろうか。実力を見極めるだけとか言っていたくせに、彼は手合わせをぜんぜん終わらせてくれない。投槍を放りすぎて右肩が痛くなってきた。

(何度やったって同じだよ!!)

空中から投槍の嵐。またしても、アレンは悔しそうに槍を叩きつけている。

空を飛んでいるかぎり勝負にならないに決まっている。なのに、攻略法を見つけようとしても言うのか、彼は必死に再戦を叫んでくる。

「そのスタミナのなさが弱点だ！ さあ、切磋琢磨しようではないか！」

かなり攻撃を浴びせているはずだ。避ける気がなくくらいアレンは被弾しているはずなのに、肩で息をしているのはシャニーのほう。

彼は天馬が生み出す旋風に熱血が煽られるように、ますます活き活きしている。

(まさか勝つまでやる気なお……?)

げっそりしながらアレンを見下ろすシャニーの顔には、敗北感が滲んでいた。

どうやったら降ろしてもらえるのだろうか。わざとやられるにしたらって、あのパワーをまともに受けたら怪我しかねない。

「わざわざ単騎同士でやり合うことなんか無いじゃん！ あたし降りないんだからね！」

そもそも、空にいる天馬騎士相手に、単騎で挑んで勝とうなんてどうかしている。攻撃手段のない相手に、わざわざ高度を下げるワケがないに決まっているではないか。

ところが、熱血騎士はそんな考え方ではないらしい。

「何を言う！ 一番槍なら直接槍を交えるべきではないか！ 投槍など無粋！」

彼が自分に何を要求しているのかようやく分かったシャニーは、顔をくしゃくしゃにしながら残った力でありつたけ叫ぶ。

「鎧で固めた人と一緒にしないでよ！」

相手の槍を受けて立つ天馬騎士など、聞いたことがない。

天馬騎士の最大の防御は回避であり、何より攻撃自体を受けない人馬一体の飛行術。それは可能な限り軽量化した鎧一つ見たって分かるだろうに。

今さらながらに、とんでもない人に目を付けられてしまったようだ。天馬の上でウルウルと天を仰ぐ。

「ウチのリーダーは強いッス！」

ミリアがアレンに諦めろと声をかけてくれている。でも、嫌な予感しかししない。アレンにそんな声のかけ方をしたら、火に油を注いでいるようにしか思えない。

「リーダーは天馬の乗馬術が騎士団でもトップの成績だったんすから！」

「うむ、天馬隊の強さには驚いている。俺ももっと精進せねば！ と言うわけで付き合ってもらおうぞ！」

やっぱりこうなってしまった。アレンに気合を注入してしまっただけ。それどころか、ミリアの余計な一言が、彼の闘志に火をつけてしまった。

諦めたように見上げたミリアが、ウインクしながら手を合わせてきた。火を煽るだけ煽って去っていく部下に、シャニーはがっくり肩を落とす。やっぱり、ヒドい部下だ。

(もうヤダあゝ……お腹すいたよう……)

誰でもいいから助けて——懇願の眼差しを頼みのランスに向けようとしたら、いつの間にかいなくてぎよつとする。付き合っていられなくなったに違いない。万策尽きて、天馬の上でへにやりとなった。

それでも、まわりの連中は火消しするどころか、どんどん燃料を放り込んでくる。

「あんた、地上で剣使えばいいじゃん。なんだっけ、なんとか一刀流。あっちが本気モードでしょ？」

今度はルシヤナが、さあ起きろと煽ってきた。本気モード……それを聞いたアレンが黙っているはずがない。

「なに！ 剣も使えるのか、ならばそれも見てみたい！」

目を爛々と輝かせているのが上空からでもはつきり分かる。どいつもこいつも、アレンを煽って楽しんでるようにしか思えなかった。

「ルシヤナのバカー！」

ニヨニヨとする幼馴染が悪魔に見えて、思いつく精一杯の罵声を浴びせる。ロクな部下がない。ここにいるのは敵だらけだ。

後でどうとつちめてやろうか。やきもきしながら空の上で時間稼ぎをしていると、視界の端に救世主が映った気がして振りむいた。

「シヤニー！」

見間違いではなかった。声を聞いたとたんジンとして、そのまま墜落しかけてバタバタする。

体勢を整えてあらためて見下ろした先に映ったのは、走ってくる口イの姿。

（助かったあ！ なんとか生き延びたぞう……）

今しかチャンスはない。勢いを殺さないまま天馬を急降下させて飛び降りた。

「ひゃー、颯爽とした動きツス。さすがランキング一位ツス」

（あとで覚えてろよ……）

拍手し始めるミリアたちにギロつと一瞥浴びせ、救いを求めてロイのもとへと駆け込む。

「天馬騎士団から回答がきた」

「ええ?!」

ヘンな声が出て思わず自分の口に手で栓をする。

一昨日の昼間に書簡を出したばかりのはず。昨日の早朝に届いて、すぐ早馬で返してきたことになる。

（お願い！ 吉報でありますように！）

ふいに襲ってくる緊張感。口に栓をしていた手は、無意識の内に祈るように結ばれる。

「一年の傭兵契約だ。あらためて、よろしく頼むよ」
頭がついてこず、心だけが先に飛び跳ねている。

髪を後ろに引つ張られるような感覚にふらつき、まわりで悲鳴をあげるルシヤナたちの声がわっと飛び込んできて我に返った。とたんに体中へ湧きあがるのは希望一色。

「やったあ!! やった、やったよおー!」

思わずぴよんぴよん飛び跳ねたシャニーは、ロイの両手を取り、周りも忘れてはしゃぎにはしゃいだ。4月から発散できずに溜め込んできた感情を、ついに噴射するように。

「あたしたちこそ、よろしくね。ロイ!」

「ああ、頼りにしている」

居場所がないのは本当に辛いことなのだと思い知ったら、手に入れた帰る場所がとても大事に思える。

ニコニコのままロイへ仲間と敬礼していると、ようやくに実感が湧いてきた。

(これでロイを支えていけるんだ!)

夢の一つが、こんな形で叶うなんて思ってもいなかった。小躍りを止められず、またロイの手をとったときだ。視界に熱いものを感じてウツとする。

向こうでアレンが様子を見ていた。話が終わったら突っ込んでくるに違いない。もう彼には、地上でも戦えることが知れてしまっているから、どこにいたってキケンだ。

「じ、じゃあさ、サインとか色々手続きあるよね!? お城行こ、お城!」
何とかあの無尽のタフネスから逃げなければならぬ。

取ったロイの手をそのまま握り、彼の背中を押してずんずん城へと向かった。

許すまじ、しやべる石ころ!!

朝起きたら、やっぱり右肩がジンジンする。入念にストレッチをしたつもりだったが、足らなかつたか。

無理もない、あんなに投槍を放らされたのはベルン動乱以降で記憶がない。

「あ?っ?! イテテテ……」

いつも通り朝陽に向かって伸びをしたらビキツときて、堪らず身をよじり声が飛び出る。

「あう、人気者はツライなあ」

自分で言っておいて、何だかガツカリきた。

肩を擦りながら騎士団へ向かう。

ずいぶんな目に遭ったが、おかげでアレンやランス以外の騎士とも仲良くなれたのでヨシとしよう。新参者へのシゴキはアレンの名物らしい。

「おはよーごいまつすー!」

騎士団に顔を出すと、仲良くなった人たちが手を挙げている。

それにつられて、つい元気に挨拶してしまったのが間違いだつた。待っていたかのように、にこやかな赤髪の騎士が手を振ってやってくる。

(うはあ……イヤーな予感!)

「よしっ、今日こそは見せてもらおうぞ! 天馬騎士の剣、颯閃一刀流と

やらー!」

朝っぱらからこれだ。

昨日は城へ逃げこんだ後は、見回りと行ってそのまま窓から脱出したが、今日も朝から捕まってしまった。

アレンは腰にさした太刀を指さして、気合の入った顔をしている。

(トホホ……ソルバーンさんみたいなのって、どこにでもいるの??)

嫌でも、あの魔人の顔が脳裏をかすめる。

どうして自分の周りには、こうも戦闘狂が集まってくるのだろうか。

あれだけ投槍を浴びせ、こっちは朝から肩が痛いのに、アレンはま

るでなんとも無くツルつとした顔。

剣を抜く前から、敗北感がもう顔までせりあがって沈みそう。彼の言うとおりで悔しいが、自身のスタミナ不足を思い知らされた。

でも、元はと言えば仲間たちが煽るから悪いに決まっている。

「リーダー、よかったね。すぐ打ち解けられて」

今日も同じ感じでルシヤナがニコニコしてくる。火がつく前に慌てて口を塞ぐ。

「ルシヤナ！ 責任取ってよ、責任！」

火の玉を浴びせても、ルシヤナはニヤニヤを止めなかった。

「え？ なにそれ。あんた、楽しそうだなによりじゃん」

「ぜんっぜん楽しくないし！」

「なに、稽古が楽しくないだと？ それは良くないな。ちよつとメニユーを変えるか」

ルシヤナに絡めとられていたら、アレンが妙な混ざり方をしてきて変な方向に行きかける。

軌道修正しないとマズい。方向もなにも、アレンに付き合った時点でシゴキが待っている。

「シヤニー、お客さんが来ている。早く行ってあげろ」

今日は救世主の到着が早くて心の中できやんと手を結ぶ。

後ろから聞こえてきたのはランスの声だ。彼を見つけた戦闘狂が、勢いを止めている今がチャンス。

「はーい！ というわけで、アレンさん、またね！」

大げさにアレンへ手を振り、両手をぶんぶん振って走り出す。

アレンの気配が遠くなり、後ろからついてくるランスを待つ間に、ふと疑問が湧いてきた。

（あたしに？ あっ、もしかして連絡所関係かな?!）

そう言えばすっかり連絡所のことを忘れていた。

きつと皆もそうだ。ルシヤナは絡んでくるし、向こうではミリアとレンがランスに視線を注ぎ、嬉しそうにひそひそしている。

誰もきつと、頭がない。連絡所の登録はまだオステイアのまま。

「ねえねえランスさん、名前とか聞いてる？」

行けば分かると思っても、どうしても聞いてみたくなる。

連絡所を空けているからと言って、立ち寄った人がフェレまで来るとも思えない。誰にも、ここにいるとは知らせていないはず。

「天馬騎士団の者だと名乗っていたが」

それでも、ランスが口にした言葉にぎよつと背筋が伸びる。

もしかして、契約のことでイリアから誰か来たのだろうか。もしそうだとしたら、戦うことになるかもしれない。

パンパンと顔を両手で叩き、部隊長の顔を作ると正門へと向かう。

腰に手を当てて立っている人物を門の外に見つけ、思わず目をゴシゴシした。

どうやら、イリアからの使者ではなさそう。何度も目をこすり、そのたび一層はつきりする輪郭は自分の目が正しいことを伝えてきて、無意識に駆け出していた。

「あー！ やっぱリユキさん?!」

「ようっ」

手を振ってくるユキのもとまで駆け寄って、そのまま手を取る。

後ろにいる天馬を見ると荷物がいっぱいだ。任務が終わったから、イリアに帰るつもりなのだろうか。

ユキはシャニーの顔を一目見てふつと笑い、嬉しそうに話した。た。

「家が決まったから、連絡をとってな」

短い間だったが随分と世話になった……そう口にしたところ、ポンと紙を手渡された。

いつイリアに帰っていたのだろうか。渡された紙を見下ろし、すぐに確かめるようにシャニーは困惑をユキへと向ける。

「ど、どうして?!」

思わず飛びだす疑問。ユキが手渡してきた住所は、ここフェレのものであったからだ。もう国に帰れるはずなのに。

ところが、ユキも首を傾げだした。

「どうしてって。オステイアにいたんじゃ、あんたに剣を教えるのに都合悪いだろ」

口ぶりからするにイリアに帰るつもりは無さそうと聞いていたが、ユキが最後を結んだ移住の理由に、思わず口を噤んで息を呑んだ。

ユキは怪訝な目を向けてくる。

「教えると言ったのはあんただろ？」

心構えを少し教えてもらっただけのつもりだったが、彼女の目からするに、全て伝授するつもりに違いない。

また一つ、新しい信を背負っていたのだと気づく。

(そこまで……。本気で取り組まなきゃね、こりゃ)

アレンのあの感じからして、フェレで天馬を降りて戦う機会はないと思っていた。

ここまでユキが目をかけてくれるとは思ってもおらず、腰にさした太刀に添える手にぐつと力が入る。

絶対にモノにしてやる……。覚悟を決めた心がごうつと燃えてくる。

(あれ……。ふふつ、なんだかアレンさんが移ったかな?)

自分を笑っていると、ふと思いついた。ユキがここにいるということとは——ここに来るまで抱いていた疑問が再燃する。

「で、でもさ？ オステイアの連絡所は？」

真剣に心配しているのに、ユキは腹を抱えて笑い出した。

「あんなのは週一で郵便関係を確認すりゃ済むよ。気にすんな」

バンと肩を叩かれてよろける。初日に見せた、あの斬りかかって来そうな目が嘘のよう。

それにしても、週一で済んでしまうような仕事量しか無かったとは。

ユキと別れて踵を返した先にある城を見上げ、ふと考えてしまった。ここに辿り着けなかつたら、今頃どうしていただろうか。そう思うと、アレンを相手するのもどこかワクワクしてきた。

「あつ、ここにいたか、シャニー」

駆け足で中庭を抜け、騎士団へ戻ろうとする風を呼び止めたのは、彼女が一番聞きたい声だ。

急ブレーキをかけたシャニーは、きよろきよろ辺りを見渡してロイを見つけると、顔を綻ばせて手を振りながら飛び出した。

「あ！ おっはよー。どうしたの？ あたしを探してたの？」

「元氣かなくて。打ち解けてるみたいで良かったよ」

わざわざ探して、ここまで来てくれたのだろうか。ロイはとてもほっとしたように笑みを浮かべている。

「心配してくれたの？ えへへ……、ありがと。みんな良くしてくれるよ。すっごい、居心地良くてびっくりしてる」

もつと苦戦を覚悟していた。いきなり傭兵騎士が飛び込んでも、元から仕えている騎士達とは、きつと越えられない境界がある。そう思っていた。

でも、傭兵だからと区別することもなく、彼らは優しく受け入れてくれる。

なんとか力になりたい。その気持ちがどんどん膨らんでくる。もう少し、アレンには手加減してもらいたいところだが。

「そうか。気に入ったら、いつまでもいるといいよ」

ドキッとする言葉。

最初にこれをかけられたときは、とくに意識することもなかったが、今ではこの意味をはつきり分かる。

その気持ちはとても嬉しい。

(このまま仕えられるなら……)

何度もそう願ってきた。

それでも、イリアには果たすべき誓いを残してきている。今回も心の中で静かに首を横に振る。

「そうできるように、がんばって勉強しなきゃなあ」

心に決めている。イリアに軌跡を残したら、そのときは絶対にここへ帰ってきたいと。

そのために……。頭へ浮かんだ光景に、どうしても口元がウツと歪んでしまった。

ランスから本を借りてきたのは良いが、びっしり記された小さな文字を見ると、体がぞわぞわしてくる。

(あー……、思い出したらおでこが痛くなってきたやつた)

昨日だって、読んでいたらいつの間にか寝てしまい、窓の縁に額を

ぶつけて星を拝んだばかり。

苦笑いしながら、歩き出したロイの横に並んで中庭へと向かう。しばらく雑談していると、思い出したように彼は言った。

「そうだ、週末にオステイアへ行かないか。いろいろ知りたいだろう？」
「えっ、案内してくれるの?! やったあ！ 探検したいって思ってたんだよね！」

飛んで跳ねても足りない。あんな巨大な街、一人では到底攻略できないだろう。連絡所に向かったときも、もみくちやにされて道を覚えるどころではなかった。

なにより、ロイと二人つきりで遊びに行けると思うと、朝から心だけどこかへ飛んで行ってしまいそうだ。

ロイと別れても、シャニーはルンルンと顔をくしゃくしゃに綻ばせて歓喜を漏らしていた。

(わあい、ロイとデートだー。うふふ)

フェレに来てから、なんだか毎日が楽しくて仕方ない。ふんふんと鼻歌をうたつて小躍りしながら、デート先でなにをしようかとあれこれ膨らませる。

ところが、その視界に映ってはいけな何かが入り込んだ気がして、体がびくつと警戒に固まる。おそろおそろ……視線を下ろしていく。

「ふふっ、見てしまったツスよ……！」

桃色と、銀色の目……。よく見たら、茂みの中からニンマリする瞳が、こちらをじろつと見上げている。

「げっ……」

よりにもよって、ミリアとレンに見つかるとは。悪い汗が垂れてきた……。

茂みの中から姿を現した悪魔のような笑みを前に、シャニーは引きつった笑いを返すしかできなかった。



淡い青色にわた雲が浮かぶ春霞の空。

約束の時間に出発でき、心地よい天気で楽しいデートのはずがシャニーの顔は渋い。

いつもの快活さが嘘のように、馬車に揺られながら彼女はちよこんと座っていた。

ロイが12月にプレゼントしたワンピースを着る彼女のシルエットは別人のよう。

「皆も連れて来たんだね」

服と一緒に性格まで変わったように、あまりに大人しい。ロイも心配になったのか声をかけている。

彼が見上げる先を一緒に見て、シャニーは口をへの字に曲げた。

今も馬車の上を、二体の天馬が飛んでいる。これではロイをがっかりさせたに違いない。

「あはは……みんなもオステイアを知りたいって言うから」

別に連れて行きたいわけではなかった。

こんな、ロイが乗るような馬車だつて乗るつもりはなかったのに、遠慮していたらミリアたちに無理やり押し込まれてしまったのだ。

いくらロイと友達とは言え、貴族が使うようなものに遊びで乗るなんてどうにも気が引ける。

「ウチらは二人の護衛ツスから！ 石ころだと思ってくればイイツスよ！」

空から元気な声が降ってきた。

護衛が聞いてあきれれる。二人も私服で、遊びに行く気満々に決まっているクセに。

(こんな騒がしい石ころがあるもんか！)

馬車から顔を出して恨めしくしていると、ミリアはウインクを返してきた。

ルシヤナならあの二人の首根っこを捕まえてくれそうだが、それを恐れてか、どうやら彼女に告げずに出てきたらしい。嫌な予感しかない。

(くっそー！ 二人っきりのはずだったのに！)

本当はロイと天馬に乗ってオスティアまで行くつもりだったが、いろいろとぶち壊しになってしまった。こんな馬車の中で、真横にロイがいるのでは体がビリビリして堪らない。

なにより、せつかくロイが自分だけを誘ってくれたのに……思わず侘びが漏れる。

「……ごめんね？」

「気にしなくていいよ。皆、不安なんだよね。街を案内するから、疲れたら言ってくれ」

彼にそう言ってもらえるだけで、気持ちが軽くなってくるから不思議だ。

やっぱり、ロイは優しい。申し訳ない気持ちでいっぱいだけれど、今はこの優しさに甘えてみたい。

そこからは自然に笑顔が咲いて、馬車の中は途切れない会話で満たされていく。

そのときだ。外に眩しい黄金が見えてくる……あれは、小麦畑だろうか。イリアでも小麦畑はあちこちに広がっており、よく村の人たちと踏んだもの。懐かしい……。

(あたし……こんな楽しい思いしていいのかな)

はっと我に返ってしまった。

イリアは今も苦しんでいるのに、彼らを守ると誓って出てきた自分は何をしているんだ————そこまで考えたが、シャニーは心の中で静かに首を振る。たまには休息だって必要だ。



オスティアに着くと昼前だった。ふたたび足を踏み入れたオスティアは、週末だけあってさらに人でごった返している。もう、どこが道なのかすら分からない。

「お腹空いただろう？ ランチにしよう。シャニー、パスタでいいかい？」

きよろきよろしていると、ロイにつんつんされて慌てて隣にくっつく。今はぐれたら迷子確定だ。

「うん、さんせーい。ねえねえ、推しのお店とかあるの?」

ロイの肩に顔を乗せるように近づけると、彼は任せろと言わんばかりに手を取って歩き出した。

別にロイと一緒にならどこの店でもいい——そうシャニーは思っていたのだが、彼が向かったのは貴族街ではなかった。むしろ若者でゴった返す裏通りへと進んでいき、彼女のきよろきはどんどん間隔が短くなっていく。

「えっ?! ねえロイ、あたしたちにそんな気を遣ってくれなくても」

ロイが立ち止まって指さした店を見て、シャニーはとっさに前に出てストップをかけた。

彼が見つめる先にあるのは、小汚い大衆食堂。シャニーたち傭兵にとっては、手ごろな店という見方になる。

でも、とても貴族……英雄の入る店ではない。

「だって、ここおいしいよ?」

当然のように返してきた。その顔は、どうしたんだ? とでも言いたげ。味を知っているということは、すでに来ているのか。

「でも……、ロイみたいな人がこんなところに」

それを口にしたとたん、ロイが眉をひそめた。

「ランスたちと同じこと言わないでくれよ。シャニーと一緒にいるときくらい、羽を伸ばさせてくれ」

ロイは悲しそうだ。

彼は、立場を考えずに動きたいのかもしれない。きつと、いつもみんなの上に立って、窮屈な思いをしているに違いない。

「えへへ、そっか。ごめんごめん。じゃ、そこで!」

そういうことであれば、自分ならうってつけと言えるだろう。ふだんと違うロイを見られるなら、役得というモノ。

「うひゃー、ラブラブスよ、眩しいツス」

後ろから興奮するミリアの声が聞こえてくる。

せっかく、ロイが背中に手を添えてエスコートしてくれているのに、こんな実況されたら台無しだ。

「ミリア、石ころ」

「あ、はい、すいません」

一応、護身用に帯剣はしてきたけれど、今日は私服だ。ロイの温もりが、背中に直接伝わってくる。

これだけでも頭がパンクしそうなのに、それを煽るヤツがいる。でも、今はこうしたい……。――

シャニーは顔を真っ赤にしてガマンしながら歩く。本当によく喋る石ころで困る。



「ふう〜、おいしかったね!」

ロイの言ったとおり、この店のパスタも絶品でいくらでも語れそう。リキアはなにを食べてもおいしく、天国とはまさにここと言ってしまうてもいい。

余韻に浸りながら大満足に浮かんでいると、ロイがむこうを指さした。

「だろ? あそここのメニューを制覇するのが目標なんだ」

その先を追ってみる。店の壁一面に、これでもかとメニューを記した短冊が貼られていた。これだけを全てとなると、どれだけ通えばいいのだろう。

「じゃあ、あたしもチャレンジしようかな! シェアすればイケそう!」

今度は二人で来たい場所になった。

店は小汚いし、繁盛していて騒がしい。だとしても、ロイがいいと言うなら、別にそれでいい気もする。

(やっぱり、ロイといると落ち着くなあ……)

頬杖してぼうつとロイの顔を見ていたら、騒がしい石ころも気にならなくなってきた。

ベルン動乱から見てきた顔。一層にカッコよくなった気がして、じっと見上げていたら視線がぶつかかった。ますます心にニコニコが広がる。

イリアにいたときから、ずっと夢見てきた久々のデート。12月に

一度味わつたら、この顔が忘れられなくなってしまうた。

ずっとこの時が続くなら……そうぼんやり考えていた、そのときだった。

「シャニー、お替わりしなかった」

レンがミリアとひそひそし始める。たまらず背筋が伸びた。

そおっとロイの様子を見てみる……最悪だ。彼女たちに視線をやってしまったている。

「レンだって石ころしろよなー」

ミリアはそう言いながらも、視線に気づいたかロイにニコニコした。

もうダメだ。ギツとこれ以上できないくらい睨みつけてやったら、二人とも首に剣でも当てられたかのように、首を伸ばして静かになった。

これで一安心……とはならなかった。

「君たちはシャニーとは長いのかい？」

あろうことか、ロイの興味がそっちへ向いてしまう。

ひやひやが止まらず、目線がロイとミリアの間を行ったり来たり。

あの石ころが、今度はなにを口走るか分かったものではない。

「はい！ ウチ、ミリアって言いますッス！」

「ミリア、質問違う。あ、私はレンです。よろしくお願いします」

やはりと言うべきか、質問とはまるで違うアピールが始まる。なんともあざとい連中だ。

それだけならまだ良かったが、嫌な予感ほど当たるもの。

「シャニーは入団から引つ張つてきてくれた、憧れの人ッス！ シャニーをよろしくお願いしますッス！」

ミリアが噛むこともなく、ツルツルと口にした言葉で時が止まる。なす術もなく、頭に血が上って倒れそうになった。

「ちよ、ちよっとー！」

気が気ではない。思わず席を立ててミリアの口を塞ぐ。

(もーう！ とんだ石ころじゃん！)

それでも、まだ言いたいらしくモガモガしている。

ついてくるだけの大人しい石ころならともかく、後ろから飛んでくるのではまるで落ち着かない。

「うん、任せてくれよ。じゃあ、残りの場所も紹介しようかな」

ところが、ロイはあつさりそう言うのと、さっと立って店の外へ出ていった。

ようやく大人しくなったミアは、彼の後姿にぼかんとしている。

「……なんか、進まない理由が分かったような……」

彼女の独りごとに、背中がビリツときた。どう考えてもミアは故意犯だ。

とりあえず、おかしな方向に行かなくてよかった。ほつとしながら、ミアたちを連れて店を出る。

でも、これ以上されてはデートどころでなくなる。今のうちに、お仕置きしておいがほうがよさそうだ。

「あ?! あたたた?!」

「ごっち来るー!」

ミアの耳をつまんで、店の横にある路地へと連れこむ。

おろおろするミアをそのまま壁に押し付け、太刀を突きだしただけで彼女は固まったが、のど元過ぎればなヤツだ。親指を柄にかけ、刀身を見せつける。

「ミアア〜? 今度へんなコト言ったら……サビにするんだからね!」

「お、落ち着いて欲しいツス! ウチはシャニーのことを思っ……」

「大きなお世話なの!」

慌てて両手を突き出し、守りのポーズをとってくる。もちろん許してなんかやるものか。

鼻をつまんで黙らせようとしたら、路地の外できよろきよろしいたロイと視線が合ってしまった。

きよんとする彼に手を振り、その場は収めることに。念押しに柄でミアを小突き、ロイの後を追う。

(あたしだって……そうしたいんだよ)

ロイと違って約束はした。だけど、どうしても怖かった。傭兵の自

分が、それ以上先へ踏み込むことが。やっと、やっと傍まで来れたのだから。

「左手に行けば商業地域だ。化粧品や装身具をあつかう施設群があるよ」

ロイの案内に、シャニーより先にミリアが歓喜をあげて手を結んでいる。もう、石ころの気持ちなど捨てたらしい。

当のシャニーは、ロイがさす先を見ていたのはわずかな間だった。彼女はきよろきよろし始め、案内板を見つけて駆け寄る。

「ねえねえ、職人街ってどこにあるか知ってる？」

新しい服やリキアの化粧品に興味はあるが、赴任して来たばかりでお金などない。なにより、石ころを連れてそんなところに行ったら、収拾がつかなくなるのは目に見えている。

そつちは、今度ロイと二人で来たとき、ゆつくりまわればいい。今日は、ささやかでも石ころに仕返しせずには気が済まない。思惑どおり、ギクツとミリアの肩が跳ねている。

「え？ 右手に行けばあるけど」

「じゃあそつちいこー！ レッツゴー！」

不思議そうに指さすロイの手をさつと取り、手を挙げながら繁華街へ背を向けて歩く。

職人街に着き、一軒一軒見上げて場所を覚えていくことにした。

やはりオスティアはすごい。武器屋だけでも何軒もある。これなら、合う職人を見つけるまでじっくり試せるというもの。

「ロイ様、シャニーはああいう女ツス」

「ん。武器工房、警戒レベル10」

残された三人。あ然とするロイに、ミリアとレンはため息しながら声をかける。

十八部隊なら知っている。シャニーと武器工房へ入ったら、二度と陽を拝めないと思うほど待たされる。

ロイに情報だけ渡して、二人は離脱の準備を始めていた。

「武器工房だね。分かった、ありがとう」

「あつ、いや、ヤメたほうがいいスてば！」

「ひとりにはできないだろう？ 二人とも、ありがとう！」

ロイは彼女たちに手を振ると、シャニーを追いかけて走っていつてしまった。

わざわざ戰場へ向かう後姿にぽかんと口をあけ、ただ手を振る二人。

「勇者ツス……ロイ様は器が違うっスね」

「ん……英雄ってスゴイ」

これ以上ここにいても、巻き込まれ事故を喰らうだけ。

護衛はここまでにして、ミリアたちは商業区域へ駆け出していった。

ブリッツックリーク（1）

スピードをあげる銀翼が青空を突き破っていく。

眼下にもうもう立ちのぼる黒い煙に、シャニーの目はハヤブサのよう
に鋭くなつた。

あたりまえと言えばそこまでだろうけども、リキアにもやはり賊は
いるらしい。

シャニーたちフェレ天馬隊は、大がかりに村を襲う一団を見つけて
急行していた。

敵はたくさん見えるものの、イリアで毎日のように戦ってきて、多
勢などすっかり慣れっこというもの。

うしろ目で仲間にサインを出したシャニーは、槍をかかげて始まり
の号令をかける。

「第十八部隊、作戦を開始する！ ブリッツックリーク 電撃戦で一気にケリをつけるよ！」

「イエス、リーダー！」

スピード勝負をしかけないと、あの数はバラけられたら厄介になり
そうだ。ターゲットへ急降下し、引き抜けてしまいそうなくらい草原
をそよがせる。

この緊張感も久しぶり。実戦から、もうどれだけ離れているだろ
う。

（あたしたちの力を見せるときだ！ がんばるからね、ロイ！）

拾ってくれたロイにようやく恩返しできると思うと、槍にも力がこ
もる。

フェレには、ひさしく天馬隊がいなかったという。ここでしっかり
仕事をすれば、きっとロイに喜んでもらえる上に、周りにも話が広が
るはず。

リキアの賊に、空からの目があると意識させられれば大きな牽制と
なるに違いない。初陣とはいえ大事な仕事と言えるだろう。

村から巻きあげた宝だろうか。見えてきたのは、木箱を肩へと乗せ
て運んでいる荒くれたち。先手必勝——シャニーは槍を握りなおし
て突っ込んだ。

「どわっ?!」

爆炎があがった直後、白い流星が巻き込んだものを跳ね飛ばし、景色までテールブルクロスを引き抜くように引き裂いていった。

悲鳴に気づいた者たちが振り返ったときには、もう仲間が壁に突っ込んでいて、ぐったり上をむいて動かない。

なにが起きたのかさえ、その場の者たちは分かっている。引き裂かれた景色や柱となつてあたりを見渡しぼう然としている。引き裂かれた景色や柱となつて燃えあがる魔法と思しき炎が、ただ彼らの退路を塞いでいる。

「ルシヤナ! あたしの投槍を合図に、一気に飛び込むよ!」

「あいよ! 腕が鳴るね!」

一年以上タツグを組んできたルシヤナとは呼吸ばっちりだ。

風になつたように天馬を自在にあやつり、第二波にむけ地上へねらいを定めるシャニーの目は、まさに獲物を狩るハヤブサのよう。

風を螺旋に切り裂く銀翼に、落ち葉のように巻きあげられた賊たちはなす術なく吹き飛ばされていく。

「天馬?! ちくしょう! なんだってこんなクソ田舎に!」

ようやくその正体を知って空を指さした大男が、ギリギリと怒りをむき出しにしている。

その間にも、また突っ込んできた流星が、錐でえぐるように風穴をあけていった。地表にいる時間が一秒もなくは、重い斧では反応できまい。

「レン! シャニーたちばつかにカツコイイとこ持っていかれちゃダメだぞ!」

シャニーが攻撃から戻ると、ミリアが自分で改造したクロスボウの弾倉へ、つぎつぎとボルトを仕込むのが見えた。

彼女は大きく腕をかかげながら、エルファイアを唱えるレンに声をかけている。

「ラジャ。混合攻撃、発動準備」

レンが風の魔導書^{エイルカリア}へ持ちかえると、ミリアは横にならんでクロスボウの照準を大地へ向けた。

「避けられるなら避けてみる! いっけえ! バレットストーム!」

ミリアの咆哮と共にとどろいた物理と魔法の混錬攻撃に、シャニーはあつけにとられて見下ろすばかり。

この距離のクロスボウでは、ふつうなら射程外のはずなのに。それどころか、風の魔法に乗ったボルトは、弾速を跳ねあげて大地を包むように広がって降り注いだではないか。

地表で吹き荒れた魔法で跳弾して、いつもの倍以上の範囲へブリザードのように突き刺さるボルトが、あっという間に賊たちを倒していく。

「すつーい、やるー!」

思わず声がでた。やはり、ミリアたちがやっつける早さには勝てない。身のこなしに自信はあっても、あの弾丸の網にかかったら避けられそうにない。

「なに言ってるのさ。そんなのは許せないかな?」

そんなことを考えていたら、もうひとりの自分のスイッチを入れてしまったらしい。

普段は頭の中で物珍しそうにキョロキョロしているセチは、戦闘になると具現化して目を爛々とさせるのだ。

今も彼女は顔を押しつけるように、物言いたげな目でニヤつとしてきた。

「キミ、私の契約者なんだし。そろそろ、実戦導入ホンキといこうじゃないか?」

(ぜったい、セチが戦いたいだけじゃん……)

心の中でグチつたはずなのに、セチはニカつと返してきた。

「そりやそうさ。なんたつて千年ぶりなんだし、腕がなるよ!」

「勝手に人の心読まないでよ!」

彼女と契約しているからか、考えていることが筒ぬけでどうにも困る。おまけに一方的で、セチの考えはサッパリ分らない。……たぶん、剣のことしか頭にないだろうけど。

「じゃ、教えたとおり、私への誓いのコトバ、よろしく!」

「え〜っ! ……あれ、ホントにやるのお?!」

「私に力を貸して欲しいっていうなら、当然だと思っけどな?」

セチはノリノリ……正直、パスしたい。とは言え、そろそろこの力をものにしたいし、セチとうまくやっていくには仕方ないか。

観念して、しぶしぶ誓いを口にしておく。

「我は迅。我は風をまとい、黎を払う一陣の風刃なり！」

「シャニー？ いきなりジンジンなに言ってるんスか??」

「突っ込まないでツ。あたしがおかしいときは、あたしのせいじゃないんだから！」

「戦場のシャニーはおかしいのがふつーだと思ってたんスけど……」

真顔でミリアに問われてしまい、今にも頭から血が吹き出てきそうに恥ずかしい。これから毎度こんなことを言えとは、いったいどんな罰ゲームだろう。

「んー、0点だなあ。そんな棒読みじゃ、心に響かないよ」

おまけに、セチはそう言つてニヤニヤとイジワルな笑みを浮かべてくる。テイク2とかまっぴらごめんだ。聞こえないフリを決め込んでおいた。

「よしっ、上から援護をたのむよ！」

作戦は順調そのもの。第二フェーズに入るべく、いつものようにルシャナへ後衛を任せて高度を下げていく。

眼下には数人の男たち。どの顔を血に飢えているのか、にちやちやと今にも舌なめずりを始めそうに交戦的な自信に満ちている。

修羅の待ち構える地上へ、シャニーはついに飛び出した。

「斬ッ!!」

決着は風が吹き抜ける間もなく、一瞬でついた。

飛び降りながらの一閃。倍以上の体格差をはずめて構えをとる。十人以上の屈強な男たちが、斧を振りあげ色めきだつて襲ってくるのが正面に見えた。

「やっとおトリが行ったっス」

スイッチが入りかけた頭にタライでも落とすように、上からミリアの嬉しそうな声が聞こえてきた。

見上げれば、弾倉にボルトを詰めながらにこにこしている。

「おトリ言うな！」

もはやお約束のようなものだが、言い返さないとシヤクだ。そろそろいい方を考えてほしいけど、今日はおとりなんて言わせない。

「(新しい力……ユキさん、見ててね!) セチ、いっくよー!」

「よしきた、相棒! あたたかい光を導く風……とくと見せつけてやるといいさ!」

正眼に構えた太刀の鋒に、賊を見据えセチを解き放つ。

ゆらく髪、ごうつと青焰を噴きあげて魔力が瞳を翠緑に輝かせる。

「颯閃一刀流……。リキアで見つけた力、見せてやる! 行くぞ!!」

この道と決めたとはいっても、まだ初伝の剣がどれだけ通用するか、やってみなければ分からない。

けれど、バラバラになっていた初代団長の剣技と力が一つになった。湧きあがる五感すべてが、今までとは違うと伝えてくる。

「体が軽つ?! これなら十分だ!」

まるで自分ではないみたいで、本当に妖精にでもなったよう。空を滑るような感覚で突きぬけ、賊にまたたきする間も与えず次を狙う。

彼女が駆け抜けた後はまわりがそよぎ、青焰の軌跡にそって賊が倒れている。

「死ね!!」

脇構えからの一閃を浴びせていたところに感じた「流れ」。怒声とともに矢がまつすぐ迫るのを感じ、とつさに身をひるがえした。

(えっ、矢が?!)

弓使いの動きで、見切つて避けたつもりだった。その瞬間に走った違和感に一瞬、時が止まる。

まるで自分から避けるように矢が逸れていった。あんな軌道は初めてで、放つた本人の表情を見ても、なにか起きたのは間違いない。

とはいえ、今はそんな分析に時間を使うのは惜しい。

風になりきり、駆け抜けざまに弓使いを斬り捨てて次へとむかう。「ずらかるぞ! あんな魔人、相手にできるかよ?!」

頭領と思しき大男が、蒼ざめた顔をして叫んでいる。

数名を残し一目散に逃げだす光景は、嫌な記憶を呼び覚ました。守ると約束した人たちの顔は、今でも脳裏に焼きついている。ちよ

うど一年くらい前、仕留めそこねた賊の報復によって全滅した村があった。苦い思い出が走る。

(あんな悲しいのは、もう絶対イヤだ!)

目じりを釣りあげたシャニーは、噴きあがる青焰をさらに激しく燃やして跳ねるように飛びだした。

「一の風! クロノ・イクシード!」

時を飛び越えるように加速する光芒が一瞬で距離を詰め、すれ違いざまに浴びせる一閃。切り裂いた空間から飛び出した風の刃が、はるか向こうまで斬りきざむ。

残るは……あの頭領たちだけ。ふたたび風に消える。

「四の嵐! フレンジー・フランメア!!」

「ま、待て! う、うわああ?!

旋風のごとく立ちはだかり、天へと掲げると刃は風をまとい渦をまく。

風はすぐ烈風となって大男たちをどんどん引きずり込み、魔力ほとばしる回転斬りがその場の悪をすべてなぎ払った。

ブリツツクリーク（2）

「はぁー、お腹空いちやった！ お昼にしよ、お昼〜！」
フェレに戻ってきたシャニーからは、さつきまで戦場にいたとは思えない情けない声があがっていた。

お腹をさすりながら、街へと歩く顔はいつもどおり朗らか。

「さつきの剣、凄かったっスねー！」

話題は当然のように、お披露目となった剣の話へ。

シャニーにとっては、褒めてもらえて今までの苦労が吹き飛んだ気がしていた。

セチの声に悩まされ、その力の暴走に震え、ようやく掴んでもソルバーンにねじ伏せられた。

本当に久々の、勝利の味だった。ふくらむ感動にトーンが上がる。

「ミリアたちもねー！ あの連携技は避けられないよ！」

今日の一戦はいろいろと収穫があった。

皆が温めてきた個人技や連携技をたくさん試せたし、村の人たちにも感謝してもらえた。久しぶりだ、感謝の言葉をかけられた喜びは。

「フヒヒ！ ウチらもカツコイイとこ見せたくて。闇魔法ミイクルとのバージョンもあるっスよ！」

満面の笑みを浮かべるミリアは、レンの背中をぼんぼん叩いて得意げだ。

でも、レンの顔はどうにも浮かぬまま。

彼女は どうしてか、じっと見上げてくる。首をかしげて見せたら、ふいに小さな口を開く。

「シャニー、あの矢の回避、意識してた？」

「え？」

「あの軌道、通常の物理計算領域では説明できない」

そんな難しい聞き方をされても、どう答えたらいいだろう。同じことを考えていたのは確かだ。

「してなかったけど……矢が勝手に避けてったね」

突っ込んできた矢を踏みだして避けようとしたとき、はつきり映っ

た。矢がなにかに当たったように、妙な角度をつけて逸れたのだ。

正規軍の弓使いなら、なにか個人技の一種かとも思えるが相手は賊。そんな技量を持った弓使いには到底見えなかった。

「恐らく、セチの風で弾かれてる」

確証を持ってない感じに、レンがいつもよりもっと小さい声で推測を口にしたときだ。口笛とともに拍手が聞こえてきた。

「へえ？ レンちゃんだっけ？ なかなか私を分かっているね。マスター以上になってところが悲しいなあ？」

またしても、頭の中でセチがジトツと不敵な笑みを浮かべ、視線で突っついてくる。

「あ、あはは……。いじわるしないで先に教えてくれればいいのに」
「キミの練度が分からなかったしね。しょぼくて弾けなかったら死ぬワケだし？」

「あ、じゃあ一応合格なのかな？」

喜んだのが間違いだった。セチは両手を広げてわざとらしく呆れてみせると、ふつと鼻で笑ってきた。

「寝言は寝てからにしてほしいな？ あんなのを私の剣なんて言われちゃ、他の精霊に笑われちゃうね」

さすがに精霊の力と言えはいいのだろうか。あれでさえ、まだまだ初歩だとは。自分とは思えない力に恐怖すら覚えたほどのなのに。

驚いていたら、セチがますます顔を近づけてきた。

さつきとは様子が違う。その目は刃のように切れ上がり、冷たい口調で恐ろしいことを突き付けられてしまった。

「ザコ狩りで満足するなら……その体、もらっちゃおうかな？」

「ま、まだ始まったばかりだよ?! が、がが、がんばるからさ！」

「うん、いい返事だ」

それまでが嘘のようにニッコリされて逆に怖い。ここまで笑顔に恐怖心を覚えたのは、人生初と言ってもいいくらいだ。

とりあえず危機を脱し、ほっと出来たのも一瞬だった。ガンガンと世界が揺れはじめた。

「えーっ?! じゃあ魔法とか弓効かないの？ズルいッス!!」

「そ、そんなこと言われても、あたしに言ってもダメじゃん！」

ミリアがマントを引っ張って揺さぶっていた。自身の胸をトントンと叩き、中の住人に言えとアピールしてみるが、ミリアの目は割と本気で迫ってくる。

当のセチはまわりに見えないのをいいことに、ミリアに舌を出して笑っている。

(稽古で試してみないと。でも……怖いなあ)

新しい力に気づけたなら、次の実戦までに使いこなしておく必要がある。とは言え、そのために矢を受けるとかゾツとする。泣き言をもらせばセチに乗っ取られるし……。

今は考えずに、とりあえず手ごろな店に入ることにした。お腹が空いては稽古も出来ないと言うものだ。

「わあ……見たことないメニューがいっぱいあるよ！」

シャニーの目がキラキラと輝いて歓喜をあげる。

まるで宝石でも眺めているかのように爛々とさせて、ぱらぱらメニューをめくる度にはしゃぐ。

イリアには無い料理がたくさん並んでおり、メニューを見ているだけでもリキアは楽しい場所だ。

「異国の地って感じがするね。私にとっては見慣れたもんだけど」

ルシヤナは懐かしそうだ。

彼女は見習い時代、リキアに来ていたからか所作も慣れたもの。メニューもちよつと見ただけで、もう決めてしまったらしい。

「あく。お腹ぺこぺこ。たまにはガッツリ行こうつと！ ルシヤナー、オススメ何？」

「いつもガッツリじゃ足らんほど食べてる気しかしないけど。オススメかあ、任せとけ」

隣に座るルシヤナにメニューを渡して一緒にのぞき込む。こういう時は、知っている人へ聞くに限る。

ルシヤナに言われるまま、パン粉をまぶして揚げた肉の丼ものをオーダーし、水を飲んでふつと一息。

その時、ふと剣が視界に入った。

「……どうしたの？ シャニー」

「あ、ううん」

レンに声をかけられて、思わず言葉に詰まる。

そんな長く考えていたわけではないのに、今日のレンはよく見えてくれている。

この銀の瞳に見つめられたら、逃れる術はない。観念しておくことにして、もう一度剣を見下ろす。

「……いやあ、今まで散々ソルバーンさんのこと、魔人呼ばわりしてたけど……」

一旦、そこで止めた。それでも、受け止めないといけない。押し出すように続けた。「いぎ、自分が魔人って言われると……結構来るもんだなって」

化け物に映った。

燃えあがる炭のようにチカチカする髪、吹き上がる烈火、どこからともなく召還する紅焰……。赫々と揺らめく炎で、顔を陰影深く浮かび上がらせる黄金の邪眼。

これが魔人なのだと、そのときは思った。

でも、あの賊の長ははつきり自分を見て、指をさして言い放った。

——あんな魔人、相手に出来るかよ?!

自分がソルバーンと対峙して抱いた恐怖と同じ。

あらためて、人外の異能なのだと思います。

今は自分が化け物に映っているのかと思うと、心になにか鋭いものが刺さって抜けない。

「でも、本当に強かったよ。颯閃一刀流、今ならソルバーンにも勝てるんじゃない？」

ルシヤナはそう言ってくれた。

もしかしたら、そうかもしれない。セチとこの道を極めていけば、あの人と並べる日が来るのかもしれない。

「戦わないのが一番だよ。戦う理由だって無いんだしさ」

それでも、まるで乗り気でなかった。

去年戦ったときだって、戦う理由なんか無かったのに、ソルバーン

が一方向的に仕掛けてきたただけだ。

あれがあつたから、なにかが自分の中にいるのだと気づけたとはいえ、やつぱり彼とは遭遇したくない。彼は、魔人同士で力をあますこと無く戦いたいだけ。そんなのに付き合うのはごめんだ。

「魔人って言うより、『妖精』の本領発揮だと思っておけばイイじゃないツスカ」

「あつ、そういやそんなのあつたじゃん！」

たまにミリアはいいことを言う。

ヴァルプルギスが寄越した二つ名であまり気に入っていなかったが、彼女の言葉を聞いたら頭に電撃が走った。感激が口から飛び出し、指をパチンと弾いてみせる。

「妖精なら可愛いし、それで行こーつと。いやあ！ ミリアツ、天才！」

なにやらみんな唾然としているが、ミリアの肩をポンポン突いて褒めておいた。

（そうだよ。こんなくらいでクヨクヨ出来ないさ。そうだよね、ユーノお姉ちゃん）

最初は怖くて、怖くて仕方なかった。自分が自分で無くなるような感覚に支配され、体が勝手に剣を振るったあのとき。

それでも彼女ははつきり道を示した。どんな剣でも、使い手、使い方次第で神剣、聖剣となると。

左手をじつと見下ろす。今握っているのは、魔剣ではないとはつきり言える。

（これは……希望を守る剣なんだ）

そう言い聞かせていると、意識を連れ去る良い香りと共に、ミリアの歓喜が聞こえてきた。

「ひゃっほーい！ 待ってましたー！」

また始まった。

ミリアは写真機を取り出すと、ホカホカ湯気を立てる見たことも無い料理へパシャパシャとレンズを向け始める。

これが終わるまで食べさせてもらえないから、シャニーはマテを喰

らった犬のように、あごをテーブルへ乗せて眉をひそめる。

……ようやくにオツケーが出て鎖を外されると、一心不乱に飛びついた。

「……おいしい！ なにこれ！ すっごい!!」

こんな味、人生で初めてだった。まるで天国の味でもう止まらない。

しばらく無心に食べていたが、ふいに手が止まった。

(……こんな贅沢なごはん、街中でぽんと出てくるんだもんなあ)

じつと見下ろす先には、ふんだんに食材を使った熱々の料理が、今もおおいしそうにツヤツヤしている。

この前のオステイアだってそうだった。宮廷料理のような特別なものでもなくとも、大衆食堂ですらこれが普通なのだ、リキアは。

「恋の病かな?」

ぼうっと考えていたら、ふいにルシャナの声が聞こえ、連れ去られるようなカツが視界に見えた。

反射でルシャナの手を叩いて取り返す。彼女は待っていたように、ずいっと顔を近づけてきた。

「私を置いて行った日、なんかあったのかな?」

「そんなんじゃないし! ってか、ミリアたちが勝手について来ただけだよ!」

明らかに根に持っていそうな口ぶりに焦る。

結果だけ見たら、ルシャナ一人を誘わずに置いてきぼりにした形だが、最大の被害者は自分なのだ。

シャニーはミリアたちを指さして顔をくしゃくしゃにするが、彼女は視線を合わせようとせず、昼食に夢中のフリ。

一つ咳払いして、シャニーはおかしくなりかける空気を払った。

「リキアはスゴイよ。こんなに食が溢れてるんだなってさ」

再び井の中を見つめてぽつりと漏らす。

周囲が口をおっと開けて驚いているのが見えて一度は口をムスツとさせたが、静かに井を置いてうつむいた。

「イリアを思うと、なんだか罪悪感が湧いてきちゃって。あたしだけ、

こんなもの食べてて良いのかなってさ」

こんな料理、お祝い事のときしかお目にかかれないものだ。それがリキアに来たとたん、毎日のように良い思いをしている気がする。

イリアもこうなって欲しい……そう願いながら、リキアに来てなにも生み出していない。考えても仕方ないと頭では分かっているけど、背負ってきた信たちを思い浮かべるとどうしてもやりきれなくなる。

ふいに、バンと背中を叩かれて視界が飛んだ。

「あんたってヘンなところでストイックだね。いいじゃん、仕事で来てんだし」

「そうそう！ 左遷されてんだし、これも権利ツスよ！ うまいもん食ってがんばればいいんすよー」

(そうだよね。がんばればいいよね、これからさ)

ルシヤナやミリアが励ましてくれる。なんだか、考え込んでいる自分がバカらしくなってきた。

前を向かなければ何も見えないし、妖精だろうが魔人だろうが、自分自分だ。

ただひたすら、前を向いて、今できる一番小さい目標を一つずつこなし続けていくだけ。そう思い直したら、重かった腹の内がため息と一緒に全部剥がれ落ちて、胸にスツと風が通る。

「それもそっか。あー、なんか心配したらお腹空いてきちゃった。お代わりしよつと」

最初の小さな目標は……お腹をいっぱいにすることだ。

ちよつと食ベ足りずにメニューを手取る。今度は迷うことも無くすぐ決まった。

「……まさかカツ丼もう一杯行くとは。たしかに魔人だよ」

厨房から、店員がこちらを指さして怪訝そうな視線を送ってくる。催促がわりに手を振っていると、ルシヤナがひどいことを言い出した。

「だって、戦場に出るとホントお腹空くんだよお。みんなも空くでしよっ。」

「いや、そこまで入らないから」

ルシヤナから呆れ笑いを喰らい、皆が珍獣でも見るような視線を浴びせてくる。

「えー？…このくらい、ふつーだよ、ふつー」

「シャニーの『ふつー』なんか地雷ワードッス。シャニーと一緒に食べてたら、ウチら天馬に乗れなくなるッス！」

天馬騎士はその職特性上、体重制限が厳しい。

ミリアは背が高く、上限に近いらしい。そんなこと、一度も気にしたことはなかった。お腹が減ったらたくさん食べて、また動けるだけ動きまわればいいだけのはずだ。

「アレンさんに付き合えばきつと痩せるよ！ いったただつきまーす！」

出てきたホカホカを掻きこむ姿は、まるで一杯目など無かったかのよう。

見ている方が気持ち悪くなったらしく、誰もが視線を逸らしている。

「あゝッ！ 一時間前のあたしはこんな幸せがあるの知らなかったんだよなあ！ もっと勉強しなくちゃ！」

「ベンキョーが聞いて呆れるよ」

目をつぶって茶をすすりながらルシヤナがボヤいている。まるでおばあさんの小言だが、シャニーはお構いなしにがつがつしている。

「……戦闘がトリガー……ふうむ……」

レンだけが、パクつくリーダーの満面の笑みを見つめて一人考えに耽っていた。

カクテルを傾けて

「ハッ、言ったな！ なら勝負だ！ このアレンにそのようなオモチャは通用せん！」

半分冗談だったのに。

痩せると教えたらミリアが目の色を変え、今日は朝からアレンに向かっていた。おまけに挑発までするものだから、アレンの目に闘志が燃えてしまっているではないか。

あれを相手にしていたら、一日終わらないに違いない。

それにしても、ミリアの武器はクロスボウなのに、どうやって手合わせするのだろうか。

(ま、いつか！ 逃げちやおくつと)

昼までかかるアレンの朝稽古を回避したシャニーは、中庭で日差しを浴びて大きく伸びはじめた。思わず零れる声は高く透きとおる。

そのとき、細めた目が会いたい顔を見つけて、ぱつと口元が軽くなった。

「あつ、ロイ様！ おーい！」

今日は稽古を回避できるし、朝からロイに会えるとは、なんとラツキーな日なのだろう。

手を振って駆けていくと、ロイも笑みを浮かべているのが見えてくる。

「やあシャニー、おはよう」

横にピタツとついて歩き出そうとしたら、彼は鎧をコンと指で突いた。

「普通に呼んでくれよ」

予想どおりの反応というところ。

特別なのだと、ロイから言ってもらえる気がして心が跳ねる。とはいうものの、諸手を挙げて分かったと返事できなくて辛かった。

(そう言ってくれるのは嬉しいんだけどさ……)

いつも同じお願いをされ、同じ気持ちを抱いてきた。

今でこそ、あんな視線で刺されることは無くなったが、初日にアレ

ンやランスが見せた眼光こそが、普通の反応に他ならない。

どうしたら、ロイを喜ばせてあげられるのだろうか。

「だって……やっぱさ、あたしだけ特別ってわけにはいかないよ。みんなも見てるんだしさ」

もっと上手く言えたらいいのに。どうしても、心の中にある素直な言葉しか口にはできなかった。

ロイは雇い主で、自分たちは傭兵だ。おまけに今は仕事であり、呼び捨てにするような状況ではない。

傭兵から呼び捨てにされる姿を知らない人に見られたら、彼が軽く見られてしまう。そんなのは嫌だった。

(どうしょ。怒っちゃったかな……)

ロイがじつと見下ろしてくるまま、なにも言わなくなってしまった。

悲しい……ロイは望んでいるし、自分だって言われるまま飛んでいきたい。

けど、想っているからこそ、言えないこともあるし、言うべきことがある。

このままではいけない。ロイに手を合わせた。

「遊びに行くときとかさ、誰もいないときだけじゃダメ？」

ロイは大事だ。大事だからこそ、領けない。

おまけに、あまり妙なまねを外部の者に見られて、イリア傭兵の評判を落としたら自分だけで済まないのだ。

傭兵は信用が命。傭兵業を失ったら、イリアは食べて行けなくなる。

(ロイなら分かってくれる……。お願い)

懇願を目に込めて見つめたら、ロイは考える間もなく領いた。

「分かった。シャニーが良いならそうしよう」

とりあえず、ホツとした。ロイは分かってくれたようで、口調もいつも通り優しくなった。

「へへっ、ありがと。ホントはあたしだって、いつも普通にしたいんだよ」

今でも変な気持ちのまま。

ロイは貴族だし、英雄だし。雲の上の存在だから、様をつけるのは当然と言えるだろう。なのに、それをつけて呼ぶと、胸に魚の骨でも刺さったように、なにか心の中でギクシヤクする。

(はあ……いつでも自然に呼べたらいいのになあ)

朝陽を見上げながらぼうつとロイの隣を歩いていたら、ふいに声が呼んだ。

「昨日、村を守ってくれたそうだね。ありがとう。天馬騎士は守備範囲が広いね」

どうやらロイは、昨日あげた報告書をもう読んでくれたらしい。

賊を討伐したのはフェレでも隣境に近い、騎馬隊では毎日行くのが難しい山沿いの場所だった。

アピールした天馬騎士の強みを、さっそく気に入ってもらえたようだ。まっすぐに褒められて心はスキップしたくなるくらい軽い。

「あのくらいお安い御用だよ。イリアじゃ毎日だったしね」
「毎日?？」

軽く返したつもりだったのに、ロイは驚いた顔をして聞き返してきた。

「うん。イリアは貧しいし、復興が行き届いてないから……賊も多くてさ」

数はイリアに比べて大規模だったが、戦力としてはやはり賊。

それにしても過敏な反応に見えたが、聞けば事件そのもの少ないらしい。リキアは平和に映った。

「そうか……。やはり、毎日危険な生活を送っていたんだね。無事だなによりだよ」

今日のロイはなんだか大げさだ。騎士なら普通だと思っただけなのに、彼は毎日出撃するだけで驚いている。

「あれ、もしかして、心配してくれてた？」

「まあ、そうかな」

この程度で心配してくれるのに、魔人ソルバーンや聖天騎士団の筆頭騎士ヴァルブルギスにボコられた話をしたらどんな顔をするだろう。……考え

たくない。

「えへへ……ありがとう。でも大丈夫！ あたしだって、いちおう上級天馬騎士だし」

安心させようと笑って元気を伝えたら、ロイにも笑みが戻った。

「頼りにしてるよ。でも、無理はダメだからね」

「えへへへ、そう言ってもらえると、がんばれちゃうよー！」

憧れの人に頼ってもらえるなら、どんな大変な任務でもこなせそうな気がしてくる。

もつともつと、仕事欲しかった。

正直、見回りだけでは持てあましている。交渉してみようと思っていたら、持っていた小袋をロイがさつと差しだした。

「これ、少しだけど差し入れ。皆で食べてくれ」

町で買ってきたのだろうか。袋にはクッキーの絵が見える。

スイーツに目がない自負はあるが、不覚にもリキアはまだ未開拓。昨日の昼食が頭に浮かんだ。きつと、これもおいしいに違いない。

「ありがとう！ おやつにいただくね」

あれこれ良くしてくれる彼の優しさに感謝しながら、手を振って別れた。

結構堅めのクッキーらしく、中から乾いた音がする。

皆に分ける前に、一枚つまみ食いしてしまおうと袋に手を突っ込む。なにか、明らかにクッキーではない感触が手先を突いた。

「あれ……なにか入ってる」

一旦指を袋から出し、両手で広げて中を覗き込んでみた。

きつね色のクッキーがたくさん見えるが、その頂には折り畳まれた紙が入っていた。取り出して中を開く。

——今日の18時。正門で待ってるよ

(デートのお誘いだ！)

心にはあつと花が咲く。喜びが体中に広がって、手先足先、全てに満ちていく。

「きゃっほーいー！」

思わず飛び跳ねて歓喜を上げてしまった。

(……!! 周りに誰もいないよね?)
すぐにハツとして辺りを見渡す。

……こんな手を使うとは、ロイもこの前の一件で懲りたということか。

今日は幸いにも、やつかいな石ころ連中もいない。このときばかりはアレンに感謝した。



残照がうつすらと藍色の空に残る時間。

モジモジと落ち着かない様子で、シャニーは城のドレスルームにいた。ロイの手紙に、城内の地図と共にドレスを選んでくるよう書かれていたからだ。

傭兵なんかがいきなり行って大丈夫なのだろうか。驚くのではないかとゾクゾクしながら向かったが、スタイリストは何種類か候補を選んでくれていた。きつと、ロイが言っておいてくれたに違いない。

(こんなドレスを着てどこ行くんだろ……)

人生で初めて着るドレスは歩きにくい。

昼のうちに抜け道を探しておいて正解だった。仲間に見つからないように、するすると正門を目指す。

「お待たせ! 今日はいまぐ抜けたよ」

狭い歩幅でとってと走って、ロイのもとへと辿り着く。

「うん、似合ってる。かわいいよ」

「ホント?! えへへ、ありがと! 初めてだよ、こんなドレス着るの!」

褒められて隠せず飛びあがった。

かわいいなんて言葉をかけられたのは久しぶりだろうか。それも、ロイに言ってもらえたのは初めてだ。

ルンルン気分の夢心地に浸っていたら、ロイがとんでもないことを口にした。

「じゃあオステイアに行こう。天馬なら30分くらいだよね」

「えええ?! こんな真つ暗で天馬に乗ろうなんてスゴいね……」

フレでこんな格好をしていたら皆の目についてしまうから、きつと彼は気を遣ってくれたに違いない。

でも、仕事だつて夜戦でもない限り、夜に天馬を飛ばすなどあまりない。視界が命の天馬騎士にとって、見渡せない闇夜は天敵なのだ。おまけに今は、二人ともカッチリした服装なのに。

(ロイって意外にやんちゃなのかも……)

彼のふだん見られない一面を知って、焦りながらもふつと笑う。どこまでも気さくで付き合やすい人だ。

「そうか……。シャニーなら、二つ返事かと思っただけ」

とても意外そうに返ってきた。

いったい、いつもどんな風に思われているのか気になる。

飛んで行きたいのはやまやまだけど、ロイには方が一でさえ起きては困るではないか。

「上級天馬騎士の腕を持つても難しいかい？」

でも、彼は挑発みたいなのを言うてくるから、考えるより先に口が動いていた。

「言つたなー！ 騎士団一の馬術に驚かないでよね！」

シャニーは目をぶんぶんさせて、見ていろと言わんばかりにぱつとドレススカートが宙に舞う。

ロイは嬉しそうに彼女の後ろに乗ると、もう真っ暗になって月光が照らす空へ飛びあがった。

(……何度乗せても背中がゾクゾクするー)

12月以来の感覚だ。真後ろにロイの気配を感じて、体がぞわぞわしてくる。

背中も、髪の毛も、そして腕も。今日は軍服ではないし鎧も無いから、ジンジンするほどだ。

しばらく沈黙の空が二人を包む。ロイもなにも喋ってこないけれど、どんな顔をしているのか見えないのが歯がゆい。

せつかく誰にも邪魔されない、二人つきりでお喋りできる時間なのに。ガマンできずに振り返った。

「こんな時間に遊びに行くの初めてだね。お城の人たちは大丈夫なの

？」

「当主がいなくなれば、今ごろ城中で大慌てしているはず。とくに、狼狽するマリナスの顔が浮かぶ。」

「日中は忙しいからこの時間になるのは仕方ないが、帰ったらどんなことになっているか心配だ。」

「ああ。ランスに守備は任せてある」

「あ……じゃあ、ランスさんにはバレてるんだ」

「馬車を使わないからお忍びだと思ったけれど、ロイの口調は心配いらないと伝えてきた。」

「それは安心……なんて、思えるはずもない。それどころか、声がこわばった。」

（ヤバくない?? 明日なにか言われそ……）

「よりもよってランスとは。あの人が怒ったら怖そうだった。」

「傭兵が、守るべき主をこんな危険な空の旅に、武装もなく連れ出して。いくらロイがそうしたいと言ったって、やっぱり止めるべきだったか。」

「とはいえ、ランスが知っていてロイがここにいるなら、彼はオツケーを出したわけだし。」

「それに、今のこの気持ちを考えたら、叱られるくらいへっちやらにも思えてきた。」

「バレるといふか、城の皆には伝えているよ。そうしないと、みんな心配するからね」

「さらっとロイはそう返してきた。しばらく風を切る音だけが響く。」

「彼は当たり前を言っている……どんどん頭に血が集まってきて、あつと言う間に破裂した。」

「えええっ?!」

「すつとんきような声上がる。」

「ランスどころではなかった。アレンも、仲間も、あのマリナスも……?」

「なんで驚くのか、ロイには分からないらしく首を傾げている。」

「シャニーはいつも脱走してるの?」

「うん。あ？、いやあ……そう言う意味じゃ……アハハ……」

一旦ロイから視線を外して、正面を向いたら動けなくなった。今にもあちこちから血が噴き出してきそうに、心臓がバクバクする。

（みんな知ってるの?! 二人で出てきてること……!）

こんな時間から二人で外出する意味など、一つしかない。

それを城中の人間が知っていると言うのだ。ロイは気軽に言ってくれるが、なにが起こるか分かっていいるのだろうか。

（あたしみたいな傭兵が相手って、みんな……どう思ってたんだろう……）

クレインとテイトみたいな話が、羨ましくて仕方ない。ただでさえ、まだ一週間しか働いていないのに。

急に怖くなってきて、このままでは心臓が持ちそうにない。話を交えることにした。

「夜のオステイアかあ。ちよつと一人じゃ怖いし、ロイと一緒にはうれしいな」

昼でさえ、あんなに活気溢れる大都市なのだ。その夜の顔は、きつともっと楽しいに違いない。そうは思いつつも、あそこまで大きな街の夜は、とても一人で行く気にはなれない。四人組でさえも、ちよつと不安なのに。

「案内するからついて来るといいよ」

そう言ってくれるロイが、本当に頼もしく思えた。大都会の夜を、早く二人で楽しみたい。

風切り音を更に高くして、銀翼で闇夜を切り裂いていった。



目の前に広がるのは、赤や緑のガラスに彩られた色とりどりの灯。乳白色のガス灯が中央街を照らし、左右を埋めつくす店からは、たくさん色や音が聞こえてくる。

「うわあ……キレイだなあ」

思わず手をむすんで、ぼうつと見上げてしまう。

街の奥には、明かりに照らされたオステイア城が、闇の中でも白く浮かびがって街を見守っていた。

(こんな世界があるんだなあ……)

イリアの夜には、オオカミの遠吠えか風の吹く音しか知らない。灯にきらめく街。楽しげな声、店から流れてくる楽器の調べ……。この時間でもたくさんの人が行きかい、大都会に生きているのだと実感できる。

「さあ、行こう。はぐれないようにね」

どのくらいぼんやりしていたのだろう。ロイに声をかけられ、あわてて彼のもとへ小走り。

この僅かな間にも、二人の間にはたくさんの人が流れをつくって、もう姿を飲みこみ始めている。

「あつ……」

ふいに手を取って引つ張られた。突然の温かくて優しい感触に、なにも聞こえなくなる。

(ズルいなあ。こんなの逃げられないじゃん)

この街を歩けるだけで幸せなのに、憧れの人とドレスに身を包んで歩けるなんて。おまけに、しっかりと手を握られて。

(でも、今なら手繋いでてもへーきだよな)

しっかりと握りかえす。ここなら、誰にも見つからない。

自分が傭兵だと忘れさせてくれる場所。いつも押さえ込んできたものをさらけ出し、ロイの隣にならんで少しだけ身をあずけてゆっくり歩く。



「こ、こんな所でごはん食べるの?!」

しばらくして、シャニーは仰天して目を泳がせていた。

貴族街に来たのは気づいていたけれど、目の前に店がそびえると腰が抜けそう。

ピアノの生演奏が聞こえてきて、田舎者でさえ「超」がつくほど高級だと直感が叫んで全身がブルツときた。

この前は大衆食堂で驚かされ、今度はこんな高級店とききたじろぐ姿を楽しむような声が誘ってくる。

「気に入らなかつたかい？」

「まさか！　こんなの初めてだよ！」

一生縁がないと思っていた場所を前に、好奇心がピョンピョン跳ねている。

こんなドレスまで用意してきた以上、覚悟はしていた。それでも、いざ店に入ると、どう振舞っているのかまるで分からない。

周りの女性を見てみる……立ち姿からして、もう違う気がする。

(うー……落ち着かなーい……どしよ)

どうにも、場違いに思えて仕方ない。

向こうを見れば、一面ガラス張りの広いホールに円卓がたくさん並んでいて、誰もが清楚に食事している。

周りは貴族だらけだ。

部隊長として作法の教育は受けていても、国内部隊にいたし実践なんかゼロ。おどおどしていたら、そつと背中に手をまわされた。

(はわあく。なんだか……夢みたい)

まるで、どこかの令嬢にでもなった気分。今は彼の腕に身を任せておく。

「わあく。綺麗な夜景！　……素敵」

個室に案内されてホツとしていると、ウェイターがカーテンを開けてくれた。

ぼんやりとした光の玉が無数につながり、万華鏡のように煌めく。

夢のように広がる夜景に、思わず窓辺に寄り感激で手をむすぶ。まさに天国から街を見下ろすよう。

「ふふ、お気に召したようで何よりだよ。さ、座って、座って」

言われるまま席に着き、食前のカクテルを傾ける。

「ふふっ……おいしい」

「ああ。日頃の疲れが溶けていくようだよ」

もちろん天馬で帰るからノンアルコール。それでも、赤と青を合わせた、まるで二人を表すかのようなカクテルは酸味があり、それでい

て夢へと誘うようにじんわり甘い。

喉を潤し、普段どおりの自然な会話を楽しんだのも束の間だった。出てきた見た目も美しいプレートを前に、感動以上の気持ちが押ししかかって両手が固まった。

(うう……やっぱり分かんないよう……)

国内部隊だから接待なんかしないし——忙しきにかまけて、作法の勉強をまるで放り出してきたことを、こんな大事な場面で後悔するハメになるとは。

ロイの所作をちらちら真似て食べてみるものの、あまりにぎこちなかったか、彼はフォローしてくれた。

「誰もいないんだし、好きに食べればいいよ。そのために個室にしたんだ」

そう言つてロイがとつた行動に、目が飛び出しかけた。

「わあ?! そ、そんなことしなくてへーきだよ!」

それまでフォークで美しく食べていたのに、手で掴まんで食べて見せてきたのだ。

びっくりして止めさせようとしたら、やってみろとジエスチャーされてしまった。

言われるまま口に運ぶ……やっぱり、昇天しそうなほど美味しくて顔がとろける。

「ごめんねロイ。なんだか、気を遣わせちゃって」

無作法な女だとバレてしまった。いまさら後悔しても遅い。ロイにまで手を汚させてしまうとは。

「気にしないでいいよ。いきなり連れてきたんだし」

今もロイは、エビから手で身を外して口に放り込んでいる。こつちの方が気楽でいいと言わんばかりの顔をするから、申し訳なくて視線が下をむく。

(ちゃんと勉強しよ……ランスさんに教えてもらおうかな)

これではロイとデートできない……そう思うと気合が入る気がした。

気を取りなおして、今日のところは甘えようと顔をあげたら、ロイ

は手を拭いて身を乗り出し見つめてきた。

「それに、今日は特別な日なんだしね」

そんな思わせぶりなことを言われたら、ウズウズするに決まっている。

顔にワクワクが躍り、彼女も身を乗り出した。

「なにかあったっけ？」

五月の下旬……特になにも思い当たることはない。ロイの誕生日……いや、違う。

口をキュツとして上を向きながら考えてみるが、なにも浮かんでこない。今度は夜景に視線を向けてみる……。窓にロイの顔が映っていて、窓越しでも感じるまっすぐな視線に胸が火照ってくる。

そのときふと、彼がなにか差し出しているのが見えた。

「はい、誕生日おめでとう」

振り向いた先には、ロイの笑みがあつた。

凜々しい笑顔でかけてくれた言葉と共に伸ばされた手。その先にある小さな箱でようやく気付いた。祝われているのは、自分。

心と一緒にふるると目が震え、口元は喜びいっぱい広がっている。

「覚えててくれたの?!」

それが一番嬉しかった。誕生日なんて彼に話したのは……それこそベルン動乱時に、雑談の中でぼろっと出したくらい。

二年間、忘れずにいてくれたことが何より幸せを感じさせてくれた。

「当たり前じゃないか。一番大事な日だろ？　ちよつと遅れたけど、受け取ってくれ」

「腕時計だ！　わあい、ちよつと探してたんだよね！　ああ……すごいキレイでオシャレ……」

さつそく開けた箱の中から出てきた腕時計に、シャニーは鈴のような声で歓喜を上げる。

こんなものをもらって良いのか……一瞬頭をよぎったが、ロイの視線に負けた。さつそく身につけてロイに見せてみる。なんだか、彼も

顔がじんわり綻んでいる。

「似合う？」

「ああすごい似合うよ。ボロボロだったから、欲しいかなと思ってね」
テーブルに置いた、さつきまでつけていた腕時計を見下ろす。

見習い時代から付き合ってきた相棒。ベルトこそ何度も換えているが、あちこち傷だらけでガラス面にも線が入っている。これは……
矢に狙われて落馬したときに出来た傷だ。

「二年、一緒の時を刻んで行くこうってことでさ」

（二年……か）

本当はずうつとそうしたい。でも、イリアに残してきた者達がいる。

一年という言葉がずしつとくる。この言葉を跳ね除けて、何のためらいも無く飛び込めたら、どれだけ幸せだろう。

だけど、夢から醒めたら——このドレスを解き、軍服に身を包んで傭兵へ戻った瞬間、それは許されなくなる。ロイの気持ちだつて、こんなにも特別扱いされなくても薄々気づいているつもりだ。

……だからこそ、軍服のままその先へ踏み出すことが、ロイの気持ちに気づけば気づくほど……怖くなってくる。

「本当は、この前のとときに一緒に探そうと思ってたんだけど」

そんな答えの出ない悩みを巡らせていると、ロイの声が意識を引き戻す。

まさか職人街へ行くとは思わなかった。そう言われ、前のデートを思い出して思わず心の中で顔をしかめた。

（あいつら……）

それ以上に、頭へ浮かんできたイタズラ好きな顔にジリジリする。しゃべる石ころがいなければ、お誘いのまま向かったに違いない。

次は何があっても追い返してやると目に火が入りかけるが、今は手首で黄金に輝く腕時計を見つめ、そしてロイの手を取った。

「ありがとう！ 毎日使わせてもらおうよ！」

「ああ、是非そうしてくれると嬉しいよ」

こんなに良くしてもらえたら、毎日バリバリ頑張ってもっと喜ばせ

てあげたい。

座りなおして、もう一度時計へ目を落とす——うつとりするほど綺麗。なにより、ロイがプレゼントしてくれたのが嬉しくて、心が浮かんで躍っている。

そんな幸せに、ふと騎士としての声が冷や水を浴びせてきた。

（雇ってもらってるあたしが、こんなにしてもらってて良いのかな……）

ロイには口にするなど言われているけれど、どうしても心に刺さったまま抜けない不安。

相手が自分で、本当に良いのだろうか？

傭兵なんかと付き合っていると知ったら、周りはどう思うだろう。ただでさえ、イリア傭兵はハイエナ呼ばわりされていて、好く思われていないとも聞く。

生きていくため仕方ない——傭兵としては、そう割り切ってきた。でも……。

「なんか、してもらってばかりだなあ。なにかお返ししたいんだけどな」

そんな自分に一体何が出来よう。

12月の時はセーターを編んでみたが、お返しにピアスをもらってしまった。今も耳に揺れる青いピアスと比べたら、まるで釣り合いは取れていない。

とは言うものの、思いつかない。返せるもの……気持ちくらいしか。

「いいって。むしろ、僕がお返しをしたんだと思ってくれれば」

ロイの意外な一言で、シャニーは目をしばしばさせるときよんとし始めた。

「へ？ あたし、なにかロイにしてあげたっけ？」

リキアに来てまだ一週間。出来たことと言えば賊討伐くらいだし、それは仕事だ。こんな、ピカピカの時計をもらうような話ではない。

思わず指をあごに添えて考え込んでしまう。

「いつも明るく笑って元気をくれるじゃないか。支えてもらってるお

返しだ」

傭兵の自分では飛んでも届かない、あまりにも高いところにいる人。そう思っていた彼からかけられた言葉はとても近くて、すっと心に溶け込むように包み込んでくれた。

一番にしてあげたいと願ってきたことで、憧れの彼に労ってもらえたと思うと、あつという間に視界が滲んできてしまう。

「えへへ……ロイは優しいなあ……」

あんな仕打ちをする人がいる。けれど、これ程までに優しくしてくれる人もいる。こんなに温かくされたら、帰れなくなってしまうだろう。

なぜだろう、2年前はなんとも思わなかったのに。どうして、こんなに優しくされているのに飛び込めないのだろう。

もどかしくて、切なくて、けれど恐ろしくて……涙が止まらない。

「大げさだよ。泣かなくてもいいだろう？」

「だって……分かんないよ、出ちやうんだもん……」

嗚咽を漏らしていると、ロイが席を立ったのが見えた。

めそめそして目を擦っていたら、ふいに手を取られ、びっくりしている内に目をそっとハンカチで拭われていた。

やっぱり、ロイは優しい。今だけは、思いきり甘えよう……自分で

涙を拭うと息を整えて、騎士も弱虫も追い出した。

「聞いてよ！ 異動辞令を渡されたの、あたしの誕生日だったんだよ。最悪のプレゼントだったよ！」

あれが絶望なのだ、人を信じられなくなりかけた瞬間だった。

その一か月遅れでもらえた希望が、今も右手首で輝いている。視線を移せば、今も横で屈みこんで見上げてくるロイの顔があった。

「でも……こんな嬉しい思いができたし、最高の誕生日だよ。ありがとう」

飛び跳ねたいくらい、プレゼントはもちろん嬉しい。憧れの人がこんな近くで祝ってくれること、それが何よりも尊い。

心が解けて、目を瞑って全てを預けたくなるこの気持ち。今この瞬間を、宝箱にしまっておきたいくらいだった。

イドウヴァは今でも許せない。けれど、出向辞令があつたから、こうしてロイと最高の一日を過ごせることになった。

無駄なことは、なにも無い。そう思うことにして、彼にしてあげられる一番で感謝を捧げる。

「君にそんな辛い思いはさせないさ。困ったら言ってくれ。隠しごとは無しだよ」

頼もしい言葉とともに伝う温もり。握った手をそのままロイに引かれ、窓辺に身を移す。

広がる夜景を前に二人で並び、彼の横顔をじつと見上げていた。

（あたしに出来ることなら、なんだってするよ。ありがとね、ロイ）
繋いだ手を祈るように握り返す。

許される限り支え、共に時を刻みたい。そう心から願い、夢心地の中で繰り返すのだった。

朝活でヒミツ特訓!

清々しい朝日が窓から差し込む騎士団の食堂は、今日も元気な声が集まっている。

まだまだ空席が目立ちながらも、あちこちからカチャカチャとした食器の音や笑い声が聞こえてくる。

そんな明るい窓辺を避けるように、壁際の隅っこでひとりシャニーは格闘していた。

ずいっと本に顔を埋めるように覗きこんだと思ったら、今度はぎゅっと絞った口でテーブルを見おろす。

本から半分だけ顔を出して落とした視線。しばらくじっとテーブルの上を見て、また本へと吸い込まれていった。

ぼちぼち騎士達が通りかかるテンポが早くなってきた。そろそろ仕事の時間が近いのか。

通りかかる騎士たちに、いつも通り元気な笑顔で挨拶しては呼ばれるように本へ吸い込まれ、シャニーは眉間にしわを寄せている。

「シャニー? あんた、なにやってんの? 手品の練習?」

ルシャナの声が聞こえてきたが、シャニーは振り向くこともなく本にかじりついたまま。ルシャナたちは互いに顔を見合わせる。

「うわ、シャニーが勉強してるツス! 明日槍が振るツス!」

テーブルには、フォークやらナイフにスプーンが何本も転がる。

シャニーの視線は本と彼らを行ったり来たりして、ミリアが茶化してもまるで反応しない。

そのうち本を置いたシャニーは、まるでパズルでもするように机上へ両手を伸ばす。パントマイムでもしているようだ。

「ハッ。食い意地がたたって、なんか変なものでも食べたんでしょ」

「シャニー、薬、いる?」

異様な光景に映ったらしく、仲間たちは様子をうかがっている。ルシャナは呆れたように笑っているが、レンは真剣に心配して、食堂の人に声をかけて救急箱を引っ提げてきた。

「わー、見たことない薬がいっぱいツスよ! これだけあれば、シャ

ニーにもどれか効くんじやないツスカ」

箱を開けたとたん、ミリアの好奇心に火がつく。

全部引つ張り出す勢いで両手に取って、ミリアはあれもこれもと
シャニーへ見せだした。

それでも、彼女は どうにも振り向かず、怪しい手の動きが止まらな
い。

「なんとかにつける薬は無いつて言うけどね」

シャニーが薬を飲んでいるところなど見たことがない。そう言っ
てルシヤナが笑い、ぴくつとシャニーの眉が吊り上がる。

直後だった。それまできれいに動いていた彼女の両手同士がぶつ
かった。

「やっぱ病気？ 顔、真つ赤」

レンは真顔。

今度は手先同士がぶつかるだけでは済まず、まるで糸が絡まるよう
に両手が衝突した。ガチャンとナイフが飛んでいく。

それを三人でのぞき込んだ瞬間、ふるふるするとシャニーが震えだし
た。

「もうっ！ 人が真剣にやってんのにー！」

あっち行けと言わんばかりに手で払おうとするが、ようやく振り向
いた彼女を仲間が離すわけがない。

距離を開けるどころか隣に座り込んで、シャニーが手に取ろうとし
ていた本を、チョイつとルシヤナが取り上げた。顔を真つ赤にしなが
ら取り返そうとするシャニーを、ミリアとレンで抑え込む。

「なにになに？ ……テーブルマナー講座?！」

「あれ、この前は難しそうな本だったのに」

人が変わったように、シャニーが本を読んでいる——最近、もっぱ
らのいじりネタではあったが、ルシヤナが読み上げたタイトルにミリ
アは首を傾げている。

ランスから借りたりキアの地理やら戦術書を、シャニーが読んでい
るのを彼らは目撃していた。ところがどっこい、今日は打って変わっ
てこんな本。

横目に物言いたげな眼差しが三人から飛んできた。

「シャニーはゴクつと息を呑み、口をへの字に曲げると視線を逸らしながらボソツと零す。

「ほら……リキアだと、お仕事で貴族と食事することも増えるから」
表紙には紋章が入っている。どうやら、部隊長クラスに配布される騎士団の教育書らしい。

「仕事ねえ……？」

仕事聞いて呆れる。じろつと見てくるルシャナの横顔にははつきりとそう書いてあって、シャニーの顔がますます渋くなった。また妙な方向に行きそうだ。

「あんたの場合は、花嫁修業も仕事か」

ようやくルシャナが正面を向いたと思ったらニヤニヤが浮かんでいて、核心を突くような一言を放ちながら鼻で笑ってきた。

「えーと……うん、ごめん」

もうそれしか言い返す言葉がなく、シャニーは白旗を上げた。

言い訳をすればするほど、ドツボにはまっていくのは今までの経験から間違いない。おまけに、今日もルシャナは止める側にいない。この手の話になると、むしろ彼女が一番にガンガン来るので困ってしまう。

（なんでバレたんだろ？）

眉を下げて目でまわりに聞いてみても、苦笑いしか返ってこない。これ以上おもちゃにされるのも堪らなくなつて、観念して白状することにした。

「ロイ様とお店に入って、かなり困ったからさ。知つとかなきやなつて」

あんなに美しい夜景においしい料理、そして前を向けば憧れの人の微笑み。

最高のロケーションのはずだったのに、無作法が台無しにしまった。今度は、楽しみながらあの空間を味わいたいではないか。

——国内部隊なんだし要らないじゃーん？

姉の説教を笑い飛ばした、あのとときの自分の頭をポカポカしてやり

たい。

思わず両手を握って小さくワンツーパンチしていると、頭を撃ち抜くような声が飛んできた。

「あー！ 昨日の夜、いなかったのって！」

ミリアが目を真ん丸にして指さし、それに頷いてレンもぷくつと頬を膨らせた。

「ん。夕飯に誘おうと思ったのに、どこにもいなくて探し回ったのに」「いやあ、ランスさんに聞いたら食事に出かけたって言ってたツスけど、まさかグルだったとは」

ミリアとレンから追及の目が突き刺さる。

その後ろから、ルシヤナがニヤニヤし始めたのに気づいて髪が逆立ちそうにビリビリきた。

(だーっ、だから言いたくなかったのに！)

絶対にこれは嫌な流れだ。その場から逃げようとしたけれど、ルシヤナに先を越された。

両肩に手を置かれたと思ったら、体重をかけられて身動きが取れない。ガチガチしていると、背後からにゅつと彼女の顔が出てきてニタニタし始める。

「どこ行つてたのさ？ あんな時間から。そういや、天馬がいなかったね」

三人がかりの尋問。ルシヤナが横から頬同士をピタピタやってくる。言うまで開放されない雰囲気だ。

(なんで言わなきゃダメなの……)

罪人の調書作りでも始めるつもりか、レンの手にはメモまで握られている。

人のデートの話なんか放っておいて欲しいのに、彼らは部隊のイベントのように毎度騒ぐので今回も諦めた。

「……オスティアの貴族街」

「ピユウ〜！」

ミリアの指笛が始まる。囃し立てる彼女の横では、いったい何をメモしているのか、レンの筆が動いていた。

ここまでで勘弁してくれと祈っても、彼らが許してくれるはずもなかった。どんよりしてもお構いなしに、三人は盛り上がっている。

「夜に天馬で二人きりのデート……いいな」

ロマンティックな絵でもイメージしたのか、レンがうっとりした声をあげる。小さく左右に体を振って手をむすぶ彼女の横では、ミリアの大はしやぎが止まらない。

「な！ ウチもしてみてえー！」

この凸凹タツグが天敵にしか見えなくて、シャニーはジト目を送っていた。

あの二人きりの空の旅も、石ころがついてきた瞬間にぶち壊しは目に見えている。

そうしていると、ふいに視線と反対の頬を指でぶにぶにされた。

「あの時間から行ったってことは最後まで？ ほら正直に言いなさいって」

ぎよつと凍りつく。

二人を止めるどころか、またルシヤナがガンガン攻めてきた。全部言えと顔が言っていて、あつという間に頭がぐらぐらしてくる。

「無い！ その質問、これから禁止なんだからね！」

三人共がつまらなさそうにしても、お構いなしにプイッとそっぽを向く。

あろうがなからうが、答えるワケが無いだろうに。

イメージしたらすぐに頭が沸騰して、ぶんぶん振る首はそのまま飛んで行きそうだ。

「で、その時計もらったの？」

思ったよりアツサリ退いてくれたと思ったら、もつとわかりやすいネタがあったからだった。

ツッコまれないわけがないと覚悟はしていたが、ルシヤナが指さしてきた。

「うん。誕生日プレゼントって。なんか、もらってばっかでき。イイお返しのネタ何かないかなあ」

ロイは気にするなと言ってくれたが、やっぱりもらってばかりでは

どうにも気持ちが許さない。

皆で考えてみるが、貧乏騎士に出来ることなんて知れている。せいぜい、編み物や料理やお菓子やら……手芸くらいしか浮かんでこない。

首が落ちそうになるほど傾げていると、レンがのぞき込んできた。彼女は朝陽に映える腕時計に目を凝らしている。

『共に時を刻もう』って彫ってある……」

間接的だけど、とてもストレートなプレゼント。その意味にピンと来たようで、レンはまた手をむすんでうっとりし始めた。

「ロイ様ってアツイッスね！」

ミリアものぞき込んですぐ嬉しそうな声をあげ始めた。自分もこんなことされてみたいと言って、レンと一緒にあれこれ妄想を始めて朝から騒がしい。

「あんだ、これ確定じゃん。良かったね〜！」

ポンポンと背中を手をやってルシヤナが祝福してくれた。

嬉しいに決まっている。他の人は聞けないであろう、憧れの人からの特別な言葉。それを祝ってくれる幼馴染の笑顔。

しかし、幸せに包まれているはずの心には、それがとても重く感じた。

「うん……そうならいいね」

時計の意味は分かっているし、天に舞い上がりたくらいの幸福感をロイはプレゼントしてくれた。

はるか北国から憧れていたときは、ずっと求めていた。傍で支えられる喜びを知った今、もっともっと欲しい。

他でもないロイが、それを求めて手を引いてくれたのだ。さらに先へ踏み込んで、夢の向こうへと。

でも……

「あんだ……」

ルシヤナが渋い顔をしているのが見えた。思わず目を逸らす。

たしかに、＼あたしは＼まだ違うかもしれない。けれど、＼我々は＼そうして生きてきた。

むせ返る死の臭いの中でうごめくハイエナ——ラウス当主の言葉
が蘇る。

そんな血みどろの手を、どうしても伸ばせなかった。

燦然のコロージョン

喧騒の酒場。国は違えど、そこにある活気は、人が榮えていればなにも変わるものはない。違うのはただ……そこに置かれている酒と、そのスタイルだけというところか。

極寒の地イリアにある酒場はしっかりと締め切られ、暖炉の灯と熱で濃厚な酒を楽しむ場所といえる。

だが、ここリキアは違う。ガレージのような屋根だけの解放感に吹かれながら、爽やかな喉ごしのビールを水がわりに飲む。

陽射しあふれる酒場は、外を走る馬車の音まで入り放題で、音の洪水にひっかきまわされてなにも聞こえてこない。

にもかかわらず。その賑わいの中で一角だけ別世界が包み、すべての音を遮断している。

「……感じる。あの娘の流れが近い……」

黒きソフトの下でぎらりと目が光る。

風の契約者のエーギルがリキアの風に吹かれて流れているのを、彼は感じとったらしい。

その風の色は、イリアにいたときに見せたブリザードのごとき殺気とは別人のよう。清らかな流れは、どこか薫り立つ。

「ええ。しかも、これは……」

横で酒に口をつけていた仮面の魔術師も、エーギルの匂いを感じとっていたらしい。視線だけ彼の主——黒の紳士へ向ける。

「ああ。……気づいたな。まだ、混ざるだけで溶け込んではいないようだが」

ビールを呷った紳士の口元に、ひとつ笑みが浮かぶ。

彼は脇から取り出した愛刀を愛でるように見つめ。それを待っていたかのように、仮面の男が肩を揺らし始めた。

「これは最終チェックも近いですね？ ククク……ッ」

仮面の魔術師——ウエスカアの口元が、仮面の下で不気味に吊り上がっていく。

「やれやれ、諦めていなかったのか」

「ようやくセチを燃やしてやれるのですよ？　ずっと待ったをかけられて来たぶん、最高のショーを演出するつもりです」

高く掲げたグラスを傾けた彼は、したたり落ちた酒を炎と昇華させて白のペルソナを真っ赤に染める。

去年の8月以来の再戦にウエスカーは興奮を隠せないようで、手先に紫電を召喚して今にも予行演習をはじめそうだ。

「ふふふ……颯閃一刀流か。心技体……揃うのはいつぶりだ」

セチの魔力を乗せた風の波動、そしてそれを扱う剣技。紳士はまるで当時を懐かしむようにこぼし、ビールを口にする。

その口元が、ふっと普段を取りもどす。ふいに横へ現れた気配に、ソフト帽から視線が切れあがった。

「お隣よろしいですか？　レリウス殿」

紳士が見上げた先にいた金髪の男は、なんとも穏やかそうで親しげだが、紳士たちに面識はなさそうだ。

いつも飄々としているウエスカーでさえ、眉をひそめて警戒感をあらわにしているところからも、この接触は想定外に違いない。

「……なぜ、私の名前を知っている？」

この世界で、彼らが名乗ったことはない。それを悟られぬよう、隠密に行動してきたわけで当然と言えよう。

レリウスと呼ばれた黒の紳士は、返事も待たぬまま隣へ座ってきた金髪の男へ、帽子の下から鋒のごとき眼光を浴びせ続けている。

だが、男はさも意外そうにふっと鼻で笑った。

「イリアを以前徘徊しておられましたよね？　ならば調べて当然でしょう」

——あれだけ動いていて、気づかないとでも思ったか？

柔和な笑みの下からギロっと飛びだした紫紺の目が、そう突き刺す。

なにも答えず、レリウスは微動だにしなかった。

答えられるはずもなからう。そう言いたげに不敵な笑みを浮かべた金髪の男は、そこへふっと聖書者らしい笑みを乗せ、一枚の名刺をテーブルへ滑らせた。

「名乗るほどでもありませんが、お見知り置きを」

清楚なる白の法衣に包まれる穏やかな姿は、名乗らずともすぐ聖職者と分かる。

問題は、なぜこのような聖職者が接触を試みてきたか、だろう。おまけにここはリキアだ。彼が寄越した名刺に書かれているのは、明らか他国の地名だ。

それでも、レリウスの声は冷然なものだった。

「坊主と話すことはない。去れ」

彼らは蚊帳の外にいる組織。エレブ大陸の人間と無用の接触を凶れば、組織の掟に反する。この世界の歴史に、直接干渉することはタブーであるからだ。

だからこそ、顔も、行動も、名前も、なにもかもを闇の中に潜めて背中を押してきた。たまにこうして嗅ぎつけられても、彼らは視線を切るだけ。

「はは。死にぞこないの英雄サマも、僧侶の説法なら召していただけるかと思いましたがね」

それでも、身じろぎもせずレリウスへ視線を送る聖職者は、なにが楽しいのか笑いだした。

ぴくりと、仮面のふちが動く。

「マスターへのそれ以上の無礼は、命を捨てることになりませよ?」

ウエスカーの手先には既に紫電が走っていて、今にも男を貫きそう。それをレリウスが腕で遮ろうとしたときだった。

「ほう……? ずいぶんと尻を捲るのが早いな、『閃電』?」

声は間違いなく、この坊主から聞こえた。それまでの柔和な声とは、まったく別人の重厚な声。聖職者とは対局にいるような、野心と自信に満ちた笑みが見下ろしている。

「たしか、お前たちは手を出せないはずだな? “ごちらの世界”の人間には、な。……クフフツツ」

それを聞くと、レリウスが妖刀に手をかけ、目線で牽制を浴びせた。

「……去れ。返答次第では容赦せぬ」

彼は親指でミュートの柄を押し上げる。血を求める白銀の剣がぎ

らついで、獲物を見つめるように刃へ顔を映す。

そこまでされても、聖職者を名乗る男は好戦的な笑みを止めようとはしない。それどころか、まわりさえ振りむくほどの哄笑で天を突いた。

「ずいぶんヤキが回ったものだな。いまだに、そいつが忘れられないとはな？」

ふたたびレリウスを睨み据えた紫紺の眼は、肩を揺らして侮蔑で舐めまわす。彼は席を立つと、ポケットに手をつ込んだまま目をじろつと見開いた。

「フツ、その尊い犠牲も、すっかり無駄——」

「黙れ、『A』」

口をもう開くなど言わんばかりにレリウスが遮り、一度目を瞑った金髪の男は、フツと鼻で笑うと拍手しはじめた。

「ククク……——ご名答だ。さすが『氷刻』と言うべきか？」

場が凍りつく。すっかり生を抜かれたかのように、震えるウエスカの口元はぽっかりしたまま。

思惑どおりだったか、『A』と呼ばれた男は傲慢な笑みを浮かべたものの、それはレリウスのひとことによって一瞬で歪む。

「おかしいとは思っていた。我らの長が倒したと聞いた後も、ミュートは収まらなかったからな」

「ハッ、どこまでも執念深い女だ。で？　いつから気づいていた」

「この世界に、ふたたび足を踏み入れたときからだ。……答える、どうしてお前がここに……いる？」

レリウスの眼光が一層に鋭くなる。今にも抜刀一閃、時をも切り裂きそうな威圧感を醸す。

居合にはおあつらえ向きな間合いでも、男の傲慢な目は変わらな
い。「知れたことを」そう言って、彼は続けた。

「たしかに、俺は死んだ。アルヴァネスカではな。おかげで、邪魔な檻から解放されて助かった。お前たちのリーダーには感謝している」

アルヴァネスカ——それは、このエレブとどこかにある門で繋がる
と言われる別世界。独立しているようでどこか繋がる、光と闇の大陸

の片割といったところ。

千年前に勃きた、人間族と竜族が争った人竜戦役。そこで二つの世界を繋ぐ門は封じられたはずだが、二十余年前に何者かに解放されて以来、それに気づいたアルヴアネスカ側の者が足を踏み入れるようになっていた。

この男も……いや、この男は特殊なのか、レリウスもウエスカーも警戒を解かない。

「私はこの世界ではしががない聖職者です。世界の救済に努めております。以後、お見知りおきを」

もう既に、彼は「本来」を光の中に隠し、先ほどまでの清楚な顔を浮かべ始めている。違うのは……彫りの濃い悪意が陰影を描き、人ではないことを示すように、顔中へ赤い紋様が浮かび上がっていること。

二人の焦りを確かめたかのようにニツと吊った笑みは、彼を包んで燃え上がった白き眩耀に溶け、姿を消した。

「……マスター、リーダーに報告しますか？」

「無論だ。急がねばならん」

ウエスカーからの問いに、レリウスは答えながらに席を立つ。

「奴がこちらの世界で企てることなど、一つしかない。この、竜の消えた大陸ならたやすかろう」

「では、我々の前に現れたのは……」

「ああ……認識させるためだろう。炎と風はすでに接触済みとなれば、奴は定着したことになる」

レリウスは店を出ると空を見上げた。のどかな春の日差しに、柔らかな雲が風に流れていく。

戦争から復興し、立ち直った世界には平和があふれていた。

「……近いうちに見せてもらおうぞ。颯閃一刀流……」

黎明の剣は未だ目醒めぬまま。

彼は愛刀ミュートを握る手を一層強くした。

黎の下から突き刺す眼光は、今までにないほど鋭く東の空を睨み、今も薫る風の妖精を見据えていた。

極夜のミンネリート

一番大事な仕事？

晴れ空が海のように続くのどかな午前。天馬で飛ぶためにあると思えるくらい、リキアの気候は気持ちがいい。

見回りから帰ってきたシャニーは、さわやかな風を惜しむようにゆつくり城へと降りていく。

「ふい〜！ 今日気持ちよかったあ！」

哨戒に行っただはずなのに、遊びから帰ったような声が出てしまった。

イリアの寒空と違い、リキアは本当に清々しい。いくらでも飛んでいられる暖かさと、心地よい緑の匂いはクセになりそうだ。

気分に合わせて天馬から飛び降り、伸びをしていたら後ろから声を掛けられた。

「今日もご苦労。異常はなかったか？」

「うん、ちつとも！ リキアは平和だよ」

落ち着いた声でピンときた。振り向いた先にいたランスに、敬礼して報告する。

これで良いのかと心配になるほど、何もしていない気がする。

治安が保たれているリキアには賊がそれほどおらず、本当に空を飛んでいるだけで終わる日さえある。イリアでは信じられないことで、ただただ、こんな世界が本当にあるのだと驚かされる毎日だ。

やはり、道が整備されているから警備しやすく、悪事を働きにくそうに見えた。どれもこれも、リキアは勉強になる。

「……イリアは大変だったのか？」

ランスは心配してくれているのか、故郷のことを聞かれた。

悪く言うつもりはなかったけれど、リキアに比べると色々遅れているのが率直な感想だった。どうしても、言葉を選んでしまつてトーン

が下がる。

「大変と思つたことは無いけど、賊討伐はほぼ毎日だよ」

「毎日……か」

ロイと同じ反応をされてしまった。どうしてだろう、どこか悔しい。とは言え、仕方ないことだ。

むしろ、リキアから見たら、黎明のイリアはどんな風に映るのだろう。もっと聞きたくなって故郷の状況を話してみることにした。

「リキアみたいに大きな道も整備されてないから、どこでも潜伏できるんだよね。本当に勉強になるよ！」

真つすぐな開けた街道で繋ぐだけで、だいぶ違う気がする。今日もイリアに持ち帰りたいものを一つ手に入れてニコニコが止まらない。

「そうか……。知りたいことがあれば、何でも話すといい」

ランスはいつでもこう言ってくれるし、聞けば親身になつて相談に乗ってくれる。一昨日だったかも、質問攻めにしてだいぶ時間を使わせてしまった。

それでも、嫌な顔をするどころか、ひとつ聞けばそこから話を広げていっぱい教えてくれるおかげで、楽しくて時間を忘れてしまう。

「えへへ、ありがとう！ 頑張つて本も読んでるからね！」

彼が貸してくれたリキアの戦術書や地理本は、20巻以上あつて最初は読めるか不安だったものの、眠い目をこすりながら何とか半分までは読み進めたところ。

少しずつリキアのことを頭に入ってくるようになったのは、ランスがあれこれ相談に乗ってくれるおかげ。

「ねえねえ。ランスさんって、何でそんなに優しくしてくれるの？」

あつ、もしかして……」

天馬隊はランスの第二騎兵隊配下ではない。それでも、彼はいつも声を掛けてくれる。今日だってそうで、兄か何かのような優しさに映った。

年上の男性にこんな風にもらえたのはディーク以来だろうか。興味津々を向けてみたが、ランスは小さくふつと笑うと、変わらないトーンで返してきた。

「ロイ様をお守りする同士として、当然のことをしているまで。特段、優しくしているつもりはないが」

彼は、騎士としてノブレス・オブリージュを果たしているだけだと言うのだ。感動して、気づいたら手を結んでわあっと声が出ていた。(クールだなあ、それに比べてアツチは……！)

あの赤い騎士にも、少しランスを見習って欲しかった。今日も出撃しようとしたら捕まって、開口一番稽古だったのだ。

彼は彼で、ロイを守るためと一生懸命になる姿は尊敬できるのは間違いない。とは言うものの、加減が辞書に無いのかぜんぜん容赦してくれない。彼に付き合っていたら、午前中でこっちのスタミナを空っぽにされてしまう。

その時、ふいに向こうでアレンのくしゃみが聞こえてきて、思わずぷつと笑う。

「カツコイイなあ！ ランスさんってホント、騎士！ って感じる。あたしも見習わなきゃ」

ランスのような、皆に頼られる優しい騎士になりたい。心の底からそう思える。彼は視野が広いし、仲間にも頼られていて理想像にさえ映った。

そうやって褒めても、ランスは静かに笑って見せるだけ。

「いや、君も騎士そのものだ。民を想う気持ちは強く伝わってくる。色々と教えたくなるというものだ」

「ランスさんにそう言って貰えると嬉しい！」

憧れの人が褒めてくれて、舞いあがってしまったのがマズかったか。飛んで跳ねて喜んでいたら、ランスが渋い顔をしはじめたではないか。

叱られるのかとハツとしたが、彼は思わぬことを口にした。

「不思議だ。なぜ、これ程の意志を持った者を、国外に出そうとしたのか。国にとって損害でしか無いはずではないか」

「……あたしにも分かんない」

ランスの口ぶりだと、十八部隊がここに来た理由をある程度気付いているのかも知れないが、それは口にしたくない。今リキアにいるの

は、イリアに足りないものを学ぶために他ならない。

「でも、遠くても、想わない日はないよ」

自然に北の空を見上げ、心の中で祈る。

こうするのは日課になっていた。

イリアを出て三か月弱、皆は無事だろうか。賊は沈静化しているだろうか、イドウヴァはきちんと国力向上活動をはたして継続してくれているだろうか。作物の実りは、イリア風邪は……とにかく、心配が尽きない。

「我々は今、ロイ様にお仕えする騎士。君の気持ちは分かるが、ロイ様をお守りすることを第一に考えてくれ」

ところが、ランスの声に視界を呼び戻された。

口調は変わらず優しくとも、言葉が厳しくなったのが分かる。

見上げたら、やはり先ほどより強い視線が突き刺さって思わず息をのむ。

(ありや。もしかして、叱られた?)

ストレートに受け取ると、故郷に現を抜かすなということになる。さすがに厳しい人だ。それでも、すぐに手を挙げてはきと答えた。

「もっちゃんだよ! ロイ様を支えたいって、ずっと思ってたんだ」
経緯はどうあれ、ようやく夢が叶った今は毎日が楽しい。

ランス達も良くしてくれて居心地はいいし、故郷を考えなければ、ロイの言葉に甘えて永住してしまいたいくらい。

もう少し仕事があれば言うこと無し……そう言いかけたのを読んでいたかのようだった。

「君にしか出来ないことは、たくさんあるはずだ。城の護りは我々に任せ、ロイ様のお望みを叶えてさしあげてくれ」

ランスから返ってきた思いがけない言葉は、雷でも脳天に落ちたようで、口から何も出てこなくなった。

嬉しいことを彼は言ってくれたはずなのに、心をジンジンと火で焙るようにそわそわさせる。思った通りになってしまったのかもしれない。

(うわ、これ、この前のコト言ってるのかなあ……)

城の護り……どう考えてもあの夜の話を違いない。

ロイはランスに相談したと言っていたが、さっきの目つき、そしてこの思わせぶりの言葉。やはり怒っているのかもしれない。

無理もない。相手がロイでなかったら、自分だってあんなことはしなかった。

「あの……。——オステイアのこと、ごめんなさい。やっぱり止めるべきだったよね」

あの日は互いにドレスコードを固めて、ただでさえ天馬に乗るには危険だと承知していたのに。馬上はロイと二人きりになれる貴重なひと時。それをロイから提案されて浮かれてしまった。

もう一度提案されても、きつと同じ反応をしてしまうに違いないが、騎士としては失格と言えるだろう。

でも、ランスは「謝る必要はない」そう言って続けた。

「ロイ様は君を信頼なさっている。それに君は応え、なすべきを果たした。違うか？」

「えつと。うん。頼りにしてもらえるのは、うれしいよ」

「なら、これからもロイ様のお気持ちにお応えすべきだろう。それは、君にしかできない」

怒っていないと分かってほっとしたのは束の間だった。ランスの言葉に心臓が飛び出しそうになった。

「ロイ様がお望みなら……。我々を気にせず、その通りお呼びすると良い」

「えっ……?!」

目が飛び出しそうになり、聞き間違いかと反射的にランスを見上げてしまった。

初日に、槍で串刺しにするような目で見てきた人が言うセリフとは、とても思えなかった。もしそれが出来るなら、どんなに嬉しいか。にもかかわらず、今はその喜びよりも驚きばかりが湧き上がって、あんぐり開いた口をどう閉じていいか分からなくなっていた。

(ランスさんがこんなこと言うなんて……)

そういうことには一番敏感だと思っていた。

嬉しいはずなのに、どこか急に怖くなってきてしまう自分がいて、気づけば、ストップをかける言葉が口から飛び出していた。

「で、でもさ。あたしみたいな傭兵なんか——」

そこまで言いかけたところで、口指を立てられた。

「それはロイ様が一番お嫌いになる言い方……そうでは無かったか？」

「そ、それは。それは……—そうだけど、さ。でも……」

なぜなのだろう。どうして嬉しいのに、夢が叶うのに、こんなにも前に踏み出せないのか。自分でも分からずに先を言えないでいたら、先にランスから問いかけられた。

「君は先ほど、ロイ様をお支えしたいと言ったな？」

「う、うん」

何を言われているのかいまいち分からず、唇に手を当てて考えようとした時だ。

「そんな君が覚悟を決めぬ態度では、ロイ様を危険に晒しかねない」

（あたしが……ロイを危険に？ そんなの……）

びくつと肩が跳ねた。支えたいと思っっているはずなのに、自分がロイを危険にさらすかもしれない。それをランスに言われてしまうと声が震える。

そんなの絶対嫌に決まっている。どうすれば良い？ いつの間にか、彼をじつと見上げていた。

「ロイ様にとって、君は心の支え。我々は気にせず、ロイ様をお支えしてくれ。その気持ちがある限り、私は、いや我々は君の仲間だ」

仲間——その言葉は勇気をくれた。

喜ばせてあげたくても、なかなか一線を越えられないこともたくさんあった。その背中を、ランスは押すと言ってくれたことになる。

（あたしにしか出来ないこと……うん、そうだね。ロイが喜ぶなら……）

傭兵の自分なんか——それがまず浮かんだが、すぐに払った。ロイも、ランスも、自分だから出来るものを求めている。

憧れの人を支えること、その夢が今叶ったのだ。

何を出来るのかまだ見えないが、とにかく頑張ろうと、ランスへうんうんと頷いてみせた。

「ありがとう、ランスさん！色々叱ってよ、頼りにしてる」
「何だか新鮮な気持ちだった。」

天馬騎士団にいたときは、こんな感じに騎士の心得をアドバイスしてもらえることなんて無かった。不思議とこの人の言葉なら、口答えせずに素直に聞けそうな気がしてくる。

やっぱり、憧れる。こんな頼りになる騎士になりたいと、改めて思える人だった。

「でき、もっとお仕事したいんだけど、他に無いの？ 奇襲とか、防衛戦とか」

さっそく出来そうなことを探して元気よくアピールしてみるのだが、ランスは首をかしげるだけだった。

「そんな任務を毎日こなすのか？ イリアは」

「毎日じゃないけど、いろんな任務があるよ。訓練の種類も多くてさ」「たとえば？」

「変わったのだとね、んー……あつ、拷問を受けた時の訓練とか？ お任せー！ とは言いたくないけど……」

「リキアでは拷問は禁止されている。機会は無いはずだ」

貴族が領土を管理するリキアは、そうそう大規模な戦闘が無いらしい。やはり、リキアはいろいろな意味で進んでいるように聞こえる。

とは言え、聞けば聞くほど、今度は何をすればいいか分からなくなってきた。

「私から指示することは特にない。自己研鑽に努めると良い」
「じこけんさんって……」

首をかしげてしまった。まだ午前なのに、ここから決まった仕事はないし、他に貢献したくても、これ以上は必要ないと言うのだ。

傭兵が出撃もしないで、どうやってロイを喜ばせてあげればいいのかだろう。

どこか、動いていないと落ち着かず、望んでいたはずの平和が息苦しく感じた。



「……で、暇でしようがなく稽古に来たってわけか」

見まわり以外の仕事は見つからずじまい。

天馬でフェレ領を三周したシャニーは、中庭の隅にある武器庫の前で、ユキと剣の稽古に精を出していた。

シャニーの振る木刀を軽い剣さばきで受け止めるユキから、片手間で済ますなど言わんばかりの嫌味が漏れる。

「そんな言い方しなくたっていいじゃん！」

ムスツと口を尖らせる。一生懸命やっているのにあんまりだ。

ちよつと強めに振り下ろし、いい感じにヒュンと音を立てた一振りも簡単に弾かれた。

「ま、早く中伝あたりまで行ってくれないと困るし、丁度良いさ」

やっと上手く鋒を使えるようになってきたのに、ユキはちつとも褒めてくれなかった。口を開けば早く中伝……そればかり。

騎士剣から太刀への転向は思った以上に難しい。ユキやセチが付きつきりで指導してくれる時間を無駄にはできない。これこそ自己研鑽というヤツだ。

「なんて言うか物足らないっスね。全然仕事無いツスよ」

稽古を眺めていたミリアがため息交じりに混ざってきた。

彼女はよほど暇なのか、相棒のクロスボウをバラしはじめている。丁寧に薬品で拭いたパーツを合わせ、パチツと良い音をたてる相棒へ、ニツと満足そうな笑みを浮かべていたのは束の間のこと。

「こうやってメンテしても、仕事が無いんじや緊張感が無いツス」

「ね。見回りだけじゃ、なんか仕事した気になれないよ」

リキアは平和だ。こうして剣術を磨いても使う機会が来るのか疑問なくらい。

こんな風に出撃もせず、城の中でノンビリしていると罪悪感さえ湧いてくる。

ロイに雇われて最初の一週間は、身近なことを覚えるだけであつという間に時間が過ぎた。

6月に入って騎士団にも慣れ、そろそろ傭兵としてちゃんとした仕事をしたい。そう思って今朝もランスに聞いたはずが、答えは拍子抜けだった。

(こんなんでもロイの役に立ててるのかな……)

ようやく夢が叶い、ロイを支えるのだと意気込んできた。それが、何も貢献できていない気がする。

ランスの期待にどうしたら応えられるだろう。考えれば考えるほど、水の中で振っているように太刀筋がバラけていく。それがいけないと分かっているけど、強く打ち付けるユキの剣に何度も意識を引き戻される。

「イリアが異常なんだよ。早く慣れることだね」

にべもないユキの答えは困惑を膨らませるだけ。鋭く切り上げてきた彼女の剣に木刀を弾かれそうになった。

リキアの様子やランスの反応で気づいてはいた。だからと言って、慣れてしまっているのだろうか。イリアに帰ったらそれでは済まないし、もつとやるべき仕事がある気がする。

「それに、あんたには見回り以上に大事な仕事があるはずだ」

今、まさに考えていたことを、声が聞こえていたみたいに読まれた。ユキの問いかけに手元が跳ね、危うく木刀を弾かれるところで手首がしびれる。

(あたしの一番大事な仕事……。うん……)

ずっと心の中に渦巻いていた。

それが何かは、言われなくなつて分かっている。そのくせ、他にやるべきことを必死に探そうとしている。

——ロイ様にとつて君は心の支え

ランスに言われ、あらためて自分だけの仕事を認識できた。

ロイの為なら思うままに振舞えと背中を押してくれた今、ずっと彼の傍にいれば良いはず。

今まで踏み出さなかつたその先。せつかく道が開けたのに、今度は踏み出せずにいる。何をためらっているのか……。考えに耽っていた時だった。視界が勝手に宙を滑る。

「脇が甘い!!」

「ぐえっ?!」

まともに息が出来ない。気付いたらトマトでも踏みつけたような潰れた声が飛び出していった。直撃を喰らったか。

激痛と共に宙へ放り出された体は、武器庫へガシヤンと突っ込んだ。

「いたた……」

喘ぎながら頭を擦る。

どこからかカラカラと妙な音がするが、もうもうと埃臭く目を開けられない。

「って!! あわわわわあ?!」

体を起こそうと見上げた視界に入ったものに、堪らず悲鳴を上げた。

ばたばた四つん這いそのまま飛び出した直後、バランスを崩した槍が積み重なるように降ってきた。爆風が噴き出すように広がる土煙に押し出され武器庫から弾け飛ぶ。

「ふにゃあ……」

間一髪で雪崩から避難し、しばらくペタッと大の字になっていた。直撃を許したのはいつぶりだろうか。いろいろな意味であやうく死ぬところ。

「もうっ、そんな本気出さなくてもいいじゃん!」

ぱっと上体を起こして目を三角にする。

木刀だつて下手すれば死ぬことだつてあるのに、ユキは謝るところか、刀のような眼光であっさり斬り返してきた。

「颯閃一刀流に防衛は無いんだ。覚悟を決めなきゃ死ぬぞ、あんた」
狙われたのは間違いなく急所だった。殺す気かと思っただが、ユキから投げつけられた言葉にごくつと息を呑む。

さっきランスに言われたそばからこれだ。きゅつと口を閉じるとそのまま剣は下を向いてしまった。

(覚悟……。でも、でもどうしたらいいの、あたし……)

剣を振りながら考えて、ちよつとだけその理由が分かった気もす

る。

だけど、夢から醒めてしまったら、もうロイの傍にいられない気がして心が千切れそうになる。もしかしたら、ルシヤナ達の人生だって変えてしまいかもしれない。

(あたしみたいな傭兵が……)

ロイの望みを叶えてあげたい。でも、それが本当にロイの為になるのか？ その自問を跳ね返せなくて下唇を噛む。そのときだ。

「——ッ!？」

体が勝手に反応した。襲い掛かってきた上段を何とか受け止め、木刀同士の弾ける高い音が響く。

「あんた、何を悩んでる」

「え……う？」

ギリギリとした鏝迫り合いの向こう側、黒髪の奥からギョロつと睨んでくるユキに問われて息が詰まった。

「前も言ったはずだ。相手の剣はどうにも出来ない。あんたがどうするかだけだよ」

びくつと目が震えた。

なぜユキが知っているのだろう。ハッと仲間へ視線を移せば、慌てて目を逸らすミリアの姿が映る。

「ちよつと、見回り範囲広げてくるよ!」

とても稽古などしていられる気分ではなくなって飛び出した。空へと翔けあがる。

どこまでも続く、淡色の向こう側をぼんやり見つめているうち、ぽつりと零れた。

「どうするのが一番良いか……それが分かんないんだよ……」

したいことは決まっている。求められているのが何かも気づいている。

だけどそれらが、本当の意味でロイを支えることになるのだろうか？ このまま……夢は夢のまま、醒めないまままでいたほうがいいのか？ 夢から醒めたら、きつと起こるそれは……——許せない。

何が最善なのか、今日も踏み出せないまま一日が終わってしまっ
た。

これこそ、あたしたちの仕事！

空を飛んでいるだけで、今日も見回りは終わってしまった。

地上に降りないままでは、どうにも心がざわついてウズウズする。シヤニーは騎士団へは戻らず、歩いてフェレの城下町へ行ってみることにした。

「リキアはいいなあ。もう、ゼーンぶがのんびりだよ。あゝ、平和が沁みる〜」

空を見上げれば今日も穏やかな青空が広がっており、なにも心配いらないと言ってくれているみたいだ。

私服を着ていれば心が弾むけれど、今日はどうにもそんな気分にならない。一度は大きく伸びをして顔をくしゃくしゃにしてみたものの、その後が続かなかった。

「はあ………こうも仕事がないとなあ」

イリアにいたときは、時間を持って余すなんて考えもしなかった。

日が昇る前から剣の稽古で、皆が揃ったら朝食兼ミーティング……ここまでは一緒だ。そのあと天馬で飛び立ったら、次に城へ帰って来るのは、故郷なら真っ赤に燃える時間。

それが、リキアではたった一時間ほどで戻ってきてしまう。守備範囲も、治安の良さも、広大な途上国と先進国の一都市では比べ物にならない。

(やっぱり、ロイは無理してあたしたちを雇ってくれたのかな)

こんな高い青空が、頭の上から全部乗っかってくるようで背中が丸まる。

天馬隊がずっと空席だったのは、自分たちに空けておいてくれた……なんて考えたのが恥ずかしい。腹にぞわぞわと湧いてくる嫌な感じ。なにも生み出さないまま小麦を食べてばかりだ。

——君にしか出来ないことはたくさんあるはずだ

ふと、ランスの言葉が丸まる背中を突つつく。

(……そっちは落ち着いて考えよ)

これだけ時間があるなら、ちよつとは考えればいいのに。自分でも

そう思うのだが、どうしてもそれを避けていた。

どうしても……怖い。傭兵がそちらへ踏み出せば、なにが起きるのか考えたら……ぶんぶん首を振った。自分だけの問題でなくなってしまう以上、下手に動けない。

どうすれば……ぼんやり歩いていると、視界にゆらゆら動くものが入ってきてハッと立ち止まった。

好き放題に白髪があちこち飛ぶ老婆が見えた。

持っている桶は空だが、その状態でも転んでしまいそう。よろよろと前を歩く彼女に、瞬きより先に小走りして声をかけていた。

「おばあちゃん、こんにちは！ どうしたの？」

知らない騎士に突然話かけられたからだろうか。最初こそ老婆は驚いたようだが、笑って見せたら彼女も目元が緩んだ。

「そこまで井戸に水を汲み行くんだけどね、遠くて」

老婆の指さす先を見ても、水汲み場なんか見えてこない。タツタと路地から出て、きよろきよろ見渡してみるものの、やっぱりどこにもない。額に手で庇を作って、さらに先を眺めたら口があつと開いた。踵でターンして老婆のもとへ駆け戻る。

「あんな遠くまで？ 腰痛めちやうよ」

ちよつとそこまで、などとと言えるような距離ではなかった。これを毎日、何回もなんて自分でも大変だ。路地から出る前にもう老婆は腰を擦っている。

「よおし、おばあちゃん、あたしに任せて！」

答えはすぐに出た。

困っている人がいるなら、することは一つに決まっている。老婆の持っている桶を貸してもらうと、水汲み場まで一緒に歩いていく。

「すまないねえ。騎士様にこんなことさせてしまった」

経典を唱えるように、何度も感謝の言葉を掛けられる。

騎士様なんて呼ばれるとむず痒くて仕方なかった。イリアでそんな風と呼ばれたことなど一度も無い。そういえば、リキアでの騎士は市民より上位の身分だった。

（本当だったら、アレンさん達も「アレン様」なのか。……アレン様

かあ……)

ロイを呼び捨てにしたり、アレンも「ぎん」で呼んだり、今思うとずいぶん無礼者と言える。アレンが気さくで話し易い人で良かった。

「ううん、へーき。みんなを守るのがあたし達の誓いだしね」

それに比べたら、民に近い視線と立場でイリアでは彼らに接していた。

身分なんか意識したこともないし、どんな立場でも、こうして喜んでもらえたら心は舞い上がる。最近ぜんぜん貢献できていない中で、ささやかなことでも喜びはひとしおだ。

「ありがたいねえ。騎士様が側にいてくれると安心だよ」

老婆の顔はにこやかで、感謝の言葉が止まらない。

春風のような穏やかな笑みが、シャニーの顔に一層爽やかに映える。

彼女にとっては、誓いを果たせた久々の実感に心がじんわり温かかった。もつと皆の傍で……そう思ったとき、シャニーはピンと来て、電撃でも走ったかのように目がパチツと開く。

(あれ……民の傍にあれ……そうかつ、そうだよ！)

なぜ、こんな簡単なことを思いつかなかったのだろうか。

傭兵の自分では、契約以上は何もできないと勝手に思い込んでいたが、仕事が無いなら創ればいいだけだった。

空色の瞳に輝きを取り戻したシャニーは、その活き活きを老婆へ向けて快活な声を上げた。

「ねえ、おばあちゃん、なにか困ってることとか無い？ あたし、ロイ様にお仕えしてる天馬騎士のシャニーって言うんだ」

どれだけ平和なりキアだって、人々の目線まで落とせば困りごとはきつとあるに違いない。

彼らの悩みを解決してあげることが、自分たちに出来る仕事なのかもしれない。そう考えたら、周りに映るものが全て仕事のネタに見えて、色が鮮明に浮かび上がってくるから不思議だ。

「もし困ってることがあったら言つてよ。解決できないか考えて、ロ

イ様にお伝えしてみるからさ」

一応身分証を見せてみるが、それよりもロイと言う名前に老婆は反応したように見えた。

「おお、ロイ様には？ それはありがたいねえ」

やはりロイは凄い人だ。名前を聞くだけで、相手の心の開き方がまるで違う。

天馬騎士団が敵国に付いていてマイナススタートだったとは言え、イリアでこの仕事を始めたときは本当に苦労したのに。

これなら、最初からもつと踏み込んでいけるかもしれない。

「ねえねえ、町長さんのお家を教えて。みんなの困りごと聞いてみたいんだ」

聞いてみて正解だった。

老婆は笑顔であれもこれも、聞かないことまで教えてくれる親切ぶり。その全てをメモすると、お返しにと彼女の家と水汲み場を何回も往復する。新しい仕事を見つけて、軽やかな心だけスキップして行きそう。

「決めた！ そうだよ、これが、あたしたちにしかできない仕事なんだ！」

久しぶりの重労働で腕に感覚がない。その手で腰をポンポンと叩きながら空を見上げた。さつきまで何も無くてつまらなかつたはずの空が、どれだけ見つめていても飽きない気がしてくる。

湧き上がる希望に、城へ戻る彼女の足取りは妖精のように軽やか。ロキアを知ることが出来て、ロイに貢献できる。それに異国にいても民を守る誓いを果たせる。完璧な仕事と言えるだろう。



仕事を見つけたとはいえ、すぐ行動には移せない。なにせ傭兵騎士だ。行動は契約に縛られる。そうなれば……直接交渉するしかない。フェレ城に戻ったシャニーは、休みもせずロイの姿を探し始めた。エントランスを抜け、居住区へすすすと入っていく。廊下の角をひとつ抜けただけで、奥へと歩く赤い髪青年を見つけた。これはラッ

キー。

にもかかわらず、声をかけようと大きく開きかけた口へ、自分の手で蓋をするハメになった。

(わっ、マリナスさんと一緒か……)

なんとも手ごわいボディガードが脇を固めていて、なにやら手帳を見下ろしながらロイにかじりついている。

(でも……！)

一度は緩んだが、強く踏みこみスピードを上げて二人に近づいていく。ロイを支える覚悟、それを見せるにはちょうどいい相手だ。

「おーい！ ロイ！ (お願い、上手くいきますように！)」

叫びながら心の中で祈る。ロイが嬉しそうな顔で振り向いてくれた。でも、今はそちらではない。

彼の横では予想どおり、ぎよつとした目でこちらへ視線をむけるマリナスがいる。何者か気づいた彼は明らかにわなわなして、肩を怒らせて踏み砕くように寄ってきた。

「なっ、なんじゃお前は！ この無礼者めっ」

(うわー、やっぱり……)

傭兵の分際で——マリナスの顔にはそう書いてある。目を三角にしてツルツルの頭まで真っ赤の彼は、反りあがるくらい指でさしてき

た。
一度はロイに助けを求めて視線を向けようとしたが、すぐにマリナスへ戻す。

(あたしがどうしたいかなんだ。そんなの……決まってるじゃん！)

覚悟を決めろとランスには言われた。

一步を踏みだすのは怖い。だけど、少しずつ出来ることからやってやろうと気合を入れる。こんな大勝負はエネルギー満タンでなければ挑めない。

「だって、ロイがいいって言うんだもん。ねー？」

敢えて、二人きりであるときと同じように呼びかける。

マリナスの顔にますます朱が差したのは言うまでもない。今にも衛兵を呼びそうなくらい目じりを吊りあげ、口元が怒りに震えている。

る。

その後ろからロイがウインクで合図したのが見えた。彼はマリナスの肩に手を置く。

「まあまあマリナス。彼女には、なんでも話せる友達でいて欲しいんだよ」

「は、はあ……」

ロイにこう言われては、マリナスも退くしかないとみえる。ロイに先に行くよう言われた彼は、首を傾げながら怪訝そうな眼差しを通り過ぎがてら浴びせていった。

彼を試すようで申し訳なく思いながらも、これでマリナスの前でもいつも通りにできると思うとほっとした。顔を合わせる度に説教を浴びせてくるマリナスは、シャニーにとってはラスボスだった。

「えへへ、けっこう頑張ってみた！ すっごいドキドキしたよ」

ロイの肩に手を置き、緊張から解き放たれた笑みを弾けさせる。

とりあえずラスボスを最初に倒したが、あと何回こんなにドキドキすればいいのだろうか。道はまだまだ険しそう。やはり……あれが普通の反応なのだ。

「嬉しいよ。やっぱりシャニーはそうじゃないと」

こうやってロイが言ってくれると、どれだけでも勇気が湧く気がする。彼を支える第一歩を踏み出した気がして清々しい。

ニコニコのまま、ロイと一緒に歩いていこうとしてはっとした。

思いがけずラスボスと遭遇し、大分エネルギーを使ってしまったが、本題はようやくこれからだったと思い出したのだ。

「あのね、ロイ。ちよっとお願いがあるんだ。時間ももらえない？」

ロイは少し驚いたような顔をした。あれだけマリナスがスケジュール帳を片手に話していたし、忙しいかもしれない。

彼は時計を見下ろし、その視線は磁石が引くように戻ってきた。

「分かった。じゃあ僕の部屋に行こう」

彼は柔らかに笑うと、部屋へと続く廊下を指さした。

「うん。ありがと、ロイ」

この場で名前を呼べるだけでも嬉しい。今日はこれだけでも大進

歩といえる。

彼は喜んでくれるだろうか。きっと上手くいくことだけを信じて、歩きだした彼の後ろについていく。



「あつ、いーよ！ お仕事の話だよ」

部屋について一息つく間もなく、シャニーはロイのもとへ駆け出し、歩いていた。

彼は席に着かず、侍女を呼んでお茶の用意を命じている。

そんなつもりで来たわけではないし、なにより今は任務時間だ。

ところが、振り向いたロイは意地悪そうに笑って見せてきた。こんな顔をされたのは初めてで面食らう。

「なんだ、せっかくおいしい焼き菓子を用意しようと思ったのに」

「えー！ ……どんなの？」

任務中だから……そんなマジメは、「お菓子」というフレーズを前に速攻で引っ込んだ。

「ガトー・アンジュ・デ・シトロンって言えば分かるかな？」

ロイが口にしたお菓子の名前に、頭がビリビリして第三の目が開いた。

「それって！ デリス・アプリコの新作?! 発酵バターをぜいたくに使った香り高い生地と、オステイア産レモンの爽やかさがビターチョコの濃厚さとフュージョンして絶妙と噂の、夏季限定のアレ?!」

「おつ、さすがに食いつきがいいね。まさにそれだよ」

彼が目の前にぶら下げてきた言葉は、あまりに攻撃力が高かった。スイーツを前にすると空に飛び上がってしまう自信がある。

頭の中で騎士と菓子狂が戦っている。意識の遠い顔は思わずぐくりと唾を飲む。

「……そっちはまた時間外に来ちゃダメ？」

結局、勝負はつかず妥協した。

デリス・アプリコとはオステイアの老舗。天使のおやつと讃えられるほど超美味だが、お値段は悪魔級で貴族御用達の菓子店だ。

目はつけていたが貧乏騎士には高嶺の花。そこのお菓子なんて食べてみたいに決まっている。いったい、彼は弱点を誰から聞いたのだろう。

スイーツを頭上に釣って嬉しそうなロイは、笑いながら背後にまわる。

「今でいいよ。べつに仕事の話だからつくつろいじゃダメってわけじゃないだろ?」

(ロイは優しいなあ)

びくつと身体が反った。また彼は勝手に鎧を脱がし始めている。

仕方ないと自分に言い聞かせ、彼の言葉に身を預けた。せつかく二人だけの時間を許されるなら、甘えたいに決まっている。

でも、彼女はポンポンと顔を両手で叩いた。

(喜んでくれるといいなあ!)

今は仕事でここに来た。自分なりの支え方を示して、承諾をもらうために。

彼がマントを脱ぐのを手伝いながら、侍女が用意を終えるのを待つ。

しばらくすると良い香りが広がってきて、夕焼けみたいに透き通ったお茶と、ダークブラウンのカーテンをまとった黄金色のケーキがテーブルに置かれた。

「仕事の話だったね。なにか困ったことでもあるのかい?」

さつそくケーキを一口して、言い表せないくらいの感激に足をピコピコさせていたらロイが切り出した。

困っていること……毎朝アレンに追いかけて回されるけれど、それは後だ。

「ううん、新しい仕事のご提案〜ってね」

ニコツと笑ってみせ、両手を広げて大げさに前振りしてみた。ロイは興味津々と顔を向けてくる。

「今日ね、町でおばあさんとお話してさ。みんなの困りごとを、なんとかしてあげたいなって」

シャニーは町での手伝いを報告していく。

ロイは驚きもせず、老婆が喜んでくれたと嬉しそうに語るシャニーをじっと見つめている。

「へえ、シャニーらしいね。民を気にかけてくれて、ありがとう」

「ううん、『民の傍にあれ』があたしたちの誓いだから。民ってなにも、イリアだけじゃないなって思ったんだ」

治安でいえば数段先をいくリキアでも、あんな思いをしている人はきつといっぱいいる。思い返しても、今まで素通りしてしまったことがたくさんあるはず。

誰と話してもイリアの人と同じように優しくて、守ってあげたい気持ちがある。でも、ここでも強くなってくる。

「だからさ、ここでさせてもらえないかなって。イリアでやってたこと」

傭兵が他国の政治に口だしするなど、恐れ多いとは分かっている。

それでも、この仕事こそ、この生き方こそが、第十八部隊の『三誓』そのもの。自分たちにしかできない、ロイの支え方と言えるだろう。

珍しく目をびつくりさせている彼は、はたして認めてくれるだろうか……振り絞った覚悟を。

「国力向上活動？ それは嬉しいよ。もちろん歓迎する、ぜひやってくれないか！」

彼の顔から驚きを吹き飛ばしたのは喜々とした笑顔だった。両手でシャニーの手をとったロイは、しっかりと握って引き寄せる。

「ありがとう！ 部隊のみんなも喜ぶよ！」

認めてもらえた喜びに、シャニーも顔じゅうで笑って白い歯を見せる。

早く部隊のみんなに伝えてあげたくて窓から飛び出したいくらいだ。夢の続きをこのリキアで繋ぐだけでなく、自分たちの軌跡を残せる仕事。その背中をロイが押してくれたのだ。

「僕たちもまだ基盤の復興に手いっぱい、なかなか民の声を聞いてあげられなくて困っていたんだ。今一番欲しい力だよ」

「そうなの？ やりがいがあるよ！」

声をあげてはしゃいでしまった。こんなことなら、もっと早く気づ

けば良かった。ようやく、皆の力になれそうだ。

求められているのは一番の得意分野。これなら、イリアをもっと知ってもらえるかもしれない。死肉を食らうハイエナー——そのイメージを払いたい。

「やっぱり、僕にはシャニーが必要だよ。リキアにとって大事なピースになる気がする」

「えっ、そこまで?!」

「ああ。あらためて、よろしく頼む」

シャニーの口元がますますぱっと明るくなる。

必要だ——その言葉だけで嬉しいのに、ロイから重要なピースと期待されている。心にふわっと軽くて明るい色が広がっていく。

「がんばっちゃうよ! ロイにそう言ってもらえるとホント! 嬉しい!」

やっと憧れの人に貢献できる。もう胸の高鳴りを抑えきれず、小躍りして声が自然に高くなる。

青髪を揺らしていきいきする爽やかな顔を、じっとロイは見つめていた。

「シャニー」

「なあに?」

「シャニーは頼りにしてる。だから約束してくれ」

いきなり畏まって名前を呼ばれて、シャニーはきよんとした顔を向けた。今もロイは優しい顔をしているが、先ほどまでとは明らかに色合いが違う。

その彼が口にした言葉は、彼女の瞳を興味で輝かせた。

「また約束?」

もうどれだけ彼と約束しているだろうか。今度はどんな無茶を言いだすのか、怖いもの見たさにワクワクしていると、彼は意外なことを口にした。

「本当はあと三つくらいお願いがあるけど、今日は一つだけ」

意外にロイは欲張りなのかもしれない。ぎよっとしていると、彼はしっかりと手を握って顔を近づけてくる。

「シャニーは大事な人だ。無茶だけはしないでくれよ」
「ロイ……」

思わず言葉に詰まった。彼は今、はつきりと言った。

——— 大事な人

大事な部下とか、親友……そう言われてきた。

今までと明らかに違う言いまわしに心臓がバクバクして、今にも飛びだしてきそう。

「分かってるって！　へーきへーき！　今までだって約束守ってきたでしょ？」

ニコニコしてみるが、あらためて彼の視線に気づく。……近い。いつの間にか、目の前にいた。

「——ごめん！　急用！」

彼と見つめ合っていたら、なんだか怖くなってきて部屋を飛び出してしまっていた。

立ち止まり、ぎゅっと胸元のロケットを握る。

(どうして、どうしてなの……)

彼との約束を守ろうとすれば、もっともっと先へ踏み込まなければならぬ。傭兵の自分が——分かった。ずっと腹に渦巻くものがないか。

だから、堪らなく、恐ろしかった。



「と言うわけで、明日から忙しくなるぞ！」

仲間のもとへ戻ったシャニーは、新しく掴みとった仕事をハツラツと伝え、やってやろうと拳を突きあげていた。

十八部隊が出発した去年の10月を思い出してワクワク、ゾクゾクする。

気持ちが抑えられないのか、ミリアもガッツポーズで返してレンと飛び跳ねだした。

「いつもの十八部隊に戻るんスね！　よっしやー！」
「ん、がんばろ」

二人の目にも気合が入っている。数か月間ぼっかり穴が空いた感じだったが、ようやく心に火が戻ってきたと言ったところだ。

「よかったね。ロイ様喜んでくれて」

仲間たちの喜ぶ姿を見てほっとしていると、ルシヤナがポンと肩に手を置いた。静かにうなずいて窓辺へ歩いていく。

「大事な人……かあ」

窓辺でほおづえを突きながら、シヤニーは空を見上げて吐息のように漏らした。

今でもはつきりと耳で響いているように思えるロイの言葉。その直後に見つめ合ったあの僅かな時間。

なぜ逃げ出してしまったのか、悔しくて下唇を噛む。きつとあれは、気持ちをはつきり伝えてくれたに違いないのに。

(うれしい……。あたしだって……。でも、どうしたらいいの？
ああ、あたしが傭兵じゃなければ……)

傭兵でなければロイとは出会えてすらいなかった。もどかしい。逃げ出したことへの後悔と、あのまま身を預けた後に起こる恐怖と。

気持ちはもう、彼を向いている。けれど、そのまま踏み出して本当にロイを支えることになるのだろうか……。

考えれば、考えるほどに答えが遠のく気がして、漏れ出すのはため息ばかりだった。

サプライズならケーキにして！

「シャニー… どこだ！ 返事をしろ！」

蒼穹にアレンの威勢のいい声が響きわたる。彼はシャニーの名前を叫んではあちこち探し回っていた。

それが聞こえてくるや、シャニーはネコのように髪を逆立てて肩を跳ねあげた。

彼が呼んでいる理由など一つしかない。

食べかけのパンを口にぜんぶ突っ込み、もごもごしながら足をばたつかせていると、遮るものを全てふっ飛ばしてきた声が、後頭部へスコーンとぶち当たった。

「シャニー！ 今日という今日は見せてもらおうぞ、颯閃一刀流！」

なんだかんだと理由をつけて、今までなんとかパスしてきた。

待っていても行くことはないと言われたのか、アレンはついに乗り込んできたらしい。

彼の目は朝から闘志に燃えていて、シャニーの顔はみるみる青くなる。

(ぎよえ〜！ 今日とは断る理由がないや。どーしよ)

フェレに来てから毎日だ。下手すれば非番の日でも、暇なら付き合えと言いだす始末。

賞金首にでもなった気がして、生きた心地がしない。おまけにもう諦めろと物言いたげな視線を、隣にいるルシャナが送ってくる。

(な、なんでえ?! う、裏切りものおー！)

助けてくれるどころか、腰に手をやってポンとアレンのほうに突き出されてしまった。もう今日は逃げ場がない… やむなく刀を抜く。

「フェレ第一騎兵隊アレン！ 推して参る!!」

まるで恋人でも追いかけて来たかのような熱意だ。

しかたがない… 握った刀を脇に構えて迎撃態勢をとる。そのときだ、視界の端になにか映った。本能的に察して振りむく。

「あ、ちよつと待って！」

やはり間違いはなかった。ロイが中庭へと続く廊下を歩いてき

た。ちょうど彼と話したかったところ。

ぱつと顔が明るくなつた彼女は大きな声で呼ぶ。

「お〜い！ ロ〜イ！——?!」

太刀を下ろしてロイに手を振った瞬間だった。ロイの目がこれでもかと思開いたと思うと、雪崩かと間違うほどの轟音が背後を突つ切つて髪がなびく。

アレンには待つてくれと頼んだはずだったが、馬は急には止まれない。槍こそ退いてくれたようだが、凄まじい火の玉をぶちかまされて魂が抜けかけた。

表情が抜けて口が逆三角になるシャニーに、さすがのロイも苦笑いしている。

「おはよっロイ！ マリナスさんもおはようございます！」

気を取りなおしてロイのもとへと駆ける。今日もマリナスが装備の一部かのように彼にかじりついている。これは、むしろ都合だ。

元気よく挨拶してみると、今日のマリナスは昨日のように顔を真っ赤にすることはなかった。

「朝から騒がしい娘じゃな。ロイ様はお忙しいのじゃ。仕事に戻れ」

相変わらず歓迎されているわけではなさそうだが、これくらいなら彼はふつうと言えるだろう。昨日に比べたら明らかに軟化している。

勇気をだして正解だった。そして、今日も勇気を握つてこの場に立っている。

ひとつ大きく息を吸い込むと、シャニーはニコツとしてロイの手をとった。

「その仕事のこと、ロイに相談があつて」

「へえ、どんなのだい？」

時計とスケジュール帳の間で、視線を振り子のように行ったり来たりさせてジリジリするマリナスをよそに、ロイはシャニーのうれしそうな顔に釘づけ。

「前に話した企画の話。いろいろ報告したいから時間もらえないかなつて」

天馬騎士団では、最初の企画はデカい花火を打ち上げた。

このリキアでも、同じように最初が肝心と気合を入れてきたつもりだ。まだ深く市民の声を掘り下げたわけではないけれど、彼らの声とリキアの状態と……部隊のみんなで暇な夜もぜんぶ使って、この一週間企画に明けくれてきた。

「もうかい？ それは楽しみだ。マリナスも一緒にどうだい？」

マリナスに認めてもらうにはちようど良い。ロイも同じことを考えたらしく、視線はスケジュール帳に目を下ろしているマリナスへ向く。

驚いて顔を上げたマリナスは、あらためてシャニーの顔をのぞき込みはじめた。あまりにじろじろされて、彼女は思わず口をへの字に曲げて後ろに退く。

「そうですね。イリアの国力向上活動。少し楽しみですわい」

マリナスはもう一度シャニーをちろつと一瞥した。

眼鏡にかなわなかったら、ロイへの態度を改めろとも言いたげな眼差しだ。どこか、あまり期待していないような気持ちが滲んでいるようにさえ映る。

（望むところだよ。マリナスさんをぎやふんと言わせてやるんだから！）

ニコツと返したが、内心ではゴツと火がついた。この人を抑えれば今後は大分やりやすいはず。

イリアでもそうだった。国力向上と聞いて眉間にしわを寄せる人が多かったし、会議で報告しても皆ほかんとするばかり。そうした反応は慣れている。

ロイたちと別れたシャニーは、ぐつと拳を握って仲間のもとへと歩き出す。アレンが待っていることなど、すっかり忘れていた。



あわただしい昼下がりが。いつもならお腹いっぱいランチを食べ、温かくていいにおいの青草ベッドでごろごろする時間だ。

でも、今日は皆でシャニーの部屋に集まっていた。がさがさと資料をあさって仕上げに余念がない。

「シャニー、計算根拠は頭にたたき込んだ？」

ルシヤナが横目で突っついてくるが、シャニーは資料へ顔を突っこんで返事できずにいた。

最後のチェックで忙しい。穴が空くくらい読んだし、今日は朝からルシヤナやレンに説明をなんども受けた。もう、資料を見なくなつて全部言えるくらいだ。

「バッチリ！……あ、でももう一回お願い」

これ以上は頑張れない。そう思つて顔をあげたはずだったが、ルシヤナを見たら急に不安になつてきた。何度聞いても、どうにも頭がコンランする。

「つたく、しょうがないヤツ。数字に弱すぎて困つたもんだよ」

「そんな目で見ないでよお。人間には能力つてのがあるんだしさー」

「やかましい、自分で言わない。ほら、レン、もう一度」

愚痴をこぼしながらルシヤナはレンを手まねきして、二人がかりで一から説明しはじめた。

「重要ポイントは線引いた。線とふせんの色、セットね」

レンのほそくて雪のように白い指が、企画書と参考資料を行き来する。

「ありがとレン！ 仕事ごまやかで助かる！」

アイデアを考えるのは大好きだし得意だけれど、計算やこうした資料作りはひっぱられる側。小さな口で優しく微笑みかけてくれるレンが女神に映った。

「しつかりやってよ。あんたの説明にかかつてんだから」

「いてて。もうう、分かつてゐるってばー」

その横には、バンと肩をたたく鬼もいてギャップが激しい。

「戻ってきたツスね。この緊張感」

イリアではあたりまえだった日常にミリアもうれしそうだ。

シャニーとミリアで声を深く拾つて、ルシヤナとレンが裏づけを固める。これぞ十八部隊だ。

彼女にうなずいて時計を見下ろす。約束の十分前まで迫っていた。

「よし……第十八部隊長シャニー、推して参る！……なんちゃつて

ね」

部屋いっぱい広がった緊張感を高らかに鼓舞して払って見せたものの、まわりは苦笑いしてノってこない。柄ではないと分かっているが、あからさまな反応は悲しい。

「んじゃ、いつてきまーす! (うまくいきますように!)」

部屋の外まで出て見送ってくれる仲間たちの視線を一身に受け、祈りながらロイの待つ部屋を目指す。

(うわ、部隊長会議よりキンチョーするかも……)

ついに約束の部屋の前までやってきてしまった。

どうやら会合で使われる部屋のように、向こうにも出入り口があるほどの大きさだ。

思わず目をつぶって天井を仰ぐ。心臓が震えて足がガタガタし始めた。

ロイだけではない、マリナスもいる——やるしかないと勢いに任せてドアを開けた。

「天馬隊、シャニー。入ります」

ノックの返事を待つ余裕もなく飛び込んで、先手必勝に始めようと思つた足がガチつと固まった。

(へっ……? ナニコレ——ッ)

目が点になったまま時が止まる。

なにか様子がおかしい。入る部屋を間違えたのかと思つた。ロイの姿を探そうと部屋を見渡したら、一齐に視線が注がれたのだ。

(ぎよ、ぎよえー……?! ど、どういうこと!?)

その場でフリーズして動けなくなつてしまった。

マリナスどころではない。ランスも、アレンも……何十人といろではないか。城の主要人物があらかた集結しているらしく、ずんと部屋の奥まで伸びる長机のあちこちから注目を浴びる。

天馬騎士を見たことがない者たちは興味津々の視線を注いで、なにが始まるのかと好奇に目を輝かせている。

「じゃあシャニー、ぜひ始めてくれよ」

期待している。そうロイの目は言ってくれている。まわりの反応

も上々で掴みはバツチリといったところ。

でも、壇へむかう足どりは油が切れた蝶番のようにギシギシと固まりきっている。悪い汗がトバドバ出てくる気がして、今にも頭に穴が開いて意識が飛んで行きそうだ。

（ロイ、聞いてないよお。とんだサプライズじゃん！）

サプライズはするのでもされるのでも好きだが、これはさすがにヒドい。彼はさらつと言ってくれたが、てっきりロイとマリナスだけが相手だと思っていたのに。

あらためて壇上から部屋を見渡す。……知らない顔もいっぱいだ。最後にロイと視線が合って困惑を向けると、彼はウインクで返してきた。してやったりと言わんばかりだ。

（こうなったらやるだけだ！ イリア騎士団の名誉にかけて、絶対成功させてやる！）

十八部隊のリーダーとして、いやイリアの代表として今ここに立っている。このリキアへ来たのも左遷なんかではない。国を背負って今ここにいるのだと、自らを奮い立たせて心の中で剣を抜く。抜いたら、もうここは戦場だ。

青焰を瞳に燃やして目つきの変わった彼女は、最初こそ舌を噛みかみで歯切れが悪かったが、次第に言葉に熱を帯び、気炎万丈と語りだした。

（よしっ、イイ感じー！）

まずはノウハウがあるものから。水路の建設、鐵路設置。リキアの地理も交えて説明していくとランスがうなずいているのが見えた。

「……以上です。報告を終わります」

開始して一時間半が経った会議室で、シャニーは掠れぎみの声で最後を締めくくりながら頭を下げた。

静まり返る部屋に、あのとかが脳裏をよぎる。部隊長会議で初めて報告したときの、誰にも理解されなかったあの沈黙が。

でも、ふいに手を叩く音が聞こえてきて、頭を下げたまま、おそるおそる前髪の後ろから見てみる。

「……見事すぎて言葉が出ないよ、シャニー」

ロイの称賛は周りを巻きこんで、割れんばかりの拍手となって押し寄せてきた。

それに押し上げられるように頭を上げたシャニーの顔に、ようやくホツとした笑みが浮かぶ。

ロイは今も拍手を止めず、とても嬉しそうな顔をしている。これだけでも、やってよかったと思っていたら、彼は隣に目をやった。

「マリナス、どうだい？ なにか意見は。ものの捉え方は新鮮だし、僕には思いつかない切り口だったように感じたけど」

造詣が深そうなマリナスは、顎に手を添えながらチラつと睨むような視線を浴びてきた。視線が合つてドキッと背筋が伸びる。まるでイドウヴァを相手にしているような緊張感は久しぶりだ。

でも、計算機を持ったマリナスの手はだらんとしたまま。

「ふむ……。まずまずリキアを勉強しておる感じですね。ちと、我々だけで動かすには規模が大きい気がします」

もう一度マリナスは視線を合わせてきた。けれど、その眼差しは会議前とはまるで違うものに見える。もつと目を三角にしてあれこれ言われるかと思つたのに、なんだか拍子抜け。

（マリナスさんが小言しなかつた！ ヤツタね！）

でも、その意味が分かるとうわつと喜びが胸に広がった。彼に小言をされなかつたのは人生で初めてかもしれない。

「アレンやランスはどう思う？」

ロイは、今度は後ろを振り向いた。直々に指名され、二人は顔を見合わせて頷いている。

いつもはあんなにも稽古、稽古と騒がしい熱血漢も、この場ではまるでキリツと別人のようだ。

「民のためになりそうですし、俺は賛成です。よくこんな話を拾ってきたな、凄いじゃないか！」

やっぱりアレンは部屋の中だろうがお構いなしか。大声を張り上げる彼は、まるで自分のことのように嬉しそうだ。

「えへへ……。ちよつとは貢献できたかな？」

稽古でも一本槍な彼だが、褒め方も本当にストレートだ。あまりに真つすぎすぎる言葉がズドンと心を揺さぶる。頭を搔いて照れていると、ランスが静かに口を開いた。

「リキアの地理、事情、そして民の想い、それをまとめて企画する。なるほど、さすがイリアの精鋭部隊だ」

一ヶ月前に貸してもらった全24巻の書。それを熟読した甲斐があった。あの本がなければ今日の発表はできなかった。

感謝をニコニコで返すとランスは視線だけ合わせて満足げにうなずき、ロイへ頭を下げた。

「彼女の貢献は大きく、私は異論ございません。ロイ様のご決断のままに」

(ランスさん……ありがとう)

最初は厳しい人だと思っただし、思ったとおり厳しい一面もある。だけど、騎士として憧れる人となった彼に認めてもらえたと思うと、もう喜びを隠さずにはいられなかった。

思わず手を結んで漏らさないように唇を噛んでいると、ロイが静かにうなずくのが見えてくる。

「マリナスの言うとおりに、これはフェレだけの話じゃない。リキア同盟会議にかけたいと思う」

(あわわ……?! 何だか大事になっちゃったよ!)

それを聞いたシャニーは目を白黒させていた。

リキア同盟会議——それはこの広大なリキアを治める諸侯が集まる、リキアで一番重要な会議のはずだ。

そこまでのつもりではなかった。ロイのために頑張ろうと思っただけだったのに。

「シャニー、来週のオステイアでの会議に同行してくれ。君の力が必要だ」

指名されて固まった。リキアの政治に首を突っ込むつもりは無かったのに、大変なことになってきた。最初はデカい花火を打ち上げようと頑張ったが、あまりにデカくなりすぎてしまった気がする。

(あたしの力が必要……。ロイがそう言ってくれるなら)

いま、何のためにここにいるか考えたら、うろたえてはダメだ。これこそが自分なりのロイの支え方。それを彼だけでなく、この場にいる多くに認めてもらえたなら、迷うことなんかない。

その決意を胸に、ぱつと敬礼してありったけ明るく声を響かせた。

「はっ、はい！ ロイ様の、リキアのためなら喜んで！」



戦場を後にしたシャニーは、中庭へと続く道をロイと歩いていた。会議の成功もあつてその足どりは軽く、緊張から解放されてふんふんと風にうたう。

「えへへ！ ロイ、あたし達の企画、どんなもんよ！」

褒めて欲しくてしかたない。あの場でもロイは十分褒めてくれたが、もつと素直な言葉が欲しい。

ところが、ロイは笑いながら信じられないことをさらつと口にした。

「うん、0点かな」

「そりやそ……へっ？」

100点を期待していたシャニーは、一瞬なにを言われたか分からずに眉を下げ、げつと口元を引きつらせた。

「えー?! そんな、ひどいよお！ あんなに褒めてくれてたじゃん！」
0点なんか村の学問所でもとつたことはない。小走りして彼の前に立ちはだかると、両手にグーをつくつてブーブーやってみた。

「だって、最後に様、付けただろ？ あれがマイナス1000点だよ」
彼の要求に目が点になる。

あんな中で呼び捨てなんか、なにが起こるか想像しただけでゾツとする。騎士団の中では顔を覚えてもらえたとは言え、まだまだ城の関係者のほとんどを知らないと言つてもいいのに。

「ムチャ言わないでよお！ ってか、大事なのそこ?!」

「ああ、僕にとつては企画と同じくらい大事なことだ」

「ひどいよー、あんなにがんばったのにさー！」

ちゃんと企画を見て欲しかったのだが、ロイはあっさりと返してくる。

どうやらロイの口ぶりからして、本題がそこにあつたとは思えない気がしてきた。前から言っているじゃないか——とでも言いたげな眼差しを向けられて、眉をひそめて上目遣いに口を尖らせる。

(めちやくちや緊張したのに……)

なんだか、言われるばかりでは辛抱できなくなってきた。

「それにさー！　びっくりだったよ、全員集合だったし！　心臓がボンっていくかと思っただじゃん！」

ぶーつと膨れたままロイの胸をぽんと突く。

言ってくれば心の準備だつてできたのに。部屋に入った時は倒れないようにするので精いっぱい。頭に入れてきたはずのルシヤナたちの声は、すっかり吹き飛んでしまった。

なのに、それを言ったらロイは声をあげて笑い出した。

「皆に聞いてもらった方が良くはなつて。シャニーもそのくらいのつもりで挑んだんだろ？」

「ハードル上げるね……」

思惑どおりになつたからだろうか、ロイは満足そう。

もちろん、それを聞かされてげつそりして見せた。いきなり戦場に一人で放り込まれたようなものだ。しっかり準備してくれた部隊の皆に感謝するしかない。

「はは、企画は予想以上だったよ。100点……いや、1000点あげたい」

一転、ロイは笑いながら背を擦って褒めてくれた。どうにもおもちゃにされている。

「ホント?!　やったあ!!」

それでも、やっぱり声をあげてしまう。

一番聞きたかつた言葉を聞けて、気づけば飛んで跳ねて喜んでいい。ロイに褒められたらそれだけで十分だった。

「同盟会議にかける前に父上にも報告したい。一緒に説明してくれるよね？」

驚きと喜びで目がはじけそう。

ロイの父といえ、リキア一の騎士と誉れ高い人のはずだ。ランス

からの話でしか聞いたことはないけれど、どんな立派な人なのだろうとワクワクする。

そんな偉大な人にも喜んでもらえるだろうか……。

何か、傭兵の自分がそんな場に立てるなんて、やはり今も夢の中にいるみたいないな不思議な気持ち。

「もちろんだよ。ロイのためなら何だってするよ！」

この前まで仕事が無いと言って、長い一日を引きずって歩いていたのが嘘のようだった。



猛ダツシユで帰ってきた。扉を勢いのまま吹きとぼして部屋に流れ込んだシャニーは、身構えていた仲間たちにバンザイしてみせた。

「大成功！」

ロイヤランスたちの反応に、マリナスが黙りこんだ顔。身振り手振り、顔中の笑顔で伝え、声をあげてはしゃぐ。

「ひやつほーい！ がんばった甲斐があつたツス！ 1000点なんてすげー！」

ミリアが真っ先にシャニーの突きあげた手にハイタッチして、抱き合って喜びだした。

「ね、もっと苦戦すると思った」

外国だから完全なゼロ視点でみられる。厳しい意見を浴びるだろうと覚悟していた。うれしい反面、こんなにトントんと進んでシャニーは不思議な気持ちだった。

むしろ、故郷で身内のはずの天馬騎士団にいた時の方が戦っていた気さえする。

あまりにあっさりと認めてもらえて、なんだか違和感すら湧きあがる。

「お父さんに報告なんて順調じゃん。よかったね。ロイ様もやるなあ」

白い歯を見せるルシヤナにバンバンと背中を叩かれて、そんな複雑な気持ちをはじけ飛んでいく。目が真ん丸になったまま、その場に突

き刺さって動けなくなった。

(え?! ほっ、報告ってそっち?!)

リキア同盟会議で頭がいっぱいになって、そこまで考えもしなかった。

何だか力が抜けて、ずるつと肩が落ちる。今にもシヨルダーガードが滑り落ちそうだ。

見上げたらニヤニヤするルシヤナの顔とかち合った。どくどくと頭に血が突きあがってきて破裂しそう。

「ル、ルシヤナ! そんなんじゃないよ。だいたい、あたしはっ——」
手を放した風船のように、勢いへ任せて叫ぼうとするのを、ルシヤナの手が待っていましたと栓をしてきた。

「あんたさ、もっと自分の気持ちを大事にしなよ。あれこれ考えすぎだっつて」

「うん……そうだね」

なぜだ——ルシヤナはそう言いたげにのぞき込んでくる。それでも、視線を逸らすしかできなかった。

想いは、きつと伝わる

「ロイ様、お急ぎください！ もう時間がありませんぞ！」
朝からなにやら騒がしい声が聞こえてくる。

それがマリナスだとわかるより先に、回廊のむこうにつるつる頭が見えてきた。早口になにかを訴える彼の視線は正面を向いていない。
(あはっ、いたいたー！)

彼の横にはロイがおり、シャニーは花に惹かれるように駆けだした。

マリナスにガーガーやられ、時計を見下ろすロイの顔には半分諦めが滲んでいる。なんだか忙しそう。声をかけるだけにしておいた方がいいかもしれない。

「ロイ、おはよ！ どこかにお出かけ？」

「おっ。おはよう、シャニー」

ロイは手をあげてこつちに歩いてくる。なのに、初老の文官とは思えない身のこなしで彼の前に立ちはだかったマリナスが、道を空けると手で払ってきた。

「こりゃー！ ロイ様の邪魔を——」

「今から急いでオステイアに行かなきゃいけないんだ」

それでも、ロイはお構いなしにマリナスの横を抜けてきた。

「珍しいね。そんなに慌てるの」

「急な来客が重なってしまっただけ」

せつかく朝から顔を合わせられたのに、喋っただけで時間はさそうだ。ジリジリと時計を見下ろすマリナスの視線がずっと突いてくる。

「たいへんそうだなあ。……そうだよ。ロイは忙しいもんね」

ロイは手を振りながら早歩きに庭を抜けていく。いつてらっしゃいも言えないまま、彼らの残した風に置いてきぼりにされてしまった。

「そうだー！」

また今度にしようか……振り向きかけたとき、ピンとひらめいて指

を弾いた。手に持った袋をぎゅつと握りなおし、ビュンと駆けだして後を追う。

「ねえ！ そんなに急いでるなら乗せていこうか？」

「その手があつたね！」

ポンと手を打ったロイに、ニツと笑ってみせて親指を立てる。

天馬で飛んでいけば、現地でゆっくりする余裕さえできるはず。

さっそくロイをぐいぐい引っ張ろうしたら、背後から槍で突かれたかのような大声が飛んできた。

「ロイ様、いけませんぞ！ 危険すぎます。この娘が落馬したらどうするのですか！」

こいつならやかしかねない——マリナスの目はまるで信用してない。頬を膨らせて目を三角しながらシャニーは地団太を踏む。

「ムウー！ 上級天馬騎士の腕をナメてもらっちゃ困るよ！」

天馬騎士団でも馬術で後れを取ったことは一度だってないのに。それでもマリナスの視線は変わらない。ダンと地を踏みつけて肩を怒らせると、ムツと見せつけて彼へにじり寄る。

しばらく睨み合いが続く。ついにロイが苦笑いしながらなだめ始めた。

「マリナス、気遣ってくれてありがとう。君たちも急いで来てくれ」

（へへーん、見たか！ 見たか！）

ニコっとしてみせたら、マリナスは鼻からため息して呆れ顔をするだけ。ぐうの音も出ないに違いない。

そのままロイの手を引いて厩舎へ向かい、青空へ天馬で飛び出して一気に西の空をめざす。

今日もリキアの空は頬をなぞる風が優しい。天馬で飛ぶとふんわり包まれるようで、思わず目を閉じて全身に陽と風を浴びる。

「いつもすまない」

リラックスしていると、後ろからふいにロイの声がした。

「お安い御用だよ！ あたしにできるなら、なんでもしちゃうよー」

二人きりになれるこの時間は大好きだった。忙しくて遊びに行けなくても、お喋りしながら過ごせるデートのようなもの。

本当はゆつくり楽しみたいけれど、今日は大特急だ。

ふんふんと鼻歌をうたつて、コンパスを見ながら方向を調整していたときだった。

「なら、このまま側にいてくれると嬉しいかな」

ふいにかけられた言葉に、ドキつと胸が破裂しそうになった。今にも目が飛び出しそうでドギマギして乾いてくる。

(あたしだって……傍にいられるなら……)

——シャニーは大事な人

最近そう言ってくれたばかり。かけられた言葉の意味が分からないはずがない。

もし、それが許されたなら……ずっと憧れてきた夢だ。

今は空の上。二人きりの誰にも邪魔されない時間……今なら、なにも気にしなくていい。恐怖は湧いてこなかった。

ごくりと息を呑むと、前を向いて手綱をぎゅつと握りなおした。

「傍にいるし……今ならどこにも行かないよ」

今なら許されるかもしれない。そつと座りなおして、体をロイへ近づけた。

(——ツ!!)

彼は躊躇う感じもなく静かに、そして、しっかり腕を回してきた。肩が触れてゾクつと緊張が走る。前だけを見つめて、為すがままにされていた。

(いい匂い……)

背中を包む温かい感触が、こわばった体を優しく解いてくれる。横を見たら、ロイの横顔が世界中に映って心がパチンと弾けてしまった。

ずっと欲しかった温もりに包まれ、まるでロイの中を飛んでいるような気分。高度を上げる。今は、誰にも邪魔されたくない。

(このままずっと飛んでいけたら……)

しばらく無言で飛ぶ。なにも要らない。こうしていられる時間が続けば、ただそれでよかった。

夢だった、憧れの人の温もり。触れられただけで心が溶けてしまい

そんな時間。今だけ許された特別なものだと思うと、ますます愛おしくなって強く包む腕にそつと手をやる。

「そうだ、なにか用があったんじゃないのか？」

現実突然やってきて引き戻されてしまった。見えないように前を向いてぶうつと頬を膨らせる。

自分から誘っておいてワガママだと知っていても、今は仕事の話はしたくなかった。出来ればずっと、味わったことのない幸福感の中に浮かんでいたかったのに。

それでも、仕事は仕事だし、傭兵に変わりない。甘える心にそう気合を入れる。もう十分、許されないはずの幸せを味わったはずだ。

「あのね、また報告したい企画がいっぱいあるんだ。時間欲しいなつて」

「そうか。今週は日中ずっと埋まってるから……今日の夜じゃダメかい？ 時間外になってしまっうけど」

「オツケー！ へーきだよ。夜、別にするこたないし」

夜なんて本を読むか、仲間とつるんで夕飯やトランプにダーツくらいしかない。むしろロイの傍に行ってお喋りする口実ができて嬉しくらいだった。

意地悪すぎる。楽しい時間だけ倍のスピードで過ぎているのかと思っうほど。

オステイアまであつたかかつたなあ……間に到着してしまい、ロイはもうあんなに遠くから手を振っている。巨大な施設に吸い込まれていくロイに手を振り返した。

「ロイ……あつたかかつたなあ……」

彼の姿がすっかり見えなくなると、ふいに切なくなつて自身に腕を巻き付ける。

思い出されるあの感触。優しくも、力強く抱きしめてくれたあの感触が忘れられなかった。

(いつでもくつつけたらいいのなあ……)

そこまで考えて、目の前の光景を見上げる。

会議へ向かう人の流れは貴族だらけだ。そこにポツンと白の騎士が一人。短い白昼夢だった。

ふと、鞆を見下ろす。朝から用意していた袋も、結局渡せないまま。俯いた勢いに任せて気持ちをぐっと飲み込み、来たついでと連絡所へ向かった。



ほおづえを突いて、シャニーは部屋から正門あたりを見つめていた。

もう陽が沈んでからずっと、ここで置物のように固まっている。ランプに明かりを入れもせず、真っ暗になってもそのまま。

どれだけそうしていただろう、麓から灯が上がって来るのが見えてきた。

この時をどれだけ待ちわびたことだろう。机に置いていた袋をばつと掴みとって部屋を飛び出した。

「悪いね、シャニー。こんな時間まで待たせちゃって」

部屋へと戻ってきたロイは、さつそく優しい言葉をかけてくれた。きつと今日も大変な会合をこなして、ずっと彼の方が忙しかったに違いないのに。

時計を見上げればもう21時を超えている。

「ううん。ロイ元気ないよ？ マッサージでもしようか？ あたし得意だよ！」

ロイがらしくなく暗い顔をしているのが気になっていた。

少しでも癒してあげようと、鎧を外して身軽になった。疲れて帰って来るユーノ達にずっとしてきたおかげで、マッサージには自信があるというもの。

「じゃあ、ちよつとだけお願いしようかな」

「まかせてー！」

ソファに座ったロイの後ろから肩に手を伸ばす。

自分と一つしか年は違わないのに、ロイは世界を相手に戦っている。そう思うと自然にマッサージにも熱が入る。気持ちが良いのか、

ロイはふうつとしばらく上を向いていた。

しばらくして、ロイはようやく気付いてくれたようだ。テーブルに置かれた焼き菓子へ手を伸ばしたのが見えて、ゴクツと固唾をのむ。

素朴で不揃いなそれは、侍女が用意するような見た目もきれいな品とは、別世界のものに見えたかもしれない。彼が喜んでくれるかドキドキするが、彼は二つ、三つと口に運んでいる。

「このクツキー、シャニーが焼いたの？」

「うん。イリアじゃみんな、全部作るよ。外、雪だしね」

いつ雪で外に出られなくなるか分からないイリアでは、保存食を含め自炊が自然に染みつく。なにより、買っていたら高くついて痛いというのが本音だ。

「とてもおいしいよ。全部食べちゃっていいかな？」

ロイはそう言つて、ポイポイ口に放り込む手が止まらない。心の中でガツツポーズしながら、自然に声のトーンが上がった。

「ロイのために焼いてきたんだよ。好きに食べちゃってー」

口に運ぶペースが上がった気がする。彼の肩を揉みながら、その横顔を見つめているだけで幸せだった。きつと疲れて帰ってくる。そう思つて昨日の夜に焼いたものだ。

（また焼いてあげよつと。今度はもつとたくさん作らなきゃ）

朝渡して、疲れたときに摘まんでもらおうと思つたが、やっぱり目の前で食べてくれた方が嬉しい。自分にできることはこんなくらいだが、それで喜んでもらえて心は小躍りしていた。

「どう？ 気持ちいい？」

なにも食わずに帰ってきたのだろうか。あれだけ山盛りだった皿はもう空っぽ。戻ってきた静かな時間の中で、ソファにうつ伏せになったロイにマツサージを施していく。

あまりに静かすぎて、のぞき込んだらロイは目をつぶっていた。もしかして寝ているのか……少し力を込めてみる。跳ね返してくる彼の背中が、やはりがちりちりしていて姉とは違う。

「ああ……。シャニーと一緒にいるだけで疲れがとれるよ」

心地よさそうな声でかけられた癒しの言葉は、心を撫でるようで静

かに目をとじて何度も繰り返す。どんどん心がふんわり浮かんで、霞が晴れていくような想いに自身の疲れも解けていくよう。

そのまま、他愛もない会話を途切れ途切れに過ごす。

(このままお喋りしたいなあ……)

こんな静かでないにもない時間のはずなのに、嬉しくて楽しくて仕方がない。ずっとロイと一緒にいたい……その気持ちだが、どんどん大きくなってくる。

ふと時計に目をやったのが間違いだった。もう一時間過ぎていて、目がギンとなって飛びあがる。

「ロイ、その格好のままでもいいからさ、報告聞いて欲しいな」

ここには仕事で来た。遊びじゃないと頭の中で自分をポカリと叱る。

鞆から資料を取り出している間に、ロイは身を起こしていた。彼の隣に身を置いて報告を始めると、彼はじっと耳を傾け、真剣な眼差しで目を見て話を聞いてくれる。

なんだか不思議な気持ちだ。提案を通すために戦うと言うより、もっと聞いて欲しくて吸い込まれそうになる。

「今回はどれもフェレの中の案件なんだね」

「前はスペシャルバージョン！ いつもはこうやって、小さなことの積み重ねだよ」

イリアでやっていたことをふと思い出した。

毎回、毎回、あれもこれも報告しては、小さい案件など村人たちで解決してもらえと、イドウヴァから却下を喰らってきた。通せなくて謝りに行くときの悔しさや無力感が蘇ってくる。

「小さいけど、小さいことが出来なきゃ、大きなことって成功しないと思うんだ」

いつの間にか、イドウヴァに対するように、先手を取って想いが口を突いて出ていた。

小さな目標を一つずつクリアしてきて今がある。それはイリアで噛みしめてきた。あの嘆願書はその積み重ねの象徴と言えるだろう。彼らの想いさえ踏みにじられた気がして、今でも団長の顔を思い出す

とギリつと拳が悲鳴を上げる。

「全然小さくないよ。きつと皆、喜ぶはずだ」

どの案を優先して守ろうか……そう無意識に考え始めていたところへかけられた言葉は、考えもしていないものだった。驚きを隠せずロイを見つめる。

「えー！　じゃあ」

「ああ、全部やろうよ」

ロイは笑みを浮かべて力強くうなずいた。

「ありがとう、シャニーがいてくれて本当に良かった」

民の言葉に、大きいも小さいもない。彼らにとってはどれも大きいはずで、託してくれた想いはどれも大事だ。それをロイは分かってくれたみたいで、とても嬉しそう。

(こんなに喜んでもらえたの……初めてだ……)

資質を疑う——そうイドウヴァに言われた記憶が蘇る。

企画がみんな通るなんて、今まで記憶にない。悔しい思いもいつぱいしてきたけれど、心の底から温かい気持ち湧き上がる。

なにより、彼に言ってもらえたのだ。いてくれて良かった……なんと心に響く言葉だろうか。

「えへへっ、これからもがんばるね！」

これからリキアでたくさん軌跡を残そう。そう誓ってロイに笑顔を見せたつもりだったのだが、ロイは驚いて眉を下げている。

「どうしたんだ、シャニー。なんで泣くんだけ？」

彼に聞かれて初めて気づいた。目元に指を当てて睨ったら、どんどんあふれてきた。

「みんなと喋ってるとき、なんとかしてあげたいって思うんだ。けどイリアにいたときは、お金が無いつてかなり却下されてきたから」
今でも部隊長会議を思い出す。

皆の気持ちを一身に背負って戦場に赴き、抗いようなない力に叩き伏せられる。いつも悔しかった。幸せにしてあげたいのに、なにもできない。ずっとその想いを抱いてきた。

ロイが全部認めてくれて、必要だと言ってもらえて……。天国にで

も来たのかと思うほどだった。

「ここでもいっぱい、お話聞かせてもらってるんだ。信じてもらったから、リキアのみんなも助けてあげたい」

信じてくれる人のために戦い、笑顔にしたい。その気持ちはイリアでもリキアでも変わらない。変わらないはずなのに、返ってきた温もりはどうしてこんなに違うのだろう。

「それをロイがこんなに喜んでくれるなんてさ……。うれしくて」
報われた気がして涙が止まらない。

伏し目で見ると、ふいにロイが腕をソファに突いて身を乗り出すのが見え、直後ふわっとした感触が顔を包む。彼はハンカチで目元をなぞってくれていた。

「僕もうれしいさ。民をそこまで熱心に考えてくれて。シャニーを見ていると勇気が湧いてくるよ」

「えへへ。ホント?」

「ああ。今日の会議は散々だったんだ」

珍しい。ロイが上を向いて弱音を口にした。ふうつと溜めこんでいたものを吐きだす姿は風船がしぼむよう。

「いくら復興のためとはいえ、皆にも事情があつてなかなか動けなくてね。ちよつと会議の後はささくれだつてたんだ」

やっぱり、想像以上に大変な立場のようだ。なんとか癒してあげたい……。そう思っていると、ロイは視線を戻して続けた。

「でも、シャニーを見てたら元気が出たよ」

「あたしもね、ロイの傍で仕事ができ、こんなに喜んでもらえて夢みたいだよ! 騎士団の中じゃ……。あんまり喜んでもらえなかつたし」

ロイを勇気づけられるなら、もつと頑張れる気がしてトーンが上がる。

部隊長会議が終わると、燃やした心が全部灰になって動けなくなることも多かつた。それが、ロイが相手だと、ますます希望が燃えてくるのがはつきり分かる。

「それがなぜか分からない。シャニーはもう、無くてはならない存在だよ」

「ホント?!」

ロイは涙をすっかり拭つてくれ、その手はそのまま肩に乗った。憧れの人にこんな風に言われて、あふれる幸せが止まらない。

(ロイにさええそう言ってもらえたら……あたし、もう満足だよ)

どれだけ周りが敵だらけになろうとも、ロイさえ認めてくれれば戦える気がした。憧れの人の役に立ちたい、そう思つて頑張つてきたことを信じてもらえるなら。

それに、右も左も分らないリキアではイリアより孤独になると思つていたのに、むしろ逆だ。リキアの方が味方は多い気さえしてくる。

「大変そうだから、ロイを助けてあげたいって12月に別れてからもずっと思つてたんだ」

過酷なイリアに帰れば、毎日戦いが待っている。あのときは、リキアに行くことはもう出来ないと言つて覚悟を決めていた。

それが今、夢は叶った。もつともつと近くで全部知りたい。そう心がロイを呼ぶ。気づかないうちに心が体を突き抜けていた。

「そう言ってもらえるとうれしい。頼りにしているよ。これからも支えてくれないか?」

気づかないうちに身を乗り出してた。その手にロイがそつと手を重ね、そう言つて迎え入れてくれる。触れる温かい手ざわり。手先が絡んでいるだけなのに全身が炎に包まれるようで、ドキツと心が弾ける。

(ロイが望むなら……あたしは全てを捧げたい)

彼のもとへ行きたい。行けるなら、許されるなら、全てを彼に捧げたい。なのに、今も駆け出そうとする首を、絡んだ鎖が締めつけてくる。

(でも……!)

心はもう、彼だけを見つめていた。もうこんな近いのに、触れているのに。気持ちだけは伝えたい。怖くても、今なら誰もいない。

「うん! ロイを支えるのはあたしの夢だったから、がんばっちゃうよ!」

重なった手を握り返したら視界が揺れた。

（——ッ?!）

気づいたらロイに腕を引き込まれ、抱き寄せられていた。とても……力強い。まるで絡みつく鎖を引き千切り、悪夢の先へと救い出してくれるよう。

（あ……なにか、……近い……）

世界中にロイの顔が真正面に映る。

いつだったかを思い出す。そう……ベルン動乱で、死ぬなどと言って手を取られたときだ。あのときよりもっと近く、そしてなんと優しく、吸い込まれそうな顔をしているのだろう。

（あたしは傭兵……）

一瞬それが脳裏をかすめた。だけど、視界にいっぱい映る憧れの人は何度も呼んでくる。もっと傍で支えてくれと言ってくれている気がする。

（今は………。今は、ロイの中にいたい。……支えてあげたい）
今は視線を逸らしたくない。怖い。けれど、今逃げ出すのはもっと怖い。もう、この前みたいに逃げ出して、廊下で泣くのはイヤだ。

勇気を振り絞って、そっと目を閉じてロイの肩に手を置く。近づくと温もり。二人の鼓動が重なり合おうと互いをたぐり寄せていく。

世界は許さないかもしれない。ならせめて、この夜だけでも誓おう

………

「ロイ様、明日のスケジュールについてですが——！」

そのときだった。

ノックと共にガチャツと扉が開き、資料に目を落としながら入ってくる声。

とんでもない奇襲に髪が針のように逆立ち、心臓が破裂しそうになつて手足をバタバタとフル回転。なんとかロイの胸から飛び出したが勢いあまって蹴つまずき、視界が宙に放り出され——

「——ッ!! ——あ?……ふがあ……」

おでこをテーブルの端にぶつけて目から星が出た。床にぺたんと座ってたまらず呻く。

「ごりや！ お前、こんな時間にぬあにをしとるツ！」

「まあまあマリナス！ 彼女は仕事の報告をしてたんだよ！」

それでもマリナスは容赦してくれない。

おでこを押さえる手を掴み、シャニーを摘まみ出そうとするのを口
イが慌てて止める。二人でマリナスのご機嫌取りに必死だ。

この反応からするに、きつと彼はなにも見ていないはず……それを
信じて、ロイへ手を振りながら部屋を出ていく。彼と目が合うと、二
人の視線はまっすぐ一点を突いていた。

——マリナスのバカ!!

もうダメだあ、おしまいだあ!!

土曜日の朝。もうとつくに空は明るく、小鳥たちが気持ちよく歌いはじめている。

いつもなら日が昇るまえから稽古に読書やら、何かしらやっついていないと死ぬのかと思うくらい動きまわるシャニーが、今日はブランケットにくるまって死んでいた。

「あうあ〜……頭痛いよお……」

そろそろ、セカイの終わりが近づいている。頭がズキズキジーンして、今にもパツカリいきそう。

ベッドの中でモシヤモシヤすると、シーツの柔らかいすべすべの感触が全身をくすぐって痛みが和らぐ気がする。

明日は非番だし……あのとき、そう思ったのが甘かった。昨晚ルシヤナを食事に誘ったら酒場へと引つ張られ、バカ騒ぎに付き合わされてしまったのだ。

彼女に肩を借りて部屋まで戻ってきたあと、記憶がないまま起きたら朝だった。

「シャニー！ 起きないと朝ごはん無くなるよ！」

バンとドアが勢いよく開く音といっしょに、ルシヤナの脅すような声が入り込んでくる。ガンガン揺さぶられ、矢のように頭を突き抜けていった。

「うわっ、なにこれ。いつも汚いけど、脱ぎ散らかしてそのまんま寝たの??」

見てはいけないものを見たみたいなのに、ルシヤナは言いたい放題してくれる。いつもは余計だ。それでも、それなりどこに何かがあるか分かるようにしているつもり。

「うっつ?! ……う~~~~~……」

「カオスな部屋だなあ。ったく、あのくらいでノビるとか情けないぞ」
なにも言い返せずうめいていたら、ルシヤナは鼻息荒くため息をついて出ていった。ドアを閉める音でさえ今は凶器だ。頭にずきーんと響き、胃が突きあげられる。

「ルシヤナめえ……誰のせいでこうなってるのさ……」

相談があつたから声をかけたのだが、あのタイミングはマズかったと後悔しても遅い。泣きごとを漏らすだけで頭がぐわんぐわんする。(くっそお……あの酒豪魔人めえ！)

イリアで初めて50度超の蒸留酒を飲んだ翌日も世界が回ったが、それとはまた別世界が広がっている。

自分の優に倍以上を飲んでいたはずだ。ビールを水のようにガブガブやっていたというのに、ルシヤナはけろっとしていた。

十八部隊の魔人は彼女で間違いない、そうでなければ世の中オカシイ。そう呪っていると、バタバタ走ってくる音が聞こえて、空気が揺れるだけで頭がうずく。

「フヒヒッッ。シャニー、コロツケはウチがもらうつスからね！」

ルンルンとしたミリアの声が駆け抜けていく。ありあり、競争相手が減ってラツキーとでも言いたげな嬉々とした声だ。

気力で上体を起こしてドアに手を伸ばすが、そこまでが精いっぱいだった。

「あああ……あたしのコロツケちゃんがあ……」

これが絶望というものなのだろうか。

朝のコロツケは貴重な楽しみだ。数量限定で食堂にならぶ、きつね色の宝石箱。フェレに来てから欠かさず勝ち取ってきたというのに。

「あ、いたたた……」

ガツクリとベッドに倒れ込んだら、それだけで頭がガラスで出来ているかのようにバラバラになった。

わずかに回復したはずの体力がすっかり切れてしまい、ベッドの中で泳いで全身に伝わるシーツの感触で気を紛らわす。

そのときだった。新たに頭をコンコン釘打ちする音が聞こえてきた。

「んもう……ウルサイなあ……。こんなの拷問だよお」

ドアを誰かがノックしている。軽いはずのその音が、今は横に太鼓でもあるかのように響いてくる。

これ以上やられたら、頭が破裂してもう死んでしまいに違いはない。

やむ無く寝ぼけ眼のまま身を起こし、ぼさぼさの頭に手ぐしを入れながらベッドを立つ。

「ああああー……。分かったから！ もうノックやめて……」
こんな朝くらい静かにして欲しいものだ……。そう心でつぶやいてみて、いつも言われていることだと気づいてむうつとする。

頭は痛いし、ねむいし、ぼやける世界に降り立った。なんだかあちこちに服が脱ぎ散らかしてあつて邪魔だ。するすると避けながらドアへと向かう。

「もう。ミリアー、コロツケ残しといってくれたー？」

どうせミリアーがコロツケを見せびらかしに来たに違いない。ボヤキ半分に目をこすりながら開けたドアの先にいたのは明らかに違つた。

「——ひえっ?!」

「えっ?…?!」

ドアのむこうにいた人物を見上げて、全身が凍りつく。

なんで、こんなところにロイがいるのだろうか。いや、それだけならまだいい。

このスースーする感覚は間違いない。昨日酒場から帰ってきて、そのままベッドに倒れ込んだはず。そのとき着ていた服は今跳び越えてきた……。ガリガリと軋む視線を、硬直するロイから外してむりやり自身へ下す——

「~~~~~」
「ツ!!!」

たまらず力任せにドアを閉めた。

まさか、こんな姿をロイに見られるなんて。こんな夢だ、きつと夢に決まっている。

もう一度自分を見下ろし、そして部屋へ視線をうつす。やっぱり……服はだらしく寝そべっている。

(あ、あれ。そういえばロイは?)

ようやく目が覚めてきて、ロイがいないことに気づく。思いだしてしまった。悲鳴をあげた勢いでロイを突き飛ばしてドアを閉めたのだった。加減なしだった気がする……。これはこれでヤバイ。

おそるおそる、ドアを静かに開けて隙間からのぞいてみる。

「……ッ！」

尻餅をついたらしい。座りこんでいるロイと視線が合ってしまった。頭にジユつと沸騰したものが突きあげてきて、反射的にまたドアを閉めた。

(うわああああああヤバイ、ヤバイヤバイ!! どーしよう?!)

部屋を見わたす……いまさらルシヤナの小言が再生されるが、もはやどうしようもない。

(とにかく、服を着よう!)

それから、収納から仕切り板を引っこ抜き、バタバタ部屋を駆けまわって散乱するものを雪かきするように全部押し込めた。

大きく深呼吸しながら覚悟を決めてドアの前に立つ。今もロイがいるか分からないが、ドアをちよつと開け、手首だけ外に出してゆらゆらさせてみた。



「……………」

気まず過ぎて、どう切りだしていいか分からない。

いちおう、テーブルにお茶を用意はしたが、とてもそんなものに手をつけられる気分ではなかった。

針のむしろに座らされているようで、お互い下をむいて唇を噛んだまま動けない。

なんとか謝らなければ……勇気を絞ってタイミングを計っていたら、先にロイが均衡を破ってくれた。

「えーと、シヤニー、その……すまない」

彼だって、まさかこんなことになるなんて夢にも思っていなかっただろう。ロイの声とは思えないくらい弱い声の弱々しい声が耳をなぞってきて、ますます小さくなるばかり。

ちゃんとノックしてくれた彼に、落ち度なんかあるはずもない。今思えば、ノックする人間など部隊には誰もいないことに、なぜあのとき気づけなかったのか。

「あたしの方こそごめん下さい。まさかロイとは思わなくて……」
とても彼の目を直視して謝れなかった。

「ええと、いつもあんな感じにいるのかい？」

「あ、いやっ、まさかそんな。あはは……」

まさかの質問にとっさに言葉が出てこなくて笑ってごまかした。ロイは明らかに反応に困っているようで、どうにも弁解できそうにない。どんどん背中が丸まっていく。

それでも、どうしても気になる。おそろおそろ、上目遣いにロイの反応を試してみる。

「ねえねえ……、やっぱ………見ちゃった？」

どつちで答えられてもショックだが聞かずにおれない。

ストレートに聞きすぎたかもしれない。ロイ視線を逸らしてしまった。

「う、うん。かなり……」

(うわあ……マジかあ)

がつくりとうな垂れた。あれだけ目の前で晒して、見えないと信じる方に無理があるのは分かっていたが、やっぱり、勘違いなんかではなかった。あのとき、ロイは固まった目でまじまじ見ていた気がしていた。

全身がカアッと燃えてくるのが嫌でも分かって余計に恥ずかしい。

もう、聞かずにはおれなくなって、最後の希望を胸に顔を上げる。

「なに色だった？」

「えっ?!」

もしかしたら、ぼんやりと見ていただけで何も記憶に残っていないかもしれない。

でも、核心を突く質問にロイが珍しく狼狽して見せただけで、もう十分答えは出ていた。

「……えっと、その……」

「はあ……もういいよ(もうダメだ、おしまいだあ……)」

せつかく上げた頭は、ため息といっしょに空気が抜けた風船のようにしぼんでいき、テーブルに崩れてゴンツと音を立てた。

恥ずかしくて頭をあげられない。露出狂とか思われていないだろうか。

(ううう……これからはドアを開ける前は服着てるか確認しなきゃ) 女ばかりの生活でマヒしていたが、当たり前のことだ。それに、普段ならさすがにあんな状態で対応したりはしない。

まさかよりもよって、意識が無くなるまで飲んだ次の日に来るとは。いまさらながらに、服を着ると毎回叱ってくれたルシヤナの顔が思い浮かぶ。

目の前で絶望へ沈んでいると、ふいにロイが頭をつけた。

「本当にごめんツ。でも……その……。き、綺麗だった」

(ああっ……ズルい！)

そんなこと言われたら、それ以上なにも言えないじゃないか。

それにしても……いい言葉の響きだ。おまけに、他でもないロイなら許すしかあるまい。ただ……一度で終わらせてしまうのは、なんだか惜しい。

「ねえねえ、聞こえなかったなー？ もういつかい」

「えっ?!」

「なんて言ったの？ ごめんのあとに？」

「……きれいだったよ」

しばらく頭をテーブルに押し付けたまま余韻を楽しむ。

酒のガンガンと、ロイの言葉にバクバクで頭が破裂しそうだ。いくらその気は無かったとは言え、彼にそんな風に言ってもらえるのも……悪くない。

もう全てに観念してばつと顔を上げた。

「ロイ、お空まで持ってくんだからね、それ！」

ビシツと彼を指さすとカップのお茶を一気に飲みほす。言えるはずも無い……そう言いたげにロイが苦笑いしているがお構いなし。

一杯では足りずに立ちあがって、瓶から水をなみなみ注ぐと喉が鳴るほどがぶ飲みする。大きくふうつと深呼吸しながら天井をあおぐと、ようやく頭が冷えてきた。

「でさ、どーしたの？ わざわざこんなところにさ」

ここはフェレ城でも本館とは離れた別館だ。何かのついでに来るような場所ではない。だから油断していたのだが、こんなところまでロイが足を運んでくれるとは思ってもいなかった。

デートのお誘いか……そう期待していたら、彼はさらっと返してきた。さっきの歯切れの悪さとは別人だ。

「え、どうしてるかなって声を聞きに来てみただけだよ。特別用事があったわけじゃない。この前、夜に報告しに来てくれてから顔を見れていなかったから」

わざわざ会いに来てくれたのかと思うと嬉しい。

でも、ほっこりしかけた心は一転、ロイの視線にドキンと焦って跳ねた。彼は部屋をあちこち見渡しているではないか。

(ヤバイ……どこ見てるんだろ。うわーやめてやめて……)

きれいに片づけておけば良かったとか、いまごろ後悔しても遅い。ちよつとは片付けなさいよ——ルシヤナの説教が頭をゴンゴン叩いてくる。

自分では別に散らかしているつもりはないし、どこに何があるか分かっているからイイと思っているが、やっぱりロイ相手だとそうも言っていられない。

なんだか、騎士団の詰所チェックを思いだす。あれは舌を出して笑っていれば済んだが、今日はワケが違う。

「あはは……どう？ あたしの部屋、イメージと違った？」

洗濯していないモノとか転がっていないだろうか……。さっき脱ぎ散らかしていた軍服はとりあえず洗濯かごに放り込んだしセーフのはず。

横目で部屋をちらちらして、思わず額に手をやりながら内心あちやーと叫ぶ。脱ぎっ放しのジャージがベッドに引っかけてあるのが見えた。

「うん、イメージ通りかな」

「エ？……!?!」

あつさり返されて何も言えなくなった。

(あたしって、そんなガサツに思われてたってコト……?!)

目が泳ぐ。ロイが真つすぐに汚いなんて言うわけがない。今日の自分では、さっぱり否定材料が無くて首が折れる。せめて来るなら来ると言つて欲しかった。

「この部屋に生活感が戻ってきて、嬉しいよ」

「は、はは……。ご、ごめんねー。ちよつと部屋汚いね。片付けるから待ってて」

さりげに、普段とは違つたとアピールしておいたつもりだが、ロイは気づいてくれただろうか。

せつせと片付けする様子を彼は愉しげに見ているが、シャニーは心で泣いていた。

（うへえ……なんか見られちゃいけないもののフルコースつて感じじゃん……）

ロイは幻滅していないだろうか。下着姿に汚部屋……イメージが壊れてしまっていないか、心配で心配でたまらない。

でも、そんなのは杞憂だと思えるほど、席に戻った後は他愛もない雑談が後から後から繋がつて、お互いの明るい笑いが部屋を包んでしばらく止まらなかつた。



それからどのくらいそうしていたのだろう。こんなにくさん二人でお喋りしたのは久しぶりだ。

ようやく雑談も一段落ついたころ、静寂を待っていたかのようにぐうつと妙な音が響いた。思わずお腹を押さえて目が点になる。

「あ、あははは……。朝ごはん食べてなくてさ」

ロイに笑われている。頭が沸騰しても逃げ場なんかあるはずなく、頭に手をやって笑うしかない。朝は食べる気にさえならなかつたが、お喋りをしている間に気分はすっかり晴れていた。

「シャニーがご飯食べないなんて珍しいね」

なんだか、ロイは病人でも見るように心配そうな顔をしだした。

デート先でガツガツやったからか、大食い女のイメージがついてしまったのかもしれない。たしかに、ご飯を抜くことはまずないが、こ

う言うときくらいはちゃんと心配されたい。

「昨日、仲間たちと酒場に行ったの。ビールめっちゃ飲まされて……」

——リキアに来たらビールでしょ！ ほら、仕事でも大事だぞ！

そう言っつて、ルシヤナは空ける度に注いできた。一軒目でもうグロッキーだったのに、お構いなしに二軒目へと引きずられて記憶は途切れ途切れ。

「へえ、どんな話をしてたの？」

「それはねー。ふふっ、ナイショ」

ロイには言えない話だ。さっきまでの部屋みたいにカオスな内容だなんて。

ルシヤナと二人になったあと喋ったことはもつと言えない。目を三角にしてロイへ人さし指を向ける。

「一番はぎ、朝っぱらから事件が起きて空腹が吹っ飛んだからだけだねー」

「それは……その、ごめん」

ぶうつと頬を膨らせて怒って見せると、ロイは一瞬目を点にしたが、すぐに切り返してきた。

「でも、シヤニーだってちゃんと服着てよ」

「む……。はあい」

ド正論すぎた。シヤニー自身もそう思っていた。

もう見られてしまったモノは仕方ないと、開き直ってしまえば楽なものだ。今度はピンといたずら心火がつく。

「あ、そんなこと言っつて、ホントは着て欲しくないんでしょー？」

どんな答えを期待してるの？ ——そう言いたげな顔のまま固まったロイは視線を逸らした。

狙ったとおりの照れ顔に満足して立ち上がり、うんと体を反らす。

「そだ。ロイ、なにか食べてく？ それなら一緒に作るけど」

もう少し待てば食堂で何かにありつけるかもしれないが、まだ一時間近くある。背中とくっつきそうでこれ以上は待ってられない。

作ると言っつたらロイが興味津々の目を向けてきた。

「じゃあ、お願いしようかな」

「そうこなくつちや」

ニツと歯を見せ、トンと胸を叩くとロイの手にタッチして部屋の隅に向かう。まだ買い置き食材がそれなりあつたはずだ。部屋の納戸を開けてがさごそ漁ってみる。

「手伝おうか?」

「いやー! ロイは待っていてくれれば」

待っているのが暇なのか、ロイはマントを外して腕まくりを始めている。

たしかにこの部屋で独りにするのはかわいそうだし、せつかく二人でいられるならそうしたい。

「じゃあさ、厨房まで来て。お喋りしよーよ」

二人で厨房に向かい、シャニーは慣れた様子ですする躍るように鍋や包丁を取り出して料理を始めだす。

その後ろ姿をロイはじっと見ていた。

「なんか、手慣れてるね。料理人みたい」

「自炊でけっこう借りてるからねー」

鼻歌に混じる小気味よい包丁の音は楽器のようだ。テキパキと厨房を動きまわり、エプロンスカートがゆれる。

「これだけ見ていると騎士って思えないよ」

「えへへ。料理人に困ったら呼んでよ。デイク傭兵団の胃袋を支えた腕前を披露するよー!」

お喋りしている内にあつという間に調理は終わって、鍋を持って部屋へと戻る。

「……おいしいよ。城の料理よりずっと」

一口したロイはそれだけ言うと、もぐもぐと次々口に運びはじめた。あつという間にお替りを要求され、空になった皿を受け取ったシャニーは満面の笑みを浮かべながらたつぷりよそう。

「へへっ、ありがと! 話盛りすぎだよ。ただのリゾットじゃん」

「そんなことないって。この前のクッキーもそうだったけど、だいぶ作り慣れているよね」

「そりゃあ、家にいるときは自分で作らないとだしね。見習いするとき

も、ディークさんたちに結構レシピ伝授してもらったんだ」

「へえ、ディークが」

「意外だよね！ ディークさんの『オトコメシ』おいしかったなあ」
食べている間のお喋りが止まらない。ロイはその間にも、早くもまた皿が空っぽになっている。

「うん、これいくらでも食べれそうだよ。まだ、ある？」

「どうぞどうぞ！」

お世辞だとしても嬉しい。これだけモリモリ食べてくれたら作った甲斐があるというもの。鍋にぐるりとお玉を回し、山盛り乗せて差し出す。

一度は一緒に食べ始めたシャニーはすぐスプーンを置き、彼が食べる様子を頬づえしながら眺めて笑って見せた。

「雇ってもらえてなかったら、食堂でお手伝いでもするしかないかって話してたんだよね」

今でこそ笑い話だが、騎士として仕事が無ければ、後はこれくらいしか取り柄なんか無い。それを彼に披露することになるとは不思議な気持ちだ。

「シャニーはいないと困る人だよ。ずっといて欲しいって思ってる」

「えへへ……、そう言ってもらえたら嬉しいな」

ずっとそれが出来たなら……ロイから求められて笑顔を隠せない。今さらながらに、あの夜がもったいなく思えてしかたない。あんなに勇気を振り絞ったというのに。あのままだったら、きつと突き抜けていた。

「そうだね……そうになったら良いんだけどさ」

踏み出せない自分が悔しいが、やっぱり怖い。一度あんな形で無理やり後ろに押し戻されたら、ますます怖くなった。どうしても声が小さくなる。

ふと手に触れた温かい感触。ロイが手を取っていた。

「シャニー、君が何を恐れているのか、僕には分からない」

引き寄せるように手を握られ、じつと見つめて彼は離さない。吸い込まれそうな目に視線を逸らせなくなった。

「けど、立場とか、身分とか、そういうものより大事なことがあると信じてる。君が領いてくれたら、僕はいつまでも待つ」

「ロイ……」

取った手が優しく、でもしつかりと握ってくれる。こんなにも言ってくれるロイを前に、どうして踏み出せないのか……。あの幸せが堪らなく欲しい。あの温もりが忘れられなくて毎日思いだすのに。

今も口を突いて出るのは、勇気の無い言葉。

「へへっ、ありがとね、あたしみたいなの——」

「それは言わない約束だったろ？」

言い終わらないうちに口へ手を当てられた。

ロイの顔はさつきとは違って少し怒っているようにも見える。自分が踏み出せない分、彼は壁を一気に突き崩して踏み込んで来ようとしている。

(こんなにも言ってくれてるのに……あたしは……)

どうしたらいいのか、ますます分からなくなってしまった。

傭兵の自分がこの先へ踏み出す……。どうなってしまうか怖いのだ。ロイも、みんなも、そして自分も。なにが起るのか簡単に想像がつか分、なおさらに。

でも、頭がどれだけ鎖を引っ張っても、もう心だけ飛んで行って千切れてしまいそうだった。

「あたしにも分からないんだ。もう少し……時間欲しい」

さつき咄嗟に出た言葉。それが全てなのだと思っていた。

怖い理由をロイに言ってしまった。でも、もしそれを言っても、きつと彼は良くは思わない。嫌われてしまったら——矛盾していることは分かっている。それをどうすれば良いのか……。踏み出せなかった。

「でも、一年間は一緒だもん」

自分に言い聞かせるように一度は口にしてみる。とは言え、そんなにロイを待たせるわけにはいかない。

「そだ、今度は来るとき決めておいてもらえば、イリア料理をご馳走するよー」

得意料理が変わった料理か……今からいろいろ浮かんでくる。

せめて一緒にいられる時間くらいは、彼を喜ばせてあげたい。その時を、自分の気持ちを伝える時間にしようと思った。

「それは楽しみだ。たしか来週前半はいないんだよね？」

イリア料理は珍しく聞こえたのだろうか、ロイは興味津々。さつそくスケジュール帳へ目を落としている。もちろんびつしり埋まっただけで真っ黒だった。その中に、目立つ赤字で書かれていたのはシャニーの予定だった。

「うん。お姉ちゃんの結婚式に行ってくるから！ ああ、お姉ちゃんのドレス姿楽しみだなあ」

リグレ侯爵家の結婚式だ。一体どんな煌びやかなのか、考えただけで今からうつつりして思わず手を結ぶ。

ずっと苦勞してきた姉が、どんな笑顔を見せてくれるのか楽しみでしかたない。

「じゃあ今月末の休みをお願いしようかな」

「ふふつ、腕によりをかけて頑張っちゃおうよー！」

ずいぶん先だ。その分じっくり考える時間がある。自分だつてこの幸せにずっと浮かんでいたいし、ロイを喜ばせてあげたい。でも……。

独りでは抱える矛盾に答えを出せない気がして、シャニーは勇気を絞ってみることにした。

いちばん大事

エトルリア王国の王都アクレイア。貴族による支配が進むこの大國でも、リグレ侯爵家はかつて魔道軍將を輩出したほどの名門中の名門だ。

その屋敷の広大な中庭が、今日は色と音で溢れかえっていた。

クレインとテイトの結婚式が開かれており、多くの貴族が集結してどちらを見ても煌びやかなもの。

天馬騎士団からも代表が数名送られており、その先頭に立つ団長イドウヴァは、クレインたちに深々頭を下げていた。

「クレイン様。ご結婚おめでとうございます。今後ともよろしくお願ひいたします」

「ありがとうございます。天馬騎士団には、これからも色々世話になると思う。よろしく頼むよ」

まだまだ団長となつて数か月。エトルリアの営業も十分ではないのだろう。直接顔を合わせるこの機会を待っていたようにイドウヴァのフットワークが軽い。

テイトの視線は彼女の動きをずっと追っていた。

「テイト夫人、これからよろしくお願ひしますね」

イドウヴァは深く頭を下げている。

シャニーとは和解した……あんなウソをついておいて、よくも平然としていられるものだ。

「ええ、こちらこそ」

そう返すのでテイトは精一杯だった。妹を悲しませた顔が目の前にある。

こんな喜びの席であまりすべきでないことは分かっている。だけど……。

「イドウヴァさん、ひとつ教えてください」

やはり辛抱できなかつた。

クレインとは接点があつても、自分とは恐らく顔を合わせることはなくなる。この機会を逃したら、もう二度と彼女の口から語らせる

チャンスがない気がして、テイトはクレインの手をしつかりと握りながら真つ直ぐイドウヴァを見据えた。

「なぜ……妹をリキアへ派遣したのですか？」

勇気を絞って聞いたはずなのに、イドウヴァの表情は変わらなかった。彼女はもう一度静かに頭を下げている。

「復興に向けたベンチマーキングです。それ以上は申し訳ありませんが、団外秘ですのうで」

団外秘……もう口を出すなということか。こう言われては、もう手が届かない。イドウヴァも分かってそう言っているに違いない。語ることはこれ以上ないと言わんばかりに、彼女は背をむけて歩きだしている。

（絶対そんなはずがないじゃない……！）

立ち去っていくイドウヴァの背中をじつと見つめ、テイトはぎりつと拳を握っていた。常駐するような話ではない——喉元まで出かけた言葉を必死に飲みこむ。

じつと睨んでいると、クレインに腰を押された。見上げれば、彼は笑顔で首を横に振りながら向こうを指さす。

イドウヴァたちに背をむけ、ここから反対の隅を目指して歩き出した。

◆◆
「あらあら、シャニー。よほどお腹が減っていたのね」

あらかた貴族たちとの挨拶を終えて席に戻ってきたユーノが、横でもぐもぐと元氣よく食べ始めるシャニーに目を綻ばせていた。

「だって、貴族だらけでキンチョーしちゃってさー！」

右を見ても左を見ても貴族、貴族。オールレンジ貴族だ。

傍から見ても高貴なエトルリア貴族は近寄り難いのに、親族として挨拶しなければいけないなんて思ってもいなかった。カチカチになりながらユーノの仕振を見てなんとか乗り切ったけれど、もうお腹はペコペコだ。

「姉さん！ シャニーー！」

そのとき、懐かしい声が聞こえてきた。振り向いたらテイトがクレインとゆつくり歩いてくるのが見え、急いで飲み込んで大きく手を振る。

「わあ……ッ！ お姉ちゃん！ 綺麗だよー！」

見たこともない煌びやかなドレスを身にまとう姉はまるで別人のよう。振舞もどこか品があつて、本当に貴族みたいだ。エトルリア貴族の世界で姉は生きているのだと、いまさら驚きが湧いてくる。

でも、やっぱり姉は姉だった。恥ずかしがつて、いつものように顔を真っ赤にしている。

「クレイン様、おめでとうございます！ お姉ちゃんをお願いします」

クレインに挨拶しながら、彼と視線を合わせてみる。動乱中も一緒にの軍だったらしいけれど、喋ったことは一度もなかった。こんな間近で顔を見るのは初めてだ。

さすが銀の貴公子と呼ばれるだけあってイケメンで、着こなしもバツチリでとにかくカッコイイ。この人なら、姉を幸せにしてくれそうなのがする。

「こ、こらシャニーー！」

なにかイタズラでも仕掛けるとでも思われたのか、姉に肩を叩いて止められた。顔を真っ赤にする姉は、とても幸せそう。

その横から、さっと手が差し込まれた。

「君がシャニーか。うん、こちらこそ、これからよろしく。明るいね、君は」

「えへへ。それほどでもー」

「その年で勲章を賜ったと聞いたから、もっとキツいかと思っただけだよ。よかったよ、優しそうな子で」

クレインは優しそうな笑みを浮かべているが、頭から恥ずかしさが噴き出しそうだった。この人はいったい、自分にどんなイメージをしていたのだろう。そんなイメージを植え付けるのは……一人しかない。

「お姉ちゃん！ あたしのことなんて紹介したの?!」

「わ、私は何もしてないわよ！　ちよつと手がかかるって言っただけで」

「それじゃん！」

つい最近までであった姉妹のやり取りが戻ってきて、クレインが声をあげて笑っている。

ばつが悪くなったのかテイトはピイツと外を向いたが、戻ってきたときの眼差しは怒っているというより不安そうなものだった。

「シャニー、あなたリキアに向向になったって聞いたけど本当なの？」
(お姉ちゃん、知ってたんだ。なんでだろ?)

姉が真顔で聞いてきて目が点になった。テイトには伝えないでいたはずなのに。

こんな祝いの席で姉が見せてくるのは不安げな眼差し。手を取ってにつこりしておいた。

「そんな話、今はやめよーよ！　お姉ちゃんのお話聞かせてよ、テーブルマナー大変でしょ？」

今はせつかくの大事な時間だ。楽しい話をしたかった。答えなかったからか姉の顔に笑みは戻らないが、むりやり話題を変える。

「いえ……別にそのくらいは、特に」
「えー！　じゃあ今度教えてよ！　あとね、あとね！」

あんな難しいことを、姉はそのくらいと軽く言つてのけた。昔からそうだが、姉に聞けば何でも分かる気がする。

そこから口が止まらなくなって、あれもこれもと質問攻めにしてしまふ。

「なんでそんなことを聞くの？」
「えへへ！　ひみつー！」

テイトが首を傾げだした。

ロイとデートして大失敗したなんて言えないが、やっぱり姉は頼りになる。これなら、何かヒントがもらえるかもしれない。同じ悩みをきつと抱いていたに違いない。

「じゃあシャニー、また後でね」
「お姉ちゃん！」

祝いの席のはずが半分以上レクチャーで終わった気がする。姉の後ろ姿を見送っていたが、すぐに駆け出した。

この席でお願いすることではないが、姉ならきつと助けてくれる。振りむいた姉に手を合わせた。

「今日、お時間ももらえない？ 明日でも良いよ！」

きつと何か掴めるはず。でも、今日の遅くまで晩餐会が催されることは知っていた。祈る様な目で姉を見ていたら、彼女は静かな笑みを浮かべてくれた。

「じゃあ、明日部屋に迎えに行くわ。いい？ うろつかないこと。迷子になるわよ！」

「そんなのへーきだよ！ ありがとう、待ってるね！」

妙な心配をする姉に感謝込め、貴族たちの中へと消えていく背中に手を振って見送った。



「だからダメだと言っておいたでしょう」

翌日、シャニーはタイトに連れて来られたカフェで早速叱られていた。

釘を刺されてはいたけれど、どうにも散策してみたくなくて部屋から飛び出してしまったのだ。

「へーきだよ！ と言うか、迷子になったの、お姉ちゃんじゃん」
「ぐっ……」

ちよつとした冒険を楽しんでいたら、タイトに見つかって連れ戻されたはずが、そこから迷子が始まるから不思議だ。

最後はタイトの手を引いて迷路から脱出し、このカフェまで来た。「はあく。やっぱリグレ侯爵家のお屋敷は広かったなあ」

どこを見ても煌びやで魔法のような城を思い出さうつとりしていた。さすがに大国エトルリアの中心貴族か。フェレ城とは全然雰囲気違って、見るもの全てが大発見だった。

「なんだか手馴れてたわね……」

「えっ?! あ、あはは、ソナナコトないよー？」

「普段、何をしてるのか気になるわ」

あからさまに怪しむ目でじろつとされ、慌てて視線を逸らす。ティトは「もうっ」といつものように怒っていたが、ふいに真剣な顔になった。

「シヤニー。あなた、今リキアにいるの？」

「うん。あつ、心配してくれてるの？」

どうして姉がそれを知っているのか、心の中で首をかしげた。心配させるだけだから、敢えて手紙を出さないでおいたはず。

軽く聞き返したつもりだったが、手をとった姉は相変わらず真顔で焦っていて反応に困る。

「当たり前でしょう……。職制表が届いたときは、目の前が真っ暗になったわよ」

（あちやー……。逆に心配させちやったみたい）

心の中で顔をしかめる。まさか、騎士団からタイトに職制表が行っているとは思いつかなかった。これならちゃんと手紙を出しておくのだったと後悔していると、悲しげな声に呼ばれた。

「シヤニー、ごめんなさいね。何だか……。こうなること、分かっていたようなものなのに」

（こんな顔……。して欲しくなかったんだけどな）

また、自分のせいだと思っているのだろうか。

せっかくクレインと一緒にになったのなら、イリアのことで悩まなくていいようにしてあげたい。

しばらく考えてみたが、やっぱりストレートが一番に違いない。姉の幸せを願って心に火をとます。

「お姉ちゃんが謝ることなんかないよ。やったのは……。イドウヴァさんなんだからさ！」

感謝しかないのに、もう心配させたくない。自分だつて上級天馬騎士だ。そう言い聞かせて力強く言いきった。

強く言いすぎたのか、姉は面食らったように口をぽかんとさせている。

「今あたし、幸せだから。心配しなくて大丈夫だよ、お姉ちゃん」

「幸せ？」

そんなはずない——そう言いたげな顔をしている。リキア出向の意図を知っているからに違いない。

だからこそ、だ。その意味を変え、自分たちが新たに作った価値を知ってほしい。

「うん！ リキアのこと、いっぱい勉強できてるんだよね。イリアに持って帰ったらきつと活かすんだ！ それにね……今ロイ様のところにいるの。とつても良くしてもらってさ、毎日すつごく楽しいんだよ」

まるで一度醒めた夢の続きを見ているように濃い日々。最近は貢献できている自信もあって、違う意味でイリアに帰れるのか心配になつてくる。

「そう……。それでね。いろいろ繋がったわ」

ふいにそう言つてテイトは笑つた。

ようやく真顔でなくなつてホツとしていると、彼女から切り出してきた。

「シャニー、何か聞きたいことがあつたのでしよう？」

「おおーう！ そーだつたよ！」

そう問われてポンと手を打つた。久しぶりで色々喋りたい気持ちが押し寄せるのを我慢して、紅茶で一つ喉を潤すと身を乗り出した。

「あのね。お姉ちゃんさ、……クレイン様と結婚を決めたきつかけつて何？」

姉はしつかり者だし、団長という立場だつた。もつと自分より深く広く考えて決断に至つたはず。自分が抱える矛盾を崩すきつかけを与えてくれるかもしれない。

「私は彼を愛していたし、彼から愛してもらっているつて心から思えたから……かしら」

眉が下がつた。あまりにも普通すぎる答えに聞こえる。それだけの理由なら、自分だつてロイのもとに行きたい。

聞きたいのはそういうことではない。

夢から醒めなければ先に進めない。とは言え、醒めたらきつと恐ろ

しいことが起こる。それならいっそ、夢は夢のまま、見るだけでいたほうが良いのではないか。だからと言って、それでは心が千切れてしまう。

唇に手を添え、あれこれ絞ってみても良い言葉は見つからない。単刀直入に切り込んだ。

「傭兵だからって、何か言われることない？」

エトルリアはリキアよりも貴族による支配が強い国と聞く。もし予想通りなら、辛い言葉を浴びているに違いない。

途端にテイトは眉をひそめだした。嫌なことを聞く——というように、困惑したような表情と言うべきか。

「たまにあるわよ」

「ああ……—やっぱり」

それを聞いてしまうと、どうしても顔が凍りつくように引きつってくる。

「クレイン様も悪く言われたりするの？」

真剣に聞いたのに、それを言ったら姉はふつと笑いだしてしまっただけではないか。

なにか変なことを言っただろうか。ぐるぐる考えていると囁きかけるような問いが耳をなぞった。

「二人にとって一番大切なことは何だと思う？ ……あなたに置き換えて考えてみて」

唐突な質問にどう返せばいいか困ってきよんとしてしまう。今の自分は、その答えを求めて彷徨っているというのに。さっそく目を瞑って考えてみる。

(一番大切なこと……そりゃ、ロイを……でも)

傍で支えたいとずっと憧れてきた。それが出来たらどんなに嬉しいかは、今の生活で十分に噛みしめている。それに手を伸ばそうとすると、後ろから首にかかった鎖を引っ張られるのだ。他でもない、自分の声に。

(やっぱり、ロイを貶められるのは嫌だよ。でも、傍に居たい……)

「あなたはロイ様のこと、どうしてあげたいの？」

答えの出ない悩みに飲まれているところへ囁いた問いかけ。思考が別にある心からは、何の遮りもなく真澄だけが零れてきた。

「そりゃ、ずっと支えてあげたいって………って！」

時が止まり、体が石になったみたいに動かなくなった。

これではまるで誘導尋問だ。ロイへの気持ちは、まだルシヤナくらいにしか喋っていないのに。

(ああああー！ あたしのバカー!!)

頭の中をパニックが走り回るように世界が揺れる。目がでんぐり返りそうになるほど、ぎよろぎよろと落ち着かない。

なぜこうも簡単に引つかかるのか。自分で自分を心の中でポカポカやりながら下を向いたら、そのまま固まって動けなくなってしまった。

「正直ね、私も同じように考えたこともあった。私みたいな傭兵のこんなか、忘れてくれたらいいのにな」

もう、全部察しているというのか。姉は槍みたいにドキンとど真ん中を突いてきた。

はっと顔を上げると姉は笑いかけてくれ、回想するように肘をテールに突いて天井を見上げだした。

「やっぱ……お姉ちゃんもそうだったんだ」

相手は世界の英雄でリキアの有名貴族。方や自分はハイエナ呼ばわりの傭兵騎士で、鎧を脱げばただの田舎娘。フェレの人たちはともかく、周りの貴族が何と言うか、考えるまでもないと言えるだろう。

きつと姉も同じだったに違いない………そこまで巡らせたのを聞いていたようだった。

「でも、気づいたの。逃げてるだけだって。彼の愛を、私では受け止め切れないって」

どこか、槍で胸を貫かれたような気持ちになった。守りを失った心にテイトは続ける。

「彼の周りばかりを見て、彼を見つめていなかった。一番大事な彼の気持ち、私は……何も考えていなかった」

「あ………」

首に絡みついてきた悪夢のような問い。返し続けてきた答えからすっぽり抜け落ちていた、抱きしめたいはずの気持ち。言葉にならない声が漏れ、目は震えて止まらない。

「手を伸ばしてくれた彼から一步退いてしまった。彼がどんな気持ちになるのか……考えもせずにね」

考えているか？——姉からそう問うようにじっと見つめられ、もう何も言えなくなった。

(あたし……ロイをずっと無視してきたんだ。ごめん……)

傭兵の自分なんかが相手に、ロイが他の貴族から悪く言われるのは嫌だ——そればかり考えてきた。喜ばせてあげたい。そう考えてきたはずなのに。

思い返せば、ロイはずっと受け止めようとしてくれていた。夢ではなく、夢から醒めてその先へ行こうと。

目の前にずっとあった彼の愛。それを見つめずに、全然違うものばかり見上げて背を向けてきた。自分の声しか聴いていなかったことに気づかされ、心の中で何度も詫びるばかり。

「彼の愛に、今の私の全てで応える。クレインに喜んで欲しい……それが私の一番大切なことだから決めたの。ロイ様もきつと、あなたの身分を気になどされてはいないわよ。だって、『今のあなた』をロイ様は愛してくださっているのよ」

びくつと瞳が震えた。不思議で堪らなかった。姉はロイと仕事以外で喋ったことなど無いはずだ。なのに、なぜ分かるのか。心当たりならいっぱいあるし、ロイにはハッキリと言われている。傭兵としてではなく、シャニーとして見ていると。

「今の……あたしかあ」

ロイの立場になって考えてみた。大事にしているものを、傭兵なんかと言って貶したらどんな気持ちになるだろうか……。

(今のあたしに出来ること……あたしがしてあげたいこと……。イツチバン大切なこと……)

すんなり心が返してくる。彼にしてあげたいことは、もうずっと前から決まっていた。今はそれを出来ているから心は満たされている

……はずだった。

でも、ロイがどう思うかを考えたら、とても酷いことにしているように映る。まるで彼を支えられていないのだと思い知って、唇を噛んで俯いた。

「足りないものは、これから身に着けていけば良いの。私たちに出来るのは努力することだけ……そうでしょ？」

「あだし、ロイを支えてあげたい。ロイに喜んでもらいたい……うん、それがあたしの、イチバン」

姉の言葉に背中を押され、前を向いた。

胸に手をあて、静かな声で想いを言葉にして自分へ言い聞かせる。貢献するだけでは足りなかった。何も彼の気持ちを受け止めていない今の状態では、支えているとは言えない。一番大切なことだけを考えたら、どうしたら良いのかはつきりしてきた。

今まで絡み合って解けなかった気持ち。かかった霞が晴れて良く見えるようになると、反面、怖れていたこともくつきりしてくる。

「悪く言う人もいるし、傷つくこともある。そんな傷、気にならないくらい幸せよ。飛び込んで良かったって、それしかないわ」

それを見透かすような言葉。あなたも頑張って飛び込みなさい——そう言われているようで、姉に励まされると不思議と勇気が湧いた。

「ありがとう、お姉ちゃん。だいぶ整理できた。もう……ちよつと考えてみるよ」

一つ鍵は開けられた気がする。

ロイが悪く思われないだろうか……見えない夢の向こう側への不安が恐怖を呼んできたが、今の自分に出来ることだけ考えたら気持ちがとても楽になった。

(ロイを支えるんだ。もう、悩んでてもダメだ)

濁った心が澄んだ分、くつきり浮かび上がる不安。それをロイにだって知ってもらいたい。彼が聞いたらどんな顔をするだろうか……怖い。でも、もう全部吐き出すことにした。

まずはロイの前に、この浮かんだ不安の一つをフェレに帰ったらす

ぐ幼馴染へぶつけようと心に決めて、姉と別れるのだった。

悪夢を突き破ったのは

夕暮れ時、フェレに帰ってきたシャニーは休みもせず薬局に駆け込んだ。

ドアベルが止まるより先に店からであると、手にした瓶をぐいつと傾る。

「ぶはーっ！ ああ〜っ、マズっ！」

苦くドロリとした液体を一気に飲み干した。なんだかオジサンにでもなった気分。

「うーん……。一本じゃ不安だなあ」

あの魔人を相手するには、何本あったって足りない気がする。この前もまるで通用せずに潰された経験者が言うのだから間違いない。すっぱんぼん事件はもうゴメンだ。

薬局へとんぼ返りして、さらにもう一本封を切った。



「まあまあ、まずは呑もうよ」

その足で向かったのは酒場。イリアのような落ち着いた雰囲気ではなく、ガレージ風のオープンな造りはバカ騒ぎにはうってつけ。

先に来て乾杯を練習していたルシヤナから、ジョッキになみなみビールを注がれる。とりあえず言われるままに口を付けてみたけれど、とても呑もうなんて気分ではなかった。すぐにジョッキを置いて別の酒を頼む。

「ルシヤナ、ちよつと相談に乗って欲しくてさ」

こんなことを相談しても、彼女も困るだけかもしれない。だからと言って、黙っているのも我慢の限界だった。ようやく鍵の一つを外せた今、あともう一個の鍵も、早く何とかしてしまいたい。

「うん、知ってる。あんたから酒に誘うとか珍しいしね」

さすが幼馴染と言うべきか。ルシヤナはいつも頼りになる。そんな間柄でも、どう切り出そうか踏み出せず、琥珀色の蒸留酒を含んで下を向く。

それまで酒呑みの顔をしていたルシヤナは、ジョッキを置いてじつ

と待っていてくれる。

もうひとつ口にし、突き抜けるアルコールの勢いのまま吐き出した。

「あたしき……ロイに気持ちを伝えようと思って」

もう、これ以上ロイの傍に行けないのを心が辛抱できなかつた。あんなに近くにいるのに触れられない。一度心が重なりかけたのに、怖くて跳ね除けてしまったあの瞬間を、今でも後悔している。

踏み出さないのは楽だ。だけど、逃げたままでは何も変わらない。一番大切なものを考えたら、踏み出さないと彼を裏切り、自分に嘘をつくことになる。

「おー！　ようやく決心したの！　だったら、こんなトコにいちやダメじゃん！」

ルシヤナはさっそく手を取って立ち上がらせようとした。仰天したシャニーは体重をかけて椅子へ吸い付く。

「でもあたし、怖いんだ」

まだ心に引つかかっている。この鍵を早く解いてしまいたかつた。ずっと、ずっと抱いて来たもの。ロイのもとへ来ることを、最初に

拒んだ理由の一つでもある。

「怖い??　あんたが?」

「あたしだって……と言うか、いつもどう見てるのよ」

「どうって、^{ソルバーン}火炎魔人や^{マムケート}伝説の竜にケンカ売るセチの化身様が怖いとか言っちゃって、意外にしか聞こえないよ」

「酒豪魔人に言われたくないんだけど?」

ルシヤナの言い草に眉をハの字にする。誤解されている気がするが、「……と、それは置いといて」今は脱線したくない。

「ロイの気持ちは嬉しいんだ。あたし、ロイのこと大好きだもん……」
どれだけ茶化されても、今までは頑なに否定してきた。彼と一緒になるなんて、夢でしか叶えられないと思ってきたから。

それでも最近は、こうして酒の席でルシヤナに漏らすことが増えていた。

「だけど……あたしの気持ちも知って欲しくてさ。それを聞いたら、

ロイがどんな顔するかと思うと……」

ちやんと伝えられる勇気が出なかった。言い方一つ間違えただけでどうなってしまうか。

いずれイリアに帰らなくてはいけないし、傭兵が相手では要らぬ中傷を受けるのでは……そうした本当の気持ちを、全部ロイに伝えたい。

彼に嫌われたくない。だからと言って、伝えなければ先へ進めない。

「ハッ、らしくないね」

もう聞きたくないと言わんばかりに、ルシヤナは話を途中で折ってジョツキを傾けだした。

一気に飲み干し、ドンッと腹に響くくらいの音を立ててジョツキを置くと、口元を拭いながらジロっとしてきた。

「そんなの、あんたがどうしたいかだけじゃん。それでもロイ様は好きって言ってくれてるんだし」

ストレートな言葉に目が飛び出しかけたが、すぐにしょんぼり俯いた。

「言われたこと……無いよ」

そんな真っ直ぐな愛の言葉を言ってもらえたら、どんなに心が吹き抜けるだろう。姉が自然にその言葉を使っているのが羨ましく思えたほど。だから、余計に分からないのに。

「言われてるようなもんじゃん。去年から、ずっと。それなんか、極めつきだと思うけど?」

ルシヤナの指さす先を追っていくと、右腕に輝く時計があった。たしかに『時を刻もう』なんて、覚悟を決めていなければ時計に彫らないだろう。

(聞きたい……その言葉が欲しいよ)

テイトもルシヤナも言う。今の自分をロイは好んでいるのだから気にするな。

あの凛々しい声で純粹な言葉を掛けて欲しかった。とは言え、気持ちも伝えずに、自分だけしてもらおうだとか身勝手だと分かっ

る。それどころか、彼の気持ちへ壁を作っているのに。

早くこの壁を突き破ってしまいたい。ぎゅつと口を閉じて蒸留酒の入ったグラスに顔を映していると、バンバン肩を叩かれた。

「ロイ様がどう思っかなんて、あんたが想像してただけでしょ？ それくらい、あんたが心配しなくていいよ。ロイ様なら自分で何とかするよ」

(やっぱりお姉ちゃんと同じこと言うな……)

自分がどうしたいのか——それが一番だと分かっているし、自分にとっての一番が何で、何をしなければそれを掴めないのか。もう姉と話し答えては出せている。

(じゃあ……)

残ったもう一つの鍵。それを解くためにシャニーは勇気を振り絞り、お替りを気持ちよさそうに傾けるルシヤナの目へ不安をぶつけた。

「フェレに居場所がなくなったら、ルシヤナたちだって困るんだよ」

ロイとの関係が拗れたら、契約だって破棄されてしまうかもしれない。自分が仕事を失うのは仕方ないにしても、部下まで路頭に迷わせることになる。それがたまらなく不安で、不安は恐怖へと変わっていった。

「あんた……」

ドンと置いたルシヤナのジョッキからビールが飛び散る。ぎよつと肩が跳ねたが、彼女はお構いなく続けてきた。

「そんなこと心配して、ずっと今までモジモジしてたわけ？」

こくこくと頷くと、浴びせられたのは腹からの笑い声だった。その声はどんどん大きくなってきて、嘲りさえ含んでいるように聞こえてくる。

「そんなことって……」

「なんで居場所がなくなると思うの？」

この賑やかな中でも、周りがちらちらしている。堪らなくなって止めようとする、被せるように鋭い目つきが振り向いてきた。

「ダメだったらダメで、ロイ様とは今までどおりじゃない。あんたの

気持ちだつて変わらないでしょ？」

そう言われて、シヤニーはまた下を向いて考え込んでしまった。

ロイにとつての「友達」が本当に言葉どおりの意味なら、なにも彼の態度は変わらないはず。

そんなことをする人ではないと信じてはいる。なら、何でこんなに不安が湧いたのか……自分の心が分からなくなりそうさ。

そのときだった。降ってきた言葉で頭を殴りつけられたような感覚に陥る。

「シヤニー、自分の意気地なしの理由に私たちを使わないでよ」

「そ、そんな言い方——」

「だってそうじゃん。ロイ様とあんたの間の話で、私たちが一番大事なわけ?!」

ぱつと顔を上げて反論しようとしたら、怒気を含んだ声でルシヤナは突っぱねた。その目はさっきまでの酒を愉しんでいたものとはまるで違う。

——二人にとつて一番大切なことだけだけ考えて

姉の言葉が蘇る。

(あたしの一番……大切なもの……)

それはいつも傍にいて、ロイを支えることに間違いない。いろいろな不安が恐怖を連れてきて、彼の傍に拒んできた。それではいけないと姉に教えてもらえたのに、また同じことをしている。……いや、だからこそ、断ち切りたかったのではなかったか。もう一つの鍵を。

それを向けたルシヤナが、ここまで猛烈に怒るとは思ってもいなかった。

「ホント、あんた見てると腹立つよ。自分の気持ちに嘘ついて、ロイ様にも背を向けて。で、それが私たちのせいだつて?」

「……ごめん」

ルシヤナの鋭い怒りを突き付けられてから、酷いことを言っていたと気づく。ロイにも、仲間にも、どれだけしてきたのか思い知って、うな垂れた首へのしかかってくる。

ここまで怒鳴られて、胸の中の痞えが喉元までようやく出てきた。もう吐き出したくて堪らない。目をぎゅつと瞑り、腹に力をこめて言葉を絞り出した。

「……どうしても考えちゃって。あたしみたいな傭兵じゃ、ロイには釣り合わないんじゃない？」

相手は世界の英雄。自分は片田舎の何も知らない村娘であり……

——「死の臭いの中でうごめくハイエナ」。

ずつと、ずつと心の中で痞えてきた。姉は乗り越えた。自分だつて……そうしたい……。

「ああもう!! あんたらしくない!」

怒声に驚く間もない耳をつんざく音。吹き飛んだ椅子が転がる音だと分かったときには、胸倉を掴み上げられ、力任せに立たされていった。

「ロイ様がもしッ、あんた以外の女と結ばれたらどう思うの?!」

今にも殴りかかってきそうな目つき。ぎよつと固まる目の前から飛んできた、猛獣のような怒声に頭が揺さぶられて碎けてしまいそうになる。それでもルシヤナはお構いなしだ。

「おめでとう! って言えちゃうわけ?? それが——イチバンだろ!!」

ルシヤナの怒声に吹き飛ばれ、どうなんだと胸倉を引き寄せられた。そんなこと、考えたこともなかった。ふとその光景をイメージし始める。

(ロイが……他の人と……)

ロイの隣に自分ではない人がいて、自分は輪の外からそれを見ている……——ッ!!

「いやあ! そんなのヤダよ! 絶対に嫌だ!!!」

頭が真っ白になった彼女は周りも気にせず叫ぶと崩れ、慟哭して動けなくなってしまった。

そんなことになったら、もう立ち上がれないかもしれない。

「どうすれば……いいの」

うづくまっていたら抱きかかえられた。立たせてくれたルシヤナ

をじつと見つめて、無意識のうちに助けを求めていた。

「だったら、ぶつかつちやえばいいじゃない。ぶつかりもせず後悔しようとするなんて、あんたらしくくない！」

自分の気持ちをハッキリと思い知ったシャニーは、すっかりしろと肩を叩かれ、目が覚めたように瞳に色を取り戻す。

ふうつと大きく深呼吸しながら目を閉じてもう一度問う。一番大切なことは――

(ロイなら……きつと受け止めてくれる)

そう心から信じられる憧れの人。だからこそ、好きになった。

ロイへの想い、そして自分への気持ち。それだけを大事にしようと覚悟を決めて、悪夢の果てに醒めた新しい世界に目を開く。

「そうだね……ッ。よおし！ ようやくスツキリしたぞ！」

「と言うわけで、ほら、すっかり呑んで。前祝いだよ！ 呑んでバカなことは全部忘れろ、忘れろ！」

ジョッキになみなみ注がれたビールを、二人で一気飲みして笑いあう。久しぶりに今日は酒がうまい。

「十八部隊はあんたを応援してんだからさ。ちゃんと戦つて来い！」

ルシヤナはそう言つて腕を小突いた。力は弱いはずなのに、鍵が外れて心を塞ぐ壁がガラスのように砕けた気がする。

「ありがとう、ルシヤナ」

どんな答えがロイから返ってきてても、受け止める覚悟はできた。後悔するにしても、行動してからだ。

取り戻した信条を胸に、彼の笑顔を浮かべながらお替りしたジョッキを傾けるのだった。



翌日、騎士団へ顔を出したシャニーはさつそくランスに呼び止められていた。

「……大丈夫か？ 顔色が悪いぞ」

やはりどう繕つても、違和感が出てしまっているのだろうか。自覚はある。なにせまともに背筋を伸ばせないし、気を張っていないとす

ぐ壁にもたれてしまう。

「だ、大丈夫でーす……。アハハ、死なないからへーき……」

「……そんな真っ青な顔で笑われると不気味だ」

喋るのもつらい。なんとかやりすごそうとふらつく足元を踏ん張ったとたんだった。胃がグニユツと動いた気がして、たまらず口元を押さえた。

(ううっ?! ……気持ちわるっ。リキアの酒は悪酔いするなあ……)

今天馬に乗ったら間違いない惨事が起こる。そのうち壁に寄りかかって動けなくなってしまうた。

すぐに介抱され、見上げたらランスの渋い顔があった。彼と風通しの良いところまで行き、座り込むと一通の封書を渡された。

「これでも読んで、休んでいると良い」

朝から申し訳なくて、手を合わせて封書を受けとる。それには天馬騎士団の刻印が記されていて、宛名までしっかり書いてある。どこかで見た字だ。封を切って出てきたものに首をかしげる。

「エレブ時報……? ……なんでこんなものが」

それは大陸中で愛読される世界規模の新聞だった。エトルリア貴族にも愛読者が多いらしく、難しい話ばかりで読む気にならない代物だ。

「今朝、天馬騎士団から届いた。中を確認しておいてくれ」

そう言うところランスはその場を後にした。彼はすぐに水を持って帰ってくるとその足でアレンのもとへと向かい、こちらを指さして何やら喋っている。

彼がアレンを足止めしてくれている間に封書へ目を移すと、手紙が入っているのに気づいた。

——元気にしているか? ……今度リキア地方に営業に行くとき、どこかで茶でも飲もう

「アルマが送ってくれたんだ。元気にしてるかなあ、あいつ」

ライバルに大分気を遣わせていると知って、北の空を見上げた。

イリアは今どうなってるだろうか。イドウヴァはちゃんと民を守ってくれているだろうか……。

今はアルマに託すしかない。近況報告もかねて今度手紙を出すことにして、暇つぶしに新聞へ目を落とす。

「うわあ！ すっごーい！」

これはサプライズだ。思わず声をあげると、さっそくミリアが小走りしてくる。

「どうしたんスか？」

声につられてルシヤナやレンも姿を見せている。早く見せてあげたい。座ったまま、お尻で跳ねて手招きした。

「見て見て、エンジェルヘイローが記事になってる！」

イリア中をつなぐ環状鉄道は順調に整備され、延伸が進められていると新聞は報じていた。早く軌道に乗ることを願ってニコニコが止まらない。これで皆救われるはずだ。

「ウチたちのことが書いてあるツスよ！」

ミリアの指さす先を皆でのぞき込むと、誰もが口を喜びでわっと広げる。企画が十八部隊であることがはつきり記載されているではないか。こんな世界新聞に載るとは何事だろう。

「はっ。私たちの左遷が、大々的に将来への投資にされてんじやん」
ルシヤナは鼻で笑って両手を広げている。

もう少し読み進めたら、十八部隊がリキアへ派遣されていることも書いてあった。将来のためと銘打って。

「ここ……ロイ様のコメントがある」

「ええ?!」

ぱつと新聞を取りあげて、レンが指さしていた箇所をのぞき込む。てつきり、宣伝に使えるところでも考えたイドウヴァの仕業かと思っていた。まさか、彼だったとは。

立ちあがって駆け出そうとするが、二日酔いをすっかり忘れて口を押えるはめに。後ろからクスクスやられながら、壁伝いに歩きだす。

「ロイ！ これ、ありがとう！」

ロイを見つけ、手を挙げて呼びながら新聞を振って見せた。

相変わらずの壁伝いで彼のもとまで向かおうとすると、彼は心配したのか駆けてきた。そのまま抱きかかえてくれ、一緒に新聞を見下ろ

して嬉しそうにうなづく。

「僕だって悔しいからね。こんなに頑張ってる君たちが、イリアで評価されないなんて」

聞けば、他の取材に応じたとき、自ら話を出してくれたらしい。彼の優しさに、顔は真つ青でも心は喜びで満たされて、今にも飛んで行きそうだった。

「君のためなら、協力できることは何でもするよ」

さらに、抱きしめるような優しい言葉で包んでくれる。このまま目を瞑つたら、天国まで飛んで行ってしまいたくなるくらい心が浮かんでいく。

（やっぱりロイは大切にしてくれてる。嬉しい……）

彼の気持ちに応えてあげたい。介抱してくれるロイにためらいなくぎゅっと両腕を回した。

「ありがとう。これからもリキアのために、もつとがんばるからね！」

今できるのは、これが精いっぱい。

だけど、心に誓った。すべてをロイに捧げようと。もう、なにも恐れないと決めた。一番大切なもののためなら、あとは二人で何とか戦っていけばいい。もし、それを彼も望んでくれるなら。

（今度こそはんをぎゅ馳走するとき、絶対！）

本当は今すぐ伝えたい。けれど、こんな慌ただしい時間で済ませたくなって、ロイの腕の中に甘えておく。

今はまだ、わずかな時間に許された幸せ。きつと、この温もりをずっと傍で支えられるようにしたい。どんな答えでも受け止めよう。一番大切なものを何度も心の中で唱え、夢から醒める覚悟を決めるのだった。



——イリア天馬騎士団本拠地 カルラエ城

一方、天馬騎士団では、団長室でアルマが頭を下げていた。

彼女の前にはエレブ時報を手にしたイドウヴァがいて、ワインレッツ

ドの口元を満足げに広げて静かに視線を動かしている。

「これは……ふふふ、ロイ様に天馬騎士団を宣伝していただけるとは……。本当に金の卵を産むようになってくれたものです」

イドウヴァのほくそ笑む姿を見下ろし、アルマはポーカーフェイスの裏で安堵していた。これで、親友の身も安泰だ。少なくとも、アサシンを仕向けたりはしないだろう。

「はい。十八部隊の現地での活躍も、リキアの地方紙ではすでにロイ様の談として載っているようです」

シャニーたちが企画したすべての案件をロイが実行に移し、多くの民がロイを称えたと記事は伝えている。その中で、ロイは十八部隊についてコメントしていた。イリアから来た妖精たちが、民の声を届けてくれると。

(フン、さすがだよ。思った通りの奴だ)

まさかりキアの地でも同じような仕事を始めるとは想定外だが、彼女らしいとアルマは思った。だからこそ、いずれ戻って来てもらわねばならない。

その障害が……この古狐。

「……なかなか上手く行かないものですね」

イドウヴァは相好を崩しながらも、不安を零している。

計画は順調だ。十八部隊は金の卵となり、ロイとのパイプにもなっている。しかし、それは同時に障害が大きくなることも意味しているのは間違いないのだろう。

「このままでは、あの部隊を勢いづかせてしまう。どうしたものでしょうかね……」

なにやら、彼女はいくつも考えを浮かべているようだ。

そこまで執着する理由がまるで分らず、アルマは部屋を出ると廊下の窓から南の空を見つめてひとつ零した。

「おまえ、本当に戻って来れるのか?」

食べなきやしよーがないよね!

月末も近い昼どき。シャニーたちはフェレの街を雑談しながら、なじみと違う店へと入っていく。

人々の話を聞きにあちこち飛びまわる日々が戻ってきて、いくら時間があっても足りない。おまけに最近、ロイの依頼もあって少しずつリキア同盟を手伝うかたちで活動範囲を広げていて、こうして昼にフェレにいるのは珍しい。

「うくん！ リキアはやっぱ海鮮だよー。はあく、しあわせ！」

歓喜をぎゅつと絞ったような声をあげ、満面の笑みを浮かべるシャニーの食欲は今日も健在だ。

漁港が近いリキアの南部だからこそ味わえる絶品。イリアにはない食文化に、毎日感動するばかりでスプーンが止まらない。

そんな彼女を、仲間たちは見ないようにしていた。

「うえっぶ。シャニーを見ながら食べればダイエットになるかと思っ
たっすけど……気持ち悪くなるッス」

音をあげるミリアに舌を出して笑ったかと思うと、シャニーはまたもぐもぐと丼をかきこみ始める。

「だってさあ、アレンさんと稽古すると、おなか空くんだもん」

今日は少し足をのばしてオスティア方面の村々に顔を出しに行く予定だったのに、またあの赤い騎士に捕まってしまったのだ。

——君はスタミナが弱点だ！ さあ、俺と一緒に鍛えよう！

彼はそう言つて、今日も朝稽古と言いながら昼まで付き合わされるハメになった。

「また引き分けだったッスね」

押せ押せで攻めまくったつもりだったのに、結局どちらも参つたと言わなかった。ミリアは残念そうだが、掛け金がパーになったせいに決まっている。

「アレンさん、タフ過ぎなんだよなあ」

颯閃一刀流を見せろと言われ止むなく剣で挑んだのだが、最後は完全にバテてただの鈍らだった。

どれだけ浴びせても、まるで効いていないかのように突撃してきて、避けるだけで体力を削られる。スタミナが弱点……彼の言葉を覆せなくて、天井を見上げてため息をつく。

「でもカツコ良かったツスよ！ セチの剣！」

褒め言葉はすつと耳に入る。嬉しくなつて首がシャキツとしたとたん、頭の中からセチの得意げな声が出た。

「そりやそうさ。私の剣技なんだし？ ヘタなりに美しく魅せてもらわないと困るってもんさ」

「へ、ヘタつて……」

「初伝に反論する資格はないかな。それとも、私が使つてあげようか？」

「ハツ、ハハ……。し、精進します」

精霊とは思えない悪人面だ。ニヤリと顔を近づけて恐ろしいことをサラツと言つてくる。乗っ取られるなんてごめんだ。

千年ぶりの復活だからか、ふだんは物珍しそうにあちこちきよろきよろして、相棒にまるで関心がなさそうなのに、剣のことになると急に絡んでくるし、稽古稽古と朝からうるさいくらい。

セチにいびられていると、ミリアが顔の前で手を振りだしているのに気づいて意識を引き戻された。こんなヒドいことを言われているのに、セチの声はまわりには聞こえないからズルいものだ。

「もつともつと稽古積んで、はやく中伝まで行かなきゃ！ と言うわけで店員さくん！ 海鮮丼おかわり！」

空っぽになつた丼を見せつけ、手を振つて呼ぶ。職人気質の気難しそうだった店主が、飛び出しそうな目をこちらに向けてきた。まわりを照れ笑いしようとしても、誰もが視線を外している。

「シャニーのおなかは底無しツスね……」

驚きというより、もはや呆れに近い顔をミリアにされて首をかしげる。

「えー？ ふつーだよ。みんなも稽古するとおなか空かない？」

体重制限があるから、きつとみんな我慢しているだけだろう。食べても太らない体質でラツキーだった。

まるで宝石箱のように、出てきたお替りはきらきらしていて思わず手を結ぶ。

「最近悩んでたことがあってね。ちよつと食欲落ちてたからさー」

口紅のように鮮やかな赤身をぱくつと口にし、「んーつまー」と足をバタバタさせていたら、引いた六つの瞳が刺さった。

「いや、全然落ちてる感じじゃなかったけど」

「今まで以上に食べるんスカ……?!」

ミリアの顔から血の気が引いている。

羨ましがらるならともかく、なんでそんな反応になるのか分からないけれど、今日は一層おいしく思える昼ごはんにシャニーはニコニコが止まらない。

「どう考えても、やっぱりシャニーは魔人ツス」

「えー！ 魔人は酒豪魔人のルシヤナでしょ？」

「魔人が二人も……恐ろしいっス」

両手を広げるミリアに肘鉄砲を食らわせておく。どう考えたって、ルシヤナに勝てる人間はいない。

「ところでさ、そのお悩みごとはいつ解決すんのよ。もう告つたの？」
それまで勢いよくモグついていたシャニーも、ルシヤナが背に腕をまわしてきてぎよつと動きが止まる。

さつそくこれだ。彼女は攻めこむように肩をバンバンするものだから目を白黒。咽つてもお構いなしに報告を要求してきた。

(どーしてそつちに持つてくのさー！)

ミリアまでワクワクした視線を向けてきて、また逃がしてもらえない雰囲気だ。とは言え、もうルシヤナにはすべて話してしまった以上、隠しておく必要もないかもしれない。

「今度ごはんを作ってあげようと思つててさ。そのときにしようつて」

とびきりおいしい料理で、いい雰囲気のまま一気に気持ちを伝えてしまいたい。

ルシヤナとミリアはその作戦に指笛ではやし立てる。

「おつ、二人つきりでご飯とは、やるねえ！ どこまで行けるのかな

」

またしても肩をバンバンされる。ルシヤナの目は明らかに最後まで行けと言ってくるが、なにも返せるわけがない。

「頑張つてほしいッス！ 応援するッスよ！ ウチら、石ころになつてるッスから！」

なんとか話題を切り替えようとしたら、ミリアが恐ろしいことを口にした。

待ち遠しいと言わんばかりに、肩を揺らして笑う彼女が悪魔に見える。この前のオスティアだって、石ころが聞いて呆れるほど騒がしかったくせに。当日の夜に起きるだろう事件が優に想像できて、今から悪い汗がダラダラ流れてくる。

（こつ、こいつら聞いてるつもりなの?!）

ミリアが顔の前で手を振っているが、カチコチに固まって動けない。

恥ずかしいどころではない。流石にこれは全力で阻止しないと、人生にかかわる気がしてきた。とにかく、この石ころをどこかに摘まみだしてくれる人……一人しかいなかった。

「ルシヤナ、この二人さ、外に連れ出してくれない?」

両手を合わせて頼みこむ。とんだ、後ろから不満が飛んできた。

「えーっ?! 歴史的瞬間に立ち会わせてくれないんスかあ?」

「見せものじゃないし!」

この言い草だと、写真でも撮つてやろうくらい考えているに決まっている。真っ青になってルシヤナにすがり付いたら、彼女はニヤリとした。

「ミリア、レン、よかったね。リーダーがオゴってくれるって」

「よっしやあ!! じゃあ、ウチらもオスティアの高級レストランでビュッスね!」

「はあ?! なっ、なんでそうなるの?!」

ミリアのガッツポーズが映り、まるで頭が追いつかない。それでも足りずに、ミリアはレンの手を取って一緒にバンザイしはじめる。

戦慄が走り、救いをルシヤナに求めても彼女は一転、嫌ならいいんだぞと不敵な笑みを投げつけてきた。

(トホホ……背に腹は代えられないかあ……)

また財布がすつからかんになる未来が確定して、がっかり肩を落とした。自分の一生を決めるかもしれない、大勝負の対価と言われているにも返せない。

しょんぼり海鮮丼を口に運ぶ。しばらくこの味ともお別れということになる。

「どうしたんだ？ レン、もつと喜べよ、高級ダイナーだぞ！」

ふと、視線に気づいた。レンがじつと見つめてくる。ルシヤナと盛りあがるミリアがレンを小突いているが、彼女はピクリともしない。会話にも入らず、彼女の視線は糸でも張られているよう。海鮮丼が気になるのだろうか。

「シャニー。たくさん食べたい理由、分かった」

石のように動かなかった彼女が急にボソツと喋りだした。おまけに妙なことを言っている。

「理由？」

もぐもぐしながら一度は興味津々にしたが、飲み込むと目に火をとます。

「そんなの、海鮮丼があたしを呼んでるからだよ。オステイアの食堂もロイとコンプしないとだし！」

リキアはどこに行っても、食べたことがないものだらけで楽園と言えよう。どこへでも飛んでいける天馬騎士は、まさに役得というもの。

「魔人がまたよく分からないことを言いだしたツス。リキアの食糧危機ツスね」

ミリアは苦笑いしているが、レンの表情は変わらない。それどころか、ますます険しくなった。

「ずっとシャニーのイーグルを追ってた。もとから多かったけど、最近、特に消費量がすごい」

真面目な答えが返ってきて、さすがに笑っていられなくなった。魔

法使いの彼女には、他人のイーギルの流れが分かるらしい。

イーギルはその人の命そのものだ。誰一人、同じ色や広がりを持たない命の『流れ』。

「シャニーはそれを食べて補ってるってこと？」

「ん。特にセチを開放したときの消費量、普通の人の10倍」

「ハッ、燃費が悪いヤツ」

ルシャナは豪快に笑っているが、レンは真顔のまま。

「二人分のイーギルを一つの体で賄ってる。だから、おなか空く」

ルシャナとミリアが、珍獣を見るような目を向けてくる。もうつとシャニーは口をへの字に曲げた。

「何だかよく分からないけど……食べてへーきってコトだよー！」

病気だと言われたらどうしようかと思ったが、これならお墨付きをもらったと言えるだろう。井に顔を埋めて続きを楽しむ。

ところが、レンはずっと身を乗りだして、今にも泣きそうな声で警告してきた。

「シャニー、気をつけて。イーギル使い切ったら……死んじやう」

「し、死ぬ?!」

「あんまり、こんな怖い言葉、使いたくない。お願い、分かって」

それまでの儂げな口調から一転、レンは強い目つきで最悪を口にした。

さすがにスプーンが止まる。たしかに身に覚えはある。ソルバーンと戦って意識が飛んだことを思い出した。

「なんだ？ 相棒、また忘れて使ってた？ 怖いもの知らずだなあ」

そのときだった。心の中から突然声をかけてきたセチに、仰天して米が喉に詰まりかけた。

「し、知るワケないじゃん！ むしろなんで教えてくれないのさ！」

「いや、何回か言っただけだよ？」

「てつきり、オーバードライブしなきゃ大丈夫なんだと思ってたよ」

「なに言ってるのさ。キミは私の化身なんだから、いつもその状態だよ」

あらためてそう言われると、なにかゾクつとする。日頃から、他の

人が見えないような『流れ』が分かったりするの、そのおかげなのかもしれない。その代償に、知らないまま死と隣り合わせの生活を、のほほんと過ごしていたとは。

なにより、精霊の化身——今でも、なんだか夢でも見ているようだ。「早く調整できるようになってほしいかな。もちろん、加減せずに使えるのは当たり前前で、というわけで、稽古、稽古！」

「死ぬかもって言ってるそばからほんと、稽古しか言わないなあ」

「頼むよ。キミが死んだらまた宿主探さないといけないんだから。こんなあちこち見物できる宿主は手放したくないしさ」

「は、はは……喜んでいいのかな、これ」

言いたいことだけ言って、また気配を消してしまった。どうにも、自分と同じ声に説教されるのは慣れない。

(調整はともかく……加減せずは……うーん)

パクツと虹色に光る白身魚を口に運び、スプーンを咥えたまま考えにふけてしまう。

今でも完全に使いこなせているわけではない。全力を解放しようとする、襲ってくる、あの『飲まれる』感覚。精霊に意識を飲まれたら、もう二度と戻ってこられないとニイメに脅されている以上、簡単には踏み込めない。どうしたらうまく使いこなせるか……レンの警告はすっかり飛んでしまっていた。



夜、十八部隊はシャニーの部屋に集まってまったりした時間を過ごしていた。

オスティアの特集記事を読み漁ってディナーへ備えるミリアの横で、シャニーはチェス盤を見下ろして難しい顔をしている。

「ほらほら、早くさしなつて。もう詰んでるけど」

「そんなことないもん！」

考え込んでいたらルシャナに額を突かれた。ニヤニヤされて反射的に口が尖る。

「これでも食らえ！ ハツハツハ、さあどつちの駒を逃す——」

「ほい、チェックメイトつと」

「……ほえ？」

目が点になった。まだ決めゼリフの途中なのに、我慢していたバネが跳ねるように、ぽんと打ってルシヤナは席を立ってしまふ。

「げっ！　またあたしの負けえ?!」

頭を抱えて髪をくしゃくしゃにしながら、思わずムキーンと声をあげる。悔しすぎる。かれこれももう十連敗だ。

「ルシヤナあー、もう一回だけ！　勝ち逃げなんかダメだぞ！」

「はいはい。はやく勝つてよね」

ルシヤナの顔には、何度やっても同じと呆れがありあり浮かんでいゝる。

「やれやれ、これじゃロイ様と指せるのはいつになるやらね」

冷笑の前に小さくなるばかり。まだチェスを楽しむレベルにすらなっていないのに、頭はパンク寸前でヤカンみたいに湯気が噴き出てきそう。

今週はずつとロイがおらず、その時間を使ってルシヤナに教えてもらっていた。

「ふ、ふん！　ちよつと練習すれば！　もうアレンさんには勝てたし！」

アレンに勝てたから満を持して連敗を止めに挑んだのだが、10手ともたずヒドイありさま。

それを言ったら、ルシヤナは口をあんぐりさせた。

「あんたに負けるって……ある意味才能だと思うけど」

「なにをー！　あたしだつて上達してんだぞ！　負けてただ転がるシヤニー様ではないわ！」

「このレベルに負けるチェスとか、逆に興味が湧くよ」

ここまで挑発されて退くなんて、天馬騎士がすたる。今日は勝つまで諦めないつもりで、気を取りなおしてもう一戦と駒をならべ始めたときだった。

「シヤニー、ちよつといい？」

ずつと机に座って計算器を走らせていたレンの声が呼んだ。その

顔は昼のときと同じで、シャニーはルシャナと顔を見合わせると机に向かう。

「去年、ヴァルプルギスと戦ったときのこと……」

ヴァルプルギス……嫌な思い出を呼び起こす名前だ。イリアにある聖天騎士団の筆頭騎士で、まるで歯が立たなかった。自然に眉が下がりそうになるのを笑って払う。

「あたしが暴走しちゃったときだね。それがどーしたの？」

「身体、ヘンにならなかつた？」

時々、レンはエスパパーなのかと驚くことがある。

彼女にあの時をぴたりと言い当てられて、シャニーは目を真ん丸にする。と手品を見たかのようにわつと口を驚かせた。

「なつた！ すっごく胸が痛くてき、もう戦うどころじゃなくて」

あのとときの激痛は思い出したくなかつた。直接胸に手をねじ込まれて引きずり出されるみたいな、心臓を握り潰されるかのような痛み。声もあげられずに硬直したところへ、ヴァルプルギスの魔法剣を容赦なく浴びて本気で死を覚悟した。

「それで負けたつて？」

「きつとそう！ 絶対そう！ なにつ、その目！」

負けず嫌いを言っているとしたらルシャナは思ってくれていないらしい。必死にアピールしても、はいはいと手で払われた。

「たぶん、セチがああの宝輪の力で引き寄せられたんだと思う」

ヴァルプルギスは魔力をおびた宝輪を駆使して、いろいろな魔法剣を放ってきた。

レンに言われてようやくピンときた。彼女が風の魔法剣を使うたびに激痛が走つたのを思い出したのだ。

でも、ひとつ納得したと思つたら、それは新しい疑問を呼んだ。

「でも、最後のほうはぜんぜん痛くなかつたよ？」

セチの力が暴走している間は、ヴァルプルギスがどれだけ魔法剣を浴びせてきてもまるで痛みなど感じなかつた。それどころか、むしろ……心地いいくらいで。「ん。仮説どおり」こくこくレンがうなずく。

「シャニーがセチを開放したから。上位のエーギルは下位を吸収す

る」

「ふうん……魔法ってムズかしいのね。魔法は使えないし、エーギルとか意識したことなかったよ」

あごに手を添えながら、眉をもつれさせるようにしてシャニーは天井を見上げる。

レンはまだなにか言いたそうにじつと見つめてくる。視線を彼女に戻そうとしたら、後ろから嬉しそうな声がした。

「風の精霊様相手に、生半可な風のエーギルは通用しないってか。良かったじゃん、次は勝てるよ」

たしかに、業火ソルバインの魔人に火炎魔法が通用するとは思えない。

あの連中を、次はぎゃふんと言わせられる。そうとでも思ったか、ルシャナは背中をぽんぽん叩いてくるけれど、応は返せなかった。

「あたしは戦いたくないけどね」

次なんか無いに越したことはない。聖天騎士団はイリアの騎士団だ。手を取り合えるなら、そちらのほうが良いに決まっている。

「聖天騎士団がみんなを大事にしてくれるのが一番だよ」

分かってはいる。聖天騎士団にそれを求めるのは、望み薄だと。

——聖女は犠牲を否定はしていない

ヴァルプルギスはあの場ではつきりそう言い切った。今も同じことが繰り返されていかないか心配だった。

自然に手が祈りに結ばれる。そこへそつと重ねられた手。追っていくとレンの不安そうな眼差しがあった。

「シャニー。お昼も言ったけど、エーギルの開放、本当に気をつけて」
そういえば昼にも注意されたのだったか。言われて思い出し、あつと口を開ける。

「ごめんごめん、すっかり——」

「私、シャニーが石になっちゃうの、嫌だよ」

「……へ？」

いきなりレンが怖いことを口にして、さすがのシャニーも目が飛び出しそうになった。

「石い?!」

レンが冗談を言うとは思えない。彼女の瞳は震えて今にも泣きだしそうだ。

(なによ、石って……。あたしが……?)

言われていることに頭がまるでついていかない。ただ、とてつもなく危険な話だとは分かる。ふいに脳裏に浮かぶロイの顔。いても立ってもいられずに、気づけばレンの手を取っていた。

「石ってどういうことなの?!」

せっかくこれから勇気を振り絞って、一生ロイの傍にいられるように頑張ろうというときに。

レンは唇を噛むと視線を外してうつむき、涙に濡れながら祈りをこぼす。

「エーギルを使い果たしたら、石みたいになっちゃう。もう……元に戻らない」

エーギルを失えば石となり死を迎える。魔法使いなら常識であり、自身で制御するものらしい。そんなこと、魔法使いではないし、まるで知らなかった。

何も知らず、限界を超えていつも戦ってきたが、髪が真っ白になって倒れるだけで済んできた。今、さらにその先へ行こうとしている。

「……無茶しないで。約束だよ」

涙に真っ赤になりながらも、鬼気迫る眼差しでじつと見つめられてシャニーは言葉を失った。初代団長の剣がそんなに恐ろしい道だったとは。

——力を手に入れることは、新たな悩みを背負いこむことになる

いまさらながらに、あの紳士の言葉が蘇ってきた。

(石……どうなっちゃうんだろう……——ツ！)

思わずぞわつとして瞳が震え、何度も拒絶に首を振る。

「あ、あたしだってヤダよ！ 気をつけなきゃ」

自分の限界点を早く見つけなければ。あの紳士は言った。制御の仕方を見つけるまで、使ってはならないと。使わなければ限界は分からない。でも、制御出来なければ限界を超えてしまう。

ロイの顔を思い浮かべ、新たに直面した壁に心がばたついて落ち着

かな
かつた。

うちのセチがたいへん失礼しました?!

のどかな空が続く、フェレ西部の境界付近。山の中を白い街道が一本だけ伸びる光景は、まさに田舎と言ったところ。

その静かな空が一点輝くや、音速の銀翼が平穏を引き裂いた。天馬隊率いるシャニーの目つきは、すでに隼のごとき鋭さを放つ。

「ミリアー！ レン！ エアリアルドライブ準備！」

「ラジャー！」

火を放ち暴れる者たちが遠くに見える。今日も電撃戦で一気に終わらせる作戦に決まり。強襲に備えて槍を握る手に力を込める。

治安の良いリキアとはいえ、警備が行き届かないことも多い領地の境界付近は賊の住処らしい。こうしたところこそ、天馬隊の出番というわけだ。

「いくぞ、セチ！ オーバードライブ 精霊開放！」

ついてくるミリアたちの先頭を飛び、魔力を放出して彼女たちを包む。四騎の天馬が空に一列となつて地表へ突っ込んでいく姿は青き彗星のよう。

「リーダー、エアリアルドライブ準備完了」

「このまま突っ込む！ 射程に入りしだい攻撃開始！ あたしの軌道から外れないでよ！」

今日は新しい戦闘スタイルを試すと決めていた。レンは心配してくれるが、この力をものにできればもっとロイの役に立てるに違いない。

一段と高くなる風切り音が緊張感を煽る。暴れまわる賊たちのもとまで、みるみるうちに距離が詰まっていく。

「天馬が弓に向かってくるたあ、バカなヤツらめ！ 蜂の巣にしてやるぜ!!」

空に燃える青焔にいち早く気づいたのは、賊の中にいた弓使いだった。標的の太ももくらいある腕で、ぎりぎりど鋼製の弓を引き絞っていく。

シャニーにも弓を構えるのが見えていた。隙だらけだ。弓使いの

動きを捉えて避ける構えをとる。

賊の手先から伝わる「流れ」。とつさに体が動き、天馬が矢の軌道から外れる。

「なんだと?! そんなバカな!」

目元をゆがめた弓使いが絶叫している。

まっすぐ飛んできた矢が天馬に触れそうなその刹那、矢は弾かれてあらぬ方向へ飛んでいった。

レンの計算通り……後ろに親指を立てて彼女を称えたシャニーはゴーサインを出した。

「避けてみる!! バレットストーム、バージョン・スプラッデ・スクアロー!」

レンとの混成攻撃をミリアが地表へと打ちこみ、クロスボウから放たれた暗黒彗星のごとき黒色の魔法珠が大地へ吸いこまれていく。

今回は闇魔法バージョンのお披露目と聞いていた。地面が真っ黒に染まったかと思うと、闇に賊たちが飲まれていく。

「う、動けねえ……。——?!」

天馬たちが過ぎ去った直後、闇の中から噴騰泉のごとく突きあげ飛び散るボルト。身動きのとれない賊たちには為すすべなく、立ちあがるものは誰もいなかった。

「へっへー、どんなもんスカ!」

ゴーグルをずりあげたミリアが、クロスボウを掲げながら意気揚々としている。

「つぎの準備して! ルシヤナ、指揮お願い!」

その気になるにはまだ早いというものだ。前方からは、まだ大勢の声がする。

そのままケリをつけるべく、シャニーは剣を引きぬき天馬から飛び降りた。大地を青焰の軌跡が吹き抜ける。

視界のはるか向こうに巨漢が見えてきた。あれが大将だろうか。スキンヘッドの彼はまるで神話に出てくるオークのよう。とにかく巨大で、腕だけでこっちの腰くらいの高さに見える。あんなものが振り下ろす斧に当たったらなんて、想像もしたくない。

「ツヴァイ
二の颯・改！ 万華の翔星！」

ズリオン・ミーテイア

セチと融合した剣技で一気に距離を詰め、旋風で賊たちを跳ね飛ばしていく。

「ふふっ、どいつも隙だらけだ。稽古台には実力不足かな」

セチが嬉しそうなのは、今日は一段と人数が多いからに違いない。リキアに来て最大規模と言えるだろう。どいつも色あせたシャツ一枚で、太い腕は日に焼けて真っ黒だ。こっちの肩幅の二倍はあるだろう巨体で大地を揺らしながら、赤黒くなった斧を振りかざし獣のような雄たけびをあげて襲ってくる。

「セチ！ ちょっと強めにいくぞ！」

これだけの手合に、仲間の第二波まで一人でしのぐには分が悪い。あの感覚は怖いのが、慣れていくしかない。今日はいつもより、もう少し先へ行ってみる。

「ふふっ、たのしみだよ。キミの成長を見せてよ」

来るのを待っている——セチの声からそんな気持ち滲んでいる。彼女を信じて少しずつ魔力を開放していく。……ふいに襲う、意識と視界が切り離されそうになる感覚にぐつと奥歯を噛みこんだ。

(くっ……この飲まれる感じ……でもっ)

自分の体なのに外から眺めているような感覚は、ヴァルプルギスと戦ったときと同じだ。ここで退いては、今までと変わらない。

さらにギアを上げ魔力で目を翠緑に輝かせたシャニーは、天馬を呼ぶと宙へ飛びあがった。

「セチ、一気に決めるからね！ こんな持たないよ！」

合図といっしょに、シャニーは槍を地上に投げつけた。ただの槍なんかではない。魔力を込めたとびっきりの一発は、大地に突き刺さって賊にかすりもせず。

ここからが本番と言うものだ。旋風うずまく槍はあたりを全て巻きあげ始め、猛風となって巨漢を木の葉のように中心へと飲み込んでいく。屈強な両腕で壁にしがみついていた者も壁ごと崩された。

「なっ、なんだこれは?！」

ひとときわ巨体の頭領でさえも、足が地面をえぐり踏ん張りきれな

い。少しずつ巻き込まれていく彼らへ急降下した白き流星が、身動きの取れない者たちを容赦なく槍で跳ね飛ばしていく。

そろそろいいだろう。終いにするべく彼らの背後にふたたび飛び降りたシャニーは、抜刀して顔の前に掲げる。

「黎を払う風——白銀につどい道を切り拓け！」

刀身へ青焰エーギルを滾らせる。セチの魔力で激しく揺らめく鋒を、天へと掲げて一気に飛びだした。

「終の太刀！イクシードアーツ 旋牙天翔剣！！リベリオン・シルフィード はあああつ！」

宙を滑りながらすり抜けざまに振りおろす渾身の一闪。青焰たぎる狂乱の風刃がその場を刻みあげ、巨槍のごときダウンバーストがうなり貫く。

刃が切り裂いた衝撃波はかまいたちのよう。風の渦から辛うじて逃げ出していた賊までも飲み込んで、はるか彼方まで突き抜けていた。一網打尽とはまさにこのことだ。

「よしっ……、ミッシヨンクリアー」

消耗が大きいみたいで、肩で息をしないと追いつかない。膝を突き、それでも支えられなくて手も地に突いた。大技を一発くり出すだけで、まだ精いっぱいか。

「おつかれさまー！」

ようやく息を整え、降りてくる仲間へ手を振る。疲労感は大い。それ以上に、今日も被害なく終えられて安堵が心に広がっていく。

「ひゃー、シャニーはどこまで登っていくんスカね。一騎当千ってヤツツスね！」

相変わらず不安げなレンの視線が一瞬目に入ったが、はしやぎながら駆け寄ってきたミリアに引つ張られた。褒められるのは嬉しい。それでも、彼女の肩を借りて立ちあがり首を振った。

「使わないに越したことはないんだけどね」

平和が良いに決まっている。本当にしたい仕事は別にある。今日だって、この近辺の村々に顔を出して困りごとを聞くつもりだ。

太刀を収め深呼吸して本来の任務に戻ろうとしたときだった。ふいに背後から聞こえてくる拍手。皆であたりを見渡す。

「その通りだな」

隠れるつもりもなさげな巨漢が視界にめりこんだ。赫の怒髪。炭のように焼けた黒い肌は、緑が広がる光の地では異様に目立つ。サングラスをした長身の彼は、今も口元に自信あふれる笑みを浮かべながら拍手を打っている。

「ソルバーンさん?!」

「シルフ妖精の死舞踏フィードダンス……良いモン見せてもらったぜ」

そこにいたのは業火の魔人だった。彼は親しげな口調で話しかけてゆつくりと距離を縮めてくる。興奮を隠せないらしい口元がニツと吊って、黒い肌のなかに白い歯が好戦的に光る。

（あたしを追ってきたのか……?! くっ、こんなところで暴れられるわけにはいかない）

さっきの一戦で、魔力のほとんどを使ってしまった。目の前には、一度も勝てたことのない魔人がいる。

「相棒、疲れてるなら私が表に出ようか？ 本場の手本も見せられるし?」

「あたしがやる!」

セチがこれ見よがしなことを言うってくる。押し込んで、魔力を開放し剣を抜いた。そのとたん、ソルバーンの足が止まる。

「おいおい、なんのつもりだ？ 血の気の多い奴だな」

血の気で出来たような魔人に、そんなことは言われたくない。震える足元を踏み固め、霞に構えて魔人を見据える。

「どうせあたしを追ってきたんでしょ?」

それを口にするや、あたりには豪胆な笑い声が響く。ソルバーンの野太い声は腹が震え、それだけで戦慄を覚えるほど。

それでも、彼の足は止まったまま。なにより、いつもの熱気を感じなかった。

「……ま、周りの連中もそれなりになってきたようだし? 頭からかじれば、少しは味がするかもしれないねえが……」

舌なめずりを始める彼にぞわっと寒気が走った。ミリアたちもたまらず武器を構えだしている。

あいかわらず、ソルバーンは腕を組んだまま、それ以上近付いてくる素振を見せてこない。

「俺は信用を大事にするクチでな。わりいが付き合わねえぜ」

止めろと手で払い、まっすぐ見下ろしてくる。イリアの傭兵なら分かるだろう——サングラス越しでも彼の目がそう言っているのが伝わってきた。

「……信じて良いんだね」

「デートの誘いを断るのは男が廃るってもんだが……ここはイリアじゃねえ。手は出さねえよ」

息をぐくつと飲む。これほどの実力者が、だまし討ちなどするはずもないか。覚悟を決めて魔力を解き剣を収めた。背後に目配せして仲間たちの武器も降ろさせ、丸腰のままソルバーンを目で突く。

警戒は解けない。彼の武器は拳闘だし、なにより魔導書がなくても烈火を飛ばしてくるような男相手に。

「じゃあ、なにしに來たのさ。こんなところに」

強者と戦うことが己の価値などと言う彼が、こうして姿を見せる理由なんか一つしかないと言えるだろう。なのに、彼は不思議なことを聞かれたように、額にしわを寄せて首を傾げている。

「俺も傭兵だからな。仕事がありやどこにでも行くさ。……仕事なら、どこでも喰えるからな」

騎士道に縛られない彼ら銀狼の旅団は、依頼さえあればどこへでも飛んでいって暴れまわる殺戮集団だ。

彼が発した最後のフレーズにゾワつと警戒心が逆立ち、剣に手がかる。

(やっぱり?! 誰に雇われたんだ?!)

もしかして……嫌でも団長の顔が浮かんでしまう。リキアに飛ばしてまだ足りないと言うのか。

ソルバーンの腕は解かれないまま。それどころか、見透かされているのか、口元には嘲りが浮かびだしている。

「信用してねえ顔だな。能天気だった頭も、ずいぶん回るようになったじゃねえか」

「なんだと！」

「安心しろよ。今回の標的はお前じゃねえよ」

こちらから抜くわけにはいかない今は、挑発されても彼を信じるしかない。剣から手を離して一步退いたら、後ろから矢のような声で押し出された。

「何しに来たか、リーダーが聞いてるんすよ！」

「ああ……？ 誰だテメエは？」

早くいなくなれと威嚇でもしたつもりみたいだが、相手が悪すぎる。

ソルバーンに一瞥されたたん、飛びあがったミリアがすごすごと後ろに隠れてしまった。

代わりにじつと睨んで、シャニーは目で同じことを問う。

「元氣か見に来ただけだ。せつかく気づいたのに腐ってもらったら困るしな」

彼の言葉にシャニーはぎよつとした。やはりまだ、彼は獲物を見る眼を注いで舌なめずりしているのだ。

「このくらいで腐るもんか」

「ハッ、居場所を見つけたようだな？」

「おかげさまで。もちろん、必ずイリアに帰るけどね！」

「先代以上……か。フツ、イドウヴァが焦るのもうなずけるぜ」

母とイドウヴァの名前が出て思わず心が引つ張られたが、なんとか抑えこんで背を向けた。

「おあいにく様だけど、あたし達も忙しいから失礼するよ」

早くこの男から離れた方が良くと第六感が叫んでくる。仲間たちを後退させ、彼らが天馬のもとへと戻ったのを後ろ目に確認すると、ホイッスルを吹いて相棒を呼ぶ。

「……精々、剣を鍛えておくんだな」

「なによ、いきなり」

「それとも、賊を蹂躪して悦に入るような剣だったか？ セチの剣つてのは」

驕慢な言い草を続けられ、眉が吊りあがる。彼は説教を垂れにわざ

わざ来たというのか。

言い返そうとしたときだ。ふっと意識が後ろに引っ張られた。「フツ、見てるといい。相棒はキミなんか目をつぶっても倒すようになるさ」

まわりがギョツとしているのが見える。意思とは関係なく視線はソルバーンを突き刺し、勝手に体が動いている。なのに自分の視界は自由に動く。なにより……この口調……。

「ほう？ セチか。久しいな」

答えにたどり着いたのと同じタイミングで、ソルバーンが正体を口にした。

（のっ、乗っ取られた?!）

仰天して声も出せないうちに、セチは嬉しそうに話を進めていく。「ひさびさで私もウォーミングアップしたいし、相手してくれないかな？ キミだって、戦いたくてウズウズしてるんだろ？ ウイン・ウインじゃないか」

恐ろしい。魔人にケンカを売っているではないか。

戦闘狂が喜ばないわけがない。ソルバーンはニツと歯が見えるほど好戦的に笑っている。

「そんな爽やかスマイルされてもねえ。わりいが、舞姫様のお誘いでもパスだ。信用第一なんぞでな？」

それは束の間だった。初めて見た。ソルバーンが舞台に登らないなんて。

「なんだよ、つまんないな。キミくらいなら、いい具合に遊べると思ってたのに」

「千年前の原始人じゃあるめえし。どこでも遊んでいいわけじゃねえ。相棒にあちこち観光させてもらって、社会勉強することだな」

感覚がおかしくなってくる。まるでソルバーンが常識人に聞こえるから不思議だ。恥ずかしいというより恐ろしくなってきた。セチを頭の中から引っ張った。

セチがつまらなさそうにしたかと思うと、今度は逆に引っ張られて、気づいたら視界が元に戻っていた。

「相棒、強くなつてくれなきゃ困るよ。あんなヤツにバカにされたままじゃシヤクだよ」

頭の中から声がする。言われても仕方ない気もするが、言われっぱなしもたしかにシヤクだ。

「言われなくても！でも、ソルバーンさんを相手するつもりはないからね」

こんな狂乱に付き合うために剣を鍛えているわけではない。

怒りの咆哮も魔人の哄笑の前では微風か。あつという間に飲み込まれて、あたりには侮蔑に満ちた太い声だけが響く。

「わりいな。嬢ちゃん程度なんぞこっちから願い下げだ」

買いかぶるんじゃないやねえ——サングラスごしの目が伝えてくる。

彼ははつきり言った。嬢ちゃん“程度”と。まだセチの力を全開に出来ていないのは確かだ。とは言え、彼の言い草は焦りを嫌というほど連れてきた。

(まだ……全然届いていないって言うの?)

颯閃一刀流も、セチの力も、少しでも早くものにしなければ、いつこの男が襲ってくるか分からない。

「デイークに鍛えてもらったようだ」

まるで焦りを読まれたかのようだった。ソルバーンが口にした名前に、気づけば唇を噛んでいた。

「どこにいるか分かったら苦労しないよ。あたしだって会いたいの」

動乱以降、もう二年間も会えていない。聞きたいことは山とあるし、成長した自分を見てもらいたいとずっと思ってきた。

——次会うときは……戦場だ。敵としてな

別れ際、彼はそう言っていた。

会いたい。けれど一歩間違えれば、斬り結ばなければならぬ。

戦場で会えば、自分ではきつと勝てない。殺される……その恐怖より、デイークに刃を向けることそのものが恐怖だった。向けられる自信さえない。

「そりゃ残念だったな。昨日会ったぜ」

「え……」

飛び出しそうになる目を抑えられないまま、声も出せずしばらく立ち尽くす。

あつさりと口にくれた言葉を、にわかには信じられない。このリキアにいるというのか、彼は。胸に拳を打ちつけて、無理やり詰まった声を押しだす。

「ディークさん、元気だった?! まさか、ソルバーンさん!」
「会っただけで喰ってねえよ。安心しろ、いつも通りだったぜ」

天馬の上に手を突いて胸を撫でおろした。本当は、この目で無事を確かめたい。だけど、好きだからこそ会いには行けなかった。傭兵である以上、会ったらそれは、別れのとき。どうしてこうも、傭兵という立場はこんなにもどかしいのか。

（ディークさん……元気かな。色々聞きたいこと、いっぱいあるし。でも……）

強くて、何を聞いても答えてくれて。本当にたくましくて頼りになる背中だった。あの人なら、全て預けてついて行っても大丈夫だと、心の底から思えた傭兵の大先輩。そして、自身の道の師匠。

今頃どうしているだろう。何とか戦場以外で会えないものだろうか……想いを馳せていると、ソルバーンのまわりつくような笑いが絡んできた。

「にしても……お前が本当にリキアにいるとはな。おまけに颯閃一刀流に出会うとは。へっ、面白くなってきやがったぜ」

不敵な笑みで察した。望んでいるのは、あくまで戦いなのだ。

「あやし達はイリアに帰る! 邪魔するなら容赦しない!」

まだ魔人に届かないのかもしれない。それでも退けなかった。イリアには待っている人達がいる。彼らの信に応えるために、避けて通れないのなら立ち向かうだけ。

これだけ火を噴いても、あつさり笑い飛ばされた。

「俺は嬉しいんだよ。同類同士……互いが昇華するのは見ていて気持ちが良いもんだ」

（この人と同類……魔人……）

強気を崩さずとも、心の中では震えていた。一步間違えれば、この業火の魔人と同じ道を辿ってしまう。ふるふると首を振った。そんなものは求めた剣ではない。

「今のお前なら……イリアをどうにだってできる。……そうだろう」

心を読むかのようにソルバーンは聞いてきた。そんなことはないとかぼうとしたら、彼は視線を切った。後を追って見えてきた戦場の跡に、ぐつと言葉を飲み込む。生半可な部隊なら一人で壊滅するレベル。

「あたしの剣は、そんなために手に入れたんじゃないよ！——一緒にしないで！」

一度は飲み込んだ言葉が、さらに押し固められた拳のように飛びだした。

どちらも同じ……ソルバーンのニツと吊った口元はそう言っている。

「そのお前が哀れなもんだ。宿敵にペコペコしないといけないとはな」

まるで心当たりのないこと言いだした。

「宿敵?? どういう——」

「……ま、剣を鍛えておけ」

おまけにそれを聞こうとしたら、知る必要もないと言わんばかりに背を向けて歩きだしたではないか。慌てて天馬から下りると、彼は立ち止まって後ろ目に睨みつけてきた。

「いや……早くセチになれ。風の妖精」

構わず走りだしてソルバーンの腕を掴もうとした刹那、彼はごうつと吹きあがった業火の中でフランベのように爆ぜ、火影の中へと消えてしまった。

一人残されたシャニーは自身の胸をぎゅつと握る。

「セチに“なれ”って……どういうこと?」

空に向かって問うても、もうあの男は返してくれない。ただ、今まではハッキリと言い方が変わった。

彼の本心がどこにあるか分からず、妙な胸騒ぎに心が掻きむしられ

るばかりだった。

闇に溶ける光

イリア東部のエデツサ。短い夏を惜しむように、城下町に人々が往来している。ドアを開けたまま客を待つ店から聞こえてくる声に呼ばれ、彼らは楽しげに吸い込まれていく。

そんな歓楽街を見下ろすように一段高い場所にある貴族街は、今日も普段どおり静かな時が流れていた。重要な話をするには、こうした落ち着いた場所が不可欠と言えよう。

「いやはや、最近のイドウヴァさんの動きには驚かされますよ。昨年とはまるで別人だ」

貴族街の一角にある高級レストランからは、今日もフェリーズの穏やかな声が聞こえてくる。彼はイドウヴァに酒を注ぎながら上機嫌。

「ええ、おかげさまで。去年の後れを取り戻しませんとね」

「あなたのおかげで、計画は順調そのものですよ」

三月までは渋い顔をしていることが多かったイドウヴァも、最近は顔に艶がある。これだけ見ても、団内が上手くいっていることを示していた。

邪魔者が二人もいなくなつて、自身がトップに立てばもう障害は何もないというわけだ。深紅のワインを傾ける口元が上向いている。

「ところで……。『妖精』はリキアでお元気ですか？」

しかし、フェリーズの興味はすぐに逸れた。シャニーの名前が出るや、イドウヴァの顔からそれまでの表情が消える。

「だと思えますよ。まあ、帰ってくることはもうありませんし、気にする必要もないのですけど」

清々する。そうイドウヴァの顔は言っていて、あまり関心がなさそうだ。

「どうしてですか？ あれだけの人材はそういないでしょうに」

フェリーズは困惑を顔に浮かべて続けた。

「国のことを想えば、どう考えても損失の方が大きい選択ではありませんか？」

「そうでしょうか？」

「彼女が話題にあがれば、誰もが同じことを言うでしょう。この俗界には異常とも言える天稟をまとう彼女とあつては……ね」

実際、天馬騎士団から新職制が各騎士団に展開された当時、かなりの反響と動揺があった。いずれは国王とも噂されるゼロットが認め、勲章を与えた者を、国外へ出したのだから必然と言えよう。出向と表向きは説明されても、誰もが追放だと理解する。なにせ、ゼロットがあらたな傭兵契約で出国した一週間後だったのだ。職制が発表されたのは。

「それが困るのですよ」

そんな雑音を跳ねのけるように、イドウヴァは食い気味にそう言っ
て続けた。「彼女は事ある毎に計画を邪魔してくれましたから。今順
調なもの、彼女がいらないおかげです」

天馬騎士団の収支内容は、昨年から格段に向上していた。この
も、昨年は十八部隊の国力向上活動による支出が大きかった。負担が
無くなったぶん、資金配分にも余裕ができるわけだ。

「ハン……。あくまで順調に見えているだけ……。それくらい、あんな
気づいているんじゃないかねえのか？」

ほくそ笑む彼女の顔を、気だるそうに足をテーブルへ上げながらソ
ルバーンがじつと見ている。

イドウヴァの眉間にしわが寄る。どういふことだ——そう目で問
うが、ソルバーンは鼻で笑うと視線を切った。

「聞くところによると、リキアでもぐっ活躍だそうぞ」

ソルバーンはフェリーズが相好を崩す姿へじろつと視線を移す。
彼は嬉しそうにシャニーたちのことを語っている。

この男はいつもそうだった。よく知っている。それこそ、彼女が所
属する騎士団の団長以上に。グラスを傾けるイドウヴァは、話に乗せ
られるままに機嫌だ。

「ようやく金を生み出すようになってくれましたよ。エンジェルヘイ
ローの建設費くらいは賄ってもらおうつもりです」

「なるほど、それは重畳」

「ロイ様とのパイプ役くらいで考えていましたが、嬉しい誤算。そし

て、——新たな悩みの種ですよ。あまり名が知れ渡れば、国外に置いておく理由も乏しくなつてきますからね」

今日のイドウヴァはいつになく饒舌だ。

その目が、シャニーのことになるかとギツと切れあがった。グラスをコンと音を立てて置くと、誰を見ているのか鋭く遠くを睨みだした。「早いうちに売買契約に切り替えたいのですが、それができるのは来年の四月……遅すぎる」

「いやあ、惜しい。せっかく気づかれたのに、残念だ。あれを超える剣はイリアにおりましたようか」

フェリーズはイリアから流出した剣を嘆く。それを聞いたとたん、サングラスの奥でソルバーンの目がギラッとフェリーズを捉えた。

「気づく……？ 何のことでしょうか？」

イドウヴァひとりが、彼の口にした言葉を理解できずに首を傾げている。たまによく分からないことを言う人……その程度の認識か。

「名刀は優れた使い手の下で躍動してるぜ。活き活きしてやらあ」

フェリーズの代わりにソルバーンが口を開いた。その言い方が気に障ったか、イドウヴァは露骨に目元をピクリとさせて低い声で聞き返している。

「ソルバーン、一体どういう意味ですか？」

「あそこが本来の居場所なのかもな。そのくれえ、爽やかだったぜ。まさに初夏の青い花ってな」

それを聞いてイドウヴァの顔が曇る。直後、今度は口元をギリツとさせて怒りが滲みだした。

「絶対イリアに帰ってくるって意気込んでたぜ。どうするよ、イドウヴァさんよ」

帰ってくるときに楽しみなな——まるでソルバーンの口元はそう言っているかのよう。

とつさにイドウヴァは視線を逸らす。それでも、一度咳払いをして口元に笑みを浮かべた彼女は、戻した視線でソルバーンを睨むように見つめた。

「心配には及びません。彼女が帰ってくることはありませんよ」

冷然な声で断言した。彼女の余裕は当然のものと言えるだろう。シャニーが天馬騎士団所属の騎士である以上、常に首には鎖が括りつけてあるようなもの。

片道切符に帰る手段などない。関所を抑えてしまえば、彼女は入国できない。通関なく国境を突破すれば領空侵犯になる——天馬騎士なら誰でも頭に刻みこんでいることだ。

これでどうだと言いたげな彼女の安堵を、ソルバーンはふっと笑っている。

「イドウヴァさん、そこまで不要なら私どもの騎士団に譲っていただけませんか？」

今がチャンスと言わんばかりに、フェリーズが切り出した。

彼は去年、シャニーが聖天騎士団との契約違反を犯したときにも、救済策として同じ提案をしていた。あのときは、うまく前団長テイトにかわされていた。

新団長に体制が変わって、その彼女はこういうわけか魔剣を放り捨てようとしている。チャンスに映ったのだろう。

しかし、その算段は外れた。

「申し訳ありませんが、きつとロイ様がそのまま買い取ると思いますよ」

退団届を出してくるのを待っている状態。イドウヴァにすれば、シャニーたちは天馬騎士であって、もはや天馬騎士でないも同然と言ったところなのだろう。

フェリーズはよほど驚いたように身を乗り出している。

「ロイ様が、ですか？」

「ええ。どうも、逢引するような仲のようですので。放っておいてもロイ様は申し込んでくるでしょうし、動きがなければ、手ずさびていど程度にね」

「あなたも……恐ろしい人だ」

「ふふ……。もう、一度ルールの上を走りはじめた彼女の行く先は、変わることはないでしょう」

いったい、いつから彼女はこの作戦を画策していたというのか。そ

の場の二人も初耳らしく顔を見合わせている。

「ま……それがお互いのためってかねえ」

気だるそうな声でそう口にしたソルバーンは、長いあくびで場へばりつく辛気臭い空気を押しだし、サングラスの下から横目でイドウヴァを見てニヤリとした。

「それだけの敵意で追放しといて今さら国へ戻せば、どんな反抗を仕掛けてくるか想像もつかねえ。まして、配下でなくなりやあ、その剣が向く先を抑え込めねえし。……どこへ向くか、考えるまでもねえわなあ？」

ソルバーンの目と言葉に串刺しにされたイドウヴァはぐつと黙り込んだ。まるで竜にでも睨まれたように、目を震わせて息が荒い。

「そうですか、残念です。ところで、アルマさんはお元氣ですか？」
「彼女には本当に助けられています。今日は傭兵契約で席を外しているのです」

フェリーズがあっさり引き下がってほっとしたのか、イドウヴァの口からこわばりが消えた。

シャニーのときと違い、アルマを語るイドウヴァの顔はなんと嬉しそうなことか。

副団長になってからアルマの働きは素晴らしく、ここまで計画が順調なのは彼女の貢献も大きい——饒舌にイドウヴァは右腕を褒め、先見の明があったとでも言わんばかりに鼻にかけている。

「そうなのですね。いやあ、天馬騎士団は本当に良い人材をお持ちで羨ましい」

「そうですか？ 私は聖天騎士団が羨ましいですけどね」

本音か社交辞令か、よく分からないことを言いながら酒を酌み交わす二人を、ソルバーンはサングラスの奥でじつと横目に睨んでいた。



情報交換を終え、密会は解散となった。

天馬が飛び去るのを見送り、帰路についたフェリーズをソルバーンが追う。

「おい、フェリーズさんよ」

「おや。ソルバーンさん、どうしましたか？」

振り向いたフェリーズは首を傾げている。彼の視線の先には、レストランで見せていたような気だるそうな顔ではなく突き刺すような眼光があった。

「あんた……数日前にリキアにいたよな？」

ギロつとサングラスの下から白金の司祭を突く。すると、フェリーズはさも驚いたように口をおつとあんぐりさせてみせた。

「おや、どこかでお会いしましたかな？」

「テメエのそのクセエエーギルを気づかぬえわけねえだろ」

「これはこれは。そんなに気になりますか？」

「どうにもあんたのエーギルは、ニオウ」んだよ。俺ら」みたいな存在でもねえのにな」

いつも通りの柔和な笑みを浮かべたまま、フェリーズはソルバーンの眼光を全身に浴びても微動だにしない。それどころか、それがどうした——くらい余裕がある。

「……この短時間でどうやって戻ってきたんだ？ 異能でも使わなきゃ、不可能だろ？」

天馬騎士でもなければ、リキアからイリアに戻るだけでも二週間は要する。

ソルバーンがシャニーと接触したのは二日前。あの時点で、彼はフェリーズのエーギルをリキアで嗅ぎとっていた。

「魔人殿と同じですよ」

「俺とだと？ なんだ、じゃあテメエは一体」

ニコツとしながら、息を吐くようにフェリーズは返した。そこまで言えば分かるだろう……彼の穏やかに笑う口元がそう言っている。

新たな疑問をソルバーンが投げつけると、フェリーズは深い声で哄笑して見せた。

「はは、真に受けなくてください。郵便配達为天馬騎士にお願いして乗せてもらったのですよ」

ただの偶然、そう言つてフェリーズは笑っている。ソルバーンの目

元が一層に厳しくなった。

「ならもう一個答えてもらおうか。『妖精』がセチに昇華しかけているのをなぜ知っている」

「ほう？」

「聞き方を変えるか。……ただの坊主が、どうやって気づいたのを知ったんだ？」

精霊の話を知っているのは、世界でもごく一握りの人間……いや、同類だけ。伝承としては世界に広く伝わっていても、そのエーギルの動きは一介の人間では追えないはずの領域にある存在と言える。ましてセチは、千年前から姿を消し、ようやく最近目覚めたばかり。せいぜい寿命百年の人間族に、そのエーギルがセチだと分かるはずも無かった。

「私はエミリーヌ様にお仕えする司祭ですから。女神の啓示を受けたのですよ。ほっほっ、これ以上は、団内秘……ということで失礼しますよ」

最後まで柔和な笑みを崩さないまま、彼は帰りの馬車に乗り込んだ。

その馬車が地平線の向こうに消えるまで、ソルバーンは標的を捉えるようにじつと睨み続けていた。

「あのエーギル……俺とおなじ異界のモンだ。しかし……喰ったことねえ色だな」

敵は身内にあり?!

昼下がりのフェレ城。昼休憩の時間を使って、シャニーは日向で昼寝を決め込んでいた。城壁に寄り掛かって目を閉じていると、じわーっと体中の疲れが溶けだして風に飛んでいく気がする。

ところが、そんな穏やかな夏の風がふいに怒気を含みだして、シャニーはぱちつと目を開いた。

「シャニーー！ ちよつとー！」

勘が騒いだ直後、奥の曲がり角から爆風にも似たルシャナの声が響いてきた。慌てて飛び起きてきよろきよると辺りを見渡す。まだ彼女の姿はない。

（うわあ、あの声、絶対角生えてるよ！ にーげよつとー！）

持ち前の素早さが一番に活きるときと言える。バネのように飛びあがり、声が聞こえてきた反対へ駆けだすと廊下を勢いよく曲がる。

そのとたんだった。ドシンと何かにぶち当たって跳ね返されてしまった。床へ思いきりお尻から着地してしまい、顔をしかめながら何事か見上げて目が真ん丸になる。

「シャニーか、丁度良い！ 今日も手合わせを！」

アレンだった。彼は白い歯を見せて嬉しそうにすると手を取ってきた。

（だーっ!? なんでこんなときに!!）

アレンに捕まり、背後からは突き刺すような視線。ついにルシャナに見つかってしまったらしい。足取りをさらに早めているのか間隔が短く、大きくなってきた。

万事休すと覚悟を決め、首根っこを掴まれて猫のように大人しくする。

「アレンさん、申し訳ないですけど、シャニーは別の仕事があるんです。ミリアー！ アレンさんとデートしておいでー！」

ルシャナはシャニーの様子を笑って見ていたミリアアに指さした。さされたほうは目をぎよつとさせて固まっている。

「いやあ……ウチあんな激しい攻めはちよつと……」

「狙撃手殿か！　うむ！　なかなか経験できぬ戦い、ぜひ再戦を頼もうか！」

「はうあ……。受け止められない愛ってこういうのを言うんスカね……」

アレンにとっては稽古ができれば誰でも良いらしい。ミリアは諦めたのかアレンに引きずられていった。今だけはミリアが羨ましい。

「で、シャニー。あんたちゃんと計算しなよ」

「あつ、イテー！」

アレンたちを呆然と見送っていると、頬を手先で叩かれ意識を引き寄せられる。

ルシヤナの方を振り向くと、今度は頭をポコッと小突かれてしまった。何事かと反射的に頭を擦っていたら、ずいっと突き出されたのは予算表。ようやくルシヤナの角の原因を知ったものの、とっさにへんな声が出た。

「えー！　またあたしのせいなのー?!」

「この期に及んで逃げ出そうとでも言うの？」

「ち、ちよつと待ってよお！」

手をバタバタさせて抗議したら、お前以外に誰がいる——そんなジト目が飛んできてブンブンと首を振った。今回ばかりは濡れ衣なのだ。ルシヤナはそれでも信用している顔ではない。

「違うの？」

「違うよう！　あたし今回やってないし、字違うじゃん！」

その場で数字を書いて、予算書の中の字を指さした。

これ以上ない証拠を突きつけたのに、ルシヤナの眉がぴくつと動いたではないか。間違いを認めるどころかさらに険しくなってしまう、頭にビリつと戦慄が走る。身の危険を覚えてぎよつと後ろに退くと、両手を広げた彼女に鼻であしらわれてしまった。

「日頃の行いってヤツだね」

入団からずっと十八部隊の予算書を担当してきた。たしかに、合っていたためしがない自覚はある。イリアにいた頃は、ウツデイが見てくれるおかげで問題にならなかった。

しかしながら、ここはリキアだ。遠方から発送して間違っていると厄介ということで、最近ルシヤナがチェックしていた。

どちらが部隊長か分からない状態ではあるものの、今回の間違いは本当に自分でないから気楽なもの。ルシヤナもわかってくれて雑談が始まった……と思っただのが間違いだった。

「あたしほど良い人なんて——」

「やってないってことは、誰かにさせたんだよね？」

「え？っ……?!」

「仕事をサボるような奴が善人であるはずないでしょ」

まさかそのコースで攻めてくるとは思ってもいなかった。ギクツと目が点になって口元もフリーズする。

(うげげ……今日のルシヤナはキレが違うぞ)

まあいいじゃん——なんていつものように言ったら、しばきあげられそうな空気だ。

必死に弁解の言葉を探す。なんだか、推理ものの犯人役みたいに追い詰められた感じになってきた。でも、彼らのように頭がキレるわけでも、用意周到にしたわけでもないから、斬り返す言葉など思いつかない。

「ほ、ほら、人には得手不得手ってモンがさ」

ほんの出来心……とは言えずにそれっぽいことを口にしてみるが、ぜんぶ見透かされている気がする。

こちらの言い訳なども聞いてもくれず、ルシヤナは辺りを見渡している。嫌な予感がして一緒にきよるきよるすると、じつと見つめる。『共犯』の視線とすぐにぶつかった。

「レン、何で手を打ったの」

問われた本人より、シャニーの方がドキンとして髪を逆立てた。レンに視線を向けても、彼女は申し訳なさそうに眉をひそめている。

「……パンケーキ」

(ああああ！ レンの裏切りものお……!)

レンは素直に白状してしまった。体中をビリビリ悪寒が走って頭が真っ白になったところに、ギンとしたルシヤナの視線が刺さる。

もうダメだ。静かに俯いて、大人しくルシヤナから説教を受けるべく身構えた。大丈夫だ、命までは取られない。いや……殺されるヤツか。味見のように、さっそくお尻を引っ叩かれる。

「まったく、あんたってヤツは。こんな不真面目でロイ様が幻滅したらどうするつもりなの」

「うー……ご説教もつてもですけどお……」

「ふらつといなくなったと思ったらデートに行ってるし、予算はサボるし、部屋で下着のままふらふらするし」

もう一度頭を小突かれて、あれこれと前科の数々を浴びせられてウンザリだ。まるめた予算表で頭をパシパシされてもガマンしていたが、最後のフリーズを聞くや火山が爆発した。

「最後のはあたしだけじゃないじゃん！」

「シャニーとミリアだけだと思う」

共犯だったレンに今度は背後からグサつとやられた。

そこくらいは味方して欲しかったのだが、絶対に違うと侮蔑の眼差しが飛んでくる。ルシヤナに視線を送っても、やつぱり返ってきたのはジト目だけ。追い詰められてカツクリ首を折る。

「おつ、そう言えば明日だね？　愛の告白」

叱り終わって満足したのか、ルシヤナが話題を変えた。

よくぞ聞いてくれたと、それまで懺悔に沈んでいたシャニーがぼつと顔を上げる。ロイにごはんをご馳走するそのときが、ついに明日と迫っていた。

「うん！　ルシヤナ、二人をお願いね」

「ああ、任せておいてよ。そんなことよりさ」

ルシヤナに任せておけば、ロイだけに集中できる。あらためて頼もしい言葉を聞けて安心した——はずだった。

ずいっと顔を寄せてきた幼馴染の顔には、いつもの厳しい副将としての顔はない。もうこれだけで、ぞくつと嫌な予感がわつと広がった。

「また下着でお出迎えすんの？　何色で攻めるのさ？　赤？　黒？　金とかか！」

酔っているときのノリをそのまま持ってきた感じにガンガン攻めてくる。壁に追い詰めて白状するまで離さないと言わんばかり。焦って視界を逸らせば、背後では何をメモするつもりか、レンがペンを握っているのが見えた。

「えへへ。それはねー、ヒミツ!」

適当に返し、隙を見つけてルシヤナの脇からするつと脱出する。すると、彼女はとんでもないことを口にした。

「おーッ! やっぱり? この前、お店に行ってたからそうだと思うたよ」

「え、あれはふつーに……って! なに後つけてんのさ!」

目にボツと火が走り、また火山が爆発した。

まるでストーカーだ。部隊ぐるみでやられていたと思うとぞつとする。今も隠すなど肘で突いてくる幼馴染は悪魔以外に映らない。彼女は諦めてくれないらしく、ポンと手を打ってきた。

「おっ、そうか、エプロンで襲うの? ねえねえ!」

頬をぶにぶにと突いて迫ってくる。本当に応援してくれているのか分からなくなってきた。もしかしたら、連れ出すと言っておいて天井裏に潜んだりしないだろうか……悪い汗が垂れてきた。

「ヒミツったらヒミツなの! ふつーに応援してよ!」

ルシヤナのニヤニヤに、今さらになって不安になってきた。このままだと変な方向に行きかねない。

脱出を図り、電光石火に厩舎へと飛び込んだ。今日は夕方からオスティアまでロイを連れて行く予定だ。そのときに作戦を変えた方が良いかも知れない。

「予算表なら帰ったらやるからあ! もう許してー!」

仲間たちの足音が聞こえてきて、シャニーは堪らず弾丸のごとく空へと飛び出していった。

ただ……噛みしめる夜

黎にすっぽり包まれる空を月光が明るく照らす、美しい満月の夜。その下を、一騎の天馬が西方へ向けて闇を切り裂いていく。すでに通常手段かのように、今日もロイを後ろに乗せてシャニーはオステイアを目指していた。

「いつも悪いね」

後ろからロイが労いをかけてくれた。

今日はオステイアで晚餐舞踏会がある。馬車なら3時間はかかるが、天馬なら30分だ。前のスケジュールが立て込んだのを口実にロイが馬車を取りやめ、浮いた時間で彼と軽くお茶をしてきた。その足でこうして空を駆っている。

「ううん！ 任せてよ。あたしにしかできない仕事だし、はりきっちゃうよ！」

ロイの腕の中で飛びきりの笑顔を返す。

彼は優しく、そしてしつかり抱きしめてくれる。背中もお腹もすっぽり彼の温もりに包まれて、頭がとろけそう。誰にも邪魔されない二人だけで刻む時。本当はもう少しゆっくり飛びたいけれど時間がない。

「えへへ。あたしね、この時間大好きなんだ！ デートみたいなものだし」

振り返ってみれば、六月は二人で遊びに行った記憶が無い。それでも、寂しいとは言えなかった。

本当はちよつとの時間でもどこかに行きたいのだが、リキア同盟の動きは活発らしい。ロイは連日のように会合へとさらわれ、フェレに帰ってこない日も多かった。

「最近すまない。忙しくてなかなか時間が取れなくて」

それに気づいたようでロイが詫びたが、シャニーは笑顔のまま首を振った。

「へーきへーき！ いつもお疲れ様。みんなを動かしてカッコいいなって思っ見てるよ」

年は一つしか違わないのに、大勢の貴族たちに力強く語り、国を動かしていく姿は本当に憧れる。彼のためなら何でもするし、我慢だつてできる。

もう、覚悟はしつかりと決めたつもりだ。後は明日、彼にそれを伝えるだけ。本当は、もう今すぐにも本当の気持ちを伝えてしまいたいけれど、こんな隙間の時間で済ませるような話ではない。

今は目の前の幸せをぎゅっと確かめるようにロイへ背中を預ける。

「シャニーにそう言ってもらえると、頑張ろうって思えるよ」

「ホント?!」

言ってもらいたい言葉の一つをかけてもらえて、たまらずテンションが上がりヘンな声が出た。

「どんなに遅くなっても、いつもシャニーは起きてて、真っ先にエントランスまで迎えに来てくれるじゃないか」

「えへへ。だって、早く会いたいんだもん」

「君の笑顔に労われると、どんな疲れも取れるよ。ありがとう」

ジンと震える心を抱き寄せるように、彼の腕が優しく、でもしっかりと包んでくれる。離れたくない……そう言ってもらえているみたいで、そつと目を瞑って温もりに浮かぶ。

(支えになれているなら、あたしも幸せだよ)

憧れの人の支えになる。その夢が叶い、こうして彼も優しく包んでくれる。これ以上の幸せなんて無いと思えるほど、心が温もりに満たされて広がっていく。

早く夢から醒めて、その向こう側へ——もつと彼の近くに行きたい。その気持ちを今はぐつと抑え、オステイアの方角を見つめて進路を調整する。

「舞踏会かあ、いいなあ。あたしも踊れたらなあ」

イリアで晩餐舞踏会と言えば国賓の接待くらいだ。エデツサ城でたまに催されていたが、警備要員にとつてはまるで縁のない話で、踊ったことなど一度だつてない。あるとしたら、子供の頃にお遊戯で習ったイリア民謡くらい。

「少しやれば慣れるよ。今度行こうよ」

ロイはさつそく誘ってくれたが、まわりは教養のある貴族ばかりだ
と思うと顔が熱くなった。はにかんで見せて甘えておく。

「ちよっぴり恥ずかしいかなあ。ロイ、教えてよ」

「もちろんだとも」

「えへへ、お誘い楽しみにしてるね」

ロイが相手なら、失敗してもきつと大丈夫。今から練習が待ち遠しい。別に豪華な衣装や舞台がなくなたって、彼と踊れるだけで胸が高鳴る。

傭兵のはずがこんなにロイの傍にいて、いつでも話しかけられる心の距離。本当に夢を見続けているのではないかと思えてしまう。おまけに、舞踏会なんて雲の上の世界にまで連れて行ってくれようとしているのだ。思わずその光景を思い浮かべてみる。

(ロイと舞踏会かあ……。ああ、うっとり)

彼のいい匂いに包まれながら思い描く舞台は夢心地で、顔がふやけないようにするのが大変だ。凜々しい彼とずっと向き合っている時間なんて、湧き上がる気持ちに言葉が見当たらない。

すぐにそれが現実となるように祈り、残り短くなってきたオステイアとの距離を惜しみながら天馬を駆る。



中庭に走る松明の列に照らし出された石畳の道に沿って、正装に身を包む若者達が雑談しながらゆっくり屋敷へ向かう。

その石畳を滑走路に見立てるように、ほうき星にも似た白き天馬が漆黒の空から突如舞い降りた。

颯爽とロイが降りたつ光景に、周りが驚いたのは言うまでも無い。ざわざわする周りをよそに、ロイは後から降りてきたシャニーを労うように、彼女の両腕へ手を添えて抱き寄せた。

「ありがとう、シャニー。帰り、気を付けてくれよ」

「行ってらっしゃい！ あたし、ここで警備がてら待ってるよ」

片道だけとかイヤだ。帰り道もロイを独り占めできるのに、ひとりで帰るなんて切ない。城に帰ってもロイがいないのではやることは

ないし、どれだけ遅くなっても最初から待っているつもりだった。

「じゃあ、帰りに城下町で遊んで行くこうか」

「やったあ！ 楽しみにしてるー！」

ふいのデートのお誘い。周りの視線などお構いなしに、シャニーは声を上げてはしゃいでしまっている。

時計をもらったあの夜以来の、本当に久しぶりのデートだ。嬉しきで見送る手もぶんぶん振り切れそう。館の中にロイが消えるまで、笑顔のまま見送った。

彼がいなくなると急に切なくなってきた。

周りには誰もいない。人はたくさんいるが、知っている人は誰もいないし、何よりシャニーには自分が浮いて見えた。

白の軍服は闇夜の中でもくつきり浮かび上がって、鮮やかな青髪と相まってとても目立つ。

(それにしても、どっち見ても貴族しかないなあ。ははっ……——あたりまえか)

何より、平民は自分しかないような気さえする。

警備するとは言ったが、元から警備の騎士はいる。さっそく暇になつてぶらぶらしても、リキアに天馬騎士は珍しいのか、周りの目気がなくなって落ち着いていられない。あたりを見渡していたら、いつしか目の前の煌びやかな館に吸い込まれていた。

ホールをぶらついてみる。いくら周りが貴族だらけでも、騎士の格好をしていれば誰も怪しんだりしないから散策し放題というわけだ。好奇心が爛々とうずく。

「いいなあ……こんな世界もあるんだなあ」

ホールに入った彼女は、目も口も驚きと笑顔にわつと開いて立ち尽くした。

高い天井、煌びやかなシャンデリアに琥珀色の灯が七色に輝く。柵橘系だろうか、仄かなアロマが館を包み、向こうからはクラシカルなヒーリングミュージックの生演奏が聞こえてくる。

知っている日常とは、まるで別世界が広がっていた。

(誰と躍ってるんだろう……ロイ)

踊れない自分が悔しくなってしまった。彼の相手を一体誰が務めているのか無性に気になる。

悶々と考えていたら、ふと向こうから大きな笑い声が聞こえてきた。

「そーいや聞いたか？ 最近、ロイ様にお熱の相手がいるらしい」

ロイ——その名前につられて声のほうを見る。

背の低い太った丸鼻の男性が、背の高いレイピアのような男性相手に噂話を振っていた。どちらも服装からして貴族に違いない。

(あたしの噂してるのかな)

彼の口にした話は、間違いなく自分を指している。なんだか恥ずかしくて堪らない。目がきよろきよろしてしまい、傍にいた貴族に怪訝な眼差しを送られた。慌てて頭を下げてすぐ立ち去つてみたものの、続きがどうにも気がかりで戻ってしまった。

人ごみに紛れて男性たちに近づくと、物陰から聞き耳を立てる。

「へえ。ま、ロイ様も人の子つてわけか。聖人だろうが一人くらい好きな女もいるだろうよ」

さして興味もなさそうだった長身の貴族は、すぐに手にしたワインへ視線をおろす。一方の丸鼻は、ここからが本題と切り出した。

「それがその相手がよ、イリアの天馬騎士なんだと」

それを聞いたとんだ。長身の貴族は腹を抱えてケラケラと笑い出した。

耳につく嫌な笑い方。シャニーは物陰で眉をひそめていた。

「ハッ？ 傭兵なんかのケツ追っかけてんのか」

ここにいるのを知っているのではないか。まっすぐ侮蔑を投げつけられているような感覚に陥る。彼が口にした言葉は槍のごとく簡単に心を貫いてきて、何の守りも持ち合わせない彼女は瞳を震わせていた。

(傭兵……なんか……)

思っていた通りの光景が今、目の前で現実となっている。彼らにとってはやはり、そういう認識なのか。自分たちの世界の下にいる、

使い捨てるだけの存在なのか……。

それでも続きが気になって動けない。突き刺さった槍をねじ込むように続く笑い声。ケラケラする姿を、唇を噛んで遠くからじつと見つめる。

「な。あんなハイエナ連中なんか引つ張らなくたって、いくらも周りにいるだろうに」

「傭兵なら適当に遊べるからじゃねえの。奴らも半分そっちも仕事みたいな感覚だろ」

拳が震えだす。あまりにも好き放題言われて、突き刺さった槍の間からマグマがあふれてきた。

ここまで酷く罵られても、なにも言い返せない。傭兵だから——信用第一のイリアにとつて、彼らに楯突けば自身の仕事が無くなるだけではなく、国の存亡にすらかかわる。表向きは一線をわきまえる契約になっていても、圧倒的な力関係を盾に、契約などただの紙切れくらいに考えているクライアントも少なくないと聞く。侮蔑されようとも、泥水を浴びせられようとも、ただ辛抱するしかない。それがイリアの傭兵。

(やっぱり……そう見てる人もいるんだな)

今回もそうだ。そう言う人もいる。自身を言い聞かせて怒りを押し込むしかない。ロイをはじめとして、良い人もたくさんいる。

でも、沸々と湧きあがる怒りに震えているのは、イリアへの屈辱だけではない。

「ま、ロイ様も言つて田舎貴族だしな。お似合いかもしれないな」

ギリつと奥歯を噛みこむ。

さつきからあの長身の男は、ずっとロイを貶めるようなことを口にしてる。

憧れの人を貶されるのは決して辛抱できない。剣で切り刻まれるより、矢で蜂の巣にされるより、何より耐えがたい屈辱感が降り注ぐ。血が出そうになるほど唇を噛んで、ただ、男を睨む。それでしか抵抗できない無力が虚しい。

(ロイを……ロイを悪く言わないでよ！)

目の前で起きている光景は、ずっと抱えてきた不安^{悪夢}だった。不安が現実になると、それは一気に恐怖を連れてきた。

「オスティア淑女をヒイツと言わせる自信がねえのかもな！」

「ハハッ、違ういな！」

その恐怖に止めを刺すように、男たちは突き刺した槍を足で蹴り込んで奥底をぶち破る。

一番恐れていたことだった。絶対にこうなると分かっていた。

彼は傭兵とか関係なく愛してくれている。そう心に言い聞かせてやつと覚悟を決めたのに。ようやく恐怖を否定できるようになってきた薄氷の守りは、あまりに鋭い一撃を前にいとも簡単に突き崩されて、夢とともに粉々に砕け散った。

(やつぱり……—ダメなんだ……—)

色を失った顔に、崩れた瞳がぼんやりと男たちを映す。

夢が醒めるように周りが滲んでくる。

夢の向こう側にあったものが、こんな悪夢なら、もう早く醒めて欲しい。そう零れた涙にはつとずる。

(どうせ醒めるなら……これだけは……これだけはッ——ハッキリさせてやる！)

操られるように立ち上がったシャニーは、真つ直ぐ男たちを捉えて歩き出す。その鬼気とした眼差しに先に気づいたのは丸鼻の貴族だった。彼は一瞬、目を見開くとすぐに視線を外す。

大きく息を吸いこんで、シャニーは振るえる腹に鞭打っておりつたけを込めた。

「あのっ！」

ワインを傾けていた長身の貴族は、大声を不快に感じたか顔をしかめながら振り向く。見知らぬ顔に一瞬だけ目が驚いたように見下ろしたが、すぐに侮蔑が覆った。

「……何だ？ 傭兵風情が気安く話しかけるな」

正面を向くことさえもしない。切れ上る眦で流し目に見下ろして不快感を顔にしながら威圧する。それでも、柳眉を逆立てて貴族を睨むシャニーは一步も退かなかつた。

不穏な空気に周りも何事かと立ち止まり始め、丸鼻の貴族が友の手を取って場所を変えようとしたときだった。

「ロイ様の悪口はやめてください!!」

はるか遠くまで突き抜ける高い声が響く。

至近距離で怒声を浴びた貴族は顔をしかめると舌打ちし、再びシャニーを睨み下ろし始めた。

敵かないっこない。それでも言わずにはおれなかった。愛する人を馬鹿にされて、しかもその発端が自分では。でも、もうこれが精いっぱいだった。一度俯いてしまうと、もう立ち向かえず、ただ唇を噛むだけ。

そのままシャニーは駆け出した。驚いて皆が道を空け、あつという間に館の外へと消えていく。

「お、おい、あのカツコウ……今のつて天馬騎士じゃねえのか?」

「フンツ、こんな場所に天馬騎士などいるはずなからう」

丸鼻の顔が蒼くなり、ぼつが悪そうに長身も目線を切る。

人が集まってしまい空気は芳しくない。早めに会場を後にしようと踏み出したときだった。

「ちよつとすまない」

ふいに後ろから声をかけられて、彼らは固まった。

夢の向こう側

屋敷のとなり広がる大きな湖。満月を映して静かに夜は更けていく。いつもなら静寂に虫の音だけが響くその場に、今日は館からかすかに人々の愉しむ声が聞こえてくる。

その幸せな調べに掻き消されてしまいそうなほどの、か細い乙女のすすり泣く声が湖面に吸い込まれていく。

館から飛び出して行くあてもなく駆けてきたシャニーが、流れ着いた枯草のように柵に引っかかっていた。あふれる悲痛をただ噛み締めるだけ、佇んだまま動けない。

(やっぱり……ロイの傍にはいられない)

人生で最悪の瞬間。予想はしていたはずだった。だけど目の当りにしたらもう頭が真っ白になって、槍で貫かれたように砕けてしまった。

愛する人の傍にいたい。嘘などないその願いのせいで彼が不要な中傷を受けてしまうのをこの目、耳へはつきり突きつけられてしまうことになった。

突き刺さった槍の隙間から溢れ出た恐怖が腹にヘドロのように溜まって、もうどれだけ自身に言い聞かせても涙しか出てこない。

——『今のあなた』をロイ様は愛してくれているのよ

姉の言葉が脳裏をかすめた。それは分かっている。後から後からとめどなく溢れてくる涙を啜りながら、その言葉から顔を背けた。

(お姉ちゃんとは、事情が違うんだ……)

無理やりそう言い聞かせた。ロイは大事にしてくれる。アレンやランスも仲間と認めてくれている。傭兵の自分を、受け入れてくれる。ここにいてもいいのだと思える優しさに包まれてきた、はずだ。

なのに、何が違うんだ……悔しくて、惨めで、なにより悲しかった。夢から醒めた今、もう行かなくてはならない。夢の向こう側にある、本来居るべき遠い場所へ。

真っ赤な目で湖面に浮かぶ満月を見つめていたときだった。

「シャニー!!」

ふいに後ろから声がしてはつとす。

彼の声を間違えるはずがない。柵から身を離してはつと振りむくと、暗闇の中にかすかにシルエツトが見える。

(ロイ?! なんで? 晩餐会に行つたはずじゃ)

その影はこちらに駆けてくるのがはつきり分かる。

慌てて涙を拭い、両手で顔を引き締めて笑顔をつくると駆けつけたロイを迎え入れた。

「あれ、どーしたの? 晩餐会は?」

「許可は取つてきた。君を迎えに来たんだ。教えるから一緒に踊ろう」

ドキンと胸が弾ける。

このまま、彼の優しさに包まれてしまいたい……焦がれる気持ちは、彼が差し出した手に素直に重ねようとしている。いつもなら、そのまま小躍りしてはしゃいでしまうだろう。

(ロイ……ごめん。もう……)

今日は無理やりその手を下す。槍に深く抉られた心からは、ますます悲痛が噴きだすばかり。

ぎこちない傭兵と踊っている光景を皆の前に晒せば、噂は現実となる。そうなればどんなことになってしまふか。想像するだけで震えがきた。

「あたしみたいな傭兵なんかじゃなくて、みんなと交流してきなよ。そのための会なんですよ?」

さよならを言うつもりだった。

一度下した手を再びロイへ伸ばすと、そのまま彼の胸をトンと突き放した。歪むロイの顔を見ていられずに背を向けて柵に手をかける。

(もう、話しかけないで……)

そう心の中で呟いたときだった。

「シャニー!! 約束したはずだぞー!」

体を押し飛ばすような声が背後からわつと突き抜ける。

ビクンと身体が飛びあがったのが自分でも分かった。今まで聞いたこともないような声。それは、間違いなく大好きな人の声だ。

静寂の戻った畔。今も頭がジンジンして矢で射抜かれたかのよう。背後からはぐらぐらとした怒りが冷めることなく貫いてくる。

(ロイが……怒鳴った?)

くらくらする意識のまま、湖に倒れ込んだほうが楽かもしれない。それでも固まる首を軋ませて、無理やり顔だけ振りむいてみる。そこには、今もまつすぐ見つめてくるロイの目があった。今まで見せてくれていた優しい顔は無い。ついに彼と向き合って視線が合う。

なにも言葉が出てこない。ただ……噛み締めるだけ。

そのうち、ロイは怒りを飲みこむように視線を外した。

「……すまない。僕としかことが。許して欲しい」

彼がこんなに激情へ身を委ねる姿を初めて見た。そうさせてしまったのが、自分だとは。支えたいと願いつけてきたくせに、どうしてこんな顔をさせてしまうのだろうか。

ぐるぐると絶望に世界がまわる。その世界の真ん中で、ロイが一度外した視線をまつすぐ向けるや口を開いた。

「でも、今日はもう言わせてくれ」

さつきより、もっと怖い顔をしている。呆然と立ち尽くす体中に、彼の怒りが突き刺さる。

「僕は君と対等の関係でありたいのに、どうしてそんな風にばかり言うんだ」

彼が求めているものはずっと同じ。

シャニーにとってもそうだった。一番大切なことは今も変わっていない。だけど……。

嵐のように渦巻く渴望と恐怖がどんどん大きくなって、引き裂かれた心は今にも千切れてしまいそうだった。

ついに耐え切れなくなり、柵に寄り掛かりながらその場に崩れ落ちた。

「無理だよ……無理なんだよ……。傭兵なんかじゃ、無理なんだよ……」

最後まで抗って柵にかかっていた手も滑り落ちると、シャニーは座り込んだまま嗚咽を漏らし始めた。ずっと心の中に押し留めていた

言葉が、涙と共に絞り出される。

顔を手で覆い、澹然とする横顔をロイは愕然と見下ろしている。「シャニーは僕にとつて傭兵じゃない。大事な人だ。君は僕のことを、そんな風に見ているのか？」

なぜなんだ——ロイが答えを求めて見つめてくる。とても直視できなくて目を瞑っても、彼の言葉はいつものように優しく抱きしめてくれた。

（大事な人……）

そう言ってくれる人に、なんと酷いことをしているのだろうか。今も目の前には、彼の困惑と悲痛に満ちた顔がある。それを、自分がさせている。

「そんなわけじゃ……」

「前にも言ったはずだ。傭兵とかそんなの関係ない。シャニーだから僕は言っているんだ」

去年の十二月から、彼の言葉は変わっていない。彼の気持ちはもう分かっているし、その言葉に包まれたら心はどれだけ温まることか。

だけど今は、温められるほどに、心が凍てつくように震える。彼の腕の中にはダメなのだ、夢から醒めてしまった今となっては。

「何度でも言うよ。貴族と傭兵なんて関係はやめてくれよ。ロイとシャニーで良いじゃないか」

ロイが近づいてくるのが目を瞑っていても分かる。ますます涙が止まらなくなって、齒を食いしばって嗚咽に耐える。

身勝手に背を向けた以上、嫌われるのは覚悟したはず。それがどうだ。ロイが必死になっているのが伝わってきて、頭がどうにかなくなってしまっそうだった。

（それが出来たら……それが出来たら、あたしだっと思っていたんだよー）
やめたい。やめたいに決まっている。けれども、やめたら最後、恐怖は現実となるに違いない。その一端を垣間見た今、この先に起こることがあまりに恐ろしくてもう前を向けなかった。

喜ばせられないかもしれない。だけど、彼を大事に想えば想うほど、耐え切れそうになかった。

「自分みたいなの、傭兵なんか……もどかしいんだ。僕と君の間にある、その線引きが」

はっとして無意識のうちに体が逃げる。ロイが手を伸ばしてきて、柵に体を押しつけた。それでも、彼が迫ってくる。来ないで――

「――ッ」

高い音がして、ロイが顔をしかめながら手を退いた。

彼の手を払った自分に驚いて喉がひきつり、詫びの言葉さえ出さない。とんでもないことをしてしまった。それだけは、頭が理解している。

愛する人に。これだけ大事にして、重要な舞踏会を外してまで、勝手にふさぎこむ自分の手を取りにきてくれた人に。

本来なら手に触れることさえ叶わない雲の上の人に、なんてことをしたのだろう。

……これでいいのだ。ロイはぐつと拳を握り、奥歯を噛みこんでいる。きつと、怒っているに違いない。もう……――これで終わりだ。

ロイはその顔のまま歩いてくるではないか。また押し返そうとしたら、彼とは思えない強い力で腕を握られて身動きできなくなった。彼は肌が触れるくらい傍に屈むと、顔を覆う手を引き寄せて壁を押し破った。

「シャニーは僕のことか……嫌いなのか？」

愛する人の目がこんなに近くで見つめてくる。恐ろしい言葉をかけながら彼も震えている。

ここで嫌いだとでも言ってしまうえば、すぐ終わるのかもしれない。言えるはずもなかった。このまま何も言わないで終わってしまうなんて、本当の気持ちを伝えないままにいるなんて。

傭兵では釣り合わない……そうサヨナラしなければならぬと思ったときだった。

――もし、ロイが自分以外と結ばれたらどう思う？

ふいに脳裏をよぎった言葉が何度も呼びかけてきた。

マグマに焼けこげ冷え固まった黎き大地を噴泉が突き破るように、みるみるうちに膨れ上がった想い。恐怖も悲痛も何もかもを吹き飛

ばすように、心が理性を跳び越えてありったけ叫んでいた。

「好きだよ！　ずっとずっと逢いたくて……ようやく逢えて、こんなに大事にしてもらえて……好きに決まってるよ！」

真つ白な頭のまま心だけで叫び終わると、なぜかふいに涙があふれてきた。

これが本当の気持ち。彼にそれを伝えられた安堵と、それが許されないことを思い知った絶望と。堪えきれなくなって、顔をくしゃくしゃにしながら俯きかける。

それを、支えるようにロイに抱きかかえられていた。

「僕には分からないんだ。君がなにを悩んで、なにを恐れているのか。教えてくれないか？」

いつの間にか、隣に座り込んだロイに磁石のように身を寄せていて、もう離れられない。慰めてくれるような優しい温もりが頬をなぞる。彼はハンカチで頬を拭いてくれていた。おそろおそろ顔をあげてロイの目を見たら、それだけで彼はほっとしたような顔をして続けた。

「シャニーの苦しみを、少しでも知らないといけないと思うんだ。なにが二人の間に壁を作らせてきたのか。なぜこんなに震えているのか。今までなかなか聞けなかったけど、知らないとその先も苦しめる。そんなのは、もう終わりにしたいんだ」

ぎゅっと手を握られて、まっすぐ見つめられている。さよならのはずが、彼は手放さないと引き寄せてくる。

彼はいつから気づいていたのだろう。言えずにずっと隠してきたこの気持ちを。答えを探して、きつと苦しませたに違いなかった。

(もう……ぜんぶ知って欲しい)

決して手を伸ばしてはいけけないと知った温もりにも包まれて、もう抵抗する術もなくうな垂れた。まるで糸が切れてしまったように動けない。

気持ちの半分は伝えた。あと半分を口にして彼に嫌われたとしても、もうそれで……いや、彼だからこそ知って欲しかった。彼ならきつと受け止めてくれる。

涙を拭い、意を決してロイの顔を見上げた。

「怒らないで聞いてくれる？」

「もちろん。教えてくれないか？」

見上げた先には、いつもの顔があった。優しい眼差しが見下ろして
いて、それだけで涙が出てくる。

もう一度ごしごしと目をこすり、しばらくじっと足元を見つめて気
持ちを整えると、心にへばりついてきた不安を吐き出した。喉が絞
まっとうまく声が出ず、押し出すように弱くなった。

「……怖いんだ。あたしみたいな傭兵が相手に、ロイが悪く思われる
のが。さつきも……」

直前に聞いてしまった貴族たちのやり取りを、そのままロイに伝え
た。それを聞いたロイは、一瞬だけ眦を吊り上げただけで何も言わな
かった。それでも、逸らさず見つめてくれたおかげで途切れながらも
続けられた。背中を包む温もりがただ尊い。

最後まで吐き出し、がっくりとうな垂れると弱り切った体をロイが
抱き寄せた。

「そうか……。すまない。辛い思いをさせていたんだね」

「ううん、あたしはいいの。覚悟してたから。でも、ロイが悪く言われ
るのは許せなくて」

イリアの傭兵としてハイエナ呼ばわりされても、国のためには仕方
ないと割り切ってきた。だけど、愛した人を自分のせいで貶されると
思うと、切り刻まれるようで心が悲鳴をあげた。

ロイが自分以外と結ばれた世界に生きるのは、絶望が降り注ぐ明日
が果てまで続く地獄でしかない。かと言って、傍にいれば一番恐ろし
いことが茶飯事に起こる。

心から求めた幸せが悪夢を呼ぶなら、いつそ醒めてしまえばいい。
夢の向こうにある絶望と、醒めないまま続く悪夢と。悲鳴に両側から
引っ張られ、心は今にも裂けてしまいそうだった。

「ありがとう。話してくれて。……良かったよ、なんかよそよそしく
て、嫌われているのかと思った」

抱き寄せられているこの時間だけが、痛みを癒す心を癒してくれ

る。そんな温もりをくれる人が漏らした弱々しい声にぱつと顔を上げた。

「そんなワケない！ ロイは大好きだよ！」

もう何度でも言える。彼のことが好きで好きでたまらない。心の底から、それ以外に思いつく言葉が見当たらないほどに。

「……でも、世界の英雄と傭兵じゃ……釣り合わないんだって思っただけ」

ずっと、ずっと抱いてきた。それこそ、ベルン動乱で最初に話しかけられたときから。なんで、傭兵なんか……。

でも、話しているうちに仲良くなって、文通を始めたらもう忘れられなくなった。十二月に再会して自分の気持ちに気づき、それから再会することだけを願って来た。

それが、いざ再会したら今度は急に怖くなってしまった。ずっと心の奥底にあった、けれど気づくことを避けてきたものが囁きかけてきて。今夜それが、現実となった。

ロイが一番嫌がる言葉を口にしたことになる。嫌われるかもしれない。そう覚悟を決めていた視線は少しずつ俯きだす。

「前にも言ったろ？ シャニーには、なんでも話せる相手でいて欲しいって」

ぷつぷつ糸が切れたように動かない体を預けていたら、いつの間にか顔の真横に彼がいた。

「僕も君が好きだ、シャニー」

なんの混じり気もない純粹な想い。初めて聞く言葉の余韻にシャニーは思わず振り向き、ロイの顔を真ん丸になった瞳に映したとたん吸い寄せられるように動けなくなった。

(言ってもらえた……)

いつから、ただこれだけを求めていたのだろう。胸が震えて言葉にならない声が漏れ出てくる。

月光の映り込む青い瞳をロイはじつと見つめ、強い言葉で言い切った。

「周りが何を言おうと、僕は気にしない。僕が一番辛いのは、君がいな

くなってしまうことだよ」

体がドキンと跳ねた。ロイのいい匂いが顔中を包む。彼は強く抱きしめて続けた。

「動乱の後に言葉も交わせないまま別れたときも、十二月に見送ったときも。そのあと、君がいなくなつた部屋で北の空を眺めたときも。もう、あの切なさは味わいたくない。もう……このまま手放すものか」

凍りついた翼が蘇るように、押し固められた心が解けて広がっていく。全身が水にでもなつてしまつたみたいに力が抜ける。全てをこのまま、ロイの腕の中に委ねてしまいたい。目をつぶつて彼に身を預けたら、優しい声が強く包んで吸い込まれた。

「千の槍に串刺しにされても、シャニーさえいれば戦える。世界中を敵にまわしても、僕が君を守るから」

夢なのか。夢ならば……醒めないで欲しい。いや、醒めて欲しい。夢ではなく、その向こう側へ二人で歩いて行きたい。

さつきは悪夢と言つた。もう醒めて欲しいと叫んだ。だけど、やっぱりロイはロイだった。

憧れの人の眼差しを、言葉を全身に浴びてシャニーの顔には少しずつ色が浮かび上がっていく。

「だからお願いだ、もうそんな線引きは止めてくれないか？ 君が愛しい。傍にいて欲しいんだ」

(こんなにもあたしのことを想ってくれていたんだ……)

打ち碎かれた心を強く抱き寄せる愛の詩。恐れていたことも、見てしまつた絶望も——ただの夢だ。

今、目の前にあるのは、ロイがくれたまっすぐな愛は、誰が何をしようとして断ち切れない二人で紡いだ絆だ。ハッキリ言える。

この絆を、絶対に裏切れない。このまま、紡いでいきたい。夢を越えてその向こう側へと、二人で軌跡を描いて行きたい。

「もう、絶対に言わないって……約束する」

ぎゅつとロイに抱きついた。今まで我慢してきたぶん、彼の匂いも力強さも、全てを味わい少しでも彼に触れられるように。

「ロイにゼーンぶ捧げるよ。それが、あたしの一番大切なことだもん」
言ってしまった。ロイだけの騎士になろう……そう新しい誓いを
心に刻む。

ロイはなにも言わないけれど、強く抱きしめてくれた。今まで味
わったこともない幸福感に体が浮かんでいるようで、なにも考えられ
ない。考えたくない。今はロイだけを感じて、すべてを委ねていた
い。

「えへへ……ずっとこうしたかった。去年から」

「僕もだ。シャニーが城に来たときは、エミリー又様に感謝したよ」

「バカだったなあ。もっと素直になれば良かったのにさ」

「はは、お互いにね」

彼の声も、匂いも、なにもかも忘れられなかったこの半年。もっと、
もっとお互いの気持ちをもっと早くさらけ出せていたら……そう思うと
ちよっぴり意気地なしかった自分が残念だが、きっとこれでよかつ
た。夢のままではなく、夢から醒めてその向こう側へ二人で歩いてい
ける絆を紡げられたのだから。

（あたしは……—ここにいてもいいんだ。みんなと……ロイと一緒に
でいいんだ）

どれだけそうしていただろう。ロイが肩を抱いて立ち上がった。

「改めて、よろしく」

「（ちんぷん）そー」

彼が掲げた手にハイタッチして返す。こんなに元気な声は自分で
もびっくりする。さっきまで悲しくて喉が絞まって苦しいくらい
だったのに、まるで雲を突き抜けて青空に飛び出したように爽快だ。

「さあ、行こう！ 皆にも紹介したい」

「うん！ ロイと一緒にならどこでも行くよー」

シャニーはロイに手を取られ、二人はオステイアの夜へと消えてい
く。

途切れなく聞こえる笑い声は、今が人生で最高の瞬間と幸せを奏で
るのだった。

蒼と碧の流儀 去りゆく背中

ジリジリと朝から暑い。この時期ですら涼しいイリアと違い、はつきりとした四季のあるリキアの夏。噂には聞いていたけれど、本番を迎える前にすでに熱が体をまとわりついてくる。

「大盗賊団、ラウスを襲撃……」

いつものように新聞へ目を落とすミリアが何やら呟いた。最終ページの占いを見るのが日課の彼女が、ちゃんと新聞を開いているとは珍しい。顔を突っ込んで唸るあたり、よほど考えさせられる記事でも見つけたのだろうか。

「どうしたの？」

シャニーはミリアの横に座ってちよつとだけ新聞を覗き込んだ。でも、やっぱり食欲には勝てない。すぐに持って帰って来た盆の中へ視線を移す。ぎっしり盛った戦利品をどれから食べようか……朝のささやかな楽しみだ。

「あんだ、朝っぱらからよくそんな甘いの食べれるね」

対面で座ったルシャナが盆を覗き込み、うえつと口元を歪めている。

「朝は甘いパンとコーヒーって決めてるんだ」

「パンはオマケにしか見えないけどね……」

「チツチツチ、バランスは大事だからね」

「あんたにバランス感覚があったのは驚いたけど、壊れてると思えばそんなもんか」

「変なふうに納得しないでよー！」

おかずを山盛りにすぎたか、皿の端でシナモンロールは侵食され今にも潰れそう。可哀想なそれをさっそく手に取り、一口するだけでもはや世界は楽園だ。彼女は今、楽園に跳ねていた。

足のバタバタが止まらないくらい、せつかくの至福の時に浸っているというのに、正面からルシヤナの呆れ顔が飛んでくる。

「ちゃんと食べないと体もたないよ!」

「そんだけ食べたならそれこそ体持たないって」

リキアの食事はどれを食べても美味しいのに、ベーグル一個でお腹いっぱいなんてルシヤナはかわいそうだ。

パンをかじりながら彼女から視線を外してみる。ミリアがさつきと同じ格好で固まっていた。そんなに面白いことが書いてあるのだろうか。

「んでさ、ミリアなに見てるの?」

「コレっすよ、この記事見て欲しいっす」

彼女が指さす先を目で追ってみる。事件欄を見ていたようで、リキア各地で起きた事件がいろいろ載っている。

ミリアの指はラウスでの事件をさしていた。ラウスと言えばフェレから近場。最近、ようやくリキアの地名と場所が頭の中にくっついてきた。

「あつ、これか! あたし達がいるのに大胆不敵なやつ! 許せないよね」

それは巷を騒がせている盗賊団の記事だった。どうやらまた大規模な襲撃を行ったらしく、村丸々一個が被害を受けて食料に宝物に、根こそぎ奪われたと書いてある。

幸いフェレへの被害はないとは言え、賊が好き放題するのを放っておけない。まして、境界さえなければ十分飛んでいける場所での事件は、他人事とは思えずなんとも歯がゆい。

「警備を強化しないといけないかね」

「そうだね。フェレがいつ襲われるか分からないし」

ルシヤナに二つ返事でうなずく。すると、横からレンが入ってきた。

「被害はどんどん西寄りに移動してる。フェレへの逆戻りの可能性は小さそうだけど」

彼女は取り出した小さなノートを開いて見せてきた。中には地図

が描かれていて、赤のバツテンと日付がいくつも記されている。盗賊団の襲撃箇所を記したそれは、西へ伸びてどんどんオスティアに近づいているように見えた。

「ホントだ。でもさ、フェレじやなかったら良いってワケでもないしね」

賊の襲撃に怯えるのはみんな同じだ。境界なんてたった一つの線を挟んで、救う者とそうでない者を分けるなんて本当はおかしい。

境界線……いやな思い出がじわりと胃を押し上げた。イリアでの聖天騎士団との仕事の記憶がどうしても滲んでくる。どれだけ正義を唱えても、ルールは絶対なのだ。

「やっぱりラウスまで足を伸ばしたらダメなのかなあ」

「私たちはロイ様の私兵だしね」

ルシヤナも同じことを言った。フェレ家に仕える騎士である以上、それ以外の領地で活動するのは越権行為になってしまう。どこでも飛んでいける天馬騎士は特に気を付けないと、ロイに迷惑をかけてしまうことになる。

「でもさ、こっち見てよ」

そうとは分かっているけど、騎士としての使命感が新聞を指差している。盗賊団襲撃事件の横には、村が一個壊滅したと記されている。ラウスとの境界付近だが、こちらの村はフェレ側のはずだ。

「これもこの盗賊団の仕業っすかね」

「分からないけど、村を襲うなんて許せないよ。あたし達が守ってあげなきゃダメだと思う」

最初はミリアと同じことを考えた。盗賊団が襲撃した村と、壊滅した村はそんなに離れていない。新聞も隣り合わせに記事にして、そう誘導するかなのような配置だ。

やっぱり、自分たちの目で確かめたいし、何より村を壊滅させるような手合いを許してはおけない。

「空からの哨戒なら賊を見つけやすいし、ロイに提案してみよつと」

きつとロイなら、分かってくれる。人々を守るには、これは天馬隊にしか出来ないことだ。ただでさえ、村を襲うような連中が複数いる

となれば、広範囲を短時間で見回る機動力が必要なはずだ。思い立ったら即実行。

ところが、シャニーは踏み出してすぐ立ち止まり、「でも……」そう溢して記事を見下ろしたまま顎へ手をやり口元を曲げた。

「この『やり方』……」

どうにも、二つの事件は違う組織の犯行に見えた。何か引つかかる。かたや壊滅させ、かたや宝物を奪うだけで済ますなどあるだろうか。



朝食を終え、顎に手を添えながら中庭を歩く。今までの経験上、盗賊団同士が近場で狩場を奪い合うなんてことは考えづらい。それにしても、あの壊滅したという村……あんなところに、村などあっただろうか。

そんなことをずっと考えていたら、ふいに正面から呼ぶ声があった。

「むっ。シャニー、グッドタイムミングだ！」

声を聞いただけで髪がネコみたいに逆立った。このまま気づかないふりをしようにも、白い歯を見せながらあれだけ爽やかな笑みを浮かべて正面から来られてはどうしようもない。

「うええっ、朝からバッドタイムミング……」

アレンはいつも恋人を探す賞金稼ぎのように、たまたまとは言えない頻度で朝から見つけてくれる。たまたまボヤクものの、聞こえていないのかお構いなしなのか。

「ちよつと槍の稽古につきあつて——」

「ちよつとじゃ済まないからヤダー——」

ふだんなら運が悪かったとそのまま連行されるのだが、今日は体が軽かった。バッタのように飛び出すとそのまま中庭へと抜ける。この時間に行けば、きっと会える。

しばらくしてロイが本館から出てくるのを見つけるや、シャニーは手を振りながら駆け出した。

「ロイ、おっいー！」

「おはよ。待っててくれたのかい」

「えへへ、まーね。ロイ様だけの護衛ですからくなんてね」

吸い込まれるようにロイの横につけると並んで歩き出す。お互い忙しい中で、朝だけが必ず顔を合わせられる大事な時間なのだ。

「ホントはね、アレンさんから逃げて来たんだ」

「アレンから……?」

「だって！ 朝から槍の素振り1000回とか言うんだよ！」

なにを食べたら朝から晩まで槍を振れる体になるのか教えて欲しいくらい。彼の熱血に朝から付き合ったら、昼頃には真っ白な灰にされてしまうに違いない。

「はは、アレンらしい。彼は本当に熱心だからね。頼もしいよ」

ロイにはまるで危機感が伝わっていないらしい。言うとおり、アレンのストイックな姿は時に尊敬するくらいとは言え、本当はロイに止めさせて欲しいのが本音だ。そっちは今度にして、本題を振ってみる。

「ねえ、最近盗賊団が暴れてるみたいだし、守備範囲を広げたりしたらダメかな？」

ロイは少し驚いたのか、おっと口が開く。

「とても助かるよ。ちょうどお願いしようとしてたんだ。なにかあれば僕の命令だって言ってくれればいい」

「分かった！ じゃあ、山の方を中心にやってみるよ」

二つ返事どころか、なんと気が合うのだろう。そういうことなら、張り切ってがんばれるというもの。ハイっと手を挙げながら笑ってみせる。

ところが、今度はどこかひっかかるような反応だった。ロイは空を見上げながら「山の方か……」とぽつりと漏らしてなにか考えを巡らせている。

「え？ どうしたの？ やめたほうがいい？」

「いや。騎兵がなかなか行けない場所だから助かるよ」

ただの杞憂だったのかもしれない。ロイは労うように背中に手を回して抱き寄せてくれた。山を守備範囲に選んだのはロイの考えと

同じ。彼が求めていることに気づけて、任せてもらえる信頼が嬉しい。

「へへーん。でしょー？ それじゃあ、行ってくるね」

本当はそのまま腕の中にいたいけれど、跳ねるように勢いよく飛び出した。

「ああ、気をつけて。何時ごろ帰るんだい？」

イリアにいた頃は、帰りの時間なんか考えたこともなかった。暗くなるギリギリまで飛びまわり、そのままエデッサに直行で夕飯の流れ。

でも、ここに来てからは違う。夜は夜で楽しみ^{デート}があるから、ロイに帰りの時間を伝えるのは日課と言える。

「んー。とりあえず見回りだから、なにも無ければ午前のうち……十時ごろかな」

「そうか……」

後ろにため息でもついてきそうな、いつもとどこか違う反応。こんな元氣のない声をされたら心配になるに決まっている。

「どうしたの？」

「いや、ちょうど入れ違いだなんて」

思わずポンと手を打った。そういえばお互い朝から忙しいのをすっかり忘れていた。ロイはたしかオステイアでの会合に出してしまわずだ。

「そっか。あゝあ、連れてってもらえないの残念だなあ」

こうした外出のときは最近よく護衛として同行しているが、今日は村むらをまわる予定もあり外れていた。

——あんた！ 昼からデートとはいいい度胸だね！

この前も土産^{スイーツ}を買って帰ったらルシヤナに角が生えたばかり。おまけに、しつかりスイーツは取り上げられて、だ。どっちも大事な仕事だが、バランスにも気配りが必要だろう。

それにしても、自分がいない間しつかり仕事をしてくれた労いにスイーツを買っていったはずなのに、部隊長とはなんとツライ立場だろうか。

「すまないな。今日の会合はあちこち移動するから」

「へーき！ お土産期待してるから！」

「何がいい？」

半分冗談だったのだが、ロイは流れるように快く返してくれた。思わずパンと手を叩いてガッツポーズしてしまう。

「さっすが！ そりゃ、オステイアと言えば老舗デリス・アプリコの夏季限定スイーツでしょ！」

この前オステイアに護衛したときも、帰りの空き時間を使ってロイにご馳走してもらった。あの店のお菓子はとにかく絶品で、とくに季節ごとの限定ものは競争率も高い。手に入れるのはスイーツ好きにとってひとつのステータスと言えるだろう。

「はは、シャニーもすっかりキア通だね。分かった、見てみるよ」

「ヤッター！ よおしつ、今日は100倍働いちやうぞー！」

仕事を認めてもらえて、天使のスイーツのチャンスまでとはなんと心躍る朝だろう。

手を振ってロイと別れ、ふんふん鼻歌をうたいながらスキップして皆のもとへとシャニーは戻っていった。



シャニーと別れたロイは、中庭へと続く道を抜けて馬車を目指すわけでもなく、道から外れて袋小路へと流れていった。道具庫があるその路地は、せいぜい庭師くらいしか訪れることはなく、建屋の影になって朝でも暗い。

「よお。すっかりいい関係じゃないか」

ロイが姿を現すや、腕を組んで壁に寄り掛かっていた男が声をかけて封書を差し出した。

筋骨隆々としてしゃれっ気の欠片もない服装は、色合いが渋いのもあって荒くれそのもので、とても城の関係者には見えない。それでも、ロイはミント髪を短く整えた男を見つけると小さな笑みを作って正面に立った。

「いつもありがとう。助かるよ」

「礼は要らねえぜ。契約だしな」

男はさっぱりそう言うと、両手を広げてハッと笑って見せた。

「あんたも変わったやつだよ。俺みたいなグレーにわざわざ頼るとは」

立派な体躯の厳つそうな男は、晒した上半身に無数の傷を刻む。英雄を前にしても物おじせず、隙なく底が知れない覇気を醸し出しつつも、その口調は気さくで、ロイを見下ろす口元は少し緩んでいるようにも見える。

「そういう方面は得意だろ？ なかなか動きにくい話もあるんだ。頼りにしてる」

「ハン……。ま、金の分くらいはしっかりと働け。俺の流儀から逸れていなければな」

ロイもひと回りは違うだろう大男の前に、まるで友と話すかのよう。その態度に肚が読めないでいるのか、ミント髪の男は髪に手櫛を突っ込みながらドライな反応で一線を引く。それでも、ロイは仕事の話を持ち上げて別件を振った。

「そうだ。この前の話、考えてくれたかい？」

それを聞くや、男の目がピクリと動く。とは言えそれは一瞬のこと、「考えるも何もねえ」ため息交じりに言っただけで両手を広げると何のことやらと言いたげに続けた。

「俺はそんなヤツは知らねえしな」

「またそんなこと言ってるのか」

ロイは困惑した眼差しでミント髪の男を見上げた。その視線に堪りかねたか、口を真一文字に結んだ男は視線を外すと、そのまま目を瞑ってしばらく何も言わなかった。

「どうしてなんだ？」

「どうもこうもねえよ。知らねえヤツと何喋れってんだ？ このオッサンによ？」

ロイからの追撃に、折れた男は面倒くさそうに吐き捨てた。それでも諦めそうにないロイが二の句を継ぐ前に、「ま、依頼は引き受けた。そうやって先手を取ると男は続けた。

「だが、そっちの話はナシだ」

「そうか。それは残念だよ」

「そこまで明確に言われてしまうと、ロイも手が無いのかトーンが萎んでいく。」

あくまでこの件も男に対する依頼であり契約だ。男が彼の「流儀」から判断して首を縦に振らない限り成立しない。にもかかわらず、ロイの顔には納得した様子はない。

「……傭兵つてのはそういうもんだぜ、ロイ様よ。じゃあ、また報告する」

男はそれだけ言うと、背を向けながら手を振って歩き出した。その背中を見つめるロイの脳裏に、あのときの言葉が走る。

——大事だと思うからこそ……離れなきやならねえ。あんたなら、分かってくれるだろ？

ベルン動乱収束直後に、ミント髪の男が口にした祈りにも似た願い。

ロイはギュッと噛みしめると、やり場のない気持ちを抑えられないようにポツリと漏らした。

「君たちは……どうしてそうなんだ」



のどかなフェレは城の外にいても中の声が聞こえてくる。

城から出たミント髪の男が立ち止まって見上げた壁の向こうからは、爽やかな笑い声が聞こえてくる。複数の若い女性のやり取りを聞いていた男は、目を瞑ってほっとしたように息を吐き出しボヤいた。

「ハッ……いつまでもその気にいるんじゃないやねえよ。バカが」

やわらかい口元のまま目を開けた男は歩調を早めて歩き出し、その顔はすぐに傭兵然の厳しさを覆われて表情を消した。

「ま、おあつらえ向きってな。俺にも、おまえにも」

自身に言い聞かせるように一言した男の目は剣のごとく鋭くなり、もう振り向くことはなかった。

最悪の再会

「ありがとね。本当に助かるよ」

「へへっ、そう言ってもらえたら嬉しいよ！」

シャニーは人懐っこい笑みを村人に見せた。

彼女たちは晴天の下、今日もフェレ領の村々を巡っていた。見回りと困りごとの聞き込み。リキアでももうすっかり溶け込み、村人たちとの関係も良好だ。

「困ってることあつたら教えてね。叶えられるように頑張るからさ！」

空に輝く夏の太陽が傍にもいる様な笑み。ニカッとするシャニーに、村人は口元を柔らかくしながらも不思議そうに言った。

「あなた達みたいな部隊は初めて見たよ」

「えへへ、どーもー」

「なんて言うかね、傭兵さんらしくないと言うか」

傭兵——その言葉を聞いてシャニーは一瞬目を伏した。

自身の立場をその言葉一つで片付けるもの。彼は間違ったことを言っていないけれど、何か距離を感じてしまう。「まるでリキアの騎士みたいだ」村人が続けた言葉は、褒めてくれたと分かっていても辛かった。

「傭兵だけどき……」

ぼつりと独白のように漏らしたシャニーは、村人をまっすぐ見つめ、爽やかな声で続けた。

「気持ちと同じだよ。あたし達もリキアを良くしたいって思うもん。みんないい人だし、幸せになって欲しい」

イリアを忘れた訳では無い。

でも、シャニーにとって、愛する人が治めるリキアは第二の故郷。骨を埋めるつもりで慈しんでいるつもりだ。そこには、正騎士も傭兵も無い。期間が過ぎたら金を受け取って帰ってしまうよそ者——そう思われるのは悲しい。

「失礼な事を言ったようだ。申し訳ない」

その気持ちに気づいてくれたのか、村人はハグしてくれた。

「ううん。傭兵なんて思わずにき、何でも教えてくれたら嬉しいな。勉強したいし、あたしたちだから思いつく事もあるかもしれないし」
「ああ。そうさせてもらう。いつも来てくれて頼りにしてるよ」

彼らの気持ちを疑うつもりはなかった。彼らが心を開き始めてくれているのは、よく相談してくれるから伝わってくる。

もっともっと、頼られたい。傭兵さん——そんな言い方ではなく、もつとこのリキアに溶け込みたい。その一心だった。最初は早くイリアに帰る事ばかり考えていたはずが、今ではリキアについてロイと夜遅くまで話す事も少なくない。

「おーい、シャニーー！」

その時だ。遠くから弾む声があった。

騎士様とか、キミだとかばかりで、村人から名前でも呼んでもらえるなんて初めてかもしれない。嬉しさに振り返れば、農具を担ぎながら長靴でガポガポ走って来る男性が見えた。声の様子からしても、何か焦っている様子だ。

「あれ。そんなに慌ててどうしたの？」

「山の向こうから煙が見えたんだ！ 見てきてくれないか？」

聞けば農作業をしていたら爆発音と共に煙が上がったと言う。

シャニーはトンと胸に拳を当て、爽やかな声で即答して見せた。

「そう言う事なら天馬隊の十八番ってね！ 任せて、すぐ見てくるね！」

この辺りはサカとの境界で大小の山々が続く。フェレ城付近に比べると険しく、徒歩や騎兵では行くだけでも苦労が大きい。

空を駆る天馬には地形など敵ではない。広いフェレ領のどこでもすぐに駆け付けられる機動力が、守備範囲と様々な困り事の吸い上げに買って来た。今回も、自分たちにしか出来ない大事な任務だ。

シャニーは仲間たちに目で合図を送ると駆け出し、天馬に飛び乗って颯爽と空へと飛び出した。

「シャニー、山の向こうって……」

風を切り、山を駆け上る。

その途中、レンが腹に落ちないような顔で確かめるように問うてきた。

「うん、村があつたはず」

一旦はそう答えたが、シャニーも引つかかっていた。顎に手を添え、記憶を辿ってみて続けた。

「だけど、廃墟だったよね？」

「ん、前日も前々回も生活してる様子はなかった」

広大なイリアに比べればフェレ領は狭い。暇さえあれば飛び回っている彼女たちにとっては、もはや庭のようなものだ。

山の向こうも幾度となく足を運んだ場所。最初に村を見つけた時は、山と山の隙間にある隠れ家を見つけた気分になってはしゃいだもの。

だが、覚えていた理由はそれだけではない。レンも言うから間違いない。あの村には誰も住んでいないはずだった。そこで爆発が起きて煙が上がる……どうにも理由が分からない。

「なんかイヤな予感がする。急ごう」

第六感がざわつき、シャニーはトップスピードで山を跳び越えていった。



村が見えてきた。やはり、情報通り煙が上がっており緊急度は高そうだ。天馬に降下を指示し、あつという間に地面が近づいてくる。

「！ みんな、見て！」

「負傷者を複数確認」

シャニーの指さす先には人が倒れている。それも、レンの言う通り一人では無さそうで、家々からも煙だけでなく真っ赤な火が見える。

村に火を点けて住民を虐殺する——賊のやり口か。

「一体どこにいたんスカね？」

「それも気になるけど後だよ！」

誰もが抱いた疑問をミリアが口にしたが、シャニーは指示を叫ぶ。

「全員、フォーメーションBで旋回！」

襲撃が現実だとすれば、どこから狙われているか知れない。矢が届かないギリギリの高度を保ち、戦況を確認してみる。

見えるのは、倒れた者と火の手が上がる家々だけ……——動いていない者がいない。

「襲撃した連中が見当たらないね」

「降りて探そう。潜伏してるかもしれない」

ルシャナの疑問にシャニーは即答して高度を下げだした。天馬騎士が降りるなど本来自殺行為だが、彼らは型破りな十八部隊だ。リーダー筆頭に、誰もが地上戦も心得ている。

躊躇いも無く村へ降り立ち、すぐ倒れた者の傍へ駆け寄ったシャニーは首筋に手を添えて首を振った。

「……ダメ。事切れてる」

シャニーには確かめなくとも分かっていた。

ほぼ回避行動すら許されなかったと思われる袈裟斬りはかなり深く、相当の技量と腕力を持ち合わせた者の一撃だった事を物語っていた。

こんな……達人クラスの剣を扱う賊などいるだろうか？ 再び顎に手を添え、一つずつ可能性を潰していた時だった。

「そこのお前！ 止まるっス！」

ミリアが何者かを見つけたらしい。

振り向き、彼女がクロスボウを向ける先へ視線を移したシャニーは瞠目したまま固まった。

「デイ……」

それ以上先が、口が震えて出て来ない。

そんな事、あるはずがない。でも、見間違えるはずも無い。

驚愕と、絶望と。震える口が言葉を絞り出そうとするより先に、心が叫んでいた。ずっと会いたかった人の名を。

「デイークさん?!」

ミント色の短髪、長身で逞しく引き締まる焼けた躰。目元や体中のあちこちに残る戦いの傷跡。上半身は開け、しゃれっ気の欠片も無い疲れたズボンにトレードマークとも言える大剣……——元々たい

「ちょー」だ。

「ディークって、シャニーの師匠の?! こんな山賊みたいなのが?」

「ああ? 誰が山賊だ? 初対面に随分な言い方じゃねえか」

ミリアの言い草に眉間を寄せて威圧してくる男。その声を聞いてシャニーはますます確信した。

この男性はディークだ。ベルン動乱の終りに免許皆伝と一方的に突きつけて、一人でどこかへ行ってしまった恩師。

その彼が何故こんな所にいるのだろうか?

おまけに、彼は村人を縄で縛り、連れて行くこうとしているではないか。色々話したいし、事情だって聞きたい。

ところが、彼はシャニーに視線を合わせるや、不機嫌そうに吐き捨ててきた。

「あんたがこの隊のアタマか? 部下の教育がなってねえようだな?」

「え……」

あんた——ミント髪の男はシャニーに向かってそう言い放った。

きつと違う人を見て言ったのだ。シャニーは左右を見渡したが、男性の視線はまっすぐ突き刺してくるし、きよろきよろしていたら指までさされてしまった。

「ディークさん?! あたしだよ! シャニーだよ!」

堪らず叫んだ。

どうして彼がこんな言い方をするのか分からず、半ばパニックだった。あんなに可愛がってくれたはずなのに、たかだか一年半で忘れてしまう何てあんまりではないか。

「ハン? ディークだ?」

だが、男は更に眉間へしわを寄せ、困惑をありあり訴えながら両手を広げて決定的な言葉を口にした。

「わりのい人が違いだな。俺はディークじゃねえし、お前さんも知らねえ」

「……!」

言葉にならない乾いた声が漏れ、口元が震えて首が無意識に振られ

る。

嘘だと言つて——そう目で訴えても、威圧するような眼差しは変わらない。いつも敵に向けていた目で見降ろされ、崖から転がり落ちる様な気持ちで今にも卒倒しそうだ。

「誤解も解けたようだし、そこ退いてくんねえか？」

ようやく静かになったシャニーを払うように手でジエスチャーし、男は歩き出そうとした。

だが、それはすぐ止まり目元が不機嫌そうに歪む。シャニーは退くどころか一步踏み込んで彼の目をハッキリ睨んだのだ。

「ディークさん……村を襲つたの、ディークさんじゃ……無いよね？」

こんな事、聞きたくなかつた。あるはずが無い。彼に限って、流儀を貫いてきたはずの彼が、まさかそんな……でも、状況的にそれしか考えられない。

「だからディークじゃねえつつの。まったく、しつげえガキだな」

「この人数を一人で……。ディークさんなら、やれちやうよね？」

男は威圧するが、シャニーはお構いなしで睨んだ視線を離さない。答えるまで動くつもりが無さそうな構えに、男は頭の後ろに一度手をやってうんざりした表情を見せた。

しかし、それは一瞬の事。鬼のように彫りの濃い眼光が稲妻の如く走り、シャニーを貫いた。

「……もし俺だと言つたら？」

「こうするだけだよー」

声が聞こえた時には、もうシャニーは風に弾けるように駆け寄り、引き抜きざまの一閃を浴びせていた。

「ちっ?! てめえ!!」

引つ張っていた力から急に解放され、転げる村人。

彼とミント髪の男の間に入るように立ち、シャニーは霞に太刀を構えて男を見据える。村人はこの機を逃すかとすぐ立ち上がり、脱兎の如く消えていった。

それを後ろ目に確かめたシャニーは、太刀を握り直して怒りを叫ぶ。

「見損なつたよ、デイクさん！ 誰の依頼か知らないけど、流儀は通せって教えてくれたの、誰だったのさ!!」

憧れの人の、まさかの凶行。腹からありつたけだめて焔の如き激情をぶつけても、男は舌打ちするだけ。それどころか、鼻で笑って見下ろしてきた。

「ハン？ 毛も生え揃わねえガキが、何講釈垂れてんだ？」

「!! デイクさん！ 目を覚まさせてあげるんだから！」

口汚い罵りも、浴びせられたことはかつて無かった。その彼が今、敵を見る様な目で見下ろしてくる。

許せなかった。その人柄も、仕事の仕方、もちろんその剣も、強さも。その全てを憧れた人に、こんな裏切られ方をするなんて。

目を血走らせ、シャニーは霞み構えの鋒をギンと突き向ける。その姿に、ミント髪の男は大きく息を吐き出すと再び頭の裏に手をやった。

「やれやれ……どうしてもってんなら相手してやるが」

それは呆れだけでは無かった。

そのまま背中へ手を伸ばし、担いでいた大剣をぐっと握って肩に乗せた。仁王立ちする姿から迸る威圧感、まさに戦神だ。

一体どこから攻め込めばいいか……攻め込むこと自体尻込みしそうな庄に押されながらも、シャニーは一步にじり寄り叫んだ。

「みんな！ 手を出さないで。あたしの師匠だ。あたしがケリをつける！」

「で、でも、めちゃんこ強そうっすよ?!」

まさかの命令にミリアが飛び上がるが、シャニーは後ろ目で牽制して念押しした。

「うん、強いさ。めっちゃめっちゃ強いんだよ。あたしの師匠は。ホント……憧れの背中だった。ずっとずっと、ついて行きたかったくらい……」

脳裏に浮かぶ憧れの背中。いつも彼の背中について戦った見習い時代。

握る剣も、構えも変わった。それでも、彼の教えを忘れた事は一日

とて無い。傭兵としての流儀も、戦士の気構えも、そして剣使いの心も。彼の背中から全てを学んできた。

全ての礎を作ってくれた恩人。その人が、道を踏み外している。彼の流儀から外れた剣を握り、立ちほだかっている。

震えてくる。

見習い時代、あんなに大きく見えた人。シャニーだつて強くなつた自信はある。その自信を易々押さえ込む恐怖は、彼の強さだけ何かでは無い。

こんな場面、決して来て欲しくなかつた——その気持ちをぐつと押さえ込み、シャニーは自身に言い聞かせるように叫ぶ。

「だからこそ許せない！ 行くぞ！」

「なんかすげえとばっちり食らつた感じだが、しゃーねえ。それがためえの流儀つてなら受けてやる」

彼は左手をポケットに突っ込んでいて、まるで本気でないのをそれだけで伝えて来る。構えだけでも見透かされたか——未だ中伝にも届かない、半端なガキの剣だと。

真つ向から勝負して勝てる相手ではない。シャニーはホイッスルで天馬を呼び、瞬く間に天空へと駆け上がる。その間、男は彼女の姿をじつと見上げたまま、剣を構える素振りも見せなかつた。

(「ディークさんなら……あたしのアレを知つてるはず」)

相手は村を襲つた賊だ——何度そう自身に言い聞かせても、まるで胸に落ちなかつた。

いまだに信じられず、シャニーはある策に出ることにした。人違いなら絶対に知らないはずの切り札で。もし、人違いで本当に賊ならそのまま倒してしまえばいい。ディークだと分かれば、その時は……。

シャニーは左手に握る太刀を握り直し、高天から天馬へ急降下を命じた。

「でりゃああ!!」

みるみる近づく男。彼は静かに構えを取り始めた。

あれは燕返し——天馬やら飛竜やら、空から急襲する者を叩き落す対空技。稽古でディークから浴びてその威力は痛いほど心得ている

し、その技を彼が得意としているのも知っている。あれを喰らえば、一撃で首を持つていかれる。

未だに彼はその構えのままだ。完全に間合いを決めつけている。更に近づく距離。男が腰を捻り、一閃の準備を始めたその瞬間だった。

シャニーは握る太刀そのままに、右手に槍を握りしめ、リーチに任せて突っ込んだ。

「——!! チイツ」

男は面食らったようで舌打ちしている。左の太刀筋へとつた構えに、突然右の槍が突き込んできたのだ。完全に槍の動線に入ってしまった。直撃を避けられない。彼は仰天を露にしながら防御態勢を取った。

(えっ……)

驚いたのは男だけでは無かった。

シャニーもまた瞳が震え、その震えは即、穂先の揺れに繋がった。見せた隙を男が見逃すはずも無い。

「鈍いぜ！」

彼はコンマ秒の隙間に構えを解き、ポケットから引き抜いた左手で穂先を跳ね除けると、持っていた剣の柄を突っ込んできたシャニーのみぞおち目掛けて押し込んだ。

「しまっ……——かはっ……」

天馬から叩き落され、態勢を整える前に後頭部へ手刀一発。糸が切れたようにシャニーはその場に転げて動かなくなった。

「あ、あわわわ……シャニーが一撃で?! よっ、よくも！」

目を白黒させたミアはシャニーの前に飛び出してクロスボウをミント髪の男へと向ける。その足はガチガチ震えて立っているだけで精いっぱいのようなだ。

シャニーを守るように集まって来て武器を構えだす女傭兵たちに、男は剣を背負い直して鬱陶しそうに両手を広げだした。

「おいおい、正当防衛って事にしてくれや。善良な一般人相手に、お前らの隊長が一方的に突っ込んだからよ」

男にそう言われても、ルシヤナ達は困惑していた。結局、この男が村を襲撃したのか、シャニーの師匠なのか、何も分からないままだ。

間違いないのは、あの状況でシャニーに浴びせたのは刃ではなく当身だったという事。今も剣は既に収めて戦意を感じさせない。

「それよか、あんた、コイツを引き取って退いてくんねーか？　今なら人の仕事を邪魔した件も含め、何も無かったことにしてやる」

彼は戦意を見せるどころか、ルシヤナを真っ直ぐ見下ろして交渉を持ちかけてきたではないか。

それでも、リーダーをやられた手前、簡単には引き下がれずミリアがクロスボウを向けて威嚇する。

「さ、山賊が何をー」

「あん？　誰が山賊だ？」

相手が悪かった。凄んだ顔に睨まれるとそれだけでぺしゃんこになりそうで、クロスボウを構えていたミリアの方が両手を挙げだした。

「ヒツ?!　こつ、これが噂のバーサーカー?!」

「そうそう、それだ、それ。早く逃げねえと悪どくブツた斬んぞ？」

男はさっさと話を切つて場を離れたそうに、明らかに胡乱な事を言いだしている。もし、数日前の新聞で記事になっていた村の壊滅もこの男の仕業で、ここで逃がしてしまえば、また新たな被害が生まれてしまうかもしれない。

とは言え、現有戦力では時間稼ぎすらままならない相手なのは明らか。

「分かりました。一旦我々は撤退します」

「ル、ルシヤナ?!」

「シャニーを失うのは避けたい」

ミリアが止めようと声を上げたが、ルシヤナは彼女に言い聞かせるように続けた。

「それに、もうすぐ到着するはずだし」

「ハン……。そう言う事かよ」

念の為、ランスたちにも連絡するように村長に伝え、早馬を出して

もらっておいただの。

男は納得したように一つ鼻で笑うと背を向け、独り言のように口にした。

「んじや、俺も騎士様が来る前にずらかるかね」

未だ目を覚まさないシャニーを三人がかりで担いでいく天馬騎士達。男はしばらく後ろ目に眺めていたが、ふいに彼は「おい」と振り返って声を掛けた。

彼は立ち止まった騎士たちのもとへ歩み寄り、呆れたような口調で忠告した。

「つたく、次は勘弁してくれよ？ 良く確かめもせず、無力な民間人に得物振るんじやねえぞ」

その視線は、明らかにシャニーを見下ろしている。

とても無力な民間人とは思えない……誰もがそう思う威圧感を纏った男は背を向け、山の中へと消えていった。

霞む背中

鋭く繰り返される太刀の風。それは稽古場を離れた時とまるで変わっていない。同じ場にいるにはあまりに重い空気は、一度離れたらますます近寄り辛い。

「シャニー、少し休んだ方がいいっすよ」

それでも、ミリアはリーダーの太刀に割込むように声を掛けた。

「ん、ドーナツ買ってきた。休憩しよ」

「ありがと。後でもらうよ」

レンも手に下げた袋を見せて誘うが、返ってきたのは流すような声。お菓子なら釣れると思っていたのか、二人は顔を見合わせて眉を下げた。

「やっぱり、昨日の師匠さんの事——」

「許せないよ。何もかも許せない」

ミリアから聞かれたシャニーは食い気味に返した。

鋭かった太刀は一度下を向いたが、一緒に彼女の視線まで引つ張られていた。ぎゅつと唇を噛む姿は、普段の朗らかさが吹き飛んでいる。

「で、でも本当に人違いかもしれないっすよ？」

「ありがとミリア」

仲間の心配に感謝しながらもシャニーは続けた。「許せないのは、それだけじゃないんだ」

ずつと頭の中は昨日の出来事が何度も繰り返されている。そのどのシーンも、納得など出来なかった。左手に握られた太刀をじつと見下ろし、崩れた落胆が漏れ出した。

「あんなことしてたのも、あたしを忘れちゃってたのも。そんなあのくに、啖呵切ったクセにあっさり振り返り討ちにあつてさ。なーんも成長してない自分の弱さもさ。……全部だよ」

見下ろす刀身に自身の顔が映る。歪んだその顔が、まるで今の自分の心そのもののように見えてシャニーは放り出すように零す。

「あたしの剣って、いったい何だったのかって思ったら……悔しくて

さ」

傭兵として、剣使いとして、そして一人の人間として。デイクは基礎を教えてくれた師父と言える。その基礎を打ち砕かれたような気がして、朝から振る剣もすっかり乾いて何も感じなかった。

「それに……人違いなんかじゃない」

認めたくない瞳は震えるが、シャニーは確信を持って言った。

「あの技は、デイクさんのだった」

「うん。あの人、只者じゃないと思う。知らないはずの私を一発で副将だと見抜いてみたいだし」

ルシャナも雰囲気を感じ取っていたようだ。彼女の言葉に止めを刺された気がして、シャニーはがっくりうな垂れた。

「なのにな……あたしのアレを忘れてるなんて」

「アレ？」

ミリアのきよとんとした問いに、シャニーは太刀を掲げて見せた。「槍は右、剣は左で扱ってるでしょ？ 覚えてれば、あんな動きするわけない」

試したつもりだった。左の太刀から右の槍に持ち替えても、デイクなら対応してくる。

だが、あの人は槍の動線にそのまま入ってきて、仰天したように眼を見開いた。もう少して直撃してしまいそうで、あの時は心臓が止まるかと思った。

「デイクさんはあたしの師匠で、命の恩人で……いつか超えたいとずっと追ってきた人。——見間違うわけあるもんかッ」

あれはデイクだと証明し不安を吹き飛ばすためだった。なのに、まさかその逆を証明し、不安が絶望に変わってしまうとは。

なにより勘違いなどありえない。顔の傷も、声も、大好きな人のもの。ただ一つ違ったのは、あまりにも白々しい態度、それだけだった。「そう言えばずっと聞きたかったんすけど」

重く動けなくなりそうな空気を払うようにミリアは話題を変えた。

「なんで槍は右で扱ってるんすか？ シャニーって左利きっすよね？」

「見習いになる前に、テイトお姉ちゃんに矯正されたんだ。集団で戦うとき、一人だけ動線が違うと危ないって」

「じゃあ、剣は？」

入団の時からシャニーは剣を左で、槍を右腕で扱っていた。シャニーにとってはそれがふついで、とくに考えたこともなく、なぜ……あらためて聞かれると眉をひそめるしかない。

「えーとお……ディークさんに何も言われなかったから……かな？」

「なくんか……ゆるーい理由っスね」

「どんなのを期待してたのさ」

大きな秘密でも隠していると思ったのか、ミアアのガツカリした顔にシャニーは苦笑いした。

姉の理屈は尤もと言える。なぜディークは右で扱わせなかったのだろう。今さらながらに気になるが、もうそれも聞けないのだろうか。

「ははっ……罪作りな人だよ。こんな扱いにくい剣残して……忘れちゃうなんてさ」

「左って扱いにくいんスか？」

「左はやりにくいよお、今さらだけど。剣も全部左用に打ち直さないと使えないし」

ミアアの質問にシャニーは泣き言を漏らし、ミアアに槍を持たせて自身も構えを取る。

「右の槍使いの懐にホント入り辛いんだよね。動線に入っちゃうから。うまくやれば外側から攻撃しやすいんだけど、強い人はなかなか隙見せないからさー」

実演して見せてミアアが理解したのを確認すると彼女は続けた。

「ま、そう言う相手はわざわざ剣使わずに天馬に乗って槍で挑むからへーきへーきー！」

とは言っても、以前も同じことを言っていて、騎兵のロングスピア相手に剣で戦うしかない場面に遭遇し死闘となった。

リキアも多い槍使い。幸い、稽古大好きな熱血騎士がフェレにいたので大分対策を練られているが。

とにかく左の剣は相手の経験が乏しく対策されにくい反面、不安な部分も少なくなかった。その克服への助言も、もうあの人には聞けない。

「左右で扱えるなんて器用っスね。なんなら二刀流にすればいいのに」

槍を返し、左右に武器を持つシャニーを指して、ミリアが大発見と言わんばかりに手を叩いた。でも、シャニーは笑いながらも無い無いと手を振る。

「考えたこと、無くはないけどムリだったよ。精度もキレも落ちるしさ、重くて腕取れちゃう」

太刀一本が片手で扱えるギリギリだ。シャニーは試しに両手に一振りずつ刀を握り振って見せる。

ミリアには美しい剣舞にでも見えたか拍手しだったが、へーへーと息があがってシャニーはすぐに止めた。スタミナ不足はアレンの言う通り弱点だ。

「ミリアこそ二丁持てばいいじゃん」

その点、ミリアの持つクロスボウは軽そうであってつけに見えた。思いつきの半分冗談だったのに、ミリアは指を弾いて大はしゃぎ。

「確かに！ 考えた事なかったっス！ さっそくパーツ調達に行つて来るっス！」

「あたしも気分転換に付き合うよ」

「嬉しいっス！ ついでに稽古にも——」

そこまでミリアが流れるように口にしたところで先は読めた。釘を刺して予防線を張る。

「試射は的にお願いますね？」

「えー、動物的なんてそうそう無いっすよ」

「だから的じゃないっての！」

大方、セチの魔力をアテにしているに決まっている。理屈は分かっても、毎度クロスボウの的にされては堪らない。

口を尖らせてつまらなさそうにするミリアの額を指で弾き、彼女たちを連れて稽古場を後にした。

◆◆
「デイクさん……」

黄昏時。どうしても心が傾いてしまう時間。シャニーは外回廊の端に腰掛け、あの面影を思い出していた。

ミント色の短髪、シユツとした顔に乗る大人の余裕。歴戦を生き抜いてきた傷をあちこちに残す逞しい長軀。心も体も、大人と子供ほど違うと思いき知らされた記憶はまだ新しい。

何もかもが懐かしくて、切なくて、だからこそ悔しい。結局、何もできないまま終わってしまったそう。

シャニーの師匠——デイクはベルン動乱でロイを初期から助けていた傭兵団の長。

とにかくその剣技は強力で、なによりどんな修羅場でも肚が据わっていた。冷静で、それでいて大胆で。「傭兵ならてめえの命はてめえで守れ。お守りはしねえぜ」と口調やトーンまで完全再現できるほど浴びせられたものの、彼は常に目をかけてくれていた。彼がいなければ、何十回死んでいたか分からない。

強くて、頼もしくて、背中について行けば絶対に大丈夫——そう思える人。シャニーにとって、あるべき姿の原点ともいえる存在だった。

彼の存在感は、ロイ軍に各国の主要人物が集結しても変わらなかった。戦神——そう呼ばれるくらい。

なのに、周りの声など気にしていなかったのか、本人は汚れ仕事へ率先して赴いていた。白い者たちが黎く染まらないように。きつとそう。俺のような傭兵アウトローに気安くかわるな——彼はいつもまわりにそう言っていた。そのぶん、同じ傭兵の自分なら、少しは……そうシャニーは思った。

それでも、彼はシャニーに対してもそうだった。いつも背負わせてくれなかった。与えるだけ与えてもらって、背負わせるだけ背負わせて——結局……何も恩返し出来ないまま、師匠はどこかへ行ってしまった。

ずっと再会を望んできた。

いつかきつと肩を並べ、超えて、それで恩返しするのだと誓って。まさか……その再会があんな形だったとは。

「シャニーか。どうした、こんなところで」

ふいの声に顔を上げる。気づけば周りは真っ暗になっていた。回廊に目を向ければ、声の主——緑の騎士ランスと赤の騎士アレンが見える。

「稽古相手に困っているならいつでも言えよ」

静かに話しかけてくれたランスとは対照的に、アレンは二カつと笑って誘って来た。

「困ってないよ……。というか、あんだけやってまだやるつもりなの?!」

アレンには昼間に散々付き合わされた。延々空中から投槍を放つて、それでは満足してくれず、降りて太刀で相手もして。それでも、バテバテになったのはシャニーだけ。今もアレンは忘れたかのように首を傾げている。

「? なにを言っている? あんなのは軽いウォーミングアップではないか」

「どんだけスタミナバカなのさ……」

「ん? なにか言ったか?」

「う、ううん?! アレンさんはスタミナ抜群で羨ましいなって!」

適当なことを言っただけでやり過ぎ。このままだとまた引張られそう。直感がそう叫び、ランスに視線をやって先手に話題を切り出した。

「デイークって知ってる? 動乱であたしがお世話になってた傭兵団の」

「ああ。何度か話したことはある。戦神と称された御仁だな」

動乱を思い出したか、遠くを眺めるようにランスは言った。どうやらそこまで深い関係はなかったらしい。

「昨日、デイークさんと会ったんだ。でも……——忘れてた。あたしのこと」

「……」

ランスはアレンを目だけで見て、同じようにしていたアレンと共に渋い顔をしはじめた。慰めて欲しいわけではなくとも、こんな腫れ物に触るような反応は辛い。しょんぼり沈み込むと見下ろす視線を感じる。

「それはショックだったな」

心配してくれたのか、ランスは慰めてくれた。

「だが、傭兵はそう言うものだ」と聞くがな」

「ああ。今日の敵も明日の味方。戦闘が終われば後腐りなく酒を飲みに行く者もいるそうだ」

ランスの目はアレンを見ているが、シャニーには分かった。これは自分に言われているのだと。

「……世間はそうかもしれない。あたしには……——出来ないよ。デイクさんだもん」

見習い修行に出る前の騎士団教育からそれは叩きこまれてきた。あくまで互いに仕事であり、個や情に左右されてはならないと。

それ故、戦場から去れば交友するものも居れば、すっぱり忘れる者もいる。デイクは後者なのだろう。アレンの言う通り、傭兵とはそうでなければやっていけないかもしれない。

でも、シャニーにはそれが出来なかつた。ただの傭兵ではない、人生に一つの道を作る支えとなってくれた恩師を……忘れるなど。

「それだけじゃない」

甘いと言われるかもしれない。それでもシャニーは続けた。「ううん……忘れてるだけなら……——諦めもついた」

両膝に乗った手をぎゅつと握りしめ、今にも零れそうな嗚咽を飲み込みながら、自身に言い聞かせるように焼き付いた映像を口にする。

「村を襲撃してたんだ。おまけに、村人に太刀まで浴びせて」

「なるほど、昨日君がやられた相手はデイク殿だったか」

「理由はともかく、傭兵ならそう言う仕事も——」

アレンがそこまで口にした途端だった。夜を引裂く様な悲鳴にも似た叫び声でシャニーが遮った。

「デイークさんはそんな人じゃないはずだった！ 流儀は通す人だったんだ！」

ハイエナとさえ言うって蔑む人までいるのだ。金さえもらえれば何でもする——傭兵とはそんなものだ。と世間から見られているのは疑いようもない。

でもデイークは違った。自身の物差しが明確になっていて、外れる仕事は一切引き受けなかった。力ないものを蹂躪する——まさにそれは、彼の流儀の中で「ナシ」の類の仕事のはずだった。

その彼があのかの村で何をしていた？ 武器も持たない者へ太刀を浴びせ、縄で縛って連れ去ろうとしていたのだ。

あり得ない、なにかの間違い……そんな風に首を振ろうとする自分をシャニーはぐつと堪えた。事実を事実と認識せず、逃げてもなにも変えられない。もう、いや、今回は絶対に間違えたくない。

「弟子として……目を醒まさせたい。でも……——あたしじやダメだった」

なにも変わってはいなかった。成長できたと思っていたその自信を打ち砕かれた。

あるとき……確実に屠れたはずだ。デイークのあの反応なら、そのまま槍で突き倒せるはずだった。

だけど、出来なかつた。とつさに体は避けて、槍を遠くへ外していた。気づいたら……ベッドにいた。

シャニーは乾いた声で自身を笑った。目を醒まさせるどころか、醒まされたのは自分だ。

「何をしめつぽい顔をしている。ならやる事は一つだろう！」

そこに飛んできたのはアレンの激励だった。彼は室内稽古場を指差して手を伸ばしてくる。

シャニーはふつと笑みを浮かべると立ち上がって彼の手を取った。「そうだね。デイークさんに弟子として恩返ししたい。やれるだけやらなきゃね！ よおし、相手してよ、アレンさん」

先に駆け出したシャニーを見送るランスは、彼女を追いかけるアレンに声を掛けた。

「アレン、シャニーを頼む。俺はロイ様と話をしてくる」
「ハッ、任せておけ」

貫いた流儀

稽古場の窓越しに、じつと空を見上げる。重く垂れさがった真つ黒な雲は、今にも押し潰してきそうなくらいに低い。そこから音を立てて降り注ぎ地面を穿つ雨を聞いていると、どんだん心が塞がるようで力が抜けてくる。それに抗うように、シャニーはぐつと太刀を強く握りしめた。

雨空のごとく心に立ちこめる黎き闇を振り払うべく、一心不乱に太刀を振り続ける。許せない、許せない、許せない……湧きあがるのはそればかり。

「呼吸が乱れてるよ」

しばらくして、ため息交じりの声呼んで手を止められた。剣先から視線を外すと正面にセチがいて、彼女は腕を組みながら見ていた。いつからいたのだろうか。

「分かってるよ」

そうしか言えず目を逸らした。セチの目がなにを言わんとしているかは察している。

「そんな状態でやっても、型が壊れちゃうよ」

それでも許してくれず、さっぱりした口調が逆に重く感じる。磨くためではなく、ただ心の闇を払い除けようと振り回す剣に精緻さなどあるわけがないだろう。いくらデイークから仕込まれ、もう何年も鍛えてきた型であっても。

「はは……。いつそ……壊しちゃうかな」

なぜだろう。ふいに涙があふれてきた。彼の構え、彼の教え、彼の流儀……そのすべてを型の中で咀嚼して自分なりの形に鍛えてきた。今の自分に騎士としての流儀があるのも、彼という精神的支柱があったからこそと言ってもいい。離れていたってそれは同じ……なのに、彼は。

「好きだったんだね。あのオジサンのこと」

「す、好きってわけじゃないし。あたしにはロイがいるしさ」

セチにいきなり問われて反射的に否定してしまった。いったい何

を焦っているのだろうか。ディークのことは好きだ、大好きだった。とは言え、その好きとは違う。もつともつと……それこそ、兄……いや、父のような。

「だけど……憧れた人があんなことしてたなんて。流儀は通して仕事する人だったのに」

だからこそ、数日前に姿を現したあの人が見せた言動は、崖から突き落とされたような気持ちだった。あふれる涙を抑えられず、乾いた笑い声が掠れて漏れる。

「はは……なんでかな。人違いだったはずなのにな……」

ミント髪の男は言った——ディークではないと。会えた喜びと、それを否定したい気持ちと、どうしても抗えない事実と。心に渦巻く黎はますます厚く渦巻いて、どうしてか引きつった笑いがこみ上げてくる。

「きつと何か事情があるんだと思うけどな？　あの人、最初からやる気の剣じゃなかった」

セチも不思議そうにすると、寄ってきて頭の手を伸ばしてポンポンしてきた。慰めようとでもしているのだろうか。その手はすぐに下りて、今度はみぞおち付近に添えられた。

「あの剣技も、あんなキレじゃなさそうだし？」

そこはディークからつばめ返し……に見せた当身を喰らった場所だ。

彼のつばめ返しは一撃必殺で、動乱でも数多襲いくる竜騎士をバサバサ落としていた。装甲が厚い竜騎士でも一撃なのに、天馬騎士がもろに食らったらどうなるかなと言わずもがなだろう。

「セチもそう思う？」

「ああ。是非本気の剣とやりあってみたいもんだよ」

「は、はは……信頼して良いやら怖いやら」

事情があるか、あるいは本当に人違いか……少しだけ希望が湧いてどちらか聞こうと思ったのが間違이었다。彼女の興味は強い剣とということ、戦いたいだけに違いない。あのミント髪の男がディークだと、ますます近づいてしまっただけ。

「ま、そのときにキミがホンキ出せるか心配だけど。勝てないって分かってて、敢えて私を纏わなかったみたいだし？」

あつさり心を見透かされていて言葉に詰まる。ただの戦闘狂かと思えば、こうして勝手に人の心を読んで冷静に向きあう機会をくれる。今は観念して未熟を吐き出した。

「……信じたくなかった。感情で戦場に立つなってデイクさんに言われてたのにな」

傭兵は自分を自分で守らなくてはならない。あくまで冷静な基準をもって、恩だの情だのに任せるな……。傭兵としての心構えを、耳にタコができるくらいデイクから叩き込まれたはずだった。

「ありがとね、セチ。心配してくれたの？」

悩みを口にしたら少しだけ気が紛れた。こんな風な声のかけ方をされたのは初めてで不思議な感じだ。相棒が前より近く感じたのも束の間、セチは「買い被りすぎかな」そう言って嘲りの混じった目で笑いかけてくる。

「私のマスターだし？ あんまり無様な姿晒されちゃ、他の精霊に笑われるのも癪だしね」

「はいはい……精進しますよーだ」

気にかけてくれたというより、説教の一環らしい。反論したところで、初伝が文句を言うなど稽古に連れ回されるに決まっている。それに、事実が事実。曲げようもない。

「はあ、確かにまた負けたんだよな、あたし」

「ふふつ。ま、あのオジサンには勝ったようなもんだと思うけどね」

口をタコにして自身の未熟にうんざりしていたら、セチはひとり納得したような笑みを浮かべ出した。ならば稽古と言って連れて行かれるかと思っただのに。どうしたか聞こうとすると、稽古場の扉が開く音がした。

「シャニー、また剣振ってたんスか？」

「まーね。暇つぶしだよ。早く中伝までになれってユキさんに突かれてるし」

ミリアたちが入ってきた。彼らは稽古する様子もなく、窓から外を

見たり武器を手入れしたり落ち着かない。そのうちすることもなくなつたか集まつてきた。

「たまにはオスティアに遊びに行こうっス」

「おっ、いいね！ デリス・アプリコの夏季限定スイーツをいただきに行きますか！」

集中力など吹き飛んでしまった。セチに頭の中から引つ張られても、もう止まらない。ターゲットは一日限定20個の超レアと聞く。ロイにもおねだりしたが、美味しいスイーツなら何個あつてもいい。朝から行かなければと作戦を練る。

「よしっ、ちよつとロイに許可もらいに行こつと」

塞いだ気持ちを吹き飛ばすにも、たまにはバカ騒ぎしたいところ。さつそくロイの部屋を目指す。

「ロイ、入るね？」

くつろいでいるかと思つたら、彼は机で書類に目を通していた。

「シャニーか、お疲れ様」

「ロイこそお疲れさまだよ。さつき帰つてきたばかりでしょ？」

「ああ。まあね」

真つ先に労いの言葉をかけてくれる。今日だって会合の連続で疲れているに違いないのに、それを誰にでも、どんなときでも。心底、敵わないと思わされるといふもの。

そのまま話だけ聞いてもらうつもりが、彼は席を立って歩いてくる。

「時間空いてるし、お茶でも行くかい？」

「えっ、いいの！」

デートのお誘いとはなんていい巡り。頭の中が全部吹き飛んで、気づいたら飛びあがつていた。後から理性が追いついてきて、騎士としての心に引つ張られる。

「あつ……でも勤務時間中だし」

「シャニーも真面目だな」

伸ばしかけた手を下ろしたら、ロイはさも意外そうな顔でそう言った。

「ど、どういう意味よ……」

「いったい、ロイにどう思われているのかホンキで気になってしま
う。汚部屋をイメージ通りと言われたり、天馬で脱走するのがデフォ
ルトかと思われていたり、挙句これとききた。」

「大丈夫さ。シャニーは僕の特別な護衛だ」

「はーん、ロイも意外とワルなんだ？」

「はは。やんちやなシャニーと付き合っただけで移ったかな」

「でもきつと、ロイも喜んでくれるに違いない。やんちや同士いつも
はマジメにやっているんだし、たまにはワルいことをしたってバチは
当たらないだろう。マリナスには叱られるかもしれないけれど、ロイ
と一緒にならへっっちゃらだ。」

「じゃあバッチリ警護するから、はやく行こー！」

「さっそく厩舎を指すべくロイの手を引つ張った。そろそろおや
つが恋しくなる空が広がっている。この時間から行くなら、やっぱり
『あの店』に限る。」



「うーん、おいしー！」

「オレンジをぎゅつと絞ったような爽やかな声が、老若男女であふれ
る店の中に響いた。」

「ケーキを頬張るシャニーはコーヒーを一口して辺りを見渡す。何
度来ても、デリス・アプリコの喫茶室は雰囲気も良くて心が弾む。」

「本当においしそうに食べるね」

「だってこんなケーキないよ！ バターの香り高いスポンジに染みた
木いちごシロップがジュワつと口の中に広がって、甘すぎないふわふ
わクリームとの相性も——」

「相棒？ 英雄さん、ドン引きしてるよ？」

「頭の中から引つ張られ、呆れたようなセチの声で我に返る。焦って
ロイの様子をうかがうも時すでに遅し。彼は目を点にしてカップを
手にしたまま止まっている。」

「あ。アハハ……ごめんね、ロイ。ついつい」

「スイーツのことになると、どうしてもスイッチが入ってしまう。イ

リアでは甘いものは貴重というのもあって、見習い時代も各地の銘菓制覇に勤しんだもの。スイーツ好きとして、ひとつの修行でもあったと言えるだろう。

「やれやれ、そのくらい剣を語って欲しいもんだよ」

「う、うるさいな。スイーツはあたしの生きる希望なの！」

セチはわざとらしいため息をついてウンザリを浴びせてくるが、ここだけは譲れないというもの。剣オタクにスイーツフリークの気持ちなど分かるまい。

「ところでシャニー、何か言いたいことがあったんじゃないのか？」

頭の中でせめぎ合っていると、ふいのロイの声に呼び戻された。

「あっそうそう。あのね、明後日、部隊でお休みもらいたいなって」

「いいけど、またここにも来るのかい？」

「スゴい！　なんで分かったの??」

「明後日といえば限定スイーツの日だし」

さすがロイと言うべきだろうか。ほんの少しの情報でここまで見通すとは。ところが、セチが腹を抱えてケラケラ笑いだした。

「キミ、お菓子を撒かれたらあっさりワナにかかりそうだね。ハトかな？」

「ぐっ……」

「そこは否定して欲しいんだけどな」

それならせめて気高き天馬と言ってほしかった。ハトではあまりに絵にならないではないか。それに、こんな高級店のスイーツを撒いてくれる人なんかいるワケない。セチは首を折っているが、視線を口イへ戻す。

「ちよつとね……気分転換したいなって」

「やっぱり、ショックが癒えてないみたいだね」

ロイに心配かけまいと濁したはずだったのに、彼の言い方にドキッと跳ねて一瞬言葉に詰まる。それが今度は一気に弾けるように噴き出した。

「え?!　なんで知ってるの?」

「ランスから聞いた。すまない。もう少しはやく声をかけるべきだった」

た」

「ううん?! ロイが謝ることじゃないよ! あたしと、デイクさんの話なんだし」

デイクがなぜ知らない「[rb:ふり > .:]」をしたのか、今でも自分なりの答えは見つけられずにいた。ただ、彼が流儀を曲げて仕事をしていたのは間違いない。あれだけ……散々叱ってくれたあの人が。お前なりの仕事への心構え——流儀を確かとすると。

「と言うか、なんで分かったの?」

「顔に書いてあったから。いつもの元気じゃなかったし」

「はは。……感情を覗られるなって言われてたのにな」

これ以上考えても、答えなど出るはずもない。そう自身に言い聞かせて話を戻したつもりだった。

答えは、目の前にあった。きつと、彼も信じたくなかったに違いない。あれだけ稽古をつけた弟子が、教えたことをなにも会得していないなんて。きつと、そうだ。

「ねえ、ロイ。そんなに簡単に、人のこと、忘れられるものなのかな」
たまらず聞いていた。聞かなくなつて……いや、最初から、欲しい答えなんか決まっていると言うのに。違う答えだったら、無理やり否定する材料を探して悩むくせに。

「そんなことはないと思う。シャニーはデイクにとつて大事なひとのはずだ」

「そんなわけないよね? デイクさん、あたしのこと、忘れてないよね」

「きつと、彼にも何か考えがあるんだよ」

胸にせり上がってきた気持ち悪いほどの不安が、すうっと引つ込んだ気がする。とは言え、それはまた違う気分悪さを連れてきた。

「考えがあつたとしても……流儀を曲げて村を襲うような仕事をするなんて」

今でも信じられずとも、事実は曲げられない。目にしっかりと焼き付いて離れない。彼は村人に縄をかけ、どこかへ連れ去ろうとしていたのだ。他の住人に容赦なく大剣を浴びせ皆殺しにしてまでも。

「生存者もいると聞く。シャニーたちのおかげじゃないか」
「だけどあたしは、デイークさんを……止められなかった」

ロイは認めてくれたが、今回ばかりは喜べない。

自分なりに掴んだ流儀で仕事をしてきて、図らずもデイークにそれをぶつけることになった。仕事を見せること自体は望んできたことだ。彼に育ててもらった恩返しとして。しかしそれは、恩返しどころか、無様を晒すだけとなった。まるで成長できていない——恩知らず。

「あたし……何もしてあげられなかった。背負うことも、強くなつたところを見てもらうことも、外れた道から助けてあげること。流儀を……貫くことさえも……」

感情を観られ、あつさり一撃もらって目の前が真っ暗になった。何より、あのかき騎士としての使命をはつきりと跳び越えて感情で武器を握っていた。あんな啖呵を切っておいて、師を救うどころか情けをかけられるとは。

悔しい、何もかもが悔しい。裏切りのようなデイークの行動も、止められなかった自分の無力も、それを招いた己の「r.b.流儀」の脆さも。意志」の脆さも。

「そんなことはないよ」

はきとした口調でロイはシャニーから溢れだす後悔を止めさせ続けた。

「寄り添うこと……シャニーは流儀を貫いたと思う」

「あ……」

「きつと、彼に伝わっているさ」

はつとして言葉にならない声漏れた。言われてみれば、それはだけは忘れていなかったと言え。信じて、信じて、決定的になつてもそれでも彼に呼びかけ続けた。

でも……ただ——それだけだ。自ら守備範囲を広げる提案をしておいて、ロイの信頼に込められなかった事実は何ら変わらない。

「ロイは怒ってないの？ 襲撃、止められなかったのに」

「シャニーがもし、仕事だからって話も聞かずに剣を振り上げるよう

な人なら、僕は好きになつていない。だからみんなも、シャニーが好きなんだよ」

すこし……考え違いをしていたのかもしれない。自然に貫いていた。人々の声を聞き、彼らの叫びが求めるものこそが掲げるべき剣だという流儀を。勝つ、負けるは、その次の話だ。なら……成長した姿を少しは見せることが出来たのだろうか。

「えへへ……。慰めてくれてありがとう」

「ゆっくりしておいでよ。新作どんなだったか教えてくれると嬉しいかな」

「おっけ！ ばっちりレポートするね！」

ロイの厚意に甘え、今は傷ついた心を休ませることにした。来るべき時に、本当の意味で勝てるように。

譲れない一線

高い天井に広い空間をふんだんに使い、ゆったりとした間を贅沢に配置した喫茶室。天使でも現れそうな、モノトーンで整えられた清楚な世界を紅茶の深い香りが包み、彩り豊かなスイーツが艶やかに映える。

「う〜んッ！ 最ツ高ッ！」

そんな高級店——デリス・アプリコの喫茶室に、そのまま天に召されそうな感激が飛びだした。

顔をくしゃくしゃにしながら、今にも感涙をこぼしそうなシャニーが足をピコピコさせている。

「いやー、噂には聞いてたけど、おいしいっスね！」

シャニー以外は一見さんで、一口したミアが驚いたような顔をしている。それを見て、シャニーはうんうんと頷いてテーブルを見下ろした。

皆を叩き起こして朝6時から並んだ甲斐があると言うもの。とくにこの夏季限定スイーツは、一日限定20個の代物だ。そんなスイーツ好きにとっても至高の一品を食べられるなど、彼らにとっても記念すべき一日となったに違いない。

「創業300年。定番のタルトケーキはもちろん、季節ごとの限定スイーツはふんだんに四季のフルーツを使って、甘すぎず食感も楽しい——」

「シャニーが壊れた」

「ほんと……あなたは食べ物のことになると魔人化するよね」

噛むこともなくツラツラと興奮して語るシャニーを前に、ケーキを頬張りながらレンが目を点する。ルシャナはもう慣れているのか、ウンザリを吐き出したと思うと肘でつつく。

「こんなおいしいのを毎日ロイ様におねだりなんて、悪女だねえ」

「人聞き悪いぞー！ と言うか、毎日じゃないからー！」

さすがにロイも毎日オスティアに行ったりはしないし、おみやげを都度ねだるなんてはしたくないではないか。なにより、このような飛び

切りは、たまに食べるからこそ堪能できるというもの。そうした一線を弁えてこそ、スイーツ愛と言えよう。

「ふい〜！ おいしかったあ」

店を出たシャニーは、お腹をさすりながら満足を朝日に教えるように天へと叫ぶ。

時計に目を下せばまだ10時だ。この後は、各自で好きにぶらつくことにしている。

「この後どこ行く予定なんスか？」

「決まってるじゃん！ 食べ歩き、食べ歩き！」

よくぞ聞いてくれた。ミリアに今日のターゲットをずいつと見せつけてやる。

オステイアと言ったら、食の宝箱の異名を持つグルメの街。今日こそガイドブックを研究し尽くしてきた成果を活用せずしていつ活かすというのか。

「うえつぷ。見てるだけで胃もたれしそうっス」

ガイドブックにつけた印——気になるグルメをどんどん見せていたら、ミリアは青い顔をしてそそくさ退散していった。グルメでないとしたら、いったいみんなどこに行くのだろう。

「みんなはどうするの？」

「私は魔法書店に。ランクAの魔導書を置いてるみたいだから」

「ウチはパーツ屋っス。二丁化の改造部品を仕入れるっス」

レンとミリアはまだ見ぬ獲物を思い描いているのか、やたらと気合の入った顔をしている。意外とみんな真面目だった。遊びに行こうと誘ってくれた割に、休みの日にまで仕事の絡みとは。なんだか、ひとりはやいんでいるのが恥ずかしくなってしまうではないか。

「ま、私にあんたに付き合ってあげるよ。見てるだけだろうけどさ」

背後からポンポン背中を叩かれた。さすが幼馴染……と言いたいところだが、幼馴染なのだからルシャナの魂胆は知れている。

「そんなこと言っつて。介抱役でしょ？」

食べ歩き先で飲んだくれて、もしぶっ倒れてもお守りしてもらおう

としているに違いない。

「さすが幼馴染！ まあウイン・ウインでことよろしく」

「ウイン……ウインかあ？」

まるで隠すそぶりも見せないところがまたルシヤナらしいというか。イリアにいた頃からで慣れてはいるものの、今日はいったい何酒だろう。絡み酒でないことを祈るしかない。

「もう……。ホントうわばみさんだから——」

せめて繰り言を浴びせておこうと思ったその瞬間だった。強烈な衝撃——なにか、揺れという殴りつけられたような「流れ」の狂いはつとして振りむいた刹那、耳をつらぬき全身を芯から震わせる爆音に吹き飛ばされそうになった。

「な、なに?!」

まるで火山でも噴火したような火柱が上がっており、それだけで目が乾きそうなくらい空を赤と黒に染めて膨らんでいく。往来でごつた返していた中央街は蜘蛛の子を散らすようなパニックで、耳をつんざく悲鳴が折り重なり、黒煙から逃げる爆発にも似た激流と化した。

「みんな！ ス克蘭ブル！ このまま作戦開始！」

「イエス！ リーダー！」

あの爆発はとても事故とは思えない。戦場でさえめつたに経験することもない規模と言える。

（なにが起きたっていうの？ お膝元とは言え……いや、だからこそ、だよな）

いくら管轄地域外であっても、この場を放つてなどおけないだろう。なにより、オスティアゆえに、だ。それが分かつての襲撃となれば、一刻を争うに違いない。叱責など、後から考えればいい。仲間たちの先頭を走り、激しく揺らめく「流れ」の源流へと急ぐ。

（この複数の「流れ」の乱れ……）

いったい何があつたというのか。鉄壁を誇るリキア最大の都市オスティアで、夜を狙うこともなく白昼堂々の攻撃とは。ドミノ倒しのごとき人の流れを逆走して掻き分けた先で、すぐに答えが見つかった。

「かわいい子ちゃんじゃねえか！　ちよつとカラダ貸せや！」

人ごみを狩るように駆けてくるのは屈強な男たちだった。クスリでもキメているのか、その視線は嫌らしく絡みついてくるよう。飢えた獣のごとき彼らは、巨体でそのままのしかかってやろうとばかりに、斧を振り上げて突っ込んでくる。

「隙だらけだ！」

「ぬお?!」

電光石火に飛びだして刃が鋭く鞘を擦った刹那、抜刀一閃に突き抜けたシャニーの背後で、崩れた男が音を立てて石畳に沈む。

「リーダー、直進方向に敵多数。武器、戦斧」

次のターゲットへむけて太刀を霞に構えると、背後からレンの分析が飛んできた。どうやら、視界に映る手合以外にも、かなりの数が控えているらしい。

「これだけの賊って……—も、もしかして」

「ああ。こいつらきつと、新聞に出てた盗賊団だね！」

横にならんで槍を構えるルシヤナも同意見のようだ。以前のレンの見立てでは、盗賊団は西進してオスティアに向かっていた。

どこかそれも樂觀視していたところがあつた。なにせ、ここはリキアの中心地オスティアだ。難攻不落と世界的にも誉れ高い場所を攻めるには、一介の盗賊団では荷が勝ちすぎている……はずだった。

「まさか侯女様のお膝元を攻めるなんて?!」

「名前を挙げようってんだろ？　リキアにこれ以上の場所は無いしき！」

あろうことか、リキア同盟の盟主にホンキでケンカを売るとは思ってもいなかった。むしろ、だからこそだったということになる。先見の明の無さに、ギリつと奥歯を噛んだ。

「許さない！　守備隊が着くまで、あたしたちで足止めするよ！」

今となつては、起きてしまった事件を一刻も早く収束させるしかない。相手がどれだけの規模かは分からない。とは言え、ここは鼻面が刃に触れるほどの最前線。民を守るのがこの四人だけなら、為すべきは一つに決まっている。

「天馬を呼んでる時間が惜しい。このまま突撃する！」

規則から言えば、オスティアの守備隊と合流するべきだろう。端からそんな選択肢はなかった。左手に己の流儀を握り締め、火の手が上がる街を敵陣へと駆け抜ける。

(それにしても……あの斧)

道すがら、倒した賊が引つかかっていた。賊にしては、やたら質の高い武器だった気がする。おまけにピカピカでかなり手入れが行きわたった……と言うより、まるで使ったことがないような。……この襲撃に合わせて調達したとすれば不自然でもないか。

この不穏な「流れ」の中で嫌な予感ばかりがよぎるが、それ以上詮索する時間はなさそうだ。

「バカめ！ 身の程知らずめが！」

盗賊団の本隊がついに進撃を開始して、真正面から向かってくるシャニーたちを見つけて物色し始めている。

「捕まえて食っちゃまっていいか？」

「たりめえだ！ キレイに仕留めろよ！」

口走って嬉々とする姿は獣そのもので、あまりに飢えて舌なめずりしているものまでいる。

やはり賊か、陣形もなくただ突っ込んでくるあたり、練度としてはそこまで高くはなさそうだ。とは言うものの、傭兵崩れのような者まで混じっていて気は抜けない。

「セチー！ 行くよー！ 一二の颯ー！」

予想はしていたものの、とにかく数が多すぎる。囲まれて押し込まれたら一瞬で終わってしまうだろう。最初からセチを開放し、紫電一閃に敵陣の中へ突っ込んで飛びまわる。青い軌跡を先頭に、賊たちが渦を作り出した。

「ミリアー！ あたしに構わずぶつ放して！」

「もとからそのつもりっスー！ いっけえ！ バラージショット!!」

好機に照準を合わせていたミリアーが吼えるや、無数のボルトが炸裂して賊を引裂いていく。ガトリング式に改造したクロスボウは、全てを弾き飛ばした青の風を残して霹靂閃電へきれきに戦端へ風穴を開けた。

「へっ、どんなもんだい！」

「ナイス！　どんどん行くよ！」

さすが四人の中で最高の攻撃範囲を誇る十八部隊の弾幕だ。剣を突き上げてミリアに合図すると自ら一番槍として敵陣に突っ込んでいく。

道を塞ぐほどの盗賊たちに青の軌跡が突っ込むさまは、まるでそれそのものが矢じりのよう。割り行った最前線にボルトや魔法が雨のごとく降り注ぎ、突破口をこじ開けるまで時間はかからなかった。

あらかた戦闘員が出撃して静かになった通り。オステイア城の角では戦闘が始まったか、荒々しい応酬が響いてくる。

そんなすでに終わった場所へ、ひとりの男が現れた。

「ようやく見つけたぜ」

ミント髪の男はそれだけ言うと、頭上を見上げて不敵な笑みを浮かべた。だが、それも一瞬のこと。感情を潜めると一歩踏み出す。

「……ん？　——チッ！」

その足はすぐに止まった。振りむいた彼の視線の先には、駆けてくる四人の乙女たちがいる。

「デイ、デイークさん?!」

シャニーはやむなく距離をあけて仲間にストップをかけた。

遠くにぼんやり見えてきたときから、嫌な予感はしていた。いや、それこそ、〃流れ〃の揺らぎのなかに最初からいた。信じたくなかったけれど、目の前に立ちはだかられては……。

「ったく、またお前かよ。もう一度言うが、俺はお前みてえな毛も生え揃わねえようなガキは知らねえぞ？」

ミント髪の男は話をやめたがっているのを見せつけるように、頭の裏に手ぐしを突っ込んでボサボサやりだした。その背にはずっしりと重そうな大剣をかついでいる。大剣……それはデイークの得物であり、象徴と言ってもいい。あんな巨大な剣を軽々振りまわせる傭兵など、彼以外にそういるものか。

「とぼけないで！　デイークさんなんですよ？　なんでそんなこと言うの?!」

「ごちゃごちゃウルセえよ。とりあえず、そこを退け」

「退かないよ。ここで何をしてるの？　誰に頼まれたの?!」

構わず歩きだそうとする男の前に立ちはだかると、彼は手で払って睨んできた。それでも一歩踏みだす。これ以上はあの剣の射程に入ってしまうが、ここで退いたら二度と会えないかもしれないし、何よりこんな場所に現れる理由がどうしても気になる。

「守秘義務がある。わりいがノーコメントだ」

それだけしか言ってくれなかった。退け——彼の目からは、もうそれしか伝わってこない。

そのときだ。さつき無力化した連中が戻ってきて、彼らはシャニーたちを指さして呼びかけた。

「おいッ、そ、そいつらは仲間をやった奴だ！」

彼らの視線の先を追っていく……信じられない。けれど、彼らが見ているのはデイークに間違いない。

「な、仲間?!　デイークさん……まさか、まさか……」

「このボスは俺が守る。お前らは攻め上がれ」

シャニーの言葉など聞こえていないかのように、ミント髪の男は賊たちに指示している。

応を返した連中は街中へと消えていく。なんとかしようにも、目の前には立ちはだかる男。セチの魔力で飛び出せば間に合うか——足先に力をこめ、追撃しようとしたときだった。

おもむろに背中に手を伸ばし、ミント髪の男は大剣を握りしめた。彼は賊たちの姿が消えたのを待っていたかのように、静かに目を閉じ一つ大きく息を吐き出す。

「てめえらの相手は、この俺だ」

開かれたのは、よく知るあの目だった。迎え入れるような間がありながら、捉えられたら絶対に逃れる術のない鋭さ。あまたの戦場で逆境を切り拓き続けてきた、底知れぬ——戦神の眼光。

「デイークさんッ。許せない……ッ。許さない!!　あたし……あたし

はデイクさんを……信じてたのに！」

はつきりしてしまった。オスティアに攻め上がり、罪もない民を巻きこんだ組織に与しているミント髪の子……それが、デイクだったのだと。賊と通じるなど、彼の流儀からしたら絶対に「ナシ」のはずなのに。

堪らず太刀を構えてその鋒に捉える。標的——デイクの額を。

「御託は結構だ。さっさとかかって来い。じやなきや……死ぬぜ？」

それでも踏み込めない。デイクの言うとおりに、待っていたら死ぬだけだ。かと言って、仁王立ちして待ち構えているのに突っ込めば、一発で首を持っていかれるだろう。

「みんな！ 街中に入ってしまったヤツらを追って！ デイクさんは、この人は……あたしが引き受ける！」

弟子として、この人だけは絶対に自分の手で止めて、目を覚まさせなければならぬ。相手は動乱を鎮めた最強の一角。全力でなければ立ち回りさえできないだろう。その意味でも、部下たちには荷が重すぎる状況と言える。

ところが、仲間たちは返事もせずに武器を構えなおしているではないか。

「何してんの?! 早く！」

デイクがいつまでも待ってくれるわけがない。やむなく一歩踏み出してありったけ叫ぶ。

「シャニー一人にはさせない」

返ってきたのは、守りを高める魔法とレンの小さくも胸に響く声。

「師匠が師匠なら弟子も弟子だね。一人で抱え込んでさ」

「あ……」

「師匠の目、醒させるんだろ？ 全力ぶつけないよ！ 暴走したら、私らが止めてやるさ！」

横に並んで槍を構えるルシヤナが鼻で笑いながら飛ばしてきた激励に、知らないうちに言葉にならない声が漏れていた。

セチの力が暴走してしまえば止められない。少しでも離れて欲しかったが、仲間たちは静かにうなずいている。

「みんな……。セチ！ オーバードライブ！」

今は仲間を、信を託して背中を守ってくれる者たちを信じてさらに踏み出す。精霊の待つ、意識の向こう側へ。

「これは……すごい満たされて……。ふふ、いいよ相棒、やっちゃいなよ！」

はつきりと、いつも以上に鮮明な声が背中を押してくれる。まるでセチとひとつになったような軽さは、重く押し潰されそうな鈍い鎖のごとき感覚が嘘のよう。

「ほお……。こりやあすげえな」

ミント髪の男は肩に大剣をかついだまま感嘆を漏らしている。とは言え、慄くわけでもないその口元はわずかに上向いて、精霊の風を物ともせず仁王立ちを崩さない。

「フェレ侯爵家天馬隊シャニー、行くぞ！」

風の魔力に乗り、音速に地を滑って男のもとへ辿りつく。矢のごとく突っ込んで流れのままに斬り上げても、その鋒は見切られて掠りもしない。そのまま疾風怒濤に攻め続けたのに、一太刀さえ触れられないどころか、彼は大剣を肩にかついだまま。

剣筋はすべてお見通しとでも言うのか。フェイントをかけた一閃も、ようやく動いた大剣に受け止められて鈍い音をあげた。

「おっと！ すげえ速さだな。どんな剣だ？」

「颯閃一刀流……。だけど、ベースはデイクさんに教えてもらったものだよ！」

ぱつと後ろに退き、近距離からセチの魔力で急加速して空から振り下ろす。この空中からの袈裟斬りだって、デイクに仕込んでもらったものだ。

「ハン。そのデイクとやらの剣は、忘れたほうが引き出せそうな型だがな！」

渾身の一撃もあっさり大剣で受け止められ、刃の上を滑らせるように火花を散らして流されてしまった。大きく体勢が崩れ、やむなく距離を取る。

「なんで?! なんてそんなこと言うの！」

どこまで突き落とせば気が済むのだろう。傭兵としての流儀を、人生の支えとしてきた教えの刻まれた剣を、忘れられるわけないに決まっている。悩んだとき、どれだけこの剣を振っては、教えを頭で繰り返してきたことか。

それでも、再び肩に剣をかついだ男は何も答えてくれなかった。

「それだけじゃない！ デイークさん！ なんでこんな民に被害が出ることに加担してるの?!」

「俺は、傭兵だからだが？ いい加減、喋ってるよ——舌噛むぜ！」
「くうっ?!」

見えなかった。走った「流れ」の揺らぎを頼りに、なんとか身をよじり太刀を出して斬撃の軌道を変えたが、あまりの衝撃で体が宙に弾かれた。

「決めるとすっつか！」

宙を錐もみする中で見えてしまった。デイークが剣を頭上へ放り投げている。あれは……——戦慄が走る。飛び上がったデイークは剣を掴み、そのまま渾身に振り下ろしてきた。その目は……優しかったあの目ではなく、敵へ向けていた鬼神そのもの。

「終いだ。恨むなよ——！」

空中からの渾身の一撃は、大剣の自重と男の剛腕でまさに鬼の一振り。石畳を粉々に砕いてそれでも足りず、背丈ほどの幅までえぐって飛び散った。

「へえ？ さすがにすばしっこいな？」

それでも、砕けたのは地面だけ。男は正面を見上げると大剣を引き抜き、また肩に担ぐ。シャニーは宙を飛ばされながらも、セチの魔力で風を操り態勢を整えて退避していた。

「……今のはつきりしたよ。やっぱり、あなたはデイークさんだ！」
間違いない。あの技は、あの一撃必殺の剣はデイークの奥義だ。いつも傍で見てきた。絶体絶命になった自分の前に現れてその逆境を振り払ってくれた、憧れの背中が揮った技に相違ない。

「俺が誰かなんぞ、どうでもいいだろ」

「よくない!! 目を覚まさせてやるんだから!!」

なのに、デイクはそれしか言わない。これしかない……ふたたび空中に飛びだして渾身を振り下ろす。見上げる彼と視線が近くなる……そのときだった。彼はふいに視線を外した。

「……………ッ、あいつ！」

舌打ちするや、男はそう口走り背後から何か取り出し——投げ斧だ！

「いけない！」

「ちっ——」

空を裂く音と分かるころには高い金属音が響き、斧が宙に飛び出して陽が飛び散る。瞬きする間も与えないミリアの早撃ちが、デイクの手にした手斧を弾き飛ばしていた。これには焦ったようだが、再びシャニーに視線を合わせた男が怒声を飛ばすまで秒とかからなかった。

「シャニーー！ 退け!!」

「えっ?!」

今、彼はなんと言った？ 名前を呼んでくれなかったか？ 呼んだ、たしかに呼んだ。シャニーとはつきり呼んでくれた。間違いない、彼はデイクだ。やっぱり彼は覚えてくれていた。忘れてなんかない。でも、彼は……。

「くそつたれがあ!!」

堪らず身をよじる。あろうことか、怒声をあげたデイクは隙を突いて持っていた大剣を投げつけてきたではないか！ あんなデタラメ、動乱でさえ見せたことなどない。なんとか剣を避け、どんどん距離が縮まる。彼は丸腰。セチの魔力で加速すれば、今なら……——斬れる。

「くっ…………」

賊に加担する悪は倒さなければならない。でも……。彼は忘れてなどいなかった。自分を大事にくれた、師父のような憧れの人をこの手で斬るなど……。彼との思い出が、走馬灯のように走って周りの景色が遠ざかる。

「うおおー」

「かはっ……」

スピードが落ちた隙をデイクが逃すことはなく、飛び込んできたシャニーを白刃どりで引き寄せ、みぞおちに一発突き込んだ。

するりと手先から太刀がすり抜け、乾いた音が石畳に響く。吹き荒れていた旋風は一瞬で止まり、デイクの腕の中にすっぽりと収まった。

「まったく。甘さが抜けねえな、おまえは」

「デイクさん……やっぱり覚えてくれてたんだね。……——嬉しい」

デイクの腕の中でシャニーは涙を隠さず声を震わせていた。

激痛に悶える視界に見えたのは、大剣が貫き倒れた弓兵。彼はまた守ってくれた……そう思うと、溢れる気持ちが泉のようにとめどなく流れてくる。

「まったく、相変わらずガキみたいなこと言いやがって」

頭の裏に手ぐしを突っ込んでボサボサやりながらも、デイクの口元には安堵が広がっていた。

憧れの背中

状況が状況だとは分かっている。せめて、あと少しだけでもこのままにして欲しかった。

みぞおちの痺れが退いてきたのを察されたのだろうか。デュークは包んでいた腕を解くと肩を持って立ち上がらせた。

「とりあえず話は後だ。俺はボスを討つ」

口調も、表情も、もうすっかり元のデュークに戻ってくれた。喜びに膨らむ胸いっぱい声をかけたかったけれど、それ以上に彼が口にした話が気になった。

「ボスをつて……。ボスに雇われてたんじゃ？」

さつき彼はハッキリ言っただけだ。『このボスは俺が守る』と。それが一転してボスを討つときたもんだ。まるで理解が追いつかずに口元をぎゅつとさせて顎に手を添えていると、デュークは手を広げて舌打ちを始めた。

「つたく、これだから素人が首突っ込むんじゃねえってんだよ」

「デュークさん！ 改心してくれたんだね！」

ようやくピンときた。きつと、自分達との戦闘を通じてかつてを思い出してくれたに違いない。お帰りと言いたくて思わずデュークの手を取った。また負けてしまったとは言え、これなら命がけで勝負を挑んだ意味もあった。

「あー……。そうだな。おまえの清楚で純真な、子供みてえな心に薰陶を受けてな」

ところが、デュークは目をつぶるとあからさまに面倒くさそうに髪をぼさぼさやりだした。口調もどこか気だるそうで、ぜんぜん嬉しくなさそうだ。

「くんどう？ よく分かんないけど……。なーんか、バカにされてる気が……」

「……。とにかく、俺は行く。おまえは市街を頼む」

追及の目を避けて、そのまま流れるように握っていた手をぱつと払われてしまった。

どこへ行くとも、目的も何も告げずにディークは行つてしまおうと
している。また危険なことに身を染めているに違いない。

今までだつてそうだった。こうやって背負わせてくれない時は、い
つだつて。遠ざかる背中に不安が募る。

「待ってー！」

そんなのもうイヤだ。あのときはぐつと堪えた。今なら、もうい
いに違いない。剣の腕では遙か届かないかもしれない。それでも、今
はもう、並んだはずだ。思わず飛び出し彼の腕を取る。

「あん？」

「あたしもディークさんと一緒に行くー！」

「だあつー！　なんでそうなるー！　おまえはロイのこの騎士だろうが
！」

ああやつて昔のように、なにも言わずに飛び出せば諦めるとでも
思っていたのだろうか。ディークには珍しく慌てたように声を張り
上げている。

ちつとも怖くないどころか嬉しかった。彼はきつと、本気だと受け
取ってくれたに違いない。でもなければ、また「ナマ言つてんじやね
え」とでも言つてあしらわれたはずだ。

「え……。なんで知ってるの？」

それ以上に、ロイに仕えていることをディークが知っているのが不
思議だった。彼とは山間部で一度遭遇しただけで、それだけで分かる
はずないだろう。

「ちよつとした便利屋をやつててな。情報は命つてだけだ。分かつた
ら退け、たがいの仕事があんだろ」

便利屋がどんな仕事かはよく分からない。この混乱の中、単身で何
をこなそうとしているのだろう。ますます不安が膨らみ、この前の村
襲撃が嫌でも浮かぶ。

「あたしはディークさんが心配なの！　それに、まだ許したわけじゃ
ないんだからー！」

「おまえに許されるような話はないはずだが」

言い終わりもしないうちに、ハイハイとでも言いたげな目がまた背

を向けてしまった。

「まあ！ もういいもん！ 勝手についてくから！」

「ああつ、クソがつっ！」

がつしりとデイークの腕を掴む。振り払われても平気なように彼のベルトも握つてしがみつく。苛立った声が飛んできて腕が硬くなるのを感じるが、構わず被せた。

「だって、いるんでしょ？ この元凶が」

「！ おまえ……」

彼は観念したようにため息すると、力を抜いて振り向いた。

「……時間がねえ。足手まといなら置いて行く。いいな」

「へへっ……」

「まあ、おまえなら地上戦でもデビルアクス並には信用できるか」

「言い方！」

ちよつとは認めてくれてもいいのに相変わらずだ。

デビルアクスとは、凄まじい攻撃力をほこる代わりに、運が悪いと使った本人が真つ二つになる、文字通り悪魔の武器のこと。なんだか、手に負えない悪魔が憑りついたとでも言われたようで、言い返さないと気が済まない。

「あたしだって……成長したんだから。颯閃一刀流、見せてあげるよ」
すつと太刀を引き抜いてデイークに見せつける。彼と一緒にいた時にはなかった新しい力。槍だってもちろん進化させてきたが、師の教えをさらに研ぎ澄ませた剣こそ一番に見せてあげたい。

「精々アテにさせてもらうぜ。デビルアクス——」

「もういいって！」

ぜんぜん信用していない目で茶化された。相変わらず子供を見るような目が悔しい。

まだ問答無用で「下がれ」と言われただけマシかもしれない。あのときは見習い騎士というのもあったのか、めったに先行させてもらえなかった。

「みんな、市街をお願い！」

「オツケー、リーダー。そのオジサンの監視は任せたよ」

「誰がおじさんだッ！」

去り際、ルシヤナはポンと肩を叩いてきてウインクしていった。彼女を先頭に北進する仲間たちの先にはオスティア城がある。

彼らが角に消えると、あらためてディークと肩を並べて彼の視線の先を一緒に見据える。

「で、ボスはどこに？」

「この天辺だ」

彼が見上げたのは意外にも近場だった。ディークに気を取られて忘れていたが、たしか高い建物の前にいた覚えはある。さっきの戦いで頭上から弓兵が狙っていたのはこの建物からだったか。

それにしても、かなり豪華な造り——見上げた先に目が飛び出しかけた。

「ええ?! ーっつて!」

「ヘルメス・オスティア。各地の領主様御用達の、リキア一の高級ホテルだな」

見習いの頃もディークと見上げた建物だった。滑って下りられるのではないかと思うくらい緩やかに傾斜する壁はそれだけで芸術品のよう。オスティア城とどちらが勝っているのか分からないくらい背の高いホテルは、泊まりたいとディークにねだったら「一か月タダ働きならいいぞ」と返ってきたくらいの高嶺の花だ。

「さあて、大物狩りと行くぜ!」

大剣を肩にかつぎ直したディークの口ぶり、目の前にそびえたつ摩天楼……。思っていたのとは全然違う。『ボス』が待ち構えているようだ。

「ラジャー! へへっ、久しぶりにディークさんと一緒に仕事できるよ」

駆け出したディークの背中についてホテルへと突入する。襲撃で避難したのだろうか、ロビーには人の気配は何もなく、ガランとして気味が悪い。さっさと上の階を目指すべく螺旋階段を駆けあがる。

「シャニー、これだけは守ってもらうぜ」

途中の階などまるで眼中にない様子で登っていく背中から、突然に約束が降ってきた。

「おまえは喋るな。あくまで、おまえはフェレ家の騎士で、俺とは現場で鉢合わせただけ。いいな？」

「そ……そんな」

階段を転げ落ちて行ってしまいそう。せつかくデイクが背中を預けてくれたと思つたのに、今の一言に打ち砕かれた気がした。このままでは、見習いのおときと何も変わらない。堪らず立ち止まった。

「またなの？」

「ん？」

「どうしてデイクさんは、背負わせてくれないの？」

「……守れねえなら、おまえも敵だ」

「——ッ!!」

「行くぞ！」

あの時からそうだった。自分に対してだけではない。デイクは動乱中で誰にも自身を任せることをしなかった。身分問わず多くの人が声をかけていたが、俺のような傭兵に、俺のような剣闘士上がりに……いつもそんな感じで一線引いていた。

たくさん守ってくれたし、与えてくれた。だけど、肝心なところではいつも独りで行ってしまつて、守らせてくれなかったし、恩返しもさせてくれなかった。

二年前は、見習いでは足手まといだからかもしれないと思つた。ならば今は、それでは……。

「ごめん、デイクさん。それは守れない」

ふたたび駆け出して小さくなる背中を、大きな声で引つ張り戻す。

「何……？」

「騎士として、民を守るために最後まで寄り添わせてもらう。それがあたしの——流儀だよ」

流儀などなにもない、ただ一人前になりたい見習い騎士だったころとは違う。なにより、傭兵^{プロ}として己の流儀を見つけ、何があつても曲げるなど教えてくれたのは彼に他ならない。見せたかった、自分の成長を。そして、背負わせて欲しかった。

肚をくくり怒鳴られ上等で生意気を言つたつもりが、振り返つた

デイクは驚いたのか目を見開いている。

「ハッ……。ナマ言っつてんじやねえと言いてえところだが……」

彼は鼻から息を抜くように笑い、また前を向いて大剣を担ぎ直した。

「なら、好きにしなッ。行くぜ！」

ひとつ言い放つてデイクは飛び出した。力強く駆け上っていく彼の背中を見上げると、不思議なくらい意識とは無関係にわっと顔が綻んでくる。

「ラジャー！」

好きにしろなんて、言われたことはなかった。今度は任せたと云ってもらいたい。そのためにも……。最上階を目指し、ひたすら背中を追う。



突き抜けるような空と街並みを一望できる最上階のコンサバトリーは、すべてを支配しているような錯覚させ覚える高揚感を掻き立てる。

ところが、部屋の主——白髪交じりをオールバックで固めた老紳士は、彷徨うように窓辺でうろうろして落ち着かない。

「本当にうまく行くのだろうな」

この部屋でつい数十分前に浴びせた疑念を、飲み込みきれない様子で吐き出した。

「——大丈夫ですよ。あなた方なら分かるでしょう、穴がどこにあるのか」

部屋を訪れたあの男は、「心配性ですね」と笑ってそう言っていた。

ただでさえ神経質そうに固く閉じていた口元が、ギリッと不安を噛み砕く。

「くそっ、あいつらどれだけ時間を要しておる！」

街の様子を見ても、最初ほどの変化は見られない。火の手が上がったり、逃げ惑う人の流れは彼にとって予想通どおりの勢いと方位だった。にもかかわらず、まるで坂を昇る球のように、今や勢いはなく侵

攻は止まって見える。

「わりのいが、どんだけ待っても知らせは来ねえぜ」

そのときだ。遅い声が扉越しに突っ込んできた次の瞬間、力任せに蹴破られた扉が部屋に飛び散った。

「邪魔するぜ」

「な、なんだ貴様は！」

突っ込むデイクのうしろについて入った部屋は日差しで眩しい。シャニーが霞む目を細めて見渡すと、仰天して目を見開く一人の老紳士が身構えていた。

「えっ……。ええ?! この人って?! どこかで……」

頭の後ろに引っかかっているのに名前が出てこない。一度会っているのは間違いないし、酷いことを言われた気もする。現に、紳士はこちらの顔を見るや慌てだして、面識があるに違いない。

「ま、待ってくれ! 私は言われた通りにしたただけなんだ!」

「誰ですか! それは」

「チイツ。おい!」

自分から喋ってくれるとはラッキー……すかさず聞き返したらデイクにベルトを掴まれ引っ込められてしまった。

「素人は引っ込んでなって。だから連れてきたくなかったんだっつの」

彼の言いぐさに思わず膨れてみせたものの、紳士は自身のボロに気づいたのか口をぎゅっと閉ざしてしまっている。

前に出るなど言わんばかりにシャニーを腕で遮りながら、デイクは一步紳士に近づいた。

「今なら、あんたには選択肢がある」

「選択肢だど?」

「このまましよっ引かれるか、俺たちに協力するか」

目が飛び出しそうになった。大物狩りとも言っていたし、侵攻の黒幕に違いない。その相手に拘束以外の交渉を持ちかけるなんて。止めようとするのを見切られていたように、デイクの腕に押し退けられる。

「あんた、確かラウスの現当主だったよな？」

「ああっ！　って、ええ?!」

デイクが口にしてようやく引つかかっていたものが飛び出した。ラウスといえ、リキアに来て間もないころ営業に出向いた中堅貴族だ。ひどい言葉を浴びせられた記憶が蘇ってきた。

「息子に孫にと、二代にわたって大罪犯したのに、あんたを当主代行に残すとはロイも器がでえもんだぜ。ま、このままりキア同盟に引き渡しゃ、今度こそラウスも終わりってわけだ」

老紳士は三代前の当主との事。この紳士の息子は反乱を企てた末に、ロイの父エリウッドたちに討たれたと聞く。さらにその息子は、先の動乱でベルン側につきロイ率いるリキア同盟軍に倒された……らしい。とは言っても、その時すでにロイと一緒に戦っていたはずなのだが。

あのかきは生きるのに必死で、どこのだれを倒したとかあまり覚えていないが、今ならラウスがどこかしつかり分かる。

「で、でもラウスも襲撃を受けてたよ?!」

新聞で襲撃を知り、ロイに守備範囲を広げていいか聞いたのは記憶に新しい。

なのに、デイクは呆れたように両手を広げるだけで意に介さずと行った様子だ。

「くせえ芝居ってところだろ。それとも、そいつも指示されたってか？」

「ぐぐ……」

反論材料を絞ろうとしているのが、紳士の逸らした目とギリギリ歯ぎしりが聞こえてきそうな口元から伝わってくる。

「ま、あんたの城を漁りや分かることだがな」

「なんで？」

頭が追いつかない。よく分からないままデイクのペースでトン拍子に進んでいく。

なんだか、これが同盟主のお膝元を狙ったドンとは思えないが、デイクには確信があるらしい。聞いたらまた面倒そうなため息が

返ってきた。

「チイ、そのくらいピンと来やがれ。村の宝物がありや、クロだろ」

「おおー！ 確かに！ デイークさんすごい！」

「やれやれ……大丈夫かよ」

頭のキレる人たちが本当に羨ましい。自分だつて「流れ」の揺らぎでピンとくることもあるが、それが何かはいつも元凶まで近づかないと分からないし、この老紳士にはどうにも揺らぎさえない。

それにしても、胆力にしても、そうした意味でも、この老紳士は本当に首謀者なのだろうか。

「信用できるか。どこの馬の骨ともわからんお前らを」

老狐のような顔つきそのままに、警戒して老紳士は口を割ろうとはしない。

「あたしは——」

「俺は騎士じゃねえ。金次第で何でもする便利屋つてところだ」

身分さえ分かれば事態を動かせるかもしれない。とつさに口を開いたとたん、デイークの腕にまた押し退けられ被された。

彼にギロつとひと睨みされて言葉を飲み込んでいるうちに、デイークはふたたび老紳士に目をやり毅然とした声で持ちかけ始めている。

「あんだだつて筋さえ通つてりや依頼は受けるぜ？ あんたは最悪を免れる、俺はネタが手に入る。契約つたあ、そういうもんだろ？」

老紳士は目をつぶり、歯が見えるくらい唸つて葛藤を噛み潰そうとしているかのようだ。

そのうち、あごに添えていた手を下ろすと、今までに無いほどまっすぐ見据えてきた。

「わ、分かった。手を貸そう」

「話が早くて助かるぜ。んじゃ、まずは襲撃をやめさせてもらおうか？」

デイークが大剣を肩から下ろした瞬間だった。下ろしていた老紳士の手が「流れ」を揺らす。

「バカめ！ 死ね！」

金具同士が噛み合う軽そうな音をまもつて突き出された老紳士の

右腕。その先でディークに向けて握られている真つ黒で鳥のような形——クロスボウだ！

「ハッ、やつと馬脚を露し——」

「ディークさん！ 危ない!!」

「ぬおっ?!」

どうやってやったか覚えていないが、気づいたらディークに体当たりして吹き飛ばしていた。

ハッとしたのはディークと目があったからだけではない。閃と感じた「流れ」の揺らぎが、まっすぐ突っ込んでくる。

「おのれハイエナめ！ まず貴様から受け取れ！ この機械弓の短針をな!!」

振り向くとクロスボウの照準が陽にぎらついていた。あの軌道……不可避。

「クソがッ！ 間に合わねえ……!」

端にディークが立ち上がったのが見えた。引き金が引かれているのに、この間合いではもうムリだ——カチンと意識のなかに飛んだ稲光が、青焰に火を点けて噴き出した。

「なっ?!」

打ち付けられたように止まるディーク。シャニーに浴びせられた短針の全てが、馬車の車輪に触れた石のようにあらぬ方向へ跳ね飛んでいく。

老紳士も仰天して目を見開くや強く構えて連射したものの、そのうち引き金が乾いた音をたてはじめた。

「ま、魔人……」

青焰を吹き上げ目を翠緑に光らせる乙女に、老紳士はかすれた声で恐怖を漏らし後ずさる。

「ディークさん！ 大丈夫だった?!」

今は彼など後回しだ。ディークのもとに駆け寄ったシャニーは、彼の髪に手を突っ込みさすってみた。コブはできていないし、どうやら無事に済んだらしい。

ホツとする間もなく、グイツと腕を掴まれて無理やり視界に老紳士

を映されるや、背中にバシンと衝撃が走った。

「バカ野郎！ 状況を俯瞰しやがれ！ あのくらい備えてるに決まってるだろうが！」

「エ？ツ?! うわあー！ ごめん!!」

まさか、デイークの作戦に水を差していたとは。

たまらず手を結んで詫びながら、相変わらず駆け引きに頭が回らない自分の未熟さに嫌気がさす。せつかく……認めてくれたのに。

「つたく、俺みたいないな人間に無茶すんじゃねえ！」

それでも、デイークがそう口にした小言は、しよぼくれて羨みかけていた気持ちにカチンと火をつけた。

「何さー！ 俺みたいって！ 次言ったら絶対許さないんだから!!」

まただ。また彼は言った、俺みたいな……と。

いや、初めてか。同じ傭兵という立場の人間に使って見せたのは。憧れてきた背中の心が分からないのがもどかしく、歯痒くて語気を抑えられない。

「なんでデイークさんは自分のことを悪く言うの？ やめてよ！ あたし、デイークさんのこと……すっごく尊敬してるのに……!!」

なぜ、分かってくれない。大事だと思ってるものを貶められる悔しさを。なぜ、もつと頼って背負わせてくれないんだ。……あんなふうに、作戦を邪魔する人間が言えたことではないか。勝手に涙があふれてきた。

「あーあー悪かったぜ！ チツ、切り札がそんな形だったんなら先に言いやがってたんだ。それより前だ！」

デイークはそれだけ言うのと視線を外してしまった。

「ええい！ こうなればどうなろうと同じだ！」

パチンと密室に指を弾く音が響いた瞬間だった。別室やらテラスからやら、わらわらとなだれ込んできたのはラウスの騎士ではなく、身なりからして傭兵崩れの賊に違いない。

「おおっと、さすがに用心深いな？」

「きやははっ。ねえっ、相棒。いっつぱい出てきたよ！ 一斉にぶっ潰したらキモチよさそーだねえ！」

これもデイクにとっては想定内と言うのだろうか。涼しく返す声には笑いさえ含んでいる気がする。頼むから、はしやぎだした戦闘セキ狂とは違う理由だと信じたい。

「こいつらを生かして帰すな！」

老紳士の一声に、無数の金属が擦れる音があちこちから宣戦布告を突きつけてくる。彼らは斧やクロスボウを構えていて突撃寸前。二対多数……勝負は瞬間で決まるだろう。

「シャニー、肚括れ！」

「言われなくても！ デイクさん、機械弓は任せて！ 残りお願い！」

「ハッ、了解だ、隊長さんよ！」

いつものクセでつい指示を出してからハッとしたが、デイクは流れるように飛び出していった。

大剣を肩にかついだデイクは、自身より巨体な斧戦士の群れに立ちほだかっている。

「どうりゃああ！」

「ぶっ潰してやらあッ」

高級ホテルだろうがお構いなしに、斧が大理石をぶち破って火花が散り土煙があがる。

「どこ見てやがる！ こっちだ！」

後から後から、続々振り下ろされる即死の嵐をかい潜り、一箇所を集まった手合をデイクは大剣で一撃のもとに薙ぎ払って見せた。軽々宙に放りだされた巨体は壁に穴を開けて戻ってこない。

「ランクBってどこか。ま、恨むなよ？ つと……——相手が悪かったな」

わずか数十秒。剣を払ったデイクは次を定めて踏み出しかけたが、ひゆうツと口笛を吹いた。

「死ね！ ぶち抜いてやる！」

距離十分。複数のクロスボウがシャニーを一斉にとらえる。

ミリアのガトリング式と違い、扇状に囲まれての一斉射撃はいくら身のこなしに自信があろうが避けきれないだろう。そう、それだけな

らば。

「消えた?!」

「隙だらけだよ!」

部屋中を引き裂く短針をセチの風で跳弾しながら音速に駆け抜け、すれ違いざまの一閃でひとり、猫のように壁を走ってまたひとりと沈めていく。

「困め! フルバーストだ!」

さすが賊とは言え傭兵崩れか。戦況への対応は早く、彼らは扇状を崩さず壁側にシャニーを追い詰めた。半数が大型の金属弓に持ち替え、一斉に構えて押し込む作戦らしい。

「そっちがフルバーストならこっちもオーバードライブだ!」

「ふふ……キミたち、ツイてるよ。刮目するがいいさ。相棒、私たちがの舞、派手に決めようじゃないか!」

「決めるさ。あたし達の譲れない一線、ここで守るよ!」

満足げなセチの言う通りになるのは複雑だが、この状況を一発で逆転するにはこれしかない。魔力を爆発させれば、頭上へ掲げた太刀に旋風荒れ狂う。

「吞まれる!」

「なっ、何だこの風は?!」

賊たちの足元をさらって、渦が「目」に吸い込んでいく様は羽虫を弄ぶよう。

「逢魔の月光!」
イクリプス・カレイド

巻きこまれ為す術ない者達への渾身の回転斬りが一閃。鋭く迸った弧は、月光のごとき軌跡を描いて絶体絶命を振り払った。

残りは……あの老紳士だけだ。

「ぐっ……こんなはずでは……」

部屋の隅に追いやられた老紳士の背が、ガラス張りのテラス窓に触れる。弾の切れたクロスボウを握ったまま、だらんと垂れ下がる腕は敗北を受け入れたように大人しくなった。

「……これでアンタはナシだ。しよっ引かせてもらおうぜ」

大剣を背にしまったデイークは、後ろ手に老紳士を縛って部屋の外

へと連れていく。

陽を浴びるその背中を見つめたら、サンダーでも浴びたようにふいに胸がドキンとして「あ……」と声が漏れた。

「どうした？　いくぜ」

立ち尽くしているのを察したのかデイクが振り返った。そこにあったのは、間違いなく大好きな顔だった。ずっと憧れてきた師の顔は頼もしく、懐かしい。

「はい！　たーいちよ！」

「な、なんだってんだ、おまえはよ。いきなり」

「えへへ、見習いの時を思い出しちゃって」

かつての呼び方をしてみたくなった。駆けながら手を挙げて呼んでそのまま腕にくつつく。ようやく、帰ってきてくれたと実感できる温もり。デイクは照れたのか呆れたのか、じんましんでも出たような顔をして払い除けようとしているが、離れてなんかやるものか。嘘をついていたお返しだ。

「やっぱり……カツコ良かったよ。あたしの師匠デイクさんはやっぱり、世界一だよ」

「わけ分からねえこと言ってねえで行くぞ」

「あ、待ってよ、デイクさん！」

縄抜けみたいにするつと腕を抜かれて、逃げるようにデイクは歩調を早めて階段へと消えていく。

一度窓から街を見下ろし、デイクの後を追う。

戦火は鎮圧されたようだが、まだまだ終わりではない。彼から聞かなければいけないことはたくさんある。村を襲っていたのは、間違いないのだから。

最高の再会

「それでね、それでね！」

部屋の外まで聞こえそうなハツラツとした声は、一つでは口が足りないくらいにあれもこれも喋ってまるでガトリングのよう。

「部隊のみんなと一緒に盗賊団を追い払ったんだよ！ それでー、えつとねー。それでね！」

オスティア襲撃の翌日、フェレ城へ戻ったシャニーはいの一番に口イから呼ばれて報告をあげていた。

一面赤いじゆうたんが敷かれた応接間。金色の調度品やゲージュツを感じさせる絵画は恐ろしくて触る気にもならないが、駆け回って声を響かせてみたいくらい広々している。

そんな場所に呼ばれて何事かと不安になったのは最初だけ。彼は身を乗り出して時折うなずきながら続きを急かしてくるよう。

次はなにを報告しようか。忘れないうちに全部一番に伝えたい。昨日の奮闘を思い出したら我先にと一気に言葉が湧き上がってきて、口の中でケンカしてなかなか出てこない。

「うん、シャニーたちの活躍は聞いていた以上みたいだ。本当にありがとう」

オスティアの市民から、心にスツと風が吹くような言葉を街から出るまでかけてもらえた上に、こうしてロイに直接褒めてもらえたら飛び上がったしまいそうだ。

「すごい人数だったけど、ほとんどあたし達がやっつけたようなもんなんだから！」

「シャニーたちのおかげだ。リキア同盟としても心から感謝しているよ」

「えへへ……」

昨日は久しぶりに戦闘らしい戦闘になった。盗賊団とは言え傭兵崩れと思しき人間も多く、それなりの練度の組織相手にアドレナリンが出た。戦闘^{セキ}狂は物足りないと言った感じだが。

それでも成果は大きかった。今までより深く融合して太刀を振る

えたからか、また距離が近くなったように感じるのはきつと気のせいではない。

「ほとんどつてのは盛りすぎかもですけど、市中にいた賊連中、かなりの数で大変でしたよ」

ルシヤナの横目が嘘をつくなど突っついてくる。彼女によると、賊の殲滅より市民の避難を重点に行動していたらしい。強固な守備隊があるオステイアなら当然そうなるか。

それでも、開かれた戦端の最前線に立ち、絶体絶命を切り拓いたのだから盛り足りないくらいと言ってもいい。

「そうか。民にほぼ被害が出ず済んだのは初期の対応が適切だったからだよ。しっかりと訓練されてるね」

報告に安心してくれたようで、ロイはほうつと荷が下りたように笑みを浮かべている。

イリアでの賊討伐の日々がこんな形で役に立つとは。それだけでなく、市民の誘導や避難経路の確保……ベルン動乱での経験も活きたと言えるだろう。

「シャニー、そして天馬隊の皆、改めて礼を言うよ。ありがとう。君たちのような騎士がフェレにいるのを誇りに思う」

「わあ！ うん、嬉しい！ これからも頑張るからね！」

思わずバンザイしてしまった。リキアの騎士として民に名前を覚えてもらえ、感謝の言葉をかけられただけでも心はヤル気スイッチ全開に次を求めている。さらにロイの期待に応えられたと思うと、もつともつと褒めてもらいたくなるではないか。

「頑張ればスイッチももらえるもんねー」

「ん。手癖悪かった」

「あ、あれは成り行きだよ！ 成り行き！ ねだったんじゃないし！」
ルシヤナとレンがわざとらしく蔑む目を向けて、そんな気持ちにさっすく冷や水を浴びせてきた。

高級老舗デリス・アフレリコら市民から、お礼にとスイーツをプレゼントされたのだ。せっかくの気持ち断るなど、騎士として礼に反するだろう。食べきれなかった分を袋いっぱい詰めてもらったし、あと二日くらいは堪能

できそうだ。

「ま、部隊長は途中から師匠さんについて監視デイトに行っちゃって、ちゃんと頑張ってたか知らないんですけどー」

「ル、ルシヤナ！ デートってー！」

ルシヤナの攻勢は止まらない。彼女の横目はこれでもかと言いたげで、ロイが突っ込むのを誘導しているに違いない。

「あの後大変だったんだよ！ デイークさんは任せてくれないし、相手はラウス当主だし、ボデイガードわんさか出てくるし！」

至近距離でクロスボウを向けられたときは悪い汗が出たが、ロイには言わないでおく。

憧れた高級ホテルのスイートルームが、まさかあんなことになるとは。これも、デイークが部屋に行く目的や交渉の作戦を教えてくれなからだ。後で文句を言ってやろうと思っただのに。

「無事に帰ってきてくれて何よりだよ。本当に大丈夫かい？」

「うん！ へーき！ かすり傷ひとつ無いよ！」

同じ問いがこれで何回目だろうか。

デイークが側にいてくれたから今こうしてロイとお喋り出来ているのは間違いない。

相変わらず、すさまじい剣術だった。足の踏み場もないほど現れたボデイガードを、大剣一閃で一撃のもとに片付けるとは。盛った話ではなく、瞬きしたら全部終わっていたと言ってもいい。

「元気で良かった。デイークに感謝しないとな」

「あの場だってあたしめちやめちや頑張ったんだよ！ 弓兵ゼーんぶ倒したし！ デイークさんも守ったし！」

なんだか、一気にデイークに手柄を持って行かれたような空気になっちゃった。

ルシヤナたちにもあの場面を見せてやりたかった。クロスボウからデイークを救い、雨のような短針の嵐を跳ねのけて一網打尽にして。あきららかに、彼女たちは信用していない顔をしている。

「でも、『邪魔すんじゃないねえ！』ってゲンコされてたじゃん？」

ラウス当主が連行されるのを見送ってハイタッチしようとしたら、

デイクから返ってきたのはルシヤナが口にした言葉とグリグリだった。

一番見られたくない、叱られる姿だけを目撃されたことになる。

「ぐっ……。あ、あれは連携ミス……。じゃなくて！ デイクさんの演技に騙されただけで！」

「味方が騙されてどうすんのよ」

「ぎぎぎ……。純真な乙女の心を弄んでデイクさんは！」

「はいはい。純真、純真。毛もなんとかうって言われるくらいだもんね」

「それ言わないで！ 今度会ったらそれ謝らせなきゃ！」

言えば言うほど首が絞まるのは分かっているけど、言い返さずにはおれない。結果はお察しと言えるだろう。アンフェアすぎて泣けてくる。

「ははは……。それにしても、デイクに会えたんだね」

ロイが無理やり話を戻してくれた。というより、ロイへ頑張りを報告していたはずが、なぜこんな自爆を繰り返しているのだろうか。

このままでは、デイクを邪魔して叱られたけど、スイーツが美味しく嬉しかったです——としかロイに伝わらない。

「うん。ラウス当主の捕縛作戦。デイクさんとペアでこなしたんだ」

ホテルをデイクと駆け上がり、最上階で首謀者らを制圧して襲撃を鎮圧させた。それをロイは真っ直ぐ顔を見て、ときおり活躍を褒めながら聞いてくれる。もつと教えてあげようと思いつきのシーンにも、デイクが映っていた。

「だけど、気づいたらいなくて。ちよつとは……。背負ってあげられたのかな」

いくら戦神と恐れられた最強の一角であろうとも、あの数に独りでは無傷で済まなかったに違いない。彼は強がっていたけれど。

幸い彼もケガは無かったようだが、はつきりとは確かめられなかった。ルシヤナ達と状況報告しているうちに、風のように消えてしまったのだ。ありがとうも、ごめんねも、そしておかえりも、何も言わせ

てくれないまま。

「今度見つけたらタダじや済まさないんだから！」

「大丈夫。すぐに会えるさ」

とにかく、言いたいことは山ほどあるけれど、これだけは絶対に聞きたかった。なぜ、知らないフリをしたのか。なぜ、村を襲っていたのか。

貸し逃げなんてさせるものか。思わずワン・ツーパーンチしているとロイが声をあげて笑い出した。

「リリーナもとても喜んでね。今度勲章を授与すると言っていた」

「ホント?! リリーナ様ってリキア同盟の盟主様だよね?! 嬉しいッ、ビツクリだよ！」

リリーナ女候と言えば、オスティアの領主でありロイの幼馴染と聞く。直接喋ったことはなく、動乱中に遠くから姿を見たくらいだ。

よく民の声を聞く穏やかな雰囲気ながら一本芯が通った女傑で、魔法も天才的と名高い彼女から直に勲章を賜るなど夢のようだ。

どんな言葉をかけてもらえるのだろうか。今からどう返そうか原稿が頭をあれこれ走る。

「ロイ様、例の者が来ております」

そのときだ。ノックと共にマリナスが入ってきた。ロイは彼に来訪者を部屋へ通すように指示すると、振り向いた顔にはどこか企みの笑みがある。

「今日はもう一人の功労者も呼んでいてね」

それだけでピンと来た。それにこの足音……ごくりと息を呑んでドアを見つめていると、意外に大人しくも慣れたノックが心を震わせる。

「あー!! デイークさんだ！」

「ん?!」

大剣のように高い背、触れただけですつ飛ばされそうな太い腕に、相変わらず何も纏わない上半身。短く整えられたミント髪に、シユツとした顔……分かっていたとは言え、思わず指をさしてしまった。

珍しく声を上げた彼は目をむき、巻き戻るように後ずさりしてい

る。

「ロイ、あんた……ハメやがったな！」

「いや、僕は依頼の報告を受ける場を設けただけさ」

ロイに視線をやり慌てる姿は、昨日ドライに交渉していたやり手とは思えない。

それに涼しい顔でしてやったりと返すロイとクスツと笑いが漏れかけたが、それを飲み込んで頬を膨らせてみせた。

「ディークさん！ 心配したじゃん！ どこ行つてたのさ！」

「どこでもいいだろ。仕事だ、仕事。徘徊も仕事の内でな」

今日こそは逃すわけにいかない。未だに部屋に入つてこようとしてないディークに駆け寄り腕をつかむと、彼はボサボサ手ぐしを突っ込んであからさまに面倒そうな声をあげた。

お構いなしに背後へ回り、ぐいぐい押しして扉を閉める。

「ディーク。オスティアの件、無事解決してくれて感謝している」

「ハン。コイツの横槍が入らなきゃ、オスティアに手が回る前にもう少しスマートに済んだんだがな」

肩を小突きながら、さも邪魔したみたいない言いは呆れまで混じつていて、カチンと火山が噴火する。

「なにおう！ あんだけの弓兵、一人じゃ相手出来なかつたじゃん！」

「誰のせいでその弓兵を呼ばれるハメになったと思つてやがる。相変わらずのトラブルメーカーめ」

「まあ！ 今度からもう助けてあげないもん！」

「おう、それは重畳つてな。ぜひと頼むぜ」

「~~~~~ツ!!」

ぐうの音も出せないところに、今度はデコピンでトドメを刺された。やっぱり……—そんな声が聞こえてきそうな、横から浴びせられる仲間たちの視線が痛すぎる。

反論しようにも、すでにディークの視線はロイに向いていた。

「リキア同盟から勲章を授与したい。ディークにはシャニーと式典に出席してもらいたい」

「あー、俺はパスだ。あくまで契約……受けた仕事を果たしただけで

金はふんだくるつもりだしな」

ロイが言い終わりもしないうちから、手を払うようにして拒否を秒で返すと「それより報酬はどうなんだ？」とさっそく話題を変えようとしている。

それでも、ロイも引き下がらなかつた。

「それは承知の上で、受けて欲しいんだ。誰が何を言おうと、君は僕たちにとって大事な人だからさ」

「……！ アンタ……」

彼も同じ気持ちだったとは驚きだが、自分の言葉でちゃんと伝えたい。デイクの正面に回って、ごつごつしつとも温かい、顔くらいありそうな手を取る。

「えへへっ。デイクさん、あたしもそう思うよ。俺みたいな——なんて言わないで。あたしの大事な師匠アニキなんだもん」

縫い付けられたかのように口をきゅっと閉じて瞬きも無いくらい、デイクはじつと見下ろしてくる。それは束の間のこと、そつと目を閉じて口元が緩んだ。

「つたく、俺の答えなんか端から聞く気なしって感じだな」

苦笑を含んだ声もそうだし、頭の裏に手をやってぼさぼさやるのは困った時と決まっている。どうやら観念したらしい。

「ま、こいつの監視がてら行くとすつか」

カチンと目が噴火する。素直になればいいのに、わざわざみんなが誤解するようなことを言うのはどうしてなのか。

「なにさー。まるであたしが問題児みたいにー！」

「問題児だろーが。放っておいたらどこ飛んでくか分かんねーような奴。どんだけ前科がありやがる」

「ギギギ……」

両手をバタバタさせて抗議しても、デイクにそう言われてしまうと、目に盛る炎もしおしお勢いが消し飛んでいく。これ以上、見習い時代の黒歴史を暴露されては堪らない。横からはずつと、それを期待する視線たちがケラケラやっているのだ。

あの時に比べたらずいぶん頑張ってきたつもりなのに、いつまで

経っても子ども扱いは悔しいというより、空しい。

「……ちよつとくらい、ホメてくれたっていいのにさ」

「ハッ……。十分に褒めただろうが」

それだけ言つて、また視線を外されてしまった。

どう映つたのだろうか。2年間で掴んだものを、デイクの前でしつかり見せられたはずだ。戦闘力も、心も、流儀も。

もつとはつきりした言葉が欲しい。彼の仕事を邪魔したかもしれないが、こうして二人で勲章をもらえるわけだし……。そこまで心の中で拗ねていたとき、ふと引つかかった。

「つて、あれ？ デイクさん、オスティアの事、ロイに頼まれてたの??」

「まあな。つか、今ごろ気づいたのかよ」

「言つてくれたら協力したのに」

まるで朝の挨拶かくらい、ずいぶんサラツと言つてくれるものだ。最初から言つてくれさえすれば、刃を向ける必要だつてなかったのに。いくら彼に届かなかつたとは言え、向けたことそのもの、忘れられそうにない。

口を尖らせて見せたら、その逞しい手でシャッターを閉めるように頭をグイツとやられた。

「人の仕事を横取りすんなつづの」

「そう言う訳じゃ——」

「それに、おまえらにはできねえだろ。領主どもの後ろ昏い噂を嗅ぎ回つたり、山賊団に潜入して計画を探つたり……。そういうグレーはよ」

頭に手を置かれるのも、こんな形で言いくるめられるのも、なんだか懐かしい。

見習いの時は言い返した。金で動く傭兵なら同じグレーだと。

——おまえが戦うのはためえのためじゃねえ。故郷の民のためだろ。なら、狭間にいちゃいけねえ。

あのとき、そう叱つてくれたからこそ今があると云つていい。ぐつと反論を飲み込むと、彼は「ハッ……」と小さく笑つてわしわしと頭

を撫でてくれた。

「デイーク、君の流儀に沿って新しい依頼を出したい。しばらく、僕を助けてくれないか？」

しばらく待つてくれていたのだろうか。静かになったところで、ロイが振った話にデイークの手が止まった。

「なんだと？」

「オスティアのような話がまだあるかもしれない。そうした調査や対応をお願いしたいんだ」

思わずごくつと息を呑んだ。ロイと契約を結ぶと言うことは、デイークはしばらくリキアに滞在することになる。我慢しきれずに手を引くと、デイークは進まないような顔で見下ろしてきたがそれは束の間だった。

「まあ、そういう話なら金次第で受けるが、期間は？」

「そうだな。安心させてあげて欲しいかな」

「……ハン。そういう事かよ。あんたも曲げねえな」

なにを驚いたのだろう。ロイの彼らしい柔らかな口ぶりに、強面が一瞬ビクツとした。

それでも、デイークは悟られまいとしたのか、目を閉じ呆れたように鼻から笑いを抜いて、二人だけで会話が進んでいく。

「あんたは実績があるし、流儀も通してる。悪くねえ。だがな、俺は傭兵を止めてんだ」

「えっ……。そう……だったの？」

戦神とさえ讃えられ、名を聞いただけで敵が逃げ出すほどののに。

さまざまな色がぐちゃぐちゃに混ざったみたいに複雑だ。せつかくまた逢えたのに、道を分けたまま、憧れた師匠の背をもう追えないなんて。いや、彼と斬り結ばなくていいなら……そちらのほうがいいのか。

ループに詰まって破裂しそうな胸をぎゅつと握る。できるなら、このまま中に突っ込んで取り出したいくらい。

そのとき、ふいにデイークが見下ろしてきて、わざとらしい溜め息を浴びせられた。

「とは言え……不出来な弟子を、そのままあんたの下で働かせるのも不安だしな。お守りの期待値は低めにしといてくれよ」

頭の前から太ももを伝ってゾクゾクが全身を抜けていく。男二人のよく分らない会話がようやく繋がった。胸に詰まっていたものが吹き抜けるように飛び出す。

「デイクさん！　一緒なの？　これから一緒なんだね?!」

「だあつ、くつつくんじゃねえ！　暑苦しい!」

雲ひとつない晴空のように突き抜ける。まるで、ずっと探していた宝物を見つけたような。

デイクは頭を押さえつけてくるが、照れているだけに違いない。そうでないとしても、離してなんかやるものか。

「いろいろ頼むよ。この前の村みたいな話も少なく無いようだし」

契約が成立したからか、ただでさえ友だちに話しかけるようだったロイから、心なしか一層エネルギーを感じる。

反面、また男同士だけで領きあつて、話に置いてきぼりにされている気がしてならない。

「この前の村って?」

「おまえが突っ込んできて勝手にぶっ倒れたヤツだ」

額への指先のひと突きとともに、言葉以上にもの言いたげな視線で穴が空いた。

「え……ええ?!　あれ、デイクさんが襲つてたんじゃ?!」

「ああ、襲つたぜ。盗賊団のアジトをな」

体だけ別世界に行つたみたいに力が抜け、ペタンとデイクの腕に吸いついたら動けなくなつてしまった。

デイクはもちろん、ロイも知っていてなにも言ってくれなかったことになる。

「な、なんで教えてくれなかったのさ!　つて言うか、何で嘘ついたの!　あたし……あたし……!」

「おいおい。チツ、だからだつっうの」

教えてもらえなかった驚きは、魔法でもかかったようにそれ以上の悔しさと悲しみを連れてくる。

それさえ追い越して心を満たしたのは、ひたすらの安堵だった。大好きな人は、今も変わらず憧れた彼のままだったのだから。

「これからゆつくり教えてもらいなよ。しばらく一緒なんだし」

「ロイ、あんたな……。ったく、シャニー、いつまでくつついてやがる。部隊長ならシャキツとしろ」

ロイの頭を撫でるような言葉に甘え、今は帰ってきた逞しさにありったけ頬ずりしておくことにした。今離れたら、またどこかへ行ってしまう気がしてならない。

叱られたつて、仲間たちの目があったつてへっちやらだ。取り戻しなきゃなを、力強さも優しさも、目で耳で確かめたい。

「ぐす……。ッ。うん。よろしく、師匠！」

「ガラじゃねえ。止めろ」

「えへへ……」

この返しを待っていた。やっぱり、変わっていない。もう今度は、嘘なんかではない。

戦場でも、遠く離れていても、守り続けてくれた傷だらけの腕を両手で引き寄せ顔を埋めた。

「おかえり、デイクさん」

「ハッ……。敵わねえな。まったくよ」

ガキっぽい——デイクの顔はそう言っている。それでもいい。彼の前ではまるで子供だと自覚している。彼の背で学んで、一人前以上の大人になると涙を拭いて誓う。

それこそが恩返しとなるに違いない。掴み取った流儀を、彼は認めてくれたのだから。

不器用なジュビレ

重厚な守りを体現するような、果てまで続く金管楽器の煌めきをまとったファンファーレに骨まで共鳴して興奮を揺さぶられる。

オスティア城での授与式の日。シャニーはディークと共に式典に出席していた。

空に浮かぶ城のような無数のシャンデリアが高い天井から煌めき、大講堂を埋め尽くす観衆や、さらに奥の壇を照らす。その間に海が割れるように続いた紅いじゆうたんを、先頭列まで歩いてきたのは複数いた。授与の対象は前の戦いだけではないらしい。

燕尾服を着こなした賢そうな学者然の紳士や、もはや天の使いかと思ふような微笑みのシスターに、何をした人なのかよく分からない普通のおじさんに……受賞者は色さまさま。

今日は外行き用の軍服でばっちりキメてきたし、彼らにだって負けていないはず。

ふだんは開けっ放しだったトップスのレースアップはちゃんと結んだし、化粧やヘアメイクもロイお抱えのスタイリストに施してもらって100点満点だ。

「ねえねえ？ 今日のアたしき……ちよつと違わない？」

「ああ？ ……わりい、馬子にも衣装とでもツツコミ待ちだったか？」
「なああああつ?!」

なのにこの人ときたら。ナイショで下にもあれこれ着込んで、レディに磨きをかけてみたと言うのに。恥ずかしかつたのがバカみたいではないか。横から同情してくれるルシヤナたちの眼差しが逆に辛い。

「ハン、ガキが科作ってんじゃねえよ」

ジリジリをぶつけても、ディークはそっけなく壇上を見上げるだけ。一緒に見上げたら、タコになっていた口から衝撃がまんま飛び出した。

「わあ、見て見て！ リリーナ様キレイ！」

「騒ぐんじゃねえよ、バカ」

壇に上がったリキア同盟盟主——リリーナ女候の翼が伸びるようなプリンセスドレスには思わず目を奪われた。

ディークを掴んでぐいぐいやつても何の興奮もないらしく、いつもどおりのトーンであっさりとしていてつまらない。

その無愛想が今日はとても凛々しい。ふだん半裸の彼も、さすがに白の軍装をまとっていて男前が光る。

一人ひとり呼ばれていく。壇上ならもつと格好よく見えるに違いないが、当のディークは順番が近づいてきたからか面倒そうだ。

がっかりして壇上に視線を戻せば、純白のプリンセスドレスと、それに負けないくらい艶やかな青髪をなびかせる女候の笑顔が眩しい。

「いいなあ、キレイだしカッコいいし。あたしもせめて魔法使えたらなあ」

天は二物を与えないというが、どうやら例外もあるらしい。魔法を使えたら何をしてみたいだろうか。溢れる未来妄想が次から次に湧き上がって夢は尽きない。

「おまえが魔法だ？ ハッ、やめろ」

風船に針を刺すようなことを、どうして平気で言えるのだろうか。ムリムリと振るロマンを知らない手を掴む。

「ブー、なに？ どういう意味？」

「トラブルの素だ。遠くから狙われちゃ敵わん」

「うー……根に持ちすぎでしょ」

まだ作戦を邪魔したのを引っ張るつもりか。

順番も近づいてきたし、これくらいにしておいてやろうとしたのも束の間。まるで死体蹴りするような声が頭からケラケラ飛んできた。

「キミ、私がついても具現化できないんだからセンスないんだよ」

セチのストレートすぎる評価がグサリ。これだけでとつくに心には風穴が空いたのに、彼女の辞書には慈悲だとか加減がないらしい。

「化身が真似事と張り合ってもらっても困るし、世の中諦めも肝心だよ？」

「うう……夢くらい見たっていいじゃない」

「拗ねない、拗ねない」

まるで悪気のない爽やかな笑顔が恐ろしい。精霊を名乗る悪魔と
言うべきだろう。

◆ これぞ職人芸か。リキア同盟の紋章を中心に精緻な彫刻が施され
た、黄金色に煌めく重みのある勳章。壇上から戻ったシャニーはシャ
ンデリアに掲げて輝きを眺める。

リキアに描いた軌跡の証は、何度眺めてもじんわりする。これで少
しは手柄を積めただろうか。

(……違うし。そのために頑張ったんじゃない)

純粹に人々を守りたいから動いただけなのに、ふいに黒い自分が顔
を出したようで複雑だ。

それでも、少しでも名が通ったなら結果的に良かったと言える。無
名より、きつと多くの場所で人々に寄り添えるに違いない。

「ディーク殿？ ディーク殿はどこだ？」

そのときだ。急に周りがざわつき始めた。見渡せば先ほど壇まで
誘導してくれた騎士が名前を呼びながら小走りしている。まわりも
何事かとヒソヒソしはじめ、油を走る火のごとく一気に騒然となっ
た。

「え……ディークさん……？」

腹にじゅわつと嫌な感覚が噴きあがる。どうにもディークは最初
から乗り気でなかったし、会場入りしてからも冷めた感じでまるで違
うものを見ている気はしていた。

……もし、あれが脱出経路を探っていたとしたら。

「ルシヤナ！ あとは任せた！」

「ええ?! ちょっと、任せたってあんた！」

ほんと勳章をルシヤナに渡して駆ける。出席者も観衆もかき分け
て、騒然の会場を突き破るとオステイアの街へと飛び出した。

「きつとあそこだ」

思い当たる節はある。いや、そこ以外分からないから、もはや賭け
と言ってもいい。

動乱のとき、オステイアの反乱を鎮めてから西方三島へと渡る間、

毎日のようにデイークが連れて行ってくれた場所。

彼と一番に絆を感じるあの場所を目指して、ひたすら人をかき分け、肩を跳ね返され尻餅をついても、それでも走って、走り続ける。「デイークさん……。どうして……。いつも行っちゃうの?」

日はすでに傾きかけ、街をオレンジに染め始めている。暗くなつてしまえば街の様相は変わり迷子は避けられない。

それでも、今行かなければ、二度と逢えない気がする。

想いは伝えた。まだ伝わらないなら、伝わるまで、きつと伝わりと信じて捕まえるだけ。

中央通りを外れ、黎が広がり出した旧市街へとシャニーは消えていった。



(着いた……)

まわりはすでに真つ暗で、等間隔に走る松明の炎が白の石畳をオレンジに染め影を長く伸ばす。

その先には一軒の古びた酒場が見えてきた。まわりはレンガや石組で作られた建物が並ぶなか、ひとり木造を貫く店構えは年季を滲ませており、酒好きのこだわりをそれだけで醸し出す。

ひとつ頷いてシャニーは一步を踏み出した。目指す店は、まるで迎え入れるようにスイングドアが揺れている。大きく息を吸いこみ、ドアに手をかけ一気に潜った。

静かな店にはシルクハットの紳士もいれば、サングラスをした近寄り難い客もいる。きよろきよろしていたら荒くれの一団と目が合った。そういえば、今日はレデイに磨きをかけていた……。——にちやにちやしたイヤらしい視線から逃げるようにカウンターへ目を向ける。

「あー！ 見つけたぞ!!」

「ん?! ……あー……。おまえかよ」

指差して叫んだとたん、ぎよつとした背中が振り向く。デイークは一瞬目を真ん丸にして、騎士団に見つかった泥棒のような露骨に苦そうな顔をし、今さら作り笑いしながら手を上げてきた。

(懐かしいなあ……)

見習いするときもそうだった。あのときは隣にルトガーがいた違いはあれど、街で遊んだあと合流するといつもああして迎えてくれたか。

座っている席からディークをお尻で玉突きに退けて、逃がさないように端まで追い込むとそのまま隣に座る。

「チツ、よくここだと分かったな。つか、よく覚えてたもんだ」

「へへん、ディークさんの弟子だもん。動乱の時、よく連れてきてもらったからね。——じゃなくて！」

つつい気持ちよく喋らされるところ。当初の目的を忘れさせて煙に巻く作戦は今でも現役らしいが、そうは何度もひっかかるものか。

「探したんだからね。どうして黙っていないくなるのさ。ダメじゃん！」

「おまえは俺のカーチャンかつつの」

中がモヤつくほど濃い酒をぐい呑みする彼からグラスを取り上げた。

頭をボサボサやり、今にも耳栓を始めそうなくらいうんざりした顔。こんなディークを見るのは初めてで、今はただの酒飲みオジサンにさえ見える。

「ハッ、おまえらのキヤイキヤイする声は、オトナにはちよいと居心地悪くてな」

少しは堪えたかと期待したのが間違いだった。

悪びれる様子もなく勝手なことを言い出しては、氷もお情け程度の新しいグラスへなみなみ酒を走らせている。あの透明な蒸留酒は、40度くらいはあるはずだ。

これは、色々な意味でお灸を据えるべきだろう。

「なーんだ、自覚あるんだ？ オ・ジ・サ・ンって」
「ブツ?! ……ッ、——ッ!!」

まさかこんなにも特効とは。

吹き出しかけた酒が鼻に入ったらしい。咽せるわ、うめくわ、破裂しそうに真つ赤なディークは息も絶え絶え。

ここまでくると罪悪感も湧くものの、ツンと視線を切った。

「てめえ……。人が悲しむことはするなって習わなかったのかよ」

少し安静にすればいいのに。掠れ声で涙ながらに訴え、血走った目で恨みがましく睨み上げてくる様は、大人げないを通り越して哀れとも言える。

それでも、今日はこれくらいで許すつもりなどない。

「お互いさまだもんね。もう会えないんじゃないかって心配したんだぞー！」

「大袈裟だろ……。つつか離れろ！」

「デイクさんが悪いの。いきなり……。いなくなったりするから」

お尻でデイクさんを壁に押し付けて腕にしがみつく。

観念したらしく、デイクの腕から力が抜けた。ふうつと呆れたようにため息して、彼はまた酒に口をつけ始めている。

「ったく、そう言う事はロイにしろっつの」

「うふふ、ご心配なく」

同じ好きでも、デイクへのそれはちよつと違う。人生の礎をつくるきっかけを与えてくれた師父せんせいのようなもの。

苦しいときは親身になって寄り添ってくれ、反抗すれば容赦なく叱ってくれた。親を知らない者にとっては、まさに父のような存在と言つてもいい。

ぐるりと見渡してみる。柔らかいランプの灯りは、故郷でもないのどこか懐かしくホツとさせてくれる。古臭いけれど、酒と木の丸い薫りに包まれたこの酒場は、彼との絆を一層深めるきっかけとなった場所だ。

「確か……。ここで剣を教えてもらう約束したんだったよね」

「ああ？ そうだったか？ よく覚えてんな」

「覚えてるよ。西方行つてから、何であんな約束したんだろって後悔したもん」

2年前

「あたしも剣を覚えたいな」

「ああ……。そういや、おまえ一丁前にフェルコンナイト上位職にチャレンジするんだっ

たか？」

「うん！ 剣も使えるようにならなきゃなんだ。だからね、お願い！
！ 剣教えて！」

「ハン？ そういうのは自分で——」

「ねえ、いいでしょ？ デイークさん！ お願い！ アニキ！ ショー!!」

「うるせえよ。片手間に付き合う剣は持ってねえ。仕事を舐めるな」

「片手間なんかしないよ！ 剣だけでもやっていけるくらい頑張るか
らー！」

「ほう？ 言うじゃねえか」

「地上で戦えるようになれば、もっとたくさんの人を守ってあげられる。自分の専門じゃないからって、守る人と守れない人を分けるのはイヤだもん。うん、きつとこれがリユージってやつだよ！」

「流儀……か。ハツ……」

「あはは……ナマイキだった？」

「……上等だ。言ったからには、——貫けよ？」

——あれが一つの転機だったのは間違いない。

西方三島に渡ってからというものの、陽が昇る前からたたき起こされ
たし、夜も寝る直前までテントの中で稽古の嵐。遊ぶ時間などもちろ
ん無いし、疲れ果てて手が固まり剣を握ったまま寝た夜も数えきれな
い。

それでもデイークの眼鏡に適うことはなく、いつも叱られっぱなし
だった。戦場で活躍しても、技に頼ってばかりで心が伴っていないと
叱られ、つぶれたマメだらけの手を眺めて泣きじやくった日々は宝物
だ。

「あのヘナチヨコがよくそんな太刀を扱うようになったもんだな」

「えへへ。まだ中伝にも届いてないんだけどね」

太刀の扱いは難しいけれど、デイークとの修行を考えればそよ風
のようなもの。あの一年間が血肉となり、人間としての芯となって流儀
を形作った。

「だけどき、槍が天馬騎士としての誇りなら、太刀はみんなとの絆の証

だよ。だから、——大事にしたい」

「ハン……。なら、言うこたあねえよ。てめえの道を拓くのはてめえだけだからな」

この太刀は、デイクとの約束を守り、貫き続けた流儀の中で紡いできた人々との絆がたぐり寄せた武器と言える。これを認めてもらえる高みまで極めることが、きつとデイクへの恩返しとなるに違いない。

なんだか、しんみりしてしまった。見つけてすぐ連れ戻すつもりが、時計を見ればもうだいぶ経っている。

今ごろ戻ったところで説教を受けるだけだろう。絞られるのはマリナスからの一回で済ませたいところ。

「あたしもお酒飲もつと。マスター！」

暇潰しも兼ねてオーダーした、琥珀色の蒸留酒に浮かぶ氷を揺らし、遊ぶんでいると、デイクがロックグラスを爪で鳴らした。

「おい、おまえそんなの飲んで大丈夫か？」

「え？ よく飲むよ？」

「顔に似合わねえもん飲むな」

「なによ、まだ子ども扱いするつもりなの？」

違うのかよ——鼻であしらうような素振りからするに、デイクがそう思っているのは間違いない。

たしかにこの酒を飲むようになったのはイリアに帰ってからだが、こうして酒場に警戒心がなくなったのは誰のせいだと思っているのやら。

「これは戒めのお酒ってね。悩みがある時呑むんだ」

セチに気づくきっかけを与えてくれた黒の紳士。彼に会うために始めた酒だったが、いつしか己を映して省みるためのものとなった。

「はあ、あの時も、このお酒にデイクさんが映ってたっけ」

「は、なんだそりゃ。もう酔っ払ったかよ」

自身の剣から価値を見失い、さまよった新人時代。底なしの沼に沈んでいく中、酒にデイクの顔を浮かべ呼んでいた。

不思議な気持ちだ。まるで、あの時の湖面の向こう側へ来たのでは

ないかとすら思えてくる。

あの時からすでに、剣は絆に支えられてきた。誓いという名の流儀を見つければ、自分なりの剣も手に入れて。そして教えを説いてくれたデイークとの再会は、なにか運命めいたものを感じずにはおれない。「ようやくロイと良い仲になったみてえだな。早く帰ってやらなくていいのかよ?」

そのときだ、デイークのふいな一言に、脳みそが蒸発しているみたいになった。いくらもう公言しているとは言え、酒も手伝ってか奇襲を喰らって心臓が跳ねまわる。

「デイークさん! ……恥ずかしいよお」

「はっ、何を想像したんだか。若いつてのはいいことで」

声をあげて笑われてしまった。グーで小突いてもびくともせず、気晴らしに酒をグイ飲みしたら頭に引つかかっていたものが転がり落ちてきた。

「て、ようやくくつて?」

「ロイは動乱中からおまえを誘ってたはずだが……マジで気付かなかったのか?」

「やっぱり、そうだったのかな」

「つたりめーだ。なのに俺なんかについてきやがるもんだから。ま、それでも成就するんだから不思議なもんだぜ」

気に入ったら、いつまでもいてくれていいよ——ロイは動乱の最中そう言ってくれた。あのときすっかり考えて答えていれば、どうなっていただろう。もつともつと、早くからロイと一緒になれたのだろうか。ポカポカと心の中で自分を叩く。

何より、ロイに申し訳ない。イリアに帰ってしまい、凶らずもそっぽを向いたようなものなのに。それでも手紙をくれ、冗談半分に返した契約の話も真剣に受け止めてくれて。ずつと待っていてくれたのに、彼の気持ちも考えずに独りよがり去ろうとして。

そんな気持ちに首を振った。無駄なことなんか、何一つない。今までの全てが絆として導いてくれたからこそ、今がある。そう、断言できる。でなければ、もし早くにロイと一緒になつたとて、乗り越えら

れなかったに違いない。

「うん。あたしも……傍に居ていいんだって思えるようになったの最近なんだけどね」

「へえ。おまえなら何も考えずについてくと思っただがな」

それなのに、あまりにも意外そうな声で返されて反射的に口が尖る。

「ディークさん、なんかあたしのこと誤解してない??」

「いや? 姉ちゃんと比べられたらアレだが、それなり分かってるつもりだぜ? だからこそ、意外でな」

「どーせ玉の輿だとか、悪女だと思ってたんでしょ!」

たしかにそんな話をしたこともあって、ディークだけでなくワードやロットにも笑われたのは覚えているが、まさかここまで引つ張られるとは。

ズバリ言い当てて指さしてやったら、凶星だったらしくディークはまん丸になった目で指先を見ている。

それは束の間だった。もの言いたげに変わった目を隠すように閉じて髪をボサボサやりだした。

「あー……ま、そう言う意味では平常運転か」

「やっぱり……バカにされてる気がする」

普段よくからかわれていたとは言え、1年間そんなネコかぶりだと思われていたなんて、腹が立つと言うよりショックとしか言いようがない。家族以外で誰よりも心を聞いてもらい、理解してくれた人だと思っていたのに。

しかし、その悲しみも、ディークが続けた言葉に吹き飛んだ。

「おまえも勝てなかったってわけか。好きだから言えねえ、大事だからからこそ傍に居られねえってな」

「どうして……」

まるで近くで見ていたように当てられて目が飛び出しかけた。

本気でロイの前から消えようとしていたのは、まだ2週間くらい前のこと。今考えると恥ずかしくすぎて地団駄踏みそうだが、あのときは人生が終わったくらい最悪の瞬間に見えていた。

「うん、ホント悩んだ。あたしなんかじゃ釣り合わない。ロイが悪く言われちゃうんじゃない」

「乗り越えたんなら、良かったじゃねえか？」

「今、あたしとつても幸せだよ。デイクさんとも再会できたし」

思い出すたびに勇気を出してよかったと思う反面、震えが上がり始める。もし、あそこでロイが来てくれなかったら、嫌いだと言ってしまうていたら……。

軌跡がつかえなければ、こうしてデイクと巡り合うことだっとなかったことになる。すべてが奇跡としか言えない。

それにしても、デイクがなぜ知っているのだろう。こんな二人だけの話をロイがしゃべるとも思えない。……彼の言葉を頭で繰り返していたらふと気づいてしまった。

「あれ……お前もって……」

「さあな。俺にそんなもんがあるように見えるか？」

それ以上聞かれなくなさげに視線を切り、デイクはグラスを傾け始めた。

ようやく全部繋がった。嫌われたわけでも、忘れられたわけでもなく、彼は大事にしてくれていたのだ。

「デイクさん、ありがとう。きつとあたしの為だったんだよね？」

「ま、おまえがそう思いたいんなら好きにしろ」

「じゃあさ、なんで知らないふりをしたの？」

ちびちびやっていたデイクの手が止まった。あまり詮索されなくなさそうなところを突つついたからか。

これだけは聞いておきたい。あんな剣幕で別人のふりまでしてなぜ突き放したのか。

それでも、ちよっぴり後悔した。グラスを置いて振り向いたデイクは、戦場の目で見下ろしてきたのだ。

「名乗ったら、おまえは剣を抜かねえに決まってるからな」

「当たり前じゃんだってデイク——」

「おまえの前にいたのは、村を襲った『賊』だ」

淡々と並べられていく情報に唇を噛む。彼の言うとおり、あのとき

はそう思った。しよつ引いていた男が情報を吐かせるための捕虜なんて知る由もなかった。

「で、でも！ 盗賊団だったんだよね？」

「それは結果論だ。あの時のおまえは、俺を討伐しなければならぬ立場だった。結果、おまえは失敗した」

「……」

「だが、一応剣は抜いた。果たせなかったが、仕事を放棄したわけじゃねえ」

グラスの湖面に映る顔のなんと情けないことか。

相手がデイクだからこれで済んでいるわけで、もし相手が依頼主なら失敗の報告であり信用の失墜となる。たとえ、どんな理由があろうとも、後付けでそれが失敗でないと分かったとしても。まして任務を放棄したとなれば、ロイでなければどうなるか分からないところだったのは理解している。

それでも釈然としない。心がデイクの言葉を跳ね除けようとしている。こんなの、初めてだ。

「傭兵たあ、そう言うもんだろ。教えたはずだぜ？ 仕事を舐めるなってな」

「あたしはね、そうは思わないよ」

反射的に飛び出した。思い出したのだ。2年前、舐めるなど叱った後に彼が続けた言葉を。見せてあげなければなるまい。2年越しの宿題の答えを。

「最初から剣に訴えたら、何も聞けないし助けられないよ。何か事情があるかもしれない。それを聞くのも仕事だと思っただ。それが――」

「おまえの流儀ってわけか」

先にデイクに言われてしまい言葉が喉に詰まった。天馬で飛び出そうとしていたのを急ブレーキをかけられたような気分だ。

「あー！ カッコよく締めようと思ったのに！」

「ハン……言うようになったもんだぜ」

せつかく自分の言葉で伝えたかったのに。当のデイクは涼しい

顔で酒を楽しんでいる。

きつと分かってもらえたに違いない。お説教は飛んでこないし、さっきの戦神の目は消えて口元がかすかに上向いている。

しばらく遠くを見つめるようだった彼は、酒を置くと見下ろしてきてハツと笑って見せた。

「それにしても、おまえの物好きも変わらねえな。見た目はちったあ女っぽくなつたみてえだが」

奇襲を浴びたように心臓が吹き飛んだ。式典のときはすつとぼけて褒めてくれなかつたクセに。

とは言え、酒場のオツサンにはなつて欲しくない。話題を無理やり変えるにも、もう少し別の話だつてあるだろうに。

「あのね、デイークさん。最近そう言うの厳しいんだから気をつけなきゃダメだよ」

声をかけても意に介さずと言つた感じ。傾けかけたグラスをちよいつと奪つてやると、おもちゃを取り上げられた子供のようにな貞腐れだした。

「へいへい。つたく耳年増め。生きづれえ世の中になつたもんだぜ」

「なんかデイークさん、やつぱりオジサン臭くなつたよーな」

想像以上に弱点らしい。デイークの丸まつた背中が揺れたかと思うと、見上げる恨めしげな目に取り憑かれゾクつと背が伸びた。

「うるせえよ。そのオツサンにホイホイついてきたのはどこの物好きだ？」

「だつて！ デイークさんがあたしを忘れたフリするから！ ……嫌われちやつたかなつて……思つたじゃない」

「ハツ……」

（あのときのロイも、きつと同じ気持ちだつたんだね……）

言つてから気づいた。口にしなければ、どんなに親しくとも伝わらない。そんな当たり前前のが、一ヶ月前まで分からずにいた。

そうした意味では、デイークはまだ本心を口にしていない気がする。話が一周しても納得できたと言えば嘘だ。

ここでは二人つきり。うるさい官吏も、しゃべる石ころもない。

今勇気を出さなければどんどん聞きづらくなる。

蒸留酒をぐい飲みし、のぼせ上がるような感覚に任せて一気に言い切った。

「どうして仕事の事を教えてくれなかったの？」

「あん？ 信頼第一、天下の天馬騎士団の幹部ともあろう人間が口にする言葉とは思えねえな？」

「それは……」

「仕事の話の関係者以外にベラベラ喋るのか？ それだけだ」

「どうしてこう言うときに限って予想が当たってしまうのだろう。」

もしそうなら、忘れたふりなんか必要ないではないか。そもそも、剣を抜いたのはこちらで、デイクは応戦しただけ。「シャニー、やめろ」と言えば済んだ話のはずだ。

「でも……あたしのことくらい、名前呼んでくれたって良かったじゃん」

あれこれ言いたい事はあっても、結局これが一番だ。

ここまで聞いても教えてくれないなら、きつと踏み込んで欲しくない場所に違いない。とは言っても、あれからずっと渦巻いた想いをぶつけないままにはおれなかった。

「フツ、寂しかったのか？」

「当たり前じゃん！ あたしの……大事な師匠なのに」

「甘いのは変わってねえな。ま……これも縁だ。しっかり鍛えてやるよ。部下の前で恥かきたくなかったら頑張れ」

「えへへ……よろしくね、デイクさん」

昔も今も、デイクは自分を見せてくれなかった。

それでも、こうして一緒に居られるだけでじんわり心が落ち着く。まるで大木にもたれるような安心感が包むのだ。

ようやく心に淀んで溜っていたものを吐き出せた——いや、まだ終わっていない。

「あっ！ 思い出した!!」

「あ？」

「デイクさん、謝って」

「はん？ 散々謝つたろ。おまえ、そんな粘着質なヤツだったか？」
「違ふよ！ あの時、 “まだ毛も生え揃わねえ” とか言つたよね?!」

当のデイクはもう終わったつもりでいたらしい。さあ酒を楽しもうみたいと考えていたのか、突き出してやると露骨にうんざりして頭のボサボサが始まった。

「あー……。まあ、場の雰囲気ってヤツでな？」

「知つてて言うってすつごい失礼じゃん！」

「んー、そうだな。ま、それ以上自爆すんのはヤメとけ。事実だしな」
「~~~~~ツ!!!」

黒歴史が脳内に燃え広がる。やかんのように今にも耳や鼻から湯気が吹き出しそうだ。

席を立て後ろの空きテーブルをデイクの後ろに引つ張り、座りなおしがてらドシンとお尻をぶつけてデイクを壁に押しやった。

「ふーんだっ。謝るまで帰らせないんだからね！」

「めんどくせーガキだな……。おい、マスター、アレ作ってくれ」

さすがにここまでしてやればマイツタと言うと思つたのに、デイクは逃げ道を探すように唯一空いている正面を向いて、彼と同じくらしい年と思しき店主に声をかけている。

こんな古くさ……。趣がある酒場に似つかわしくないシェフ帽と整った身なりの店主は、かなり手馴れていて動きひとつひとつに華がある。

「はは。旦那も子猫ちゃんにはタジタジみたいだナア??」

「子猫ならカワイイもんだが、こいつは暴れ馬ってほうがお似合いだぜ」

「デイクさん！ サラっとデイスらないでよ！」

「あん？ 事実だろ？」

あんまりな言い方にグーで腕を叩いてやっても、硬い筋肉に跳ね返されてびくともしないのが悔しい。

誤解を解くどころかますます誤解されているようで、店主は手際よくオレンジの皮をナイフでむきながら声をあげて笑っている。

「ずいぶんイイ仲間ことで」

「ハッ、言ってる。仕事仲間ってヤツだ」

「旦那のことだ。おおかた、惚れられて離してくれねえってか？」

「さあな。だとしたら、男を見る眼は壊滅的ってことだな」

デュークは涼しい顔をするだけ。頭のとっぺんが突き抜けて噴火した。

子猫という時点で嫌な予感はしていたが、そんな風に見られるのだけは秒で否定しておかねばなるまい。

「おあいにく様ですけど、あたしにはもうカレシもいるので。オジサンは趣味じゃないしねー」

「て、てめえ……」

「フフン、クリティカルヒットー？」

「食えねえヤツになったもんだぜ。どうやらアレが要らねえようだな？」

負け惜しみのようにデュークが指さした先を映したとたん、思わず声が漏れた。

チェリーがゴロゴロ入ったダークパープルのソースを移した鍋から火が上がっている。ワインだろうか。熱が席まで伝わってきて、広がるアルコールの香りにそれだけで頭がくらくらする。

天国から降りるオレンジの階段螺旋に火のついたチェリーブランデーを伝わせ、使徒が降臨するように走る青の螺旋が心を炙る。

マジックのような演出から生まれたのは、アツアツのチェリーソースに浮かぶ、オレンジの香りに包まれた真白のジェラートだった。

「……こんなの、見たことないよ」

食べもしないうちから大満足のスイーツなど今まで経験したこともない。デュークのしたり顔に何も言い返す気も起きないほど。

「マスターはヘルメス・オステイアの元料理人だな。そのままいきや総料理長だつて狙えたはずの変わりモンだ」

「旦那、そりやお互い様ってことで」

リキア最高級ホテルの至高の一皿ということになる。

香りだけでも天に召されそうで、一口したとたん脳内の宇宙が爆発した。

「香りづけの演出で心をぐつと抱き寄せて、アツアツと爽やかな冷たさのハーモニーに、甘酸っぱいチェリーソースと甘すぎないバナニアイスの共存。相容れない者同士、殺さず引き立て合う……——まさにオトナなスイーツってわけね!!」

「……良いから黙って食べ。ま、それで手打ちにしてくれや」

「今日のところはこのくらいにしとくよ。言っとくけど、スイーツに釣られたわけじゃないからね!」

「へいへいっと。おまえ、悪化してんな……」

もはや変えられない過去の「のぞき」より、早くしないとせつかくのジェラートが溶けてしまう。

アツアツと冷たさと、混ざり合う心のような甘酸っぱさを堪能しながら夜は更けていった。



「ツたく、何が謝るまで帰らせねえだよ」

時計は日付を変え、両針が別れを告げてから久しい。

それでもデイークはシャニーと別れられずにいた。彼女を背負って寝静まる街を宿へと向かう。

スイーツで燃え尽きた彼女は、それからすぐ泥のように眠ってしまったのだった。

「むにやむにや……デイークさんのバカ……」

「こいつは一生揃わねえかもな。ハン……そっちのがらしいか」

ひとりボヤクその口元から、ふと戦神の巖が崩れ落ちた。

「安心させてやれっか。……背中見せなきやなんねえってなら、もう少し居るとすつかね」

伝えたい祈り

七月の終わり。ピーマンみたいな深緑が元気に輝く山々を眼下に、はるか先まで青く澄みわたり白く輝く空を突き抜ける。

故郷では味わえない爽やかさに、シャニーは天馬の上で両手を広げていた。加速する翼に青のショートレイヤーが走る。

リキアの夏は雪国イリアと比べ物にならないくらい暑い。ちよつと稽古するだけですぐ汗だらけだが、悪いことだけではない。

個性派揃いの豊富な冷たいスイーツが次々挑戦を待っていて体がひとつでは足りないし、この暑さが彼らの魅力を倍々と膨らませてくれる。そして、こうして切る風の清々しさは天馬騎士のためにあると言ってもいい。

今日も風光る空を独り占めにしながら西の空を目指す。

「ん〜！ このレモンの爽やかさは、まさに夏の空を吹き抜ける風ですなあ〜！ あたし的には、もう少し皮も使って——」

到着したオステイアでさっそく市場に直行し、その足でデリス・アプリコへ。勝ち取った限定ジュエライトを堪能しながら旧市街に向かう。

天馬騎士団の連絡所は郵便ポストを確認するだけ。素通りしてポシエツトから取り出した名刺に目を落とす。

「ふむふむ……。どうやらこの通りみたいだね」

目当ては緩やかなカーブになつて見えないさらに先らしい。記された住所を目指して天馬と歩き出す。

風雨に耐えた勲章のように、ひび割れて黒ずむ石レンガ造りが並び、見上げれば高く伸びた家々をロープが走り洗濯物が泳ぐ。

静かな、それでいて濃すぎるほど生活臭に溢れた街並みや、割れた石畳の隙間からヒメジオオンが逞しく咲くのどかさは、とてもここがリキアの中心地とは思えない郷愁を誘う薫りさえある。

それにしても、同じ旧市街だったとは。もう少しマジメにオステイアで仕事をしていれば違ったのだろうか。

「おつ、きつとここだね。……ホントに？」

連絡所で慣れていたとは言え、目の前にあるアジトはあまりにもボロい。

ドアガラスはひび割れ、郵便ポストに張った蜘蛛の巣もそのまんま。事務所のわりに表札もないし、本当に使われているのかも怪しい。

雨水の流れのまま茶色く汚れた窓から中を覗いてみる。がらんとしていて誰も……どころか何も無い。

「んー。教えてもらった住所はここだし、ドアノブだけはキレイなんだよねえ……」

顎に手を添えて考えるモードに切り替えてみる——ピンときた。

天馬で二階の窓をのぞいてみて正解。目が合うやニヤニヤしてやった。今回もかくれんぼはこちらの勝ちだ。

「おーす！ アニキ！」

あからさまに口元がひきつった苦笑いを浮かべたデイークが固まっている。

下を指さし先に降りて待つ。中から階段を降りる音が聞こえ、観念したようにドアが渋々開いた。

「何の用——つて、オイ！」

ドアからヤドカリのように顔を出して防衛線を張るデイークの脇の下から、スルツと半身を差し込んで難なく突破。彼が振り返った際にお尻でドアを閉めて鍵もかけた。もうこれで逃げ場はあるまい。

「……一体何の吹き回しだ」

「そんな怖い顔しないでよ、デイークさん。ちゃんと食べてるかなって心配して来たんだぞ！」

連絡所はオマケだ。ましてスイーツは、たまたま市場からの帰り道だったから寄っただけ。そう、たまたまなのである。

酔い潰れた日も翌朝気づいたらホテルのベッドで、デイークはどこにも居なかった。普段は仕事柄、フラフラして居場所を掴めないような人だから、ロイから彼の事務所を教えてもらったのだった。

人の心配をよそに、デイークはまた頭をボサボサやって目が迷惑だ

と言っている気がする。

「おまえは俺のカーチャンかよ……」

「えへへ、傭兵団ではお世話になったし、恩返し恩返し」

「ハン、おまえにそんな風に言われる日が来るとはな」

ようやくデイークも追い出すのを諦めたらしく、奥へと案内された。

声が響くほど無表情な部屋に、そのうち牙をむいて暴れ出しそうなほど不気味におかれたテーブルがポツンと一卓。いちおう椅子もあるが、見るからに座面は真っ白。

「ぬあああ?! デイークさん! ちゃんと掃除くらいしてよお!!」

「おまえにだけは、そのセリフを言われなくなかったぜ」

息を吹きかけたら後悔した。口の中にまで埃が入って堪らず咳き込む。

「あたしだってそこら辺ちゃんとするようになったの! アップデートしてよね」

もう二度とすつぽんぽん事件は御免だし、いつロイが部屋に来るか分からないから気が抜けない。環境が人を変えるとよく聞いたが、まさか自分で経験するとは。

経緯はともかく、デイークにはこの2年間で成長した新生シャニーをとくと見てもらいたい……はずだった。

なのに、彼の言葉が心臓を容赦なく撃ち抜いた。

「おまえとは、二度と会わないつもりでいたからな」

一瞬、時が止まった。

動乱が終わってすぐ、あの腕前でそんな訳ないのに免許皆伝を与えて無理やりイリアに帰らせたし、ようやく再会できたと思ったら他人の振りをして。挙句、何も告げずにいなくなつて。

気付いてはいた。彼がそのつもりだったのは。

「なんでそんな悲しい事言うの?」

だからと言って、納得できるはずも、受け止めることもできなかった。まして、ストレートな言葉を浴びせられてしまつては聞かすにはおれない。

「ま、俺はいいんだぜ？ 錆が一つ増えるだけだしな」

言われてすぐは理解できなかった。いや、理解するのを避けたのかもしれない。ダンマリを決め込んで視線を逸らしたはずが、デイクは許してくれなかった。

「……おまえは会いたかったのか？ 戦場で」

「それは……」

デイクはあくまでも現実を投げつけてきた。傭兵同士、会うとなればそれしかないだろう。

同時にほっとした自分もいた。デイクは傭兵を辞めて便利屋となつている。仕事の進め方に裁量が認められる今なら、きつと刃を突き向けあわず済むに違いない。

とは言え、彼はまだ隠している。それが本当の理由とは思えない。

「でも、それならあのまま連れてってくれたって」

「それは、おまえの流儀に嘘をつくことになる。分かってたから、おまえも帰ったんだろ？」

「ッ……」

別れる直前まで直訴していたのだ。もつと側で学びたいと。だけどデイクは「教えることはねえ」の一点張りだった。

その理由は分かっている。剣を教えてもらったのは誰のためだったか……帰る以外に無いではないか。

「それに、そうなら、おまえは今ここにいないかもしれないねえぜ？」

ロイが抱くのも別の女だったかもな？」

今日のデイクは意地悪だ。もう十分だったのに、とつてつけたようなことを含みのある口調で言うから頭がカアつとなった。

「や、やめてよ」

「ハン……まだんなこと言ってるのかよ」

彼は鼻で笑って階段を上がっていく。後についていくと、2階にはそれなりモノがあるのか窓辺に机が見えてきた。

とは言え、それ以外にあったのは座らされた接客用のソファとテーブルだけ。

ソファは水仕事で荒れた手のようにガザガサで、革が切れてところ

どころ白く擦れているし、テーブルにいたつては輪切りの丸太に鍛冶屋からパクってきたような鉄板が乗っているだけだ。

あまりの殺風景に落ち着かずにいるとコーヒーの香りがしてきた。こんな無の世界に訪れた突然の癒しを探せば、デイークが小さなキッチンで淹れていた。

「おまえなら分かるはずだ。大事だからこそ離れるしかねえ気持ちだよ」

その背中から独り言のように放たれた理由に一瞬息を飲む。

(やつぱり……同じだったんだ)

この師にしてこの弟子ありというわけか。

彼の優しきは寄りかかって目をつぶれる安らぎをくれる。この逞しさにどれだけ頼り、守ってもらっただろう。

同時に、初めて覚える何かが湧いた。悶々として、腹の中でゾワゾワと湧き立つ……感情。抑えられないそれに押されて首を振った。

「……でも、あたしはその先も知ったんだ。本当に相手もそれを喜んでくれるのか、自分以外の声を聞かなきゃダメなんだって」

「……」

「愛してるからこそ伝えられない事だってあるけど、伝えないままじゃお互いの心って繋がらないと思うんだ」

思いやるつもりが、爪を突き立ててえぐり、引き裂いてじゅくじゅくに傷つけていた。もう、あんな思いはさせたくないし、したくもない。

同じだからこそ分かる、苦しい気持ち。伝えてあげなくてはならない。彼に求めている想い、きつと本当は彼も求めている言葉を。

「あのね——」

「ハン……。ガキに説教されるとはな。俺もヤキが回ったか」

先を越されて喉の奥に引つ込んだ。彼は湯気の立つマグカップを持ってくるとテーブルに置き、とんぼ返りにキッチンへと背を向ける。

「そこ座ってる。なんかさつと作ってやる」

仕切り直そうとするのを読んでいたように、被されてタイミングを

逃してしまった。

なんだか、はぐらかされた感じ。

ぼうっとデイクの背中を眺めていたら、彼の右手にナイフが見えてパチンと意識を引き戻された。

「えっ！ ダメじゃん！ あたしが作りに来たのに！」

久しぶりにご飯を作ってあげようと材料も調達してきたというのに。手癖が悪いことにデイクはいつの間にか持つてきた紙袋を物色している。

とつさに飛び出したはずが、がっしり肩を掴まされるとそのまま一回転。ポンと背中を押されて秒のうちにボールのように戻ってきた。

「作れるところを見せとかねえとな。毎日来られちゃ仕事になんねえ」

キッチンが聖域と言うことか。ちよつぴり残念だが、ご相伴に預かることにした。不摂生していそうな食生活の一端を垣間見えるし、どんな料理が出てくるか楽しみでもある。

図らずも時間ができてしまった。手すさびできるようなものもなく、ぐるつと部屋を見渡してみる。

……何も無い。本当に何も無い。ハードボイルドなどキャラメルくらいに思えるほど、カッチンカッチンの石レンガと鉄板しかない部屋。唯一ある彩といえば、デイクが軽快に回すフライパンの中の野菜くらい。

(デイクさん……もうどこにも行かないでね)

シンプルな男の部屋……などであるはずがない。いつでも姿をくらませられるようにしているに決まっている。

やはり、いろいろな意味で毎日でも顔を出さないといけないだろうか。

そんなことを考えているうちに、無意識に見つめてしまっていたらしい。調味料に手を伸ばすデイクとふと目が合い、彼は鼻で笑って見せてきた。

「？ なに？ 人の顔見て笑ってさ」

「ん？ いや、てめえに笑っただけだ」

またからかうつもりかと頬を膨らせてやると、デイクはふっと視線を外した。自虐しているのか、笑いの混じった声はいつもよりトーンが高い。

「あの時よりそれなりツヤが出てきたが、相変わらずの性格でホツとしちまってな」

その顔は本当に安心していているような、今まで見たどのデイクより「お父さん」っぽい顔をしていた。

いつも厳しい顔ばかりだったデイクが見せた一面にどこかホツとしながらも、目が勝手に侮蔑を送り出した。またオジサンっぽいことを言っているし、サラッとデイスっているし。

「……バカにされてるよーな……」

「細げえことは気にすんな。ほれ、焼き飯だ、喰え喰え」

「ありがとう！ わあい、デイクさんのごはん久しぶりだ〜」

皿から猛アピールして食欲を刺激する香りが、机の上を払い除けるように頭を戦闘モードへ切り替えさせる。

大きさも不揃いな野菜がゴロゴロ飛び出し、天辺には切ってもいい肉がドンと乗る。捻りのない素直なチャーハンだが、それだけで済まない力を持っているのを知っている。

デイクは包丁を持つと魔法使いになるのだ。

「……美味しい。うん！ おいしいよー！」

あの頃と変わらない、豪快な見た目と負けそうになるくらいの食べ応え。それでいてムラのない味は強くもなく、食欲の渦に飲まれそう

だ。いつも大剣を振るう腕力なら、フライパンの煽りなど綿菓子くらい

のものか。やはり今でも、炒め物だけは彼に勝てそうにない。「油が上手にまわったピカピカのお米ツ、シャキシャキのまんま甘味

だけ引き出した野菜に、これぞ肉！ つて感じの山賊焼き！ うん！

やっぱりデイクさん天才だね！」

「ハッ。そりやそうだろうよ。男メシってヤツだな」
食べればいいが口癖のわりにデイクも一家言あるのか、剣技を褒めた時とまるでトーンが違う。コーヒを啜る顔は、闘技場でガツツ

り稼いだ後のように満足げだ。

彼に目で促されずとも、加速する欲求はもう止まらない。黄金色の海をバタフライで突き進む。

「相変わらずの食いつぶりだな」

「だって、リキアで、食べたどの、焼き飯より、おいしいんだもん！」
「食うか喋るかどっちかにしやがれ。ま、何よりだぜ」

「うんうん！ 半裸のおじさんが作ったって言わなきや流行るかも！」

ツルツと口が滑った次の瞬間、デイクが盛大に咽せた。キラリとその目が光り、たまらず腕の中で皿を守る。

「つまみ出さず、このガキ……」

口は災いの元とはこのことか。

殺気立つ眼光から視線を外して、焼飯をしずしず運び口に栓しておいた。

さすがに大満足だ。これ以上は、スイーツ以外は入りそうにない。

満腹を融かすような窓からの陽射しは春先のポカポカとは違うものの、心地よい風も吹きこんで眠気を誘ってくる。空にはもくもくと高く伸びる雲が、青空に膨らんでゆっくり流れていく。寝るなどというほうが無理だ。

「さて、喰ったなら腹ごなしでもすつか」

それでもデイクは容赦してくれない。

立てかけておいた太刀をポンとお腹の上に放られ、半ば無理やり起こされた。

(ふふっ、デイクさんと稽古かあ。……懐かしいな)

見習い時代にタイムスリップしたような気分だ。あの頃はデイクとの稽古は日課だったし、こうして昼寝を取り上げられては膨れていた。

時が移ったのは、制服は士官着へ、そして鉄の剣は白銀の太刀へと変わったことが示している。変わらないのは、デイクの背中が頼もしいことだけ。

屋上に出て、さっそく打ち合い稽古で火花を散らす。どれだけ電光石火に翻弄し無間の嵐を浴びせても、一太刀たりともデイクの大剣を抜けない。

一体どこに底があるのかまるで見えない戦神ぶりは健在のようだが、彼は「へえ？」と感心したような声をあげて剣を肩に担ぎ直した。「なかなかサマになってんじゃねえか？　まさか、おまえが太刀使いになってるとはな」

「つて言っても、まだ三か月くらいだよ？」

「太刀は分からねえし、俺が教えられることはやっぱり無さそうだな」
少しは認めてもらえたのだろうか。

—— テメエの流儀はどこにある？　その剣に、筋は通ってたのか？
名が立ちや何でも良いのか？

そうやって、2年前はどんなに活躍しても心が足りないと叱られてばかりだった。

今は少なくとも、誓いを立て、流儀に問いながら剣を握っているつもりだ。その流儀で切り拓き、紡いできた絆の結晶が、今握る太刀と言える。

でも同時に、ちよつぴり後悔した。せつかく剣技を教えてもらえるところまで来たかもしれないのに、もうそれが叶わないとは。

もし、騎士剣のままだったなら……同じ気がする。たとえ騎士剣であつたとしても、一緒のことを言ったに違いない。

それに、デイクに今教えてもらいたいのには剣技ではない。ずっとはぐらかされてきたが、もう今日こそは逃がすものか。

「……ねえ、デイクさん。いろいろ聞きたいことがあるんだ」
なぜかバクバクする胸へ手を当ててぎゅっと握り、意を決して吐き出した。

「何で剣技を教えてくださいなかつたの？　それにあの時連れてつてくれなかつた本当の理由は何？　それだけじゃない。なんで忘れたフリなんかしたの？」

何度か同じことを聞いてきたが、いつも腹に落ちなかつた。
いちいち矛盾しているではないか。心が足りないと云って剣技も

教えないくせに免許皆伝を投げつけたり、同じロイからの依頼のはずなのに、あくまで赤の他人と信じ込ませ、拒絶させようとしたり。

デイクは一瞬驚いたように眉をびくつとさせたが、逃げるように視線を切って頭へ手ぐしを突っ込んだ。

「これから商売敵になる人間に教えるかつつの。俺はそんなお人よしじゃねえよ。それに、見習い修行が終わったなら放り出すのは当然だろ?」

「なんで……。何で本当のこと……。言ってくれないの?」

ウソに決まっている。そんな理由では絶対じゃない。

彼の言うような話なら、あんなことをする必要は無いはずだ。あんな……。嫌われようとしてもしているかのように、わざと距離を置いて近寄らせないような。

「あたし、本当にデイクさんに憧れて、いつかきつとデイクさんに追いついて、追い越してやるんだって思ってたのに」

「……」

「なのに……。なのに……。あたしのこと、忘れたふりしてさ。どんなに……。悲しかったか……」

こんなはずじゃなかった。どこからともなく込み上げてきた想いが溢れてくる。

言わずにはおれなかったのは確かだ。彼の心が分からない。信じたくないのも、記憶から消そうとしたのも。そんな酷いはずの人を、放っておけない自分の心さえも。

「あー……。その、なんだ、すまん。俺が悪かった」

初めてな気がする。謝ったことなら今まで食べたパンの数くらいだが、デイクに謝らせたことなど記憶にない。

困らせてしまったが、不思議と罪悪感が湧かない。それどころか涙に隠れていた気持ちが浮かんできて、デイクに顔を埋め心のまま囁いた。

「そうだよ。全部、全部全部、全部ぜんぶぜんぶ……。デイクさんが悪いんだ」

「……。そうだな」

「ううん……ウソ」

ちよつとだけでもいい。聞けただけでもう十分だった。

「デイクさんは悪くない。あたしなりに、答えは見つけてたんだ。あたしこそ、イジワルなこと聞いてごめんなさい。分かったのに……背負ってあげられなくて」

デイク本人から語らせたら意味がない話だと分かっていたのに、それでも知りたかった本当の気持ち。

それは彼を苦しめたに違いない。背負わせろと言っておいて、やっていることは真逆な自分に嫌気が差す。

「勝手に憧れて、勝手に追いかけて。勝手に勘違いして、勝手に落ち込んで。ゼーんぶ、あたしのためにデイクさんは考えてくれてたのにさ」

吐き出せば吐き出すほど、未熟ばかりが見えてくる。

ひと通り剥がれ落ちた屈託が雪崩のように感情を押し流すと、最後に乾いた笑いだけが残った。

「はは……。ガキだね、あたし」

結局、何も成長していないことを晒すだけになってしまった。

人に独りよがりをやめさせようとしたクセに、一番の独りよがりは相変わらず自分ではないか。手を伸ばしてくれないと勝手に拗ねて、困らそうとしただけに他ならない。

「ま、いいんじゃないやねえか？ それで」

そんな言葉とともに、頭に手が降りてきた。大きくて、剣を握り続けてきたゴワゴワした手。全てを壊せそうなくらい強いのに、優しくて温かい。

「まっすぐ、素直に。それがおまえの持ち味だ。失敗もそりやあるだろ。でも、やんなきゃ失敗だって分かんねえ事もある」

見上げると、デイクは撫でながら涙を拭ってくれた。その顔は、戦神とも、白でも黒でもない世界に住むアウトローとも違う。見守り導いてきてくれた師父の微笑みが沁みる。

「迷わず先陣切って、過ちは受け入れて直す —— そういう背中の方が、部下は頼りになるんじゃないやねえのか？」

「あ……」

思わず、言葉にならない衝撃が漏れた。

デイクに憧れたのは、まさにそれだ。流儀を言外に語る彼の背中が、右も左も分らないくせに手柄ばかり求めたガキにとってどれだけ頼りになったことか。

「それが出来てるなら、ガキじゃねえさ」

頭に置いた手をモシヤモシヤ撫でられるのも懐かしい。

どこまで鍛えても、まるで届きそうにないくらい大きく見える。それでも、少しだけ認めてもらえた気がする——そう思ったのを読まれたようだった。

「ま、おまえはまだまだ色々足りねえ部分も多いが」

分かっているとは言え、「調子に乗るんじゃねえ」と声まで頭の中で再生されそうなくらいドンピシャに牽制されるとポキッと首も折れる。

「えっと、たとえば？」

「何も考えずに突っ込む。ヘルメスでの一件とかな」

「う……」

あまりにもつい最近すぎてぐうの音もでない。

その隙を突くように、肩を押されて後ろによろけたところにデコピンが飛んできた。

あの選択は、いろいろな意味で誤っていたのだろう。それでも、筋まで違っていたとは言いたくない。

「おまえには帰りを待つ者がいる。それを忘れんじゃねえぜ？」

それまで見透かしていたのだろうか。いろいろな人から同じように言われているし、デイクの言葉はすと水が染み込むように胸に入ってくる。

とは言え、引つかかる。再会してからずっと、心の奥に打ち込まれた杭がうずいてきた。

これだけは言わなければなるまい。そうだ、待っていたものが、今ここに居るではないか。

「それはデイクさんだって同じだよ？」

「あん？」

「あたし、デイクさんが死んじやったら絶対嫌なんだからね！」

薄々気づいていても、どんな過去があるかは知らない。そこまで踏み込んではいけないかもしれないが、そんな簡単に断ち切れるわけではない。

一度繋いだ絆が、たったそれだけの理由でなくなるなど。

「生憎しぶときには自信があつてな。大丈夫だ」

本気にしていないのか、デイクは剣の構えを作つてこちらを見ようともしない。

ここまで来たら根比べだ。並んで太刀を構え、彼が向きを変えれば一緒に動いて逃さない。

そのうち、デイクは苦茶でも飲んだような渋い顔になつて剣をとめた。

「……なんのマネだ」

「これから一緒なんだし、あたしもデイクさんを守るからね！」

「ま、てめえを第一にな」

たった、それだけ。

相変わらず子供としてしか扱つてくれないと言うのか。

叙任を受けて曲がりなりにも部隊長として引つ張つてきた。流儀も確かとして……そうだ、流儀を貫けと言つたのは他でもないデイクではないか。

「あたしね、恩返ししたいの」

再びデイクが構えた剣を太刀で払い、正面を陣取つてついに捕まえた。

「ガキじゃないなら、少しは……背負わせてくれたつていいじゃない」

またかよ——そう言いたげな目はすぐに逃げるように閉じて、それでも足りないのか顔を手で覆つてガードを固め出した。

「……おまえはもつと背負わなきやなんねえもんがあんだろ。俺みたいな——」

デイクのため息を、感情に任せた剣戟の高い叫びが振り払う。

「それ、絶対言わないでつて、言つたよね？」

彼の剣に太刀をぶち当て、そのまま首筋へ滑らせる。もちろん峰側だが、それでもこれが覚悟だ。もう背中を追うだけの子供ではないと見せつけ、流儀を貫かせてもらうだけ。

「みんな大事だよ。中でもデイクさんはね、特別なんだよ」

「ハッ、そりやどーも。剣を向けたくなくなるほどってか?」

「無視するから悪いんじゃないかな」

「おいおい……ルトガームみたいになるなよ?」

鞘に納めても、まだ逃すわけにはいかない。

デイクから感じる流れは遠い向こう側を見つめているし、それ以上逸らした目が言っている。まだ、彼はそのつもりでいるというのか。

「与えられるだけ与えてもらって、背負わせるだけ背負わして……そんなのヤダよ。大事なものはみんな背負う。それがね、あたしの流儀なんだ。いなくなるうとしたって、あたしはあたしの流儀を貫かせてもらうよ」

たとえ、ただの傭兵でおれなくなっても、彼と結んだ絆がどうなるものでもないではないか。

デイクには違うように映っているに違いないが、だからこそ伝えなければならぬ。どんなに想いあっていたって、言葉にしなければ後悔する。もう、そんなことはしたくない。

「理由があたしと同じなら許さない。……だって、あたしと同じだからね」

腕を回して鍵をかけるように捕まえる。引きちぎるなど朝飯前だろうらしい体の震えが伝わってきた。

なら、もつともつと、抱き寄せるだけだ。それが、彼に伝えたい一番の気持ち。

「……ここに居ていいんだよ。デイクさん」

「——ッ?!」

夢から覚めたように目を見張り、デイクはしばらく動かなかった。透き通った夏の風だけが聞こえる屋上で、ふたたび時を動かしたの

は、デイークの弱った笑い声だった。

「まったく、諦めのわりいヤツに目をつけられたもんだぜ」

「じゃあ！　じゃあ、どこにも行かないんだね?！」

「わーったよ。精々、アテにさせてもらうぜ」

何よりも聞きたかった一番の言葉。頭の中でずっとずっと繰り返した。広がる紺碧の空のように、爽やかに吹き抜ける心のまま抱きしめる。

「えへへ……だ〜い好きだよ、デイークさん。指切りしよ！」

「ちっ、めんどくせえな……」

「いいからするの！　ウソついたらデリス・アプリコのスイーツ10年分ね！」

「なんつーか……ブレないねえ、色んな意味だよ」

「異論は認めないんだから。……指切った!!」

どんな過去であろうと、何を背負ってしようと、デイークだから側にいて欲しいのだ。

今、ようやく伝わったに違いない。約束は必ず果たす。それが、彼の流儀だと知っている。

流儀を貫く代償に手放した、大切な宝物をようやく取り戻した気分だった。師と交わした約束——流儀を貫き続けることで。

雷轟のメガロマニア 英雄の帰還

「まさかこんなに早く戻ってくるとは……」

早朝の突き刺さるような冷気に包まれる団長室で、イドウヴァは震えていた。

その手に握られているのは一枚の紙。イリア連合会議への招集案内は、それ自体は驚くような話ではない。問題は、記されている署名だ。

「アルマ、何か聞いていますか？」

見間違いを期待するように何度も署名を見下ろす。そのうち諦めたのか、まるで犯人探しでもしているような焦燥の眼差しが、ギツと右腕を睨み上げる。

「契約案件が早く片付いた故の前倒しと聞いていますが」

あっさりとした口調で淡々と説明するアルマから視線を外したイドウヴァは、ギリギリ歯ぎしりが聞こえそうなくらい口元を歪めて視線が左右する。

「くっ……タイミングが悪すぎる」

会議の開始時刻は8時。いつも夕刻から始まり、そのまま会食の流れの流すが早朝開催だ。

準備する時間すら与えない。——そんな意志を感じさせる異例の事態が待ち受けるのは、招集よりむしろ喚問を誰もが予感するだろう。



「では、事前のアジェンダに関する議論はここまでとする」

エデッサ城で開催された連合会議は、20を超える騎士団長達が円卓を囲むことになった。異様な緊張感に包んだまま、盟主ゼロットに

よって進行されていく。

誰もが他の騎士団長に目をやり首を傾げる。仕事が早く済んだからとはいえ、内容自体は定例を崩してまで急ぐような事案とは言いがたい。

「ここまで来たなら、「本日はこれで終了する」その言葉を待つばかり。「ひとつ小耳に挟んだのだが、イドウヴァ団長」

「ここまででは前座とでも言うのか、なかなかそうは行かなかった。さながら木管楽器のような深い声をさらに低くしたゼロットが厳しい眼差しを向ける。

「は、はい……」

肩をギョツと跳ねあげ、名指しされたイドウヴァは重く席を立った。どの騎士団長も視線逸らすばかり。他人事で良かったとでも言いたげにホツとする者、それみろと鼻で笑う者。反応はそれぞれだが、そうそう援護を期待できる空気ではない。

「第十八部隊をリキアに向わせているのは事実なのか？」

「え……ええ。四月末にリキアへ出発しています」

普段の冷厳さが嘘のような歯切れの悪さが、大会議室の重い空気をさらに淀ませる。

金縛りを受けたような空間の時を動かしたのは、ゼロットの深いため息だった。

「直截に言わせてもらうが、非常に失望している」

落胆や怒りすら滲む口調と共に厳しい視線を浴びせるが、イドウヴァはただ頭を下げるだけ。

理由を語らない彼女に業を煮やしたか、槍のように鋭く切り込んだ。

「今後、イリア連合として礎を固める大事な時期に、民の声は何より重要だ。その聞き手をなぜ解任した？ 納得のいく説明をしてもらいたい」

十八部隊の活動を評価し、勲章を与えたその人が怒るのは必然だろう。それだけに留まらず、イリア連合として活動の強化を各騎士団長に指示した手前、顔に泥を塗るような真似をされたわけだ。

答えるまで終わらない……ギンと突く眼光を浴びてイドウヴァが唇を噛んでいたときだった。

「だからこそでございませう」

横に座っていたアルマが手を挙げるや立ち上がり、重い空気に流れを呼ぶ。

一瞬で注目を奪った彼女は、ハキとした声で怒りの眼差しに真つ向勝負を仕掛けた。

「今後の加速的な変革に備え、リキアの先進性を取り入れる必要があると判断いたしました。熱意ある者への投資……そう、ご理解いただけますと存じます」

あちこちから感嘆や納得の声があがり、焼き石が蒸気を噴くように場の空気がたちまち熱を帯びる。

若き一手に淀んだ時間が元を取り戻すかに思われた。

「……それだけか？ にしては、期間が長いようだが？」

相手はイリアの賢人ゼロットだ。耳触りの良い言葉をつらつら並べるだけで納得するような、底の浅い人物ではない。彼は的確に矛盾を突き、傍観者になりかけていたイドウヴァの眉間がぴくりとした。

それでも、アルマはポーカーフエイスを少しも崩さない。

「もちろん、リキアでの天馬騎士団の基盤拡大も担当させております。リキアでの活躍はお耳に入っていると思いますが」

沈黙が広がる間もなく、まるで先を読んでいたかのようだった。自信に満ちた強い声が、しやきつと活舌よく部屋に響く。

それを聞くとゼロットは「ふうむ……」と漏らし、机の上で組んだ両手を見つめていたが、しばらくしてまたアルマを見上げた。

「そちらのほうは、期待通りと言うわけか？」

「はい。いえ、少々、出来すぎぐらいですね」

以前もロイの発言として、世界的な新聞に十八部隊の活動が小さくない枠を使い掲載されていた。

ロイとのパイプに天馬騎士団の宣伝。それだけで十分な成果であり、ここに来てリキア同盟から勲章を賜ったとなれば、ゼロットの耳に入るのは必然と言えるだろう。

「ならば、十八部隊には遠くないうちに帰還辞令を出すのだな？」

それだけ動ける部隊を、変革期のイリアの外に置くなどあり得ないと言うわけだ。問いはむしろ命令に近い。騎士団間の運営干渉の掟が、ストレートな言葉を封じているだけに他ならない。

「はい。検討しております」

アルマも理解しているのか迷いはなく、まるで示し合わせていたかとさえ取れる流れるような返答。

しばらくの沈黙は同意の証か。ゼロットが視線を外しかけた時だった。

「ですが、ロイ様が離してくださるかどうか。いまやりキア同盟の仕事にも、彼の命令で動いているとも聞きますし」

言外の圧が包んだ部屋に、待ったをかける声をあげたのはイドウヴアだった。

ロイの名前が出たとたん、ゼロットの顔にじわり葛藤が滲む。

「ロイ殿は以前から欲しいと言っていたからな……」

動ける人材を欲しているのはどこも同じ。平時以上に、戦後復興の変革期にある今はなおさらと言える。

あまつさえ、十八部隊は少なくとも1年は縛られている身。契約の反故がイリア騎士最大のタブーだと、イリア筆頭の頭に無いはずあるまい。

再び頭を下げたイドウヴアの口元に薄笑いが浮かぶ。

「状況は分かった。この件はまた報告してくれ」

グツと言葉を飲み込むようにして表情を戻したゼロットは、そう切り上げて閉会を宣言した。



「アルマ、どういう事ですか。帰還辞令の検討など聞いていませんよ」
会合の帰路での道すがら。天馬の風切り音を押し退けて、イドウヴアの尖った口調がアルマに絡みついて突き刺す。シャニーの管理をアルマに一任している彼女にとって、寝耳に水だったようだ。

「もちろん、フェイクですよ」

それでも、アルマは表情を変えないままそう言って続けた。「あの

場であれ以上荒だてても無意味ですから」

一見はその通りかもしれないが、イドウヴァの表情から苛立ちは消えないまま。無理もないだろう。あの勢いで問い詰めてきたゼロットに対しての回答は、検討で済まないのは明らか。

「しかし……このままだと長くは持ちませんね。まさかりキア同盟から勲章が出るとは……」

「ええ。ロイ様だけでなく、完全にリキア同盟を味方につけた形です」
イドウヴァにとっては、リキア同盟の動きが完全な誤算だったようだ。いくら天馬騎士団団長の肩書を使おうと、同盟の動きに各領主が逆らうとは考えにくい。

あまつさえ、副同盟主付の特命部隊なる肩書きがついた、リキア同盟の組織図が回ってきたのはつい最近。

「ここは……ひとつ利き駒を打ちますか」

風雲急を告げ、まるでチェスのごとく状況は急転しつつある。好き勝手に動き回るのを、このままただ眺めていても悪化するばかりだろう。

騎士団へ戻ったイドウヴァは、ずんずんとエントランスを抜けかけたが、人だかりの前で一旦止まった。

——首席：シャニー（第十八部隊）

「……さすがあの人の娘ですよ」

2階テラスから垂れ下がる順位表の最上位を見上げ、ギリッと噛み砕いた彼女はツカツカ歩き出した。人混みから外れたところにいた騎士に照準を合わせ、まっすぐ向かっていく。

「マリツサを呼びなさい！」

いきなり肩を掴まれ浴びせられたヒステリカルな声に、その騎士は返事する余裕もない様子で何度も領き飛び出していった。

◆◆◆
「ふうっ、終わった終わったー」

オレンジを絞るように顔をギュツとさせながら、うんと気持ちよさそうに伸びしてシャニーが声を弾ませる。

イドウヴァが騎士団に帰還した同刻、シャニーたち第十八部隊も天馬

騎士団の本拠地カルラエ城にいた。帰還辞令ではなく、一時的な帰国だ。天馬騎士には毎年一回、乗馬の実技試験がある。それは出向者として例外ではなくこうして招集される。

一度叙任を受けている以上、実技で落ちるなど戦傷者以外に前例は無いらしい。去年は面倒だと思った試験も、今年はずうずう待ち侘びてきた。

「じゃあ、みんなに会いに行こうか」

試験を終えたシャニーはさっそく仲間たちを引き連れて、さっさと城に背を向ける。

待ち時間で他の部隊長とは挨拶できたし、4月まで使っていた詰所もすっきり物置になっていた。あらためて気持ちに整理がついた以上、留まる理由などない。

むしろ本番はここからだと言うのに、ルシヤナがさっそく突いてきた。

「お、あんななら腹減ったって言うかと思ったけど」

「なによ。それしか言わない女とか思っただけ？」

「まさかく。そこまでじゃないから安心してよ」

さすが幼馴染。10年以上の付き合いは伊達ではない……そう言いかけたときだった。

「食うことと剣のことで、ロイ様のことくらいかな」

「な、なに、その本能だけで生きてます！　みたいなの!？」

「剣ってあんたにとっちゃ本能なのか……」

まだまだ弄り足りないと言いたげなルシヤナの後ろで、ミリアとレンが助けるどころかクスクスしている。

「キヤハハ、言い得て妙だね。じゃ、これからも本能に忠実に稽古しよっか？」

おまけに、頭の中からまでセチのケラケラが響いてきてとどめを刺してきた。いったい誰のせいで剣が本能だと勘違いされているのやら。

このまま内から外からサンドバッグではペしゅんこにされてしまう。すぐに咳払いして話を元に戻す。

「ごはんは夕飯にとっておけるけど、みんなにはお昼しか会えないもん。だから試験も朝イチにしてもらったんだし」

旅立ちを笑顔で送り出してくれた村の人たちやユーノに、活躍や元気を伝えるチャンスはこの一日しかない。一時帰国は日時も決まっているし、リキアでの仕事もある中で長居はできないのだ。

お腹はぐーぐーアピールしてくるが、急足で厩舎へと向かう。

「それにしても、シャニーは今回もぶっちぎりだったツスね」

「えへへー、それほどでもー」

誉め言葉はすつと心に入ってくる。特に賞とかはないが、ミリアとハイタッチして2年連続の首席を祝う。

試験二日目の十八部隊が最終で、騎士団内にすぐ順位が掲載された。姉二人にへろへろになりながら仕込まれ、ベルン動乱で揉まれて磨き上げた乗馬術は誰にも負けたくない、言わば天馬騎士たらしめるものだ。

「あんたさー。あんだだけぶっちぎりって、やっぱり精霊の力とか使ってるの?」

「あーっ、それインチキじゃないっスか!」

それなのに、ルシヤナがあからさまに怪しむ目でニヤニヤしながら、わざとらしい口調で囁いてくるものだから口がへの字になった。

それだけならまだしも、ミリアまでもが頭からカッカと湯気を出しているではないか。

「ホントに使ってないって! 試してみたけど、自分にしか纏えないみたいで天馬はダメっぽい」

「やっぱ試したんじゃないっスか!」

「あ?っ、えつと、いや! 稽古のときだから!」

誘導尋問でもされているかのようで、さながら推理小説の犯人役にもなつた気分だ。

おまけに焚き付けた張本人のルシヤナは、してやったりの表情で故意犯に違いない。その彼女はさも驚いたように笑って酷いことを言った。

「あんた、地上にいた方が強いんじや」

「そーかな。制圧力が突破力かの違いじゃん？」

天馬に乗っていてもセチの恩恵はやはり大きい。矢から天馬を守ってあげられるし、魔力を込めた投げ槍は、とりわけ広範囲をカバーできる。天空の騎士と歩兵では、とにかく場の制圧力が違うのだ。

「使い分けってことっすね！ 壁か囷か」

「そうそう——って、どうしてその二択なの！」

どうやらミリアにとっては、セチの力があろうがなかろうが、クロスボウの掃射範囲に敵をぞろぞろ引きつれる役でしかないらしい。それどころか、セチのおかげで矢が弾かれる分、やりたい放題なのだろう。

「まったく、インチキだの囷だの。精霊をなんだと思ってるのやら。しっかり教育してくれないかな、相棒？」

「あたしのせいなのお?！」

「じゃあ、私に分からせるから、体貸してくれるかな？」

「ぐっ……」

セチのご立腹はごもつともだが、こんな世間知らずの戦闘狂が野に放たれるのを想像するだけで、ゾクゾクとおぞましい。下手すれば世界ごとぶった斬ってケラケラしていそうな予感さえする。

世界の平和を守るため何とかやり過ごそうと、いそいそ歩調を早めた時だった。

「シャニー、ここにいたのか」

知っているはずの声に違和感を覚えて辺りをきよろきよろしてみる。たしかに知ってはいるが、この場で聞くことなどないはずの声だ。

あちこち見渡していると頭を下げる騎士たちが目に入り、奥から白銀の鎧に身を包む黒髪の男性が、まっすぐこちらに歩いてくるのが見えた。

「え?! ゼロットお義兄ちゃん! どうしてここに」

「契約を終えて帰国したところだ」

いくつも傭兵契約を渡り歩く予定で、年内は帰国できないと伝え聞

いていた。

それに、ここはカルラエだ。天馬ならエデツサから20分くらいだが、馬ではどれだけ飛ばしても3時間はかかる道のり。24時間働いていると噂されるほど多忙な義兄が、のんびり遊びに来るとは思えない。

そんなことを巡らせているうちにゼロットが続けた。

「人伝に聞いたが、なかなか大変みたいだな」

帰国したばかりなのに、さすがにイリア連合の盟主は耳が早い。さっきの言い方だと探していたようだし、わざわざ心配して声をかけてくれたのだろうか。

「リキアのことだね。うん、毎日大忙しだよ」

「ロイ殿のところには駐留しているのだったか？」

「うん。ロイ様に提案すると何でも任せてくれるんだ。すっごい、充実してる」

一から信頼を築くのは大変だと思ったが、ある意味リキアの方がむしろやり易い。ロイと言う強い存在が全面に支援してくれるし、何よりどどん任せしてくれるから前だけ向いていればいい。

内輪のためにぐずぐず時間と神経を費やさなくていい分、全力を注いで毎日朝が待ち遠しいと言うもの。

「そうか……。元気な声を聞けてなによりだ。ユーノも安心するだろう」

「お義兄ちゃんも無事に帰ってきてくれてありがとうだよ。それが一番お姉ちゃん喜ぶよ、きつと」

「ありがとう、一本取られたようだ。そうだな……ユーノを早く安心させてやらなければな」

そうは言いながらもゼロットの目つきはどこか厳しい。何か思案しているように視線はちらりと外を向き、顎に手を添えだした。

やはり、ただ騎士団に立ち寄ったような雰囲気ではない。何かあったのか聞こうとすると先に「シャニー、ひとつだけ教えてくれ」ゼロットが口を開いて続けた。

「出向の理由や目的を団長から説明を受けて納得したのか？」

これが、わざわざ探してまで聞きたかった本題というわけか。

なぜそんなことを聞くのかまるで分からないが、怒っているのだろうか。自分がイリアを留守にした翌日に辞令が出たわけで、思うところがないはずもない。

「納得もなにも、総務の人から辞令を渡されただけだよ」

「なんだと？」

「だって、辞令渡された日は、イドウヴァさん傭兵契約でイリアにいなかったし」

想定した答えと違ったのか、ゼロットが驚きに目を見開いている。

叙任騎士である以上従う他なかったにしても、ごちゃごちゃ言い訳しているようでなんだか嫌な気分だ。理由はなんであれ、彼との約束を果たせていないことに変わりない。

「でも、誓いは忘れてないよ。副団長とは話したし、目的を決めて、あたしたちなりの流儀で頑張ってるんだ」

それでも言わずにはおれなかった。決して、イリアの民を裏切ったつもりはないと。

「活躍は聞いている。リキア同盟からスカウトされたりするのか？」

「へ？ お仕事は手伝ってるけど、スカウト？ とかはないよ？」

今日のゼロットはなんだか妙なことばかり聞く。あまりに唐突で一瞬頭が凍りついて動かなくなつた。

リキアに来てからを思い出してみるものの、浮かんできたのはどこも門前払いだった最初の苦労ばかり。あれもイドウヴァのせいだしゼロットに言つてやろうかと思つたが、火種を作つて巡り巡つてまた干渉されるのはこりごりだ。

リキア同盟との接点に焦点を当ててみても、勲章の授与式を飛び出してマリナスからたつぷり絞られた記憶だけ。とても言えるような話ではない。

「何言ってるの。ずっといてくれると助かるってロイ様言ってたじゃん」

横から飛んできたルシャナの声が、頭に詰まって時が止まる。中で駆け回り続け、花火でも放り込まれたように目から星が出てバチンと

突き抜けた。

「ル、ルシヤナ?! あ、あれは違うじゃん!」

「……そうか。なら、心配は不要か」

まだ言い足りない様子のルシヤナを口封じしていると、横でゼロツトが小さくこぼした。

やはり心配をかけてしまっていたようだ。後ろ足で砂をかけたような状態のままなのは、どうにも流儀に反する。

「あのね、お義兄ちゃん。ごめんなさい。せっかく勲章や銀の武器をくれたのに」

赴任前にユーノには挨拶できたがゼロツトとは顔すら合わせられず、ずっと胸に引っかかり続けてきたことだった。

「謝る事などない。君たちは期待通り、いや、それ以上に活躍している。胸を張りなさい」

ミントティでも口にしたように、胸のつかえがスツと晴れていく。

それだけでも救われたところに、思わず口元に手が行った。ゼロツトが手を差し出してきたのだ。信じてもらえている……それが何より生き生きと心に火をつけた。

「はい! 頑張りまっすー!」

「うむ。今後も活躍を期待しているぞ」

激励を残してゼロツトはすぐさま立ち去り、間もなく天馬騎士に連れられて空へ飛び上がり出発する姿が小さくなっていく。どうやら、あらかじめここに来るために送迎を依頼していたらしい。

手に残る、節くれだつて無骨ながら優しい温もりをさすりながら眺めていると、後ろからニシニシする声に揺さぶられて我に帰る。

「ふひひ、将来の王様から直接期待されるなんて、ウチら実はエリートコースっスか?!」

「バカ言っていないで出発するよ! 実技ブービーコンビ!」

「……ミリアのせいで私まで叱られた」
ルシヤナに首根っこを掴まれたミリアを助けることもなく、レンが恨めしそうな視線で突き刺している。

三人を一度は追いかけたシャニーだったが、立ち止まって振り返り

ゼロットが消えた先を見つめた。

「どーしたんだろ？ お義兄ちゃん」

せっかく胸のつかえが突き抜けたというのに、どことなく剣呑な“流れ”が絡みつくようでどうにも引つかかる。

以前エデッサ城で会った時とはまるで別人の厳しい面持ちは、賢人の威厳……それだけでは飲み込めないものだった。

特命捜査

吸い込まれそうなほど高く突き抜け、朝から白光する世界に霞む目を細める。

胸を燃え上がらせる隆々とした青に万緑の飛沫が噴き上がる空。ついに、日常に帰ってきた。

(なんだか……懐かしい感じ。ふふっ、ヘンなの)

フェレに戻ったシャニーは、光る空をありったけ伸ばした体に浴びせながら南薫に髪をなびかせていた。

イリアに戻っていたのは移動含めた5日なのに、だいぶ久しぶりの感覚がくすぐったい。だいいち、イリアが故郷で日常はそちらのはずなのに、まるで旅行から帰ってきたような気分だ。

日常が戻って来たなら、さっそく仕事だ。気合を入れなおし、ランス達に帰還を報告しようと歩き出すと、おりしも背後からの声に呼び止められた。

「シャニーー！」

シャニーの顔にも、空に負けないくらい眩しく輝く向日葵のような元気が咲く。

この声は、誰よりも一番に聞きたかった人のもの。振り向いた先に見えてきたのは、会いたくて会いたくて仕方なかった、頬ずりしたいほどの愛おしい笑顔。

「あー！ ロイ！ おはよう！」

手を振りながら夏の風を切って、特等席に吸い込まれるように辿り着く。そのまま身を寄せて腕を絡めるとぴったりくっついた。

やっぱり、帰ってきた。ただでさえ明るく眩しい夏の景色へ、さらに鮮やかな輝きが広がっていくよう。リキアで生きている実感が体中にパチパチ弾けて、今なら空だって飛べそうだ。

「朝から嬉しそうだね」

「そりやそうだよ！ 朝からロイに会えたんだし」

イリア出張で1週間弱空けていたのもあり、やむを得ない部分もあるのだが、最近はロイと日すがら会えない方が多かった。仕事が忙し

くて帰城が夜になることが多いのもあるし、ロイが城を空けたまま帰らない日もしよつちゆうなのだ。

こうして朝から会えるなど、それこそオスティアの事件を報告した日以来かもしれない。

「最近忙しいの？」

「ああ。リキア同盟の活動が活発でね」

「そうなんだ……」

ランス達から教えてもらって事情は知っていた。リキアにとって今が大きな山場の時期らしく、今日もロイはどこかへ出発するのか正装を纏っている。

いろいろお喋りしたい事が喉元まで飛び出しかけていたが、ぐっと飲み込んで絡めていた腕を解く。

「うん……そうだよね。ロイは中心で頑張ってるんだもんね」

最後にデートしたのはいつだろう。それこそ、6月の舞踏会以降、7月にちよつとお茶したくらいしか記憶にない。

寂しくないと言えば嘘になるが、つとめて口に出さないようにしていた。彼を支える事が、リキアで生きる一番の意味だ。こうした大変な時期こそ、どんな形でも彼を一番に考えようと決めていた。

「すまない。顔合わせたのも一週間ぶりか」

「うん。だからさ！　こうやってお喋りできるから嬉しいんだ」

同じ城にいて駆けていけば10分もかからず、いや天馬で窓まで乗りつければもつと早いはず。手を伸ばせば届く距離が、まるでリキアとイリアくらい遠く感じる。

それは同じなのか、今度はロイから腕を回してきた。これなら、少しくらい甘えてもいいだろうか。ロイについて中庭を歩いてみる。

「それにしてもさ、リキアの夏ってホント暑いんだね……」

歩き出して秒だった。息するだけでむせ返りそうな熱波で肺が焼けそうだ。風があれば違うのだが、さつきまで吹いていた風は止んでしまい、手で扇ぐくらいではちつとも効かない。

ギンギン照りつける太陽は容赦なく、露出した太ももがパリパリに炙られパチンといきそうだ。網の上のウインナーはこんな気持ちな

のかもしれない。

「そうか、シャニーはリキアの夏は初めてか」

「まさかこんな暑いとは思ってなかったよ。溶けそう……」

生まれも育ちも生粋のイリアっ子にとって、夏は過ごしやすい季節のはずだった。

リキアでも南海に近いフェレは、イリアと比べ物にならないくらい空や緑が油絵のように濃い。とにかく暑くて脳みそが沸騰してくる。遠くがモヤるのも暑いからなのか、頭がヤラれてきたからか、それすら分からなくなってくる。

そんなト口けた顔でへーへー言うシャニーをロイは笑っている。

「はは、じゃあ今度海に行こうか」

「海?! わあ、海なんて初めてだよ！ 行く行く！」

久しぶりのお誘いに歓喜の風が吹き抜け、暑さなど忘れて飛び跳ねてしまった。雪国で海水浴など、即には氷のオブジェで機会がなかったが、旅行雑誌で見てやりたいことは山とある。

(夕日をバックにロイとく……うふふふふ！)

今から作戦を練らなければなるまい。まずは水着の調達からスタートになりそうだ。喋る石ころを撒くのはなかなか骨が折れそうだが、失敗は許されまいだろう。

(何色にしよっかなあ。情熱の赤かあ……)

「よおし！ あと千本だ!! 続けッ、お前たち！」

ふいに視界へ入った赤に傾いたのもつかの間、直後にすっ飛んできた熱すぎる声で現実に取り戻されてしまった。

「アレンさんとか、暑くないのかなあ」

朝から猛烈な稽古で燃えるアレンからすかさず視線を外す。ただでさえ暑いのに、金属製のあんな重厚な鎧を着込んで槍を振り回す姿は、見るだけで体温が上がる。

アレンに聞いてもどうせ、「汗をかいたただけ強くなれる！」だとか根性論しか返ってこないだろうし、近寄ったら最後、身体中の水分が蒸発するまで付き合わされるに違いない。触らぬアレンに祟りなしだ。

「シャニーは慣れてないんだし気をつけてくれよ。多めに休みを取る

んだよ」

「ありがと。あたしは軽装備だしね。下、革鎧だけだし。おかげで空飛ぶと涼しいんだよ」

ロイは心配してくれるが、空にいる間は案外快適なのだ。肩当てと胸当て以外には、制服の下に革鎧を着込んでいるだけ。腕こそアームスリーブで覆っているものの、足もサイハイブーツだけであり、天馬騎士は騎士としてはかなりの軽装備だ。

それでも干からびそうになるのだから、リキアは冷たいスイーツなしには生きられない。デイクはサボりだと怒るけれど、哨戒任務はパテイスリー巡りライフラインと言えるだろう。

「えっと、前から気になってただけだ」

今日はこの店に行こうか……そう考えているとぼそつとした声に呼ばれた。

ロイの声に違いないが、どこかいつもと違う口ごもる感じで、視線を合わせようとしたら彼らしくもなくもじもじし始めた。

「うん？」

「その格好って、その、イリアでは寒くないの？」

そわそわ、ちらちらするロイの視線を追ってみて、ははんときた。

もうとつくに「ぜんぶ」見られている以上どうこうも無いのだが、ロイにしては珍しい。こんな隙を見逃すわけには行くまい。いたずら心がニシニシ止まらない。

「あーっ、エッチな目で見たなー？」

「い、いや。べ、別にそんなつもりじゃないよ」

「ふーん？　じゃあ、どんなつもりなの？」

三角にした目をずっと近づけてぶりぶりしてみたら、面白いようにロイが目を白黒させ始めたではないか。もっともつと顔を近づけて、追及の眼差しを送りながら逃げ出そうとする腕に自身の腕を絡める。

「イリアは雪国だろ？　その、そんなふう^に露出してたら、冷えるんじゃないかって」

ついに観念したか、ロイはそう言つて視線を逸らした。それでも

ずっとジト目で見上げて放してやらない。横目にちらちら見下ろしてくるロイの目は弱々しくて、普段見られない姿にクスクス笑いが漏れた。

せつかく心配してくれているのに、これ以上イタズラするのはかわいそうか。

「そりや、寒いよ」

「じゃあ、どうしてそんな軽装備を？」

「んー。あたしたちはスピードが命だしね。それに、空にいればそうそう攻撃を受けることはないし」

鋼のボディでもあるまいし、寒いものは寒いに決まっている。何度凍てつく空に叫んだことか。

それとは裏腹に、少しでも軽装にできないかばかり追求してきたのは天馬騎士の悲しい性だ。このリキアでは、別の意味でももつと身軽にならないと生死に関わるだろうが。

「それにさー」

そんな実務的な話はオマケでしかない。今日は実にいい情報を仕入れられたものだ。

ロイに顔を近づけてニヤツとして見せた。

「じゃあ、このヒラヒラやめて、アレンさんみたいにゴツゴツがいい？」

「……」

「そう言うことじゃーん？」

ロイが見せた一瞬の隙を見逃してなるものか。彼の肩をツンツンすればするほど、ニヤニヤが止まらない。

「あ、あまりからかわないでくれよ。そうじゃなくて、シャニーの安全を考えたら……」

「真面目だなあ、ロイは」

こう言うのは慣れていないのか、ロイは照れてしどろもどろな様子で、いつもの凜々しさはどこへやら。

こんな顔を眺められるなんて、まだまだイジってみなくてはウズウズが収まらない。普段、誰も見たことがない彼が目の前にいるのだ。

どんどん知りたくなるというもの。

「ワイルドなロイもたまには見たいなあ?」

「ワイルド?」

「荒くれみたいにき、力づくで。きやー! 助けてーみたいなあ?」

ところが、早くも耐性がついたのかロイは乗ってこないばかりか、すっかり笑顔が消えてしまった。

ガラスを扱うかのような手つきで彼はそつと肩を包み、沈んだトーンで見つめる。

「シャニー……そんな目に遭ったことあるの?」

この真顔はどうやら本気で心配しているらしい。

これはこれで、包んでもらえるのは悪くないけれど、ロイの笑顔を見られないのでは本末転倒だ。

「え? そう言う目は賊討伐してればしよつちゆうだけど、そんなの返り討ちだよ! 返り討ち!」

「ははっ、返り討ちにあつたらたまらないかな」

脇に差した太刀の柄をポンポン叩いて見せると、待っていたようにロイの顔に少しだけ笑みが戻った。

何だか、上手くかわされたような気がしてきた。ロイだって荒くれの女への態度などベルン動乱で知っているだろうに。

たしかに見習い修行を始めてすぐの時は、何倍も体格差のある連中が怖かったが、動乱を経てイリアに帰っても日課のように討伐任務をこなしてきた今では、もう稽古台にすらならない。

だいいち、彼相手なら返り討ちになんかしないに決まっているではないか。きつと。

(ちよつと惜しいことをしたなあ)

内心、惜敗に指を弾いていると、「そうだ、シャニー」そうロイは言っ
て続けた。

「お願い聞いてもらえないかな?」

「もちろんだよ。ロイのお願いなら何でも聞いちゃうよー!」

「何でも?」

「大丈夫だよ、返り討ちになんかしないから!」

「はは……。残念ながらプライベートな話ではないんだ」

別に言われなくとも声や表情で分かっただけではいたけれど、あらためて否定されると、また悪いシャニーがつまらなさそうに心の中で口を尖らせ始めた。

とは言え、仕事の話ならなおさらイタズラなどできまい。奥に押し込んで仕事モードに切り替える。

「これからは、フェレの騎士としてだけでなく、僕の配下として動いて欲しいんだ」

「えーと。……。ごめん、わかんない」

頭のキレル人が羨ましい瞬間。

ここで「フツ、なるほど。了解した」とでもスマートに返せばカッコいいのだろうが、実際はロイの言葉が頭の中をぐるぐるして眉が下がるだけ。

「僕はリキア同盟の副盟主でもある。だから、リキア同盟としての仕事もお願ひしたいなって」

また頭が一瞬固まった。でも今度はちゃんと理解している。跳ね上がりそうな驚きと、叫びたくなるような喜びが頭を駆け回り、一緒になって口から飛び出してきた。

「ええ?! それ、すっごい嬉しい! もちろん、むしろありがとう!」
今までに無いくらい大きな仕事だ。

一領主との仕事と、複数の領主を束ねる副同盟主付きでは、それぞれ部屋の中と天空くらい、広さも高さも別世界に違いない。

「仕事の範囲が一気に広がるけど、期待してることは今までと同じだよ」

「嬉しいなあ。本当にありがとう」

何段も高い仕事ができるのはもちろん嬉しい。とりわけ、またひとつロイが認めて任せてくれたことが、何より心をビビットトーンに彩って弾けさせてくれる。

それもつかの間、ひと通りはしやぎ終わると疑問がふと湧いてきた。

「でもいいの? あたしって一応、傭兵で部外者じゃ」

リキア同盟と言えば、領主同士が意見を交わし意思決定する、リキアでも最重要機構と聞く。造詣が深い学者や著名な賢者ならいざ知らず、そんなところに外国人が名を連ねる事自体が本来あり得ないと言えるだろう。

今さら傭兵なんか……と言う気はさらさら無いにしても、傭兵部隊が入れるような敷居の低い場所とは思えない。

それでも、ロイは静かに首を振った。

「シャニーはそんな気持ちで仕事してないだろ？」

「そりゃ、骨埋めるつもりでいるよ。リキアは第二の故郷だし」

「じゃあ、それで十分じゃないか」

ロイは動乱の時から、やる気のある者への支援を惜しまなかった。

当時、戦場での功績が低い者を整理する動きがあつたのをロイが止めたらしい。志を持って集まつてくれた者には、チャンスを与えたい——そう言つて。

あのととき、見習いでまともな戦力になつていなかったはずなのに、ロイは頼りにしてくれた。だから必死に頑張れた、怖くてもついて行こうと前を向けた。もつと、頼りたい、支えたいと焦がれるくらい思うようになった。

「それに、リリーナもこの前の一件でそれを期待していてね。誰も部外者だなんて思つてないさ」

その心を押すように、ロイはそう言つて今回もチャンスをくれた。感激と、絶対に彼の期待に応えたい気持ちが泉のように湧きあがってきて、言葉が思いつかないまま何度も頷いて見せた。

「で、さつそくなんだけど、オスティアへの街道沿いに孤児院があるんだ」

時計をちらつと一瞥した彼は話をとつとと進め始める。どうやら、くつついていられる時間はもうおしまいのようだ。

「孤児院？」

「覚えてないかな？ 動乱のとき、オスティアに向かう道中で立ち寄つた場所だ」

孤児院、孤児院……ぱつと浮かんでこない。というのも、転戦中あ

ちこちの孤児院に慰問で訪れていたから、記憶がごちゃごちゃになって糸が絡まったようにうまく思い出せなかったのだ。

もう少し、頭の中に手をつ突っ込めたら掴めそうなのに、引つかかって出てこない。

「ほら、シャニーが東の村で杖をもらって来てくれた」

「あー！ あの魔道士の子たちがいた孤児院だね。えっと、ルウくんだったっけ」

ようやく指先に引つかかった記憶を引きずり出せた。村を助けようと一人で突っ込んで、敵の増援に追いかけて回されてヒドイ目にあつた場所だ。

幸いデイークが駆けつけてくれて事なきを得たあと、負傷を癒してもらったのが、くだんの孤児院だ。

その孤児院から参戦した魔道士兄弟がすぐに浮かんできた。

「ああ、覚えてくれたなら話が早いな」

「ま、まあね。いろいろあつたから」

前段の苦い経験も含め、あまりいい思い出がない場所だ。魔道士兄弟の兄——ルウ自身はとてもいい子だった記憶があるが。

「でき、孤児院でなにかあつたの？」

「実はね」

そこまで言うと、ロイは警戒してか目だけで辺りをぐるつと見ると、覆いかぶさるようにして耳打ちしてきた。

「最近その近辺で変死体が見つかる事件が複数起きててね」

「複数?!」

「声、大きいよ。まだ同盟の中でもオフィシャルにしていないんだ」

口にて指するロイにつられて反射的に手が口に行く。

賊同士の抗争が茶飯事のイリアなら珍しくもないが、リキアは平和に映っていたからショックが大きかった。

「おっかないなあ。やられた人の職業とか、犯人の特徴……って、変死体って言うなら分からないのかな。うーん、賊の仕業？」

ロイから聞く感じ、ただの殺しではなさそうな空気だ。何かは分からないが、かすかに“流れ”を乱す妙な揺らぎを感じさせる。

あの近辺は孤児院以外には砦があつたが、今は廃墟となつてい
るらしい。そんなところで、誰かも分からない人間を襲う手合
い……動機どころか犯人像もまるでイメージがつかない。

「少なくとも市民ではなさそうだけど、それも含めて調査して欲しいんだ。リキア同盟が動く準備としてね」

聞けば聞くほど、妙に勘が騒ぐ。市民でないならそれなり戦闘をこなせるはずだ。被害者のやられ方を見てみないと得物や練度は測れないにしても、一定以上の手練れに違いない。

民に被害が出る前に、いや、噂になつて要らない不安がまわる前に、犯人を突き止めてお縄にかけなければ。

「もちろん、解決しちやつても良いんだよね？」

「さすが話がしやすいよ。リキア同盟も今繁忙を極めててなかなか手を割けなくてね。信頼できる人の手を借りたいところなんだ」

「そういうことなら任せてよ！ バッチリやつてくるからさ！」

リキア同盟付きでの記念すべき初任務。絶対に成功を収めると誓つてハイタッチすると、ロイの顔からそれまでの穏やかさが消え、彼は凜とした風を場に残して馬車へと乗り込んだ。

「行っちゃった……」

正門まで追いかけて、姿がすっかり見えなくなるまで手を振つて見送つた。

次に会話できるのはいつになるのだろう。合議が長引けば、いつフェレに戻つて来られるか分からない——そうロイは去り際に零していた。

仲間がいるとはいへ、寝静まる真つ暗な夜に一人星空を見上げるのは、千切れそうなくらい心細い。難航する会合で疲れ果てたロイが星空の向こうにいる。それが分かっているのに、何も出来ないやるせなさが襲つてきて、涙が出るくらい胸が握り締められるのだ。

「よおっし！ あたしも負けないくらい頑張るぞつと」

とは言え、帰ってきた彼の気持ちを少しでも軽くしてあげることが、果たすべき役割に違いない。

被害者のひとりをおステイア城に安置している……そうロイは

言っていた。

まずはオステイアに向かうことにした。敵を知るためにも、こういう仕事得意な援軍を呼ぶためにも。



「ん〜、おいしいい！ このレモンとミントの爽やかさが、あたしの火照りを吹き飛ばす！ まさに夏のクイーン・オブ・ジュエラートだよ〜」
事務所のソファに座り、一口したジュエラートでたまらず足をピコピコさせてしまった。

それにしても酷い事務所だ。座っているソファにしても革がバリバリだし、壁は石レンガむき出し。廃墟かと思うくらいあちこち抉れて、崩れた欠片が床の隅に積もっている。

そんな不精な空間に舞い降りた天使のごとくキラキラ輝くジュエラートが、灰色の殺風景の中で淡い希望のようにひととき煌めく。

「うるせえよ、ここは喫茶店じゃねえんだぞ」

もう一口して余韻を楽しんでいると、それを押しのけるような声がキッチンから小突いてきた。

「わざわざ買って来てまでここで広げやがって。せめて黙って食いやがれ」

「いいじゃん。こんな監獄みたいな部屋でも、花があれば気分もアガるでしょ?」

「あーそうだな。で、さっさと要件を言え」

ブウッと口を尖らせても知らん顔で背を向けるディークに、思い切り舌を出しておいた。せっかく彼の分も買ってお茶しながら話そうと思ったのに、蛇のように一口でポンとは、まるで嗜み方がなっていない。

仕方なく、得物の手入れをするディークの背中にロイの依頼を説明していく。

「って話なんだ。ディークさん、聞いてる?」

「ああ、名譽なことじゃねーか。よかつたな」

彼は相槌も適当に振り返ることさえしないで、せっせと大剣に投げ

斧にと磨いては構えを取っていて、恐らく話の半分も聞いていないに違いない。

「しまいには、やっと振り向いたと思ったら「それで？」とでも続けてきそうな顔をしはじめた。

「？　なんでそんな他人事なの？」

聞いた途端だ。デイークの目の色が変わり、ピクリと動いた眉と共に口元が苦笑に歪む。

「あん……？　ま、まさか」

「どうやらまったくそんなつもりは無かつたらしい。今まで一度でも、デイークをそんな除け者にしたことなどないだろうに。」

「おまけにロイのお墨付きなのだから、拒否権などあるものか。」

「だって、デイークさんはあたしのお守り役なんですよ？」

「なっ、てめー！」

「と言うわけで、一緒にがんばろー、おー！」

「このやろ、思ってもいねえことを。つか、勝手に了承してんじやねえ！」

「逆らえないと分かっても言わずにはおれないのか、デイークのああたらかうたらが飛んでくるが鼻歌でかき消す。さっきのお返した。」

「そのまま皿を持って窓辺に移り、街並みを眺めながらジュエライトを一口。こんな平和な時間が続いてくれれば良いのだが、自然に視線はオステイア城を捉えていた。」

「まずはデイークとともに、殺人犯の特徴を掴むところからスタートだ。」

楽園と影

ギンギラ歌う太陽の匂いをこれでもかと纏った風を全身に浴びながら、天馬にまたがり西の空を目指す。まるでサウナにいるかのよう
に、飛んでくる風はもはや温風でちつとも涼しくはないが、カラツと
していて心地よい。

デイクと合流した翌日、シャニーはフェレに戻ってルシヤナたち
に説明したのち、あらためて孤児院に向けて出発していた。

「ルウくんかあー」

昨日は記憶がおぼろげだったが、ようやくぼんやりする輪郭が線と
なって、滲む色に彩りが戻ってきた。

あの頃は戦況が激化する前で、とにかく手柄を上げるのに必死とな
り、怖いもの知らずに槍を振り回していたか。なんとも若かったもの
だ。

それが今では部隊を率いて、こうして他所の国の中枢で特殊任務を
担うとは。

「シャニー、知ってるんスか？」

ひとりしみじみと浸っていると、不思議そうな口調でミリアと呼ば
れた。

「うん、動乱中に同じ軍だね。ホント、少し喋っただけだけど」

とにかく突っ走っていたのもあって、軍を後方から援護していた魔
道士のルウとはそこまで深い交友はない。それでも、残っている印象
は彼の弟を含めてなかなか強いものがある。

「デイクさん、山賊と間違われてたよね」

背後にいるデイクにニヤリと視線を送ってやる。

「うるせえっつの」

彼は短くそう言うだけで、さっさと話を切りたらしい。それで
も、今日は天馬の後ろに乗せており、彼も逃げ場はあるまい。

「ちゃんとオシャレに気を使わないからだぞー？」

「へいへいっと。かーちゃんかよって何度言わせんだ」

「今度一緒に見に行く？」

「ヤメロつってもついてくるだろうが。確かにへたつてきたし、替えが欲しいかもな」

「違うって！ オシヤレ着を買うんだよ！ みんなもそうした方がいいって思うでしょ？」

どうにもデイクは、自分の価値に気づいていなくてもどかしい。キチンとした服装にすればなかなかイケオジのところ、適当でいるから山賊扱いなのに。

それを証明するように、話を振ったミリアとルシヤナが顔を見合わせて苦笑いを始めた。

「どこでも間違われてるんスねえ」

「まあ、こんなデカいオジサンがあんな剣持って歩いてきたらビビるわ」

まさしく初見で山賊と間違えた二人の言葉だ。

呆れたような口振りでじろじろデイクを眺めるミリアの横から、ルシヤナの容赦ない口撃が飛んできて、さすがの戦神もお手上げとみえる。

「だあ！ お前ら、シヤニーの言うことを真に受けるんじゃねえ！

あと、オジサンはやめろ！」

いつになくデイクが大きな声で追撃を払い除けだした。こんなふうデイクがいろめき立つなんて、動乱中はまるで見たことはなかった。

それでも、言葉のわりに怒っているようには聞こえない。むしろ楽しんでるのかトーンは明るいし、ルシヤナたちも慣れたのかニヤニヤしている。これを活かさない手はない。

「気にしてたんだ？ じゃあ、オシヤレしないとね！」

「シヤニー、あとで覚えてやがれ」

デイクのじりじりした顔がなんだか嬉しい。

見習いときは教えてもらえばかりで、大きい代わりに遠い背中だった。それが今は仲間として迎えてグツと近くなったのだ。

ただ、それはデイクも同じだったらしい。

「おまえこそ、次はポンコツ晒すなよ？ 部下もいるんだしよ」

「ぐっ……。ナイシヨね、それ……」

周りへとはまるで当たりが違うと言うか、容赦なくあつさり言い負かされてしまった。それだけで済まず、彼の横目がミリアたちをさしでいて堪らず話題を元に戻す。

「ルウくんはすっごくいい子だよ。素直でさー」

ルウは優しいし、年下と思えないくらい強かった。魔法のクオリティだけでも異次元だったし、何より穏やかながら炎のような強さを持った少年だった。ディークの前に「お姉さんは僕が守るからね」と魔道士なのに前に出たくらいだ。

「ハン、お姉さんさせてくれてたもんな。上手く乗せられてニヨニヨしやがって。ホスト帰りの姉ちゃんかって感じだったぜ」

「言い方！」

仲間たちの絡みつくような視線に息が詰まる。今までも部隊の連中から弄られてきたが、まさかディークがそれに燃料を投げ込む役にまわるとは想定外だ。

「ルウくんは優しかったもん。それに比べてその弟はー！」

あんな弟がいたら優しいお姉ちゃんになれたかもしれない。もつとも、一緒についてくるもう一人とは毎日ケンカしていそうだが。そちらも思い出したらギリギリとムカツ腹が立ってきた。

「はは、ウザいって言われてたな。ま、向こうのほうが中はオトナだったししやーねえ」

弟の方は、兄とは違う意味でストレートな性格だった。せつかくお世話してあげようと思つたのに邪険され、あげくあれこれダメ出ししてくる始末。まるで姉テイトの口が悪いバージョンみたいでうんざりした記憶が、ディークのせいで蘇ってしまった。

「ギギギギ……ぼろくそ言つたなー！」

「ま、おあいこつてとこだろ」

まさか今度はこちらがジリジリするハメになるとは。したり顔で涼しく人の怒りをかわして見せるディークが恨めしい。

おまけに、どこがおあいこなのだろう。さつき黒歴史を引っ張り出されてやつつけられたばかりなのに、オーバークル……いや死体斬り

ではないか。

言い返せずに口をクチバシのように尖らせていると、背後からさらなる口撃が飛んできた。

「それにしても、見ないうちに随分デカくなったもんだな」

ポンと頭へ置かれた手にジリジリが吸い上げられ、代わりにまるで火炎瓶でも放り込まれたようにドカンと頭が吹き飛んだ。

背後から感じるこの生暖かい視線は、間違いなく胸元を見下ろしている。まさかデイクがそんな目で見ていたとは。目が今にも飛び出しそうなくらいバクバクだ。

「どっ、どこ見てんのさ！ スケベ！ あたしにはロイっていう大事な人が！」

「……前言撤回だ。やっぱり、おまえはおまえだったわ」

ところが、謝るところかデイクのますます生暖かい視線が伝わってくるし、ため息まで聞こえてきた。周りも援護してくれるどころか、クスクスと黒い笑いを浴びせてくるではないか。これは……間違いない。

(ぐええ……っ、また自爆う?!)

ジンジン血が噴き上がってくる。今にも顔が風船みたいに弾け飛んでしまいそう。

これ以上自爆したら空の上では逃げ場がない。チンチンになった頭を冷やすには夏の風は暑すぎて、今でさえもうオーバーヒートしているのに。

「で？ 孤児院にはどっちもいるのか？」

俯いていたら頭を呼び鈴のようにポンポンやられ、ハッと現実に引き戻された。

「ううん、ロイの話だとルウくんだけみたいだよ」

どうやら弟の方は魔道を極める旅に出ており、兄のルウが元々あった孤児院の跡地に孤児院を兼ねた魔道学校を設立したらしい。

(ルウくんたち、大丈夫かな……。あんなやり口……。ただものじゃないよ。それに……)

そんな場所で起きた事件。

それだけで心配なのに、どんどん大きくなる『流れ』の揺らぎは吐き気すら覚えるほど。

手綱を握りなおしたシャニーは、スピードをさらに上げて西の空へ吸い込まれていった。



夏の日差しとは思えない、穏やかな木漏れ日の香りに包まれ心地良い。

案内されたのは、木の優しさが広がるこぢんまりとした部屋だった。多くに囲まれてはいないが、たくさん魔道書が四方の書棚に聳えており、きつと院長室なのだろう。

「応援に来てくれてありがとうございます」

「敬語なんてよしてよ。お久しぶり、ルウくん」

魔道学校兼孤児院を切り盛りする院長ルウの、混じり気を感じさせない声に心がすつと温かくなる。

何も変わっていない。新芽を思わせるアップルグリーンの髪に、相手を人懐っこくまっすぐ見つめる青い瞳。何より、この気にかけたくなる健気な口調こそ、部屋の優しさを作り出しているのだろう。

「うんうん！ お久しぶり、シャニーお姉さん！ 元気そうで良かったよ」

「ルウくんもね。えへへ、バツチリ守ってあげるからね！」

「うん。きつと子供たちも喜ぶと思う」

こんな弟がいたら毎日おせっかいしていそうだ。今でさえ、キウンキウンする心を放っておいたら頭を撫でてしまいそうなのに。

それでも、子供扱いは失礼だろう。

後進を守り育てる立派な立場に彼がいるのは、外からしきりに聞こえてくる子ども達のはしやぎ声が教えてくれる。自分だって毎回デイクと同じ気持ちぶつけているから、同士の気持ちは解るつもりだ。

「あー……。少年、念のため聞くが、俺らの仕事ってのはガキのお守りか？」

相変わらず座ろうともせず、壁にもたれるデイクが怪訝そうな声

をあげた。親子くらい離れた相手との接し方に慣れていないのか、また彼は子ども呼ばわりしている。

「お願いしたいです。いろいろなイベントが重なって、人手が足りなくて……だめ……でしようか？」

悪気はないのが伝わっているのか、ルウはニコツと澄んだ笑みで見回して、その後に見せた上目遣いは天使のよう。

さすがの戦神もイチコロか。いつものように舌打ちしたり、頭をボサボサやったりする余裕もないらしい。

なんだか、ずいぶん扱いが違う。自分のときは最初から荒っぽい感じだったし、叱るときも容赦なく怒鳴って頭グリグリだつてされたのに。

（なーんだ。デイクさん、あたしのことは子供じゃないってちゃんと認めてくれてたんじゃーん。素直じゃないんだから〜）

剣を教わるようになってからは何をしても叱られた記憶しかないが、それが期待の裏返しだったとは。

ひとつ謎が解けて軽い気持ちだがスキップしかけていると、もうひとつの疑問が後ろから引つ張ると同時に、横から肩を小突かれた。

「おい、シャニー。話が違うじゃねえか？」

「ね……」

明らかにロイの依頼……契約内容と求められている役目は違う。困っている人を放つてはおけない。とは言え、デイクにはキチンと筋を通さないといけないだろう。

「でもね、孤児院を守るって意味なら、そうじゃない？」

「チツ。便利屋の範疇じゃねえんだがな」

「え？ 便利屋ってそういう——」

「分かってて言いやがって。俺はオモテの世界は相手してねえんだよ。ま、とは言え、流儀的には悪くねえか。一度受けちまった仕事だしな」

頭をボサボサやってボヤきながらも、デイクはようやくやくシャニーの隣でルウと膝を突き合わせた。

足並みが揃ったところでようやく本題だ。ルウたちを守るのは当

然としても、主命はもつと深いところにある。この孤児院は、その元凶の脅威に今も晒されているのだ。

「もう少しお話聞かせて？　あたしたち、ロイ様から孤児院周辺で起きた変死事件の調査をお願いされたんだ」

「変死事件？　ひよつとして……」

鏡に光を当てるように、間を置かずにルウはあごへ手を添えて視線は天井へ。

それは長く続かず、すぐ、「でも……」と言って今度はテーブルを見下ろす彼に、デイークがさかさず切り込んだ。

「なにか心当たりがあるんだな？」

しばらく耽っていたルウは、自分を言い聞かせるように静かに首を振って正面に視線を戻す。

「最近、略奪団がたまに襲ってきて困っているんだ」

「えっ?!　ルウくんたち大丈夫なの?！」

一瞬、聞き間違いと勝手に理解したが、それより先に口から思ったままが飛び出していた。

デイークが聞くまであんなに考えていたのに。もつと些細な情報だろうと軽く構えていた心は、投げやりが突っ込んできたよう。蜂の巣を突いたらこんな風なのかもしれない。

「うん、襲ってくるのは少数だし、子ども達には手を出さないんだ。でも、みんな怖がっているから、お姉さんたちも来てくれて心強いよ」
最初は道中で『流れ』を乱した犯人に違いないと思った。

しかし聞く感じ、彼らは食料をぶん取りにくるようで、金品を要求してくることは稀という。どうにも略奪団と言うにはシヨボいと言うか、ただの飢えた物盗りレベルにしか聞こえない。

とは言うものの、暴れてあちこち破壊する事もあるようだし、放っておけるはずもない。同盟付き騎士として、しつかりお灸を据えてやらねばなるまい。

「へへへっ、大船に乗ったつもりで安心してよ」

とんと胸を叩いてみせるとルウは嬉しそうに綻ばせ、彼のつぶらな瞳にノックアウトされそうだ。

(かわいいなあ。もつとこの子を喜ばせてあげたいなく。……ん?)

ところが、ルウの眼差しとは対照的な周りの視線が気になって、振り返ってみるとぎよつと髪の毛が逆立ちかけた。

「大船……ねえ」

「泥舟なんて言えないっス」

「シャニー、年下もゾーン内……っつと」

「ミリア!! 人間きの悪いこと言わない! レンも何メモしてんの!」

一斉に降り注ぐもの言いたげな視線と共に、ルシヤナを皮切りにミリアやレンから総攻撃を浴びて蜂の巣になった。

たまらず咳払いして無理やり先に進める。

「となると、その略奪団の犠牲者なのかな」

隣で腕組みするディークに話を振ってみる。

こんなのにどこかで人の往来が限られる場所での事件など、犯人を絞るのは難しくないだろう。

そう考えたのは甘かったのか。彼は聞いてもなかなか返事せず、ようやく腕組みを解いても渋い顔のまま。

「その線も否定は出来んが、どうにも臭うな」

「におう?」

長年積み重ねたベテランの経験が生み出す勘なのか、こうやってディークが怪しむときははたいてい当たる。「流れ」のような漠然としたものではなく理屈が通っていて、ついつい唸ってしまうことばかりだ。

「考えてみる、やられた連中はオモテの人間じゃねえ。略奪団が襲うにはターゲットが違うだろ」

「たしかに……商人とかだよな。うーん」

オスティア城で事前に確認したものの、被害者の身元は全員不明。つまり、市民証を持たない人間であり、俗に言う「裏の人間」と言うことになる。

同業者間の抗争でないのは、被害者の発見現場に戦闘痕が一切なかったことから分かる。孤児院で暴れるくらいの連中では、あんなや

り方など出来ないだろう。あのやり口は、それこそ暗殺の類だ。

「ま、そこらも含めてお出迎えしてやろうじゃねえか」

「デイクさん……悪人の顔してるよ?」

「あん? ウラの人間なら情け無用でやりやすいだろ」

歩き回るより、襲つてきた連中をシメたほうが手っ取り早いと言うわけだ。ご説ごもつともだが、デイクが拳を打ち鳴らして不敵な笑みを浮かべながら言うのと、どちらが悪者か分からないから困る。

やり方はともかく、まずはルウを安心させてあげるのが先決だろう。

「ルウくん、あたしたちが略奪団から守るから、襲撃してきたら教えてね」

「ありがとう! お姉さん達も無理しないでね。ぼくも戦うから!」

「おっしや! がんばろーね!」

「やれやれ……ピクニックかなんかみてえなノリだな」

ハイタッチは契約成立の証。

デイクは呆れたように顔を手で覆っているが、事態があまり芳しくないのは理解しているつもりだ。

警備しながら情報収集となると、果たしてどのくらいで解決するだろうか。

時間はかかっても、きちんと根元を断たなければなるまい。根拠はなくとも「流れ」が教えてくれる。その乱れは、感じたこともない気持ち悪さを今も運んでくるのだ。デイクの勘と合わせても、やはり何かがある。

さっそく警備の段取りを決めようと仲間が集まっていると、後ろからルウに呼ばれた。

「ここは教会も兼ねてて子供たちもいるから、着替えてもらっていい?」

彼の指さす窓の外に視線を移してみると、たくさんの子どもに囲まれるシスターの姿が見える。

落ち着いた黒のトウニカに、純白のウィンプルが清楚さを際立たせ、腰から下げた金ぴかのロザリオが子供と踊るたび陽に光る。

戒律の中で輝く慎まじさが、優しい横顔をさらに美しく輝かせて女神のよう。

いきなりで略奪団の話と同じくらい目がまん丸になった。服自体には興味を惹かれるとは言え、まさか、あれに着替えろだなんて。

「ええ?! この格好じゃダメなの?」

「ごめんなさい。でも、子供たちもきつと安心すると思うから。みんなの不安は少しでも減らしてあげたくて」

不可解な変死事件に略奪団……子供たちを案じてのことならやむを得ないか。かと言って、あの格好では天馬に乗り辛そうだし、帯剣していたら妙な気もする。どうしたものか。

「いいじゃねえか。バリバリ騎士の格好した人間がいない方が、連中も警戒しねえだろうし」

これはどうしたことだろう。一番嫌がると思っただいイクが手を挙げるとは。

「へ? デイイクさん、じゃあ——」

「もちろん、俺はガラじゃねえしパスだ」

(ああつ、ズルい!!)

やっぱりそう言うことだった。

怖いもの見たさのようなものはあるにせよ、デイイクはパスしてくれた方が嬉しい気もする。こんなムキムキの神父さんなど、むしろ悪人にしか見えずに子供たちは怖がりそうだ。

最初こそしぶしぶルウについていったものの、いざ服を渡されると更衣室に着くのが待ち遠しくなってきた。



慣れない服を互いに整え合いながら、悪戦苦闘の末に何とか纏って更衣室から出た。庭を目指して廊下を歩いていると、なんだか魔法学校の生徒になったような気分になってくる。

お互いの格好にはしゃぐ女子たち。デイイクが蚊帳の外になっているのに気づいたシャニーは、哀れになって声をかけてみた。

「ね? ルウくん、ホントにいい子でしょ?」

これできつとお互い誤解も解けたに違いない。特にデイイクは、山

賊と間違われてファイアーを撃たれてそれっきりだったはず。

「あれでおまえより年下だったか？ 立派なもんだねえ」

誤解が解けたのは良いのだが、おちよくなるような口調で言いながら浴びせてくる眼差しはあまりに露骨。

悪意のある笑みに堪らずバタバタ地団太を踏む。

「な、なによお、その顔！ どーせあたしは子供っばいですよーだ！」

「やれやれ、なんのことやら」

「~~~~ツ!!」

歯ぎしりするくらいジリジリをぶつけても、デイクはそよ風が吹いたくらいにしか思っていないのか両手を広げている。

そのまま歩き出した背中に思い切り舌を出してあかんべえしていると、見透かされたかのように鼻から抜いた笑いが飛んできた。

「ハッ、それにしても、おまえのそんな格好を見ることになるとは」まじまじ見られてしまうと、デイクであつてもちよっぴり恥ずかしい。

ふと俯いて、映った修道服を見下ろしてゾクゾク来た。着ているのは、まさか本当に自分なのだ。

「えへへ。一度着てみたかったんだよね。ロイにも見せてあげたいな」

騎士の立場で、こんな修道服を着るなんて夢でも見ているよう。

教会といえど真つ先に浮かぶ象徴であり、なんとなく別世界から舞い降りた清廉な人たちが纏うイメージだった。

それを着ている。思わず引つ張つてみたり、ぽんぽん触つてみるほどこに、返ってくるすべすべの感触がくすぐつたい。

まるで生まれ変わったような気分……今は天使か、女神か。

「どうっ？」

デイクの前でくると舞つてみせたが、彼は眉間にしわを寄せて首を傾げている。よそ事を考えていてちゃんと聞いていなかったのだろうか。

サービスでもう一回りして答えを期待し待っていると、彼は引きつったような不自然な笑みを浮かべて聞き返してきた。

「あん？ どうってのは？」

「似合う？」

「アー……」

デイクは頭をボサボサやりながら一度目を合わせてきたもの、すぐ目を閉じてうんざりと言いたげ。

それだけでもムツとするのに、直後ため息混じりに吐き出した一撃が、膨らみかけの火山に火をつけた。

「マジで……需要ねえわ、きつと」

「なあ?!」

「ロイだけに独り占めにしてもらえ」

「う、ウルサイな！ くうう！ 今日のデイクさん意地悪すぎ！」

社交辞令というものを知らないのだろうか。これだからオジサン呼ばわりなのだ。

たしかに聖女とは縁遠い生き方をしてきたかも知れないが、ちよつとくらい褒めてくれてもいいのに。収まりきららずにブーブー後ろから突いても、デイクはまるで聞こえていないかのよう。

「そっちのちっこいのはなかなか似合ってるぜ」

「レンです。覚えて」

露骨な話題逸らして恨めしい。おまけに褒められたレンは淡白な言葉と裏腹になんと嬉しそうなことか。思わずデイクのお尻にパンチを浴びせてみても、筋肉の塊に弾かれて痛い目を見たのは自分だけ。

ますます癩癩を起こすシャニーを、デイクは面倒くさそうに横目で見下ろしている。

「院長さん、魔法使いさんだった。授業受けに行こうかな」

レンのトーンはどこかうキウキ楽しそうで、珍しく先頭を歩いて生き生きしている。きつと師匠ニイメと離れて独学になつていたぶん、心細かったに違いない。

レンの新たな知識との出会いを祈っていた時だった。

「シャニー、おまえも受けてきたらどうだ。ちったあ賢くなれるかもしれねえぜ」

ゾワゾワと身体中を撫でられたように震えが走った。ようやく褒めてくれるのかと思いきや勉強しろとは、今日はどこまでイジリ倒すつもりなのだろう。

おまけに、それを煽る声が頭の中で跳ね回る。

「キヤハハッ、愛されてて羨ましい限りだよ」

「うるさい、うるさい！ 相棒なら少しは同情してよお〜！」

「ああ、同情ならしてるよ。数字への弱さにさ？」

「ぬううう……！」

セチの顔はシャニーとそっくり。そのくせ同じとは思えない、見透かすような悪人の笑みを浮かべて煽られると黙っておれない。

彼女には一方的に心を読まれていて、勝ち目などないのは分かっている。いてもダメだ。いや、人の心を覗きながらケラケラ煽るとは、悪魔の所業とはこのことか。

「そっちに弱い分、頑張って剣の道を極めようじゃないか！」

「なんでもそっちに持つてくの禁止！」

「つれないなあ。略奪団とか言うので暇つぶしくらいにはなるかなあ？」

この戦闘狂は、やはり精霊と言うより悪魔。今さら善人のようにニツコリされても、ますますゾツとするだけだ。

ツンと視線を切り、シャニーはぼうつと空を見つめる。ディークの手を取る。

「あたしは魔法使わないから賢くなくていいの！ ほら、見回り行くよ、ついてきて！」

「へいへいっと」

一度はシャニーに引つ張られて歩き出したディークだったが、彼はすぐに止まり横目で貫く。

「……どうにも、妙な予感がするな」

鋭い視線の先には、中庭の向こうにのどかな深緑の山々が広がるばかりだった。

白と黒の刺客

散歩。ひたすら散歩だ。

子ども達が駆け回る広く青々した庭をぐるりと見渡し、手を振る無邪気に笑って返す。馬や鶏のいる小屋もあつという間に通過した。

汲みに来たばかりだろうか。周りが濡れており吊られた桶から滴る井戸が顔を出す。ここまで来ると終着駅も近い。ほどなくして、出発したときと同じ格好のまま、広大な敷地を見渡すデイクが見えてきた。

そろそろ、この孤児院巡りツアーも飽きるというもの。

「なかなか来ないね」

「ま、来ないなら来ないで良いんだがな」

ふうつと一息ついたシャニーは、ふくらはぎをポンポン叩きながらデイクに練り言を漏らす。

いくら涼しい素材で出来ているとはいえ、足首まで覆う長袖の修道服で、炎天下をぶらぶらしていると干物になりそうだ。

日焼けが気にならないのだろうか。デイクは今日も上半身に何も着ないでのんびり見渡している。男の人を、こんなに涼しそうにできて羨ましいと思つたのはかつて無い。

「でもさ、また起きたんだよね、事件」

「ああ。今度もウラの人間らしい。どうにも引つかかるぜ」

アゴに手を添えて、デイクもあれこれ可能性を探るような仕草をしだした。

孤児院で泊まり込みの警備を始めて1週間。たったそれだけの間に、また犠牲者が出た。何の目撃情報も残さず、これでもう3人目。まるで嘲笑うかのような完全犯罪に、どうしても焦りが募つてしまふ。

孤児院で獲物が来るのを待つのでは、いつになるか分からない。その間にまた犠牲者が出るかもしれないのに。

「ちよつと天馬であたりを——」

やはり徒歩では限界がある。シャニーが厩舎へ体の向きを変えた

途端だった。グイツと後ろから肩を引つ張り戻された。

「警戒心を煽るような真似はよせ。今は待つんだ」

感情で戦場に立つな——見習い時代からデイークに言われ続けてきたことだ。今水面を荒立たせ濁らせてしまえば、真相は何も見えなくなってしまう。悔しさと焦れる心をグツと噛み砕いて厩舎に背を向ける。

まさに、そのときだった。

（——ッ、何？）

ふいに“流れ”を乱す何かハツと空を見上げてみると、しばらくしないうちに紺碧の空に浮かびだしたのは白い点。

とんでもないスピード……それが天馬だと分かるまであつという間だった。

（あれは……?!）

目がまん丸になったのはそれだけではない。翼の間から見え隠れする、空に目立つオレンジの髪。あれは……間違いない。

「あら？　あらあらあら〜？」

ショートボブの女が、見えすいた挑発を込めたせせら笑いを浮かべてどんどん大きくなる。

大げさにマントをはためかせながら彼女は天馬を飛び降り、絡みつくようなニヤニヤを浴びせてきた。

「天馬騎士のくせに天馬にも乗らないで、何？　そのカツコウ。ボクの知らないうちに騎士を辞めたのかな？　シヤニーさん？」

「あ、あんたは……！」

よりにもよってコイツだとは。

他の人間なら、この格好修道服を弄られても恥ずかしいだけでも、コイツとなると話は別だ。

まじまじと舐めまわすように眺める眼差しは侮蔑に塗れていて、気づけば身構えていた。

「年下、あまつさえ下級部隊にあんた呼ばわりされる筋合いは無いんだだけど？」

招かれざる客……——天馬騎士団 第五部隊長マリツサは、腰に手

を当てて不満そうに見下ろしてくる。

「何の用ですか？　こんなところまで」

無数の「なぜ」で、ただただ神経を掻きむしられるばかり。

マリツサがどうしてリキアにいるのだろうか？　リキアはアルマが率いる第二部隊の管轄で、彼女を差し置いて営業できる胆力があるとは思えない。てつきり、アルマが会いに来てくれたのかと最初は思っただけだ。

それに何より、マリツサがどうしてここに来たのか、まるで見当がつかない。

「イドゥヴァ団長から特命を受けてね。でもなきやリキアくんだりまで来ないよ」

イドゥヴァから仕事をもらったのがよほど嬉しいのか、よくぞ聞いたと言わんばかりの喜々とした声が耳に障る。

アルマでなくマリツサを起用する不可解さが引つかかるが、別にどうでもいいことだ。「流れ」を乱す彼女のせせら笑いからするに、どうせろくでも無いことに決まっている。

「ついでにキミの様子も見てくるように言われてるんだよ。予想どおり油売ってるみたいだね」

聞いてもいないのに、ペラペラと疑問に答えてくれた。

予想どおりはこちらのセリフ。やはりろくでもない話だった。半ば追放のように扱っておきながら、監視を差し向けるとは随分と心配なようだ。

そんなに気にかけてくれるなら伝えておくべきだろう——順調だと。

「あたしは今、ロイ副盟主付きの騎士として、リキア同盟から受けた依頼に対応しているんです」

あからさまに、ピクリとマリツサの眉が歪んだ。

状況が分かったのならさっさと行って欲しいのだが、マリツサは動こうとしない。どうやら場所を変えるしかなさそうで、仕方なくデイクの手を引く。

「忙しいんで用がないなら失礼するよ」

「十八部隊から忙しいなんて言葉が出るとは驚きだよ。いったいどんな色仕掛けでロイ様を籠絡したのかな？」

待っていたかのようにだった。

背を向けて無理やり視界から消したはずが、腐食した言葉の槍で貫かれ、気づけばマリツサと眈をかち合わせていた。

「こつ、このー！」

「もしかして、夜の営業にも精出してたりすんの？ いやー、16の子が大変だね」

「ふぎけないで！ ロイ様はそんな人じゃないツ!!」

売り言葉に買い言葉でジリジリとマリツサににじり寄る。

イリアでもどんな噂を流しているか分かったものではないが、ロイに関わるものだけは、軽々しく口にされたくない。グラグラ噴き上がるマグマを抑えられなくなって、少しずつ溢れて飛び散りはじめる。「だったら、どんな『真つ当な』依頼をされたのさ？」

「ここら辺で——?! ～～～ツ！」

抜刀すれば鋒が届く距離まで近づき、そこまで口走った途端だった。背後からガツシリと肩を掴まれて引き戻されると、そのまま口を栓された。

「わりいが守秘義務がある。ノーコメントだぜ」

けんもほろろに突き返す、デイークのドライな声に揺さぶられてハッと我に帰る。

また叱られてしまったようなもの。本来なら、自分が毅然と対処すべきはずが、糸を巻き上げるようにまんまとあれこれ情報を引っ張り出されるところだった。

「部外者は引っ込んでくれるかな？ これはボクたち天馬騎士団の問題だ」

「アーハイ、ソウだな。だ、そうだが？ シヤニー」

ニンジンを鼻先に吊り下げられたじゃや馬を抑え込んだデイークは、塞いでいたシヤニーの口から手を離した。

「喋ることは何もないよ。今のあたしはフェレ侯爵付きで、リキア同盟配下の騎士。天馬騎士団こそ部外者でしょ？ 引っ込んでよ」

普段なら、敵対勢力に雇われでもしない限り情報共有も仕事の一つだ。もちろん、騎士団に所属していれば……の話となる。今は形の上ではロイから直接叙任を受けた扱いの身であり、騎士団に報告すれば、すなわち機密のリークを意味する。

意趣返しに同じ言葉を投げつけてやったら、あからさまにマリッサは苛立ちを目元に滲ませて、しばらく何も言わなかった。

ようやく黙らせられたと思ったのも束の間、彼女は「……ふうん？」と見下すように言っつて、ひきつった笑みを浮かべながらよく分からないことを続けてきた。

「デカく出たもんだね？ 団長に頭が上がらないくせに」

「何のこと？」

「聞いたよ？ 土下座したんだって？ 部隊を守るために？ 泣けるねえ」

頭の中を蒼く昏い記憶が走る。黎い部屋に浮かんだイドウヴァのほくそ笑む顔を思い出ただけで、ビリツと体に電撃が突き抜けた。

なぜマリッサが知っているのか。月光の団長室でイドウヴァの前にひれ伏した、あの屈辱の光景を。

「へッ。大事なもののためなら土下座なんて安いもんだよ」

噴き上がる黒い怒りをグツと飲み込んで、自身に言い聞かせながら笑い飛ばして見せた。プライドと、部隊を守ろうと動いてくれた人たちの想い。どちらが大事かなど、考えるまでもない。

それなのに、何がおかしいのだろう。マリッサは天を向き、大口を開けてバカ笑いし始めたではないか。

「ははッ、あの人に娘が頭を下げたなんて、お母さん泣いてるだろうね」

こんな鼻持ちならない人間に母を語られると、ゾワゾワと虫唾が走り耳を覆いたくなる。

しかしそれ以上に、胸に悶々と渦巻いたのは出口のない疑問だった。

「?? いったい何を言ってるんですか？ どういうこと??」

この女が、母の何を知っていると言うのだろうか。

だいたい、イドウヴァに頭を下げることに母にどんな関係があるのか、サツパリ見えてこない。

そんな様子を楽しむかのように、マリツサは大笑いしている。

「あ、ようやく稼げるようになって喜んでるか、ハハハ！」

(人の家族のことにずけずけと……ッ)

センシティブな部分へ無神経に土足で踏み込んでこられては、もうこれ以上辛抱ならない。かと言って手を出せば、ロイたちに迷惑をかけることになる。

ただ、ギリギリ奥歯で噛み砕いていたときだ。視界の端でデイークが大剣を担ぐのが見えた。

「話は後だ。どうやらお客さんのようだぜ」

彼の視線を追ってみて、思わず目が飛び出しかけた。

いつの間にか、知らない男が至近距離にいるではないか。マリツサに気を取られていたとはいえ、侵入を許し、乱れたはずの『流れ』にさえ気づけないとは。

「ビュー、軽く食いもんでもご馳走してもらおうと思ったら、ウマそんなシスターを入荷してんじやねえか！」

あちこち擦り切れ、穴が空いたボロボロの服は黒ずんで見るからに不潔。しなやかさのない針金のような茶髪に、顔も無精ひげが汚らしい。にちやにちや値踏みするように笑う口元は歯が何本か無いし、鼻もできものがあるのかぼこぼこ。

近寄られただけで残り香が鼻をつくこんな男、口走る野卑なセリフも含め、まともな人間でないのは間違いない。

「あなたも略奪団の人だね！」

目当てが食料であるし、身なりも手伝ってすぐにピンと来た。

相手は一人とは言え、腰から得物をぶら下げていて気は抜けない。多少錆が出て可哀そうな見た目をしていても、造り自体はかなり重厚な剣だ。

「俺たちは黒き稲妻って言うんだ。覚えてくれよ、お嬢ちゃん」

隠す様子もなく、男は絡みつき舐めまわすような猫なで声で呼んでくる。頭から足先までじろじろと下品な目で物色されるほど、弄られ

るように鳥肌が立つ。

「そんなことより、カワイイ顔してんなあ？ 遊ぼうぜ!!」

エサを前に待てない犬のように、男が一直線に向かってくる。

見開いた眼と荒い息遣い。舌なめずりでも始めそうな程でろんと緩んだ口元からは、今にも野卑の塊が垂れ落ちそうだ。

男が手先に触れた途端、劇薬を注がれたように全身へ悪寒が走り、パチツと目にスイツチが入った。

「触らないでー」

ありつただけで男を払いのけて、体中のバネを弾いた渾身の平手が空を裂く。

高い音があたりに響き、男はバランスを崩して顔を抑えながら後ろへよろめいた。横顔を隠す手の隙間から、赤い眼が光って貫いてくる。

「テメエ……男に手を上げたな!」

焼けた石が迫るような怒りをむき出しにしながら、それまでとは別人のごとく大声をあげた男が、ためらいなく剣を引き抜いた。

「ズタズタにしてから遊ぶのも悪くねえな!」

頭上に振りかざして威嚇する先には、鈍色の刀身が輝きを失って泣いているように見えた。抜刀の音から察したとおり、やはりかなりブレードの厚い剣だ。

(こいつ……略奪団……だよな?)

妙な“流れ”は感じないものの、どうにも違和感が絡む。

あれは……銀製か？ にしても、あの造りはどう見ても騎士剣だ。

「おおっと、きな臭いことになってきたね。ボクは失礼するよ」

一気に戦場と化して、緊張が走る庭園に背を向ける声はどうしてこ
うも楽しげなのか。

目の端で声の主を追えば、マリツサはとつくに天馬にまたがってお
り、そそくさと宙に飛び出していく。

「おいおい、一般市民が賊に得物向けられてんだぜ?」

「悪いけど、天馬や槍は消耗品だからね。契約が無いならボクラ傭兵
騎士には関係ないさ。それじゃー!」

デイークに声をかけられてもしれつとした顔で言っただけ、彼女はあつという間に北の空へと消えていく。

別に期待していないし、何よりいい方が面倒がなくて済むと言うもの。むしろ監視役ならいい方がマシだ。

「行くぜ嬢ちゃん！ 早く帰ってみんなで遊ぼうぜ！」

鎖の切れた獣が、雄叫びをあげて剣を振りあげながら一直線に飛び込んでくる。鈍い動きのわりに、攻めしか頭になさそうな前傾姿勢は、そのまま押し倒してやろうとでも考えているとしか見えない。

それでも、武器を振りあげて襲ってくる——条件は十分だ。

「隙だらけだッ」

「どわっ?!」

半身からの居合い一閃。

太陽さえ両断しそうな白刃に男の剣は真つ二つに弾け、ブレードだけが高い音を立てて吹き飛んでいく。

「ヒュウ」

「うん。なかなかの居合いだ。ようやく稽古の成果が出てきたかな？」

デイークの口笛だけでなく、満足そうな声が頭の中でしみじみしている中、もう一度霞に構えて男を観る。

「まだだよ、セチ。あいつ、まだヤル気みたい」

「稽古に付き合ってくれてるなんてイイ人だッ。連絡先聞きなよ！ いやあ、私の時代は声をかけても逃げ出す手合ばかりでガツカリしたもんだけど、捨てたもんじゃない世の中になったみたいだね」

セチのイイ人の基準はともかく、たしかに連絡先は吐かせたいところ。こんな身なりでふらふらやって来るくらいだ。潜伏場所はそう遠くないに違いない。

「こつ、この！ 女だからってもう容赦しねえぞ!!」

牙の折れた剣を放り捨てた男が、隠し持っていたナイフを震えるほどギリギリ握って飛び出しかけたときだった。

「照準ロック……クロスサンダー」

「っ?! ひいいい！」

威嚇で放ったレンの電撃魔法が男の足元を穿つ。

威嚇と言つてもなかなかレンも容赦なく、青々したふかふかの芝が一瞬で黒く抉れるほどで、男が腰を抜かしている。

すかさず太刀先を額へ向けてやると、彼は青い顔で口をぱくぱくさせているではないか。

「わ、悪かった。今日は退くから勘弁してくれ！」

先ほどまでの悪態はいったいどこへやら。

いや、それにしても疑念ばかり湧きあがる。直撃を喰らったわけでもあるまいし、あまりにも変わり様がいきなりすぎる。

そんなことなどお構いなしか。肩を押してシャニーを退かしたデイクは、男の正面に仁王立ちして凄みだした。

「二つ答える。ここら辺で殺しをやってんのはお前らか？」

「殺しだあ？ ヒイ?!」

「俺は便利屋をやってるもんでな？ お前らみたいな筋もんをうたわせるのは慣れたもんだが、どうする？」

「そ、そんなの俺らに聞かか？ 金になるならやるに決まってるんだろ！ し、信じてくれよ！」

シャニーは思わず仲間たちと顔を見合わせてしまった。

言葉にできない哀れみ……と言うより、もはやどちらが「筋もん」か分からない光景に啞然とするばかり。ただでさえ、顔に傷を持つ文字通りの筋ものなのに。

逃げ腰の男に向かって大剣を担ぐ、筋肉ムキムキの日焼けしたコワモテ。知らない人が見たら、十中八九デイクを指差すに決まっている。

「……シャニー、そいつを解放してやれ」

ところが、デイクはそれ以上搾るわけでもなく、それどころか、もう視線さえ外して思いもよらないことを口にした。

「え?! で、でも」

「略奪団を追い払うのが仕事だろ？ こいつは白だ」

要領を得ないまま太刀を納めて一步退く。

男はデイクから突き出された紙に何か書くと、ろれつも回らない

悲鳴をあげつつ脱兎のごとく背を向けた。肩をあちこちぶつけながら脇目も振らず孤児院を飛び出していく姿は、本場の筋ものから逃げる半グレにしか見えない。

「ディークさん、略奪団だよ？ 白ってどういうこと？」

馬の嘶きと共に一目散に逃げていく、略奪団の男の背中を見つめるほどに腹落ちしない。

困惑をディークに向けると、彼は腕組みしながら「だからこそ、だ」そう言っただけ。

「奴らは略奪団だ。金にもならねえウラの人間をやるのはピンとこねえ」

シヤニーもすつと頷いた。

事前に予想がついていたものの、あらためて確信が持てた形だ。

あの男は、金になるならと言っていた。わざわざ稼ぎにならない相手を立て続けに狙うのはありえない。誰かに仕込まれでもしない限り。

「なにより、ヤツも得物は剣だったし練度は高くねえ。やられた人間がどうやられてたか考えてみる」

「高度の魔法で一撃……。たしかに、ぜんぜん違うね」

オスティアに安置されていた被害者は、その全てに魔法による攻撃痕があった。

ただの魔法ではない。真つ黒を超えて白い灰になるほど焼け焦げた被害者は、誰もが防御した痕跡すら無いのだ。背筋にぞくつと悪寒が走るくらいのも、まさに悪魔の仕業と言ってもいいだろう。

「孤児院に来ているのが烏合の衆だとしても、上位の連中がそこらへんをうろつくウラの人間にちよっかいを出すとは思えん」

「んー。じゃあ、変死事件の犯人は略奪団じゃないかもか」

「ああ。もう少し調べる必要があるな」

ディークと答え合わせすればするほど、諦めをつけるしかないようだ。

そこらの使い手とは到底思えないし、金目当てとも違うだろう。それにしても、容赦なさが度を過ぎているのではないか？ あんな、誰

かも分からないほど黒焦げにしてしまつては、仕事の証明ができないはずだ。

(丸1週間と、新たな3人の犠牲者……。ごめん)

ギリつとやり場のない怒りを噛み砕いていると、デイークのため息混じりな声が聞こえてきた。

「それにしても……。天馬騎士団も大概なんだな」

ざくりと心を刺されたような気分で、何も返せず言葉に詰まった。ずっと憧れ、姉たちが守ってきたものが汚されてしまった気がする。

シャニーは爪が刺さりそうなほど拳を握り、悶々する気持ちを深呼吸と一緒に吐き出した。

「ごめんねデイークさん。ヘンなもの見せちゃつて」

「あーヤダヤダ。ドロドロした嫉妬やら妬み。約束事に忠実で、信用第一クリーンな騎士団が聞いて呆れるぜ」

「あいつが特殊なだけだよ。みんないい人だよ」

第三者から見たら、アレが天馬騎士団になってしまうのだろうか。全力で否定したいはずなのに、横たわっているのはあまりにも利己的な体制。見習いときは見えなかったそれは、シャニーにとっては今でも信じられないものだった。

そうは言つても、国のために必死に戦っている人たちまで悪く思われるのはあんまりではないか。あんなヤツらのせいだ。

「おまえみたいな奴でも嫉妬されるもんなんだな」

「ええと、どういう意味ですか？ デイークさん？」

ところが、デイークの興味はぜんぜん違う場所にあるらしい。おまけに含みのある笑みを浮かべるものだから、シャニーもニコニコしながら噛みついた。

痕がつきそうなくらい、ガツシリと腕を掴んで離さないシャニーの前に、デイークの顔から表情が消える。

「でも、わざわざあんなこと言いに来なくなつていいのにさ。ムカツクー」

デイークをやつつけても、ますますマリツサへの怒りが湧きあがるだけ。

尖った口でガトリングのように不満を吐き出したシャニーは、足元の小石にむしゃくしゃをぶつけるも空振り。

ピキツと来て、次は足が天を向くほど蹴り直す。

「このっ！ ってわわわ?!」

今度は足元が芝で滑つたらしい。視界が宙を転がって、ドシンとお尻から激震が走った。

「……アホか、おまえは」

「——つてててえく……。んもう！ そんな顔で見ないでよ！」

デイークはクスリともせず、心配さえしないで冷ややかな目で見下ろすばかり。

楽しみ終えたか、デイークがようやくやく差し出した手を取って立ち上がる。彼はひとつ鼻で笑った。

「奴さんも悔しいんだろ。左遷されてお先真つ暗のはずが、英雄ロイの下で勲章もらって、おまけにイチャイチャしてりゃな。ま、こんなアホに嫉妬するたあ大概だぜ」

「アホアホ言わない！ あたし達だつて頑張ってるもん！」

マリツサの言い方はとにかく気に入らない。

4月の絶望からどれだけ苦労したことか。それを棚ぼたみいに言ったり、あげく不道徳呼ばわりとは。そんなこと、一度だつてないのに。それどころか、最近は……。

(……何考えてるんだよ！ あたしは！)

両手で頬をピシツと叩き、マリツサが消えた空の向こうを睨む。

絶対にあの人たちには負けない。そう誓ってイリアを出てきた。今できるのは、目の前にある信頼に応えることだけだ。

「とりあえずさ、ルウくんに報告しに行こうよ」

「ああ。そうだな。あんだだけカマシを入れておけばしばらく来ねえだろ」

「その間に調査をガンガン進めちやおう！」

略奪団と接触できたおかげで、可能性は大きく絞れたはず。今後の作戦会議も兼ねて孤児院に戻ることにした。

その足が、ぴたりと止まる。

(マリッサ、何が言いたかったんだろう。……気になるな。何なんだろう)

いつしか、また北の空を見上げていた。

マリッサの歳からして、母と面識はないはずだ。なのに、どうしてあんな事を口走ったのだろう。

投げつけられた何故は、明かされないまま絡みつくばかりだった。

相棒はサイコキラー？

戦いを忘れさせてくれる、穏やかな静寂に心が洗われる。

木漏れ日が優しい院長室は、先ほどまでの緊張が嘘のよう。用意されたシナモンティを一口すれば、安らぎ自然に幸せな吐息が漏れる。孤児院に戻ったシャニーたちは、ルウに略奪団員と接触したことや、引き出せた情報を共有していた。

「略奪団から守ってくれてありがとう！」

「なあに、礼は要らねえぜ。契約主からたつぷり絞ってやるからよ」

弾む声で目を綻ばせるルウの澄んだ笑顔が、犠牲者を防げなかった1週間への罪悪感を癒してくれる。

そんな天使のような優しさと対峙しているのが、ホクホク顔で皮算用を始めるデイクとはギャップが激しい。無骨な手で滑るように計算器をいじる目元はほくそ笑むよう。舌なめずりする様は、とても動乱を鎮めた八英雄には見えない。

「デイクさん、また悪い人みたいな顔してる」

「あん？ 契約外のことしてんだ。当然だろ。おまえもいい加減、少しは銭勘定できねえと食っていけねえぜ。さすがに穴掘ってねえだろうな？」

「してないッ、してないから！」

「ハン……数字にからつきしなのは相変わらずのようだが？」

見習い時代から、よく同じように言って躰けられた記憶が蘇る。

戦場には銭が落ちている……デイクにそう言われたあの頃は、意味が分からず穴を掘って叱られたのも今なら笑い話だ。

あの教えを自分なりの流儀にアレンジしたからこそ、国力向上活動につながった。本当に、デイクに出会っていなかったら、今頃どんな騎士になつていたかゾツとする。

「あはは、みんなに言われるよ。部隊には数字に強いのもいるし、適材適所ってね？」

「適材適所ねえ……」

誰でも得手不得手はあるだろう。

特に妙なことを言った覚えはないのだが、デイクは言葉尻を捉えて含みのある目で見下ろしてくる。彼には見習い時代の黒歴史を、アレもコレも握られているぶん気が気でない。

「な、なによお？ その目……」

「ルシヤナが前衛、ミリアとレンが火力担当で。おまえは……ボケ担当か？」

「なあ?!」

「分かってないっスね、デイクのオジサン、もといお兄さんは。シャニーは大事な囷担当っスよ！」

「お前わざと間違えやがったな！」

いつも褒めてくれないデイクも酷いが、まさか部下ミリアに背中から刺されるとは。

どいつもこいつも、ずいぶんな扱いでリーダーをなんだと思ってるのだろう。さっきだって、略奪団を追い払ったのは自分なのに。

シャニーは腕で目元を覆って呻きだした。

「ううう……。いいもん、いいもん。もう後ろから槍投げてるもん……」

「そう拗ねるなって。ムードメーカーやらモチベーターやら、精神的な支柱ってのは、そうなれるもんじゃないぜ」

デイクには完全にバレている。さっぱりした口調で、彼はまるで心配する気もなさそうだ。チラツと腕の隙間から様子をうかがってみても、反応していたのはルウだけ。部下たちに至ってはクスクスやっているではないか。

（ちえっ。でも、精神的支柱かあ。……カツコいいヒビキじゃん）
案外、悪くないかもしれない。

とりあえずゴシゴシ目元を拭い、こほんと咳払いして場を戻す。

「と、とにかく安心してよ。もうきつと来ないよ」

「あいつには二度と近づかないと誓約書も書かせた。しばらく大丈夫だろ」

「えっ?! いつ書かせたの？ デイクさん？」

「やれやれ、これだから素人は。ま、騎士の範疇じゃねえか」

略奪団員が逃げようとしたどさくさに、デイクがあつた男に書かせたのが誓約書だったとは。どこまでも抜かりのない仕事には舌を巻くばかり。破つたときの脅し内容までは真似られそうにないが。

傭兵をやめても、かなりグレーな世界にいるのはやはり間違いないく、どうしても身を案じてしまう。

それでも、今はそれ以上詮索している暇はなさそうだ。

「ありがとう。ぼくも何かお礼をしなくちゃね！ えーと……」

この部屋唯一の良心とも言えるルウが、みんなの手をとってまわりながら目をキラキラさせている。

その気持ちは、頑張つて良かったと思わせてくれるけれど、細々と運営している孤児院に余裕があるとは思えない。なにより、リキア同盟からの依頼でルウが対応するのは筋が違う。

思わずデイクのズボンに手を伸ばす。

「お前は気にすんな。っても、気が済まなさそうだな」

心配は無用だった。

どんなに見た目は怖くても、流儀を通す師匠の横顔は、いつまでも見ていたいと思わせてくれる優しさがある。

それでも、デイクの言うとおりルウの顔に納得はない。依頼人の気持ちが無下にするのも、どこか違うのではないか。

(……おつ、おつ！ よおし、これで行ってみよう！)

しばらく考えを巡らせていたシャニーは、頭に走った名案に反射的に指を弾いた。

「ねえルウくん、良ければ魔法教室をうちの部隊の子に見せてあげてもらえない？」

「喜んで！ お姉さんも見ていく？」

(げっ?! そ、そう来たかあゝゝ。ベンキョー……うっ……)

一瞬でも、自分は発想の天才と思つたのが恥ずかしいくらい、まさかの返しに言葉が詰まった。ルウの性格からしたら、ちよつと考えれば予想できたはずが、二手先など頭にあるはずもない。

とは言うものの、無下に断るわけにも行かないし、ルウの純粋な瞳が今は痛い。

「あつ、あたしはちよつと……見回りを強化しないといけないからいいや」

今さら机に座って勉強なんかパスしたいのがホンネ。おまけに「センスない」認定を受けているから余計に腰が重い。

うまく断れたと思ったが、その認定を下した張本人には考えが筒抜けなのを忘れていた。いいネタと言わんばかりに、すぐにケラケラした声が頭の中から聞こえてきた。

「子供と一緒に初歩からやれば、ファイアーなら何とかなるんじゃない？ 射程5センチくらいかな？」

いつも分かっているいちいち煽つて来るから性質が悪い。そのうえ今日は輪をかけて的確で、頭を投槍が貫通したようにぐわんぐわんする。

セチは学問所に通っていた時代も見ていたというのだろうか。当時も魔道の授業でファイアーの実技があったが、まさに5センチくらいで消えたのは覚えている。

構うとドツボに嵌るのは目に見えている。さつさと話を切つてしまおうとしても、セチもなかなか離してくれない。毒のある笑みを浮かべた目でセチがニヤツとすればするほど、シャニーの口元がどんどん引きつっていく。

「うっ、ウルサイな！ 魔法なんか使えなくなつて生きていけるからいいの！」

「そんな拗ねなくてもいいじゃないか。私の化身である以上、キミ自身が魔法の塊みたいなもんなんだし」

「む……」

でも、セチが口にした言葉を再生してみると、飛び出しかけていたやけっぱち第二弾が引つ込んだ。

「そ、そういう言い方もできるよね」

存在自体が魔法なんて、魔導書なんかよりずっとカッコイイ。たまにはセチもいいことを言うものだ。

まんざらでもないシャニーにセチが呆れていると、ふいにディークが歩き出しドアに手をかけた。

「こいつはまだ仕事が残ってるんでな。ボサつとしてねえで行くぞ、シヤニー」

「えっ?! あ、待ってよー!」

有無も言わせない感じの背中からは、返事を待つこともなく出ていってしまった。

魔法教室をパスするのにアシストしてくれたのかと思ったが、それにしては歩調が早い。小走りで追いつくころには、デイークはもう外に出てしまっており、前を塞いで無理やり止める。

「もう、仕事つてなに? あたしには待たせてるイチジクのケーキと再会する大事な仕事があるんだけど!」

「あん? どこから焼き菓子を入れたかは聞かんとして。あんな雑魚ひとりじゃまだ動き足らねえだろ? 稽古だ稽古」

稽古の二文字を重しのようにずしんと放り込まれて、甘くふわふわだった心がペしゃんこになった。

こんなの奇襲ではないではないか。うげつと口元が歪んで、言葉にならない声まで漏れてしまうほどの喪失感を誰も理解できまい。

おまけに、内から突いてくる今にも鼻歌を歌いだしそうにご機嫌な声が、重しを揺さぶってきて千切れそう。

「そうだよ、相棒。まだまだ極みと程遠いんだから、寝る間を惜しんで稽古しないと。魔法も使えないんだし?」

人の痛いところをグサグサと。

稽古稽古と、日がな一日囁かれ続ける気持ちを、半分デイークにお裾分けしてやりたいくらいだ。

そんな相棒のぼやきなどどこ吹く風で、セチはまた何か思いついたらしい。「あつ、そうだ」と、ぽんと両手を合わせて見せた爽やかさに、嫌な予感ばかり湧きあがる。

「私が認めるまでケーキ禁止にしようか! そしたら、キミも死ぬ気になるよね?」

「そうになったら死ぬ気じゃなくて死ぬよ! 絶対死ぬ。生きれないツ! あああ……世界は絶望に包まれたのだあ!」

「軟弱だなあ。いつペン死んでみるのも悪くないかもよ?」

(こっつ、殺される……！)

罪悪感の欠片もない、透き通るようなセチの笑顔が悪魔に見えて仕方ない。ここまで無邪気が残酷で、恐怖を覚えたことがあっただろうか。

このままケーキを食べずに死んでなるものか。

「デイークさん、はやく構えて」

「おっ、やる気じゃねえか。ちよつと待て——」

「はやく！ 世界の平和のために！」

「……？ おっ、おう？」

お尻を叩いても、牛のようにのんびり準備を続けるデイークの手を取って引つ張っていく。

そのまま庭園端に流れ着き、広い芝生で剣を打ち合いながら彼と情報整理が始まった。

「しっかし、そこまで期待してたわけじゃねえにしろ、これでふりだしってわけだな」

これと言った策がないのは、いつもの勢いが消えたデイークの口調から伝わってくる。

成果がないとは言わないが、1週間かけた仕込みの結果としては空振りと言ってもいい。白とグレーではまるで意味が違うとはいえ、唯一の手がかりだった略奪団が白では、この先どうすればいいのやら。「デイークさんの予想が当たっちゃったね。スゴイ！ ……なんて言ってられないけどさ」

「まあな。あれほどの魔法を扱えるのに略奪団なんぞ、どうにも妙だ」「たしかに……あんな魔法の傷跡見たことない」

何度思い出しても、ゾワツと悪寒が走り息が詰まる。すべてを灰と化す魔法痕に、慈悲など欠片もなかった。あんな魔法、直撃せずとも、いや避けたとしても無事でおれるか分からない。高位の雷撃魔法の場合、着弾点から津波のように側撃雷が走るのは、動乱でリキア同盟主が見せたサンダーストームで思い知っている。

「……ッ。ヤダヤダ、考えるのよそつと……」

ふと、自分に降り注ぐ光景が脳裏に浮かんでしまい腰が抜けかけ

た。

「ハン……？ 『天馬騎士だから魔法はへーき』じゃなかったのか？ いぎとなったら盾、頼むぜ？」

「てっ、程度つてもんがあるでしょ！ 程度つてもんがつ」

デイクには考えが筒抜けか、他人事のように笑っているが冗談でない話だ。

かつて八英雄が竜との戦いで手にとった『神将器』と呼ばれる聖遺物。そのひとつである業火フォルブレイズの焰を扱うほどで、稀代の魔術師と名高いリリーナでさえ、あんな敵が灰になるような魔力は見せなかった。

おそらく必要以上は抑えていたに違いないが、いずれにしてもそれを超える魔力が牙をむくことになる。

デイクも分かかっていて言うから人が悪い。彼は「……ま。たしかに……な」とつぶやき、大剣を地に突き刺して腕組みを始めた。

「魔法は詳しくねえが、お偉い方のとこに収まるには事欠かねえはずだ」

デイクの言うとおり、そんな異次元の魔力の持ち主がふらふらしていること自体がそもそも謎だ。おまけに、こんなドが付くほどの田舎で。

くわえて、わざわざウラの人間ばかりを狙うあたり金目当てでもないとなると……。

両頬に手を添えて可能性をあれこれ考えてみたが、結局思い浮かぶ犯人像はひとつしか無かった。

「つてことは、他に目的があるんじゃないやなくて、それ自体が目的つてこと？」

「その線が強いだろう。それだと謎が増えるがな」

「うん……。誰がもだし、なんでここで……だよな」

世界の著名人には魔法使いが多い。それだけ魔法は貴重な存在ということ。魔法使いというだけでも食いぶちには困らないところ、強力な使い手なら引く手あまたのはず。なのに、こんなへんぴな場所ですれを目的にする。

誰かに仕えていて、指示を受けての行動にしても目的がサツパリ掴

めない。ならば、もし単独犯だったとすれば、その目的は……。

「ああ。殺しがしてえなら、獲物も、観衆も少ねえこんな街道のはずれでコソコソやらねえはずだ」

消去法的に行き着いてはいたものの、あらためてデイクに言われると犯人像を想像したくもない。

孤児院を狙わないあたり、それなり練度のある敵をねじ伏せて悦に浸るような人間か。そんな値踏みするような狂気が自分に向くと思うと震えがきた。

「うへ……そういう人の気がしれないよ」

「イカれたサイコ野郎ってのはそういうもんだ。あれ見たら、分かるだろ」

詰めていくほどに、とんでもない相手を追っていることに気づいていく。別に犯人を前にしたわけでもないのに、心臓がバクバクして止まらないのだ。

犯人はただ惨殺しただけではない。現場は野外にもかかわらず、犯人が用意したと思われるベッドに誰もが寝かされていたのだ。極めつきは、そのうちのひとりや二人は花で飾られていたのである。そんな狂人が存在するのは恐怖だし、犯行を止めるにも、行動がイカれすぎて作戦の立てようが無い。

「なんか、そのオジサンにデイスられたんだけど。気に入らないなあ」

そう言えば、信じられないくらい身近にいたのを思い出した。あまりに考えを読めない戦闘狂が。

頭の中から聞こえてくるセチの声は珍しく不満そうで、彼女は腕組みしながら眉をひそめて睨んでいる。

「えっと、セチは見せたい派……ってか、辻斬りとかしてたんじゃないよね?！」

人を見れば一言目は「暇つぶしできるかな?」だとか恐ろしいことを言う精霊だ。あのソルバーンをして常識が無いと言わしめる彼女なら、何をしても不思議ではないだろう。

今は絶対させないが、前の宿主の時代が無性に心配になってきた。

「えっ！　してもいいならするけど……」
「……………」

少しでも期待したのがバカだったかもしれない。さも当然のように返してくるセチの顔は、なんと嬉しそうなことだろう。

とんでもない精霊に取り憑かれてしまった現実には、今さらながら後悔と恐怖が湧きあがって体がカチコチになる。

それを待っていたようだった。してやったりの顔になったセチは、ケラケラ腹を抱えだしたではないか。

「はははッ、ジョーダンだよ？」

「冗談に聞こえないよ!!」

絶対に冗談ではなかった。

許可を乞うてきたときの目は爛々と輝いていたし、口元は今にも舌なめずりしそうなほど期待に上向いていた。

(もう過去を聞くのやめよっと……)

まさに伏魔殿に顔をつ突っ込むようなもの。付き合ったらガリガリ寿命が縮むだろうし、下手したらそっちの世界に引き込まれかねない。いや……もう、片足を突っ込んでいるのかもしれない。

「そこらの有象無象を斬ってもね。強い相手だからアガるってもんさ。そこるところ、オジサンにちゃんと言っというて欲しいかな」

「いや、それ、あたしがヤバい奴って思われるだけじゃん……」

「え？　キミは私だし、私はキミだし、一緒じゃないか」

なにか、ザクツと貫かれたようで、考えるより先に口から願望が飛び出していた。

「絶対違いますう！」

「じゃあ、私が言おうか？」

「絶対絶対ダメ！」

「ワガママだなあ」

最近、事あるごとに乗っ取ろうとするから気が抜けない。彼女が顕在化したら、それこそ世界ごとぶった斬りそうで、件の連続殺人犯どころではない。

そんな心配をよそに、セチはまたご機嫌に戻って笑っている。

「ま、でも観衆が多い方がいいってのはオジサン分かってるね。剣舞は見てもらってこそだよ」

「そんなところで共感しないで！」

「ねえ、相棒！ 今度闘技場とやらに連れてってよ！ 気になってるんだよね、好きにしている場所なんだろう?!」

「人の話を聞いてよね……はあ」

もう、どう返して良いか分からなくなってきた。同じイカれた感覚なら犯人の動きにもピンと来ているかと思っただが、どうにもセチのイカれ方はベクトルが違いそうだ。

とにかく、追っている犯人も、きつとこんな感じの話が通じない相手に違いない。おまけに底の知れない魔法使いとなると、少しでも鍛えなければ苦戦は必至だろう。ただでさえ、まだまだ未熟なのだ。

セチからドヤされながら、デイクと打ち合い稽古を続けていく。

「颯閃一刀流だったか？ いい剣だな」

しばらくして、突然デイクがそんなふうに出て笑うから面食らってしまった。

稽古中に笑みを見たことは無かったし、なにより、剣を褒められるなど、一度たりとも無いと断言できる。

「えへへっ、ありがとう。師匠たちが稽古稽古って朝から晩までうるさくてさー」

「ま、俺でもそうする」

「はは、経験者は語るってね……」

つつい苦勞が口について出たが、同情してくれないのは師父ゆえか。

見習い時代のスパルタが、嫌でも閃光のように頭を走る。進軍前の朝ぼらけも、更けゆく夜の帷の向こうでも。晴れの日も雨の日も、嬉しい日も悲しい日も、頭に包帯を巻いていたって。

振って、振って振って、振って振って振って振って、それでも振って……。

デイクに厳しく指導されながら、とにかく剣を振った。

戦場で活躍しても、流儀に反した動きをしていれば容赦なく叱ら

れ、不貞腐れたり反抗したら、徹底的に剣で未熟を思い知らされる。そんな日々は、歯が擦り切れるかと思うくらい自分に腹が立つたし、夜空を見上げては星の数以上に涙を流したものだ。

でも、デイクを憎いと思ったことなど一度もない。

デイクに抱くのはむしろ感謝、そして憧れだけ。槍しか知らなかった「ガキ」に、つきつきりで剣を教えてくれたのだから。

「そういう星の下に生まれたと思って、諦めて精進することだ。おまえらしい剣とも言えるしな」

「あたしらしい?」

これ以上ないほどに、心地よく耳をくすぐる言葉。

シャニーをシャニーたらしめる唯一無二とすると誓い、騎士剣を握り変え退路を断って振ってきた。

それを、他でもないデイクに認めてもらえたと思うと、オステイアでもらった勲章以上のもっと大事なものを手に入れた気がして、真つ暗な道に突然陽が差したよう。

「人を斬るより、人を守るいい剣だ。敵の攻撃を流星の閃きのごとくかわし、あるいは旋風のように弾き、迫る逆境を払う颯の剣……つてな」

「そう言ってもらえるとなんかテレちゃうよ」

今日のデイクはなんだか変だ。こんなに褒められると気味が悪い……けれど、やっぱり嬉しい。

なのに、心から喜ばなかった。そんな自分らしい剣を見つけたと言うのに。

「でも——」

「今は殺意で握っている……つてなところか?」

まだ何も喋っていないはずだ。

自分とはまるで違う声に乗って、言おうとしたことそのままが流れてきた。まるで、神が心をのぞいて囁いたように。

そんなわけがない。はっと顔を上げるとすぐ、腕組みするデイクとかちあった。厳しい師の目はまっすぐ見据えてくる。

「ど、どうして?」

無意識に駆け出していたらしく、気づいたらデイークの手を取っていた。

懇願から視線を逸らすように目を閉じた彼は、呆れるようなため息にも似た笑いを絡め、頭をボサボサやりながら白状するように切り出した。

「自覚ねえみたいだが、分かりやすいんだよ、おまえは。顔も、それ以上以太刀筋のキレや色がな」

「……はは……敵わないなあ。デイークさんは何でもお見通しか」

彼にだって何も話してはいない。

いやむしろ、去年から苦労してきたセチのことだって、デイークはほとんど知らないはずなのに。

嘘をついたり、ポーカーフェイスを貫いたり、そういう表裏の使い分けが苦手な自覚はある。でも、いくらデイークとは言えここまで見抜かれるとなると、周りにもきつと伝わってしまったに違いない。

「だいぶコントロールできるようにはなったけど、たまにあるんだよね。支配されちゃう時が。どうしても、団長のことを思い出すと……さ」

ふと、手のひらを見下ろす。この手に握ってきたのだ。民と希望を守る剣を。そして……逃れられない殺意を。

ソルバーンのはかつて同類と呼んだ。それを今、否定できない自分が悔しく、それ以上に恐ろしい。

「へへっ。変……だよな？」

ほんの、ほんのわずかな瞬間だけだったはずなのだ。鋒が届く距離までマリツサへにじり寄った、あの瞬間だけ。

それを見抜くデイークにはこれ以上隠しても無駄だ。いや、デイークだからこそ知って欲しかったし、聞いて欲しかった。

そして何より、どう思うか聞きたい。

ところが、デイークはふっと笑うと両手を広げだしたではないか。

「はっ、俺には分からねえな。金にもならねえ感情で剣を取ることはしねえからよ」

これが本物のプロというものののだろうか。

いや、それだけではない。ずっとずっと、口酸っぱく言われ続けてきたことを、言葉を変えただけに過ぎない。

「感情で戦場に立つな……だよ。うん、分かっている」

結局……何も成長できていないのだろうか。

民の為なのか、騎士の誓いや己の流儀に反していないか。必ず自問してから剣を抜くことを自らに課してきた。

でも、ぽっかり抜け落ちてしまうのだ。激情に心が熔かされ、ドロドロの飛沫を噴き上げると、まるで誰かに忘れさせられ、戒める自分を消されたように。

「おまえがどうしたいかだけだろう。憎しみをぶつけてスッキリしたいのか、それ以外か」

「そりゃ、イリアのために動いて欲しいし、あたしもそのための行動を取りたいって考えてるよ」

自分でも驚くくらい、デイクに食い気味なくらい即答していた。

(本当……なのかな)

憎いと思ったことが無いなんて嘘だ。事ある毎に怒りを噛み砕いてここまで来た。

最近ようやく、イドウヴァたちの顔を思い浮かべることが無くなっていったのに、まるで思い出させるようにマリッサが来た。その途端にこれだ。

やり返すなんて民は望んでいないだろうし、そんな事をしても何も解決しない。分かっている。分かっている。分かっていても釈然としないし、この怒りや憎しみをどこにぶつければ良いのだろう。自分の中に溜め込んでいけば、それで良いのだろうか。

もう、自分でもよく分からなくなってきた。

「ま、俺もおまえも聖人じゃねえんだ。感情にフタするのも良くないぜ」

またしてもデイクに感情を覗られてしまったようだ。

厚く、重く包まれた心に風穴を開ける彼の言葉は、あまりにも想定外で何度も首を振る。背中を押されようとも、誰かが許してくれよう

とも、絶対に踏み込んではならない修羅の道。

「?! そ、そんなの!」

「勘違いするな。おまえはもう解決法を知ってるだろうってだけだ。今も実践してるじゃねえか?」

ポンとシャニーの頭の上に手を乗せて、デイクはふつと笑って見せた。

分からないから相談しているのに……シャニーはそう思いかけたが、彼の言葉をもう一度心の中で唱えてみた。

そうだ、もう実践して、踏み入らないために戦っているではないか。皆の力を借りて、抱え込まずに。

「……そうだね。独りじゃないもんね。えへへ、ありがとう」

「分かったら構えろ。妙な気が起きなくなるまで付き合つてやる」

大剣を構えるデイクがなんと頼もしく見えるのだろう。

悩み塞がるとき、正面から受け止めて一緒に前を向いてくれる。ただ優しくしてくれるわけでも、腫れ物を触るようになるでもなく、包みながらも厳しさを忘れず向き合ってくれる。

一人前に自分はなったかもしれない。それでも、いつまで経ってもデイクはもつともつと大きな師父だった。

「はい! シンヨー!」

「気味わりいっつの、やめろ」

相変わらずそうは呼ばせてくれないが、止めるつもりはない。

再び黙々と剣を打ち合い、技だけでなく心を研ぎ澄ませていく。

相手の剣は変えられない——もう一人の師匠の教えが心に響く。そうだ、彼らが何と言おうとも、剣を握っているのは自分だ。この剣が誰の為か。ただそれだけを心に問い、ひたすら振って誓いと刻む。(それにしても、マリツサのあの言葉……)

それでも、どうしても“無”にはなれなかった。

困惑させて楽しんでいたに違いない。ひとり笑うマリツサの顔が、昏い頭の中に浮かぶ。

まるで毒針でも仕込まれたように、心が腫れあがってまるで集中できなかった。

地獄の真夏特訓

ギラギラの昼下がり。何回目かの孤児院巡りツアーを終えたシャニーが休憩室へと戻ってきた。

別世界の扉を開けたように部屋は薄暗い。カサカサに乾いた木のテーブルセットに肘を突き、足を組みながらコーヒーか何かを飲んでいるデイークがいた。

（た、助かった……）

焦点の定まらない虚な瞳は、ふらふらしながらデイークの元へと辿り着く。そのまま尻を椅子に放り出すように座ったシャニーは、加減も無くあごでテーブルを打ちつけてバウンドした。

憎い、憎い憎い憎い……。イリアではあんなに優しかったあいつが許せない。もう視界に入れただけで目が眩んで、ついに限界を超えた。

「へえあく……あぢいいいい……なんでリキアってこんな暑いのお」

頬をテーブルに吸いつけてみても、こういう時に限ってイリアのよくな冷たさはちつとも返ってこない。

開けっぱなしにしてきたドアの先に広がる、傾いた世界に目をやってみる。なんだか地面がモヤモヤして見える。あまりに暑くて、ついに頭がおかしくなってきたように思えた。

「なんだ、犬みたいに舌出しやがって」

呆れ声と共に上から降ってきたコップが、テーブルに吸い付く耳を起きると叩く。コップから伝わる熱と、立ち上る湯気越しに見える外のモヤモヤが混ざって、ますます頭が沸騰してきて眩暈がきた。

デイークは気遣ってくれたに違いないのは分かるものの、この灼熱地獄で出してくれたのがまさか熱々のコーヒーとは。

「暑くてもう死にそうだよお……。世界がモヤモヤして見えるんだ、ヤバイよね……」

「あん？ おまえがおかしいのは普通だから大丈夫だ」

「ひっどおい!! あああ……。怒ったらまた暑くなった……」

「元氣じゃねえか。モヤって見えるのも普通だ。安心しろ」

まるで心配の欠片すら見せてくれないのはあんまりではないか。気慰みに、出されたコーヒーを一口したのが間違いだった。そのまま嘔き出してきたように滲む玉の汗を拭う。

外の暑さは世界が終わるかのようで、フライパンを置いておけば勝手にステーキができるに違いない。

「冷たいスイーツ欲しいよ、デイクさん」

「てめえで買ってこい」

無惨にも即答だった。阿吽の呼吸というのは、時として取り付く島もないから困る。

でも、今は生きるか死ぬかの瀬戸際だ。今なら春を迎えた雪だるまの気持ち分かる。ウインクしながら猫撫で声でごろごろやって、リーサルウエポンで勝負に出る。

「外出たら溶けちゃうじゃん！ ねえ、お・ね・が・い？」

「チツ、じやりんこが科作ってんじやねえよ」

まるで珍獣でも見つけたように目を見張り、わざとらしい舌打ちを残してデイクは席を立つてしまった。

結構サービスしたつもりだったのに、まさかじやりんこ扱いとは。

（ちえっ。デイクさんったら、いつまでも子ども扱いして……）

不満を目から発射しても、返ってきたのはコーヒーをのんびり啜って満足げな声だけ。デイクの背中中は、平穏を取り戻したとでも言いたげで恨めしい。

「デイクさんはいいよ。上半身裸なんだもん」

筋肉が服なのかと思うくらい、デイクが上着を羽織っているなど見たことがない。

カジュアルスーツとか着こなしたら、かなりのイケオジなものもつたない。そう思ってきたが、リキアの夏を考えたら、何度服屋に誘ってもデイクが動かないのは分らないでもない。

「おまえももつと薄着にすればいいじゃねえか。ロイなら何も言わねえだろ」

ずいぶん簡単に言ってくれるもの。こう言うときは、どうしても男は気楽で羨ましい。

たしかにスリーブレスやらチューブトップとか選択肢はある。けれど、基本は軍服だし、ここでは修道服だから茹だっているわけだ。「ヒドイよデイクさんは。あたしの背中のこと知っててそんな言うなんて」

それだけではない。人には言えない、そう簡単に露出できない理由があるから困っているのに。それを真近で見たとはいえないデリカシーの無さだ。やはり、イケオジの称号は剥奪すべきだろうか。

おまけにデイクは悪びれることもなく、背を向けたまま適当を言い出したではないか。

「あー？ わり、んなのわ——」

「忘れたとか……言わせないんだからね？ 人の着替え覗いてコーフンしたくせにさ」

見習い時代の黒歴史でも最悪クラスを引つ張り出して、逃れられない罪を突きつけてやる。

途端だ。よほど焦ったのか、「ブフツ?!」とむせつたデイクが目を見つ赤にして振り返った。ここまで取り乱すとは珍しい。

「バカやろ！ ありや事故だろ！ つか、おまえが悲鳴を上げっから！」

どんなに取り繕ったところで無駄だ。

今でもあの衝撃、あの感触は昨日のことのようで、覚えていると言うより刻み付けられてしまっているのだ。背中傷を抜きにしても、責任を取る意味でも忘れようなど許すものか。

「うふふ、やっぱり忘れてないじゃん？」

「チイ、食えねえやつになったもんだな、おまえもよ」

少しはお灸になっただろうか。

デイクはまた窓の外へと視線を逸らして負け惜しみのように言っているが、褒め言葉だと受け取っておくとしよう。

それから間もなくだった。コーヒーを一口したデイクは何か聞いたのか、「ん？ なんだ？」と意外そうな声をあげて振り返った。

「つーことは、ロイは知らねえのか？」

「？ 言えるワケないじゃん」

事故で見られることになったデイクは別として、傷の事を知っているのは、日常的に一緒に着替えなり大衆浴場へ通ったりする部隊の仲間たちだけだ。

むしろロイに知らせようとか考えたことすらなかった。そんな話、わざわざ聞きたい話でもないだろうし、第一どうやって言えばいいのだろうか。セチのことだつて一言も喋っていないのに。

質問の意図が分からず眉が下がるシャニーに、デイクは横目で薄ら笑いを浮かべた。

「ハン……健全だねえ、おまえらも」

湧き上がる疑問で頭の中がパンパンに膨れ上がる。

経験上、デイクの怪しげな目にこの白々しい口調は、からかったり本心でなかったり、とにかくロクでもないことを言うときだ。

彼の言葉を一つずつ疑ってみる。……まるで引火するように頭に詰まった疑問が次々破裂して、脳天から真つ赤な火が一気に噴き出した。

「?! デイクさんのバカ!!」

「おっと、仕事だ仕事」

理性など吹き飛んで他聞も憚らず怒鳴ってしまふ。

それすらまるで読んでいたようだった。デイクはコップをテーブルに転がして足早に小屋を出ていく。

椅子を跳ね飛ばして弾けるように後を追うシャニーだったが、目に入ったのは転がり落ちかけるコップ。そちらへダイブしている間に、デイクの追撃が飛んできた。

「事になってからより先に言ったほうがいいんじゃないか?」

「大きなお世話だよ! サイアクツ! バカ! バカバカバカ! もう知らないッ!」

堪らず手にしたコップを投げかけて、すんでのところで理性が勝る。これだからオジサンだと言うのだ。

言うだけ言って逃げるなんて、地団駄踏むくらいでは到底収まるわけもない。コップにガツンと八つ当たりしたシャニーは細い肩を目いっぱい怒らせ、足を踏み鳴らしながら鼻息荒く外に出た。

周りを見渡すまでもない。デイークは出てすぐの場所にいた。こんなギンギンに暑いにもかかわらず、甲羅干しでもするようにのんびりしているではないか。

「なにさ、仕事とか言ってたクセに」

「知らないってんならついてくるなよ」

「あーっ、うまく撒けたとか思ったんでしょ！ そうはいくもんかい。目を合わせても、彼は面倒くさそうに口元を歪めるだけで素っ気ない。

相手を興奮させてそのまま煙に巻く。しばしば彼が使う手口だ。見習い時代は見る側だったものを、まさか使われる側に回るとは。

師匠の手の内などお見通しというもの。そう簡単に引つかかるものか。

「やれやれ、マジでお守りだな。ロイも自分の嫁候補くらい面倒みろってんだ」

のっそり立ち上がると、デイークは煙たそうにぶつぶつと愚痴をこぼし始めた。

なんだか腑に落ちずモヤモヤする。人のプライベートをまさぐって笑ったのは彼のくせに、まるで飼犬を預かったよううんざり顔をするとはひどい扱いだ。

「なによ、人を問題児みたいにな」

「……」

「黙るなあー！」

頬を膨らせて睨んでやっても、忙しいと言わんばかりにデイークは脇を抜け、せっせと武具の準備を始めたではないか。

「問題児じゃないなら口より体動かせ、ほらよっ」

「うおっ?!」

立ちはだかって止めようとする、待っていたようにどきつと資材を渡されて唸るハメになってしまった。

罨の材料……略奪団向けだろうか。ちよつとでもバランスを崩したらバラバラ行きそうで、フラフラついていく。

木陰まで運び、二人でせっせと罨作りに勤しむ。単純でも正確さを

要求される仕事はなかなか熱中できるもので、鼻歌が風に乗るまで時間はかからなかった。

「にしても、最近ずつとこっちにいるみたいだが良いのか？」

罨にワイヤーを通し終えて、達成感に額を拭って一息つくくと、それを待っていたようにデイークに呼ばれた。

「なにが？」

「ロイを放つといてに決まってるんだろ」

喉が締まって窒息するかと思うくらい時が止まる。あまりに予想外の場所を攻められて目が飛びだした。

（放っておくもなにも、そもそも会えないのにどうしろって言うのさ。というか……）

そこまで囁いた心に釘を刺す。

「だって……、ロイはリキア同盟の活動で忙しいからさ」

8月になってからというもの、ロイは城を留守にすることも多く、帰ってきてても日付けをまたぐ日々が続いているのだ。

シヤニーも連続殺人調査の特殊任務で孤児院へ泊まり込みが続き、最近は一目、一言さえ交わせていなかった。

「ロイが活躍したら嬉しいもん。あたしもロイに期待されて任されてるわけだし、がんばろってね」

今ごろロイはどこで何をしているのだろう。

リキア、ひいては世界のために粉骨砕身する彼が飛びまわって忙しいのは、フェレに来る前から手紙で分かっていたはずではないか。

何より、大好きな人が世界から称賛され高みに登っていく姿が、まるで自分のことのような幸福感に包んでくれるのだ。

会えなくとも互いに想いあっているし、目の前の仕事を成功させることこそが、今一番にできるロイの支え方……そう、心に決めていた。

「そうか。なら遠慮することねえな」

嫌な予感のする言葉を口にしたデイークは、立ち上がると辺りを見渡し始めた。

「晴れてるうちに野外特訓でもするか。罨の設置や回避、塹壕に森林戦に……」

ギョツと反応して、無意識のうちに体がディークと反対側を向いていた。途中まで聞いただけでも、息切れする自分がどつとのしかかってくるようで血の気が引いてくる。

ディークはムキムキだからいいが、ついていく側が地獄を見るのは、見習い時代にうんざりするほど思い知っている。腕の太さひとつとっても半分以下の細身に、同水準を要求するなんてムチャクチャではないか。

「はうあ。ディークさんの野外特訓はヤバい特訓にしか聞こえないんだよなあ」

「実戦で蒼くなるよりいいだろ。俺は先に行く。仲間も連れてきて準備しろ」

これは返答を間違えたに決まっている。何か一つ魔法を使えるなら、時間の巻き戻しと即に答えるだろう。

しかし、無情にもディークの背は少しずつ小さくなる。反論したところで、「体の細さで敵が加減してくれんのか?」と返されるまで経験済み。

動き出した時に引きずられるように、シャニーも重く歩きだした。



「も、もうムリ……立てない……」

一度蹴躓いたら、どう頑張っても足の感覚が遠くに行つたまま戻つてこなくなった。

動乱時代も傭兵団の中で真っ先に音をあげていたが、まさかここでも一番をキープすることになるとは。

「つたく、スタミナ不足は相変わらずかよ。だらしねえ、ほら立て!」
相変わらずはお互い様だ。ディークが眉を吊り上げながら、それだけで吹き飛びそうな威勢のいい声を張りあげている。

彼にどれだけ活を入れられても、上から下へとそのまま地面に吸い込まれていくようでもるで動けない。

「むりだよお。あゝ、誰かスイーツ補給くれる優しい人いないかなあ。そしたら立てそうなんだけどな〜」

「何をバカなことやってやがる! このっ、立ちやがれ!」

「うえ〜ん、む〜り〜！」

そのうち言葉だけで足りなくなったらしい。

ジリジリした顔で、デイクは足でシャニーの腰を横から押して転がし始めた。

ついに木にぶち当たり、シャニーはしがみついてダンゴムシのように動かなくなってしまった。

「チツ、一旦休憩だ。最後までついてきたら焼き菓子ぐらいおごつてやる」

ついにデイクが折れた。頭をボサボサやった彼は舌打ちを残して背を向ける。

それを待っていたように、ルシャナたちもへなへなとその場に座り込むが、代わりにシャキツとした声のはしやぎ回った。

「ヤッター！　じゃあ近くの町にあるケーキ屋さん行こうね！」

相変わらず腹で芝生に吸い付いたままだが、シャニーは顔だけあげて拳を突き出している。

まさに枯れ地で水を得た若葉のような回復ぶりに、デイクは最初こそ渋い顔だったものの、すぐに眉間にしわが寄り口がじりじりとへの字になった。

「……今でもヒイコラ言ってるのに天馬に乗ってくつもりかよ。つか、業務中にあちこち物色しに行ってるじゃねえ！」

「えへへ、情報を足で稼ぐのも大事かと！」

デイクが叱る時によく使うキメ台詞が、ここまでピタリと合う場面もあるまい。

天馬で上から見るだけでなく、降りて自分の足で確かめる……今回ケーキ屋を見つけたのも、見習い時代からの教えを守った賜物に他ならない。

それなのにデイクは目をつぶり、口角を不自然に吊り上げながらぎりぎり拳を握りだしたではないか。緊張が走り堪らず立ち上がる。

「頭いてえ……とにかく休憩な」

ところが、デイクは大きく息を吐き出すと額に手をやりながら歩いて行ってしまった。

何だか、すごく誤解されている気がする。哨戒中に立ち寄った村で、ちゃんと情報集めをする道すがら見つけただけでサボリでは断じてないのに。

小さくなるデイークの背中をむうつと眺めていたときだ。ふいに、後ろからミリアの声が突いてきた。

「あー、シャニーはイイツスねえ」

「なにが？」

「いろいろ必殺技があつて。ウチもガーつとなつて、ズシャーになるヤツ欲しいツス」

どうやらさっきの訓練中にひと通り使った剣技を指しているらしい。ミリアは興奮気味に話しながら、左右の拳をワンツーパーンチと突き出している。

「ミリア、表現力ゼロ。何を指してるのか、ぜんぜん分からない」

「う、うるさいな、レン。行間を読むっていうだろ？」

レンのストレートな突込みを跳ね飛ばすように、ミリアはまた素早くパンチを見せている。正直、シャニーもレンに同意だった。そんな流れの剣技は記憶にない。

そんなことなどお構いなしか。ミリアは何か閃いたらしく、弾いた指をそのままレンへと向ける。

「そうだ！ レン、ウチらも必殺技作ろう！ 火力担当としちや混錬

攻撃だけじゃ物足りないし」

「ん。アップデートは必要かもね」

「おつ、またカッコいいのを見せてくれるの？」

2人の得物の特長をうまくフュージョンさせた技は以前から見せてもらっている。

どれも太刀や槍で戦うのではまるで届かない範囲と威力で、今でも火力担当と誇れるくらい高みにいる。そこに更なる力が加わるとなれば、今度はどんな風に驚かされるのだろう。

ワクワクせずにはおれず、ミリアに視線を合わせたのが間違いだった。

「よおし、プロトタイプができたら手伝って欲しいツス！」

何でも二つ返事で応を返せる炎と風みたいな仲でも、この件ばかりは話が別だ。ノリノリで身を乗り出してくるミリアに、話に乗りかけていたシャニーはたじたじと距離をとった。

「あのう……。いちおー聞くけどさ、手伝うって」

「皆まで言わなくとも分かっているっすよ。これはシャニーにしか出来ないから張り切って欲しいっす」

案の定、そう言うことだった。毎度、毎度、そんなことに付き合わせるとは、人を一体なんだと思っているのだろう。

こう言う時は逃げたもの勝ち。さっさとお暇しようとしたその腕をがっしり掴まれた。

「ん。こんな生の情報を得られる実験台^{デスター}、他にいない」

血の気がサーッと引いていく。

いつもならミリアを止めるポジションにいるはずのレンまでもが、まさかこんなことを言うなんて。いつもはホツとさせてくれる微笑みが、今は魔女の冷笑に見えた。

「当たり前前みたいに言わないでよお！ 張り切つて的になる人なんかいるわけないじゃん!! ケーキ10個ぐらいオゴってもらわなきゃ割に合わないよ!!」

彼女たちは、弓や魔法を弾くセチの魔力をアテにしているに決まっている。万が一だつてあるし、セチが面白がつて何をしでかすかわからないのにムチャクチャだ。

縄抜けするようにレンから離れ、シャニーはお尻に火がついたように飛び出した。

「あ、逃げた」

「まあ、逃げる的なんて願ったり叶ったりなんすけどね」

ミリアがニンマリしていると、シャニーがピタリと止まった。

「ケーキってホールだからねっ、有名老舗^{デリス・アプリコ}の！」

それだけ注文を付けるとシャニーはまた走り出す。

その後ろ姿をぼかんと見ていたミリアはレンと顔を見合わせた後、取り出した財布の中を見てぽつりと漏らした。

「当たり前前みたいに言わないで欲しいっす……」

宣戦布告

もくもく雲が伸びる真つ青な空の下、孤児院には爽やかな風が吹き抜けていた。たとえ日差しが厳しくとも、これほど元気に風が吹いていると汗もすぐ乾いて過ごしやすい。

そんな心地よさも手伝ったのだろうか。はしゃぎ声を上げながら、1人の少年が部屋から飛び出してきた。彼は風を切って縁側の通路を駆けていく。

「待てーッ、コラー!!」

その直後、修道服姿の大きな子供が、怒声を上げながら部屋の扉を突き破ってきた。

全力で廊下を突っ走り、シャニーは曲がり角でさえ勢いを殺さず横滑りで抜けて加速する。反対から歩いてきたシスターを旋風に巻きこみながら、少年が作った風さえ掻っ切る勢いで追跡していく。

「はあ、はあ……。クツソー！ 何なのよ、あの逃げ足！ まさかあたしの上を行くヤツがいるなんて……」

それでも相手が上手だった。

忽然と消えた少年を、しばらくきよろきよろ見渡して探すも見つからず、シャニーは地団太を踏んだ。

動乱で慰問に訪れたときにもいた連中が、どうやら顔を覚えていたらしい。あのとき同様にイタズラを仕掛けられては、こうして追い掛け回している。

（ぐぬぬ〜！ ……ま、あたしはもう大人だし、今日はこのぐらいにしといてやろつと）

こんなところに独りでいてはまた狙われかねない。仲間の許へと戻るしかなさそうだ。

回廊を抜けて中庭に出ると、隅で座り込むミアとレンを見つけました。ちようど建物と聳える大きな木の影に彼らは座っており、周りにはたくさんの子供たちがいる。混じり気のないはしゃぎ声が駆け回り、離れていても楽しげに聞こえてくる。

「二人とも大人気だね」

正直、ミリアたちが羨ましい。

彼女たちは上手く子供を叱りながら遊んでいて、ワガママを言つて悪さをする子がないのだ。自分が言つたところで、口答えで済まずに挑発までされるシャニーにとつては、どうしてこうも違うのか不思議だった。

「なんだか、夢が叶つたみたいツス」

「夢？」

「ウチ、ホントは先生になりたかつたんスよ。こうやって囲まれてると、楽しいつていうか」

「へえ……ミリアが先生かあ」

ミリアから納得の答えが返ってきた。叱り方が上手なものも、きっと子供が好きゆえなのだろう。

それにしても、彼女の夢をこんな形で聞くことになるとは。何より意外だ。暇さえあればクロスボウをこれでもかと改造して、悦に浸っているような人間なのに。

「今でも目指してるの？ 先生」

「うーん……。あつ、今は天馬騎士が天職だと思つてるツスよ」

「天馬騎士というより、十八部隊ね」

レンの自然なフォローが、心に清々しい風を吹き入れてくれた。

リキアについてきてくれた皆の気持ちを疑うわけでは無いが、不安が無いと言えは嘘だ。部隊として、部隊長として、ちゃんと先陣切つてやれているのだろうか。

この部隊を天職だなんて、そんな不安に風穴を開けてもらえた気持ちだった。

「フフフ、十八部隊より素晴らしい部隊などないさ。世界ひろしと言えどね」

ついつい気持ちのままが口から出てしまった。

もちろん言葉に偽りは無い。イリアでも民に寄り添う唯一の機能としてどの部隊より飛びまわっていたし、このリキアでも勲章をもらえたのだから。

それでも、ミリアとレンは眉を下げながら顔を見合わせている。

「スイーツ以外でも壊れちゃった」

「マンガか何かに出てきたんスかね」

二人とも呆れたように苦笑いして全然乗ってきけてくれない。

木にもたれて本を読んでいたルシヤナからも、今にも何か言いだしそうな冷たい眼差しがジトつと飛んできたではないか。

堪らず彼らに背を向けたときだ。少年が居り、じつと見上げてくる彼と視線がぶつかった。

「なあに？ まさか、そんな弓でこのシヤニーを倒そうつて？」

少年の手には木の枝で作ったかわいらしい弓が握られていた。矢はもちろん無いものの、彼は毛糸で作った弦を引きながら目を眇めて狙いを定めてくる。

「はっはっは！ 受けて立とう！」

両手を腰にあてて強気な笑みを浮かべたシヤニーは、少年の指先を目で射る。

「見切った！」

今の動きならば、本物であつてもかわわしていただろう。

少年の指が動いた瞬間、全身のバネで跳ね飛んだ。シヤニーはおもちゃの弓を相手に、本気の動きで避け続ける。

最初こそ拍手していたミリアの顔には、すぐに困惑が浮かび始めた。

「ビュッ、ビュッっ！」

少年もむきになったのか、声をあげてどんどん弓を射って見せるものの、シヤニーの動きは激しさを増すばかり。

妖精が宙で弾けるような電光石火を前に、少年は息が上がったらしく弓を下した。

「ふふん、その程度でこの『妖精』を倒そうなど100年はやーい！」

全然当たってくれない……少年はそんな顔で口をあんぐりさせている。その前で勝ち誇った笑みを浮かべながら得意げにするシヤニーに、ミリアたちは呆然としていた。

「シヤニー……いじめちゃダメ」

「本気には本気で返さなくちゃね」

仕返しと言わんばかりに、背後で少年が何度も射るポーズをして見せて逃げて行ったことに、シャニーは気づいていないらしい。

妙に格好をつけるシャニーに、返す言葉に困ったのかレンは眉をひそめている。

「大人気ないのはいやだねー」

ルシヤナまでもが嫌味を言い出し、いつの間にか蔑視に囲まれていた。

とんでもない誤解と言わざるを得ない。みんなは知らないだけなのだ。ここにいる子供たちの真の姿を。見習い時代はやられるばかりだったが、今回はそうはいくものか。

「この孤児院の子たちはなかなか手強いからね。手を抜いたら失礼つてもんさ」

口での挑発やスカートめくりなど生ぬるい方で、落とす穴やら寝込みを狙った落書きにと、とにかく枚挙にいとまが無いくらい凶悪なのだ。

隙を見せればこちらがやられる。そんな世界にいるはずなのに、「失礼ねえ……」とルシヤナの目つきはさらに怪訝そうに細くなった。

「おおかた、またオモチャにされてたんだろ？」

ズキンと頭が揺さぶられて時が止まった。

もう言い当てたつもりらしく、ルシヤナは素っ気なく視線を本に戻してしまっている。ミリアたちまでもが「またか」と、今にも言い出しそうな苦笑いを浮かべるものだから、頭より先に口が動いていた。

「オモチャなんてそんな！ チカンの追跡だよ！」

「やつぱり……」

待っていたようなルシヤナの一撃を浴びて、前からも後ろからも飛んでくる呆れた視線に宙づり状態。

振り向けば、本の隙間から刺してくるルシヤナの視線はあからさまにももの言いたげだ。それだけで済まず、彼女は口元に含み笑いを浮かべだしたではないか。

こう毎日、毎日、子供から仲間から弄繰り回されたのでは、桃のハートがズタズタになってしまう。

「な、なによ、その顔お！」

「あんた、隙だらけだから狙いやすいだろうね」

「そんなこと——」

反射的に言い返した途端だった。

なにか、こう、お尻がスーツとするような気がする。

油が切れたようにゴチゴチする目で背後を一瞥すると、あつてはならないものが見えた。白く、長いひらひらするもの……頭にジュワツと血が上る。

風になびく修道服の後ろでは、さつき逃がした少年が白い歯を見せ
てニヤついていた。

上った血が火花のように弾けて、頭のとっぺんが吹き飛んだ。

「あいつうー!!」

今度という今度は逃がしてなるものか。このままでは部隊長の立
場だけでなく、騎士としての威厳に係わる。

怒声をあげながら、シャニーは風を切り裂いて駆けていく。

もう少しで捕まえられそうなところまで追いつめては、嘲笑うよう
に上手く地形を使って逃げられて地団太を踏む。

そんなシャニーと少年を眺め、ミリアはのんびり両手を挙げて伸び
を始めた。

「うーん、やっぱり子供はイイツスねえ」

「ね。しばらくここでお仕事してもいいかも」

イリアとはまるで別世界に転生でもしたような平穏が場を包んで
いる。

ずつとここで生きてきたような懐かしさと、受け止めてくれる優し
さや子供たちの明るさが、いつまでもこの場に居たいと思わせてくれ
るのだ。

温かく穏やかな雰囲気に入るミリアとレンの前を、烈風が吹き抜け
て止まった。

「あたしはムリ……」

早くも息切れを起こし、ぜえはあとシャニーは膝に手を突いた。

なぜ自分ばかりが狙われるのかまるで分からない。このままでは、

何の仕事をしているのか分からないくらい。

それでも、子供のスタミナは無尽蔵だ。休む間も無くまたお尻をタッチされ、瞬間的に頭が沸騰して飛び出した。

「楽しんでるねえ」

どこに行ってもおもちゃにされ、ムキになつて叫ぶシャニーの声を聞きながら、ルシャナがまた読書に目を落とした時だった。

ふいに遠くから叫び声が聞こえてきた。シャニーの怒声とは違う、どこか焦りを含んだ息遣いに誰もが振り向く。

「たいへんだよ！ みんなー!!」

駆けた来たルウの手には、一通の封書が掲げられていた。



「宣戦布告が届いたつてのは本当なのか？」

単刀直入にデイークが切り込む。

シャニーたちはデイークも呼び、ルウの部屋で届いた書状について内容を確認していた。

いつもは穏やかな院長室も、灼熱に突き上げられるような緊張感が包む。

「うん。三日後の朝、日の出と共にって書いてある」

ルウが差し出した手紙に、さらさらと水を流すように目を通すデイークの眉間にどんどんしわが寄る。怒っているというより、困惑しているようにシャニーには見えた。

彼女にとつてもそれは同感だった。デイークの脇の下に頭を突っ込み、一緒に手紙を覗きこむ。日時の指定や手紙を送った経緯などが、達筆に記されている。

「なんか、略奪団にしてはきちんとしているというか」

手紙の右下には竜と雷をかたどったと思われる黒塗りの紋章が描かれている。送り主は件の略奪団であり、その頭領からのもの。いわゆる決闘書だ。

こんなもの、貴族間の小競り合いのときにしか見たことの無い代物だ。奇襲や夜襲といった手段を選ばない手合から寄越されるとか気味が悪い。

「自信があるんだろう。ハッ。なら、しっかりもてなしてやんねえとな！」

戦神の血が騒ぐのか、ディークは拳を打ち鳴らして迎え撃つ気満々だ。

予想外過ぎて髪の毛が逆立つようにゾワつと来た。ディークなら回避する方法を考えると思っていたのに、まさか“もてなす”なんて。

おかげで戦闘^{セチ}狂が、手を合わせて満面の笑みを浮かべ始めてしまっているではないか。

「受けて立つつもりなの?! ここで?」

「ボスも来るんなら手間が省けるってモンだろ。件の殺しで知ってることを吐いてもらうにはな」

「でも、ここで受けたらみんなが」

「いや、ここの方が大勢を迎えるには都合がいい。地の利は活用しねえとな」

たしかに、この場で戦えるのはディークと十八部隊の5人だけ。一体どれだけ大挙して報復にやってくるか分からない中で、ただっぴろいフィールドでの野戦は不利どころの話ではない。

拠点防衛は遠距離攻撃と遊撃、そして狭い地形を使って可能な限り相手の物量メリツトを潰すことが肝要だ。

問題は、ここが孤児院と言うことだけ。

「なにより、宣戦布告されてんのは手を出したおまえらなんだしよ、しっかり働け」

「言わずもがな、だよ! でも……」

襲撃してきた略奪団の男を返り討ちにしたから、名指しされるのは別に驚く事でもない。

でも、どこか喉に魚の骨でも刺さっているようにすつきりしないのだ。その理由……レンに目をやると、彼女は困惑の眼差しを向けてきた。

直接手を下したシャニーを名指しするのが自然のはずが、銀髪の女に裁きを下す——手紙にははつきりそう記されている。

とはいえ、やることは変わらないし、デイクの言うとおりに網打
尽にしてしまえば全部分かるだろう。

どんな作戦で迎え撃つか検討に入ろうとした時だ。ルウが魔導書
を手に席を立った。

「ぼくも戦うよ！ みんなだけに戦わせるわけにいかない」

もう一人……頼れる人がいた。

ルウはリキア同盟軍への参加者の中でも最年少だったが、ベルン動
乱でもその正確無比な魔法でただならぬ存在感を放っていた賢者だ。
『理の申し子』の二つ名は伊達ではない。

それでも、シャニーは笑みを浮かべながら首を横に振った。

「ううん、ルウくんは子供たちをお願い。身を隠すのに都合がいい場
所とか、詳しいでしょ？」

この場所を戦場にしてしまうのなら、子供たちを守る誰よりも強
い力が側にいて欲しい。

ルウならあらゆる意味で適任に違いない。子供たちの信頼も、守る
力も、そして地の利を活かす智も。

「それに、万が一……俺らがやられた時、あいつらを守れるのはお前し
かいねえしな」

デイクが付け加えた最悪に、ルウは唇を噛んで静かに頷いた。

考えないわけには行かないことではあるものの、そんなつもりはな
いからこそ口にできるセリフとも言える。現にデイクは、心配する
など言いたげにルウの頭に手をやって励ましてる。

「もちろん絶対勝つけどね！」

念のため付け加えると、デイクはまた脅すようなことを言いだし
た。

「何より、だ。俺たちは傭兵。てめえの命が一番だからな。逃げるか
もしれねえぜ？」

雇い主を試すようなことをするのは毎度のこと、彼なりの流儀の
ひとつと言えらるだろう。

いくら懇意にしても雇い主を過信するな、肩入れするな……見習い
のときはそう口酸っぱく教えられたもの。そうした「臭い」を嗅ぎ

分けて、捨て駒に使うような人間から自分の命を守るのも傭兵として必要なスキルと言って。結局、そのデイクもロイに対しては全幅の信頼を置くことになったわけだが。

とは言え、今回の相手はルウだ。こんな純真な子に言うことではないに決まっている。

「ル、ルウくん、大丈夫だよ！ このオジサン、悪ぶってるだけでそんなこと絶対しないから！」

案の定、ルウが不安げな目で見上げて来るではないか。

こんな円らな瞳で見つめられては黙っておれなかった。なのに、デイクは相変わらず胡散臭いオジサンを演じている。

「分からねえぜ？ それにシヤニー、いい加減オジ——」

「お兄さん！ お願い！ 子供たちのために一緒に戦ってください！」

ついに居てもたつてもいられなくなったらしく、ルウはデイクの手を取って今にも泣きそうだ。

するとどうだろう。それまで悪人面していたデイクは、まるで魔法をかけられたように目を見張りだしたではないか。

しばらくすると、彼はむず痒そうな笑みを浮かべながら視線を外し、頭をボサボサやりだした。

「ま、まあ俺らも金で動いてるからな。契約金分は最低限働かないとな」

つい直前まで見せていたハードボイルドはどこへやら。

口ではそれっぽい事をまだ言っているが、緩んだ口元だけ見てもまんざらでもないに決まっている。いくらルウが鬼殺しな瞳をしているとしても、ここまでとろけたデイクは見たことがない。

仲間たちもぽかんとして、夢から醒めたような顔をしている。

「この弟子にしてこの師匠ありつて言うか……」

「意外とチョロいね。このお兄さん」

なぜかルシヤナに横目でチロつとやられ、とぼつちりが飛んできたではないか。レンの容赦ない評価の前では、さすがにデイクの顔からニヨニヨが飛ぶ。

おまけに当のデイクからもギロつとやられるとは。たぶん部下の躰がなっていないとでも言いたいのだろう。今回ばかりは自業自得だ。

ジト目でやり返してやると、彼は咳払いして話をすり替えた。

「そうと決まれば作戦を練るぞ。シヤニー、どう動く?」

「え、あたし?」

思わず聞き返してしまつてからハツとするが、口に出してからでは遅い。

「つたりめーだ。おまえが部隊長だろうが。俺はお守りだしな」

デイクが側にいると、つつい備兵団時代のクセで彼の意見を待つてしまう。

本当は歴戦の備兵だつた彼の意見も聞いてみたいところだが、成長したところを見てもらうチャンスとも言える。

拠点防衛や住民の避難なら、イリアで何度も経験してきた。

「守りが手薄になりそうなどこの補強と、みんなの避難路の確保。あとは、敵戦力の分散……かな」

「ま、そんなところか」

ひとまず合格点だろうか。本当は「やるじゃねえか」くらいの言葉を期待していたが、ダメ出しされないだけでもレベルアップだ。

段取りが決まるとデイクは休む間も無く席を立てて出口へと歩き始め、すれ違いざまに彼は肩をポンと叩いて行つた。

「事前に対策できるところはしとくぞ。まずは戦場の下見と行くか」

ルウたちとの連携をミリアらに任せ、デイクの後を追つてシヤニーは部屋を出た。

拠点としてどこに弱点があり、どこが奇襲や迎撃に使いやすいポイントかを見極めることで作戦のポイントが決まると言える。すでに戦い始まつているのだ。

(特に今回は拠点防衛だし、罠の設置とかも考えなきゃだね。隠しやすいつころ……あつ、万が一のときのバレないような退避経路も必要だね。バレないトコかあ……—おっ?)

そこまで巡らせて、頭の中で繋がった糸がピンと名案を吊り上げ

た。

「そうだ！ 子供たちに聞いてみようよ！」

「なに？ ガキどもに？」

振り返って腕組みするデイークの目は、続きを催促するようにまっすぐ見下ろしている。

「だって、ここをきつと知り尽くしてるよ。あたし捕まえられなかったしさ」

逃げ足なら右に出る者がいない彼らなら、思いもよらないとびきりを持っていくに違いない。これなら、奇襲に罠と、あれだけやりたい放題弄ばれたのも意味があつたというものだ。

目をつぶって何か納得するように頷いたデイークは、腕組みを解くとシャニーの頭に手を置いた。

「いいアイデアだ。使えるもんは何でも使うとすつか」

シャニーの口元がわつと輝いて、太陽に負けない笑顔が咲く。

今度はちゃんと言ってもらえたのだ。かつては決して褒めてもらえなかった厳しい師匠からの一言は、勲章をもらった時と同じくらい……いや、もっと嬉しいかもしれない。

そんな浮かれる気持ちをたしなめるように、デイークはもう歩き出している。

「とりあえず、まずは俺らの目を使うぜ」

「りょーかい！ シシヨーー！」

「やめろって言ってるんだろ、それ」

「んー。よっし、じゃあデイークの“お兄さん”！」

言った途端だった。魔法がかかったようにピタリとデイークが止まった。後ろ目がキラリ光った気がして、シャニーも地面に突き刺さってごくりと息を呑んだ。

「……あとでおまえ、聖堂裏な」

「じよ、ジョーダンだよ、ジョーダン……。ね？ デイークさんってば……」

どうやらルウみたいにはいかないようだ。

三十路を迎えた男心は難しい。

第二の精霊

(なんだ……う？ このへんな「流れ」……)

戦場となる孤児院の中庭を歩き出したシャニーだったが、その足は5分と経たずに止まってしまった。

気になってしょうがない。おかしな「流れ」が心を掻きむしって、イライラがどんどん膨れ上がってくるのだ。

「ねえ、デイクさん」

堪らず呼んだ。この苛立ちは、ジリジリ焼き付けてくる太陽のせいなんかではない。

「なんか……さ、*「流れ」*を感じる」

言葉でどうやって言い表せば良いだろう。それでも、ゾワゾワしてとても落ち着いていられない殺気が「流れ」に乗ってきて、侵食されるような不快感が全身にまとわりついてくるのだ。

無意識のうちに、太刀に手をかけていた。

はるか遠くから垂れ流されているはずなのに、今にも食い破られそうな恐怖に手を下ろせそうにない。

デイクも何か掴んでいたのか、振り返ってもその目は鋭く睥睨していた。その先は……妙な「流れ」が襲ってくる源流と同じ。

「おまえの直感だけは、昔から驚かされるぜ」

「だけは、よけいでしょ？」

褒められたのか茶化されたのか。反射的に口を三角に尖らせた。

見習い時代、デイクにおんぶに抱っこだった中、この「流れ」だけは、彼も当時から「女の勘はバカにできねえ」と茶化しながらも重宝してくれたものだ。そろそろ、だけは卒業したいところなのだが、今も白々しい目で彼はダンマリを決めている。

でも、それは束の間のこと、「俺も同感だ」そう口を開いた彼の眼差しには、戦神と呼ばれる所以が稲光のように走った。

「なにか分からんが、場に相応しくない気がある」

「へえ？ そのオジサン、なかなか見どころあるね？」

違和感の源流を睨み続けるデイクに、セチが興味を持ってしまっ

たようだ。

目を細めて満面に爽やかな笑みを浮かべる姿は、知らない人が見れば穏やかな風の精霊かもしれない。実際は死の微笑みと言ってもいい。

(あーあ、デイクさん。……同情しとこ)

彼女に目をつけられるとなかなか厄介なのは、当事者としてウンザリするほど味わってきた。

でもそれ以上に、憧れの師匠が戦闘狂……もとい、風の精霊からも一目置かれたと思うと、自分が褒められたように心が弾む。

「そりゃそうさ。なんたってあたしの師匠だし」

「少なくとも、隙は無いね。キミと違って」

完全な不意打ちだ。まさかこっちに跳ね返ってくるとは。まるで太刀を首に添えられたかのような視線に、首が伸びて息が詰まる。口元は笑っていても、意味深な視線はぜんぜん穏やかではない。

とは言え、相手が悪すぎると言うものだろう。相手は『手負の虎』の2つ名を持ち、戦神とさえ呼ばれる伝説級の偉丈夫だ。

(歴戦の勇者だよ？　こんなか弱い16の女の子に何ができるって言うのさ)

実際7月に斬り結んだ時も完敗だった。なのに「それは許せないかな」と言つて、セチはさらにニコツとし始めたではないか。

「私も剣を与えてる以上、プライドがあるからね」

「そんなこと言っただけ。——って、だから勝手に人の心を読まないでっつてば！」

「仕方ないじゃないか、隙だらけなんだし。んー、何がいいかなあー」
嫌な予感がする。

彼女は急に鼻歌を歌い出したと思ったら、踊るように目をキラキラさせて見上げ始めたではないか。面白がつてロクでもないことを企んでいるに違いない。反論を絞ろうにも、セチが何か閃いてパチンと指を鳴らすまで、あまりに時間が無さすぎた。

「そうだ！　負けたら罰ゲームでもしてもらおうか？」

「ば、罰ゲーム?!」

「そ。キミが負けたら、一週間くらい私が体貰うってのはどうかな。それなら、本気出すしかないよね？」

ブワツと髪の毛が逆立つくらい危機感が全身を駆け巡る。どうして嫌な予感ほど当たってしまうのだろうか。

いや、当たるだけならまだいい。その中でも最悪、最凶で、なぜそうなるのかサツパリついて行けない。

「そ、そんなメチャクチャな！」

「さあさあ、早くそのオジサンに突っ込みなよ」

「……めつちや、負けて欲しそうじゃん」

「人間き悪いなあ。私はキミの味方だよ？　大丈夫、万が一のときは骨くらい拾ってあげるさ」

「そんなニコニコして言わないでよお！」

単にセチが乗っ取る口実を作りたいだけに決まっている。デイーグ相手にコテンパンにされるのだから、このニコニコ顔は計算済みじゃないのだ。

勝とうが負けようが面白ければ何でもいいのだろうし、負ければ一週間やりたい放題付き。

(そんなセチの一人勝ちが見えてるゲームなんか誰が乗るもんか！)

第一、3日後に決闘が待っていると言うのに、セチに任せたら略奪団を真つ二つにするくらいでは済まないのは明らかだ。

ただでさえ、吐き気がするくらいの妙な「流れ」が押し寄せてくるのに。

……そこまで来て、ようやく気づきハツとする。セチには毎回全然違う方向に話を持っていかれるから困る。

「ってー・そうじゃなくて、セチもなんか気づいたの？　やっぱり、この「流れ」って」

「うん。同類かな。かなり遠くから眺めてるみたいだけど」

気づいているなら教えてくれたっていいのに。

どうやら気づくどころではなく、彼女には見えているような口ぶりにすら聞こえてくる。

(セチは同類って言ってたけど……)

忘れもしない言葉だ。あの業火の魔人からはつきり言われた、あちらの世界に誘う言葉。

「もしかしてソルバーンさん……いや、*“流れ”*が違う」
口にしてみてから自分に首を振る。

たしかにあの魔人の放つ火炎地獄は、*“流れ”*を突き破り燃やし尽くして足りないほどで、デタラメな力としか言いようがない。

とは言え、彼の炎は良くも悪くも真っ直ぐなもの。今感じる、絡みつき締め上げてくる、昏く深い扉の向こうから見つめるような黒い眼差しとは違う。

何より、ソルバーンなら見ているだけなどできないだろう。とつくにこの場に現れて、喰らおうと襲ってきているに違いない。

「あの男じゃないかな。トオルだと思う」

「トオル？」

やはりセチには心当たりがあるらしい。初めて聞く名前に、シャニーは目が点になった。

「雷の精霊だね。こんな目の吊ったインテリキ」

指で目を吊り上げ、これでもかと舌を出す顔はとても精霊とは思えない。よほど仲が悪いのだろうか。人の話をここまで聞かないと、合わない人がいても仕方ない。

紹介されているトオルとやらも、精霊ともなれば紹介とはきつと違うのだろう。最初こそそう思ったものの、不安になってきた。

（ううん……セチやソルバーンさんがこんななら、ありえるのかな……）

「心外だなあ。あの男はともかく、私まで*“こんな”*扱いなんてさ。しかも、相棒のキミが」

「いや、だから。と言うかむしろ……」
どんどん精霊のイメージが崩れていく。

精霊と言えば威厳があつて、高貴で、聡明な神の使徒……——話を聞かない、ただの享楽主義の戦闘狂だったとは。

そんな事などお構いなしに、セチは自信満々だ。

「ま、襲ってきたら返り討ちにするだけさ。キミがね」

「めちやめちやヒトゴトじゃん……。確かにそうなんだけどさ。子供たちを守ってあげなきゃだしね」

普段はともかく、戦闘で頼りになるのは間違いない。

それにしても、略奪団のリーダーがそんな精霊の使い手と言うのだろうか。

(そういや、紋章にも雷のマークが……)

これはとんでもない相手と戦う羽目になったかもしれない。そうなれば、やはり事前の準備こそが鍵を握ることになるだろう。

どこに罠を仕掛けるべきか……そう考えていた時だった。

——ゴワンツ!!

「ア? ツ?! イターツ!!」

震えるような硬い音がしたかと思うと、目から星が出て尻餅をついてしまった。

焼きごてを押し付けられたようにおでこがヒリヒリする。擦りながら潰れた目を無理やり開けて見上げてみれば、大剣が太陽に光っていた。

「わりいわりい、前見てねえおまえが悪いんだぜ」

「ヒドイよー! ワザとでしょー!」

どうやらあの腹におでこをぶつけてしまったようだが、デイークの白々しい口調ひとつとっても断言できる。第一、彼との身長差を考えたら、担いだ剣が額の高さに来るなんて絶対おかしいではないか。

拳を突き上げて火の玉をぶつけても、彼は鼻であしらうだけで謝る素振りもない。それどころか、返ってきたのはお説教だった。

「仕事中にボサツとしゃがって。戦場で気を抜くクセは相変わらずかよ」

ムスツとしながら立ち上がったシャニーは、いまだにじわじわ痛みが響くおでこに手をやって歩き出したデイークについて行く。

セチの声は周りには聞こえないようで、ルシヤナ達曰く、ただボーっとしているようにしか見えないらしい。

(別にボサっとしてるわけじゃないのに……!)

心の中で繰り言を漏らしていると、まるで聞こえていたかのように

デイークの後ろ目が刺さってごくりと息を呑む。

叱られるのかと思ったが、デイークの口から出てきたのはそれ以上の衝撃だった。

「そいつか。オスティアで見せたやつは」

「へ?! デイークさん、聞こえてたの?? セチの声」

「セチって言うのか。……へえ、セチか」

ソルバーン以外でセチの存在を勘付かれたのは初めてのことで、トーンの外れた声が飛び出してしまった。

セチまでもが目を真ん丸に見開いて驚いているところからして、ただ事では無いようだ。さすが戦神と呼ばれるような人は違うと言うことか。

それでも、振り返ったデイークは、手を払って否定すると腕を組み始めた。

「いや、聞こえちゃいねえ。あくまで、今までのおまえの言動からの推測だ」

「それはそれでスゴイよーな……」

「へえ……このオジサン、キミの師匠にはもったいないくらいの御仁だね」

ますますセチのターゲットがロックオンに近づいてしまった気がする。

ニコニコ顔で相手を褒めているのは、大抵ロクでもないことを考えている時だ。一度斬り結んでみたいとか、企んでいてもおかしくない。

(丁度いい機会……かな)

これからも一緒に戦うなら、彼女のことでも知って欲しい。決して悪い奴では無いし、最近はお互い信じて「相棒」になってきたのは間違いない。

でも、決して魔人とは思われたくもなかった。それは自分にとっても、セチにとっても辛いこと。

「ま、まあ話せば長くなるんだけど……」

「ハン……。まあいいぜ。長話は面倒だ」

どうやって伝えようか考えながら適当な言葉でお茶を濁していたら、彼はもう背を向けてしまったではないか。

自分から聞いてきておいて、面倒とはあんまりだ。

「ちよつと?! 少しくらい聞いてよ! ——ぶつ?!」

急いで追いかけて切り出しを考えていると、何か思いついたように彼が急に止まるものだから、背中に鼻をぶつけてしまう。

デイクは背を向けたまま、周りに警戒するように低く重い声で切り出した。

「シャニー、おまえはガキどもを頼む。俺はこの妙な気を探る」

「ええ?! 一人じゃ危ないよ!」

いきなり何を言い出すのだろう。

デイクは動乱のときから、人には散々一人で突っ走るなど言いながら、自分はこうしてちよくちよく単独で動こうとするのだ。

言っていることとやっていることが違うと、何度か不満をぶつけたものだが、「ナマ言ってるじゃねえ」で済まされてきた。

今ならその理由も分かる。だからこそ、今回は相手も相手だし許せない。

すぐに彼の手を取って引き留めた。

「正攻法じゃ掴めそうにねえ。裏の連中の情報を探ってみるつもりだ。だから俺一人でやる」

それでも、デイクは振り返りはしなかった。

初めてだ。何をするか教えてくれたのは。

でも、そう言う問題ではない。聞いたらますます不安になってしまったではないか。

裏の人間とか簡単に言っているが、常識の通じない血なまぐさい連中だ。そんなところに足を踏み入れたら、デイクの身に危険が及ぶのは優に想像できる。

「ま、おまえら騎士は表の世界で皆の希望になりやあいい。適材適所ってやつだ」

なのに、デイクはサラッとそう言ってまた歩き出そうとしている。

(デイークさん、昔からいつもそう……。そんなのイヤなんだよ)
取った手を引つ張って無理やり彼を止めた。

「……デイークさんはずるいよ」

「あん？」

「背負ってばかりで、あたしにはちつとも背負わせてくれない」

彼なりに、守ってくれようとしているに違いない。7月もそうだった。

けれど、あの時に気持ちはしっかりと伝えたはずだし、デイークは約束してくれたのだ。精々アテにすると行って。

ようやく振り返ったデイークだが、まともに受け取っていないのは、面倒くさそうにため息をつくような顔から伝わってくる。

「おまえな……」

「あの時は見習いだからってガマンしたんだよ。でも今は、デイークさんと肩並べたつもりなのに。あたしだってデイークさんのこと、心配なのに」

まだ分かってくれないのだろうか。

デイークが心配してくれるのと同じくらい、彼の無茶に胸が絞られる思いをする人間がいることを。

彼からすれば14の見習いも、16の正騎士もガキには変わらず、「ナマ言うな」かもしれない。

だけど、あの時より許せない気持ちは比べ物にならないくらい膨らんでいる。デイークの気持ちを知れば知るほど、一緒に背負いたくなくなるのに、彼はそれを許してくれない。

頼ってもらえない無力感、背負おうとすればするほど背負わせてしまってもどかしさ。さまざまな悔しさに、声が震えてくる。

「……その気持ち分かるなら、部下に向けてやれ」

観念したような口調で何を言うかと思えば、まさか説教だとは。

「!! デイークさんが悪いんだよ? こんな風に育てたのはデイークさんなんでもんね」

「俺はおまえのオヤジかつつの」

「へへっ。半分……そうかもね」

「ハン……?」

そんな一人で背負い込んでいる自覚は無いが、もしそうなら師匠が見せた背中のせいだ。

物心ついたころには既に両親がいなかったシャニーにとって、デイクは初めて厳しくしてくれる男性だった。

彼は見習いだとか女だとか、そんなのは一切無かった。ある時は背中で語り、ある時は真正面に立って叱ってくれ、挫けた時は並んで心を聞いてくれた。

まさに、師父と言える人。

「ま、俺みたいなのを、おまえが背負う必要はねえよ。侯爵夫人候補に妙なもん背負わせちゃ、ロイにもわりいしな」

そんな人が口にしたまさかの言葉。

パチンと心の中で普段外れないはずの何かが外れ、じわつと体中に炎が噴いた。

「デイクさん……」

シャニーの三本分くらいありそうな腕が引つ張り戻され、デイクが目を見張って振り向く。

「お、おい? シャニー、どうした?」

シャニーは俯いてわなわなと震えていた。

直後、居合のごとくあげた顔は眦を裂き、普段の朗らかさが嘘のように荒れ狂う嵐そのものだった。

「俺みたいと言わないで! デイクさんはあたしにとってホントに大事な! 大好きな人なんだよ!」

「シャニー……」

「与えるだけ与えて、背負うだけ背負って……そんな事して前みたいになくなったら、果てまで探して連れて帰るんだから!!」

シャニーにとつても、自身にびつくりするくらいの金切り声が出ていた。こんな声、自分ではないみたいだ。

でも、腹に溜まったものを全部吐き出して後悔はなかった。

ずっとずっと、ずっとずっと抱いてきた想い。大事な大事な師匠が、自分のことを「俺なんか」と、まるで居場所が無いような言

い方をして遠ざけようとするのが、怖くて怖くて仕方なかった。本当に……どこか二度と会えない場所に行ってしまうような気がして。

7月にも同じことを言ったはずだが、何度でも言うしかない。分からないなら分かるまで。遠くに行こうとするなら、行かなくなるまで、何度でも。

しばらく目を見張ったまま固まっていたディークは、頭をぼさぼさやりながら、「……おまえには敵わねえな」と観念したように小さく笑った。

「ああ、胸に刻んでおくぜ。そんなマジ睨みすんな」
ようやく分かってくれたのだろうか。

彼にここまで反抗したのも、こんな目を向けたのも初めてだ。最後は感情をそのままぶつけてしまったが、強張りがとれたディークを見て身体中から力が抜けていく。

彼から手を離し、シャニーはそのまま自身の胸元に置く。手に残る温もりと、彼の約束の言葉を逃さないように。

「それにしても、言うようになったもんだな、おまえも」

「えへへ……。今日は『ナマ言ってるじゃねえ』って言わないんだね」
ディークに褒められるなんて、ちよつぴり恥ずかしい。

鼻の頭をこするシャニーの顔には、いつも通りの穏やかな笑みが戻ってきた。

それを見るや、ディークは呆れ顔で両手を広げている。

「まったく、数年前はホームシックでピーピー言ってたくせによ」

「い、言わないでよ!!」

『寂しいよー』とか言ってくつつきやがってよ。俺がどんな誤解を受けたやら」

「アーアーアー！ 聞こえない！ 聞こえない！ 何のことかなー！」

ディークはすぐに、見習い時代の黒歴史を話の種にするから気が抜けない。

ディーク傭兵団に入って間もないうちは、姉たちの顔を浮かべて泣いた時期も確かにあったものの、そんなの一週間くらいの話だ。

女騎士が山賊に蹂躪されているだとか、デイクはかなり年下好きやら騒ぎになった記憶はある。それはむしろ、きちんと上着を装わないデイクの問題だろうに。

「仲間もいねーんだし、いいじゃねえか。あん時はなあ、ウブで可愛いもんだったぜ」

「良くないし！ あ、あの時はまだ子供だったんだし、仕方ないじゃん！」

酒飲みが懐かしむように、しみじみした口調で暴露される恥ずかしさと言ったらない。

(と言うか、今はかわいくないってコト……?)

聞きたい気持ちをグツと抑え込む。

違うとは分かっているけど、もう少し言い方があるだろうに。

そんな乙女心も知らないで、デイクはまた怪訝そうな口ぶりで

「あの時は……ねえ」などと鼻で笑っている。

「ハン、そういう事においてやるぜ」

「ぐぬぬぬ……」

散々好き放題のデイクが恨めしい。

見習いの時はこんなに弄られた記憶はないのだが、やはりオジサン化してしまったのだろうか。

なんとか反論しようと頭を絞っていると、彼は話題を逸らすつもりか先手を取ってきた。

「とは言え、だ。今回の件は俺一人^{ヤマ}でやる」

自分の耳を信じられない。まるで、さっきのやりとりが無かったことにされたかのよう。

それでも、頭より先に心が飛び出していた。

「今言ったばかりなのにー！」

「あー……なんつーか……」

デイクは頭をボサボサやって気だるそうにし、小さく舌打ちすると「おまえならいいか」と諦めたように言って続けた。

「おまえらみたいな、表の人間ってプンプンするのが一緒なだけで、掴み損ねる情報^{ネタ}ってのもあんだよ」

彼がしばしば語る裏社会は、イマイチ飲み込めない世界の話。

そんな状態だ。足手まといと言いたいのだろう。でも、そうやって触れないままでしたら、彼はいつまで経っても一人のまま。

「じゃあ、あたしもグレーに慣れれば」

「馬鹿言うんじゃない。もっと視野を広くしろ」

まるで何を言うか読んでいたかのようだった。

喰い気味に遮って喋り出したデイクは、シャニーの頭にポンと手を乗せた。その重みだけで、シャニーの顔は張り子のように下を向く。

「世の中にはな、真っ白じゃねえとダメな人間てのも必要なんだよ。実際は別にしても、な」

下を向いたまま、顔を上げることがシャニーには出来なかった。

デイクが言わんとしていることは分かる。

でもそれは、ロイヤリリーナ女候のような、世界で英雄と言われるような人たちのことではないか。

(あたしは……デイクさんと「同じ側」にいる傭兵じゃない)

反論しようとはつと顔を上げたが、それ以上をデイクは許してくれなかった。

「侯爵夫人にしろ、騎士団幹部にしろ、おまえは、周りにいる人間まで染めることになる。上に立つ人間なら、それを考えることだ」

黒どころか、灰色にさえ触れさせない。そのために自分が黎い世界を担う。

動乱でもそうだった。そうした世界の仕事に、当時の傭兵団の仲間を、デイクは一切関わらせなかった。なぜなのか、ようやく頭の中で繋がった。モヤモヤは膨らむばかりだが。

「人と人を繋ぐ……おまえはそう言う星の下に生まれたんだ。全部自分でやる必要はねえ。お互い、果たすべき役割つてのは違つて当たり前だ」

何も言い返せない自分がもどかしい。

裏社会との繋がりを民に胸を張れるかと問われれば、それは確かにノーと決まっている。

だから、〃俺みたいな〃人間が相応しいとでも言うのだろうか。
デイクの過去は知らない。けれど断言できる。他の誰よりも仲間を大事にしてきた彼は、一番大事にされなければならぬ。

一人で全部背負わせるなんて、やっぱりダメだ。

「で、でもデイクさんは全部一人でやろうとしてるじゃん！」
「なーに言ってるやがる」

シャニーの肩をポンと叩いたデイクは、その手をぐっと握ってシャニーの顔の前に突き出した。

「俺のいない間、俺の分も頼んだぜ。俺の報酬もかかってんだ、ヘマすんなよ？」

ドキンと胸が跳ねて飛び出して行きそうになった。

初めてかもしれない。デイクが自分の仕事を任せてくれたのは。彼の拳を自身の拳で繋ぐと、そのまま両手で包む。

ようやく少しだけ背負えて彼に近づけた喜びと、それ以上に得体の知れない恐怖が湧きあがる。

(また……どっか行っちゃったりしないよね……)

デイクのほうの間違いなく手練れでも、ただ無事を祈るかぎり。

「デイクさん。絶対帰ってきてよ！」

「なんだそりゃ。ハッ、妙に粘着質になりやがって。指定日までには戻る。安心しろ」

背を向けたまま手を振り出発するデイクを、シャニーは涙を堪えて見送った。

それでも、心配は杞憂に終わった。デイクは約束を守ったのだ。彼は宣言通り、略奪団の襲撃予告日の前日に無事帰還。

とつぷり日が暮れた後にもかかわらず、休む間もなく翌日の準備に精を出すのだった。

逆鱗のサンダーブレード

— AM 4 : 27

未だ目覚め前の黎い夏暁の彼方。

それでも、温かな風がシャニーの髪を揺らし、その瞳は松明の赤に燃える。

孤児院の鐘撞台に陣取って、迷彩柄の毛布の下でレーションを食む。かれこれ1時間くらい経ったか。双眼鏡を覗き込むのも、もう何十回目だろう。

今まで真つ暗だったはずの世界が黒く、狭く縁取られている。

その世界にふと、朝鳥のシルエツトが走った。あたりにアーアと甲高く鳴くさまは、戦端が開くのを知らせるかのようだ。

まさにそれが歯車を動かしたように、黎かった空の下にぼんやりオレンジが滲み混じりだす。夜明けまで、もう四半刻もないはず。

「いよいよだね」

横で彼方へじつと睨みを利かせるデイクに声をかけ、シャニーは立ちあがった。太刀を差しなおし、槍をグツと握って穂先を天と向ける。

「ああ。シャニー、そろそろ動くぞ」

デイクもそれを待っていたようだった。山が起き上がるようにどっしり構えたデイクは、大剣を担ぎ彼女へ目配せして歩き出す。

「ラジャー！ みんな、行くよ。ルシヤナ、そっちのチームはお願いね」

「オツケー。うまく連れていくわ」

ルシヤナとハグして互いの武運を祈る。

デイクを最終防衛線に残して、シャニーとルシヤナたちは別行動の作戦となっていた。

多勢に無勢は避けられない中でうまく流れを引き寄せるには、最初の遊撃と攪乱こそが肝と言える。南側からルシヤナの隊が、北側からシャニーが敵の隊列を分断することで、あらかじめ兵数を減らした上で本体を一気に叩く。それしかない。

「ばつちりオトリ、頼むっスよ！」

「任せといて……じゃなくて！ オトリじゃないから！」

もう出撃前のルーティンのようになってしまうている。

毎度のようにミリアに訂正を迫るものの、彼女は期待していると言わんばかり。白い歯を見せながらクロスボウを突きあげてきた。

おまけに今日は、彼女にとってまさかの助っ人までいた。

「つたく、囷だろうが遊撃だろうがどっちでもいいだろ。ともかく、単騎で任すんだ。おまえ自体がひっかかるなよ」

「くっそお、みんな見てろよ！」

信頼されているのかいないのか、デイクに額を突かれてしまい地団駄を踏む。

おかげで周りが笑いだし、緊張も解れたようだ。——時は来た。

「第十八部隊、これよりシユヴアルツアーブリッツ討伐作戦を開始する！」

「イエス、リーダー！」

互いの武器を頭上で掲げ、誓いの号令をかける。

勇ましい声が曙の空に響くや、ルシヤナたちが颯爽と天馬に乗って南天へと消えていく。シャニーも出撃しようとデイクを乗せて天馬に跨ったとき、ふと思いついてデイクをつついた。

「ところでデイクさん。調べてたこと、なにか分かったの？」

裏の人間から確かに情報を仕入れたらしいが、彼は特に何も共有していない。相変わらず吐き気がするほどに舐めまわしてくる、黒いまなざしが今から迫ると言うのに。

でも、デイクはシャニーの頭を掴むと、グイツと前を向けさせた。「それは後にしろ。もう時間がねえ」

——AM 4 : 59 : …… 5 : 00

ルシヤナが見下ろす時計が、あけぼのに輝き眩しい。

長い1日の始まりを告げたのは、時計だけではなかった。

響き始めた地鳴り。慌てて双眼鏡をのぞいたルシヤナが息を詰まらせる。

「——ッ！ 来た！」

テーブルクロスを引き払うように、夜空を払った太陽が呼んだのは、朝だけではなく招かれざる客。ゆらゆら昇りはじめた黄金の光芒を後光にまとつて、彼らは約束通りやってきた。

人影と馬の蹄の音は確実に大きく膨れ、土煙をあげて猛進してくる。

「東から騎馬兵多数。剣、斧、弓の混成部隊と推定。距離……300」
「よしっ。ミリア、レン！ 手はずどおりA地点まで急行ののち、フォーメーション^{デルタ}△―Ⅲに移行。B地点へ誘導し、△―Ⅰ^{ラムダ}にて分断を図る！」

「ラジャー！」

レンの報告を受けたルシヤナが槍を掲げて先陣を切る。

突っ込んでくる略奪団を孤児院の敷地外で迎撃し、そのまま目指すは孤児院の北区画の外れ。

「そらそら、コッチツスよ！」

「ミリア、相手の弓に注意して！ 目的は殲滅じゃないからね！」

「分かってるツス！」

ルシヤナの指示にミリアも掃射を抑えつつ、高度を保って追手を狭い通路に誘い込む。

目的地は中庭の袋小路。倉庫や厩舎など建物が多く、入り組んだエリアだ。物量を無効化するにはこれ以上ないだろう。

飛んでくる矢の有効射程から外れつつ、魔法や投げ槍で応戦してポイントを目指す。

「戦術地帯に突入。最深部まで距離20、18……12」

敵陣が通路になだれ込んできた。レンの示す数字が小さくなるほどに、狭い場所で馬たちがにっちもさっちも行かず怒号が袋小路に噴きあがる。

「今だ！ レンツ、行くぞ！ △―Ⅰ！」

「反転します。右ロー」

地上の硬直を確かめるや、合図とともに左へ旋回したミリアは、右に旋回したレンと合流してクロスボウを構える。照準にはすでに、敵陣のど真ん中をすっぽり囲いこむ。

その横では、レンが一筋の線を走らせるがごとく、あつという間に高位魔法を詠唱して紫電が迸り重い音をたてる。

「二網打尽ツスよ！ クロスサンダー！」

クロスボウと魔法による混錬攻撃が、空で一点閃光して弾け飛んだ瞬間だった。

空から電撃をまとったボルトが、地上からは剣のごとく突き上げるサンダーがすべてを無慈悲に貫いたではないか。サメが大顎を開けるように空へ広がる閃電の牙を前に、騎馬隊はなす術なく噛み砕かれていく。

「よしっ、こっちは上手くいったっスね！」

鬼札一枚で大勢を反転させたのち、撃ち漏らしを処理しつつミリアは北の空に目をやった。



「——ッ、あの稲光は！」

南の空を真っ白に塗りつぶす閃光に、シャニーは思わず目を細めて腕でひさしを作る。

再び空が黄金色に戻ると、不穏な静寂が心を搔きむしりはじめた。ジワリとにじむ手汗に、ぎゅつと槍を握りなおして胸元のロケットに善戦を祈る。

「そろそろか……。セチっ、準備はいい？」

「いつでもオツケーさ。なんなら、こっちから迎えにいく？」

「ダメです」

「なんだ、つまらないなあ。あのくらい、まとめて相手できるじゃないか」

相変わらず、セチの戦闘狂ぶりにはどうにも調子が狂うと言うものだ。

今回は討伐だけが目的ではないし、もとより皆殺しにするつもりなどない。命まで奪わずとも、敵の戦闘継続力を断てば済むだろう。

とは言え、加減ができるような状況でもないのは間違いない。

「なに言ってるのさ！ トオルとか言う精霊も来るんでしょ？ 慎重にやんなきゃ！」

「キミから慎重なんて言葉を聞くとは殊勝だね」

今もどこからか感じる黒のまなざし。

全身を刺して侵食してくるような、尋常でない力の持ち主と今から対峙することになるのだ。それなのに、セチの口調はなんと呑気なものか。

そのうち地響きのような疾駆と土煙が見えてきて、セチはそちらへ見透かすような視線を向けつつ、ニヤリと悪人ヅラをしはじめた。

「まあ……いつか。そうだね、キミの本気を見せてよ。じやなきや……死ぬかもよ？」

「言わずもがな、だよ！ 行くぞ！ オーバードライブ！」

セチの魔力と融合した蒼焰が、全身から彗星のように噴き出し揺らめく。みるみる巨大に膨らむ敵の前線目がけ、シャニーは天馬に鞭を入れた。

「いたぞ!! 打てえ!!」

騎兵の怒声が響く。秒で先鋒の鼻面にぶつかると、待っていたのは突き上がる矢の嵐だった。

風に舞う柳にも似た、わずかなローリングで矢の間をすり抜け、隕石が突っ込むように敵陣を突き抜ける。

「鈍いよ！ こっちだよ、こっち！」

流星が青光の軌跡を残して、騎馬隊をど真ん中で引き裂く。秒も与えぬ間に急上昇したのち、去りぎわに投げ槍を放って牽制しつつ誘導を図る。

その揺動に騎馬隊の列がどんどん蛇行しはじめ、それが大きく北側へ逸れたとたんだった。

「どわっ?!」

馬が踏み抜いた瞬間に地面から火柱があがり、まわりも巻き込んで人馬が宙に跳ね出され一個小隊が半壊している。魔法を特殊なカートリッジに封入した魔法地雷だ。

「罨だ！ 態勢を整えろ！」

フレイボムを避けようにも、あちこち張り巡らせたロープや、夫婦喧嘩の跡地のように散乱する木箱が隊列をみるみる乱していく。

蛇のようにうねり、間伸びした敵戦線を見下ろしたシャニーは、槍を握りなおしてギアを上げた。

「セチ、とっておき行くぞ！」

「いつでもおいでよ。さらなる極みへ……さあ、風を纏うがいいさー！」
（お願い、〃飲まれ〃ないで……！）

黎い心の奥。セチのいるその先に手を伸ばす。

以前はある程度まで行くと、意識と体が切り離されて〃飲まれ〃そうになっていた。

7月にデイークと戦ったときでも、それまでの限界を超えて踏み込んだ世界だ。今回はその領域のさらに奥へと踏み込む。

（この感じ……。ツ——いけるー！）

あるときよりも、はるかに深く踏み込んでいるはず。

飲まれる不安や、自分が自分でなくなる恐怖に散々悩まされてきたはずが、今日はなぜかどうして心地よい。

「行こうツ、セチ！ 今日のアたしたちは、一味違おうぞ！」

魔力で翠緑に輝く眼が見開き、ハヤブサが獲物を狩るように眼下を掴む。

直感がまたたく間に起点を捉え、シャニーは槍を振りあげた。全身から噴きあがる蒼焰が、意思を持つように掲げた槍へ走り、包み込む。

「いっけえ！ 嵐の目になれ！ フレスヴェルグ！」

生まれた嵐を渾身に振り下ろせば、彗星のごとく気流うず巻く波動が地面に突き刺さった。

「な、なんだ、この嵐は?!」

「脱出不能！」

口々に重なる略奪団員たちの尖った叫びさえも飲み込まれていく。

槍を目にして生まれた風の渦が、触れるだけで粉碎されそうな螺旋を描く。その圧に、まわりに茂る木々さえもが千切れそうなほどなびいている。

身動きが取れないものたちの前に、シャニーが飛び降りた。

「我が剣は舞い飛ぶ一陣の春風にして、氷結の逢魔時へと誘うブリザード……」

シャニーが嵐の目に触れると、その風は突如として冷気を運び、あたりは一瞬にして凍てついていく。

動かなくなつた者たちへ向けて、シャニーは太刀を霞に構えた。

「颯閃一刀流秘技！ 氷嵐の風！^{ニブルヘイム} らああああつ!!」

霞から繰り出した音速の突き。生み出された風の矢が、あたりに立ちつくす氷の柱を抉り貫く。砕かれた者たちは、風に倒れる看板のごとくその場に崩れ落ちていった。

「よしっ、先鋒は崩した……ッ?!」

夏風が戻ってきた中庭で、敵が戦意を失っているのを確認した瞬間だった。

「流れ」を突き破る、火花が散るような感覚。はっと見上げた先でまぶしく燦めく白光が、裁きの剣のように降ってくるではないか。

「?!」

体中についた天性のバネでその場を跳ね飛ぶ。

直後、空を轟音とともに引裂き大地へ突き刺さった紫電が、まるでナイフで切り裂くように直線を広範囲にわたって抉っていった。あの長さは……天馬3体くらいはすっぱり入ってしまう。

真つ黒に焦げた地面に残された、パチパチと生草の赤熱する音が強烈さを胸に刻んでくる。

「さ、サンダーストーム?! やっぱり略奪団に魔法使い?! くっ!」

考える間も与えてくれず、次の一撃が飛んできて再び風に乗宇宙を翔ける。

「詠唱も早いし、硬直も短すぎない?!」

サンダーストームと言えば、はるか遠方の敵を攻撃する最高位の長距離魔法だ。いくら高位魔導士と言えどその扱いは非常にデリケートで、詠唱時間が長ければ反動や消耗も大きく、連発はできないと聞いている。

なにより、強力ゆえに魔導書自体が負荷に耐えられず、わずか数回で魔力を失ってしまうという。

「……こんな使い手初めてだ。うわつと!」

まだ群青も残る空に、流れ星のように光ったと思つたらまた降って

きた。もうかれこれ十発以上飛んできており、あたりは焦土と化してしまっている。

動乱で伝え聞いていたサンダーストームとは、まるで似て非なる攻撃。詠唱も反動も、ほぼ無い状態で撃ってきていると言っているいいだろう。

(これが……トオルってやつなの?)

ふとよぎる、あの黒いまなざしの名。

ところが、その名を教えてくれたはずのセチは、相変わらず飄々としている。

「うん、なかなかいい体のキレだ。これはいい稽古になりそうだね」

相手は精霊か、自分と同じ精霊使いか。それは分からない。

ともかく敵は雷の精霊なのだから全力以外にあり得ないだろうに。なぜこんなに楽しげで、今にも茶をすすりだしそうに傍観を決め込むのかサツパリだ。

「ノンキなこと言っていないで集中して！ 合流ポイントに急がなきゃ！」

「頑張るのはキミだしね。ほらほら、ちゃんと避けないと死んじやうよ〜?」

「んもう！ どっちの味方なのよーっ！」

風の魔力で緑の中庭を滑空するように駆けながら先を急ぐ。

剣をかたどった紫電が、天から驟雨しゅううのごとく降り注ぐ。風に躍り氷を滑るように避けては、シャニーは本隊を引き連れながら合理ポイントを目指す。

「右20。次は左30。その次の手は正面かな」

ケラケラ笑いながらも、彼女の直感が働くより先に発射体の方角を教えてくれるあたりは、セチもさすが精霊か。

「よしよし、連続正解記録はどこまで伸びるかな?」

「いや、外さないでくださいね?」

「んー。にしても、少しひねりが欲しいかな。反射魔法を使って角度変えるとかさ」

(本当に信じてて大丈夫かな……)

読み当てゲームでもしているように、セチは相変わらずキヤツキヤやっている。

まるで本気を出しているようには見えないニコニコ顔は、底が見えないというより考えが見えなさすぎて、心がぞわぞわ落ち着かない。それでも、吸い込まれるように後方へ流れていく庭園の向こうに、ついに見えてきた。合流ポイント——孤児院の本館入り口と、デイクの姿だ。

「デイクさん！」

「おう、どうやら上手くいったみてえだな」

手を挙げたデイクは、大剣を担ぎなおして臨戦態勢を整えている。

彼の様子やまわりの状況からして、まだこの場までは電撃剣の空襲は及んでいないらしい。

逆に——危険だ。

「でも気をつけて！ 相手に高練度の魔法使いが——!!」

そこまで言ったときには、すでに空が一点光っていた。

直後、暁光を引き裂く紫電の大剣が、天から突き刺さり視界を真っ白に塗り潰す。

「デイクさん!!」

爆風に耳がもがれてしまいそう。

爆心地にうつすら見えていたデイクの影さえも、溶けるように掻き消えた。あの剣で撃ち抜かれたように、胸が引きつる。

(まさかそんな?! デイクさん！ 嘘だよね?!)

もうもうとあがる土煙に駆け出しかけた、シャニーの足が止まる。

「ひゅー、レンに付き合ってもらっつといて正解だぜ」

剣の構えを解いたデイクの安堵した声が、痺れるほど肩にのしかかった絶望を吹き飛ばしてくれた。

どうやら、彼は防御技で受け流していたらしい。パツと見では負傷した様子はない。

「大丈夫?!」

「なんのことはねえ。対応は練ってある。おまえにも教えたはずなん

だがな？」

「う……」

動乱が終わってイリアに帰る道すがら、デイクに教えてもらった唯一の剣技。

その実、実戦で使ったことなど片手で数えるほども無かった。不慣れな技で受けるより、避けたほうが確実だからだ。

おかげで技の精度どころか、存在自体を忘れていた。

(……なんてデイクさんに言ったら、ゲンコツものだろうなあ)

せがんでようやく教えてもらった剣だ。

あらためて今度稽古してもらおうと決めたが、それすらデイクにはお見通ししかかった。

「ハッ、その太刀に防御は野暮ってか」

ひとつふつと笑ったのは瞬きする間くらいのこと。

その目にギツとギアが入り、戦神の睥睨が場を緊張に包む。

「——つと、そろそろおいでなすったようだぜ」

続々集結してきたのは、この無勢からすれば未だ無数とも言える騎馬兵隊。

(あれが……この略奪団の頭……?!)

ひしめく蹄の音が軍歌のように湧き立つ中、海を割るように彼らは道を開け、後ろから白馬がやってくる。

その上にいたのは、誘惑するように挑発的な紅蓮で全身を包むダークブロンドの女性だった。

メガロマニア

宣戦布告の略奪団がついに孤児院本館まで迫っている。

入り口を包囲するようにひしめく騎馬隊の真ん中に、リーダーと思しき魔術師が紅蓮のマントを夏風に揺らめかす。

(女性……？ しかもこの顔、どっかで……)

まさか略奪団のリーダーが女性だったとは。

どうにもシャニーには見覚えがある気がしていた。略奪団のリーダーなど、面識があるはずないだろうに。あのダークブロンドの髪に、紫紺の瞳……どうにも頭のどこかに引っかかってもどかしい。

「アーヤダヤダ。どうしてこうも魔法使いつてのは目のやり場に困るかね」

デイクが挑発するようなことをさっそく口に行っているが、今回はかりは同意だ。

ハイレグのレオタードのようにラインを強調した真っ赤な服と、これまた真っ赤なサイハイブーツ。そんな目立つ組み合わせが霞むくらい貴金属で着飾り、マントについているフカフカも、きつとかの有名な動物の毛に違いない。

まさにいろいろな意味で煌めいており、略奪団のボスらしいと言えばそうかもしれないが、どこはかとなく違和感も湧く。

「魔法使いへの偏見。よくないと思う」

「いや、レン。お前のことを言ってるわけじゃ。つか、お前らの制服も大概だからな？」

「まーたオジサンくさいこと言ってるっす。ま、ウチのセクシーボディが近くにあれば仕方ないっすよね」

「だあつ、それ以上じゃれるんじゃねえ！」

身内から攻撃されて戦神も形無しだ。

挑発されたうえに、余裕を見せられて激昂するかと思いきや、狼狽えたのはデイクだけ。略奪団のボスは気に留める様子もない。

「あなた方ですか？ わたくしの配下にちよつかいをかけたのは」

彼女は馬を降りると、見下すような眼差しと高飛車な口調で指さし

てきた。

「なに言ってるのさ！ ちよつかいかけてきたのはそつちの部下でしょー！」

太刀の鋒を女性ヘグツと突き出し、間髪入れず跳ね返す。孤児院から食料を奪ったり、施設を破壊して先に手を出したのは彼らではないか。

ところが、女性は首を傾げて眉を下げている。まさか、この期におよんで身に覚えがないとでも言うのか。

「？ 貢ぐべき者達から受け取って、何か問題でも？」

「……は？」

「むしろ足を運ばせたことを謝罪して欲しいくらいですわ」

まさかどころの話ではなかった。

意味不明で一瞬頭が真っ白になったが、すぐに振り払う。

絡みつく侮蔑の眼差しを叩き斬るように太刀で払い、あらためて鋒を向ける。

「ふざけないで！」

「貴女たちのような庶民に、意見する資格などありませんわ。持たざる者の正義など、ただの無力。そうですね？」

「ごっ、この……！」

「まともな答えを期待するだけ無駄だぜ」

頭がチンチンになりかけたところで、スツと太い腕が肩口から伸びてきた。思わずハツとして太刀を下す。またしても、感情で戦場に立ってしまった。

それを確かめるようにシャニーから視線を外したディークは、今なお高圧的に嘲笑う目と対峙した。

「なあ？ テレーザⅡシユヴァルツァー卿」

当たり前のようにディークは相手の名前を呼んでいる。

シャニーは頭上のルシャナたちと顔を見合わせてみたものの、誰もが眉を下げたり首を傾げたり。

「おほほ。わたくしをぐ存じとは、見かけによりませんのね？」

「裏の世界じゃ有名人だからな。前の動乱での従兄弟の失態と、自身

の手癖の悪さで追放処分を受けたんだったか？」

デイークが過去に切り込んだ途端、それまでの余裕が嘘のように女性……テレーザの顔が曇る。

「あなた、なぜそのようなことを」

「さあな？ 情報の売買なんざキホンだろう？」

どうやら裏の人間たちから仕入れてきた情報というのは、これのことらしい。

それにしても、裏では有名でも表の人間としてはさっぱり聞かない名前だ。会話についていけなくてもどかしい。

ところが、テレーザが口にした名前で、電撃が走るようにすべてが繋がった。

「フン。あれはナーシエンの責任であつて、わたくしは被害者ですわ」
「あーっ、思い出したよ！ 誰かに似てると思つてたんだ。あいつの関係者だったなんて！」

ナーシエンとは、先の動乱時におけるベルン最高幹部の一人だ。狡猾にして智謀に長け、リキアに内乱が起きるよう教唆した張本人らしい。陰湿で許しがたい人物と言えるだろう。

なにより、シャニーたちにとっては、その名を聞くだけで虫唾が走るものでもあつた。

「おお？ おまえがあいつ呼ばわりとは、なかなか穏やかじゃねえな」
「だって、『私のペットになれば毎日楽しませてやる』とか言つてきてさ！ 失礼しちゃうよ！」

あれはアクレイアの王都奪還戦だった。

戦前は、相手を陥れてもなんとも思わない冷酷な将という噂しか知らなかったが、玉座へ攻め入って彼と剣を交えたとき、はつきり言われたのだ。

相手を値踏みするような、舌なめずりしながらの絡みつく声は、今も脳裏にこびりついている。

それを聞いたデイークは、鼻で笑つて空いた手を呆れ気味に広げながらからかいだした。

「ま、おまえも黙つてさえいればイイ線行つてるってことかもしれね

えぜ?」

「だ、黙ってさえいればって……」

「シャニー、残念な美少女って意味っスよ。……美少女?」

「解説すな!! そのくらいは分かるもん! あと、そこで引つかからないですよ!」

デイクもデイクだが、ミアも大概だ。絶対に分かっているこんな言い方をしているに決まっている。

だいいち、敵軍を前にしていったい何の話をしているのやら。

「彼は女の形をしていれば誰でもいいだけですわよ。貴女のような庶民的な顔でもね」

(庶民的……ガーン……)

思いもよらないところから攻撃が飛んできた。もはや先ほどの雷撃の剣なんかよりはるかに殺傷力が高い。

すでに士気を折られたような顔をしているシャニーに、デイクが物言いたげな視線を浴びせている。

それは束の間のこと、彼はすぐに話を戻した。

「そんな高貴なお方が略奪団に堕ちるとはな」

国外追放を受けたとなれば、こうした末路に流れ着くのもありえるのだらう。いまだに富への執着が尋常でないのは、痴女……もとい、煌びやかな着飾りからもうかがえる。

「? 何がおかしい?」

小馬鹿にするようなレーザーの含み笑いに、デイクの眉間にしわが寄る。

小動物を哀れ見るような目がクスクス揺れる彼女は、「物事は正確に表現すべきですわ」と嘲るようなトーンで続けた。

「略奪団なんてとんでもない。庶民はむしろ守るべきでしょう。わたくしは、ゴールドを救済しているのですもの」

「……は?」

「ゴールドはその価値が分かり、正しく使える者のもとに集まるべきですから」

ついつい変な声が出た。

このわずかな時間でも十分察してはいたが、頭のネジが数本ぶっ飛んだ人物のようだ。セチで慣れていたものの、それともまるで違う方向性でくらくらする。

話せば話すほど、どんどん疑問から遠のいていく気がしてならない。

「じゃあ孤児院を襲ったのはなぜ?!」

孤児院から彼らが奪っていくのは食料と聞いていた。レーザーの口ぶりからするに、金以外に興味はなさそうなのに。

「知りませんわ」

まるで息を吐くように、レーザーは悪びれる様子もなくあっさり突き返してきたではないか。辻褃の合う答えではあるものの、心にカチンと着いた炎が煽られる限り。

「知らないって……! リーダーのくせによくもそんな!」

「烏合の衆がすることを、いちいちわたくしが知る必要はありませんし」

鋒をずいと突き出してシャニーが火を吐いても、まるでのれんに腕押し。眉を下げるレーザーは、呆れさえ含んだ笑みを浮かべ、何を言っているか分からないくらい顔をしている。

(濡れ衣とでも言いたいわけ……?!)

知ろうが知るまいが、この態度ではつきりしたと言えるだろう。筋を通さない相手なら、容赦しないまで。

シャニーは単刀直入に核心へ迫った。

「そうやって、このあたり一帯、あちこちで部下が殺しをやってても知らないって言うわけ?」

「……なんのことかしら?」

やはり、心当たりがあるらしい。

口では白々しいことを言っているが、その目があきらかに歪んだのだ。

突き崩すなら、まさに今しかない。

「いや、部下じゃないね。その雷魔法! それでウラの間人が何人もやられてるんだ! なんてあんなこと!」

神の怒りを突き刺すかのごとき天雷の剣。やられた者たちの傷跡や深い火傷具合とも合致する。これほどに確固たる証拠があれば、逃れられるはずなどないに決まっている。

シャニーがあらためて鋒を突き向け啖呵を切った途端だった。

「ハ……ハハハハハ——ッ!!」

まるで火炎瓶を突き破ったように、あたりに狂喜が燃え広がった。テレーザの目は、それまでの哀れ見る歪んだ笑みがすっかり焼け切れ、赤い憎しみが突き刺すような憤怒をまとう。

「奇遇ね。わたくしも、今からとっておきをプレゼントしようと思っていたのに」

次第に狂喜を収めつつ自身を律するように目を閉じた彼女は、それでも肩を揺らしている。

赤い灼熱は見えなくなっても、黒く重い鉛のような怒りがむくむく脈打ち、いつ炸裂してもおかしくない。

得も言われぬ緊張感は、誰もを身構えさせるに十分すぎた。

「どう言う……」

「受け取りなさいな……」

のどが張りつきそうな中、なんとシャニーが絞り出すものの、もはやそれさえ聞いていないかのようだ。テレーザはおもむろに背後へ手を伸ばす。

「このウエントリヒ・ドンナーの烈光を！」

メガロマニアⅡ

「受け取りなさいな……」

テレーザはおもむろに背後へ手を伸ばす。

「このウエントリヒ・ドンナーの烈光を！」

腰の後ろから姿を現したのは一冊の魔道書。

闇魔法かと思うくらい不気味な濃紫に、攻撃的に尖る黄金のペンタクルが目いっぱい描かれている。

(あんな魔道書、見たことないよ?!)

無意識に魔道書に目を取られていたときだった。

ふいに、テレーザが空へ指を向け——強烈に『流れ』が揺らぐ。

「——ッ。危ない！ レン！」

シャニーの一閃が空間ごと断ち切るように景色を弧に歪める。刹那、若月を思わせる風の刃が弓から弾かれるように飛び出し、レンの頭上からうなりをあげて急襲する剣を突き破った。

「うわき通りだな。行くぜシャニー。——退けや、オラアツ!!」

デイクが言い終わりもしないうちに飛び出し、いきなり大剣を振りまわしている。触れた者たちはボールのように宙に弧を描いて飛んだ。

「作戦目標は対象の戦闘レベル低下と拘束！ ふたりとも取り巻きをお願い！ ルシャナはあたしたちをサポートして！」

シャニーも飛び出しつつ、後ろ目に上空の仲間へ叫ぶ。

もはや彼らに言い逃れはできない。

妙に噛み合わない認識や、返してこなかった『答え』をあらためて聞き出すためにも、まずは大人しくさせなければ。

「レンとでつかいの！ 頼むぜ！」

「デカいの?! ウチはミリアツス！ リーダーの右腕っスよ！」

拳を突き上げて叫ぶミリアの声は、もうデイクには届いていないだろう。

すでに彼は敵陣の真ん中に飛び込み、天馬騎士では持ち上げるだけでウンウン唸る大剣を軽々振り回して縦横無尽に躍動している。

「頼むよ、ミリア、レン！ 背中は任せるからね！ フォーマーシヨン
β-Vで掃射せよ！」

「ガツテンっス！」

シャニーも仲間に陣形を指示してディークのもとへ滑るように駆け寄った。

どれだけぶりだろう。彼と背中合わせに戦うのは。それでも、背中を守るのはきつと初めてかもしれない。

あときは隊長と部下。だけど今は違う。

「アレ、サンダーストームだよね！ 近づいちゃえばこっちのもんだ！」

あの頃の何も知らない突撃兵とは違う。これこそ動乱での経験が生きていると言うものだろう。

太刀を脇に構えたシャニーが風に滑るように飛び出し、レーザー目がけて一直線に突っ込んでいく。

「バカっ、待て！」

とつさに伸ばしたディークの指先が掴んだのは、シャニーの残り香ばかり。

「サンダーストームは高射程の代わりに、あまりの破壊力に接近戦で使えば自滅する……でしたかしら？」

もう少しで届く……時を縮めたように距離を詰め、太刀を握り直しながらもシャニーには違和感ばかり湧き上がった。

(なんで？ なんであんな余裕なんだ？)

魔法使いなら、近接を嫌うはず。なにせ騎士と違い、ローブとよく革鎧だけの軽装備だ。太刀の前ではナイフを前にしたプリンに等しい。

なのに、逃げるどころか避けようともしないままレーザーが迫る――

「なっ?！」

それは瞬きする間の、ほんの刹那のうちに起きた。

しかし、何が起きたのかぜんぜん頭がついていかない。まるで手品のごとく、突如としてレーザーが目の前から消えてしまったのだ。

「シャニーー！ 左だよ！」

「——ッ」

頭上からルシャナの指示が飛んできたのは、「流れ」が乱れたのとほぼ同タイミングだった。

振り向いた先を真つ白な閃光が塗りつぶす。もはや、避ける間合いはない。

「らあああー！」

魔力を乗せた一閃が、突っ込んできた天雷の剣を一刀両断に跳ね除ける。

「そんな下世話な話で、わたくしを語らないでくださらない？」

視界が晴れたころにはもうテレーザはおらず、「流れ」はずでに背後に回っていた。

魔道書を掲げた彼女の頭上へ、紫電の爆ぜる重低音が唸る。無数に召喚された剣は、ガトリングのように次々と襲いかかってくるではないか。

「うわっ、どんだけ撃ってくるのよ?!」

「射程が問題なら、距離を変えればいいだけのことですわよ！」

土飛沫が噴きあがる。突き刺し抉り抜く電撃の嵐を、颯のごとく駆け抜け風刃で振り払う。

転移魔法で動きまわるのでは、追いかけるだけで精いっぱいだ。反動など無いかのようにガンガン打ち込んできて、なかなか近づけずいた。

(なんだ……この違和感。と言うかこれ、どこかで……?!)

考える余裕など無かった。容赦ない雷の滝をすり抜けながら隙をうかがう。

しかし、その攻撃範囲は次第にエスカレートし、略奪団員さえもが手を出せずに退避しているではないか。

「仲間まで巻き込むなんて！ なにを考えてるのさー！」

「おほほ、魔導士の攻撃軌道を確認するなど基礎も基礎でしょう！」

何もかもがデタラメだ。頭だけでなく、戦闘スタイルまでぶっ飛んでいるとしか言いようがない。

「ちつ、なんつー連射だ。こいつはさっさと片付けねえと……」

防御技で凌ぎながら、デイクは背後を一瞥した。

シャニーが戦線を引き上げているから無事なもの、ここまで自棄に乱射されては、孤児院に被害が及ぶのも時間の問題と言えよう。

「シャニーー！ 俺とルシャナでヤツを誘導する。おまえはあれを捕まえろ！ 連射している間は隙だらけだ、おまえなら突っ込めるだろ！」

攻めあぐねて後退してきたシャニーにデイクが叫ぶ。それに呼応して、前を向いたままシャニーは指先で丸を作った。

もはや手段を選んではおれないと、ちょうど思っていたところ。デイクたちが背を守ってくれるなら、絶対うまくいくはずだ。

腹を括って、あの暴走を止めるしかない。

「ラジャー！ セチ、さつきより強めにいくよ！ オーバードライブだ！」

セチと意識を共鳴させ、魔力を解放しようとしてみてハツとした。どこか、体が軽い。

昏い心の向こうに手を伸ばすと、何かが四方から押し寄せるはず。いつもなら、そのまま身動きを取れず意識が遠のくののだが、今回は逆だ。

つるんとその呪縛からはじき出されるように奥へと誘われ、温かく柔らかい、まるで空に浮いて包まれているかのような心地よさが全身に広がっていく。

「いいね、いいね。その調子で溶けあおうか」

（この感じ……なんか、この噛み合うような、馴染むような感じ……力が漲るよ！）

体中を巡る新しい風のなんと心地よいことか。

セチの誘いに導かれるまま、シャニーはしばし静かに目を閉じて“流れ”を聞く。

意識を放り出され、外からの力で操られるような感覚はない。

それは間違いなく体の奥底から湧き出ている。噴き出る温泉にも似てとめどなく、そして飛沫をあげて迸る魔力。それでいて流れは穏

やかで、頭から足の爪先まで満ちて包んでいく。

(今なら、どんな相手でも勝てる気がするよ！)

そっと目を開けたシャニーは、剣を霞に構え直した。

「セチ、いくよ！ あたしたちを見せてやろうよ！」

浮き上がるように飛び出したシャニーは、なぎ倒す旋風のごとくテレーザを突き抜ける。

それでも結果は同じ。すでに転移した後で、脇から斬り上げた太刀は空を切っていた。

「なんと言う速さ！ しかし、どれだけ速かろうと、わたくしを捕まえられるかしら！」

「どうかな？ 追いかけてこしてみようか！」

青いエーギルが彗星の尾のごとくあちこちに軌跡を残しては、テレーザの転移先に向け大きく角度を変える。

(これはパーペチュアル^{千日手}チュエック……いや)

その直線距離は次第に短くなってきている。テレーザは転移だけで手一杯か、反撃の魔法を撃つ間を確実に摘んでいた。転移自体の距離も、満身に詠唱できないから短い。

そしてついに、転移で現れたテレーザがシャニーの視界の端に映った。まだ転移中で身動きはとれないだろうが、この距離なら——届く！

「もらったあ！……ムツ！」

渾身に太刀を切り上げるも、今回も空振り。あと僅かな差だったのは、太刀風にはらはら舞いあがるダークブロンドの髪が教えてくれる。

「あと少しかな。なかなかアガる追いかけっこだ。どんどん行くよ！！」

火山が噴火するように、シャニーから膨らんだ青焰が衝撃をまもつてあたりを揺らす。

燃やせば燃やすほど馴染むセチの魔力で、体が羽のように軽い。全身のバネひとつひとつに感覚がみなぎり、今なら山さえ飛び越えられそうさ。

「なんなの、あの小娘は?! 次こそは——」

仕切り直しに成功したテレーザは、シャニーの背後を取っていた。その目は裂けそうなほど見開いており、魔道書を握りしめる指先がギリギリ爪を立てた。

これでもかと召喚した雷撃を、シャニー目がけて振り下ろそうとしていた手が、糸で引かれるようにピンと止まってしまった。

「お待ちかねだぜつとー!」

その背後から、ふいに戦神の大剣がうなりを上げていたのだ。

デイークの不意打ちから小ワープで辛くも逃げたテレーザだったが、そこを待っていたようにルシヤナが空から突っ込んできた。

槍がかすり地を転がったテレーザは、そのまま再び小ワープで距離を取る。

「くつ、なぜ貴方がここに!」

「素人の考えなんざ分かるつっの。顔がきれいなままお縄について方がいぜー!」

「くつ、下劣な傭兵風情が!」

まだまだ魔力は十分らしい。

捨て台詞を残し凝りもせず転移したテレーザを、デイークはルシヤナに目配せして包囲の準備を始めている。

その二人の間を、なぎ倒された芝が色を変えるほどの烈風が突き破っていった。

「さあさあ、もっと楽しませてよ? 転移魔法って言うのも、その程度だったのかな?」

「くう?!」

新しいおもちゃを手に入れた子供のように爛々とする目。太刀を片手に、シャニーはテレーザを執拗に追い回している。千の疾風を浴びせては、逃げるテレーザへずんずん突っ込むの繰り返し。

その口元は花が咲くように爽やかで、とても戦場にいるとは思えないほど。今にも無邪気な笑い声をあげそうだ。

「おい、なんかあいつ、キャラ違わねえか?」

「剣持つと性格変わるから、あいつ。……でも、確かにいつもとなんか

違うような」

デイクやルシャナも違和感に顔を見合わせ始めた。

もはや3人で囲い込むまでもない。シャニーひとりだけでテレザを追いついでおり、雷はぱったり止んでいた。光速のチェイスタグを繰り広げる二人は、どんどん孤児院から離れていく。

「なっ——?!」

テレザが言葉にならない声をあげて固まる。

ついに流れを読んで先回りしたシャニーが、転移先で構えていたのだ。

彼女はニコニコと「鬼」にタッチすると、後ろに飛び退き太刀を霞に構えた。

「追いかけてっことも飽きちゃった。そろそろ真っ向勝負と行こうよ！

これだけ離れてれば、全力……出せるよね？」

「な……」

「庶民は襲わない。あなたの流儀、しっかり見せてもらったよ」

シャニーは勘づいていた。孤児院はたまたま無事だったのではない。テレザは敢えて狙わなかったのだと。

狙おうと思えば、もつと雷撃を放つタイミングはあったはずに違いない。出来なかったのだ。制御できないほどの破壊力が、孤児院に及ぶのを恐れて。

呆然としていたテレザは「貴女は本当に……いえ」とだけこぼすと、その先を噛み砕くようにギリッと牙を剥いた。

手を広げ、召喚した無数の剣で空が紫紺に輝き膨れあがる。

「このイリアくんだりの小娘が！ 消し飛びなさい！」

号令と共に、雪崩のごとく空が崩れてゆっくり動き出す。

紫の空はまたたく間に砕け、みるみる速度を上げはじめた剣は、吸い込まれるようにシャニーへと集まりその瞳を紫に染めていく。

それでも一切たじろぐことなく、構えを作り直した彼女の視線は、テレザを一直線に見据えて放さない。

「ふふっ、隙だらけだ……ッ」

衝撃波に芝が吹き飛ぶ。クレーターを残して飛び出したシャニー

は、地を滑り降り注ぐ剣の嵐へ突っ込んだ。青の流星が、辺りを侵食する紫電を突き破るようにテレーザへ迫る。

まるで避ける素振りもないのに、一本たりともかすりさえしない。雷剣はシャニーに触れた途端、渦を上げる風のエーギルの前に残らず跳ね飛ばされていたのだ。

「ウソツ、何なのですか?! この化け物!」

出力を上げようとも、迫る流星はますます軌跡を鋭くするばかり。

渾身の魔力を跳ね除けられ、目の前まで迫られたテレーザは悲鳴をあげるしかなかった。

「式の型、ジリオン・ミーティア!」

星のまたたきにも似た、縦横無尽に駆け抜ける風はかまいたちとなり、陽に映える刀身の煌めきにテレーザの姿が包まれていく。

しばらく続いた流星の乱舞の末、彼女の背後に姿を現したシャニーが太刀を払う。直後、止まっていた時が動き出すかのように、旋風に弾きだされたテレーザは吹き飛んだ。

「がっ……は。なぜですか? このわたくしが!」

「勝負ありだね。話を聞かせてもらおうよ!」

膝をつく彼女のもとまで戻ったシャニーは、テレーザの鼻先に鋒をずいと向ける。

周りの略奪団員たちもリーダーの敗北を悟ったか、武器を構えるものは誰もいない。膝から崩れて泣き出すものまでいる。

「従兄弟の不始末は同情するが、手癖はてめえの身から出た錆だ。んな金で家の復権なんざできるわけねえだろ!」

彼らの反応が、デイークの言葉でなんとなく繋がった。おそらく、彼らはテレーザに仕えていた騎士たちなのだろう。

がつくりうなだれたテレーザは、やつれきった掠れ声で笑い出した。

「ふふふ……これでシユヴァルツァー家も終わりよ。……殺してちょうだい!」

「今回の略奪は擁護しようもないけど……無益な殺生はできないよ。それより、ひとつ教えてよ!」

家の復興を目指して、こんなことをしていたと言うことなのか。

もちろん、だからと言って決して許せるはずもないが、どうにも引つかかる。それは戦う前より、一層強い違和感を膨らませて聞かすにはおれなかった。

「ここらで繰り返されたウラの人間の殺害、本当にあなたなの?」

律儀に決闘を申し込み、庶民には手を出さない。それが、敗北と引き換えであっても。

悪人なりに筋を通してこの女性が、あんな暗殺のような猟奇的な殺しができるだろうか。花を飾ったり、ベッドを用意したり……とても繋がらないのだ。

「ハッ……」

まるで何かトリガーを引いたようだった。

それまで悲壮に暮れていたテレーザの肩が揺れ、錆びた歯車が動き出すように掠れた声が漏れたと思うと「ハハハ——ッ!」空を裂くようにいきなり哄笑しはじめたではないか。

「何を言い出すかと思えば! 我が同胞をやったのはあなた方ではないの?!」

彼女はシャニーを指が反り上がるくらい指しながら、怒声をあげ始めた。まるで落雷にも似た金切り声は、耳が千切れてしまいそうだ。

溜まりに溜まった怒雷はそれでも足りず、テレーザの指先はシャニーを外れて空を指す。

「その魔道士が、わたくしの部下を焼き殺したんじゃないの?!」

「いけねえ! 避けるッレン!!」

勘づいたテイクがとつきに叫ぶ。レンの頭上から、紫電の剣が見下ろしていた。

——ッ!

鋭く高い音が響く。緊張に凍りつく場の空気さえ払う一閃が、蝕みかけた最悪を斬り払った。

「勝負がついてからするなんて、……汚いじゃないか?」

「ヒッ……」

かざした太刀にいつ力を込めてもおかしくない。冷たく見据える

シャニーの眼光が、テレーザを背後から貫く。

首筋に太刀を当てられたテレーザは言葉を失い、その手に握られていた魔道書が、音もなく真つ二つに崩れ落ちた。

「これであなたはナシだ」

処遇を宣告したシャニーは、刀を退き一つ払って鞘に収める。とたん、凍りついたように動かなかったテレーザは、糸が切れるようにその場にぺたんとして手を突いた。

「オスティアに連行しよう。きっちり取り調べてもらわないとね」

シャニーはルシヤナたちと手分けして、テレーザを後ろ手に縛って拘束を始める。それでも、彼女の部下たちは剣や槍を地に刺し、一切反抗を仕掛ける気配も見せなかった。

唇を噛み締めるように凜とした顔で主人のもとに集まる姿は、堕ちても大国の騎士の誇りを最後に示すよう。

なんだろう。終わったはずなのに、虚しさで胸が苦しい。

それでも、シャニーは彼らに背を向けて、ひとりひとりを勝利の笑みで労った。

「ありがとうディークさん。たくさん調べてくれてたんだね」

「礼はいらねえよ。いい賞金首だったから調べただけだしな」

よく知るキリツとした顔は、仕事人らしくて寄りかかりなくなる強さがある。

ところが、その顔はすぐホクホクしはじめたではないか。さっきの顔は夢だったのかと錯覚するほど。

「さあて。契約外に出張費と、いくら弾んでもらえるかねえ」

「ディークさん……また悪い人みたいな顔してるよ」

「ああん？　ちゃんと料金体系含めてサインしてんだ。当然の話だろ」

目もと口もと、ふんだくつてやろうと皮算用にニヤつく姿は、せつかくの勇ましいリーダー像をぶち壊してくれる。

「オジサン、顔だけで食べていけそうだよね」

ルシヤナの言うとおりだ。

たしかに契約かもしれないけれど、この顔で凄まれたら勝てる人間

などそうはいないだろう。

「どう言う意味だ！ あとオジサンはやめろっつもの！」

デイクはそう言っつて全面否定しているが、皆笑っつて背中を押す。孤児院へ戻る勝利の道すがら、女子4人は散々にデイクをおもちやにするのだった。

鬱陶しそうに歯をギリギリしながらも、どこか嬉しそうな彼の横顔をシャニーはずつと見上げていた。

白夜千年を越えく Buster the Ghost
of Dragons
リスタート

真夏の太陽が空を白く塗りつぶす。

窓から滝のように降り注ぐ熱波で肌が焼けてしまいそうだが、爽やかな風がからりと吹き流してくれて心地よい。

今日はとりわけ気分も明るく、皆の顔にはどれも柔らかな笑みが浮かんでいる。

シャニーたちは、孤児院の園長室で勝利の余韻に浸っていた。

頭領テレーザをはじめ、略奪団シユヴァルツアー・ブリッツの面々を、オステイアにあるリキア同盟の犯罪捜査管理局に引渡して一息ついていたのだった。

「本当にありがとう！ みんなも喜んでるよ」

明るいトーンを弾ませるルウに光る笑顔は、いつにも増してふんわり優しい。

子供たちを脅かすなら者がいなくなつて、きつと安心していいだろう。今日からは枕を高くして寝られるに違いない。

「そう言ってもらえると、あたしたちも嬉しいよー！」

彼の声につられ、シャニーも花が咲くように爽やかに返してハイタッチしあう。

7月に続いた勝利。シャニーにとっては勝利そのものより、守りたかった者たちの元気な声にじんと来た。平和を勝ち取った証が、何より心を満たしてくれるのだ。

「ま、まだ全部終わったわけじゃねえけどな」

「うん、ちょっと後で状況確認に行かなきゃね」

そんな浮かれる気持ちへ、デイークは釘を刺すようだった。

シャニーも忘れていたわけでは無かった。いや、むしろこれからが

本腰を入れるステップとも言えるだろう。

もともとの任務内容からすれば、まだ何も解決していないわけだ。

「これで安心してお客さんを招待できるよ」

「そういや、確かイベントがあるとか言ってたよな」

デイクが聞いたおかげで、シャニーも孤児院に来た初日にルウが教えてくれた話を思い出していた。

略奪団を何とかして欲しいという依頼も、お客さんに安心してもらうためだったはず。そこまですて準備する客人……考えるまでもなくシャニーは歓喜をあげた。

「もしかして、有名パティシエが来るとか?!」

「おまえは少し黙ってるな」

「ちえー。これだから夢のないオジサンは〜」

デイクからの露骨なジリジリが刺さる。

それだけで済まず、頭を掴まれて椅子に放り出されてしまい、お尻がすっぽりソファにズドン。

ぶうぶう膨れていると、そんなささやかな夢など軽く吹き飛ばして余りある名前をルウが口にした。

「もうすぐギネヴィア様がお越しになるんだ」

「はあ?! ギ、ギネヴィア様って、あのベルンの?!」

心臓が止まるかと思った。

ギネヴィアと言えば、現ベルン女王だ。動乱では兄である先王と、真っ向から対立する形でロイと行動していたらしい。

そんな高貴の最高峰と一傭兵に面識などあるはずもない。どんな人かよりも、どう接すればいいかばかりで、今から口が乾いてくる。「おいおい……。んなもん、ゴロツキに毛が生えた程度の俺らには荷が勝ちすぎてんだろ」

「あのね、デイクさんの見た目はともかく、あたしたちは叙任を受けた正騎士ですからね?」

「誰が山賊だ!」

「いや、そこまでは言っていないし……」

海千山千のデイクですら、どこか及び腰な口調になるくらいだ。

彼を軽くいなしたシャニーだったが、内心は同感だった。むしろ、彼女たちには更に責任が重い話と言える。リキア同盟として、そしてイリア騎士団の代表として対応することになるのだから。

それを感じていたのはシャニーだけでは無かつたらしい。ルシヤナも眉を下げて合点がいかない様子だ。

「どつちにしても、荷が重いってのは確かじゃない？ そんな偉い人なら、近衛兵がつくんじゃ？」

「ああ。リキア同盟の主力で護衛するのが筋つてもんだろ」

腕組みしながら渋い顔をするデイクも、どう見ても腹落ちしている感じではない。

彼らの疑問はもつともなものだろう。一国の長、あまつさえエトルリアと肩を並べる大陸双頭のひとつベルンの女王だ。どんな大軍を引き連れていてもおかしくないではないか。

とは言え、もしそうであれば、あのような手合いなどすぐ摘まみだされて終わりだろう。それができない事情があるということになる。

「ここはお忍びだつて聞いてるんだ。ほんとは、エレンさんつてシスターさんが、ギネヴィア様の公務中の時間で会いに来てくれるつて話だったんだけど」

聞くところによると、ギネヴィア付きのシスター——エレンとルウに交流があつたようだ。

女王が公務で訪れる機会に旧交を温めようとしたのが、どうやら違う方向に行つたらしい。

尻すぼみになって視線を逸らすルウに、デイクが呆れ混じりの深い息を吐いている。

「女王様知って、目をつけられたつてところか」

「うん。みんなのことも手紙に書いたら、是非につて」

「おいおい」

ところが、一転ルウが目元を綻ばせ語りだすや、デイクの目にギンと力が籠る。

両手をテーブルに突いて身を乗り出した彼は、凄むようにルウを見下ろし始めたではないか。

「なに勝手に紹介してくれてやがる。要人、なかんずく他国の女王の警備なんざ、完全な契約外じゃねえか」

「え、ごめんなさい」

もはや、いたいけな少年を脅す裏社会の怪物にしか見えない。

ルウは目を白黒させ、必死に詫びの言葉を絞っているではないか。無性に心を引き絞られたシャニーは、堪らずデイクの腰を引っ張った。

「だ、大丈夫だよ、ルウくん。あたしたちの力を見てもらえるなんて光荣だし、このオジサンも喜んでるから！」

彼のお尻にグープパンチを浴びせてやるものの、今回も痛いのは自分だけ。

グキツと負けて手首をぶらぶらさせていると、デイクはルウから顔を離し、シャニーのお尻が浮くくらいドツカリとソファにふんぞり返った。

「はっ、やぶさかでもねえ。リキア同盟のメンツを守ってやんねえとなあ」

頭の裏で手を組みながら、デイクはさも使命感に満ちたように口をしているが、その顔は見るからにホクホクだ。

おおかた、契約外業務でいくら積めるか皮算用しているに違いない。青褪めながら計算器片手に口角泡を飛ばすマリナスの姿が今から想像できる。

「まーたそう言う悪い顔を」

「副同盟主の嫁としても、外せねえ話だろ？」

横目に牽制しながら肘で突っついて自重を促すものの、間もないくらい反射的に返ってきた言葉に頭を撃ち抜かれていた。頭だけ風船にでもなったようにふわふわする。

「よ、嫁につて！ もおくん！ デイクさんたら〜」

バンバンとデイクの肩を叩いて歓声をあげるシャニーは、一人紅潮してうっとり別の世界に行ってしまったている。

あっさりと彼女を籠絡したデイクは、催眠から覚ますようにシャニーの頭に手を置いた。

「そうと決まったら、明日オステイアにいったん戻るか」
「そうだね。まだ終わってないしね」

◆◆
——翌日

デイクを連れてシャニーが朝一に天馬を飛ばした先は、オステイアの犯罪捜査管理局だった。

昨日引き渡したトレーザらの取り調べが執り行われており、捜査状況を確認したかったのだ。お互いの違和感と推測の答え合わせと、新たな可能性を探すために。

「ふいふ、終わった終わったあ〜」

管理局から出てきたシャニーは、夏雲を吹き飛ばすような清み声を残暑の空に放った。頭の後ろで手を組んで、鼻唄混じりに歩きだす。

「ご苦労さんだった。今回は頑張ったな。お手柄だったぜ」
横に並んだデイクに頭をポンポンされた。

トレーザ一味は裏の世界では賞金首になるほどのようで、表の世界でも手を焼く存在だったらしい。

たしかに、あんな迅雷の魔法は無効化する手立てがなければ、近づくことも出来なかっただろう。

「えへへ〜！ ありがと〜！」

CIDやリキア同盟主からお褒めの言葉を貰って、ただでさえルンルンだった気持ちは、デイクの一言で天に突き抜けた。

なにせ、デイクが褒めてくれるなど初めてなのだから。

「なんか〜褒美欲しいなあ〜?」

気分のまま猫撫で声でおねだりしてみる。

今まで上手くいった試しなど無い。「バカ言うな」と毎回真つ二つにされてきた、もはや掛け合いのようなものだ。

「バカ言うな」

やはり、今回も問答無用の袈裟斬りを喰らった。

ところが、お約束にがっかり肩を落としていると「と言いたいたいところだが……」どうやら続きがあるらしい。

「今回はがつぱり儲けたし、昼飯ぐらい奢ってやるぜ」

一瞬、時間が止まった。

まさか、あの鬼師匠デイクが、褒めた上にご褒美までくれるなんて。

まるで福引の一等でも当てたように、シャニーはびよんびよん跳ねながら黄色い声ではしゃぎだした。

「ヤッター!! じゃあ、食べ放題に行こう!!」

もう頭の中は戦闘モード。

限られた時間の中でいかに多くを見つけ、その中に主役を見出すか。食べ放題とは即ち、研ぎ澄ました五感を全身全霊に捧げて挑む、幸せを掴む戦いなのだ。

「……待て、おまえの言う食い放題って言うのはって……オイ!」

「と言うわけで、いったん着替えて行こう!」

鼻息荒く飛び出したシャニーの耳には、もはやデイクの声など聞こえていない。

一度振り返った彼女は、手首が取れそうな勢いでデイクに手招きし、事務所のある旧市街に向け出力全開で土煙をあげた。

「あの暴走具合……嫌な予感しかしねえ」

今更どうにもならないボヤキを口にしながら、デイクは重そうな足取りできやつきやと跳ねる背中を追った。



コーヒートの芳醇な香りが幸せな時をふんわり包む贅沢な空間。

白塗りの壁は木の温もりが柔らかく、格式高い調度品で整った部屋の角張りを和らげ調和している。

シャニーがデイクを引っ張って行ったのは、リキアに生きるスイーツ好きの聖地だった。今日も広いはずの喫茶室は満員で、四方から弾む満足が波のように押し寄せてくる。

「チツ、居心地わりいぜ」

その一角でコーヒートを一口したデイクが、テーブルを見下ろして深い息を吐いている。

カップ用しか空いていなかったとは言え、カップを置く場所にすら困るほど皿が敷き詰められている。

「えー、じゃねえだろ!!」

そこを何とかと続けようとしたものの、デイクに頭をグイッと押し下げられてしまい、ペロツと舌を出しておく。

呆れたように鼻から息を抜いた彼は、ソファの背に腕を任せてくつろぎ始めた。完全に身を預けて上を向いてしまい、どうにもテーブルの上にはさっぱり興味無さげ。

「デイクさんは食べないの?」

「はっ、オジサンには若者向けの甘ったるいのは重くてな」

自虐のつもりか。デイクは鼻で笑いながら、ハードボイルドを決め込むようにコーヒーを啜りだした。

なんと冷めて乾き切ったことを言うのだろうか。これを偏見と言わずして何と言う。

「そりゃいけないね」

体内のスィッチが入ったようだった。

それまで幸せの海に浮かんでいたシャニーの目が、ギツとまなじりを裂く。それは戦場で太刀を構えるにも似て、鋭い眼光がデイクを突く。

「スィーツがただ甘いなんて認識ツ、それぞれのものが甘すぎるツ!!」

「ヤベツ……」

「大人の疲れを癒す、甘くないスィーツだってあるってのを見せてやる!」

立ち上がったシャニーはビシツと指をつき向け、まるで敵を前にしたように啖呵を切った。

鋒を向けるようなその迫力に、後ろ手を突いてデイクは固まっっている。顔を見ただけで敵が逃げ出したとの逸話を持つ、手負の虎でさえ魔人には勝てないらしい。

その間にも、シャニーはウェイターを呼び手際良く注文を始めている。

「あっ、こらー! 勝手に頼んでんじゃねえ!」

「騙されたと思って。ふっ、これはあたしをオゴリだぜ。ってね」

「ったく。甘いもんの話はマジで地雷だぜ」

頭をボサボサやったデイークは、ボヤキながら徐にカップに口をつけた。まるで首根つこを摘ままれた猫のように大人しい。

虎が小さくなる姿に、シャニーはスイーツを頬張りながら目でもスツとした。

再会してからお世話になりっぱなしの彼に、お返ししたいとずっと機会を探してきた。スイーツ一個で済むわけなど無いのだが、それでも無性にそうしたかったのだ。

正騎士として働いて得たお金で出来た、大事な人への初めてのプレゼント。心は晴れやかで、スイーツがまた一段と沁み渡る。

しばらく心地よい喧騒の中で休息を楽しみつつ、足を組んでソファにどっかり座るデイークを眺める。天井を見上げる彼は、サングラスで起きているのかさえ分からない。

「それにしてもさ、ちゃんとした服持ってんじやん」

「TPOはわきまえねえとな」

今日のデイークは一味違う。

ドレスシャツとスキニーズボン、それにローファーを黒でキメ、グリーのテラードジャケットで締めたオシヤレなオジサン。上半身半裸で、くたびれたボロボロのズボンを履いた戦神とは別人のようだ。

褒めるとまんざらでもないのか、鋭いカットが厳ついサングラスが少し緩む。

「うん、カッコいいよ！ どっかのマフィアみたい！」

「……おまえもなかなかネジがぶっ飛んでんな」

思わず口走ってから、「あっ」と口に栓をしても遅い。

案の定、デイークの眉は下がってしまっており、心なしか背も丸まってせつかくのイケオジも台無しだ。

しばらくスイーツを頬張ってデイークの眉が元に戻るのを待つ。

彼はお替わりした熱々のコーヒーを口しつつ、天井を見上げていたと思ったら、「しかし、どうするよシャニー」そう唐突に言っただけ視線を向けてきた。

「おまえも流れとやらで気づいてんだろ？」

いきなり真面目な話をするなど反則だ。

スイーツが詰まりかけ、危うく喉が破裂するところ。とつさに紅茶を口にするも、湯気立つそれは新たな凶器でしかない。「んくくツ?!」と声にできない悲鳴をあげても、デイクは他人のフリを決め込んでまるで心配してくれない。

「へーへー……。ふはあ、死ぬかと」

「……おまえはどこでも死ぬそうだな」

「なにさ、どこでも寝られそうみたいに。あつ。でも、スイーツで死ぬるなら、スイーツ好きとしちや本望かあ」

「……」

デイクと喋りながら呼吸を整え、落ち着いたところで頭を整理する。

元はと言えば、作戦を練るために落ち着けるここに来たのを忘れかけていた。

「……話を戻すぞ」

「うん。テレーザを倒しても、あの気持ち悪い『流れ』は消えてない」彼女の魔道書を真つ二つにした時から、違和感は拭えないまま。いや、むしろ膨れ上がったと言える。

場を観測するような黒い眼差しは消えるどころか、まるでほくそ笑むような流れを呼んで場を揺らしたのだ。

つまり、テレーザがその主でないのは疑いようもない。

「分かっていたとは言え、これでまた振り出しだな」

「デイクさん気付いてたの?」

どうやらデイクは、もつと前から標的に気づいていたらしい。

勝利にはしゃぐミリアたちに弄られていた時も、デイクはどこか考え事をするように、鋭い視線は外を向いていた。

「まあな」

そう言ってコーヒーを啜った彼は、姿勢を正すと腕組みし始めた。

「裏で情報を探ってた時にもそうした情報はあったが、あいつ自体にあれほどの臭いはなかった」

「え? でも、賞金首になってたんだよね?」

「あんな魔導書がありゃあ誰でもそうなる。単に力を手に入れていい気になっていただけだろう。実力自体は素人そのもので拍子抜けつてな」

「は、はは……。あらためて、デイクさんが味方で良かったよ……」
テレーザが戦闘慣れしていないのを、デイクは即見抜いていたらしい。

転移魔法を使われても、彼はまるで転移先を知っているかのように先回りしていた。あのときは何か奥の手があるのかと思っただが、テレーザの手を先読みして動いていたと言うことか。

そうになると、ますます魔導書がひっかかる。施されていた細工も含め。

「魔導書に毒が仕込まれてたんだよね」

毒を盛られた……。それだけなら、この界限では良く聞く話であり、シャニーも特段驚きはしない。

問題は、その毒と、その盛り方だ。

魔導書に魔力によつて毒が封じられ、術者が魔力を共有した瞬間、全身へと取り込まれる特殊なもの。

つまり、魔法使いにとつては、魔道書自体が毒と言うことになる。

特に気味が悪いのは、魔力によつて魔道書へ毒を込める技術など、前代未聞らしいことだ。

シャニーも腕を組んで頭を捻ってみるものの、魔法なんかサツパリだった。闇魔法の^{テイメ}大家なら何か知っているかもしれないが、イリアに帰れない今では頼りようもない。

「ああ。テレーザは、あの魔導書は譲り受けたと供述したらしいな」
「テレーザに孤児院で暴れた記憶はないって言うし、操られてた……ののかな？」

「その線もあるだろうが、ますますその目的が読めなくなったわけだ」
事情聴取を受ける略奪団員たちは揃って落胆し、信じられない口にしたと言う。彼らいわく、テレーザがあんな仲間を巻き込むようなことをしたのは、魔導書を手に入れてからのようだ。

テレーザの供述や検出された毒と照らし合わせても、毒による

凶暴化が原因なのは疑いようもない。

ここまで明らかになつたところで、デイクの言うとおり振り出しに戻っただけと言うわけだ。犯人像も、その目的も、これからの標的も。何もかもが根拠もない推測でしか進まない。

シャニーも体や首を捻りながら、目がひっくり返りそうになるくらい天井を見上げて絞ろうとするものの、結局1つしか浮かばなかった。

「違うよねえ……。ギネヴィア様が来るのを狙ってっていうのは」

「だな。それだと孤児院をテレーザに襲わせる理由が分からん」

それさえも、デイクがもやを払うように振った手に秒で崩されてしまった。

とは言え、それはシャニーも同意だった。暗殺目的なら騒ぎ立てないし、目立ちたいなら孤児院は今ごろ吹き飛んでいたに違いない。

兎にも角にも、目的が何も浮かばないのだ。「となると……」呟いてみたものの、シャニーにはもうネタがなかった。ただ、一つを除いては。

「……何か本題に向けた実験か何か……かな」

「あれ自体が目的ってか。ハッ、冴えてんじゃねえか。可能性は低くないと思うぜ」

見たこともない魔道書といい、知られていない魔術含めて、それらの効果検証を得るためだったなら。

デイクも指を弾いて身を乗り出してくるあたり、盲点だったのかもしれない。

「だとしたらさ、もっと別の大掛かりなものを想定してるってことかな」

「いずれにせよ、女王が来るとなれば警戒は解けねえな。毒まで使うとなると尚更だ。この際、こちらの綻びは繕っておかねえと」

そこまで言ってデイクは黙ってしまった。

口元は戦場にいるかのように固く閉ざされ、視線は突き刺さるよう。

サングラスで隠れていても、視線が頭に注がれているのははっきり

分かる。真剣な顔というより、睨んでいるという方が近い。

それから逃れるようにスイーツにフォークを通した、まさにその瞬間だった。

「おい、シャニー。なんだ、その髪は」

ビクツと肩が跳ね、危うくフォークを落としかけた。

見えないように気をつけてはいたものの、やはりこの距離で凌ぎ切るには無理があったか。

ただでさえ、目の前にいるのはデイクだ。小手先の言い訳で誤魔化せるような相手ではない。

「え？ ナ、ナンノコト？」

それでも、咄嗟に出たのはすつとぼけた声だった。

自分でも笑ってしまいそうになるくらい、誤魔化すつもりがあるのか分からないほど下手な芝居だ。

それでも不思議なことに、デイクは歯を見せてからかうようにはつはと笑いだした。

「ヤンチャになったもんだな。はつ、若いねえ」

「そ、そうだよ！ ちょっとイメチェンしてみようかと思つて！」

ノリに合わせつつ、頭に湧き上がってきた言葉を巧みに繋げて言い訳してみる。

一緒になつて笑っていたつもりが、気づくとへらへらしているのは自分だけ。まるで、錆びた風車が力尽きるように、軋んだ笑いは急に勢いを失い、そのうち止まった。

「シャニー、冗談はここまでだ」

デイクの鬼のように固く結ばれた口が開いた瞬間、決定的となった。

やはり、彼相手に口先で勝とうなど無理な話か。

逃げ場を無くしたシャニーは、デイクが顔を近づけるほどに磁石のように視線を逸らす。

テレーザとの一戦でエーギルを使いすぎた自覚はある。そのせいで、雪のような真白ではないにしろ、髪先の色が抜け落ちてしまったのだ。

ところが、デイクが続けて問うたのは、そんな見た目ではなかった。

「孤児院でのアレはおまえか、それとも、例の憑き物か」

「……」

シャニーは俯いて押し黙るしかできなかった。

デイクと斬り結んだ時にセチの具現は見せているから、彼が存在自体を知っているのは当然だ。以前には、セチと会話しているのを勘付かれたこともある。

おそらく、彼が聞いているのはそんな話ではない。身に覚えがあるからこそ、いざ突かれると後ろめたさを隠せない。

「だいたいの話はルシャナから聞いている。答えろ」

しばらく唇を噛んで流れに預けてみたが、どうやら逃してはくれないらしい。

デイクの重く静かな口調は、やはり怒っているに違いない。見習い時代、毎日聞いたこの声を当てるクイズなら、優勝できる自信だつてある。

シャニーはふうつと小さくも深い息を吐き出すと、ついに白状した。

「うーん、なんて言うか……。半分あたしで、半分セチって感じで……」

どうにも味わったことのない不思議な感覚だった。

意識は自分、体を動かしているのも自分。なのに、戦場を駆ける五感や体中から湧きあがる力は、まさに人外そのものだった。

それこそ、理の外に身を置いたような、自分が自分でなくなる感覚……そこにセチの意識が溶け込んで、膨らむ高揚感のままに挑発的な言葉を発した自覚はある。

「飲まれてたのか？」

「ううん。あれは、あたしに主導権があった」

それを言った途端だった。デイクのゲンコツがそつと頭に乗った。

「ヤンチャし過ぎだぞ。おまえ、力に酔ってただろ」

思ったとおり、デイクには完全に見透かされていた。逃げようのないストリートな言葉が、胸にまっすぐ吸い込まれていく。

(あれは……あたしの剣……あたしの求める剣だったの?)

あのときは、混ざりあうのではなく、セチと解けあっていた。

セチの力を使いこなせてきた自覚が、少しずつ自信を呼んできた。とは言うものの、問いかける自分の声にイエスと言えない自分がいる。

何も言い返せずに俯いていると、デイクの手が肩に乗った。

「おまえの剣は守るための剣だったはずだ。たしかに、おまえはすべてを守ったとも言える。だが、あそこまでやる必要があったか？」

手が乗るだけでも、心にこびりつき絡まる矛盾がなんだか解けていくよう。直後に投げかけられた問いが、渦巻く葛藤に風穴を開けた。

「……ごめんなさい。やっぱ、そうだよ。ありがとう、言ってもらえてすっきりしたよ」

「てめえの流儀は見失うな。おまえが鍛えるべきは——」

デイクはシャニーの肩に置いた手を降ろし、そのまま胸元に……。

「……ッ！」

「——コおおつ?! こ、ココだ」

反射的に叩く準備を始めたところで、デイクも今日は鎧が無いと気づいたらしい。

目をむいたと思ったら、糸で引くようにすつと手を引っ込め、バツ

悪そうな顔で自身の胸を叩き出すからまるで締まらない。

「ちえ、もう少しで昼ごはんもオゴリのトコだったのにい」

「……なんっか。そんなんでいいのか……おまえ」

「あつ。ははーん。デイクさん……エッチなこと考えたなー?」

「~~~~~。誰がおまえみたいながきを相手するかつつの。だいたいい、おまえはな——」

軽くからかったのが間違이었다。

タガが外れたようにデイクの説教が始まってしまい、小言のめつた突きで体中穴だらけになった。

「とにかく！ 力をきちんと『操れる』ようになれ、いいな」
「はぁ〜い。永遠のテーマって感じだよ。はぁ……」

コーヒールを一気飲みしておかわりを呼ぶディークを尻目に、仕切り直してスイーツを一口したシャニーは自身の胸に手を置いて青息吐息だった。

どーしてこうなるのお?!

誰もいなくなった事務所は、いくら狭くても一人では持て余す。オスティアでの調査を行った日。そのままリキア連絡所に滞在したシャニーは、空を真っ白に染める朝日に目を覚ました。

霞む目を細めて窓の外を眺めたあと、室内を見渡してふと寂しさが胸を揺する。

板のように差し込む朝日に埃が浮かんでおり、それ以外に動くものはない。音もなく、きんと静寂が真っ暗な稽古場の奥まで続いていた。

「一人って……久しぶりだな」

今日はオスティアを始発として、デイクと共にフェレまで飛んでロイに報告するつもりだ。

朝稽古を終えても、まだデイクとの待ち合わせまでかなり時間がある。

「よっし……。ここはいつちよ、フンパツしますか!」

事務所の仕事を適当に済ませたシャニーは、オスティアの街へと飛び出していった。



陽もすっかり昇り、最初のおやつが恋しくなる時間。

シャニーはデイクの事務所の前を叩いていた。とは言っても、同じ旧市街に事務所を構える彼の元へは、徒歩で5、6分くらいのご近所さんなのだが。

「デイクさん! おまたせ!」

ドアが開き、デイクが顔を出す瞬間を見計らってシャニーはくるりと一回転して見せた。黄色のワンピースがふわりと風に咲き、腰のリボンが踊る。

作戦どおりに、デイクが目を見張っているのを見つけたシャニーは、白い歯を見せしてやったりと笑う。

「なんだ、おめかしてるじゃねーか」

「えへへ、ありがと。似合う?」

もう一度リボンを風に靡かせるように回ってみせてみた。

白と悩んだ末、いつも軍服が白だから違う色にしてみたが、デイクは何と言うだろう。

ロイに見せる前に意見を聞いてみたい……その思惑はあつさり失敗した。

「馬子にも衣装だな」

「ぶー！ ひどい！」

「なんだ、ちゃんと覚えてたか。エライな」

「……」

からかわれた挙句、追い討ちまで喰らってさすがに目に火が入る。口をこれ以上ないくらい尖らせ、目に力を込めてデイクを睨んでやった。

なんだか……この光景、既視感がある。そうだ、見習い時代にも同じように言われたことがあった。

ただ違うのは、あの時は褒め言葉だと思っていたくらいか。

(ワードに自慢したらバカ笑いされたんだっけ……。ううう！ ムカつくう!!)

喧嘩仲間を思い出したらますますメラメラ来た。さぞ怖い顔になっっているに違いない。

デイクも懲りたのか、ふっと笑うと肩をポンポンしてきた。許せと言ったつもりだろうか。

そこで何も言わなければ許してあげたのだが、どうして彼はわざわざ火をつけてくれるのか。

「ロイにもらったのか?」

「ちがいますうー。自分のお給金貯めて買ったんだい！」

ここに来る前に、ちよつとしたおしやれなブティックに行つてかなり頑張ってきたのだ。

給金や追加報酬はほとんどイリアに仕送りしてしまうから、オシャレは天馬から飛び降りるくらいの覚悟がいると言うのに。

「もう、みんな失礼しちゃう！ なんでもロイに集つてると思つてさ。」

あたしそんな悪女じゃないもん！」

ロイにあれこれプレゼントしてもらっているのは否定しない。

ロケットに、ピアスに、服に時計までも。……あらためて並べてみると、たしかに全身ロイからもらったものを纏っているかもしれない。

それでも、ちゃんと稼いだ給金で頑張っているとデイークには知って欲しかった。誤解されるのはロイにだって悪い。

ところが、デイークはわざとらしい疑り声で見下ろしてくるではないか。

「へえ？　いつもロイに高級スイーツを買ってきてもらってるとか、ミリアが言ってたがな」

(あ・い・つ・めえくっ)

ニシニシ笑うミリアの顔が浮かぶ。彼女だってそのおこぼれにあやかっているクセに。これだから噂好きは。

「あ、あれは！　オステイアに行ったついでに買ってきてくれるって言うから。そ、その、ほら！　限定20個激レアスイーツだし！」

「……今のうちに白状しとくか？　悪女さんよ」

「悪女じゃないもん！　というか！　そんなの7月が最後だよ！」

デイークの生暖かい目線が見下ろしてくる。たまらず両手で彼の腰を押し飛ばした。

せつかくロイが買ってきてくれると言うのに、断るなんて悪いではないか。なにより、2人っきりの時間を作るチャンスなわけだ。逃す手は無い。

デイークも分かってくれたのか、その目から薄ら笑いが消えたものの、違うところで引っかかったらしい。

「7月つーと、俺も集められたあの場か？」

「そうだね……まるまる1ヶ月……だね」

「なんだ、そんなに会えてねえのか」

頭では分かっていたはずが、いざ聞かれると心が引き裂かれるように胸が熱くなってきた。まるでそのまま、ロイとの距離まで引き離されそうなの。

「うん……。だからさ！ 早く行こ！」

でも、それも今日で終わり。シャニーはデイクを乗せて空へと翔けあがった。

ロイはまっさらなワンピースを喜んでくれるだろうか。まず何を喋ろう……。フエレへの道すがら、そんなことばかりが浮かぶ。

目前に城が見えたとき、道中どんなルートで来たか記憶がないくらいだった。



天馬が城に吸い込まれてから数時間後、静かに本館の扉が開いた。爽やかな声が響くでもなく、聞こえて来たのは顔を出すマリナスに別れの挨拶をするデイクの声だけ。

シャニーは火が消えた暖炉のように、とぼとぼ寂しそうに歩いていく。

「シャニー、お互い残念だったな」

後から追いついたデイクが声をかけても、振り返ったシャニーは深いため息をつくばかり。

「デイクさんはいいじゃん。ちゃんと成果報告できたんだし」

自分はともかく、デイクは残念どころかしめしめと言ったところだろう。口には出さなくとも、散々ふんだくってホクホクしているのは口調で分かる。

「あのジジイ、財布の紐が固すぎんだよな」

「よく言うよ。凄んで目いっぱい引き出してたくせに」

ロイがないことを良いことにやりたい放題。最初はガミガミやって対抗していたマリナスも、デイクに凄まれた途端、「ひいつ?!」と悲鳴をあげたら後は言われるまま。

最初こそ当たりの強かったマリナスも、最近はかなり柔らかい。ガミガミこそ相変わらずでも、お菓子を差し入れるとぶつくさ言いつつ、笑ってお喋りするツンデレじいさんになった。

どこか姉に似る彼がデイクに脅されるのは、見ている可哀想なくらいだった。

「ハッ、おまえも生見でいい勉強になったろ？」

「ならないよ!!」

「あん？ そんなお人よしじゃ、傭兵なんざやってけねえぞ？ 今度はおまえに交渉させるとすつか」

「ヤダー！ ムリだよお！」

「為せば成る。何事もつてな」

「あたしは謙虚な騎士を目指すの！」

こんなか弱い乙女に、なんてことを仕込もうとしているのだろう。シヤニーは首が吹き飛んでいきそうなくらい、ぶんぶんやって突っぱねた。

当たり前前みたいに言うが、デイクのようにできる人の方が珍しいに決まっている。

おまけに、彼はまたマリナスをターゲットにしているようだが、彼が交渉の席にいては困るのだ。

「はあ、せめて声だけでも聞きたいなあ……」

丸まった背中に絞られるように、どうしてもため息が出てしまう。今日だって、本当はロイの顔を見て成果を報告しようと飛んできたのに。せっかく新調した服も、これでは台無しだ。

まさか、入れ違いでロイがオステイアに向かってしまったとは。

「なら、今からオステイアに行くか？」

「ううん。ロイも忙しいんだし、邪魔しちやダメだよ」

デイクは「ちよつとくらいいいだろ」と背中を押してくれる。

逢いたい。たった5分かもしれないけれど、少しでも顔を見たいし、声だつて聞きたい。

それでも自分に言い聞かせた。今はお互いに頑張るとき。今度会えるときまで、目いっぱい楽しみをとっておこうと。

シヤニーは決意をグツと握った拳に込めると、自分への新たなご褒美を目指して目に火を灯した。

「かわりにデイクさん！ 今日のは整うのに付き合つて！」

「あん？ まあ……しょうがねえか」

手をぐいぐい引つ張られ、要領を得ないままデイクは天馬に乗せ

られるのだった。

一番が、二つあったら？

真っ赤に燃える太陽が、大聖堂の鐘の隙間から溢れ出すように、オステイアの街を赤と黒に染めている。

群青とオレンジが滲む空の下、あちこちで明かりが灯り始め、夕暮れの路地に新しい始まりを告げる。

そんな明かりたちに彩られた湯煙が上がる建物から、のんびりした足取りでシャニー達が出てきた。

「はーっ！ リキアのサウナはやみつきになるね。イリアの温泉も捨てがたいけどさ」

ルシヤナたちと合流したシャニーは、略奪団退治のお疲れ会も兼ねて、オステイアの夜で遊ぶことにしていた。

さっそくりキア名物のハーブサウナで整えた彼女は、うんと身を弓のように伸ばしてきやいきやい歓喜をあげている。

「ああ。あの大自然の中で入る温泉も別格だな」

デイクが懐かしそうに言うくらい、温泉はイリア唯一と言って良いほどの観光資源であり、世界的に有名だ。

「今日も長居しちゃったよ。あのハーブ、癒されるんだよね」

整えると言えば、イリア温泉を置いて他にないとシャニーも思っ生きて来たが、リキアのハーブテントやロウリユもなかなかのもの。それこそ、人生のバイブルに新たな歴史が刻まれたような衝撃だった。

暑いリキアの夏を乗り切るには、欠かせないものと言えるだろう。

「汗いっぱいいかいちゃうけど、それがいいんだよね」

「そうそうー！」

最初もルシヤナはそう言って誘ってくれた。

あのときは、暑いのにわざわざ汗をかくとか信じられなかったが、今では彼女以上にすっかりトリコ。

「サウナ上がりのジェラートを引き立てる最高の布陣だね！」

何と言っても、サ活あがりには人生の至高が待っているのだから。

熱った体に素朴な甘さがじんわり沁み渡り、内から爽やかな風が吹

き抜ける、整うための最後にして最高のピース。

サウナは至宝を極限まで輝かせる、最強のステージと言えるだろう。

ところが、まわりに苦笑いが広がったと思ったら、デイークの白い眼差しが降ってきた。

「おまえにとつては全部そこに収束するのな」

「あつたりまえだよ！ あの10分のために世界は存在するのさ！」

「……温泉マニアを敵に回す発言だな」

彼はますます呆れたように鼻から笑いを抜きながら、引きつった口元を歪めはじめた。

デイークだつて風呂上がりにはビールを一气飲みして、オジサン臭くやっているのだから同類だろうに。おまけに、彼の場合は腰に手をやるお約束付きだ。

「そう言えば、今日は至福のひと時なかったね？」

ルシャナが思い出したようにぽんと手を合わせ、そうでしょ？ と言わんばかりに指さしてきた。

「だつて、デイークさんがさつきと出てこいつて言うんだもん。水刺されたら台無しじゃん」

長い修行を終えて、至宝めがけてようやく氷室へ手を突っ込もうとしたときだった。まるで見ていたかのように、男側の更衣室から「シャニー！ さつきと出ろよ！」と、デカい声が聞こえてきたのだ。

あのときの恥ずかしさと、スイーツを奪われた絶望感と言ったらない。思い出しただけで頭がカアつとなつてきて、シャニーは頬を膨らませて見せてやった。

「つたく、おまえが夕飯に付き合えつつつたんだろ」

「えへへ、ごめんね。デイークさん」

頭をボサボサやったデイークは、面倒臭そうに吐き捨てて視線を逸らしてしまった。

たしかに、約束をした時間が過ぎていたのは認める。早めに店に行かないと席が無くなるかもと、女子勢で時間を決めた手前、ペロツと舌を出して誤魔化しておく。

「ま、いっか。そつちでアイスマウンテンに挑もつと」

この後は、屋外バーで日頃の鬱憤を晴らす予定だ。サ活を美しく締められなかった分も含めて、ぼつちり堪能することにした。

頭の裏で手を組みながら、どんなフレーザーバーの組み合わせにしようか考えるだけで、鼻唄がふんふん漏れてくる。

「もうデザートの話かよ……」

またデイクは呆れたように言っているが、完全な誤解だ。

「え？ 主食だよ？」

それをシャニーが口にした途端、デイクは目を見張り、顔から色が消えた。

彼は無表情のままルシヤナたちに視線を送るものの、誰もが苦笑いを返すだけだった。



とつぷり陽が黒の中に沈んでも、あちこちから上がる熱気でバーはまるで夜を知らない。

ガスランプの灯りの中、大小のテーブルを多くが囲み、酒も入って土砂降りのように騒がしい。

「てんいんさあくん！ ビールじゃんじゃん来て〜」

その中でも高い声はよく通る。

腑抜けた声が手を振りながら、空のジョッキを虚空に突き上げ良い気分になっていた。

「おい、シャニー。呂律まわってねえじゃねえか。もう止めとけ」

「うるさい、うるさい！ あたしの寂しさが男に分かってたまるかあ〜！」

デイクが止めても、シャニーはその手を跳ね飛ばし、彼のジョッキを躊躇うことなくぶんどって傾け始めた。

それでもデイクは止めようとしているが、もう早くもお手上げか、まるで猫がおっかなびっくり突くようにやっている。

結局長くは続かず、ついに彼も諦めたようで、困り果てた顔をルシヤナへ向けた。

「ルシヤナ、コイツいつもこうなのか？」

「いやあ……初めてかな。たいていウイスキー飲んですぐ寝ちやうから」

「あー……そっちはいつもなのかよ」

ルシヤナたちは慣れているからか、構わず飲み食いして黄色い声をあげている。

シャニーの隣に座ってしまったのが運の尽きか。デイクはルシヤナたちのトークに耳を傾けながら、つまみをかじって夜風に任せようとするものの、隣の酔っぱらいが放っておかない。

「うふふふ、でもねえ、デイクさんのことは好き」

「だあつ、くつつくんじゃねえ！ 暑苦しい！」

プリンのように今にも崩れそうな顔で、ふにやふにや言いながらシャニーがデイクの腕にしがみついている。

堪らず腕を上げてシャニーを振り払おうとした彼だが、ますますその顔が焦りに歪む。

「つたく、整いたいっつうから付き合ってみれば、ヤケ酒ヤケスイーツかよ」

そのまま膝の上に寝転ぼうとするシャニーを、猫を追い払うようやったデイクは、席に戻した彼女にボヤきながらも水を飲ませ始めた。

彼にとつては、また潰れられておんぶはゴメンと言ったところだろう。

「らしくねえことは止めとけ。いつも飲んでねえし、本当は飲めねえんだろ？」

空きっ腹で飲んで酔いが回るのが早かったのだろうか。

しばらく顎をテーブルに乗せ、眠るように目を閉じて酔いを覚ましていたシャニーだったが、デイクの小言に腕だけ上げて夜空を突いた。

「違うよお！ 無駄な支出は控えたいっただけだもん！」

給金の大半をイリアに仕送りしていることもあるが、決して懐事情に余裕があるわけではない。

ロイの好意で生活費は助かっていても、削れる部分は知れている。その中でいかに節約を考えるかは、もはや負けれない戦いと言えよう。決して譲れない「聖域」を守るためにも。

「先月だって太刀の修理がなきゃ、もう一回スイーツ食べれたのにい」
太刀は造りが繊細だからか、修理費が結構バカにならない。修理費を少しでも減らすためにも、もつともつと稽古に励んで実力を高めなければならぬだろう。

新たな決意に体を起こしたシャニーは、両手をグツと握って鼻息荒く気合いを入れた。

それなのに、その炎を吹き消すようなディークの深いため息が吹いてきた。

「甘いもんは無駄な支出には入らねえのな」

「当ツたり前だよ！ あたしからスイーツを取るの、ディークさんから剣を取り上げるのと同じだぞ！」

ディークがそこに踏み入るや、シャニーの目がギンと釣りあがる。後ろに立てかけたディークの大剣を、シャニーはバンバン叩いて火を吹き始めた。

「いや、ますます言ってる意味が分かんねえんだが」

もう付き合いきれないと言いたげに、ディークは頭をボサボサやると席を立つてしまった。

彼はジョッキを片手にL字の椅子の端まで行くと、端に座っていたミアをお尻で押して無理やり場所を空けた。

ディークが逃げてしまい、しばらくシャニーは頬を膨らせていた。けれど、隣に寄りかかれなくなると、ふいにしゅんと来て腹がイガイガしてくる。だいぶ酔いが覚めてきてしまったらしい。

「あたしだってさ、ロイと一緒にいられたらお酒なんか飲まないけどさ」

シャニーはグラスを回しながら、中で流れていく氷を見下ろしてポツリと漏らした。

ディークの言うとおりに、普段お酒はめったに飲まない。すぐに眠くなってしまふのでは、せつかくの楽しい時間が消えてしまふではない

か。

まして、ロイと一緒にの時なら、なおさら。

「あんたがそんな風に言うなんて珍しいね」

まだ一杯目くらしいの勢いでジョッキを傾けるルシャナが、横目に不思議そうな声をあげた。

彼女の前には山積みの空ジョッキ。

それを見ただけで腹が重くなったシャニーは、自分のグラスをルシャナに差し出しながら、重い気持ちを吐きだした。

「だって、声聞きたいじゃん。そりゃ、ロイの立場は受け止めてる。それでもさ、なんだか……何て言うんだろ。……——寂しくって」

寂しい……こんな言葉、初めて口にした気がする。

確かに以前からあった気持ちだが、ロイの活躍が嬉しくて飲み込めてきたはずだった。

「はあ。イリアにいた時は手紙で我慢できてたのにな」

いや、そもそも、寂しいなんてどこから湧いてきたのだろう。

イリアにいた頃はそんなものは無かった。ただ、手紙をもらえるだけで飛び上がったいたはずなのに。

今では深いため息が、吐いたそばからまた腹に溜まってくる。

「ハン。おまえ、そんなんで大丈夫なのかよ？」

見かねて声をかけてくれたのだろうか。それにしても、デイークの言葉は妙に乾いている。

突き放されたような気持ちになって、特に考えることもなく……と
言うより、考えられずに答えを求めた。

「なにが？」

「いつかはイリアに帰るつつつたよな？ 帰ったら、会うどころか、声を聞くなんざできねえんだぜ？」

会えなくなる——それを突き付けられた途端、喉を両手で締めあげられたように息が出来なくなった。

分かっていたはずだ。そんなことは、ロイと契約を結んだあの時から。それでも、無意識に考えないようにしていた。気づくことさえも、避けてきた。

「そ、それは。……。でも、みんなと約束してるし」

何とか言葉を搾り出してはみたものの、読まれていたのか被せ気味にデイクは冷たく言い放った。

「そんな心持ちで帰って来られちゃ、そいつらも迷惑な気がするがな」
胸を魔法か何かで撃ち抜かれたような衝撃で、無音の中に閉じ込められた。

嘘などつけない性格なのは、シャニーにも自覚はある。きっと村人たちにはすぐ悟られてしまうだろう。それが、信じてくれた者たちへの裏切りなのは疑いようもない。

でも、断ち切ると言うことは……。

喧騒の中に戻ってきてても、シャニーの顔は蒼いまま。

「デイクさん……。諦めろって……。言いたいのか？」

聞きたくない現実のはずだった。それでも聞かずにおれないのは、相手が師だから。下手に慰めてくれるような人ではないから、聞きたかった。

「ま、少なくともどっちもは、虫がいいんじゃないのか？」

明言せずとも、彼はドライな口調でさも当然と言った感じだ。

頭では分かっている。シャニーとて、そのつもりでリキアに降り立ったし、ロイとの契約もした。

だけど、一度縮まった距離を離すのは、胸を引き裂かれるようだった。糸で繋いだ程度では無い。すっかり心の中に溶け込んでいるのだ。どうやったって、もう取り出すなんか無理だ。

「シャニーさ、前も私言ったと思うけど、あんたにとって何が一番かだ
と思うよ」

察したのか、ジョツキを置いたルシャナが、肩に手を添えながら諭すようなトーンで囁いてくる。

幼馴染には何でも話してきた。6月の時も怒鳴ってまで目を醒させてくれた彼女の言うことにブレはない。

とは言え、あの時ともまた、事情が違うのだ。

「……一番が、二つあったら？」

そう聞いてみたら、いつも酒場では豪快なルシャナも、まだ飲みが

足りないのか黙り込んでしまった。

彼女の視線はテーブルに突き刺さり、何か言おうと必死に絞っているようだった。

「それでも、何かしら筋を通して選んでいかなくちやなんねえのが、人生つてもんだ」

騒がしいはずのバーに広がった沈黙を払うように、デイークはさっぱりと言い切った。

それはどこか、他人事にそれっぽいな事を口にしてると言うより、内から滲み出すような重みがある。

「今日のデイークさんはやたら厳しいね。オトナっぽい」

それをルシヤナも感じ取ったのか、彼にツツコミを入れた途端だった。

「あん？ お前らも同じだぜ？ やたらこつちの生活を気に入ってるようだがな」

いつもなら和やかに返すデイークの鋭い視線が、テーブルを焼き切るようにぐるりと巡る。

誰もが顔を見合わせ、下を向いてしまった。

みんな一番がたくさんあるに違いない。イリアにも、リキアにも。たった1ヶ月ぐらいで、デイークはそれを見透かしたというのか。

ふと、顔を上げたシヤニーはデイークと目線が合ってしまった、ごくりとする。

どうするつもりだ——そう言われている気がして、視線を外したら、今度はルシヤナの顔が見えた。

「でき、今のところはどつちなの？」

彼女にはつきり聞かれて逃げ場が無くなった。

今まで、正直な気持ちと使命感がぶつかりあい、腹が熔けそうに熱かったがもう吐き出すしかない。

大きく息を吸い込んだシヤニーは、押さえ込んできたものを、意を決して解放した。

「そりや、ロイの傍から離れたくないよ。ずっと一緒にいたい」

「じゃあ、それでいいじゃねえか」

デイクの答えは、あまりにもあつさりしていた。そんな簡単に割り切れたら苦労しないと言うのに。

それでも、シャニーが「でも——」と切り返そうとしたのを、デイクは被せ気味に遮った。

「辛いことを言うが、イリアに帰れそうだと思うてるのか？」

「……」

いくら前置きがあつたとしても、あんまりな言い方ではないか。

即答したいはずなのに、何も言い返すことが出来なかった。ルシヤナも、口が達者なミリアも、みんな押し黙ってしまっている。

まるでデイクは代弁するように。いや、目を背けようとした現実を突きつけるようだ。

「リキアから勲章までもらつてんのに、国から声が掛からないたあ、それが答えだと思うがな」

いつもストイックなデイクだが、今日はいつも増して鋭く斬り込んでくる。もしかしたら、酒を飲むと逆に頭が冴えるタイプなのだろうか。

彼から突きつけられた話は、ルシヤナ達とも話したことがあつた。

でも、シャニーだけではなく、皆一様の反応だったのだ。帰れない不安と、故郷に残してきた人々への心配、それに気づくことを避けて奥にしまったってきた気持ちと。

そして、心のどこかで喜ぶ気持ち。この地で、これからも生きていく事を望んでいるように。

誰も何も言わなかったからか、ついにデイクは、核心を鷲掴みするように引つ張り出した。

「どのみち、イリアに帰るとなりや、ロイたちやリキアの民を捨てることになる訳だ」

「——ッ」

「どちらを選ぶほうが、選ばないほうは捨てることになる。そこにどう筋を通すかだろ」

「選ばない。それは、どちらともに真正面で向き合わないことになる。」

そんな無責任で、どちらにも進まず何も変えられない選択など、出来るはずがない。最初から、ランスにも言われていたのだ。

——君が覚悟を決めぬ態度では、ロイ様を危険に晒しかねない分かっていたはずなのに、避けてきた。

それは許されないので改めて思い知ったシャニーは、デイークの顔を見て静かに頷いた。

「……分かったよ。自分の中でちゃんと整理しないとね」

いずれ、答えを出さなければならぬ。いや、いずれではなく、遠くないうちに。とにかく、ちゃんと考えようと思った。

デイークは、それでいいと言いたげに「ハッ……」と笑うと、ソーセージをかじっている。

ジョッキを一気に飲み干し、気持ちよさそうにオジサンクサイ声をあげると、彼は撫でるような優しい目を向けてきた。

「少し大人になったじゃねえか」

「えへへ」

ガキ呼ばわりはあまり認めたくないけれど、こうして褒められるのはやっぱり嬉しい。

オトナ——その言葉は、とてもカツコいい響きに聞こえる。

「順調に歳を重ねてるだけあるな」

「サラツと歳をデイスるのやめて?!」

「いや、おまえまだ16だろ」

「いいもんいいもん。どーせあたしはもうオバさんだしー」

でも、それを言い換えただけで無性に拒否反応が全身に走る。

デイークは褒めたつもりかもしれないが、歳……その言葉は悪魔の呪文とさえ言ってもいいだろう。

ただでさえ、姉ユーノには娘がいるのだ。いつか、あの子に叔母さんと呼ばれる日が来ると思うと、尋麻疹じんましんのようにゾワゾワと震えがきた。

なのに周りはケラケラ笑いはじめ、ルシャナが届いた新しいジョッキをデイークに渡しながらニヨニヨしている。

「シャニーがおばさんなら、デイークさんはもうじーさんだね」

「いちいち引き合いに出すんじゃないよ！　つか、まだオツサンすら足突っ込んでねえよ」

「まだ言ってるよ。この弟子にしてこの師匠ありだね」

酔っぱらい同士でガチャガチャやる横で、シャニーはちびちびと水を飲みながら手首に目をやる。

腕時計を側面に向け、刻まれている言葉をじっと見つめた。

——共に時を刻もう

(あたしのなかで、きちんと答えを出さなきゃ)

そのためにも、もつとロイと話がしたい。

近づいたはずが、どこか遠くなってしまった彼の顔を思い浮かべながらも、彼女はバカ騒ぎへと戻っていった。

狂気のバプテスマ

人には、表と裏の顔があるという。

表は周りが作った顔、裏は周りに対して抗うように出来上がった顔。

本当の顔がどちらなのか、答えを出せる者は案外少ないだろう。いや、むしろどちらでもないのも、一つの答えか。

それは、酒場にも当てはめられよう。

同じ酒場でも、昼……いわば表の世界は、荒々しくも一定の秩序が包み、静かな時間を提供してくれる。

しかし、今日はあまりにも静かすぎる。

騒がしさもあるのだが、夜の帳にも似た漆黒のインバネスコートに身を包む男の周りだけは、まるで空間が切り離されて凍りついているかのように別世界が広がる。

男が座るカウンターの一番奥は、あまりにも近寄りがたいだろうに、その場所へ、黒のスーツで細身を引き立てる長身の男が近づき、隣に座った。

「ウエスカー、ただいま帰還いたしました」

細身の男——ウエスカーは彼の主に声をかけると黒のソフト帽を外した。

顔の上半分を蠟で固めたような白のペルソナで覆う彼は、目元からは感情が読み取れない。

それでも、声のトーンや上向く口角からするに、悪い情報を持ってきたわけではなさそうだ。

「ふっ、お前にしては珍しい。彼女に花を持たせるとは」

バルボ髭に整えた目元は、燦銀と呼ぶに相応しい余裕がある。

今も黒のソフト帽に目元を隠すウエスカーの主——レリウスは、木管楽器のような深い声で短く笑うと、ウエスカーへ手元の新聞を滑らせた。

目元は見えずとも、その鋭い視線は、ひとつの記事を見下ろしているのが伝わってくる。

それは、件の略奪団シユヴァルツァー・ブリッツ逮捕の記事だった。「そう驚かれることもないかと。私と彼女の仲ですし」

ウエスカーは冷静に返しているが、とても柔らかで嬉しそうな口調までは隠せていない。

それとは対照的に、レリウスの口元は一層に厳しく固くなってしまった。

「とは言え、少々前準備が大袈裟ではないか？」

「いえいえ。彼女のためですから。貴方も許可されたではありませんか？」

レリウスの問いに、さも心外と言いたげに驚いた様子でウエスカーは答えた。

果てまでも利己的なこの男の前では、常識などという誰かの都合に合わせただけの曖昧模糊を持ち出してはならない。

とりわけ、異常なまでの執着を見せる、「あの女」に関する話は。

「やれやれ……。私は“C”まで持ち出して良いとは言っていないぞ」

レリウスは深いため息混じりに叱責を浴びせている。それはおそらく、ウエスカーに対してのものだけではなく、自身に対してでもあるだろう。付き合いはじめて1000年。とつくに彼の異常性は把握していたはずだ。

とはいえ、ウエスカーの心を理解するのは、普通の心を持つ人間には無理なのかもしれない。

「実に有意義な実験となりました。こちらの人間にも、同様の効果が見込めそうです」

彼は前座が上手くいき、最高に気分が高まっているのだろうか。恐ろしい内容ながら語り口は冷静で、まるで楽器を奏でるようにテンポよい。

しかしながら、彼の美学からすれば、そのようなやり方では到底満足できないはずだ。

得意の電撃魔法トルハンマーで全てを灰の世界に変える……それこそが、彼流に言えばシヨアの醍醐味と言えるもの。

レリウスも違和感を覚えたらしく、帽子の下から視線が光る。

「お前なら得物で狙うかと思っただが、そちらで攻めるのか」

「誤解ですよ」

ウエスカーは秒で否定すると、口元を興奮にわっと開けながら両手を広げ、来たるシヨーを宣伝するかのよう。

「引き出すためのスパイス、シヨーを盛り上げる小道具と言ったところです。苦しめば苦しむほど、抗うために羽ばたく……それが“人”というものでしょう。ならば——」

ウエスカーの中では、すでに完全犯罪に向けた計画が、エンディングまで完璧に描かれているというのか。

迎えるべき最高の瞬間のイメージを膨らませるかのように、彼は淡々と殺戮シーンを語りだしている。

「彼女を永遠のものにするなら、最高に輝く姿に飾ってあげたいではありませんか？」

仮面であるはずが、真白の中で黒く見つめる無機質な目は、どことなく三日月になったかのようだった。

決して皮肉るではなく、訴えかけるようなウエスカーの愛に、レリウスは帽子を被り直してぼやくように呟く。

「……もはや狂気を超えているな」

ウエスカーにとってそれは褒め言葉だったに違いない。静かに頭を傾げるだけで、その口元は相変わらず笑っている。

それどころか、ウエスカーは「そうでしょうか？」と、さも不思議そうに言っつて声を弾ませた。

「あなたもそうしたいと仰っていたではありませんか」

「……ハッ」

レリウスは乾いた笑いを短く漏らす。

彼は瓶ビールをグイッと一飲みし、ふと、どこを見ているかわからない遠い眼差しをカウンターの先へと向けた。

「たしかにな。あいつは、飾らずとも美しかった……」

遙か遠い場所を回想するように、その声は恍惚としても悲しい。深々と降る雪にも似た口調は、ウエスカーの狂気さえ霜で包み静寂で

覆った。

だが、その沈黙は長く続かなかった。

「〃C〃」を使えば、朽ちも腐りもせず、その美しさを保つことができるぞ？」

まるで万華鏡を踏み砕くよう。

霧散した憧憬から現実へと引き戻す、遠慮もない気配。

自信に満ちた深く伸びのある声が、戸を蹴破るように突っ込んできたのだ。

「へえ？ アナタ様は……」

「……」

2人が振り向いた先にいたのは大柄の男。

ウエスカーは少々反応したものの、彼らは冷静を保っている。並の人間なら腰を抜かしていただろう。

金髪を長くおろし先を結ぶ精悍。紫紺の目をした彼は、金の刺繍を贅沢に施した純白のスカプラリオを纏う。

かなりの高僧のようだが、そうとは思えないほどの肩幅と長軀で、法衣越しでも盛りあがる体は筋骨隆々そのもの。純白を引き裂くように肩から走る漆黒と深碧のエピタラヒリが、男の威圧感に邪悪なオーラを膨らませている。

畏怖……否。この聖職者の前で抱くのは、誰もが等しく「恐怖」であろう。

「またお前たちと会うとは奇遇だな。いや、必然か。ここの酒は、なかなかどうして悪くない」

男は手にした木樽のジョッキを、目の前でわざとらしく傾けはじめた。

その全てを飲み干すのを待つこともなく、レリウスは帽子の下から鋭く眼光で斬り上げた。

「何をしにきた、《A》」

《A》——それは白を纏う悪辣なる黒き男の通称。

彼らの世界では有名な彼は、あちこちから賞金がかかる。

ことのほか、レリウス達が属する組織にとっては宿敵でもあった。

それが目の前に現れたのだ。ウエスカーに至っては手先に紫電を
迸らせ、いつ酒場が吹き飛んでもおかしくない。

「そう身構えるな、ちよつとした散歩だ。自分で言うのも何だが、俺も
お前たちと同じで働き者でな？」

全てを見下ろすような、彼らの反応を楽しむ彫りの濃い目が、どこ
かせせら笑うようにぴくりと動く。

その口調は聖職者らしいと言うより、海千山千の余裕からか、深く、
そして落ち着いている。

彼の言葉など、表面通りに受け取る者は居るまい。この男が闊歩
し、こうして姿を現すこと自体が凶兆に他ならない。

「私を邪魔するなら容赦しませんよ？」

「はっ、サイコパスの人生相談なぞ、さすがの俺にも荷が重い」

相変わらず仁王立ちしながら、余裕たっぷりに構える眼差しは、ど
れだけウエスカーに爆ぜる雷撃を見せられても見下ろすだけ。もは
や、眼中に無いとでも言いたげに、彼はまた酒を傾けている。

それでも構えを解かない連中にため息した男は、空の木樽をカウ
ンターに滑らせるとそのままそこに腰掛け、腕を組み始めたではない
か。

横顔に光る紫電の眼差しが、蛇のようにギロリと動く。

「安心しろ。お前たちの作戦に関与するつもりは一切ない」

「何度も言わせるな。何をしに来た」

挑発とも取れる冷笑を、レリウスは一刀両断にしてみせた。

追う側と、追われる側。本来接触などあり得ない2つの勢力がこう
してのうのうと近寄ってくるなど、本来は用があるうともありえない
はずだ。

もつとも、法衣の男はレリウスたちを縛る掟を知るが故に、気分
に任せて動いている部分もあるだろうが。

「そうだな。強いて言えば、洗礼と言ったところか」

だが、明確な目的を持っていることだけは伝えてきた。

彼はウエスカーの手元にある新聞を見下ろす。その紫紺の目が、値
踏みするように不敵に笑う。

「お前たちの足掻きのおかげで、いくつかの実験を省くことが出来る。感謝しているぞ。むろん、今回の『C』についてもな。ついでに『B』も見識を広げたいと考えている」

法衣の男にとっては、特段行動を起こさずとも勝手にせっせと動いてくれるのだから、笑いたくもなるだろう。皮肉なものだ。『鍵』を起こすために、最悪へと突き進む設計図の部品をどんどん拵えているわけだ。

まるで出前の注文のように要望まで出す男に、ウエスカーが舌打ちしている。

「実験……7月に起こした件の襲撃も、実験とでも言うのか」

それでも、レリウスは冷淡な口調のまま男を横目に睥睨していた。

盗賊団によるオスティア襲撃事件——ラウス候の指示によるクーデターだとCIDから公表されていたが、彼らの地下書庫には、明るみに出されなかった未解決の事実があった。

それは、ラウス候が仄めかした共犯が誰か、と言うことだった。

「ああ……。ふふふ……。知れたことを。あれも、まあまあ役に立った」
《A》と呼ばれる男は、悪びれることも、隠し通そうとするわけでもなくあっさりと答えた。忘れていたのを思い出したような口調は、彼にとってはほんの些細な遊びに過ぎなかったと言わんばかり。

およそ一切の感情を捨てたかのように、人などただの道具としか見えていないようだ。

いや、『人』ゆえに……とも言える。

「あれも『C』を使ったのか？」

「いやいや。お前たちも知っているだろう。俺たち一派の力を。その薫陶というやつよ」

レリウスの問いに、男は鼻で笑いながら答えた。

二人組が所属する組織だけでなく、彼が向こうの世界中から狙われるのには理由がある。

彼の一族は、弱き者を思いのままに感化あるいは扇動する力を有している。

ことのほか、この《A》なる男は、そのカリスマ性を持って多くの

若者を従えており、世界を二分するほどの勢力と化して跋扈していたのだ。

しかしそれは、彼が異端と宣言され世界から追放された1000年前の話。

「おのれ、よくもしやあしやあと」

だからこそ、こうして突然現れた最凶の異端者を誰もが狙うのだが、こちらの世界にいては手が出せないと言うわけだ。

ウエスカーのような手段を選ばない人間でさえ、どれだけ紫電を迸らせようとそれ以上の線は越えられない。

ギリギリと怒りを噛み砕く彼の口元を、法衣の男は鼻で笑っている。

「なぜだ」

それを止めたのは、レリウスの短い問いかけだった。

「ん？」

「それは些細なことのはずだ。お前にとっても、目醒めは無視できない話ではないのか」

それは、単純に違和感といえよう。

いくらこの男が胆力と知謀、何より絶大な力を持っていたとしても、対抗する力が揃ってしまふのは避けたいはずだ。

にもかかわらず、男は阻止するどころか高みの見物を決め込んでいる。

こうして現れたのも、進捗を確認しに来たのは疑いようもない。

「フツッ。あいつとはなかなか長い……それこそ恋人のように因縁深い付き合いとなったな」

男はレリウスの問いに即答することなく、ふっと目を閉じて独白するように溢した。

無理もなからう。1000年も付き合う仲など、そうそうあるまい。

「たしかに、『鍵』の目覚めは大いに興味がある」

静かに今へと戻ってきた男は、落ち着きながらも力強く深い声でそう答えた。

しかしそれは、脅威に対しての焦りなどはまるで混じっていない。むしろ歓迎するかのように、次第に饒舌はトーンを高くしていく。「神から祝福を受けたと錯覚し、正義などと言う己のエゴに都合の良い言葉で秩序を歪める数だけの無能。それがこの、裏の大陸に蔓延している」

人に覇権を譲らざるを得なかった種の限界を、向こうの世界の者達は甘んじて受け入れた。結果、人竜戦役は終結し、二つの世界は分たれた。

この男は違った。当時から、その骨子は変わらなかった。

そして今も、まるで昨日から来たように。いや、より深みを得たそれは、渴望するようになっての敵を語る。

「奴らに真の歴史を知らしめ、刻み、歩ませることが神として為すべきことだろう。その『鍵』として、俺は大いに期待している」

理想を語る恐怖の聖職者は、新たな世界を眺めるかのように両手を広げ、その声はどんどん大きくなり引き込むようだ。

これが、聖職者の話術というものなのか。

それがただ描いた夢で無いのは、具体的に名指しするだけでも伝わってくる。

それでも、「勘違いするな」とレリウスは見果てぬ夢を一閃してみせた。

「神はナーガ神ただ御一柱のみ。貴様は、天主様の教えを正しく広げる使徒のはずであろう」

エレブと異界の扉によって繋がれた、いわば光の世界。

光の神竜ナーガによって祝福された世界は、竜が趨勢を握り繁栄を極めていた。そう、かつては。

種の限界を迎えつつある竜族は、それまでの覇権を人と分かち、共存を選んだ。

それを良しとせず、覇権争いに敗れながらも竜の誇りを捨てきれなかった者達が、新天地——エレブを目指して人竜戦役が起きたのだ。

本来、その争いを止めるべき立場であった法衣の男を、レリウスは静かながら厳しい口調で諫める。

だが、男は涼しい顔で「だからこそ、だ」と跳ね除けた。

「力に慄き、異を畏れ、保身のために劣悪種どもは何をした？ 欺瞞と謀略に明け暮れ、手を取り合うはずだった架け橋を血に染めた——違うか？」

男の自信に溢れ抑揚豊かな声は、頭を揺さぶるように力強い。

レリウスは帽子の下から一度男を睨みあげたが、すぐに視線を逸らした。

「……あれが手を取り合うと言うなら、私の知らない間に、ずいぶん汚れた言葉に成り下がったものだ」

法衣の男は、たしかに竜と人との間に立ち、戦に一つの楔を差し込んだ。

結果それは和解の道筋とはならず、むしろ新たな戦端を押し開ける旗印となってしまったのだった。

なにせ、彼らが人に提示した条件は、実質の隷属だったのだから。

「何を言っている？ 神の下には平等だろう。ただしそれは、能力に応じてに過ぎない。それを考慮しない横並びなど、平等という名の地獄だ。俺は神の代弁者として、それを示すまでだ」

「それを多くが望まなかったことを、理の外から1000年見て未だ気付けぬとは。狂気の教皇……思想家アゼリクス。世界宗教の長だったお前が、何故そこまで共存を拒む？」

アゼリクス——そう呼ばれた男は、かつて世界宗教の教皇の座に君臨した権力者だった。

ナーガを神と崇める宗教において、その代弁者として世界をあるべきへと導くカリスマは、教会を牛耳り多くの信者を従えていた。それこそ、それ自体が一つの国にも似た絶大な力を持っていたのだ。

それが、人竜戦役での敗北で野心は遠い狭間に封じられ、1000年の歲月の中で忘れ去られていた……——はずだった。

「むしろ確固としたと言えるよう」

封印から這い出てきた男の“人”への憎悪は鎮まるどころか、まるでバックドラフトのごとく膨れ上がっている。

彼はやや早口に、それでいて言葉で押し潰すかのように力強く“人

“の原罪を語りはじめた。

「20余年前の、そして今回の我ら同族への許しがたき奸計……やはり、”人”にこの世界を任せるのは間違いであった——俺の主張は間違っていないかったのだと、な」

「確かに、知性、膂力、さまさま ”人” が劣るところはあろう。しかし、過ちを犯すのは何も彼らだけではない。だからこそ、不干渉の掟がある。違うか、アゼリクス」

レリウスも負けじと反論に出るが、狂気的な自信に満ちて見開く紫紺の眼が揺らぐことは無い。

虫けらが何かほざいている……そのくらい感覚であることは、鼻から冷笑を抜く様子からもうかがえる。

「それどころか、彼は笑止千万な説教と高笑いを始めたではないか。

「まあ、当時連中側にいた貴様には理解できまい。いや……俺でさえも貴様には勝てんな」

肩を揺らしたまま彼はレリウスをなじり、挑発的な笑みでこれでもかと顔を歪ませながら、その節くれだった指を突き向けた。

「それだけ神を信じ、人を信じ、愛を信じた貴様が、あの女に何をした？」

「——ッ」

過去に下した決断——逃れられない事実。それを突きつけられた途端、呪縛に締め上げられるようにレリウスは言葉を失った。

「言えまい……顔がこれ以上ないほど皮肉に吊るアゼリクスは、それを憐れむような嘲笑混じりに続けた。

「あの女も哀れなものだ。亡霊のように彷徨うことになろうとは」
「……。彼女への侮辱は許さん」

レリウスの親指が太刀の柄に掛かる。

今にも死合を始めそうな極限の緊張感に場が揺れ、グラスがカタカタと震えはじめている。

そこまでされても、アゼリクスは身を引くそぶりもなく、ただカウンターに腰を引っ掛け横目にほくそ笑むだけ。

「これは失礼した。告解の場を設けてやろうと思ったが、俺が言った

ところで栓無きことか」

彼はようやくカウンターから身を離すと、カウンターにあつた酒瓶を取り、ひとつ呷って静かに置いた。

「ふふ、精々物見させてもらうぞ？　貴様が同じ過ちを繰り返し、最愛を葬る茶番をな」

確信を持つように自信に満ちたアゼリクスの周りを、赤黒いエーギルが螺旋に渦巻きはじめるや、そのおぞましい魔力と共に、侮蔑と酒気に塗れた快哉を浴びせてその場から消えた。

なにも無かつたように平和な酒場が戻ってくる。

「安心しろ、あるべきだった正しき歴史にこの世界を塗り潰す。そうすれば、そんな罪も丸ごと消えよう。ハ、ハハハハハ！」

しかし、確かに存在することを示すように、どこからともなく呵呵大笑が響き伝えてくる。

今もなお、回り続けている運命の歯車。二度と、止める術はないことを。

「マスター……如何しますか？」

ウエスカーは静かに主に問うが、その口調は策を求めるより、確信を持った冷徹なものだった。

イエスカ、ノーか。答えは二択でしかない。

レリウスはすぐには答えなかった。手にしていた太刀を顔の前に掲げ、静かにその刃を鞘から解放して眺める。

今も妖艶な青白い輝きを放つ刀身をじっと見つめた彼は、しばらくして目元を帽子に隠した。

「……作戦続行だ。我々には、守るべきものがある。守り切ることこそが、未来を見せてやれなかったものたちへ示すべき筋だろう」

主の命に静かに頭を下げたウエスカーは、何も言わず転移魔法で消えていった。

ひとり残ったレリウスもまた、太刀を握り直すと酒場を出て、繁栄極まるオステイアの街へと消えていく。

空にひとつ光る、天馬の軌跡を見上げながら。

新たな挑戦状

真夏の真っ青だ青空にも、少しだけ優しさと共に寂しさが混じり始める9月の空。その空に翔ける天馬が、風を楽しむことなく一直線に引き裂いていく。

馬上にいるシャニーの顔を染める青は重い。

「どうして? どうしてこんなことに」

オステイアからの帰路は、普段なら大好きなスイーツの余韻に浸りながら、鼻唄がコントレイルに混じる軽快な時間だ。

しかし、今日の彼女の目は震えていた。その視線は腰カバンを見下ろし、それを確かめるように手を添えて思わずこぼした。

「なんで……、——あたしを?」

◆◆
ジオラマのように遠くに小さく見えていた孤児院は、あつという間に輪郭をくつきりさせる。

戻ってきて一番に見えたのがデイクで助かった。特にどうなるわけでも無くとも、天馬から飛び降りて真っ先に駆け寄っていく。

「よお、ロイとは久しぶりにいろいろ喋れたか?」

孤児院ののんびりした空気をあつてか、デイクの声は日差しを吸い込むように優しい。目が合うなり、彼はいつもと同じことを聞いて弄ろうとしてくる。オステイアに仮にロイがいたとしても、仕事の邪魔をしにいくわけ無いのは分かっているだろうに。

そんな穏やかな空気を、シャニーの余裕のない金切り声にも似た早口が引き裂いた。

「そんなわけないよ! デイクさん、みんなを集めて!」

狼狽をありあり見せながら手を取って懇願する様子に、デイクの眼差しはみるみる戦神のそれと変わっていった。

◆◆
「なんだと? また殺しが起きたただと?」

木の香りが優しく包む穏やかな院長室に、苛立ちを含みながらも冷静なデイクの太い声が走る。

部屋には一気に緊張感が張り詰め、喉が張り付くようだ。それでもシャニーはぐくりと一息して、はつきりした声で危機を知らせた。

「うん。あの手口、間違いない。例の連続殺人犯だよ」

CIDから呼びだしを受けた時点で、嫌な予感があった。

その詰所で事件を知らされても、半分は信じられない気持ちだった。とは言え、残りは確信だったわけで、信じたくないだけだったのかもしれない。

そんな思いも、遺体安置室に連れて行かれて打ち砕かれた。またしても、被害者は見るも無残に表情さえ分からない状態だったのだ。

「ちよ、ちよつと待って欲しいっす！ この前犯人は捕まえたはずじゃ」

ミリアが舌を噛みながら、まとまらない気持ちのままに答えを求めてくる。仲間達が狼狽えるのも無理はない。頑張つて事件は解決させたはずだったのだから。

その中でも、デイクは舌打ちするだけだった。

「これで的中しちゃったわけだ。悪い方にな」

腕組みしながら横目に向けた彼の視線は、まっすぐシャニーを捉えている。彼女もまた、唇をギュツと噛みながらも静かに頷いた。

嫌な予感が当たらないように……その儂い願いが砕け散った顔は、俯いたままどこを見るでも無く見下ろす。

「2人とも気づいていたわけ？」

話についていけない周りの気持ちを代弁するように、ルシヤナが2人へ交互に視線を送る。

新聞にも取り上げられた案件だ。誰もが解決したものと思つていたに違いない。

どうやって切り出そうかシャニーが悩んでいると、デイクが注目を集めるように、軽く手でジェスチャーしてみた。

「考えてみる。追ってる奴は相手を黒焦げにしてんだぜ？」

そうだろう？ とでも言いたげに、再びデイクがシャニーをチラツと一瞥する。

そうだ。それこそが、ずっと引つかかってきたモヤモヤに他ならな

い。自身が抱き続けてた違和感の答え合わせをするように、彼女は領きながら仲間たちをぐるりと見渡した。

「うん。テレーザには、”人の心”があつた」

テレーザは、興奮作用のある毒を摂取していたことが前回の調査で分かつている。それでもなお、彼女は孤児院へむけては決して魔法を放とうとしなかったのだ。

律儀に宣戦布告を仕掛け、戦う相手以外には牙をむかないその心は、殺める事そのものを楽しんでいたわけで無いのは疑いようもない。

「それで、あのとき聞いてたんすか？ 犯人はお前かつて」

ようやく合点がいったようで、ミアアがポンと手を叩いている。

戦っている時からシャニーは喉に小骨が引つかかるような違和感を抱いていたが、ミアアが聞いてきたその場面で、違和感は確信へと変わっていたのだった。

「そのとき、奴は決定的なことを言っていた。レン、心当たりあるだろ」

デイクが気づかないはずが無いか。

同じことに言おうとしていたシャニーは、言葉を飲み込んでレンに視線を移す。

彼女は眉を下げたまましばらく黙っていた。左右する視線が観念しても、元から小さい声は、理由を探そうとしてかどんどん尻すぼみになっていく。

「あの人……私をいきなり攻撃してきた」

「あたしたち、お互いを犯人だと思ってたんだ。テレーザは仲間の敵討ちに來たみたい」

シャニーの中ではそう確信していた。それならすべてに辻褃が合うのだ。

宣戦布告して來たことも、レンを狙ったことも。いや、もつと前。配下が孤児院にちよっかいをかけてに來た時、レンのサンダーに腰を抜かして逃げていったのも。

お互いが、互いの雷撃を殺人鬼のそれと勘違いしていたとしたら

……。その仮説を裏付けるように、略奪団員たちは取り調べでテレザを慕う内容を供述しているらしい。

そうでなくとも、主が降参するや、武器を捨てて命運を共にしようとした騎士たちだ。テレザが殺人鬼なら、彼らは逃げ出したに違いない。

「それでも一週間空いたから、ただの狂言かとも思ったんだがな……」
デイクも分かっているだろうに。それはある意味、そうなって欲しいと最後まで片隅にとっておいた希望だったのだろう。

事件は何も解決していない——それを突きつける決定的な証拠を一瞥したデイクは、スイッチを入れるかのように声に重みを取り戻す。

「で、そいつが次の宣戦布告か？」

彼はシャニーが指の間に挟んでいるカードを見下ろして急かす。

シャニーは強張った顔で、カードに記された一文字一文字を目に焼き付けるように見つめる。

何度読んでもいまだに信じられず、最後まで読み終えて瞳を震わせた彼女は、皆に見えるようにテーブルに置いた。

——今度こそ、貴女を永遠に私のものにさせていただきます。風の契約者シャニー様

「うへっ、趣味悪いっスね……」

皆が周りを覗き込み、真っ先に嫌悪を口にしたミリアが輪から跳ねるように飛び出した。

書き口もそうだが、まるで血で書いたように赤黒く垂れ、ところどころ掠れる文字はイタズラとは思えない。触ってはいけない人間の仕業だと、本能が体を震わせてくるのだ。

「ま、あの気色悪い臭いの正体ってのは間違いないな」

こうした話は慣れているのか、デイクだけはカードを手にとってマジマジ見ながら冷静に分析していた。

同じ違和感を掴んでいたシャニーのほうは、顔を蒼くして表情が剥がれ落ちている。

気が気では無かった。名指しされただけでも恐ろしいことだが、今

回はそれだけで済まない気がしていたのだ。

「ちよつと待つてよ。ぜんぜん繋がらないんだけど。私たちが追つてるのは無差別殺人犯だよね」

「え。で、テレーザがその犯人じゃ無かったってことツスよね？」

なあ、レン」

「ん。……かな？」

周りの反応を見渡しながら、ルシヤナが困惑に眉をひそめている。

ミリアとレンも顔を見合わせるが、彼女たちはルシヤナが何に戸惑っているのか分かっていないらしい。

ルシヤナはデイクの横まで小走りすると、彼が持つカードを指さした。

「いや、そうじゃなくて。無差別じゃないってことなの？」

「ああ。この感じだと、最初からシャニーを狙ってたような書き口だな」

今までの犯人像とまるで違う行動に、誰もが戸惑いの視線をシャニーへ送っている。

今度こそと書いてあることから、何かしらの因縁がうかがえるはずが、当のシャニーは唇をぎゅつと噛んだまま。指を下唇につけたままピクリとも動かない。

遂にしびれを切らしたか、デイクが呼んだ。

「おい、シャニー。おまえ心当たりねえのか？」

名指しで、しかも知り合いなどフェレの周辺以外にいるはずもないリキアで。さらに、命を積極的に狙ってくるような敵対関係の人間……それだけでは、まるで思い当たるものはない。

それでも、こう考えれば一気に選択肢は増える。——もし、イリアから追ってきたとするならば……。

「……あるにはあるよ。ここはリキアだし……、そんなはずないって、端から……考えてもなかったけど」

シャニーの中には三つの顔が浮かんでいた。

ひとり流れを揺らがせるような波動は無く、ひとりは猛烈な悪魔だが、それは雷ではない。

途切れ途切れに口にしながら考えを整理していくと、必然的にあの魔人の顔が残った。

今までどうして思いつかなかったのか、自分でも不思議なほどの、自分が知る中で最も狂人的な男が。

「ま、まさか、シャニー。あいつ……なの」

シャニーが零した恐怖の欠片がルシャナの記憶の鏡を突き破ったらしく、一気に彼女の顔が蒼褪め始める。

思わぬ反応だったのか、デイクが目を一瞬点にした。

「なんだ、お前さんも何か知ってるのか」

「去年の今頃、正体不明の魔術師から襲撃を受けたんです」

忘れもしない。目を閉じてあの時を思い出すだけで喉が渇き、震えが止まらなくなる。それこそ、目隠しされたまま、電撃魔法特有のあの重く耳を麻痺させるような音を聞かされるように。

真っ暗なはずの視界を白く塗りつぶしたのは、あの男が放った紫電の雷光だ。

「凄まじい電撃魔法だった。木に穴が空いて灰になるくらい……」

堪らず目を開けてシャニーはそこまで口にするので精いっぱいだった。

あともう少し、もう少しでも反応が遅れていれば、今頃ここに居なかった。そう思うと、ますます身震いが止まらない。

あんな恐ろしい魔人が、直接その指先をこちらに向けているのだ。姿の見えない今も、どこかから、ずっと。

「おいおい……まさにそいつじゃねえか」

「襲撃の意図が分からなかったし、その後は音沙汰なしだったから」

デイクは呆れたように言っただけで顔を手で覆ってしまっている。連続殺人が拡大する前から、シャニーは犯人を知っていたことになるわけだから当然かもしれない。

とは言え、リキアでの事件をあの魔術師と結び付けるとか無理があるだろう。それもあって、シャニーにとっては今でも信じられない気持ちも強かった。

「狙いがおまえとすれば、ますます殺しの動機が分からねえけどな」

デイクの言うとおりで。それはシャニーだって知りたいことだった。

一年経った今、このタイミングで何故また襲ってくるのか、まるで分からないではないか。

付け加えれば、狙いがシャニーであるはずなのに、なぜ直接狙わず無関係な者ばかりを襲ってきたのか。それに対して、納得できる答えを掴めなかったのだ。

それでも無理やりシャニーは頭を絞り、ついに思い当ってしまった。

「も、もしかして、あたしを探して？」

「にしちゃあ、効率が悪すぎだろ。第一、もう居場所は特定されてる……そうは思わねえか？ シャニー」

恐怖。それは、内からおぞましい何かが無数に這い出てくるような、今にも飛び出してしまいたくなるような恐怖だった。

だが、言い終わりもしないうちにデイクが遮るように否定してきた。

彼の言う通りの部分もある。わざわざおびき寄せるような真似をしなくとも、あの黒い眼差しはずっと何処かから孤児院を見ていた。

まさかあれが、孤児院ではなく自分を見ていたとは。得も言われぬ恐怖に悪寒が走り、浅くなる呼吸を抑えようと口元を隠す。

このままでは良くない。自分を狙っているとすれば、ここに居ては……。

「妙なことを考えるな。それに応じておまえが出ていきや、てめえから罠にハマりにいくようなもんだ」

「……」

ふいに、頭上にポンと乗る大きくて強い手。

まるで考えを読まれたように、傾きかけていた思考を引つ張り戻された。

彼の言う通りなのは疑いようもない。もし、無差別でないなら、まさにそれを狙っているに違いないのだから。

それでも、どうにかしなければ。考えを巡らそうとすると、また先

を越されてしまった。

「急ぐが、焦らずに、だぜ」

「うん……」

1人で悩んでも仕方ないことは分かっているけど、どうしても応を返す声にブレーキがかかる。

とにかく、敵が襲ってくるまでに策を練らなければならないのは変わらない。

目の前に集中しようとして頭を整理しかけた時だった。バタバタと廊下をかける音は子供のそれではない。

「みんな！ 大変だよ！ また、また……」

扉を押し開け、はあはあと整わない息のまま叫ぶルウに、シャニーは凍りついていた。

身動きを取れない間に、どんどん犠牲者が増えていく。まるで心の中に毒が湧き上がり、侵食していくように腹が熱い。

「チィ、言ってる傍からかよー」

デイークだけが舌打ちを残して駆け出し、部屋を飛び出していく。まるで気持ちに整理がつかないまま、シャニーも彼の背中を追うのだった。



「けっ、ここまで酷くやる必要があんのかよ」

苛立ちを含んだデイークの声が、風吹き抜ける終わりかけの夏空に流れていく。

今回は事件が起きて間もない発見だったらしく、シャニーたちは事件現場に直行していた。

周りには何も無い。舗装などされていない、人の往来で削れた場所が道だと教えてくれるだけ。群生する背の低い草が、風にそよぐ音だけが時を進める場所であり、田舎を超えてもはや人里でさえない。

今回も被害者は山賊らしく、近くには斧が突き刺さっている。かなり抵抗したのか、傷だらけの斧は煤で真っ黒だ。

その所有者は……シャニーは視線を合わせるや、バネの壊れた

シャツターが落ちるように目を瞑った。

「許せない……ッ。これ以上は……何としても止めなきや」

それでも、現実からは逃げられない。

もはや、男か女かすら判断がつかないくらい黒焦げの被害者に祈りを捧げながら、シャニーは決意を口にした。

どんな人だった分らないが、突き刺さる斧はかなりカスタマイズされており、戦闘の素人で無かったのは明らかだ。

そんな手練でさえ、ここまで黒焦げにするほどの魔力……やはり……そのとき、シャニーは妙な違和感が走り、被害者を覗き込んだ。

「どうした？ シャニー」

背後からの声に振り向くと、デイークが歩いてくる。

「なんか、前と少し違うような。今回は雷じゃなくて、本物の……火？」

今までの事件では、黒焦げなのは被害者だけと言ってもいいくらい魔法の範囲は狭かった。

それが今回はどうだ。まるで高い場所からシャワーを浴びるにも似て、あたり一面に亘って燃えてしまっているのだ。それこそ、ここで野焼きでもしたかのように。

最後まで聞いたデイークは、答え合わせでもしていたかのように頷いた。

「それだけじゃねえな。どうにもおかしい。くたばってから焼かれたんじゃないやねえか？ これは」

「え?!」

まるで気づいていなかった大きな違いに思わず声を上げたら、デイークは仰向けに倒れる被害者の背に手を差し込んだ。

「黒焦げは表だけだ。動かなくなっただけから、あるいは動けない状態でやられたってことだろ」

背中には着ていたであろう赤いTシャツと思しき布が張り付いていた。汗染みまでくつきり残っているあたり、一切火気に触れていないのだろう。

その事実は外せない大事な情報に違いないが、シャニーには直視で

きずに反射的に顔を背けてしまった。

「な、なんて酷い……」

吹き飛んだ視界の先には、黒く煤けた巨大な戦斧がある。

何度見ても巨大で、被害者はこれを片手で振り回していたというのが信じられない。

まじまじ見下ろし、地に突き刺さる刃の部分まで視界に移ったとき、「あれ？」と思わず声が出た。

駆け寄って屈み込み、手を伸ばす。

「デイクさん、こっつ、これ……もしかしなくても……」

斧の刃についた何かを拾う。

何か……なんてぼやかす必要は無いかもしれないが、あまりに信じられなかったのだ。スクール前の雲のように、不安がもくもく膨れ上がってくる。

指先につまんで手のひらに乗せたそれを、デイクに見せたらさすがの彼も面食らったらしい。

「おいおい……コイツは。なんでこんな場所に……」

渡した欠片を見開いた目で見下ろしたデイクから、毒気を抜かれたような乾いた声が漏れた。

彼がこんな反応だと、ますます不安が湧き上がって胃が焼けてしまいうそだ。もう、全て終わったと信じきっていたのに。

それでも、デイクがそうしていたのはわずかな間だった。

「さっきの件も含めて対策がいるな」

彼は腕組みしながら顎に手を添えたかと思うと、すぐに天馬騎士たち目をやった。

「被害者は検死にかけてもらうか。どうにも腑に落ちねえ。おまえはルウのほうを頼む！」

「ラジャー！」

彼は矢継ぎ早に指示を始めた。もはや誰が部隊長か分からないが、やはり経験の差は埋めようも無い。

手際の良さはまるで敵わないが、実は同じことを考えていたのだ。少しは彼の背を学べたのかもしれないと思うと、駆け出す足取りも力

が入る。

「シャニー」

まるで読まれていたようだった。首輪を引っ張られるように、後ろからデイクに呼ばれてしまったのだ。

つんのめったシャニーはそのまま跳ね出し、手足をバタバタさせてことなきを得る。

「な、なあに？」

「一人で背負い込んで、突っ走るんじゃないぞ」

胸に矢でも突き刺さったような衝撃に頭がぐわんぐわんする。

無意識のうちにくつと笑いと共に肩から力が抜けてしまった。経験の差だけでは無い。まだまだ、学ぶべきところだらけだ。

ひとつ頷くと、シャニーは一路孤児院を目指す。

◆

悠長に着地を待ってられない。シャニーはまだ空にいる天馬から飛び降り、孤児院へと駆け込んで行った。

天馬も慣れっ子なのか、特に主人を追うでもなく芝生で日向ぼっこを始めている。

一方、子供達から「廊下を走っちゃダメー」と叱られながらも、シャニーはバタバタ駆け抜けて院長室まで一直線。

彼を見つけるや、前置きもせず滝が落ちるように喋り出した。

「ねえ、ルウくん。ルウくんにかどうしても頼めないことがあつてや」

「ほ、ホントなの?！」

現場で見てきたことや、新たに湧き上がった不安と差し迫る危機。それらをルウに伝えると、彼も言葉を詰まらせた。

たくさんの子供たちを預かる彼なら、無理もないかもしれない。だからこそ、つまびらかに伝えたのだ。

「うん。それでね、ギネヴィア様には来てもらうのやめてもらったほうがいいかなって」

ギネヴィアでなくとも、今は誰も近づけたくは無い。

ただでさえ、相手は大国ベルンの女王であり、万が一も許されない

相手だ。いくら本人はロイと協力して動乱に終止符を打った賢人とは言え、何かあれば周りが黙っていないだろう。

「分かったよ。そっちのことも含めて相談してみるね」

ルウも心得ているらしく、彼は二つ返事で快諾してくれるのだった。



— 数日後

「つて、ルウくんは相談してくれたはずなんだよ?!」

院長室には、眉を下げながらも目で訴え、身振り手振りも交えて必死に弁解するシャニーの声がキンキンと響いていた。

どれだけ言っても、デイークの眉間に寄ったシワは変わらない。ついに「もういいと言わんばかりに手で顔を覆ってしまった。」

「その返しがどうして、『おいしいお茶受けを持っていきますね』なんだよ?」

まさかそんな好意的な反応を求めて、ルウにコンタクトをとつてもらったわけでは無かった。

気を遣ったとギネヴィアに受け取られたのだろうか。延期をやりわり進言してもらったつもりだったのに。

デイークにどうしてと聞かれても、そんなのはシャニーが聞きたいくらいで、彼女は視線でルウにヘルプを出す。

「それが、略奪団みたいにならず者がいるかもだから危ないって言ったら、『先の戦争に端を発するものだと思うから協力したい』つて」

ルウも嬉しいような、困ったような顔でお手上げといった素振りを見せている。

何も無い時なら、器の大きな女王だと感激するところでも、今滲んでくるのは悪い汗ばかり。

お忍びの訪問となれば兵数は限られるだろう。あまつさえ、ベルンの主力は竜騎士であり、魔法にはめっぼう弱いのだ。

「そうだとしても、ロイたちに通す話じゃねえのか?」

デイークは困惑した様子でルウに確認したか聞いている。

リキア同盟との会合を終えてからの訪問とはいえ、リキア内での対応には変わらない。

もちろん、シャニーも同じことを考えたし、フェレに戻って相談しようともしていた。

「ロイ、今エトルリアのフォーラムに参加しに行ってるからいないと思うよ。ギネヴィア様と会合しに戻ってくる感じじゃないかな」

ところが間が悪いことに、フェレ城からまたしてもロイに会えずに帰る羽目になってしまったのだった。

一体これで何回目だろうか。

最近はこちら飛び回っているらしい。城にいる方が珍しいと、守りを預かるランスに慰められはした。

それでも、手紙でもなんでも、何かしら欲しいと思ってしまうのはワガママなのだろうか。

「さすが詳しいじゃねえか」

「一応、カレシですから」

「ああ？　なんだ？　一応って」

ちよつとトゲのある言葉になってしまったからか、デイークが露骨に渋い顔をして聞いてきた。

「ツーン！　拗ねてなんかいませんよーだ！」

「やれやれ、何のことだか」

堪らず気持ちのままを口走ったら、デイークは両手を広げて付き合いきれないと言いたげに返してきた。

なんだか、自分が自分で嫌になる。

気づいて欲しいからこんな言い方になったに決まっているのに、いざ気づいてももらったら聞いて欲しく無いなんて。

でも、これでかれこれ2ヶ月弱。顔も、声さえも。ロイの一切を感じられずに心はもうひび割れていた。

ただできえ、あんな予告を突きつけられて……心細いのに。

「仕方ねえ。守りを固めておくぞ。ま、お土産でなんとかするしかねえ」

そんなことは言っていられないか。

そっぽをむいていた間に、デイクはぱっぱとあれこれ決めて動き出そうとしている。

戦況はこの瞬間も動き続けているのだ。出来る限り策を練り、少しでも早く動くことこそが大事だろう。敵がまるで底の読めない魔人なら、なおさらに。

そんなときにリーダーが何をしている——そう自身を戒めたシャニーは、仲間たちに部隊長の顔を向けた。

「ルシャナ、ミリアとレンを連れて当日はギネヴィア様をお守りして」「あんたは?」

目をまんまるにしたルシャナが聞いてくるが、想定範囲内だ。

「あたしは狙われてる。ギネヴィア様からは離れた方がいいかなって」

連続殺人犯の確保は、リキア同盟付きの騎士として任務を受けている。

だが、今は外国のV. I. Pを守り抜くことこそ、最優先の果たすべき役割となるだろう。

自分^{標的}は皆とできるだけ離れた遠い場所で迎え撃つしかない。あんな……世界を真っ白な灰に変えてしまう相手に、皆を近づけるわけにいかないではないか。

「ま、妥当なところか」

腕組みしていたデイクは、さらっとした口調で賛同してくれた。

デイクさえギネヴィアの傍にいて、仲間を指揮してくれれば何とか凌げそう……そう考えを巡らせたときだった。

「ただし、独りはダメだ。俺がつく」

「え?!」でも、ギネヴィア様が——」

まさかそう来るとは。経験豊富なデイクだからこそ、ギネヴィアを任せられると言うのに。

加減もできずに飛び出した、ヘンに裏返った声のまま反論しようとしたら、すかさず口を塞がれてしまった。

「戦いは一人するもんじゃねえ……そう、教えたはずだ」

「——ッ」

見習い時代でもかなり最初の頃。それこそ、まだロイたちフェレの人たちとデイク傭兵団しかメンバーがいなかった時期。

そんな時から言われ続けてきたことを、また言われてしまうとは。もちろん、あのときと今では、そうしようとした理由は違う。だが、一人であるな——その意味からしたら、今の方がよほど駄目な戦い方かもしれない。

「それに、隊長が相手方にツラを出さねえのは失礼だろ？」

「……分かった。みんなを信じるよ」

「そういうことだ」

「ありがと、デイクさん」

「ハッ……分かりやいい」

一人前になったつもりだった。むしろ、三人前になってやろうと考えていたはずなのに。

まだまだ、全然だ。頂どころか、スタートラインにさえ立てていないかもしれない。

ありがたい師と仲間存在に、シャニーは感謝を伝えずにはおれず、今できる精いっぱい顔に向日葵を咲かせてみせた。

その後、あらためてギネヴィアの守りと、真犯人の捕獲に向けた準備を皆で練るのだった。

そして、ついにその日は訪れる——

甘い香りの暗殺者Ⅰ

夕暮れ時。シャニーとデイクは孤児院で一番高い場所——鐘つき台にいた。

デイクがのぞく双眼鏡は北へ続く道をじつと捉えている。その先には、夕焼けに溶けるように小さくなっていく馬車が見える。

「ふう、特に何もなく終わりそうだな」

まるで熱い風呂に浸かったかのように、デイクは大きく息を吐き出して緊張を解いた。

孤児院へのギネヴィア訪問は、警戒していた連続殺人犯の襲撃もなく、つつがなく終わったのだった。

「さすが女王様って感じだったな」

歴戦の戦神であっても、一国の女王を直接もてなしたことなく無かったのだろう。その口調は抑えようとしながらも、緊張から解放された喜びからかどこか上向いている。

「んー？ そーだった〜？」

「あー……。おまえにとってはそうでもねえってか。まさか、女王相手にあんなことをするとはねえ……」

同じように双眼鏡を覗き込みながら、生返事のような気の抜けた返事をするシャニーに、デイクは頭をボサボサやって今度はため息を吐いた。

——4時間前

「あなた方がエレンのお友達なのですか？」

一目でエライ人なのだと分かって、シャニーは無意識のうちに背筋を伸ばして敬礼していた。

煌びやかな装飾をしていたからでは無い。ウェーブのかかった絹のような金髪を腰まで流し、優しいなで肩と合わさって何ともしなやかな印象を受ける。

それでいて、ベルンを象徴する真紅の服を纏う中で、エメラルドのように輝く瞳には強い意志が溢れ、とにかくオーラが違うのだ。

そこらの食堂や大衆浴場なんかでは絶対感じないオーラだ。

「いや、それはルウだ。俺は坊主と契約している解決屋。こっちはリキア副同盟主付きの騎士だ」

そんなことを考えているうちに、デイークがさっさと話を進めていた。

彼は軽い自己紹介を済ませると、背中をトンと押しして挨拶を促してくる。

「天馬騎士のシャニーって言います！ お目にかかれて光栄です！」

緊張して少し声が上がってしまった気もするが、なんだか夢のような瞬間だった。

もうこれだけでも、騎士を引退してもずっと自慢できそうなくらい名誉なことだ。ちっほけな一傭兵に過ぎなかったはずが、まさか大陸の趨勢を握る巨大国家の女王の前に立って名乗るとは。

ところが、ギネヴィアにとってはそれでも無かつたらしい。

「まあ、ではあなた方がロイ様の仰っていた『妖精』と『手負の虎』なのです」

彼女は手を重ねながら目を煌めかせ、口元をわっと優しく広げて嬉しそうだ。

シャニーは思わずデイークと顔を見合わせた。ロイが自分たちの名前を出していたとは。

面倒なことになったとでも言いたげに、デイークは口元を渋くしているが、シャニーにとっては気が気でなかった。

「え?! ロイは……ロイ様は、あたしのこと、なんて?」

「側に居てくれるだけで元気をくれる、太陽のような人だと。ふふ、お聞きしていた通りの爽やかな方でした」

なんだか、嬉しいような悲しいような。

ロイが周りにそうやって言ってくれるのは、照れてしまいがらも手を結びたくなるくらい気持ちが悪くなる。

一方で、側に居れない時間が長すぎて、支えている実感が薄れているのも確かだ。

とは言え、ギネヴィアは誉めてくれているのに変わりはない。

その眼差しは近くて、笑顔も姉のように優しい。意外にも近い距離

感に、ついつい友達と話すようなトーンになってしまった。

「えへへ。嬉しいです。ありがとうございます」

そのまま、差し出されるまま握手までしてしまった。

随分とフランクな女王様に映った。いくらロイから話が行っているとは言え、一備兵相手に握手までとは。

不思議な気持ちだ。相手は国の頂点にいるはずの人なのに、全く近寄り難いオーラがなく、むしろ引き込まれるよう。

いつしか雑談が弾んでしまい、女王と備兵なんて垣根は、あつという間に吹き飛んでいた。

「ロイ様のお側にいられるなんて羨ましいです」

その中でふと、ギネヴィアが独り言のようにこぼした言葉が、妙に大きな声で頭に響いた。

「え……？」

「彼とお話していると時間を忘れてしまいます。引き込まれそうなほど、本当に凛々しい方で、もっとお話したかったですけど……」

今度は妙に焦る自分がいた。

こんな賢者でさえもロイのことを慕っている。彼の優しさや逞しさからすれば、それは当たり前なのだろう。

それがふと、怖いと感じたのだ。

「ロイ様もなかなかお城にいないから……」

ギネヴィアに話を合わせると言うより、すぐにでも会いたい気持ちに言い聞かせるようになってしまった。

一瞬の間で、何とも言い難い空気になりかけたものの、シャニーはパンと手を合わせた。

「そうだ！ ルウくんのご案内しますね。孤児院の中もご紹介します！」

すっかり本題を忘れるところだ。せつかく皆で知恵を絞って用意した、大事なおもてなし。

孤児院のあちこちへ、ギネヴィアを連れて案内して回る。彼女の護衛も兼ねていて、シャニーの「流れ」の揺らぎやレンの魔力も駆使しながら会場への道を進む。

「ギネヴィア様！　こちらへ！」

「あら……これは？」

シャニーが案内した部屋に入ったギネヴィアは、その場で立ち止まって驚いたような声を漏らしている。

中は綺麗に飾り付けられたテーブルが並んでおり、虹色のスイーツが花畑のように美しく咲き乱れる。

掴みはバツチリと言ったところか。顔を綻ばせる仲間たちと思わず領きあい、シャニーはギネヴィアの反応を確かめつつ室内へと案内してみることにした。

「えへへ。せっかくお越しいただいたので、少しでもくつろいでいただきたいなって」

メインはルウが対応することになっているが、ただ案内するだけでは面白くない。そう考えたとき、真っ先に閃いたのがスイーツだった。

何かと理由をつけてデリス・アプリコに通い詰めたおかげもあって、飾りつけも満足いくなかなかの自信作だ。

「あたしたちが作ったのも混じっているので、お口に合うか分からないですけど」

見た目はカンペキかもしれないが、申し訳ない思いも今更ながら込み上げてきて、シャニーは照れ混じりに鼻先を指で触りながら苦笑いするしかなかった。

女王が相手とあり、ある程度はデリス・アプリコの品で固めたつもりだ。とは言うものの、やはり個人の思いつきである以上、予算の天井は背伸びしなくともすぐ手が届いてしまう。

こんなところは妙に庶民的な空気も出てしまっているが、意外にもギネヴィアは嬉々としたはしやぎ声ともとれる感嘆を漏らしている。

「嬉しいわ。リキアやイリアのお菓子……食べてみたかったの！」

彼女が真っ先に駆け寄ったのは、シャニーたちで自作したイリアの伝統的な菓子だった。

躊躇うこともなく手に取り、まじまじ見つめたり、香りを楽しんだりしている。香りがキーのあのお菓子の本質を一発で見抜くとは、や

はりタダモノではなさそうだ。

「あつ、もしかしてスイーツお好きなんですか？」

「ええ。あなたも？」

スイーツを前にしたあの放り込みたくてたまらないと言った感じの綻ぶ顔。情熱にそのエメラルドが燃え上がりそうなほど興奮した目。そして初見のお菓子を的確に感じる審美眼……！

スイーツ好きとあらば、もうそこに垣根などない。あつてはならない。スイーツと言う名の芸術は、老若男女、貴賤さえ問わない共通言語なのだ！

パチンと頭の中でスイッチが入った音がした。

「よくぞ聞いてくれました！ スイーツはあたしの癒し、青春！ いや、人生に欠かせない虹色の魔法です！ 見習い修行の時も——」

リミッターが外れたガトリングのように、シャニーの口からスイーツ狂が炸裂して止まらなくなってしまった。

もはや女王を前にしていることさえ吹き飛んでいるのか、ネジのぶつ飛んだ彼女は友達と話すような口調になってしまっている。

もちろん、まわりにいた仲間たちの顔には戦慄が走っている。

「あちゃー……壊れちゃった」

「申し訳ありませんギネヴィア様ツ。すぐ連れ出しますので！」

嘆くミリアのお尻を叩き、シャニーと一緒に羽交締めにしたルシヤナは、それでもなおお火を噴くように喋り続けるシャニーを引きずっていく。

ところが、それを止めたのは他でもないギネヴィアだった。「いえ」と言葉自体は短くとも、それ以上に目の圧に押されルシヤナは固まった。

「この選び方……センスを感じます」

手にしたお菓子をじつと見つめ、ギネヴィアは唸るようにこぼす。その目の輝きが、ただの珍品への興味ではないのは疑いようもない。「私もお菓子には少々……一家言ありまして。このお茶会、ぜひ楽しみましょう！」

興奮を抑えられない様子でギネヴィアが皆に呼びかける中、周りは

ぽかんとしてしまっていた。

どうしてこうなったのか。現実においてきぼりにされ、烈風に巻き上げられた木の葉のように、スイーツ狂が放つ情熱に誰もが流されていく。

「そうこなくっちゃ！ あたしが世界中で修行した審美眼だつて負けませんかから！」

その中で俄然ハイテンションにはしゃぐシャニーは、女王の隣を陣取って、終始温泉のごとくこんこんとスイーツ愛を語り合うのだった。



「つたく。結局、女子会しに来たようなもんだぜ。仲良くなれて良かったな？」

若い女子だらけ、あまつさえV. I. Pまでいるなかでは、男一人は逃げ出したい気分だったのだろう。

夕焼けに消えた馬車を見届けつつ、ホツとしたようにデイークがボヤキ半分に言いながらシャニーへ視線を送る。

だが、今度は生返事さえ無い。

体ごとシャニーのほうを向いた彼の目元が、ふいに厳しくなった。

「おいシャニー」

「えー？」

ようやく反応が返ってきたものの、相変わらず生返事ですらない。

彼女は双眼鏡に顔を突っ込み、必死に何かを探すようにじつと東の空を眺めている。

目を眇めたり、眉間にしわを寄せたり。どうにかして狙いを探し出そうとする姿に、デイークは呆れたように双眼鏡を取り上げた。

「そんな方ばかりか見ても、ロイは見えねえだろ？」

グサッと心臓を撃ち抜かれたように、シャニーは体が跳ねてしまった。

「わっ、分かってるもん！」

反射的に尖った口から勢いに任せた怒り声が出てしまう自分が

シャニーには恥ずかしかつた。こんなの、デイクに凶星ですと言っているようなものだ。

案の定、「どうだか」とあっさりあしらわれてしまった。

「ちえつ。デイクさん、そーゆーところは勘が鋭いんだから」

「ハッ、おまえが単純なだけだ」

憎まれ口を叩き、口を尖らせてムスツとして見せても、デイクには涼しい顔であっさりあしらわれてしまった。

しばらくそうしてもデイクはまるで構ってくれず、黙々と警備を続けている。

シャニーは彼が持ったままの双眼鏡をちよいと取り上げると、顔をそれに押し付けた。

「デイクさーん、これどこに置いておけば良いのー?」

その時だ。遠くからデイクを探して叫ぶ声が流れてきた。この声はルウド。踏ん張りながら話しているのか、どこか声が掠れ気味。

カチャカチャと金属が擦れる音もしてくる。この音は……武器、おそらく剣だ。

「おお、取りに行くぜ。少し待ってな」

待っていましたと言わんばかりに、喜色をあらわにした声で返すと、デイクは鐘つき台の縁に手をかけた。

「じゃあ、俺は少し向こうを見てくる。持ち場を離れるんじゃねえぜ」
「はーい」

デイクは返事を待つこともなく、そのまま飛び降りていった。

夕焼けにもだいぶ黎が混じり辺りはぼんやり暗い。孤児院の中に子供たちがすつかり入ってしまうと、静かで寂しいものだ。

ときおり遠くに聞こえてくるカラスの鳴き声や、子供達のガラス越しのようなはしやぎ声が、独りの心を揺さぶる。

「……だつて、心配なんだもん。ロイ、元気してるかな……」

誰がいるわけでも無いのに、そう口にせずにはいられなかった。

デイクに言ったところで何が返ってくるは明らかだし、その通りなのは疑いようも無い。それが分かっているくせに口にしたら、余計に寂しくなつて胸が潰れてしまいそうだった。

気づけば、双眼鏡で覗く先はまた東の空になってしまっている。顔をブンブン振って自分を叱りながら、南の空へ視界を移した、その時だった。

「——ッ?!」

吐き気を催すほどの「流れ」の揺らぎ。

ただ激しいだけではない。おぞましいほどの殺意と、背筋を凍らせる、この侵食してくるような黒い眼差し。

「い、今の感覚は?!」

間違いない。ずっと追いついてきたあの男だ。

おまけに、今までとは違う。近い……もう背後に立っているのではないかと思うくらい、殺意が身体中を突き刺してくるのだ。

嫌でも、脳裏にこびりついた笑う仮面が浮かび上がってくる。たまらずあたりをせわしく見渡した。これだけ激しく揺さぶられては、もう「流れ」には頼りきれない。

「助けてー!!」

耳をつんざく高い声に振り向いたシャニーは思わず息を呑んだ。

子供が黒ずくめの男に連れ去られているではないか。

魔法だろうか。男は魔法陣に子供を拘束し、滑るように飛んでいく。まるで……わざと見せつけるように。

「いけない! くそっ、こんな時に!」

狙いがシャニーである以上、罠に決まっている。

シャニーはデイクが消えた背後を一瞥してみるが、まだ彼は戻ってきていない。

僅かな間にも、もう男の姿は豆粒のようになっていて、紫紺に光る魔法陣だけが、夕焼けから逃れるように闇夜に揺らいでいる。

「くっ、今は待ってられない」

これしか、今は考えられなかった。

シャニーは鐘つき台を飛び降り、セチを開放すると風に乗って男の背中めがけて突っ込んでいく。

「セチ、この「流れ」は!」

「ああ、間違いないね。トオルだ。何してくるか分からない奴だから

気をつけなよ」

今まで聞いたこともないような、低く落ち着き払った声でセチが真面目に返してきた。

その声は氷のように透き通りながら、下手に触れればそれだけで斬られてしまいそうで、シャニーの目はみるみるハヤブサのように鋭くなった。

距離はみるみる縮まっていく。

男はスピードを緩め、古ぼけた石レンガ造りの建物の前に止まった。

(追い詰めた——ッ)

甘い香りの暗殺者Ⅱ

(追い詰めた——ッ)

子供をさらって逃げる男を追い、シャニーはさらに加速する。何か耳に固いものが当たった気がするが、今はそれどころではない。

「隠れようだったってそうはいくか!」

風の魔力でスピードに乗ったまま、建屋の扉を蹴破る。中に転げながら体勢を整えると、もうもうと噴き上がる土埃に視界を遮られた。

ようやく晴れても、中は空気が淀んで埃臭い。窓から入る光も臍げで、水の中にも似て闇の先はぼやけている。

ずっと使われていないのか、崩れた石レンガのカケラが足底をゴツゴツと突き上げては崩れる音が廊下に響く。

「あの先だね……」

闇に霞む視界の先には、誘うように扉がぼんやり現れた。うっすらとしか見えなくても、ぴつちりと閉まっているのは分かる。

ついに目の前に立った扉の奥から、気味の悪い流れをびりびり感じる。ここで立ちつくしたら、そのまま動けなくなりそうなほど。

全身に力を込め、一気に飛び込んだ

「……——ッ?!」

ドアを蹴破った音が部屋の中に響き渡った。

中はがらんとしており、部屋の両脇から腕のように伸びる階段からバルコニーがのぞいている。

その上だ。間違いなく、月光が射すあのバルコニーの上には、あの男がいる。手すりに手を引っ掛けて勢いをつけると、シャニーは半螺旋の階段を駆け上った。

「ようこそ、セチ様。いやあ、この瞬間をどれほど待ち焦がれたことか」

どこからともなく聞こえてきた声。バルコニーの奥には、ソファにふんぞりかえるスーツの男がいた。スーツ姿に、顔を口ウで固めたような白の仮面。

やはり、昨年襲撃してきた仮面の魔術師なのは疑いようも無い。

(なんだ……？ この甘い匂い……フロランタン?)

さつきまで建物を支配していたカビ臭さとは別のおいが鼻をくすぐった。

生臭いような、どこか甘いような。

しかし、今はそれどころではない。目の前の男は、魔導書無しで幾らも雷撃を放ってくるのだ。その一撃でも喰らえば、消し炭になってしまうほどの。

「あいにくだけど、あたしの名前はシャニーでね」

静寂の場に、刃が鞘に擦れる声が響く。

霞の構えを取り、いつ不意打ちがきても対応できるように男を見据えて離さない。

そんな警戒心を意外そうに嘲るような声で、男はソファで足を組んだまま返してきた。

「存じておりますよ。しかし、生まれ変わりならば前の記憶もおありですよ?」

一瞬、面食らって息が詰まった。

そんな話、聞いたこともない。

相手は疑う余地もなく敵だ。単なる揺動に過ぎないに決まっている。……とは言え、精霊と契約する時点ですでにデタラメな話だ。何があってもおかしくはない。

「……セチ、どう言うこと?」

「真に受けても疲れるだけだよ。言葉、通じないから」

「セチが言うと言力がハンパないんだけど……」

念の為、相棒に聞いてみたものの、けんもほろろに突き返された。目を逸らすな——まるでそう言うかのごとく、氷のように鋭いセチの眼光は、今も男を貫くほど睨みつけている。

こんなセチは見たことがない。触れただけで刻まれそうな、全てを見透かすような目。まさに、理の外にいる剣神と呼ぶに相応しい威圧感だ。

何より、今まで出会った中で一番に考えが読めない彼女をして、手に余るとはますます底が見えない男だ。

「そんなことはどうでもいい！　そこで何をしている！」

「何をつて、見て分かりませんか？　談笑ですよ、談笑」

どれだけ声を張っても、男から返ってくるのは意味不明なことばかり。間の抜けたゆったりとした口調が、ますます心を逆撫でる。

第一、一人しかいないのに、何が談笑だろうか。時間稼ぎにしか思えない。

「談笑つて、誰も……?!」

太刀を構えながら男の座るソファに近づいた瞬間だった。

何か気配を感じ、振り向けばそこにはスキンヘッドの男が立っていた。いや、立っていると言うより、壁にもたれかかって動かない。目があらぬ方を見ていることからして、とっくに事切れている。

ゾワつと悪寒が走り、後退りした肩に何かがぶつかった。

振り向いた先を見上げ、シャニーは一瞬目を見開いて固まる。

「これ、みんなお前が?!」

薄暗くて見えなかっただけで、このバルコニーにはたくさんの亡骸が、団欒を囲んでいたのである。

黒焦げの亡骸を侍らせてソファで茶を楽しむ姿は、頭のネジがぶつとんでいるではとても言い足りない。

「ええ、みんな美しいでしょう?」

「ふざけるな!!」

しゃあしゃあとした口ぶりに、シャニーは男の声を斬り払うように一閃すると飛び出した。

「ダメだ、相棒。罨だ!」

セチに制止されても、風を纏った体は瞬く間もなく男の目の前まで迫っていた。

勢いのまま刃に青焰エーギルを燃やし、風で宙に浮いた刹那、車輪のように一回転。

仮面の男目掛けて振り下ろされた袈裟斬りは、暗闇にクレツセントムーンを描いてソファを一刀両断にしていた。

「あーあ。邪魔しないでくださいよ。せつかくの団らんを」

真つ二つになって青い焰に焼かれているのはソファだけ。

耳障りな声が、言葉とは裏腹に愉快そうに話しかけてくる。

魔力で翠緑に輝く瞳が、じろりと流し目に男を捉えた。彼は何が面白いのか、下を向いて顔を隠しながらも腹を抱えて肩を揺らしている。

「困らんだって？ 殺した相手となんて、何がしたい！」

テレーザの時もそうだったが、やはり転移魔法はやつかいだ。あまつさえ、この男は彼女とはまるでレベルの違うのは言わずもがな。

自らの恐怖心を振り払うように、シャニーは太刀で目の前を払いながら叫んだが、その瞬間、妙な感覚が襲う。

(くっ、体が重い)

風を纏って羽のように体は軽いはずなのに、どこか動きが鈍い。

足に何かが絡みつくよう。何なのか、これは。鎖にでも繋がれるにも似た……いや、地から伸びる手に掴まれているみたい……。足が上がらない。

「ですから、困らんですよ。アナタもゆっくりしていかれてはいかがですか？」

相変わらず男は飄々とした口ぶりで、武器を掲げた人間が目の前にいるのが分かっているように自然に振る舞っている。

しまいには、テーブルにあった茶器を手にとると、高く掲げてわざとらしく音を立てながらカップに注ぎ出したではないか。

「答える！ 連続殺人はお前の仕業か！」

「はい、そうですよ。それが何か？」

間など一切なかった。

即答。悪びれることはおろか、驚きも否定さえもせず。

まるで名前を聞かれたかのようにあっさり答えた彼は、カップに鼻を近づけ心地良さそうにしている。

「ベッドを用意したり花を飾ったり……いったい何が狙いなんだ！」

「答えなさい！」

「まあ、そうイキリ立たずに。お茶でも用意しましょうか？」

どれだけ声を張っても、まるで虚空に叫んでいるかのようだ。

男は茶を一口啜ると、ティーポットに手を向けてニコツとしてきた

ではないか。カチンと頭に火花が飛ぶ。

目尻を吊り上げ、眉間に稲妻が走るように睨みつけて飛び出した。

「答える!! 去年のようになりたいかッ」

時を切り取って繋げたような、転移魔法かと思紛うほどの瞬間移動で男を斬り上げる。

またしても、手に伝わってきたのは家具が吹き飛ぶ感覚だけ。

「やれやれ。そんな動けるとかすごいですネ」

わざとらしく肩をすぼめながら、転移先で男が手を広げている。白く乾いた仮面のはずが、その目元がニヤリと嘲けているようにさえ見えってくる。

シャニーは霞構えの鋒を男に額に合わせ、瞬きもなく牙を頤に睨み据えた。

「何が聞きたいんですたっけ? ああ……ベッドですね」

それでも、男の口調は変わらない。むしろ、ますます絡みつくようにゆったりしはじめた。退屈で、面倒だとしても言いたげに。

「簡単な話でしょう。死ぬときはベッドの上がいいじゃないですか?」

「なっ……?!」

返す言葉が見つからなかった。

頭の中で、入ってきた声とそれを理解しようとする思考がぶつかつて、火花が散り焦げ付いてしまいそうだ。

彼には自分が殺人を犯した罪悪感はおろか、自覚すらないような。あまりにも冷静な、それでいてどこまでも利己的で寒気がしてくる。

「あと、花は記念ですよ、記念」

爪を立てるような掠り笑いが、寒気に恐怖を被せてくる。

青褪めた顔で絶句するシャニーの顔を楽しむように、男は額に手をやると快哉を天に叫びだしたではないか。

「彼はちやうど100000人目だったのでね。思わず飾っちゃいましたよ、アハハッ」

もはやどこから驚き、何から怒ればいいのか感覚が麻痺してくる。

まるで殺人を作品とでも思っているような饒舌は、止まるどころか

楽しげにトーン高く、早口に繰り返されて頭がクラクラする。

辛抱ならず、ありつたけを腹に込めて怒涛の狂気を押し返した。

「そんなにも人を殺めてきたっていうわけ?!」

10万などありえない数字で、どうせ盛っているに違いないが、問題が数でないのは疑いようもないだろう。数を誇り、さも楽しげに語るその異常性に他ならない。

こんな狂気を逃すわけに行くものか。その気持ちだが、太刀を握る手を強くするはずが、どうにも力が入らない。

恐怖に逃げ腰になっているに違いない自分に、シャニーは喝を入れて鋒を見据える。

「別にアナタが心配することでもないでしょう。それにしても、いやア、残念でした」

白銀の刃を突き向けられても、まるで見えていないかのよう。

男はわざとらしく顔を手で覆って天を仰ぎ始めたではないか。ギリッとシャニーが奥歯を噛み込んだのを察したか、今度は腹を抱えだす。

堪えるように漏れ出す病的な笑い声にまみれて放たれたのは、あまりに利己的で歪んだ願望だった。

「去年の夏、アナタを殺せていれば……大切なアナタを花で飾ることができたと言うのに。キヒヒツ」

「こ、こいつ……狂ってる……」

「アハッ、お褒めいただき感激です」

背筋に焼いた鉄を差し込まれたように、シャニーは全身が身震いして座り込んでしまうところだった。

この男の考えがまるで理解できない。なぜ殺人を繰り返すのか。なぜこんな楽しげなのか。なにより、どうしてセチを知り、大切なアナタなどという呼び方をするのか。

ひとつ分かるのは、話して理解できる相手ではないこと。

今も彼は、まるで褒められたように顔をあげ、子供のように口元を明るく綻ばせている。

「おかげで、次のキリ番まで持ってくるのに苦労しましたよ。なにせ

ベッドを運ぶのはなかなか骨が折れましてネエ」

「?! ま、まさかそのためだけに、一連の事件を?!」

「まあ、それだけではありませんが、アナタのためなら造作もないことですよ」

まるでずっと話したいことを溜め込んでいたみたいに、敵を前によくもここまでペラペラと。

以前に会った時もそうだった。まるで旧友……いや、もっと近い間柄と話すような親しげな口調は、身に覚えのないシャニーにとっては嫌悪感しか湧かない。

あまつさえ、口から出るもの全て頭のネジがぶつとんだ……もはや悪魔の所業に他ならないはずが、それを「アナタのためなら」なんて言い方をされては。

「セチ、こいつなんでこんなに執着してんの?!」

「私が魅力的だったからじゃないかな」

堪らずセチに声をかけてみたが聞いてから後悔し、自信満々の即答でさらに力が抜ける。こんな時でさえ、彼女のマイペースは相変わらずだ。

ところが、「ああ、冗談じゃないよ?」そう心外そうに言ったセチはそのまま続けた。

「昔、告白されてね。そいつが勝ったら付き合おうって約束で決闘して、ボコってからそんな感じなのさ」

粘着質だからか、弱い男には興味がないのか。セチにしては珍しく、軽蔑にも似た、害虫を見るような目で男に視線をやっている。

ようやく、少しだけ繋がった気がする。

やはりこの男も、人間でないのは間違いなさそうだ。そして、なぜ執拗に狙ってくるのかも、無差別殺人を繰り返してきたのかも。

だが、ますます理解が遠のいたのは間違いない。

「す、好きな人を殺そうとなんてする?!」

「だから言ってるじゃないか。サイコ君に普通は通用しないって」

セチは捨て鉢気味にそう言って、また眼光鋭く男を見据えている。その目は友でも、ましてそれ以上を見るものではなく、明確に敵とみ

なす修羅が光っている。

もはや話すことはない——シャニーも太刀を構え直す。

「何にしても……これ以上、好き勝手させない！ 去年の雪辱、果たさせてもらおう！」

「おお……それは恐ろしい」

啖呵を切りながらも、シャニーは焦っていた。

男の反応が全く同じだったからだ。ちょうど1年前……この男から、立てなくなるまでおぞましいほど魔法を浴びせられた、あの時と。

しかも、彼は黒のソフト帽に顔を隠しながらも、口元を鎌のように吊り上げてさも愉快と声を揺らしているではないか。

「でも、どうやって？」

「こうやって——ッ?!」

浴びせられた挑発に、ついに踏み出した瞬間だった。

——ドクンッ

「か?! ……はっ……」

何かが体の中で脈打った途端だった。

膝が砕けて足がもつれたところまでは分かった。そこから視界が宙を飛ぶまでであったという間で、気づけば視界の右半分が真っ暗になり、太刀を握ったままの左手が張り付けられたように固まっていた。

(な、なに……こ……れ。か、からだ……うごか……)

「ケヒヒッ、体に染み込むようでキモチいいでしょう？」

頭上から、男とは思えない子供のよう甲高く、気味が悪い声が降り注いでくる。

「即効性の血液毒ですよ。気づいた時にはゲームオーバーってね？」

毒……それを聞いてハツとした。

レーザーを操っていたのも毒だった。なぜ、そのリスクが完全に頭から抜け落ちていたのだろうか。

もしかしたら、あの甘い香りが毒だったというのか。

体から神経を抜き取られたように感覚がなく、力が入らない。それでも、このまま伏していたら待つのは……。

「ふぎ……けるな……」

「やめてください、動くとか毒のまわりが早くなってしまいましたから。じつくり……その歪んだ顔、見ていたいじゃないですか」

なんとか身を起こそうとすると、頭上から何か重いものが降ってきて、ゴリンツと鈍い音と共に床に頭を叩きつけられた。

どれだけ力を入れても、首が動かない。

目だけで見上げると、そこには茶色の何か……靴底だ。霞む視界のさらに上には、指先を突きつける仮面が闇に浮かんでいた。

「さて、その状態で避けられますかね？」

目が飛び出しそうになるほど、シャニーは目を見張った。

身動きの取れない体。突き向けられた指、そして勝ち誇った男。

もはや、意味するところは——そこまで考えるよりも先に、男の指先が紫電に輝き出す。

「さあ、これでアナタは永遠にワタクシのもの……！ ヒツ……ヒエヘヘ……ヒャーハツハツハ——!!」

殺人を楽しむむ白い笑みがいっばいに広がる視界を、恐怖の光が塗りつぶしていく。

耳をつんざくのは、まさに悪魔の快哉。

(ロイ……お姉ちゃん、ディークさん……みんな……。——ごめん!!)
覚悟を決め、目を瞑った直後だった。

閃電の唸りを引き裂いて、どこからともなくガラスの割れる音がしたのは。

「うおおおおっ!!」

閃電 再び

「うおおおっ!!」

遠かった破砕音を跳ね飛ばすように、獅子の咆哮にも似た怒声が突っ込んでくる。

シャニーの頭を踏みつけていた男が転移魔法で消えて秒もしないうちに、巨人が地面を踏み抜き、大剣で木製のバルコニーを砕き割った。

「……おやおや、気配は遮断したはずなんですがネエ……」

新たに現れたのは望まぬ客だったか。仮面の男はつまらなさそうに口をへの字にひん曲げている。

とりあえず、助かったらしい。シャニーは助けてくれた巨人の足元を見ただけで、もう涙が止まらなかった。

そして、頭上から聞こえてくる声に確信した。大きな背中が、また助けてくれたのだ。

「ハッ、こいつの豪運ぶりにはつくづく驚かされるぜ」

デイクはポケットから小さな何かを取り出し、男に見せつけている。

「こいつがなけりゃ、俺も気づけなかったつてもんだ」

彼が手のひらに乗せていたのは、シャニーがつけていたピアスだった。

突撃の際に落としたそれを頼りに、デイクたちは乗り込んできたらしい。彼の背後からはバタバタ駆けてくる足音が床を揺らし、螺旋階段から次々姿を見せて集まってくる。

「大丈夫?! シャニー」

「み……んな……?」

「下がってる! 毒ガスだ。ったく、もろに喰らいやがつたな?」

デイクは壁に渾身を叩きつけて穴を開けるや、ルシヤナたちからシャニーを預かって躊躇いなく外へと飛び出した。

毒の館から抜け出したデイクに続きルシヤナたちも飛び降り、彼を守るように周りを囲って武器を取る。その視線の先には、魔力で

ゆっくり滑空してくる男がいた。

彼らに男をひとまず任せ、デイクはポシエツトから小さな瓶を取り出した。

「今助けてやる。闇医者のとびきり効くヤツだ。あとからクルが我慢しろよ」

ラベルには化学式が書かれた褐色の瓶。中に液体が入ったそれは、あきらかに薬品だと分かる形状だ。その先には剣山のように針が出ていて刺されたら痛いに決まっている。

デイクはそれをためらいなく腕に突き刺してきた。

痛い……それは、まだ生きているのだと教えてくれる。

ところが、薬を注入されたとたんだった。ピクツと手先が動いてから、身を起こせるようになるまであつという間で、思わずシヤニーは自身を見下ろしてしまった。

まるで眠りから覚めたように、体に感覚が戻ってくるではないか。

「デイクさん……ごめんなさい」

「バカが。だから突つ走るなつつつたろ。ほら、もう立てるだろ？」

あとはレンに治療してもらえ！」

肩を持つて荒々しく立たされ、お尻をバシツと押されて危うくまた倒れるところだ。まるで心配してくれないけれど、そうしてデイクに叱られるのも今は嬉しい。

みんなのところに帰ってこられた喜びにグツと足先に力を込め、レンから抜き身の太刀を受けとる。あの緊迫した状況でも、しっかりと拾っておいてくれたらしい。

「せっかくのワタクシのショーをおじゃんにしてくれるとは。……どうやら死にたいようですね」

太刀を構え直したときには、すでに皆の視線は仮面の男へと注がれていた。

月光に明るく照らし出された口元を苛立ちでひんまげる男は、不気味にテラテラ光る仮面の眼窩から睨んでくる。

そんな静かな戦いは一瞬であった。もはや、戦端は開かれた場所なのだ。

「あいにく、死ぬのはてめえだ！」

咆哮一番、ディークが大剣を掲げて飛び上がる。

月を隠す巨人の影は、瞬く間もなく仮面の男目掛けてまるで隕石のようにのしかかった。

雷電の牙の前に距離は詰まり、男は身構える動きさえ出来ないらしい。捉えた——

「なに?!」

何か、予想していたものとは違う高い音が、新たな緊張で場を支配する。

直後に聞こえたディークの声は、はつきりとした想定外の塊だった。

男に振り落とす直前で大剣にぶちあたった、何か。

空中でバランスを崩しながらも、身を翻して着地したディークは、バックステップで嫌な間合いから抜け出した。

「ふふっ、ワタクシにそんな無粋な攻撃は届きませんかよ？」

男は両手を広げて無防備をさらしながら見渡してくる。まるで、出来るものならやってみろと言わんばかりだ。

何か……うつすらと男の周りに見える気がする。シャボン玉にでも入っているかのように、丸い何かを男を包んでいる。間違いなく、そんな“流れ”をシャニーは感じていた。

「ならこれならどうっすか！」

ミリアが構わずクロスボウの照準を男に合わせてぶっ放す。

彼女の改造クロスボウは目にも留まらぬ連射を浴びせており、あたりは金属が弾き合うけたたましい音でひび割れてしまっそうだ。

そこまでやっても、男の仮面に傷一つつけることは出来ず、クロスボウはそのうちカラカラと空振りを始めた。

「うつそお……ウチの攻撃が通らないとか、どんなトリックツスカ！」
「高密度の電撃魔法によるシールドと分析。あれを普通の武器で貫くのは難しいかと」

レンの分析からするに、魔法障壁を展開しているらしい。

シャニーがディークを見上げると、声を掛け合うまでもなく彼も渋

い顔で頷いてきた。シールドを展開している相手に近接戦はあまりに危険と言える。

とはいえ……。

ミリアが普段と違うボルトを装填している。あれはおそらく、とびきりの破壊力を持ったマグナムショットだ。

「こいつはとびつきりっすよ!! ——えっ?!」

重い音と共に発射された。とっておき。さえ、いとも簡単に弾かれてしまい、ミリアが歯をガチガチさせて驚きを顔にしている。

「死線にわざわざ入り込んでくるとは、アナタたちも物好きですネエ。でも……」

男は広げていた右手をおもむろにミリアたちへ向け、その指先をピンと伸ばす。

蛇のように絡みつくような声が途切れた、その刹那。

「興味ないんですよネエ!!」

男が爆発のような白の光に飲み込まれ。刹那、白で塗りつぶされた世界を突き破る彗星のごとく、青白い雷撃が迸る。

すべてが光の中に溶けていき、誰もがなす術を失い立ち尽くす。あれに当たれば……死を免れないのは疑いようもない。

「らああッ!!」

地を滑るように飛び出したシャニーの抜刀一閃が、破滅の光を振り払う。

風を裂き魂を噴くような叫びをまとう渾身の一撃が、目前まで迫っていた雷撃を斬り飛ばした。

太刀に込めた風の魔力を払って刃を下に向けると、はるか向こうで標的を失った雷魔法が山にぶち当たり、稲妻にも似た轟音があたりを劈く。

「ヒュウ。シャニー、もう大丈夫なのか?」

「そんなこと言ってられないじゃん! コイツは……あたしが倒す!」

デイクの言葉に振り向くことなく、シャニーは再び太刀を霞に構えて男を視界の真ん中に捉えた。

二度もこの男の前で膝をついた。放っておけば、何の関係もないものにまで平気で手を出す殺人鬼の前に。去年はウツディヤルシヤナを。今年はデイクに、ルウ、そして多くの何の関係もない人達さえ。たったひとりへの執着のために大事な人達をこの男は傷つけ続けてきた。絶対に許せない——怒りが目に渾々と魔力を湧き上がらせた。

それを全身に浴びた男の口元が、ニヤリと快楽に吊り上がる。

「イイですねエ！ ではワタクシのショーで、その顔をジワジワ恐怖で歪めていただきましょうか!!」

男が開演を宣言するや、彼の周りに陽のような光輪が見えた。

瞬きも許さぬ間に輪は男に吸い込まれ、何かが風船のように膨れあがり爆発するような衝撃で、誰もが吹き飛ばされそうで何かに掴まらずにはおれない。

「うわあああ?！」

「みんな！ あたしの後ろに！」

バリバリと何かが粉々になる音があたりの景色を破壊する。

さつきまであつはずの建屋がない。男の凄まじい放電は、吹き飛ばし土台さえかき消してしまったと言うのか。

吹き荒れる雷の嵐に瓦礫が矢のように降り注ぐ中、シャニーは仲間の前に立って風の魔力で弾いて凌ぐ。

腕で顔を守りつつ隙間から男を探せば、彼はゆっくりと宙に昇っていくではないか。

「ハハハ！ 地を這いずる愚かな“人”が、ワタクシをどう止められるのか、出来るものなら見せてくださいヨオ!!」

建物があつた高さくらいまで浮かんだ彼の背後には、迸る雷電で紫に染まる月が見える。

ミリアの機械弓やレンの魔法くらいしか、このままでは届きそうにない高さだ。

「チイツ、転移ならまだしも、浮遊なんざ初めて見たぜ」

それはデイクであっても同じようだ。大剣を構えながらも、すぐに策が浮かばないよう舌打ちだけを残す。

その反応を待っていたかのように、仮面に交戦的な笑みを口元に浮かべて男が手を掲げた。

「ホラホラッ、早くしないとミナサマ黒焦げですよ!!」

男が手先に召喚したのは剣。それは実態が無いようで、激しく流れる紫電で形作られている。おそらくは、魔力で生成した電撃の塊に違いない。

彼はその鋒で斬りつけるのではなく、地上へ向けて放り投げてきたではないか。

「危ない!!」

シャニーの怒声でとっさに皆避けるが、魔法が伝ったのか着弾点から2馬身ほどまで地が焼けており、焦げた黒まで焼かれて真っ白になるほどだ。直撃したらどうなるかなど言わずもなだろう。

「クソっ、さすがに地上からじゃ分が悪い。シャニー、おまえらの十八番の出番だぜ!」

「ルシャナー！ あたしたちで足止めする！ その間に天馬に!」

デイークに領いたシャニーは脇から大きく斬り上げ、風の刃を刀身から飛ばして仮面の男へ牽制を仕掛けた。

相手のアドバンテージを、一刻も早く奪わなければならない。天馬騎士で三角に囲めば、少なくとも1人は死角に入れるに違いない。

だが、仮面の男が地表でうごめく連中を見逃すはずもなかった。

「お死になさい!」

彼はシャニーからの牽制を避けると、間髪入れず手に剣を召喚し投げつけた。耳を掻きむしるような重い音を放ちながら、まっすぐにルシャナたちの背中へ吸い込まれていく。

「させるかよッ、これでも喰らいな!」

とっさに腰に挿していた投げ斧をずんむと掴んだデイークが、咆哮一閃に投げつける。

唸りをあげて飛んでいく渾身の斧が紫電の剣にぶつかり、剣は標的を失って遙か先の山へ吸い込まれていった。

「ナイス！ デイークさん!」

「ハッ、一発当てるごとに10万ゴールドとかならアガるんだがな!」

その後もしばらく、仲間たちの経路を確保しつつ、ルシヤナたちを狙って投げ下ろされる魔法を撃ち落としていく。

だが、完全な防戦一方なのは疑いようもない戦況だ。

ようやくルシヤナたちが帰ってきて、彼らはシャニーの天馬も連れてきてくれた。

すぐに相棒に乗ったシャニーは空に舞い上がる。地上から見ているより、悪魔的な光景が広がっていた。紫電に包まれた男が、まるで魔界の空に浮かぶ太陽のごとく闇を照らしているのだ。

ただ飛び込むだけでは、あの太陽に近づくまでもなく黒焦げだろう。

「さて、ここからじゃ足止めが関の山だな。どうするよ、シャニー」
どうしたら——そう考えているとデイークの声が下から聞こえてきた。

何だか、彼に背中を押ししてもらえた気がする。

考える余地など、最初から無かったではないか。相手は雷の精霊トオルの使い手。止められるのは、自分しかない。

「どうなるか分からないけど、今できるありったけをぶつけるだけだよ！」

その先は、かつて踏み込んだことはない黎い世界。

いや、一度だけあつたかもしれないが、その時は意識を奪われて臍げに覚えているだけ。

今はそこに踏み込まなければならぬ。

大事なものを守るためには、怖いなんて……——言っていられないではないか！

「デイークさん、もしもの時は……お願いね」

どうしてだろう。ふいにデイークの顔を見たくなくなって、後ろ目に彼へ視線をやったら、なぜか不意に笑みが浮かんだ。

デイークは目を見張っているが、きつとこの人なら最善をとってくれるに違いない。

後顧の憂いを絶ったシャニーは、もう一人の自分に勇気の塊をぶつけた。

「セチー！ この前みたい、いや！ 全部貸して!!」
「へえ？ 飲まれちゃつてもいいんだ？」

セチは試すような横目で意地悪く返してきた。
テレーザたちと戦ったときも、まだブレーキをかけていた自覚はある。セチと手を繋ぎながらも、それでも重心は外へ傾けるように震えていたのだ。精霊に飲まれてしまえば、二度と帰ってこられない恐怖に。

「あたしたち、相棒でしょ？」

その恐怖を自らの太刀で振り払った。

何度も折れ、その度に多くの人に支えられて鍛え直してきた誓いという名の刃で。

その刃の中にはもう、セチもいる。いや、共に握り、共に翔ける相棒なのだ。

彼女はずっとそれを望んできた。相棒として覚悟を今決めずして、いつ決める？ この一戦に敗れたら、どのみち全て失うのに。

シャニーは自らセチの手を取った。

「あたし、セチを信じるから！」

「——ッ」

「だから、セチもあたしを信じて！ もし飲まれても、きつとみんなが止めてくれる！ 行こう！」

ずっとみんな励ましてくれてきた。万が一の時は任せろと。

今こそ、大事な人たちを信じて、前だけ向く時に他ならないではないか。

取った手を引いて、セチと溶け合おうとしたときだった。「……そっか」そう零して、セチに引つ張り戻されてしまった。

「じゃあ、問うよ」

急かそうと喉元まで出かかった言葉が引つ込んだ。

問うてきたセチの目は未だかつて見たこともないほど透きとおり、エメラルドのように輝いていた。

彼女と目を合わせると、静かな、だけど氷のように厳しい声が直接心に響いてきた。

「あなたはセチになる？　ならない？」

「??　よく分からないけど……なるしかないじゃん！」

言い切った瞬間だった。

まさにトリガーを引き、一気に歯車が動き出したよう。

シャニーの周りに地を抉り渦を巻くほどの凄まじい風と青い炎が吹き荒れ、その中に彼女はすっぽり包まれてしまった。

「こ、こいつは……」

まるで異世界との扉を開いたかのような、天を衝く蒼の波動を見上げて、デイクはそうこぼすしかなかった。

それも束の間。その源に、くつきりと人の形が浮かび上がってくる。

——黎明の眠りより、幾重にも繋ぐ絆を携え現界せん。

——我は風。悪夢を斬り払う風刃にして、暖かい光を導く風。

——希望を紡ぎしセチを継ぐ者！

青い焰の中から聞こえてくる声。

水の中から聞くようにぼやけエコーが入りながらも、誰もがはつきり聞き取ったようで瞠目したまま動かない。

固まる時を次のページへ誘うように、一際強く吹き抜けた風が焰を吹き飛ばした。

「シャニー、おまえ……なのか？」

中から現れたのは、いつもと変わらない後ろ姿。毒気を抜かれたような顔でデイクが声をかけるが、しばらくしても反応はない。

彼が一步踏み出そうとしたときだ。それを察したかのようにシャニーは確かめるように静かに目を開けた。

目を開けられる。腕も足も、全てが思うがまま動かせる。

「……大丈夫、飲まれてない！」

瞳から渾々と溢れる翠緑はまごうこと無くセチの魔力だ。それでいて、その瞳は一層に青を輝かせてまっすぐ前を見据えている。

溶けあった二つの風が、透きとおる青の焰に包まれた光に包み、周りに勝利への希望を抱かせた。

「邪魔が一匹紛れ込んだままですが……ようやく2人になりました

ね」

死線を超えた先に踏み込んでいると分かっているのだろうか。待ち焦がれた瞬間への興奮が男の声を踊らせ、抑揚に乗って絡みついてくる。

「あなたにセチとどんな因果があるかは知らない。でも、多くを奪ったその罪、贖ってもらおう！」

その呪縛を払うように太刀を一振りしたシャニーは再び構えを作り、鋒の向こう側にいる悪魔へ腹の底から叫ぶ。

怒り、それは真つ赤に燃える怒りだ。それでも、周りを包む風のイーギルは乱れない流れを崩さない。

「キヒヒツ、ようやくその気になってくれましたね！」

むしろ興奮し始めたのは仮面の男だった。飢えた蛇が舌なめずりするように口角をあげ、両手を広げて紫電を迸らせる。

あたりに吐き気を催すほど重く耳障りな電撃音を走らせる男だったが、その眉がぴくりと動く。「……その前に、確かめたいことがある」そう言つて、シャニーが構えをとつたまま視線を合わせたからだ。「ん？」

「テレーザにあんな危険な魔道書を渡したのは、お前なのか？」

シャニーは確信していた。いくらテレーザが名家の魔法使いとは言え、あんな電撃魔法を扱えるとは到底思えない。

男が見せつけるのは、立っているだけで震えがくるほどの閃電だ。もう、消去法も何も無いではないか。

「彼女は最上級が欲しいと言うものですから。あなた方を試すにはちょうどいいかと思ひまして」

紫電が少し収まったと思つたら、代わりに聞こえてきたのはわざとらしい拍手だった。ピタピタとスナツプを利かせた手先だけの賞賛と、ありつたけの侮蔑と。

「それで合格だったから、今回自らおいでなすつたつてわけかよ？」

「ご理解の通りです。いやあ、いい戦いぶりでしたよ」

虎が唸るようなデイークの野太い声にもまるでたじろぎもせず、むしろ仮面の男の声はますます楽しげに甲高い快楽を叫び、テンポを増

す拍手が神経に爪を立ててくる。

そんな悪魔の快哉が不意に止む。「でも、彼女はよく分かりませんよ」そう言つて彼は両手を広げ始めたではないか。

「ワタクシなら最低級魔法を使いますがねえ」

「最低級であたし達なんか十分つて？ ずいぶん——」

「ノンノン、誤解ですつてば。……キレの悪い魔法のほうが、ながくアナタが苦しむ姿を見られるじゃないですか？ アハハツ、ゾクゾクしますね、堪りませんねえ」

男が指差し見下ろす先で、シャニーがギリつと怒りを噛み砕いていた。

この男はどこまでも、それが目的なのだ。それ以外は、モノであろうが人であろうが、それこそ命でさえもが無惨にも踏み抜かれてきた。

「チツ……——こりやあサイコ野郎じゃ済まねえぞ」

「あああ、今すぐ、その白い肌を赤く腫れさせてみたいものです」

デイクが肩に乗せた大剣を担ぎ直す側から、男は衝動を抑えられないのか興奮に震える声と視線で標的を舐め回すよう。

しかし、ついに辛抱ならなくなったか、男はついに恋人の名を呼んだ。

「ねえ？ セチさん？ 聞いてみたいんですよ、アナタが許しを乞いながら泣き叫ぶ声を」

「キミに私はやれないよ。相棒もいる今なら、何度やってもね」

まわりがギョツとするのがシャニーには分かった。デイクでさえ、横目が固まつているし口がぽかんと空いたまま。

今喋ったのはセチに間違いない。なにせ、自分はシャニーだと叫ぼうとしていたのだから。

聞き間違いでないのは、嬉々として口角釣り上がる仮面の男を見ても明らかだ。

「くふふ、さつき毒ガスのときは最高にアガりましたよ。少しずつ、少しずつ弱つていく青ざめた顔……最高のシヨーと言えるでしょう！」

「無関係を巻き込まなかったのは褒めてあげるよ。ただ、相棒をハメ

たツケ……きつちり払ってもらおうよ！」

決別の咆哮と共に戦端は開かれた。

ホイッスルで天馬を呼んで地を滑るように滑空してきた彼に飛び乗り、シャニーはルシヤナたちと合流して体形を整える。

これである男のアドバンテージは封じた……——ともまだ言えないだろう。いくら天馬騎士が魔法防御に優れているとは言え、一撃でも被弾を許せば立て直すのは困難だと去年思い知らされた。

「みんな！ あたしの軌道に合わせて！」

それでも、今はあの時には無い力と仲間がいる。

部下に指示を出しながら、突撃のタイミングを地上を駆ける勇者と合わせて握り替えた槍に力を込める。

地を走る稲妻のごとく走り抜けたデイクが、その巨体に見合わぬ機敏さでトントンと厩舎に駆け上がっていく。屋根を踏み込んで建屋の屋上まで飛び出すまであつという間だった。

「おららああー！」

屋根から弾丸のように飛び出した彼の目が捉えるのは、宙からのうのと魔法を撃ち込み続ける仮面の男の背中。渾身を込めた大剣で黒の魔導士めがけ一刀両断に振り下ろす。

男に触れそうな刹那。激しい火花の紫電が迸り、吹き飛ばされたのはデイクの方だった。

「クソっ、やっぱり通らないか?！」

「ヒヤハハー、簡単に消し炭にならないでくださいヨォー！」

魔法障壁で弾かれながらも宙で体勢を整える。重い音で地面を踏み抜くや、暗黒の空を見上げて舌打ちする彼の眉間が厳しくなるばかり。まるで気づいてすらいらないように、仮面の男は今もシャニーたちを狙っているではないか。

「ミリアー！ 必殺技使えないの?！」

無尽に襲い来る雷の剣はとても全て避けられない。あまつさえ、仲間と陣形を組んでいる状態では。セチの風で彼らを包んで剣を弾きながら好機を待つしかなかった。

とは言え、デイクの剛腕ですら通用しないのに、剣だの槍といっ

た近接武器で挑むのは自殺行為に他ならない。そうならばミリアたちが頼りなのだが、返ってきたのは悲鳴にも似た焦燥だった。

「チャージ時間を稼げないとムリっスよ！」

「ん。それに、あのシールドを展開したらキツイかも」

ミリアの返事を聞かずとも、シャニーにも厳しいことは分かっていた。頼みの綱は魔法だが、敵も魔法使いとなれば効果的とは言いがたい。瞬発性ひとつとっても相手の方が上だ。おまけに、レンの言う通り絶対防御の方陣まで備えていては。

八方塞がりな気がしてギリつと奥歯を噛むシャニーは、ふとその口元を解いて仮面の男を見据えた。

「よし……。ルシャナ、ミリアたちとお願い！」

難しかろうと、止まってしまえばそこで終わりだ。天馬に鞭を入れ、夜空に流星のごとく突き抜ける。

とたんに仮面の男の口元が静かに上向く。シャニーが短気を起こすのを待っていたのか、彼はほくそ笑みながら天へと掲げ、手先に集まる魔力で空が白夜のように染まっていく。

「バラけたってダメですよ！ インディグナント・レイン！」

シューターの一斉発射にも似た轟音が、天へと突き上がったかと思うと世界が紫に染まる。意思を持つかのように反転し地を見下ろした紫電は無数の矢となって降り注ぐ様は天の裁きか。

それでも、ルシャナたちが被弾することはなかった。

侵食する紫紺を引き裂くように、翠緑が仲間たちをかばいながら天を賭けていくではないか。

精霊の風をまとったシャニーは、矢の全てを跳ね除けながら星が走るように突っ込んだ。

「貫け!!」

「おっと！ アナタが槍を使うなんて、さすがに時効つてヤツですか？」

やはり、確かな感覚はない。防御障壁に阻まれているのだろうか。

いや、間違いなく貫いたはずが、寸前でかわされたといったところか。スーツの袖が槍に触れたか破れている。

はつきりしたのは、まだチャンスはあることと、また意味の分らないことを言うあたりダメーじはないことくらいか。

「使ってるのは相棒だからね。錆びついた技なんかと一緒にしてあげないで欲しいな」

「とは言っても、アナタの太刀に比べれば」

同じくらい分らないのは、自分の代わりに応えたセチの妙な言い回しだがそれは後だ。この絶好の機会を逃すものか。

狙いすました目でセチが男を見据えて「どうかな？」と挑発したのを合図に、風に溶ける霧のごとく天馬ごと霞んで左右に分裂した瞬間、シャニーが弾丸のごとく跳び出した。

「ネビュラス・グレイヴー」

「ぐっ?!」

風のマナに身を溶かし、左右からクロスする流星の一撃に、男が短く呻き声をあげのけ反った。

それでも、武器で防御障壁を貫いて致命傷を与えるのは難しいと言う他ない。追撃を見舞うより先に、糸で釣られるように首をもたげた男はすでに体勢を整えてしまっている。

だが、風穴は確かに開けた。

「ふふふ、風の幻影術とはなかなか——?!」

そこまで笑っていた男が言葉を飲んだ時には、もう引き金は引かれていた。

「ぬう?!」

轟音を突き立てて白夜すら塗りつぶす閃光を前に、男は身をひるがえす間も無く声を上げた。

突っ込んできたのは凄まじいエネルギーの塊。世界を両断せんとはかりに次元を引裂き、収まることのない激流が全てを飲み込んで吹き飛ばしていった。それは、戦いの流れさえも。

シャニーがオトリとなって防御障壁を崩し、その隙間へミリアがレンと開発した魔道衝撃砲を撃ち込んだのだった。

「ちっ、掠りっスか!」

クロスボウの照準越しに男を見上げたミリアから舌打ちが漏れる。

完全な死角から撃ち込んだはずが、手元が狂ったのか衝撃砲は直撃することなく彼方へ吸い込まれてしまった。

恐らく掠ったであろうことは頬を摩る男の仕草で間違いなさそうだ。

「ヒ……ヒヤハハ……アヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

だが、その擦る手が止まり、擦れるような笑いが漏れたかと思うと、みるみる男の口元が蛇のごとく裂けて天を突いたではないか。

「大人しくしておけば痛い目に合わずに済んだものを！ いいでしょうッ、そんなに欲しいなら差し上げましょう！ 死線の先への招待状を！」

はなから話を通じない類の相手だったが、どうやらキレてしまったらしい。

男性にしてはもとも高かった声をさらに跳ね上げて裏返るほど叫んだ彼は、おもむろに仮面に手をやった。

「第一遮断方陣展開……ッ」

危機を察して咄嗟にミリアが撃ち込むなか、男がつぶやくと彼の手の甲に紫紺の紋章が浮かび上がっていった。

光芒のアステリア

男の手の甲に浮かんだ幾重にも蛇が絡むような複雑な紋章がさらに輝きを増す。あたりに吹き荒れる吐き気を催すほどマナがどんどん濃くなり、誰もが危機感に身構えていた。

「そうはいかないっすよ！ エレメンタル・ステインガー！」

その中でも咄嗟に動いたミリアがレンの魔法との混成攻撃で瞬間に撃ち抜く。毒沼そのもののように紫に染まり上がる世界を、エルファイアと融合した火焰砲が引き裂き、男に直撃し……

「だ、ダメっす！」

「物魔複合弾を跳ね飛ばすなんて……」

「ハハハッ、ワタクシの絶対遮断障壁を穿つなど不可能ですよ！」

まるで壁にボールをぶつけたように。いや、回転する刃に触れたように魔法弾は弾かれて地面を大きく抉っていた。

撃ったミリアはもちろん、レンも計算を超えた事象にただただ、ぽかんと口を開けて言葉を失うばかり。

「さて……終わりにしましょうか！ チリ一つ残さずにネエ!! 第十三番拘束解除！」

絶句する世界で一人だけ、まさに破壊神と言わんばかりの衝動を吠えた仮面の男が両手を頭上掲げた瞬間だった。

重く、深く、先を見通せない青紫の球体が黎の空からゆっくり雲を突き破って降りてくるではないか。

「雷精トオルよ！ すべてを押し潰す天槌となり現界せよ!!」

ただの球体ではない。もはや空を食い尽くすほどに巨大で、まさに空が降ってくるとはこのことか。これこそが彼の最上級魔法——トールハンマーだった。

「いけねえ！ あんなもん放られたらどこまで消し炭になるか分からねえぞ！」

眼下からのデイクの叫び声よりも、天に生まれた究極の破壊衝動の唸りともとれる重低音に腹が震え耳が麻痺してくる。何度デイクが投げ斧を浴びせようとも、乾いた音を立てて跳ね返されるばか

り。

とつさにシャニーはセチの風を纏って天馬で突っ込んだ。

「させるか！ ネビユラス・グレイヴ！」

「ぐあっ?!」

あれだけ固かった防御を、紙を断つように切り裂いて男に槍が突き刺さっていた。

やはり、精霊の力同士なら何とかなるかもしれない。そんな期待を浮かべたシャニーだったが、「……なーんてね？」とニタニタ声を弾ませながら、男が仮面の奥から視線を合わせてきて堪らず槍を退いた。

「アナタはご存知のはずだ。ワタクシにそんな攻撃は無意味だ」と

肩口にできたはずの傷口がみるみる塞がっていく。斬ったそばから次々再生していった去年の残像が走る。

それでも、今回は絶望することはなかった。仲間がいる。新しい力がある。そして、一度敗北するまで食い下がったからこそ分かる変化点がある。

頭上の超魔法への準備のためか、男は両手を掲げたまま転移どころか回避行動すらとらなかつた。これならば、仮説さえ当たってくればチャンスはある。

「意味があるかはあたしたちが決めること！ 上に意識が行ってる分、ずいぶん回復が鈍いみたいだけど？」

「……ッ。不死身と解っていないながら、懲りもせず我々に刃を向けるとは。相変わらず、品性のかけらも無い生き物ですね」

「何とでも言え！ ここにいる人たちには指一本触れさせないぞ！」

怒りの咆哮と共に渾身に放たれた手槍は、纏った風のマナで螺旋を描きながら糸を引くように吸い込まれて男に突き刺さった。

しかし、男の言うとおりの何度やっても同じだ。非力な天馬騎士の投槍では、魔人の回復力には到底敵わないのは明らかだった。

「……やっぱり」

それでも、シャニーは確信したように零すと相棒を呼んだ。

「ねえセチ。あいつ、なんか弱点とかないの？」

「日光」

何やら因縁の相手のようだし、何か知っているかもしれないと一縷の望みをかけたつもりだったが、まさかの秒で返ってきたではないか。最初から言って欲しいと反射的に浮かんだが、それよりも彼女はなんと言った？ まさかの答えに思わず聞き返さずにはおれない。

「日光って?!」

「あいつは陽を浴びれない体質でね。それまで粘る?」

そう言えば、去年戦った時も突然去ったのを思い出した。騎士団の援軍を見て逃亡したのではなく、陽を避けての撤退だったとは。

とは言え、今日は陽が落ちたばかり。そんなことをしていたらルウたちへの被害は避けられないだろう。こうなれば、もはや賭けるしかない。

「ミリア、レン！ 必殺技の威力を今度こそ見せてもらおうよ」

「で、でもあの壁に阻まれて!」

急な指示に狼狽するミリアの横に天馬をつけたシャニーはそのまま耳打ちを始めた。

最初こそ目をまん丸にして彼女を見返したミリアだったが、シャニーにポンと肩に手を置かれて鼓舞されると、覚悟を決めたく強く頷いた。

「わかったっす！ やってやるっす!」

「セチも、頼むよ!」

「承知! ただ、ホントに数秒だけだよ。うまくやんなよ、相棒!」

一度きりのチャンスなのは疑いようもない。それでも部下を、相棒を信じて飛び出すしか悪夢を切り開く術がないなら腹を括るしかないだろう。

悪魔の眼差しを送り続けてくる仮面の男を皆で見据える中、ミリアとレンが魔道衝撃砲の準備に入った。

「ヒヒヒッ、ナイショ話は終わりましたか？ あと10……あと10でオワリですよ!」

準備を着々進めているのは、何もシャニーたちだけでは無かったよ。うだ。男がこれでもかと興奮に跳ねる声で終焉を叫ぶと、天井の黎く重い彗星が鼓動を昂らせるように膨れ上がったではないか。

「トールハンマー……カウントダウン開始……」

「エネルギー充填20%……40%……60%」

両陣が最終兵器発動に向けて、静かに、そして確実に時を刻んでいく。

破壊力と言えば、精霊魔法トールハンマーが圧倒的なのは言うまでもない。あれを発動された時点で敗北は決定的と言えるだろう。

何とかあの防御壁を打ち破って、一撃で仕留めなければ。

「発射15秒前！ 衝撃に備えて！ 15……14……」

「8……7……ヒヒッ、そんな魔法はワタクシの障壁の前には無力だ……ッ」

「エネルギー充填90%……110%……120%フルチャージ！ シヤニー、早く!!」

わずかにミリアたちが先手を取った。数秒でも、それは勝利を呼び込む流れを掴むにはあまりにも大きな差。

待っていたシヤニーは、手にした槍をグツと握り直してセチのマナを一気に流し込む。

「フルブーストッ！ いっけえ！ フレスヴェルグ!!」

投げ放たれた槍が風に渦巻き男へ一直線。近づく絶対防御の魔法障壁。黎が迸る破壊の空へ、青の軌跡が吸い込まれていく。

槍が障壁に触れた途端だった。乾いた音の代わりに、セチのマナが切り裂き障壁に風穴を開けたでは無いか。

その瞬間を照準越しに確かめたミリアが、思い切り引き金を引いた。

「フェニクス・ブリンガー、発射あ!!」

クロスボウに魔道圧力調整装置を組み込んで、レンの魔力を限界まで圧縮して一方向へ放つ大技だ。

高温にたぎり青白く膨らむ究極の一撃が闇夜に伸び、風穴を正確に通り返けて男に直撃したか世界を揺らす。

「ぐお?!」

「効いた！ セチッ！」

「ああつ。今だよ、飛べ！ 相棒!!」

天空の雷槌が大きく揺れる。間違いない、今こそがチャンスだ。

太刀を引き抜いたシャニーが取った行動に誰もが息を呑む。セチと呼吸を合わせ、空を駆る天馬から飛び出したのだ。

「らあああー！」

それでも彼女は落下することなかった。吸い込まれるように仮面の男の元へと飛んで行く。セチのmanaを限界まで放出し、生まれた烈風で空を滑っているのだ。

「我が剣は……ああもう！ セチ、これやっぱパス！」

「恥ずかしがるようじゃまだまだだね」

恥ずかしがってお約束を省くシャニーにセチはため息混じりだが、それはわずかな間のこと。その翠緑の瞳は、仮面の男を冷然に見つめてmanaを高め始める。

「夏夜に戦ぐ颯爽の風にして、瞬きの間も与えぬ星雨の煌めき……：我らの剣、見せてやるといいさー！」

「颯閃一刀流秘技！ シリオン・ミーティア 星影ノ颯!!！」

ありつたけの魔力をこの瞬間に賭け、空を弾け飛びながら青と白銀の軌跡を残す様は、まさに妖精シルフィードダンスの剣舞。自ら放つ光に反射するように、不規則に全方位から男を狙う。

あれだけ絶対的だったトオルのmanaで作られた絶対遮断障壁が、光に触れる度に削られ砕けて切り裂かれていく。

「なあああああ?！」

一度守りを打ち砕かれてしまえば、あれだけ優勢だった仮面の男もただの脆い魔導士でしかなかった。

嵐に巻き込まれた木立のように為す術なく斬り刻まれ、太刀がぶちあたってた仮面には大きくヒビが入り、ついに男は真つ逆さまに墜落していく。

「うわああ?！」

どうやら限界が来てしまったようだ。男を追いかけるようにシャニーも浮力を失って宙に放り出されてしまった。

でも、落馬した時のような腹に浮くような感覚を覚えたのは一瞬のこと。むしろ、身構えていたよりかなり早く地面との激突がやって来

て、お尻からぐつんと響いてきた衝撃が脳天へと駆け上っていく。

「よつと！ 危ない危ない」

「ルシヤナ！ ありがとうー！ 命の恩人だよー！」

こうなることを先読みしていたのか、ルシヤナが落下するシャニーを天馬で救出していたのだった。

命の恩人に今できる精いっぱい感謝を伝えたものの、ルシヤナは怪訝な目で呆れたように返してきた。

「まさか、あんた飛び出したあとのこと考えてなかったわけ？」

「えへへ……。つて、まだだよ！ ルシヤナ！」

勝利の余韻は、地上から突き上げてくる殺気であつという間に吹き飛ぶ。見下ろせば男が膝を突き立ち上がろうとしているではないか。それでも、背中にのしかかる瓦礫に負け、四つん這いのまま固まっている。

「お……のれええー！」

あれだけスマートだったスーツは見るも無惨にあちこち切り裂かれてしまい、潰れた金管楽器のように掠れ掠れの声にはもはや先程までの威勢はない……。はずだった。

「劣悪種があー！ 消し炭にしてくれるー！」

男の体が一閃輝いた途端、衝撃波が空中にいたシャニーたちをも襲う。いなくなると天馬を抑えつつ目をやった眼下では、魔力が暴走しているのか男を光が包み、まるで野獣の唸り声のような吐息が聞こえてくる。

(くそッ、このままじゃまた回復されちゃう)

シャニーは内心焦っていた。一発で仕留めきれなかったのでは次の手がない。同じ手は食わないだろうし、何より連発できるような技ではないのだ。

去年の記憶が蘇る。決死の覚悟で男に挑んだ末の絶望感。あの時、男はほくそ笑んでいた。長く苦しむ顔を見たいと言って。

また、悪夢に引き摺り込まれるのか？

「神の剣よ！ 光さす道となりて、穢れし魂へ雨と降らせん!!」

「どああ?!」

朝は突然やってきた。まばゆい陽が天を一瞬で包んだと気づいた時には、男めがけて一条の光がさしており、その光は一気に逆鱗のごとく巨大な光柱となって激流が男を飲み込んだのだ。

「こ、この魔法って……」

「つーか、おいおい……この声」

ミリアたちの放った魔道直撃砲が霞んで見えるほどの超魔法が、シャニーには見覚えがあった。この、破壊的ながらもどこか見入ってしまう神々しい光を。

それはデイクも同じだったようだが、彼はもつと違うところに気づいたらしく瞠目していた。

視線を送った先にいた人物が信じられずに、二人とも一瞬固まってしまった。

「ギネヴィア様?! ご無事ですか?! どうしてこんなところに!!」

「巨大な紫電が見えましたので、戻ってまいりました。あなた達こそご無事ですか?!」

なんと帰国の途についたはずのギネヴィアが加勢してくれたのだ。でも、彼女は大国ベルンを統べる女王だ。こんなところで万が一が起きればとんでも無いことになるのはゆゆうに想像できる。あまつさえ、万が一で済まないであろうこの死合場で。

すぐに避難させようと天馬を向けたシャニーだったが、それを止めるようにデイクがギネヴィアの前を守り始める。

「ハッ、光の女神様アーリアルの加護をもらって負けちゃ、絵にならねえってな!

おかげで百人力ですよ」

彼の前では、再び地に臥した仮面の男が呻き声を漏らしてる。頭を抱え、幻影でも見たように時折悲鳴を上げながら。

「消える……ワタクシの……魔力が……あ、ああああ?!」

まるで頭から猛毒を浴びたようになりふり構わない絶叫は、一度は収まった白夜の死闘に新たな死の領域を呼び込むようだ。

現に、男からは何かが溶け出すように白い湯気のようなものが立ち上っている。

「セチ、どうなってんの? アレ」

「アイツは不死を司る地竜の魔力を纏った男。反魔法を喰らって、構成する魔構成が崩壊したみたいだね」

「え?! ちょ、そ、それって」

動揺をそのままセチにぶつけてしまったが、彼女は落ち着き払って男の末路を見つめている。

だが、彼女がさりりと云ってくれた話は、ますますシャニーを仰天させるものだった。あまりにも異質な流れを持った男だったのは、もしや――

「キ……サマ………らああああ!」

「?! 危ない、あなた達! 離れてください!」

その仮説を証明するように、男が白光に包まれるやみるみる光が肥大化し始めたではないか。

背後からギネヴィアの悲鳴にも似た声が飛んでくる。それでも、目の前で現実には起きた悪夢に、誰もが立ち尽くし見上げるしかできずにいた。

「コウナレバ……シナバモロトモオ!!」

ようやく収まった光を突き破って出てきたのは化け物――竜族だ。しかし、こんな茶褐色の竜など見たことがない。ベルン動乱でみたことがあるのは、赤に燃え盛る火竜と彼らを生み出していた黒紫色の魔竜だけ。

それでも、この圧倒的で空を塗りつぶすほどの巨体は間違いない。

「なっ………こ、これって?!」

「ああ。おまえが拾った欠片。やはりこいつだったみてえだな。………つと」

男の襲撃の直前に起きた事件の現場は異常なまでに焼け焦げているが、竜のブレスだったとなれば辻褃も合う。デイークも頷いているあたり、現場に落ちていたガラスのように光り、金属のように固い破片も予想通り竜の鱗だったようだ。

思いがけず、二度と戦いたくない相手と対峙することになってしまった。動転するまま太刀を握りなおそうとした時だ。突然竜が光りはじめたではないか。

「自爆するつもりです！ みなさん、避難を！」

背後からギネヴィアの声が引つ張ってくる。

でも、不思議とさつきまでの動揺は収まって、自分でも驚くほど頭は冷静だった。竜を見上げてぎゅっと太刀を握って一歩踏み出す。

「避難なんか……できないよ！ 絶対に、絶対止めてみんなを守るんだ！ デイークさん!!」

ベルン動乱で駆け抜けた激戦の記憶が蘇る。あれほどの破壊力を持った巨体が自爆したら——まるで想像を超えた世界だ。

この場にいるのは自分たちだけ。逃げれば孤児院はもちろん、多くの犠牲が出るのは疑いようも無い。

「そう来なくっちゃ、準備した甲斐がねえってもんだ。なあッ？ 女王様！」

今こそ踏み出す時。デイークの勇ましい声は待っていたかのようだ。

彼はこの時のためにとっておきの土産をルウを通じてギネヴィアに要求していたのだった。

腰の後ろでクロスに挿していた一振りを掴むと、シャニーの足元へと滑らせた。

「受け取れ！ シャニー！」

「これ?! どうしたの?!」

「いいから合わせろ！ 今のおまえの得物とは違うかもしれないねえが、何とかしてみせろ！」

鞘に収まる剣は引き抜かずとも身に覚えのあるフォルム。動乱後半で嫌というほど握った破竜魔剣だ。ドラゴンキラー

たしかに両刃剣で太刀とは扱いは違うが、すでに飛び出し先陣を切るデイークに改めて言われずとも、腹は括っているに決まっているではないか。

「やってやるさ！ セチツ、フルブーストだ！」

体の奥から噴火するような爆発的なマナが湧き起こる。今までとまるで違う、人では無いその感覚はセチと溶け合っているからか。

いや、それだけではない。間違いなく、意識がもうろうとしている。

レンの警告が脳裏をよぎる——これは、一発しか持ちそうにない。

「行こう！ デイークさん！」

「私も加勢します！」

ギネヴィアから賢者の祝福を受けたシャニーはマナに乗って宙へと飛び出していく。

すでに最前線ではデイークが竜を駆け上りジャンプ一番、頭上を取っていた。ドラゴンキラーを両手に握りしめ、渾身を叩き落とすその頭上から差し込むのは神々しい白き清光。

「うおおおっ！ 終いだぜ!! 砕け散れ!!」

「神の剣よ！ 光さす道となりて、穢れし魂へ雨と降らせん!!」

「ぐおあああ?!」

破竜の武器、くわえて片方は神将器の攻撃を脳天から浴びて地竜が叫ぶ。それはもはや轟音で、世界が割れたかと思うほどの絶叫だ。

聖光に縛り上げられ、魔力を抑え込まれて身動きが取れない竜は仰け反り天を衝く。

「我が剣は流星をも超える青嵐にして、悪夢を斬り払う月光の一閃——ッ」

見えた——空に飛び出したシャニーの眼下に、仰け反る竜の額がはつきりと映る。眼が核心を捉えた途端、マナが極限まで昂って自然に体が動き、闇夜に青き軌跡が次元を切り裂くように突き抜けた。

「ヴァンダルヴ・オズ・アステリア!!」

青の閃光が天から一刀両断に貫いて大地へ突き刺さるや、竜は元の姿へと戻っていく。

すっかり人の形になった瞬間、それまで顔を覆っていた仮面はついに限界を迎えたか高い音を立てて砕け飛ぶ。素顔を隠す力も残っていないのか、男はそのまま地表へと吸い込まれていった。

終わった……皆が倒れた男の周りへ集まった時だった。

「ハ……ハハハ……」

ふいに男が笑い出したではないか。おまけに、むくりと上体を起こすものだから誰もが武器を構えて距離を取る。

「まだやるのか?!」

鋒を男へ向けて霞の構えをとったシャニーが叫ぶが、帰ってくるのはあの猟奇的な衝動ではなく、「いえ、参りました」などと、どこか別人のようにさっぱりしたものだだった。

「もう、スツキリしましたヨ……。ワタクシの役目は終わりです」

頭のネジが何本もぶつ飛んだ男だから、もつともつと恐ろしい顔をしているものだトシャニーは思っていた。意外にも普通……。いや、むしろ優しいな雰囲気さえ纏って彼は見上げてくる。先ほどまでの気性は嘘みたいのに、毒気を抜かれたような静けさだ。

「ウエスカー、あとは任せてよ」

彼に向けてセチはそれだけ声をかけた。その声もまた、死闘を前に切った啖呵とは違う穏やかそのもの。

どこか納得したように、ウエスカーと呼ばれた男は静かに目を閉じてふつと小さく笑った。

「ええ。ああ、報告だけはしておきましょうかね」

彼は膝に手をつきながら立ち上がり、ぼろぼろになったスーツに付いた埃を払うと、ずいと手を差し出してきた。

「合格です、セチさん」

ウエスカーはシャニーの目を確かに見て、セチとはつきり言った。相変わらず、いちいち言っていることがよく分からないが、それより差し出された彼の手先が気になっていた。手のひらの上には、不思議な輝きを放つ黄色の宝玉がある。

しかし、それが何かと聞く時間さえ、ウエスカーは許してくれなかった。

「アナタが真の鍵となるのを楽しみにさせていただきますよ、セチさん？」

最後まで一方的なまま、彼は光となって砂が崩れるように消えてしまったのだ。分解され風に溶けたように、その存在がそもそも無かったように。

それでも、確かに居たことは地面に転がる黄金の宝玉が無言に主張してくる。

「やったか！」

「敵反応消えました。ミッションクリアー！」

あたりを見渡すデイクにほどなくレンも呼応して、女子3人は抱き合って互いの無事を喜び歓喜をあげている。

戦神の眼光を解き、その様子を遠巻きに見下ろしていたデイクだったが、聞こえるはずの声がない違和感に視線を移した直後、新たな危機にその目を見張る。

「やった……やったよセチ……」

「おい！ 大丈夫か?!」

まるで糸が切れたように、シャニーが地面に吸い込まれていくではないか。

地を踏み砕きながら飛び出し間一髪でシャニーを抱き抱えたデイクは、変わり果てた彼女の言葉に息を呑む。鮮やかだったはずの青髪が、一本すら残らず燃え尽きていたのだ。

恐ろしいほどの真っ白。その白は爽やかさを醸す明るい白ではなく、誰もが死を直感する力尽きた白だった。

「……ロイ……見ててくれ……た？」

シャニーはそれだけ遺言のように溢すとがっくり首を崩して動かなくなってしまった。

「チィ、おい！ シャニーを運べ！」

デイクの危機感に満ちた声に勝利の余韻は吹き飛び、新たな緊張が場を覆い尽くしていった。

安らかなる夜明け

一体ここはどこなのだろう。

人の気配は何もない、地上とも地下とも見分けがつかない遺構の奥深く。どこからともなく吹き込んで流れていく風が、巨人の呼吸か、はたまた野獣のうなりにも似た神経を震わせる音を立てている。

そうして風が集まる一番奥の広間には、何者かが一人佇んでいる。彼は微動だにしなかったが、ふいに黒のソフト帽の下から鋭い眼光が闇の奥を突いた。

「……意外と遅かったな」

直後にワープアウトしてきたのは、ズタズタになったスーツを纏ったまま、帽子も仮面も失って素顔を晒すウエスカーだった。ゆつくりと主——レリウスの下へ歩く革靴の音だけが遺構に響く。

「ええ。旧交を温めておりましたら、時間を忘れてしまいました」
それだけで状況を察したか、「そうか」とだけ短く答えるとレリウスは懐から取り出した葉巻を啜え、考えに耽るようにしばらくそのままだった。

再び風が吹き抜けた頃、彼はようやくマツチを擦り、一服ふかし始めた。ふうつと白い煙を風に流し終えると、一度言葉を飲み込むように一度俯き、思い出したようにこぼす。

「で、どうであった」

「はい。やはり、彼女は貴方様に相応しい女傑だとハッキリ分かりましたよ」

ウエスカーの口調は穏やかで、どこか清々しきさえ醸し出す。

对象的に、口元を一層厳しくさせるレリウスは目元を隠すように俯き、葉巻から灰がチリチリと落ちていく。

「……彼女のことは、申し訳ないことをした」

絞るように、突然レリウスがこぼした。

「いえいえ。それしか道がないのですから、いまさら栓無きことではしよう」

驚く素振りを見せることもなく、ウエスカーはそう答えて静かに頭

を下げた。そう言われて救われたのだろうか。レリウスはまた深く一服している。

しかし、大きな雲を作ると「いまさら……か」と、再び眼光鋭く背後を見上げた。

「ええ……今になってしまいましたねえ、この骨董品のせいだ」

ウエスカーもレリウスの視線を追い、顔をしかめる。二人が見つめる先には巨大な門がある。門の中は万華鏡のように光が渦巻き、陽の入らない遺構の奥を明るく照らしている。

その中に、ふいに人影浮かび、どんどん濃くなってくる。

「お前が言えた話か」

姿を現したのは純白をまとう金髪の子祭。門の向こうでは世界宗教のトップに君臨していた男だ。紫紺の目は宿敵に遭遇したとは思えないほど威風堂々としており、子祭には似つかわしくない隆々とした長身から、値踏みするような目で二人を見下ろしている。

「しかし、良かったではないか。これでようやく一緒になれるではないか」

緊張感が部屋を包むが、互いに得物を抜く素振りはない。この治外法権の空間ならば、思う存分やりあえるだろうに。それどころか、金髪の男——最高司祭アゼリクスは二人に構わず歩いてきて、すれ違わずに深い声で笑いかけているではないか。

「ククク……面白い冗談だ。ワタクシはともかく、彼女が煉獄になど来るわけがないでしょう」

レリウスと2人でいた時の顔は仮面だったかのように、ウエスカーに蛇のごとき殺意の目が光る。

しかし、相手は竜の世界で海千山千、濁どころか毒さえ喰らってきた組織の長だ。まさに竜に蛇が噛み付くようなもの。

「そうだな。煉獄送りなど無理な話だ」

あつさり挑発を受け止めたアゼリクスは、侮蔑を込めた目で睥睨しながら息を吐くように言っただけだ。

「あの女を血祭りにあげる頃には、煉獄などと言った下らない世界観は、すでに存在しないだろうからな」

「この……外道が！」

我を忘れたように取り乱して罵るウエスカーを一度は鼻で笑ったアゼリクスだったが、その足が突然止まる。「外道……か」そう呟いた彼はエピタラヒリを翻しながら2人と相対す。

「生贄を次元の狭間に挟じ込み、気に入らないものをこの千年潰し続けた貴様らの言葉は、実に重みがあるものだ」

深い声が抑揚豊かに喋るだけで腹が震え、頭を揺さぶられるようだ。

何か言ってみよ——そんな目を見下ろす彼に、ウエスカーたちは何も言い返さなかった。それが何よりの答えと、アゼリクスは続けた。「俺は、そうして造られた歴史を正そうとしているのだ。彼女には、それを手伝ってもらおう」

「彼女がアナタに手を貸すとも？」

ウエスカーは勝手都合の良い算段をせせら笑ったが、アゼリクスの顔には困惑と冷笑が浮かぶ。

「逆に問うが、何故貴様たちはあの女がまた手を貸すと確信できるのだ？」

またしても、ウエスカーはダンマリを決め込んでいる。その顔は砂を噛むように不快をありあり滲ませる。

答えられる訳があるはずもない。どんな正義という名の大義名分を掲げようとも、所詮自身のエゴを正当化する道具にすぎない。利用した事実を揺るがないのだ。

「嘘で繕うか、真実で塗りつぶすか。どちらを選ぶかは明白だろう。現世を楽しんでいるあの女も、同じ目には遭いたくなくなるな！」

「……彼女には、同じ轍を踏ませはしない」

言いたい放題を許していたレリウスが、白銀の刃にも似た眼光で牽制しそれ以上を遮る。しかし、時を止められたは水を斬ったように一瞬でしかなかった。

「ほう？ それはいい心がけだ、レリウス。それで？ 手練手管を弄ろうした結果が、それか？」

アゼリクスが顎で指した先には、彼が出てきた巨大な門がある。

これこそが、このエレブ大陸と異界を繋ぐ竜の門であり、レリウスはこの門を封印しようと試みていたらしい。もつとも、アゼリクスが姿を現した時点で完全ではないだろうし、彼の視線はすでにウエスカーへと移っていた。

「我が命に替えても、天命を果たすのみ」

「ほう？　次は自ら道具になるか？　いいだろう。現世から弾き出された亡霊でも、役は準備してある。活躍を精々見極めさせてもらおうか」

まだ、今はその時ではないと、お互い得物を手にはしなかった。むしろ手を出せなかったのだ。いずれも中途半端であり、邪魔が入れば今後への支障は計り知れない。砂上に建つ楼閣のごとく、歪な協定の先に平和が保たれていた。

「安心しろ、こちらから手を出すつもりはない。罪深き者は自ら舞台上上がるだろう。そうして斉うのを待つのもオツなものだ。お前なら分かるだろう。いい酒には、相応の熟成が必要だと」

不干渉を約束したアゼリクスだが、もちろんそれは和平のためなどでは無い。

干渉などせずとも、ピースが吸い寄せられるようにはまっていく。止める術を知らない者たちが、一度動き出した……いや、自らが動かした運命を眺めるしかできず抱く恐怖を愉しんでいるのだ。

「アゼリクス……どこまでやるつもりだ？」

恐怖で染め上げようと欲する魔教皇へ、レリウスは最後の警告を発する。1000年前にも同じ質問を投げつけ、返してきた最悪の答え。

問うた途端に、あの時と同じ狂気に取り憑かれたような自信に満ちた顔で「どこまで……だど？」そうアゼリクスは鼻で笑って強く言い放った。

「決まっておろう！　どこまでもだ！」

結局、同じ答えを聞くことになった。

アゼリクスは高らかに宣言し、湧き上がる紫紺の炎に自身を包んでその場を後にした。

あの男はこの大陸に新たな理を引き、歴史を否定しようとしている。それは人のためでも無いはもちろん、竜のためでも無い。己の理想を阻んだ全てに対する粛清に他ならない。

「……マスター、もはやお力になることは叶いませんが、後はお願いします」

驚異の去った静寂の間で、ウエスカーは静かに膝をついた。整い行く舞台の端から退く者の無念だけではない、どこか安堵したような落ち着き払った素顔を見下ろし、レリウスは深く頷いた。

「承知した。私もお前を失うのは辛いですが、掟には逆らえまい」

世界の理の外から傍観が義務付けられた組織において、己の存在を世界に認識させることは許されない。ウエスカーは先の戦いで素顔をエレブの者に晒し、認識されてしまったのだ。

もはや、こうなつてはとるべきは決まっていた。

「死して屍残すまじ……斬！」

それが、組織の掟。

瞬きする間に断罪は終わり、レリウスは太刀を納めていた。

「……さらばだ」

その場には元から何もなかったかのようにウエスカーの姿は忽然と消え、レリウスだけが吹き抜けた風の向こう側——竜の門を見上げて、ぽつりと漏らした。

「……私もいずれ行く。その時は、元のお前でいてくれ」



「解決屋ティーク、そしてイリア天馬騎士団第十八部隊の者たちよ、表をあげなさい」

ウエスカーとの死闘から夜が明けた早朝、孤児院の礼拝堂に透き通った声が時の到来を告げていた。

柔らかながらどこか威厳のある声に呼応するように、それまで膝をつき頭を下げていた者たちが顔を上げる。

「今回の働き、本当に感謝しています。ありがとうございます」

ギネヴィアが戦い抜いたシャニーたちを集めて労いの声をかけていたのだ。

シャニーにとっては戦場で意識を失って、目が覚めたら朝だっただけでも仰天だったのに、ギネヴィアが呼んでいるとデイークに首根っこを引つ張られてきて今でも現実味が湧いていなかった。

「あたしたち、当たり前のことをしただけです。ギネヴィア様こそ、助けていただいてなんとお礼すればいいか」

「いいえ、貴女達は私を守ってくれただけでなく、何より子供達の未来を、リキアの平和を守ったのです」

何か判断する必要もなく、体が勝手に動いた感じだった。猟奇殺人犯の捜査はもともリキア同盟としての仕事だったし、同盟内の領民を守ることは騎士なら当然の感覚であった。

むしろ、内部の事件に他国の女王を巻き込んだ形になったわけだ。ギネヴィアは好相を崩しているが、シャニーは何度も頭を下げるばかりだった。

「ハッ、コイツはともかく、俺は別にそんな大義の為に戦ったわけじゃねえ。貰えるもんさえ貰えてりやヨシってな」

おまけに、一緒に謝ってくれると思っていたデイークが、どこか高みの見物でもするように、女王を前にしているとは思えない不躰を口にするものだから心臓が潰れるところだ。

「デイークさん！ 失礼だよ！」

「あん？ 傭兵たあ、そう言うもんだ。嫌なら反面教師つーことで」
幾多の戦場や契約主を渡り合って心臓が鍛え抜かれているのか、どうやら本心らしい。デイークの顔は真面目で何か考えがあるわけでもなさそうだ。注意をすれば、俺は俺とでも言いたげで聞く耳を持たないし。これだからおじさんは困ったものだ。

「もう！ 申し訳ありません。悪気はないんです」

「いえ。信じる者のために戦い抜く。揺るがない信念を見せていただきました。貴方なら、どの国でも英雄でしょう」

「ハッ……俺はこっちのが性に合ってるんでね。貴族に見えていない連中の相手をしてる方がよ」

「デッ、デイークさんってば！」

一度叱ってみたが、右から左にまるで効果がない。それどころか、

せつかくギネヴィアが無礼に目を瞑って褒めてくれているのに、なんと恐ろしい事を面と向かつて言うのだろう。

シャニーは立てないまま、椅子から手をぶんぶん振ってデイクに止めろとジェスチャーを送るが、それを止めたのは他でも無いギネヴィアだった。

「シャニーさん、お気になさらず。見えていないことも、デイクさんのような方がいてくれるから国がまわっていることも、十分理解しています。ふふ……ロイ様からお話は聞いておりましたが、確かに民を勇気付けられそうな御仁ですね」

「どうやら事なきを得たらしい。というより、どうにもギネヴィアはデイクのことをやたら買っているようにも見える。」

もしかして、これがヘッドハンティングというものだろうか。確かに強いし、大人の余裕もあるうえに何でも知っている。ただでさえ強靱な竜騎士が守りを固めるベルンに戦神が加われば常勝無敗、完全勝利は約束されたようなものかもしれない。

「ま、そっちはこの若いのに任せるつもりですよ。粗忍者だが、黎も知る白……光と闇やら、上と下やら……繋ぐにはうってつけだ」

「ええ。ロイ様からお聞きしていた通りの方でした。透き通った風が、清々しく心に吹き抜けるような……本当に何でも話せてしまいそうな快活の妖精」

「どうやら噂は本当だったらしい。あちこちから士官や軍の要職を打診されていたのを尽く断って、わざわざ儲からない便利屋をやっていたという。」

「今回もデイクはあっさりとその席を放り捨ててしまった。それだけでも驚くのに、あろうことか話をいきなりパスしてきたではないか。おまけに、ギネヴィアまで満更でない様子だ。」

「ありがとうございます！ えへへ……その、ごめんなさい。女王陛下の御前で、あたしだけ座ってて」

他のメンバーは今も膝をついているが、シャニーだけは礼拝堂の最前列に座らされていた。昨日の戦闘で消耗しきったエーギルは回復しきっておらず、立つのが精一杯だったのだ。

「ふふ、またベルンでスイーツ談義しましょう。まずはご自愛くださいませ」

とは言え立場は傭兵。あまつさえ、大国ベルンの女王の前とあってはそうも言えないはずだが、ギネヴィアは柔らかなく微笑んでくれている。

おまけに、戦闘前の茶会で口にしていたことをまた言うものだから、シャニーは思わず聞き返した。

「えっと、あの、本当にベルンにお呼びいただいて良いのでしょうか？」

「もちろん。守られた者として、これから先を共に創る隣人として祝福したいのです」

盛り上がった女子会で出た冗談だと思っていたはずが、これはなかなか大変なことになってきた。

今度は街中でのスイーツパーティーとは行かないだろう。おそらく、リキア同盟を代表しての表敬となる。なんだか、今でも夢を見ているみたいだ。

「えへへ。あたしなんかそんなすごい人間じゃありません。ギネヴィア様やみんながいてくれなかったら……あたし、毒ガスで死んでたし」

今でも現実感がない。ギネヴィアに誘われているのももちろん、死にかけてたことも。

あの時は訳もわからないまま死にかけ、よく分からない注射を打たれた後は、体へ打ち付けられた釘が外れたように元通りだった。

別に、自分の力で最悪を切り開いた感覚はまるでないのだが、「それ……です」ギネヴィアはそう続けた。

「天衣無縫な貴女のまわりには立場を超えて集まり、助ける。皆を繋ぐ……デイークさんの言ったことは、貴女にしかできない天命なのかもしれませんよ」

「あたしの……天命？」

「闇を払う一陣の白き風。氷姿雪魄な姿は、まさに希望と呼ぶに相応しい。それを称号として、隣人^{ベルン}との友好の証として受け取って欲しい

のです。ベルンはかつてイリアに過ちを犯した。その復活の証としたい」

「ええ?!」

何故だか分からないが、思わずデイクを見てしまった。

あのベルンが、一個人に、使い捨てにされてもおかしくない相手に称号を贈ると言うのだ。以前も聖天騎士団からあだ名をつけられたが、そんなものとは比べ物にもならないのは明白だろう。

それでも当然のように、デイクからは「何で俺を見るのやら?」くらい言いたげな呆れ顔が返ってきてしまった。

「嬉しいですけど、ベルンとの友好の証なんて、あたしみたいな一部隊長には重すぎるというか……」

仮に勲章を賜るような話があるにしても、本来なら騎士団として受け取る形で団長あたりが出席するはずだ。これが、本国の部隊ならば。

連絡所所属の者が対象になることは想定されておらず、規程がないのだ。それでも、きちんと本国に問い合わせるべきだろうか。いや、今はロイに仕える騎士の扱いだ。

「そう気構えないで。お茶会のお礼でもあるの。あんな……心からはしゃいだお茶会は初めてで。今度はベルンの銘菓をご馳走します。だから、絶対いらしてくださいね」

あれこれ考えていると、ギネヴィアは楽しそうに笑いかけてきた。あなたに来て欲しい——そう言われた気がして、シャニーはつつい手手を挙げて返事をしてしまった。

ベルンの銘菓には興味があるし、女王御用達のスイーツ店の制覇もしてみたい。なにより、スイーツ談義も前は熱が入り始めたくらいで時間が来てしまった。次回の茶会も、スイーツに愛を注ぐ者同志として果たすべき使命と言えるだろう。

「そう言うことなら、ぜひ! またお話聞かせてください!」

「ええ、もちろん。あ、ちゃんとデイクさんも連れてきてくださいね」

他人事を決め込んでいたのか、いきなりな飛び火にデイクが目

まん丸にして固まっている。

ギネヴィアとシャニーにじっと見つめられ、逃げ場を失った彼は頭をボサボサやりだした。

「おいおい……俺もですか？ 陛下の命令とあれば仕方ねえ。こいつが問題起こさないようにしつかり目を付けときますよ」

「違うでしょ！ 途中で抜け出したら今度は許してあげないんだから！」

毎度のように人を問題児扱いするデイークに牙をむく。

オステイアの時も脱走したのはデイークのはずが、マリナスに叱られたのは追いかけただけのシャニーだった。なのに今回も「何のことやら」と両手を広げてまるで反省の色が無い。立ち上がったら駆け寄ってグーパーパンチのところだ。

「ふふふ。では、さっそくロイ様にお手紙を出しておきましょう。貴女方の活躍と、ベルン派遣の献言を」

ギネヴィアの言葉はまさに夢でも見ているかのようだった。ただの一傭兵のはずが、まさかこれから大陸の未来を創って行くであろう大国の新女王から名前を覚えてもらえただけでなく、本気で国へ招待してもらえるとはい。

でも、一番に沁みしたのは、直後にギネヴィアが続けた一言だった。

「あと……しつかり労ってあげてとね」

「ギネヴィア様……ありがとうございます」

ちよつとでも、ギネヴィアもロイのことが気になっているのかと思つた自分をポカポカしてやりたいくらい恥ずかしい。それ以上に湧いたのは嬉しさと、ロイの顔だった。

特命任務が解決をもつて作戦完了した今、フェレに還つて大好きなあの人に喜んでもらいたい。

深く頭を下げながらも、愛する人の胸に飛び込む光景を浮かべてシャニーは朝陽に心が膨らむようだった。